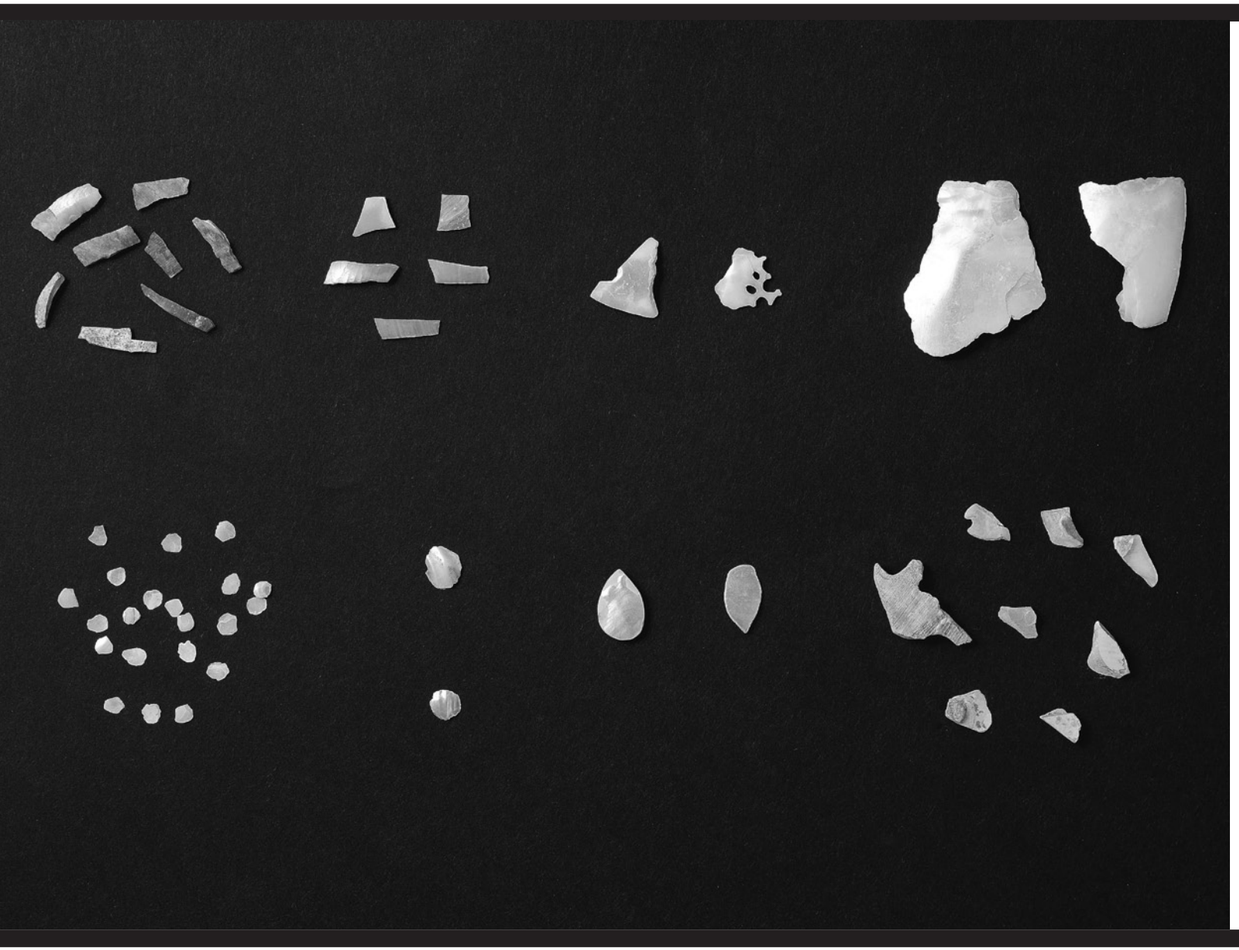
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第80集

首　里　城　跡

―銭蔵東地区発掘調査報告書―

平成 28(2016)年2月

沖縄県立埋蔵文化財センター



首里城跡

―銭蔵東地区発掘調査報告書―

平成二十八（二〇一六）年二月

沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 80 集

首　里　城　跡

－銭蔵東地区発掘調査報告書－

平成 28（2016）年 2 月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、沖縄県立埋蔵文化財センターが国営沖縄記念公園事務所より委託を受けて平成 23・25 年度に実施した、首里城跡銭蔵東地区の発掘調査の成果をまとめたものです。

本調査においては、戦前まで存在していた外郭へ延びる南北方向の石垣、15 ～ 17 世紀代に複数回にわたって行われた大規模な造成土や石積みなどが確認されました。

特に、16 世紀前半ごろと推定される土層から、陶磁器や獣魚骨の他に、真珠層をもつヤコウガイなどの貝殻が大量に出土したことが注目されます。この貝殻はほぼ全て割り取られ破片となっており、1 ㎝前後の大きさに加工されたと考えられる小破片も非常に多く見られました。

これらのことから、この貝殻片は螺鈿加工時の残滓ではないかと考えております。つまり、16 世紀ごろには首里城内において、螺鈿細工の工房があったことになり、非常に重要な発見となります。その他にも、金属製品・漆器・骨製品などの多様な製作が想定される遺物も出土しました。

このような成果を掲載した今回の報告書は、首里城はもちろん沖縄県の歴史・文化を理解する資料として活用されるとともに、地域における文化財の保存活用のために役立てば幸いです。

最後に、様々な御指導・御助言・御協力を戴きました諸機関及び関係各位に心から感謝申し上げます。

2016（平成 28）年 2 月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　　下地　英輝

例　言

1．本報告書は、沖縄県那覇市首里当蔵町に所在する「史跡　首里城跡」における国営沖縄記念公園首里城地区の整備に際して、銭蔵東地区の遺構確認発掘調査及び資料整理の成果をまとめたものである。

2．本発掘調査及び資料整理業務は、内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所が沖縄県と委託契約を交わし、沖縄県教育委員会の指導のもと、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。

3．調査期間は、発掘作業を平成23年7月15日より平成24年3月16日、平成25年11月6～20日まで実施し、資料整理作業・発掘調査報告作成を平成26・27年度に実施した。

4．本書に掲載した遺構図の座標軸は国土座標軸（第Ⅹ Ⅵ座標系）を使用し、その座標値は日本測地系である。ちなみに、報告書抄録の緯度経度については世界測地系で算出している。

5．現地調査及び資料整理に際して、下記の諸氏・機関に協力・指導・助言を戴いた（敬称略、順不同）。

現地調査…島弘・内間靖・仲宗根啓・樋口麻子・當銘由嗣・知念政樹（那覇市教育委員会）
地質・石材…神谷厚昭　　動物遺体…樋泉岳二（早稲田大学）
貝類遺体…黒住耐二（千葉県立中央博物館）　人骨…藤田祐樹・片桐千亜紀（沖縄県立博物館・美術館）
ヤコウガイ…木下尚子（熊本大学）、西野望（矢掛町教育委員会）
種子…高宮広土（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）、千田寛之（文化財サービス）
螺鈿・漆芸…前田孝允・宮城清・土井奈々子（漆芸家）、佐伯信之（浦添市教育委員会）
宮里正子・當山綾乃（浦添市美術館）

6．編集は、瀬戸哲也が行った。執筆は、下記以外は瀬戸が行ったが、第1章、第3章2・3節は新垣力の協力を得た。なお、2013年度に調査報告を行った首里城跡淑順門西地区の出土種子についての最終報告を付章として掲載した。さらに、添付CDには当センター作成の遺物観察表・集計表のExcelファイルを所収している。

第3章第4節　タイ・ベトナム産陶磁器…新垣力　中国産青磁・白磁…宮城淳一　金属製品…大屋匡史
その他の製品含真珠層貝殻破片の顕微鏡観察…大堀皓平　人骨…片桐千亜紀
第4章第1節　西野望　　同第2節　黒住耐二　　同第3節　樋泉岳二
付章　高宮広土・千田寛之

ちなみに、引用文献は本文中に（執筆者　発表年）で示し、執筆者は適宜略称を用いた。また、引用文献は各章節末もしくは本文末に示してある。

7．土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版標準土色帖」2009年度版を使用している。土質は肉眼で粒径を観察し、地質学によるウエント・ワース法（文化庁2010『発掘調査のてびき』）で表現している。

8．掲載写真は、発掘調査状況を瀬戸、遺物を矢船章浩、領家範夫（埋蔵文化財資料整理嘱託員）、遺物の顕微鏡撮影を大堀が撮影した。なお、遺構写真・遺物集合写真のJPEGファイルを添付のCDに所収している。

9．発掘調査で得られた遺物及び実測図・写真等の記録は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

目　次

序
例言

第１章　経緯と経過 …… 1
第１節　調査の経緯 …… 1　第２節　調査体制 …… 1　第３節　調査の経過 …… 2

第２章　位置と環境 …… 5
第１節　地理的環境 …… 5　第２節　歴史的環境 …… 6　第３節　調査区の概況 …… 11

第３章　調査の方法と成果 …… 13
第１節　調査の方法 …… 13
第２節　層序 …… 16
第３節　遺構 …… 26
１．石積み１ …… 26
２．石積み２ …… 31
３．石積み３ …… 32
４．石積み４ …… 32
５．石敷き１ …… 32
６．石列１ …… 32
第４節　遺物 …… 36
１．概要と分類 …… 36
①中国産陶磁器 …… 36
②ベトナム産陶磁器 …… 46
③タイ産陶磁器 …… 47
④韓半島産陶磁器 …… 49
⑤本土産陶磁器 …… 49
⑥産地不明陶磁器 …… 49
⑦沖縄産陶器・土器・カムィヤキ 49
⑧瓦 …… 52
⑨塼 …… 58
⑩金属製品 …… 59
⑪銭貨 …… 61
⑫その他の製品 …… 62
２．Ⅰ層出土遺物 …… 69
３．Ⅰ´層出土遺物 …… 81
４．Ⅱ層出土遺物 …… 82
５．Ⅲ層出土遺物 …… 95
６．Ⅲ´層出土遺物 …… 115
７．Ⅳ層出土遺物 …… 116
８．人骨 …… 147
９．貝製品・含真珠層貝殻破片 …… 148

第４章　自然遺物の分析 …… 164
第１節　首里城跡銭蔵東地区から出土した脊椎動物遺体 …… 164
第２節　首里城跡銭蔵東地区出土のヤコウガイ分析 …… 210
第３節　首里城跡銭蔵東地区から得られた貝類遺体 …… 220

第５章　総括 …… 239
第１節　銭蔵東地区のまとめ …… 239
第２節　含真珠層貝殻破片から見た首里城跡における螺鈿製作の予察 …… 246

参考・引用文献 …… 250
付　章　首里城跡淑順門西地区より出土した植物遺体について：最終報告 …… 253
図　版 …… 261
報告書抄録 …… 339

図目次

第１図　沖縄本島の位置…… 5
第２図　首里城跡の位置と周辺の遺跡…… 7
第３図　調査区の位置…… 9
第４図　横内家資料平面図…… 10
第５図　旧首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図…… 10
第６図　阪谷良之進作成　旧首里城図…… 12
第７図　旧琉球大学校舎配置図…… 12
第８図　調査区全体図…… 15
第９図　層序対応図（１）…… 18
第10図　層序対応図（２）…… 19
第11図　トレンチ１東壁断面…… 22
第12図　石積み１内側東壁断面…… 24
第13図　石積み１内側東壁位置…… 25
第14図　遺構全体平面図…… 27
第15図　石積み１・石敷き１…… 28
第16図　トレンチ１南壁断面…… 29
第17図　石積み２外側南壁断面…… 33
第18図　石積み２…… 33
第19図　石材ごとの層位別出土重量相関図…… 64
第20図　層位ごとのガラス玉分類別出土数…… 64
第21図　色別ガラス玉出土傾向…… 64
第22図　円盤状製品の加工方法と素材・層位・形状の関係性…… 67
第23図　Ⅰ層出土遺物（１）…… 70
第24図　Ⅰ層出土遺物（２）…… 71
第25図　Ⅰ層出土遺物（３）…… 72
第26図　Ⅰ層出土遺物（４）…… 73
第27図　Ⅰ層出土遺物（５）…… 74
第28図　Ⅰ層出土遺物（６）…… 75
第29図　Ⅰ層出土遺物（７）…… 76
第30図　Ⅰ層出土遺物（８）…… 77
第31図　Ⅰ層出土遺物（９）…… 78
第32図　Ⅰ層出土遺物（10）…… 79
第33図　Ⅰ層出土遺物（11）…… 80
第34図　Ⅰ´層出土遺物…… 81
第35図　Ⅱ層出土遺物（１）…… 82
第36図　Ⅱ層出土遺物（２）…… 83
第37図　Ⅱ層出土遺物（３）…… 84
第38図　Ⅱ層出土遺物（４）…… 85
第39図　Ⅱ層出土遺物（５）…… 86
第40図　Ⅱ層出土遺物（６）…… 87
第41図　Ⅱ層出土遺物（７）…… 88
第42図　Ⅱ層出土遺物（８）…… 89
第43図　Ⅱ層出土遺物（９）…… 90
第44図　Ⅱ層出土遺物（10）…… 91
第45図　Ⅱ層出土遺物（11）…… 92
第46図　Ⅱ層出土遺物（12）…… 93
第47図　Ⅱ層出土遺物（13）…… 94
第48図　Ⅲ層出土遺物（１）…… 96
第49図　Ⅲ層出土遺物（２）…… 97
第50図　Ⅲ層出土遺物（３）…… 98
第51図　Ⅲ層出土遺物（４）…… 99
第52図　Ⅲ層出土遺物（５）…… 101
第53図　Ⅲ層出土遺物（６）…… 103
第54図　Ⅲ層出土遺物（７）…… 104
第55図　Ⅲ層出土遺物（８）…… 105
第56図　Ⅲ層出土遺物（９）…… 106
第57図　Ⅲ層出土遺物（10）…… 107
第58図　Ⅲ層出土遺物（11）…… 108
第59図　Ⅲ層出土遺物（12）…… 109
第60図　Ⅲ層出土遺物（13）…… 110
第61図　Ⅲ層出土遺物（14）…… 111
第62図　Ⅲ層出土遺物（15）…… 112
第63図　Ⅲ層出土遺物（16）…… 113
第64図　Ⅲ層出土遺物（17）…… 114
第65図　Ⅲ´層出土遺物（１）…… 115
第66図　Ⅲ´層（２）・Ⅳ層出土遺物…… 116
第67図　貝製品・含真珠層出土遺物（１）…… 152
第68図　貝製品・含真珠層出土遺物（２）…… 153
第69図　貝製品・含真珠層出土遺物（３）…… 154
第70図　首里城跡銭蔵東地区から採集された脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の層位別出土数（NISP）…… 166
第71図　首里城跡銭蔵東地区から採集された脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の組成…… 168
第72図　首里城跡銭蔵東地区から採集された魚類遺体（ピックアップ資料）の組成（NISP比）…… 170
第73図　首里城跡銭蔵東地区から採集された魚類遺体（ピックアップ資料）の組成（MNI比）…… 170
第74図　首里城跡銭蔵東地区から採集された鳥獣類遺体（ピックアップ資料）の組成（NISP比）…… 186
第75図　首里城跡銭蔵東地区から採集された鳥獣類遺体（ピックアップ資料）の組成（MNI比）…… 186
第76図　首里城跡銭蔵東地区における水洗選別試料検出骨のメッシュ別比率（NISP比）…… 188
第77図　首里城跡銭蔵東地区の水洗選別試料（４㎜/５㎜ﾒｯｼｭ）における魚類遺体の組成（NISP比）…… 189
第78図　首里城跡銭蔵東地区の水洗選別試料（２㎜/2.5㎜ﾒｯｼｭ)における魚類遺体の組成（NISP比）…… 189
第79図　首里城跡銭蔵東地区の水洗選別試料（１㎜ﾒｯｼｭ）における魚類遺体の組成（NISP比）…… 189
第80図　首里城跡銭蔵東地区の水洗選別試料（全ﾒｯｼｭ合計）における魚類遺体の組成（NISP比）…… 190
第81図　首里城跡銭蔵東地区の水洗選別試料（全ﾒｯｼｭ合計）における魚類遺体の組成（MNI比）…… 190
第82図　ヤコウガイ各部名称…… 210
第83図　ヤコウガイ体層の欠損状況による区分…… 211
第84図　銭蔵東地区における食用貝類遺体の生息場所類型組成…… 223
第85図　銭蔵東地区の石積み１内から得られた陸産貝類遺体の種組成…… 228
第86図　銭蔵東地区の遺構変遷図（１）…… 238
第87図　銭蔵東地区の遺構変遷図（２）…… 240
第88図　銭蔵東地区の遺構変遷図（３）…… 242
第89図　銭蔵東地区の遺構変遷図（４）…… 244
第90図　銭蔵東地区の遺構変遷図（５）…… 244

写真目次

写真１　調査・資料整理状況…… 4
写真２　石積み１内３層貝だまり土壌洗浄状況…… 14
写真３　トレンチ１東壁Ⅱ層堆積状況…… 17
写真４　トレンチ１南壁Ⅲ下層堆積状況…… 19
写真５　石積み１内側堆積状況…… 21
写真６　C-14付近堆積状況…… 21
写真７　トレンチ１東壁断面…… 22
写真８　石積み１内側東壁断面…… 25
写真９　石積み１内側Ⅲ下層堆積状況…… 25
写真10 石積み１（北より）…… 26
写真11 石積み１　上面…… 28
写真12 石敷き１…… 28
写真13 石積み２…… 31
写真14 平成25年度調査区石積み２（北より）…… 33
写真15 石積み２北側…… 33
写真16 石積み２中央…… 33
写真17 石積み２南側クチャ層断層…… 33
写真18 石積み３・４石列１…… 35
写真19 瓦当の文様が天地逆に配される軒丸瓦…… 55
写真20 線条痕の残る断面（１～３）と残らない断面（４）…… 156
写真21 縁辺に残る微細剥離痕（801）…… 157
写真22 稜柱層に残る線条痕の残る断面…… 157
写真23 真珠層の表面（上：765　下：784）…… 158
写真24 真珠層の剥離痕（778）…… 158
写真25 打撃による穿孔…… 158
写真26 回転具とみられる工具による穿孔…… 159
写真27 脊椎動物遺体（１）…… 201
写真28 脊椎動物遺体（２）…… 202
写真29 脊椎動物遺体（３）…… 203
写真30 脊椎動物遺体（４）…… 204
写真31 脊椎動物遺体（５）…… 205
写真32 脊椎動物遺体（６）…… 206
写真33 脊椎動物遺体（７）…… 207
写真34 脊椎動物遺体（８）…… 208
写真35 脊椎動物遺体（９）…… 209
写真36 Ⅰ類：体層全体を表すもの…… 211
写真37 Ⅲ－①類：体層を大きく欠損し、螺塔残すもの…… 211
写真38 Ⅲ－②類：体層を大きく欠損し、螺塔および軸唇
臍盤を残すもの…… 211
写真39 Ⅲ－③類：体層を大きく欠損し、軸唇、臍盤を残すもの… 211
写真40 殻口に穿孔したヤコウガイ…… 215
写真41 ヒレジャコ (左) とヤコウガイのフタ (右) の出土状況…… 223
写真42 螺鈿に利用されたサラサバテイラ…… 226
写真43 貝類遺体　巻貝（１）…… 229
写真44 貝類遺体　巻貝（２）…… 230
写真45 貝類遺体　巻貝（３）…… 231
写真46 貝類遺体　二枚貝…… 232
写真47 銭蔵東地区で見られたクチャ層の断層…… 245
写真48 首里城跡淑順門西地区出土の植物遺体（１）…… 254
写真49 首里城跡淑順門西地区出土の植物遺体（２）…… 255

図版目次

図版１　首里城跡遠景…… 261
図版２　首里城跡銭蔵東地区平成23年度調査区全景（西より）…… 262
図版３　含真珠層貝殻…… 263
図版４　石積み１内３層・貝だまり出土遺物…… 264
図版５　平成23年度調査区…… 265
図版６　石積み１…… 266
図版７　石積み２…… 267
図版８　石積み２・３…… 268
図版９　ﾄﾚﾝﾁ１東壁断面（西より）…… 269
図版10 Ⅱ~Ⅳ層堆積状況…… 270
図版11 石積み１内側堆積状況…… 271
図版12 貝だまり（北より）…… 272
図版13 石積み１内１～３層・貝だまり（１）（西より）…… 273
図版14 石積み１内１～３層・貝だまり（２）…… 274
図版15 石積み１内１～３層・貝だまり（３）…… 275
図版16 平成25年度調査区（１）…… 276
図版17 平成25年度調査区（２）…… 277
図版18 Ⅰ層出土遺物（１）…… 278
図版19 Ⅰ層出土遺物（２）…… 279
図版20 Ⅰ層出土遺物（３）…… 280
図版21 Ⅰ層出土遺物（４）…… 281
図版22 Ⅰ層出土遺物（５）…… 282
図版23 Ⅰ層出土遺物（６）…… 283
図版24 Ⅰ層出土遺物（７）…… 284
図版25 Ⅰ層出土遺物（８）…… 285
図版26 Ⅰ層出土遺物（９）…… 286
図版27 Ⅰ層出土遺物（10）…… 287
図版28 Ⅰ層出土遺物（11）…… 288
図版29 Ⅰ層出土遺物（12）…… 289
図版30 Ⅰ層出土遺物（13）…… 290
図版31 Ⅰ層出土遺物（14）…… 291
図版32 Ⅰ層出土遺物（15）…… 292
図版33 Ⅰ層出土遺物（16）…… 293
図版34 Ⅰ´層・Ⅱ層出土遺物（１）…… 294
図版35 Ⅱ層出土遺物（２）…… 295
図版36 Ⅱ層出土遺物（３）…… 296
図版37 Ⅱ層出土遺物（４）…… 297
図版38 Ⅱ層出土遺物（５）…… 298
図版39 Ⅱ層出土遺物（６）…… 299
図版40 Ⅱ層出土遺物（７）…… 300
図版41 Ⅱ層出土遺物（８）…… 301
図版42 Ⅱ層出土遺物（９）…… 302
図版43 Ⅱ層出土遺物（10）…… 303
図版44 Ⅱ層出土遺物（11）…… 304
図版45 Ⅱ層出土遺物（12）…… 305
図版46 Ⅱ層出土遺物（13）…… 306
図版47 Ⅱ層出土遺物（14）…… 307
図版48 Ⅱ層出土遺物（15）…… 308
図版49 Ⅱ層出土遺物（16）…… 309
図版50 Ⅲ層出土遺物（１）…… 310
図版51 Ⅲ層出土遺物（２）…… 311
図版52 Ⅲ層出土遺物（３）…… 312
図版53 Ⅲ層出土遺物（４）…… 313
図版54 Ⅲ層出土遺物（５）…… 314
図版55 Ⅲ層出土遺物（６）…… 315
図版56 Ⅲ層出土遺物（７）…… 316
図版57 Ⅲ層出土遺物（８）…… 317
図版58 Ⅲ層出土遺物（９）…… 318
図版59 Ⅲ層出土遺物（10）…… 319
図版60 Ⅲ層出土遺物（11）…… 320
図版61 Ⅲ層出土遺物（12）…… 321
図版62 Ⅲ層出土遺物（13）…… 322
図版63 Ⅲ層出土遺物（14）…… 323
図版64 Ⅲ層出土遺物（15）…… 324
図版65 Ⅲ層出土遺物（16）…… 325
図版66 Ⅲ層出土遺物（17）…… 326
図版67 Ⅲ層出土遺物（18）…… 327
図版68 Ⅲ層出土遺物（19）…… 328
図版69 Ⅲ´層（２）・Ⅳ層出土遺物…… 329
図版70 含真珠層貝殻破片・貝製品（１）…… 330
図版71 含真珠層貝殻破片・貝製品（２）…… 331
図版72 含真珠層貝殻破片・貝製品（３）…… 332
図版73 含真珠層貝殻破片・貝製品（４）…… 333
図版74 含真珠層貝殻破片・貝製品（５）…… 334
図版75 含真珠層貝殻破片・貝製品（６）…… 335
図版76 含真珠層貝殻破片・貝製品（７）…… 336
図版77 含真珠層貝殻破片・貝製品（８）…… 337
図版78 石材・玉器…… 338

表目次

第１表　層序対応表…… 19
第２表　トレンチ１東壁土色表…… 23
第３表　石積み１内側東壁土色表…… 24
第４表　トレンチ１南壁土色表…… 29
第５表　遺物全体集計表…… 37
第６表　中国産青磁集計表…… 39
第７表　中国産白磁集計表…… 41
第８表　中国産青花集計表…… 43
第９表　中国産褐釉集計表…… 45
第10表　中国産その他の陶磁器集計表…… 46
第11表　タイ・ベトナム・ミャンマー・韓半島産陶磁器集計表…… 47
第12表　本土産陶磁器集計表…… 48
第13表　本土産近代陶磁器集計表…… 48
第14表　産地不明陶磁器集計表…… 50
第15表　沖縄産施釉陶器集計表…… 50
第16表　沖縄産無釉陶器集計表…… 50
第17表　土器集計表…… 51
第18表　瓦質土器集計表…… 51
第19表　陶質土器集計表…… 51
第20表　カムィヤキ集計表…… 51
第21表　高麗系瓦集計表…… 52
第22表　大和系瓦集計表…… 52
第23表　明朝系瓦集計表…… 53
第24表　明朝系軒平・軒丸瓦集計表…… 53
第25表　明朝系丸・平瓦集計表…… 56
第26表　明朝系瓦ヘラ記号集計表…… 57
第27表　塼集計表…… 58
第28表　塼ヘラ記号集計表…… 58
第29表　金属製品集計表…… 59
第30表　金属製品小片（鉄・青銅滓含む）集計表…… 60
第31表　銭貨集計表…… 61
第32表　骨製品集計表…… 62
第33表　石製品集計表…… 62
第34表　石材集計表…… 62
第35表　石製品・石造物の種類ごとの石材表…… 63
第36表　土製品集計表…… 64
第37表　ガラス製品集計表…… 64
第38表　ガラス玉集計表…… 64
第39表　円盤状製品素材分類…… 66
第40表　円盤状製品集計表…… 66
第41表　煙管製品集計表…… 68
第42表　るつぼ・ふいご集計表…… 68
第43表　漆喰製品集計表…… 68
第44表　漆集計表…… 68
第45表　イネ集計表…… 68
第46表　プラスチック製品集計表…… 68
第47表　遺物観察表（１）…… 117
第48表　遺物観察表（２）…… 118
第49表　遺物観察表（３）…… 119
第50表　遺物観察表（４）…… 120
第51表　遺物観察表（５）…… 121
第52表　遺物観察表（６）…… 122
第53表　遺物観察表（７）…… 123
第54表　遺物観察表（８）…… 124
第55表　遺物観察表（９）…… 125
第56表　遺物観察表（10）…… 126
第57表　遺物観察表（11）…… 127
第58表　遺物観察表（12）…… 128
第59表　遺物観察表（13）…… 129
第60表　遺物観察表（14）…… 130
第61表　遺物観察表（15）…… 131
第62表　遺物観察表（16）…… 132
第63表　遺物観察表（17）…… 133
第64表　遺物観察表（18）…… 134
第65表　遺物観察表（19）…… 135
第66表　遺物観察表（20）…… 136
第67表　遺物観察表（21）…… 137
第68表　遺物観察表（22）…… 138
第69表　遺物観察表（23）…… 139
第70表　遺物観察表（24）…… 140
第71表　遺物観察表（25）…… 141
第72表　遺物観察表（26）…… 142
第73表　遺物観察表（27）…… 143
第74表　遺物観察表（28）…… 144
第75表　遺物観察表（29）…… 145
第76表　遺物観察表（30）…… 146
第77表　遺物観察表（31）…… 147
第78表　含真珠層貝殻破片集計表…… 149
第79表　含真珠層貝殻加工小片集計表…… 150
第80表　含真珠層貝殻加工小片重量表…… 150
第81表　ヤコウガイ破片集計表…… 150
第82表　チョウセンサザエ集計表…… 151
第83表　貝製品集計表…… 151
第84表　含真珠層貝殻破片・貝製品観察表（１）…… 160
第85表　含真珠層貝殻破片・貝製品観察表（２）…… 161
第86表　含真珠層貝殻破片・貝製品観察表（３）…… 162
第87表　含真珠層貝殻破片・貝製品観察表（４）…… 161
第88表　石材・玉器観察表…… 161
第89表　首里城跡銭蔵東地区における骨類分析用水洗選別試料の一覧…… 165
第90表　首里城跡銭蔵東地区から採集された脊椎動物遺体の種名一覧…… 167
第91表　首里城跡銭蔵東地区から採集された魚類遺体（ピックアップ資料）の同定結果…… 171
第92表　首里城跡銭蔵東地区から採集された両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類遺体（ピックアップ資料）の同定結果…… 177
第93表　首里城跡銭蔵東地区から採集されたイノシシ／ブタ・ウシの顎骨・歯の詳細…… 185
第94表　首里城跡銭蔵東地区から採集された脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の組成…… 192
第95表　首里城跡銭蔵東地区における水洗選別試料検出骨の同定結果…… 194
第96表　首里城跡銭蔵東地区における水洗選別試料検出骨の組成（NISP・MNI）…… 200
第97表　ヤコウガイの欠損状況における分類…… 211
第98表　ヤコウガイ集計表…… 212
第99表　ヤコウガイ個体数による集計表…… 212
第100表　層位別ヤコウガイ最小個体数による集計表…… 213
第101表　欠損状況による層位別ヤコウガイ集計表…… 214
第102表　ヤコウガイ殻　セ計測値別出土数…… 215
第103表　首里城跡銭蔵東地区出土ヤコウガイ殻におけるセ計測値と殻径の関係…… 215
第104表　ヤコウガイ蓋大きさ別出土数…… 216
第105表　ヤコウガイ殻破片集計表…… 217
第106表　首里城跡銭蔵東地区貝類遺体最小個体数…… 221
第107表　貝類の生息場所類型…… 222
第108表　銭蔵東地区出土貝類遺体の優占種の出土割合…… 222
第109表　銭蔵東地区の土壌サンプルから得られた貝類遺体等の組成…… 225
第110表　銭蔵東地区石積み１内３層中のサラサバテイラ観察結果… 227
第111表　銭蔵東地区　巻貝類等の出土詳細（１）…… 233
第112表　銭蔵東地区　巻貝類等の出土詳細（２）…… 235
第113表　銭蔵東地区　二枚貝類等の出土詳細…… 237
第114表　首里城跡淑順門西地区出土の植物遺体…… 258
第115表　首里城跡淑順門西地区出土の殻類の重量…… 259
第116表　首里城跡淑順門西地区ＬＦNo.548より得られた植物遺体…… 259
第117表　主要殻類の数量…… 260
第118表　主要殻類の割合…… 260

第１章　経緯と経過

第１節　調査の経緯

首里城跡内郭地区は、昭和 61（1986）年度に「国営沖縄記念公園首里城地区」として整備されることが閣議決定されたことにより、遺構確認のための発掘調査が沖縄県教育委員会（以下、県教委）により行われている。

本報告の対象となる銭蔵東地区の発掘調査も、上記の整備の一環として遺構確認を目的として実施されたもので、平成 23 年度に調査区の南側、平成 25 年度に北側を行った。これらの調査は、平成 23 年 4 月 1 日付、平成 25 年 4 月 22 日付、内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所（以下、公園事務所）所長と沖縄県知事の間で交わされた「首里城地区（北城郭エリア）発掘調査及び資料整理業務」委託契約によるものである。発掘調査は、沖縄県教育庁文化財課（以下、文化財課）を主管課として事務調整及び調査指導を行い、沖縄県立埋蔵文化財センター（以下、当センター）が担当した。

なお、平成 23 年度の調査範囲は銭蔵東地区以外に、既に調査報告を行った淑順門東地区（沖埋文 2014）、御内原東地区、平成 25 年度は東のアザナ地区も含まれており、後の２地区は今後調査報告を行う予定である。

首里城跡における発掘調査は、史跡範囲に該当するため、文化財保護法第 125 条第 1 項に基づく申請が必要となっており、平成 23 年 5 月 23 日付にて現状変更申請を県教委経由により文化庁長官へ提出し、県教委の指示を受けることを条件として、同年７月１日付にて許可された。

調査経過であるが、平成 23 年度は、７月４日より掘削作業を開始させ、おおよその遺構調査は９月後半には終えたが、遺構実測などの諸作業は他地区との調査と並行したため平成 24 年２月 17 日までかかり、３月 16 日に埋戻しを行った。平成 25 年度は、公園事務所首里出張所（以下、出張所）の整備工事に伴って、本地区の北側において、11 月６日より掘削作業を開始し、遺構を確認し、実測作業等を 11 月 20 日に終了させた。

調査終了後の出土品は、平成 23 年度は遺物収納コンテナ 120 箱（総数 168 箱）、平成 25 年度は同 39 箱（総数 134 箱）に昇った。これらは、当センターから文化財課へ発見報告を行い、文化財課は平成 24 年４月２日及び平成 26 年３月 28 日付にて那覇警察署へ埋蔵文化財発見通知を行い、遺失物法の手続きを経た。

第２節　調査体制

首里城跡淑順門西地区・奉神門埋甕地区の発掘調査は、当センターが県教委の指導の下に平成 23・25 年度に発掘作業、平成 26・27 年度に資料整理・報告書作成を実施した。実施体制は以下のとおりである。

平成 23 年度　発掘調査

事業主体　沖縄県教育委員会　大城浩（教育長）

事業主管　沖縄県教育庁文化財課　長堂嘉一郎（課長）、島袋洋（副参事）、盛本勲（記念物班長）、
上地博（主任専門員）、田場直樹（指導主事）

調査所管　沖縄県立埋蔵文化財センター　大城慧（所長）

調査総括　金城亀信（班長）

調査担当　瀬戸哲也（主任）　調査補助　山口こずえ・當山奈央（文化財調査嘱託員）

発掘作業員　浦崎京子・大嶺愛子・喜瀬彰・呉我フジ子・島仲恵子・砂辺光義・知花智子・當眞哲・比嘉洋子・
安村重保・與那嶺勢津子・津波古かの子（奈良大学・学生ボランティア）

磁気探査委託　有限会社琉興建技コンサルタント

写真測量委託　有限会社ティガネー
機械掘削・埋戻　有限会社松竹重機
現場事務所用仮設ユニットハウスリース　株式会社南建
高所作業車リース　有限会社金功重機

平成 25 年度　発掘調査

事業主体　沖縄県教育委員会　諸見里明（教育長）
事業主管　沖縄県教育庁文化財課　新垣悦男（課長）、盛本勲（記念物班長）、山本正昭（主任専門員）
調査所管　沖縄県立埋蔵文化財センター　下地英輝（所長）、島袋洋（副参事）
調査総括　金城亀信（調査班長）
調査担当　新垣力（主任）　　調査補助　天久瑞香・玉城綾（文化財調査嘱託員）
発掘作業員　上江洲由昇・翁長しのぶ・喜瀬彰・呉我フジ子・佐渡山正子・島仲恵子・砂辺光義・砂辺理恵・玉城初美・中塚末子・宮國恵子・吉田正志

平成 26 年度　資料整理

事業主体　沖縄県教育委員会　諸見里明（教育長）
事業主管　沖縄県教育庁文化財課　嘉数卓（参事兼課長）、金城亀信（記念物班長）、長嶺均（主任専門員）
調査所管　沖縄県立埋蔵文化財センター　下地英輝（所長）、島袋洋（副参事）
調査総括　盛本勲（調査班長）

平成 27 年度　資料整理・報告書刊行

事業主体　沖縄県教育委員会　諸見里明（教育長）
事業主管　沖縄県教育庁文化財課　萩尾俊章（課長）、金城亀信（副参事兼記念物班長）、長嶺均（主任専門員）
調査所管　沖縄県立埋蔵文化財センター　下地英輝（所長）、盛本勲（副参事）
調査総括　上地博（班長）
資料整理担当（平成 26・27 年度）　瀬戸哲也（主任専門員）、新垣力・大堀皓平（主任）、宮城淳一（専門員）、大屋匡史（文化財調査嘱託員）
埋蔵文化財資料整理嘱託員（平成 26・27 年度）　安次嶺沙織・有光綾子・伊藝由希・上原園子・嘉数渚・幸地麻美・崎原美智子・島袋久美子・城間彩香・砂川美樹・津多恵・仲里由利・比屋根沙耶香・宮城かの子

第３節　調査経過

現地調査および資料整理の調査経過について、年度ごとにその状況を述べる（**写真１**）。

現地調査

平成 23 年度

本地区では表土である公園造成の盛土には遺物が多く含まれるため、重機掘削と人力掘削を併用しながら行った。平成 23 年７月中旬には、近世以前の堆積層や石積みなどの遺構が確認され始め、全体を掘削するのではなくトレンチを設けながら調査を行った。９月末には遺構検出やトレンチ掘削が概ね終了し、10 月 28 日にスカイマスターによる全景写真を撮影した。その後、遺構実測などは他地区の調査と並行して行い、平成 24 年２月 17 日には遺構実測も終了し、検出された遺構はブルーシート・土嚢・砂等で保護し、３月 16 日に埋戻しを終了した。以下、調査日誌抄の形で述べる。

６ 月 28 日　公園造成土の重機による掘削を開始、現場事務所用プレハブを設置
７ 月　４ 日　公園造成土除去後に不発弾等確認のための磁気探査を実施

7 月 5 日　調査区重機掘削後の人力による掘削作業を開始
7 月 11 日　琉球大学時代の石垣を重機で撤去
7 月 19 日　石垣の背面より、近世以前の堆積層が残存しており、その中には厚さ 1 mに近い炭層を確認
7 月 20 日　近世と考えられる堆積層で埋もれた東西方向の石積み 1 を確認
7 月 27 日　石積み 1 に接するトレンチ 1 を設定し、近世以前の堆積層の状況を確認
8 月 4 日　台風 9 号来襲のため業務停止（～ 5 日）　8月 16 日　石積み 1 内の堆積層の掘削を開始
8 月 23 日　石積み 1 内の 3 層からヤコウガイが大量に出土し始める
9 月 2 日　石積み 1 内 3 層の下部に特にヤコウガイが集中する範囲を貝だまりと称する
9 月 5 日　琉球大学時代の石垣（後に石積み 3 と呼称）の内側により古い石積みの根石を確認（石積み 2）
9 月 21 日　石積み 1 内 3 層の土壌の洗い出しを行い微細遺物の抽出を行う（～ 27 日）
9 月 26 日　石積み 2 と 3 の間の裏込めを外し、本地区の掘削を概ね終了
10 月 28 日　調査区全体の高所作業車による写真撮影、以降随時遺構・断面実測を行う
11 月 21 日　石積み 2 ・ 3 の根石が置かれたクチャ層の断層についての神谷厚昭氏の調査指導
12 月 27 日　貝だまり出土遺物取り上げ　1 月 19 日　デジタル写真測量実施
2 月 17 日　実測作業終了　3 月 13 日　土壌サンプンリング実施
3 月 14 日　遺構保護・埋戻しを開始　3 月 16 日　埋戻し終了、現場調査完了

平成 25 年度

出張所による整備工事に伴って、本地区北側において外郭に向かって延びる南北方向の石垣を確認するために 11 月 6 ～ 20 日の間に行った。なお、埋戻しは出張所が調査後、整備工事に際して行った。

11 月 6 日　首里出張所による表土掘削後、トレンチを設けて人力により平成 23 年度調査区で検出された石積み 2（調査時は石積み 1 と仮称）の根石を確認
11 月 8 日　石積み 2 の検出を終了、その検出時に石積み外面を覆う堆積土より青花やヒレジャコなどが出土
11 月 15 ～ 20 日　石積み 2 の実測作業

資料整理作業

発掘作業で出土した遺物は、現地調査中の雨天時に遺物洗浄作業を行うことで終了させた。遺構図面・写真の整理については、調査終了後速やかに実施するよう努めた。

遺物・記録類の本格的な資料整理作業は、平成 26・27 年度に埋蔵文化財センターにて実施した。整理作業においては、まず平成 23 年度と平成 25 年度調査区の層序関係を整理し、最終的に層序をⅠ層（戦後）、Ⅰ´層（18 世紀～戦前）、Ⅱ層（16 世紀後半～ 17 世紀後半）、Ⅲ層（15 世紀後半～ 16 世紀前半）、Ⅳ層（14 世紀後半～ 15 世紀前半）として捉えることになった。

資料整理を行う際に最も注目したのは、対象に出土した石積み 1 内 3 層貝だまりのヤコウガイ等の螺鈿の材料となる貝殻破片の検討であり、様々な方々の調査指導が必要と感じられた。まず、貝類を専門とする黒住耐二による調査指導で膨大な数の 1 cm 前後の破片の大半には、加工痕があることを発見されたのである。調査担当者の当方らは、小片は洗浄時に生じたのであろうというぐらいの認識であったので、調査指導の重要性を再認識した。さらに、前田考允や宮城清などの漆芸家、ヤコウガイの考古学研究を行っている木下尚子や西野望の指導助言も戴き、螺鈿細工に生じた破片として評価することができた。

図面整理、遺物接合や実測等の整理作業を経て作成した遺構・遺物実測図は、当センターでパソコン上により作図ソフト（イラストレーター）を用いてデジタルトレース及びレイアウトを行った。その後、写真や文字原稿も含めて編集ソフト（インデザイン）を用いてＤＰＴ印刷用の編集を行い、最終的には全てＰＤＦファイルとして作成し、指名競争入札で決定した株式会社尚生堂へ入稿した。

１．伐採状況

２．重機掘削状況

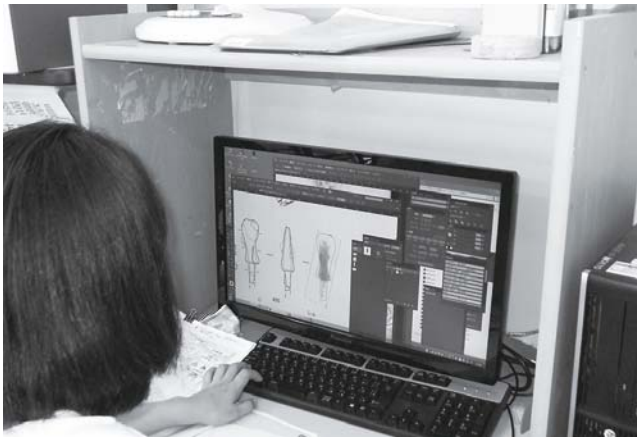
３．石積み２検出状況

４．貝だまり清掃状況

５．断面分層状況

６．関係者への現場説明状況

７．埋戻し状況



８．図版作成状況

写真１　調査・資料整理状況

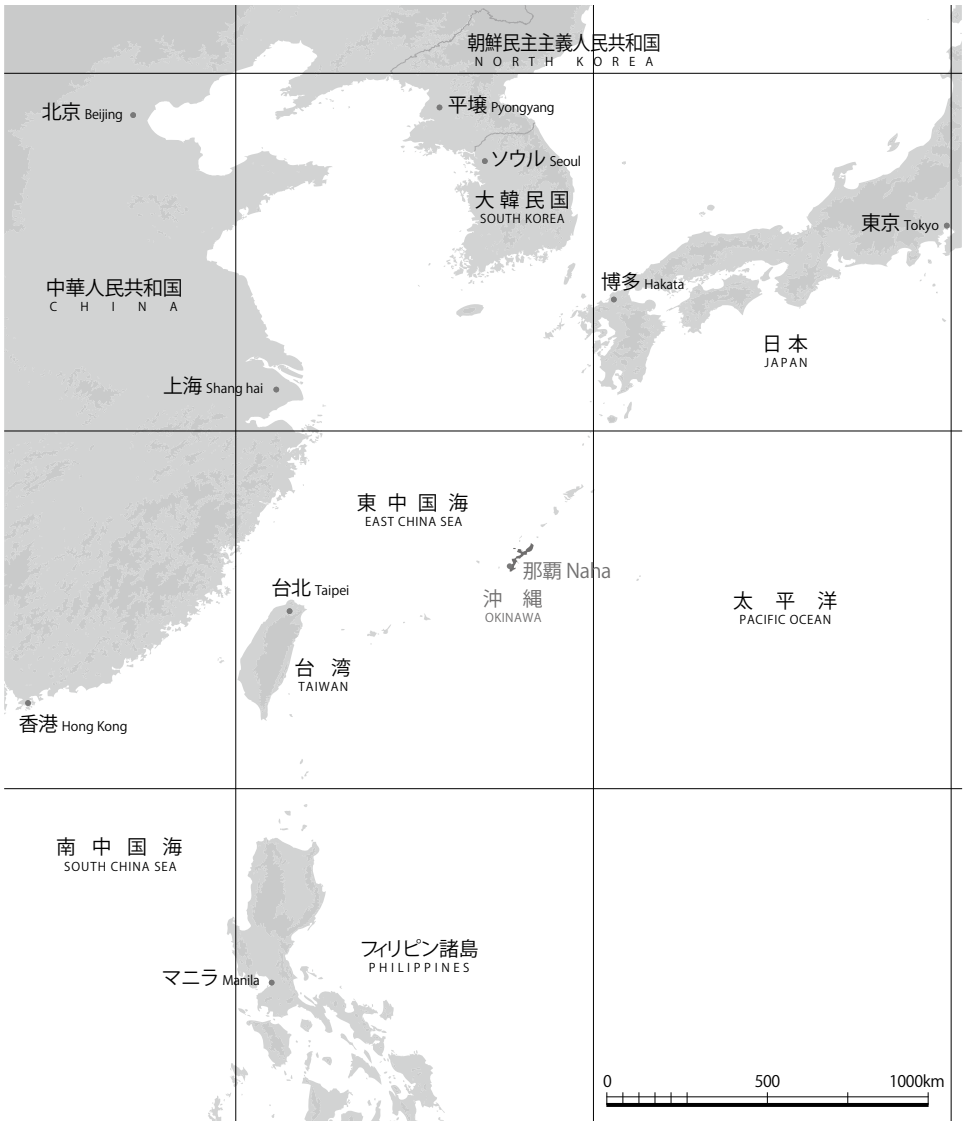
第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

首里城跡は、那覇市首里当蔵町３丁目１番地に位置している（**第１～３図**）。戦後は琉球大学が建設されていたが西原町への移転をきっかけに、戦前の姿に復元整備されることになり発掘調査も進められ、平成元（1992）年度は国営沖縄記念公園首里城地区として開園され、現在は観光客等で賑わっている。最高所は、東端の東のアザナにおいて現地表で標高 136 m、復原した城壁では標高 141 mを測る。那覇市内では、標高 165.6 mを測る東端 1.5km にある弁ヶ岳に次ぐ高所に位置するかつての琉球国の王城である。

この首里城の基盤は、地質区分による琉球石灰岩（30 ～ 1 万年前）であるが、その北東側の円覚寺側では島尻層群（2300 万～ 500 万年前）であるクチャ（泥岩）、南側では同層群のニービ（砂岩）となっている。この島尻層群は不透水層であるので、琉球石灰岩との境界には井泉が多く見られ、今日もこんこんと水が湧き出ている。

これまでの発掘調査では、首里城跡の東側である正殿から御内原の標高 125 ～ 130 mにかけて、琉球石灰岩の岩盤及びその風化土である島尻マージ（赤土）が地山として確認されている。一方、島尻層群のクチャは、北



第１図　沖縄本島の位置

側の久慶門と今回の調査区でもあるその東にある銭蔵付近の調査において、標高 110 m付近で確認されている。

首里城周辺は、往時には円覚寺等の寺院や、御細工所などの王府の関連施設、王族・士族の屋敷跡が林立し、城下町的な景観を誇っていたとされる。昭和 20（1945）年の沖縄戦の戦禍により首里城を始め寺院等はほとんど消失してしまい、現在ではマンション等の高層建物も並ぶ景観となっている。それでも往時の道・区画は残されており、平成 12（2000）年の世界文化遺産登録も契機となって、歴史的景観の保全にも配慮した町並み作りが求められている。

第２節　歴史的環境

首里城についての概況と、周辺遺跡の様相について概略する。

首里城

首里城の創建については明確に記載されている史料はないが、『中山世鑑（1650 年）』などに、洪武 25（1392）年に察度王が高ヨサウリ（高世層理殿）という数十丈の高楼を建てたとする記述があり、これを首里城内にあったと考える説である。一方より信頼性が高い史料としては、現存する最古の記年銘である宣徳２（1427）年に建立された石造物である「安国山樹花木樹碑」に、尚巴志王が首里城の北西側の安国山に龍潭と称する人工池を掘ったとするものである。つまり、周辺の整備がこのころ既に行われていることから、城内の建設は完成されていると推測されるのである。尚真・尚清王代（1477 ～ 1555 年）には外郭の拡張などが進み、往時の首里城になったものと考えられている。

そして、明治 12（1879）年の首里城明け渡しまで、琉球国の王城として栄華を誇ることになった。その後は、明治 29（1896）年までは熊本鎮台沖縄分遣隊が駐屯し、首里市立女子工芸学校、沖縄県立工業徒弟学校、首里第一尋常高等小学校などの校舎として利用され、各所がそのつど改変された。その間に、中心的な建造物群は大正 14（1925）年に特別保護建物に指定、昭和２（1927）年の解体修理を経て、昭和４（1929）年に正殿や主要な城門が国宝となった。

しかしながら、アジア・太平洋戦争に伴い日本軍第 32 軍司令部壕、師範学校の生徒による留魂壕が首里城地下に構築され、昭和 20（1945）年４月の艦砲射撃、５月以降の日本軍南部撤退に伴う米軍戦線の南下により、首里周辺も壊滅した。

終戦後は、昭和 25（1950）年の琉球大学の創設により、首里城には数々の校舎が建てられることで、その状況が様変わりする。昭和 47（1972）年の日本復帰と同時に国の史跡と指定され、平成 12（2000）年に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の構成遺産として世界文化遺産に登録された。また、日本復帰と同時に首里城の復元整備も進み、平成３（1992）年に国営沖縄念公園首里城地区として開園し、その入園者は年間約 252 万人（平成 26 年度）と、一大観光地となっている。

首里城跡の発掘調査

首里城の復元整備に伴う発掘調査が今も続けられているが、往時の首里城の遺構を確認するための調査でもあり、その創建についての情報は多くはない。

現時点で最も古い遺構としては、右掖門地区の城壁の内側で確認された岩陰墓で、屈葬人骨にグスク土器３様式（宮城・具志堅 2009）を伴っており、13 世紀後半に遡る可能性がある（沖埋文 2003a）。また、淑順門西地区の調査では、13 世紀後半～ 14 世紀初頭の包含層が確認されており、創建が当該期に遡る可能性も出てきた（沖埋文 2013 ａ）。なお、正殿第Ⅰ期遺構として 14 世紀の包含層が確認され、大和系瓦を葺いた建物が想定されている（当真・上原 1987、上原 2003）。

明確に確認されている最も古い建物跡は、正殿Ⅱ期の石積基壇上の礎石建物で、その基盤である造成層より

第２図　首里城跡の位置と周辺の遺跡

14 世紀後半～ 15 世紀前半と考えられる（沖県教 1995）。この段階には、北殿地区（沖県教 1995）や御内原地区（沖埋文 2010・2013 b）、外郭に当たる歓会門・久慶門地区（沖県教 1988）など首里城の中央部やや北よりの多くの地区で造成層が見られることで、全体の７割程度の約３万㎡はこの時期には造成されていたものと思われる。

15 世紀中葉の遺構としては、大量の火を受けた陶磁器や金属製品、玉が出土した京の内地区ＳＫ 01 で、倉庫跡と考えられている壁面に石積がなされた土坑で、1453 年の志魯・布里の乱による「府庫焚焼」（『中山世譜蔡温本（1723 年）』）、1459 年の「失火延焼倉庫銅銭貨物」（『明実録』）のどちらかで火災にあった資料とされる（沖県教 1998）。出土した陶磁器は、青磁の壺・瓶・盤などの大型品、元様式・明代青花の盤や壺などの優品が多く出土している。二階殿地区落ち込み出土資料も、やはり火を受けた大量の同種の陶磁器に加え、ベトナム産青花が多く出土する一方、元青花や、青磁龍文盤など 14 世紀代の陶磁器も多い（沖埋文 2005a）。

15 ～ 16 世紀には、石積・石敷など多くの遺構が存在したと思われるが、調査の制約により具体的な構造は不明なものが多い。史料では尚真王が 1477 年には北側、尚清王が 1546 年には東側の外郭城壁を拡張したとされる。当該期の遺構としては、詰所地区のヒレジャコを敷き詰めた貝殻敷きがあり、庭園的な場であった可能性が想定される（沖埋文 2005b）。西のアザナ地区で無文銭の枝銭（鋳型）が、銅滓・鉄滓・羽口・溶解炉・梵鐘鋳型等と共に出土しており、様々な製品と併せて鋳造された工房跡と考えられている（上原 2009）。

17 世紀前半の遺構としては、正殿裏側で女官居室があったとされる御内原北地区のシーリ（方言で、ゴミ捨て場の意）遺構がある。これは、径１ｍ程度の円形で拳大から人頭大の礫を敷き詰めた丸底の石組としており、獣魚骨の大量の食糧残滓、糞石などが廃棄されている。これらと共に 17 世紀前半代と限定できる本土産・中国産陶磁器が出土しており、「初期無釉陶器」とされる湧田窯で生産されたと考えられる沖縄産陶器が共伴して見られ、沖縄での陶器生産を考えるうえでも重要な資料である（沖埋文 2010）。なお、木曳門地区や淑順門東地区では 17 世紀頃の薩摩など南九州産に近いと考えられる土師皿も出土している（瀬戸 2005、沖埋文 2014 b）。

近代の考古資料として、スナイドル銃の小銃弾と薬莢が御内原北地区で出土しており、使用痕が残り、実射された可能性が指摘されている。熊本鎮台沖縄分遣隊が残したものと考えられている（沖埋文 2013 b）。

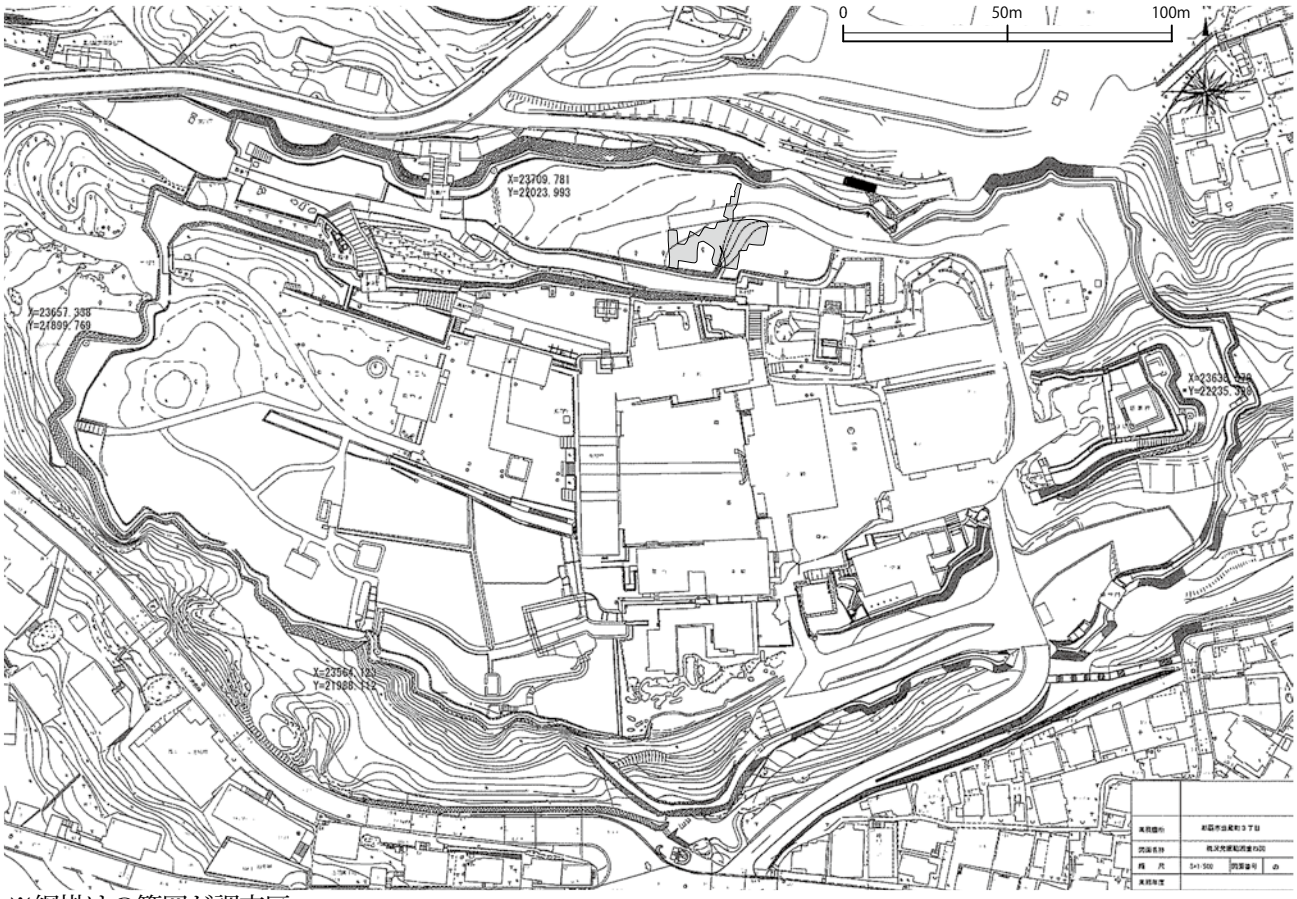
首里城跡周辺の遺跡

首里城跡では、下之御庭地区（沖埋文 2001 b）、外郭外側の南側下地区（沖埋文 2004）で、縄文時代後期の面縄東洞式や嘉徳Ⅱ式などが出土しており、この丘陵一帯が当該期には生活域であったことが窺われる。また、今回の調査でも出土したが、弥生～平安並行時代（沖縄後期）の土器も見られている。

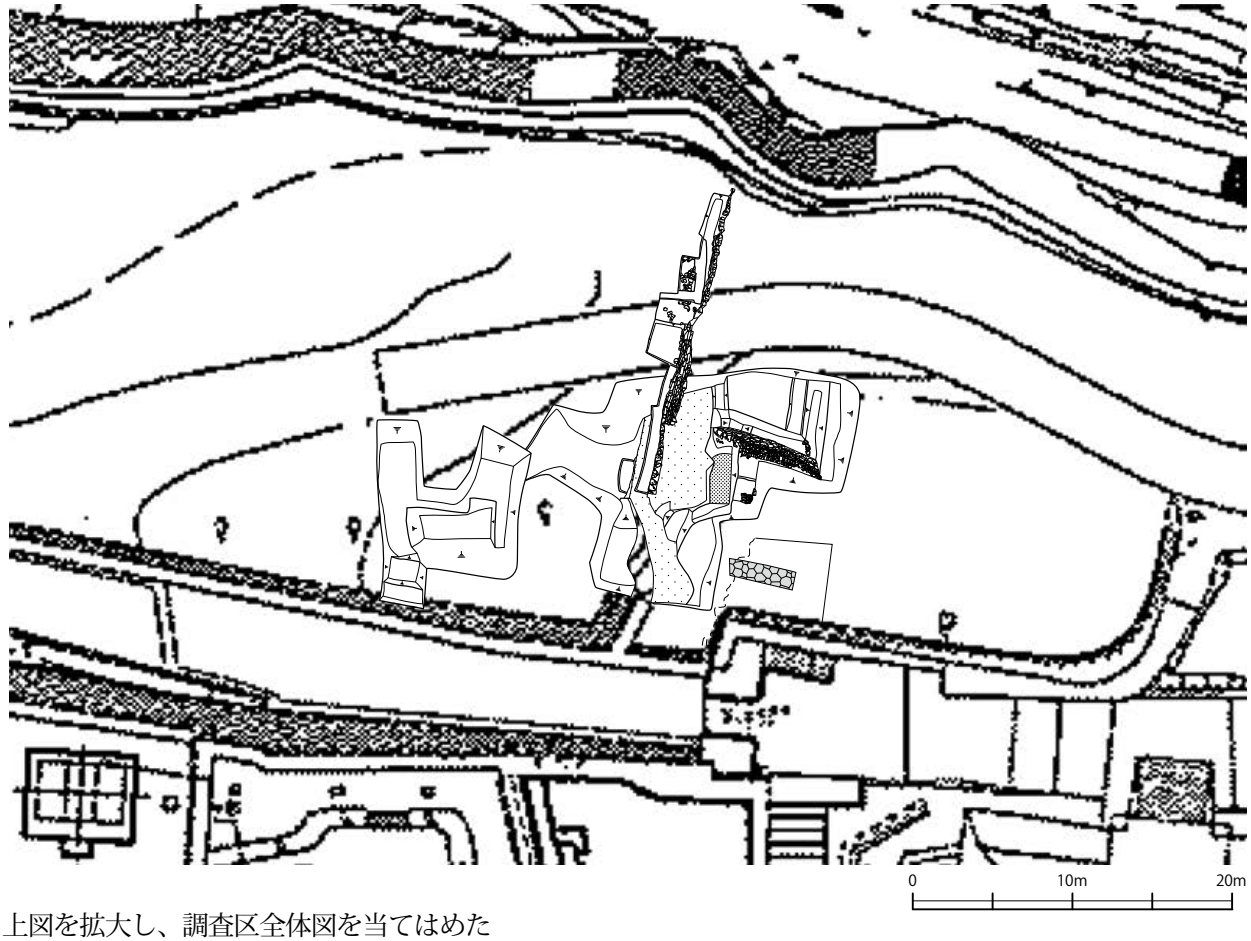
グスク時代には、首里城周辺でも多くの遺跡が見られるようになる。識名シーマ御嶽遺跡（那覇市 1997）や識名原遺跡（那覇市 2001）など、徳之島産カムィヤキ須恵器、長崎産石鍋、玉縁白磁碗などが出土し、11 ～ 12 世紀のグスク時代初期の遺跡である。特に、前者では植栽痕とする列状ピット群が確認され、耕作地と考えられる。首里城跡に近接する崎山御嶽遺跡（那覇市 2005）や御茶屋御殿跡（沖埋文 2003・2006）は 13 世紀後半～ 14 世紀初頭に形成され、後者は首里城跡と共通する大和系瓦が大量に出土する遺跡として著名である。

首里城跡の整備が本格化する 14 世紀後半には、さらに多くの遺跡が見られ、天界寺跡（那覇市 1999 b・2000、沖埋文 2001 a・2002 a）では寺院造営前の大規模な集落跡が展開する。15 世紀中葉には、天界寺跡では基壇造成、円覚寺（沖埋文 2002 b・2014 a）の造営などが発掘調査でも確認され、多くの寺院が造営されたようである。

第２図は、那覇・首里城周辺のグスク時代の遺跡分布図に、景泰２（1451）年ごろと推定される海岸線復元ライン（新島 2005）を入れた図である。これによれば、那覇は幾つもの大小の島が浮かぶような状況となっており、『おもろさうし』などに呼称されるまさに浮島である。首里城と那覇を結ぶ道は大きく２つあったと考えられている。

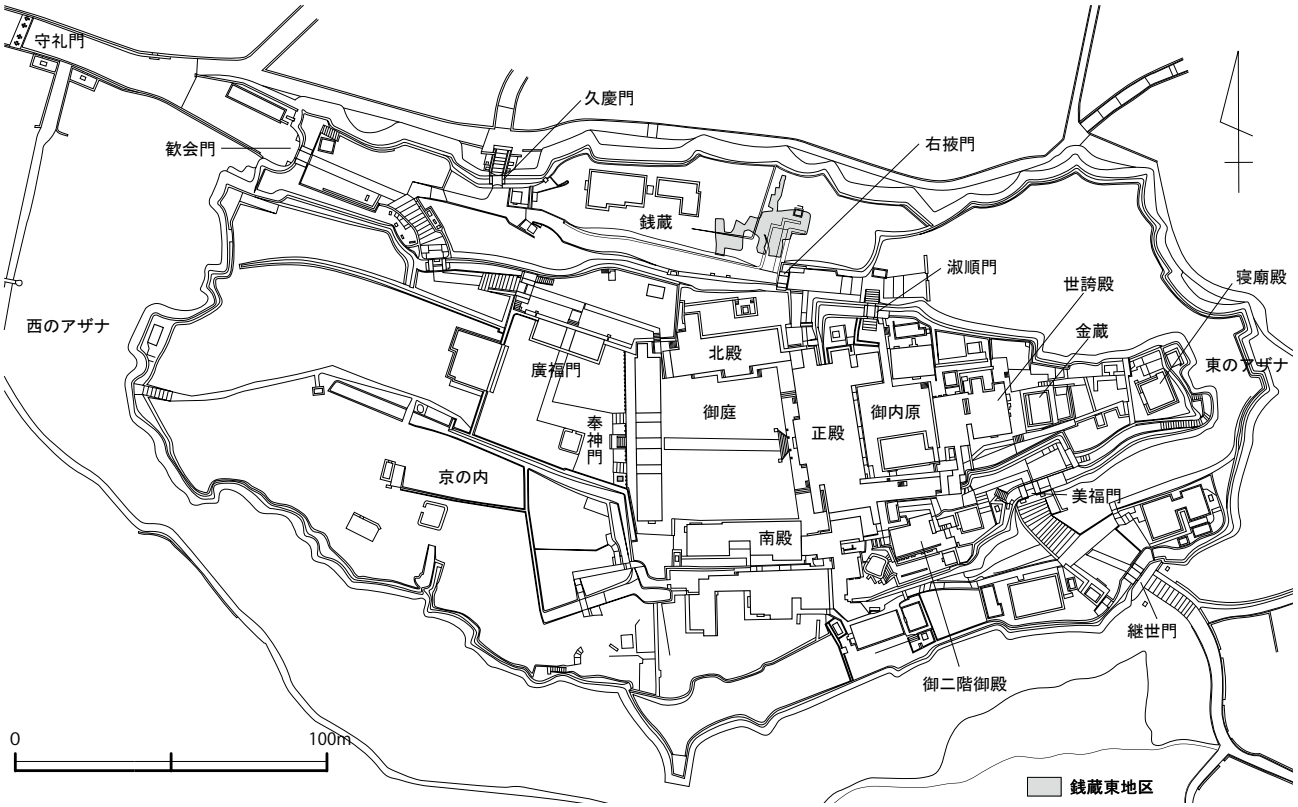


※網掛けの範囲が調査区

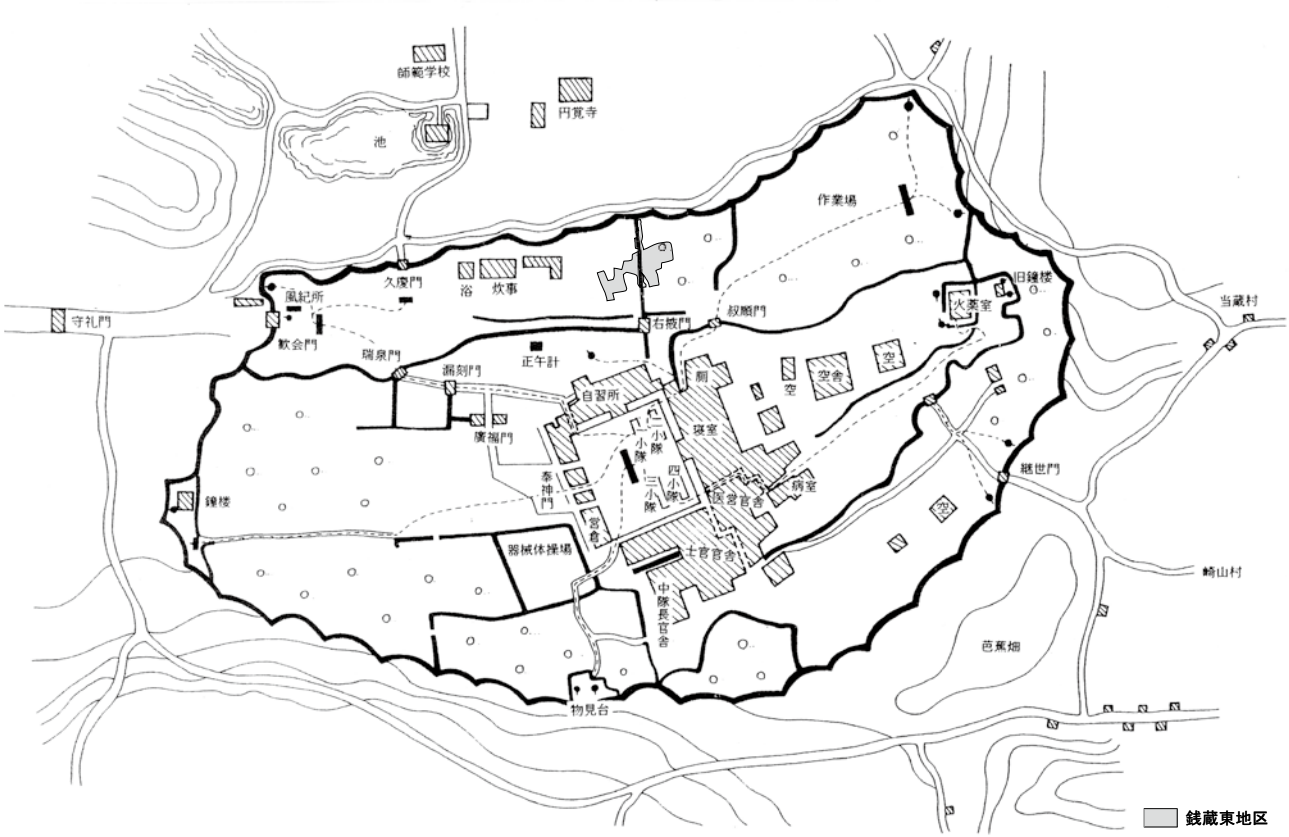


※上図を拡大し、調査区全体図を当てはめた

第３図　調査区の位置（平成 22 年首里城公園現状図　国営沖縄記念公園事務所作成図を使用し作成）



第４図　横内家資料平面図



第５図　旧首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図　（沖縄県文化財課史料編集班蔵）

一つは、首里城の西側に位置する守礼門を抜け約 500 m先にあった中山門までの綾門大道を通り、景泰３（1452）年に尚金福王が湿地に築いた海中道路である長虹堤を通る道である。綾門大道では、発掘調査により礫混じり層を基礎にして版築状に土をつき固めて造成し、石列で両端を区画していたことが分かり、15 世紀前半には敷設されていたようである（沖埋文 2003 ｃ）。綾門大道跡より西方は、現在の県道につながり、長虹堤の起点とされている崇元寺に至る。この崇元寺は戦前まで残存しており現在は３つのアーチ門が発掘調査をもとに復元されている。『琉球国由来記』によると、創建年代には幾つかの説があり、最も古いのは尚巴志代（1422 ～ 1439 年）、新しいものは尚真王代（1478 ～ 1526 年）とする説があるが、発掘調査で得られた遺物では青磁、青花、永楽通寶も多く出土しており、15 世紀代の創建である可能性は高い（那覇市 1983）。

この崇元寺跡の西側は元来すぐに海であったとされ、その北側は那覇以前の港と言われている泊港となる。一方、この南対岸には、その性格は不明だが 13 世紀後半から形成される牧志御願東方遺跡が位置している（那覇市 1995）。長虹堤をわたると、那覇の浮島で最も広い陸地部の東端につながり、13 世紀後半には形成されたハナグスク（波上宮）などの遺跡が位置している（那覇市 1999 ａ）。近年の調査では、那覇港南岸に位置する往時は硫黄グスク等があった渡地村跡の調査が行われ、多くの遺物・遺構が見られるのは 14 世紀以降になることが明らかになった（那覇市 2012）。また、唐船小堀（とーしんぐむい）と呼ばれる船だまりとされた場所では、特に 15 世紀後半の青磁が底部だけで 6,000 点以上見られ、様々な木製品も出土している（沖埋文 2007 ｂ）。

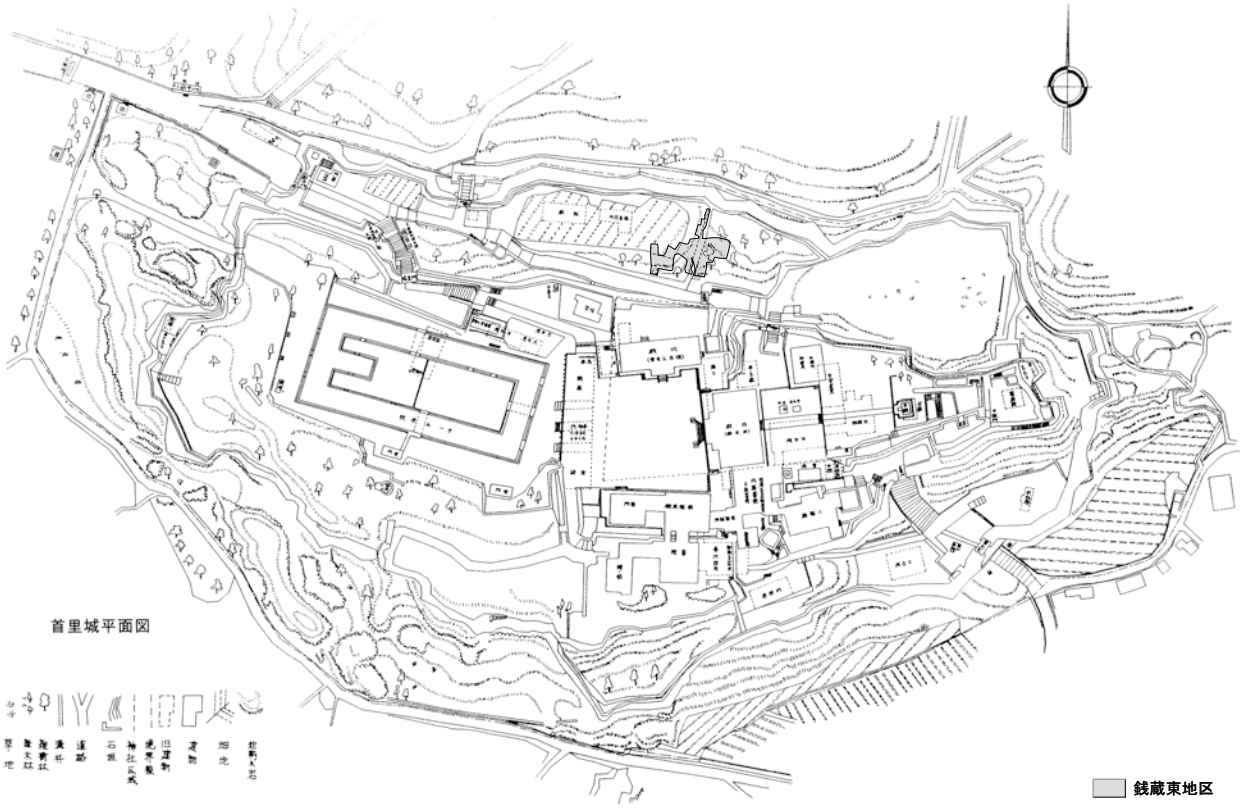
もう一つは、1522 年に尚真王が軍事用道路として造った真珠道で、首里城から南下し漫湖に至り、その南岸を伝っていき、那覇港の南側に至る道である。この真珠道跡は、首里城周辺では発掘調査により岩盤を平らに成形している部分は確認されている。15 世紀後半～ 17 世紀以降の遺物が多く見つかっており、綾門大道跡より新しい敷設もしくは利用と見られる。この道を下っていくと、現在も残っている金城町の石畳につながっていき、往時を髣髴とさせる。さらに南下していくと、先述したグスク時代の集落跡や、河口に望む大型グスクである豊見城城跡などがあり、こちらも重要なルートであった（沖埋文 2008）。

第３節　調査区の概況

本報告書の対象である銭蔵東地区に関する歴史背景や変遷について略述する。なお、調査区の位置を、平成 22 年時の現状図（**第３図**）、明治期以前とされる横内家資料平面図（以下「横内図」、**第４図**）、明治期の「旧首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図」（**第５図**）、昭和６（1931）年頃とされる阪谷良之進作図の旧首里城図（以下「阪谷図」、**第６図**）、昭和 25（1950）～ 59（1984）年までにあった旧琉球大学校校舎配置図（**第７図**）にプロットしている。今回の調査区は、銭蔵の東側で右掖門北側の内郭城壁から外郭までの外郭北側の一角に当たる。

この銭蔵周辺の外郭北側では、既に平成 18 ～ 20 年度に銭蔵地区（沖埋文 2015）として発掘調査がなされている。この調査では、15 世紀末～ 16 世紀代の石組や石畳、17 世紀前半の礎石跡、近代の集石などが確認された。しかしながら、先述した古図に合致する建物は明確にできなかった。ちなみに、銭蔵は、首里王府の物奉行に属する役座（役所）の一部門で、銭御蔵（ジンウングヮ）とも呼ばれ、官銭の収納、夫役銭（租税）と買い上げ品の収支、御用酒の出納を司っていたとされる（宮里 1983）。

明治 12 年の琉球処分後に熊本鎮台分遣隊が首里城に配備されるが、この銭蔵の建物は炊事場と浴場と表記されており、分遣隊が撤退する明治 29 年まで使用されていたものと思われる（**第５図**）。その後、昭和８（1933）年に首里聖廟が銭蔵跡に移ったとされるが、沖縄戦時には正殿などと共に破壊された。なお、この頃とされる阪谷図（**第６図**）に描かれたとされる右掖門脇より外郭へ延びる石垣が、今回石積み２として検出されている。昭和 25 年の琉球大学の開学後には、５階建ての第Ⅰ理学校舎や共用施設が建設され、西原町に移転する昭和 59（1984）年まで使用された（**第７図**）。



第６図　阪谷良之進作成　旧首里城図（沖縄県立図書館蔵）

第７図　旧琉球大学校舎配置図

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

今回の調査は、公園整備計画に合わせて銭蔵東側における遺構の確認を目的とし、その調査面積は平成 23 年度 250㎡、平成 25 年度 27㎡、合計 277㎡となった。ちなみに、首里城の復元方針は、1709 年の火災後 1712 年に再建され、1925 年に国宝指定となった正殿を基本とされており、城壁や各建物もそれに合わせて概ね 18 世紀から戦前の遺構を確認することが目的となっている。

グリッド設定は、過去の調査区において本地区に近接する平成 16 年度に行われた淑順門地区（沖埋文 2004）の記号を基準とした５ｍグリッドを採用した。このグリッドは、Ｘ＝ 23695、Ｙ＝ 22150 をＡ１グリッドとして、西側にＡ２、Ａ３…、南側にＢ１、Ｂ２…として呼称している。これに従って、10 より東側はそのまま、11、12…、Ａより北側はＺ、Ｙ…と続けることにした（**第８図**）。

遺物の取り上げにはこの５ｍグリッドによることにしたが、石積み等の遺構が確認されなかった範囲で、トレンチを平成 23 年度では１～３、平成 25 年度では１を設けており、各トレンチ内は狭小であるため、グリッドで分けずにトレンチ内一括で取り上げたものもある。

今回の調査区では、戦前以前の古図等において南北方向の石積み等が描かれているので、これらの遺構の確認が第一の目的とした。平成 23 年度調査時には、琉球大学時代にもあったとされる南北方向の石垣（石積み３）が現存しており、まずこの石垣がどこまで遡るか、またこれより古い遺構があるかどうかを確認することになった。そのために、石垣の外側にあたるＡ～Ｃ－ 12・13 グリッド（以下、グリッドを省略）において調査を始めることにした。その際、石垣を完全に残したまま掘削することは安全面から困難であったため、重機により最小限の石垣の上部を外しながら、それに伴う裏込めと堆積土を除去していった。これらはガラスなどが混じっているので近代以降であるのは確かと思われる。この掘削中にＣ－ 12 付近で南北方向の石垣（石積み４）が長さ２ｍ、高さ２段程度残存しているのが確認できたが、これは記録前に崩れ落ちてしまった。

その後も重機掘削を続けたが、Ｂ－ 12 付近では、石垣があった地点より５ｍ下がった地点で、15 ～ 16 世紀代の陶磁器が含む炭層（Ⅲ層）が露出し、さらにその３ｍ下には石積み３の根石が検出されたので、この時点で掘削を止めた。本来ならば、近代の盛土を除去した時点で精査すべきではあるが、元来石垣があった内側のためそのままでは急斜面となるため、高さ１～ 1.5 ｍ、幅２ｍ程度の段を設けている際の出来事であった。また、石積み３は現存する石垣ではあったが、この前面にトレンチ３を設定したところ、既にクチャ層の上に載っていることが確認されたので、根石自体は外す必要はないと考えた。

一方、この東側に当たるＡ・Ｂ－ 10・11 は、比較的遺物や礫が少ない土（Ⅰ・Ⅱ層上部）を地表より２ｍ除去した時点で、東西方向の石積み（石積み１）が確認されたので、ここから人力掘削に入ることにした。その掘削方法としては、石積み１前面とその東壁を北に伸ばしたＬ字状のトレンチ（トレンチ１）を設定し、その範囲を掘削することにした。なお、トレンチ１は東側と南側に分けて遺物を取り上げている。このトレンチを掘削した結果、Ⅱ～Ⅳ層の層序を確認し、調査時点ではⅡ層が 17 世紀、Ⅲ層が 16 世紀、Ⅳ層が 15 世紀に相当すると考えた。特に、Ⅱ層は厚さ３ｍも及び瓦や礫が多く、地山であるマージを母材とした明褐色土が互層のように見られたため、比較的短期間で行われた造成土と考えた。また、Ⅳ層は当初、クチャ層と見間違えたように固く締まっていたが、拳大程度の塊で土が外れていくような状態で掘削が進み、１ｍほど掘削した時点で青磁が出土したため、クチャを母材とした造成土と判断した。

石積み１について、その時期や構築方法を確認するために、遺構が損壊しない程度にこの西端南側の堆積土を

掘削することにした。この層序は、先述のトレンチ１と現場では対応できなかったので、石積み内１～３層に分けた。これらの土層は、石積み１に向かって下るような堆積をとっており、堅く締まっているとまでは言えないが、礫も混じっておりこの石積み１を構築するための造成土ではないかと考えた。この内３層は全体的に炭が混じった黒褐色土で、塼・瓦・陶磁器・貝・獣魚骨が多く含まれており、特にこの下部にはヤコウガイ・サラサバティ・チョウセンサザエが堆積に沿って集中して出土しており、貝だまりと称した。なお、Ｂ－ 11 南側では石積み１上面のレベルで石敷き１が確認された。

石積み２については、根石外側の堆積土（Ⅲ´層）から 15 世紀代の遺物が見られ、この時期には既に存在していたことが推定された。そして、この石積みは昭和初期の古図にも該当することから、戦前にあった銭蔵とその東側を区切る石垣であったことが推定された。なお、この石積み２より北側のＡ～Ｃ－ 12 ～ 15 において、現在茂っている木々をよける形で調査区を設けて重機掘削を進めていった。その結果､全てが戦後の盛土であり、部分的に地表より４ｍ下でクチャ層を確認した。このことから、この一帯には首里城に伴う遺構がほとんど残っていないものと判断した。

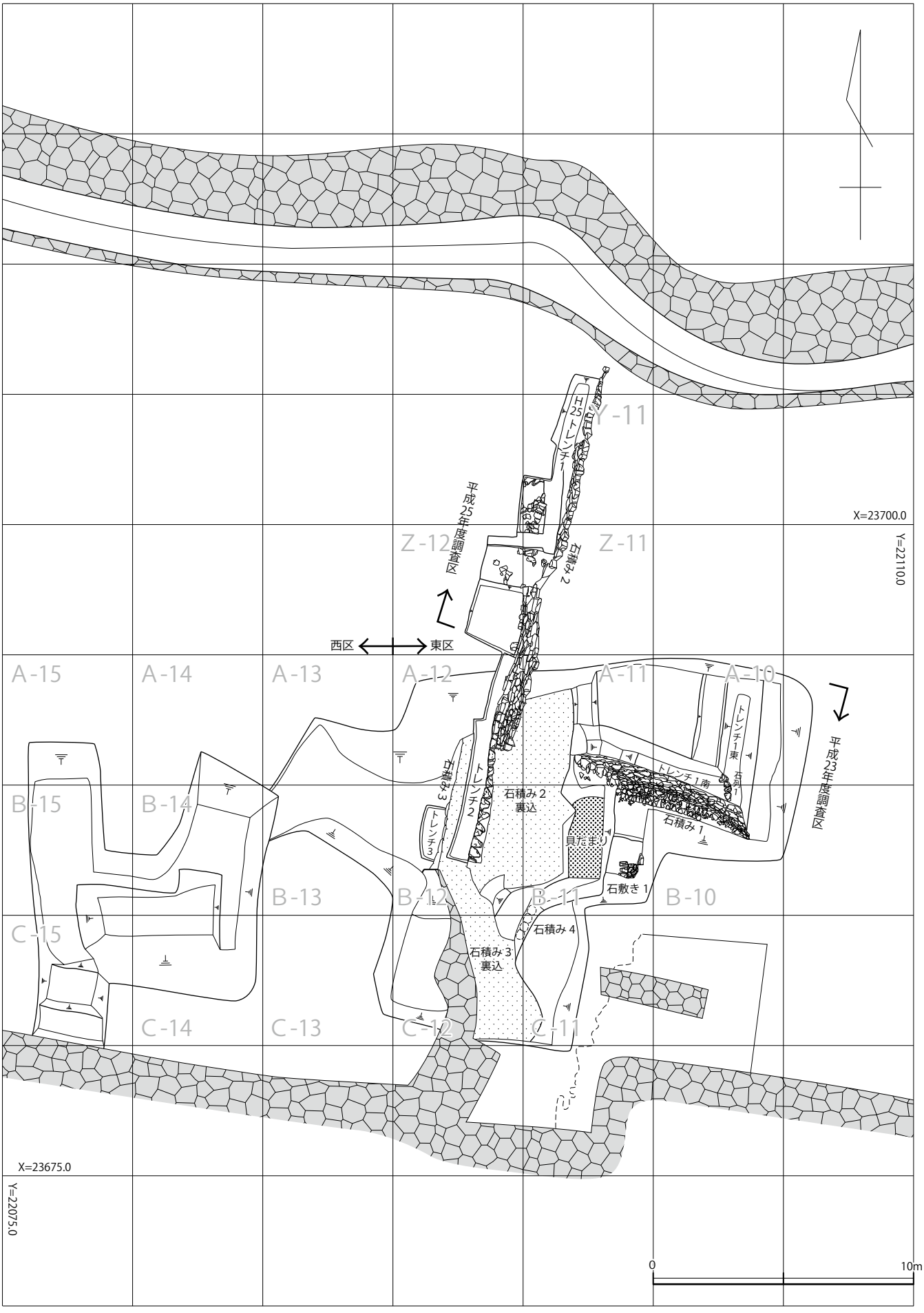
このように、今回の調査では、現存していた琉球大学時代の石垣を起点に重機掘削を行い、遺構の上面が確認できた時点で人力掘削に切り替え、必要に応じてトレンチを設けて調査を進めていった。これにより、概ね 17 世紀以前の堆積状況は重層的に捉えることができたと思う。しかし、古図等で想定された首里城の遺構を見つけるために現存する琉球大学時代の石垣（石積み３）を外すという方法をとることになり、近世に遡る可能性がある堆積土や造成土（Ⅰ´層・Ⅱ層上部）については、その大半は重機で掘削してしまった。この理由は、先述したように安全面の配慮でもあるが、比較的平坦地であったＡ・Ｂ－ 10・11 においてまずは一定のトレンチを設けて重機掘削を行うという方法もあった。そうすれば、地表から正確に下に掘り下げることにより戦前～近世の堆積土にも気づくことができ、それから人力掘削を行えばより確かに層序を確認しながら調査を進めることができたと思われる。今後の反省点としたい。

なお、先述した石積み１内の２層の一部、３層及び貝だまりのほぼ全量の 1.5㎥（約３㎡×厚さ 0.5 ｍ）の土壌についてフルイを使った水洗を行い、微細な獣魚骨・貝類等を採取することができた（**写真２**）。詳細な採取方法については、第４章第１節で説明する。

現地での写真は、35mm のフィルムカメラ、または適宜６×７サイズの中判フィルムカメラを用いて白黒とリバーサルフィルムで撮影・現像した。なお、デジタルカメラ（ニコン D70 ｓ）でも撮影を行い、報告書時の写真は DTP 印刷に対応するために、デジタル画像を使用することとした。

遺物のナンバリングは、「(調査年度＜Ｈ 23 かＨ 25 ＞)　首ゼニ東　(グリッド)（トレンチ・遺構・層序)」と注記している。

写真２　石積み１内３層貝だまり土壌洗浄状況


X=23700.0
Y=22110.0
X=23675.0
Y=22075.0
Z-12
Z-11
Y-11
A-15
A-14
A-13
A-12
A-11
A-10
B-15
B-14
B-13
B-12
B-11
B-10
C-15
C-14
C-13
C-12
C-11
西区
東区
平成25年度調査区
平成23年度調査区
H25トレンチ1
石積み2
トレンチ2
石積み3
トレンチ3
石積み2裏込
トレンチ1東
トレンチ1南
石列1
石積み1
貝だまり
石敷き1
石積み4
石積み3裏込
0
10m

第８図　調査区全体図

第２節　層序

今回の調査区では、平成 23 年度トレンチ１において本調査区の基本層序が抑えることができ、大きくⅠ～Ⅳ層に分けている。本章第４節で後述するように、各層の時期を出土遺物の検討により設定している。このトレンチ１以外の土層については、時期的に並行すると考えられる層序において説明する。

なお、資料整理時の検討により、各層の中間で時期的に更に分ける必要がある層を２つ確認しており、Ⅰ層とⅡ層の中間をⅠ´層、Ⅱ層とⅢ層の中間をⅢ´層として新たに設定することになった。そのため、本調査区において時期的には６つの層で捉えられると考えている。また、基盤層いわゆる地山は本地区ではクチャ層が確認されている。以下、各層の様相を説明する（**第１表、第９・10 図**）。

Ⅰ層　戦後　造成土

調査区東側に当たるＡ・Ｂ－ 10・11 に敷かれていたアスファルトやコーラル（石灰岩細礫）、石積み３を外す際に生じた裏込め、調査区の 12 ラインより西側に厚く見られる城壁復元整備の際に生じたと思われる石材が多く含まれた造成土である（**写真６・18 －４**）。また、平成 25 年度調査区では近世以降の遺物も見られた最上層をⅠ層としている。なお、出土遺物では層序が不明なものも含んでいる。

Ⅰ´層　18 世紀～戦前　石敷き１・石積み裏込め覆土、造成土

石敷き１や石積み１・２の裏込めを検出する際の覆土（**図版８－２**）は、ガラスなども含んでいるが沖縄産陶器などが出土しており、時期的には 18 世紀～戦前と考えた（**第 12 図**土色１～３）。また、Ⅰ層と共に重機掘削したため遺物ははっきりしないが、Ａ－ 10 南壁で確認された北側に向かって急傾斜で堆積する厚さ１ｍに及ぶ造成土は、後述するⅡ層とは異なり巨礫や塼などは少なく、またクチャ層が起源と思われるシルトブロックを含んでいる。これらの特徴から、Ⅱ層と同時期と考えにくいため、Ⅰ´層としている。この土を掘削中に石積み４を検出したが、記録前に崩れ落ちた（**写真 18 －２**）。

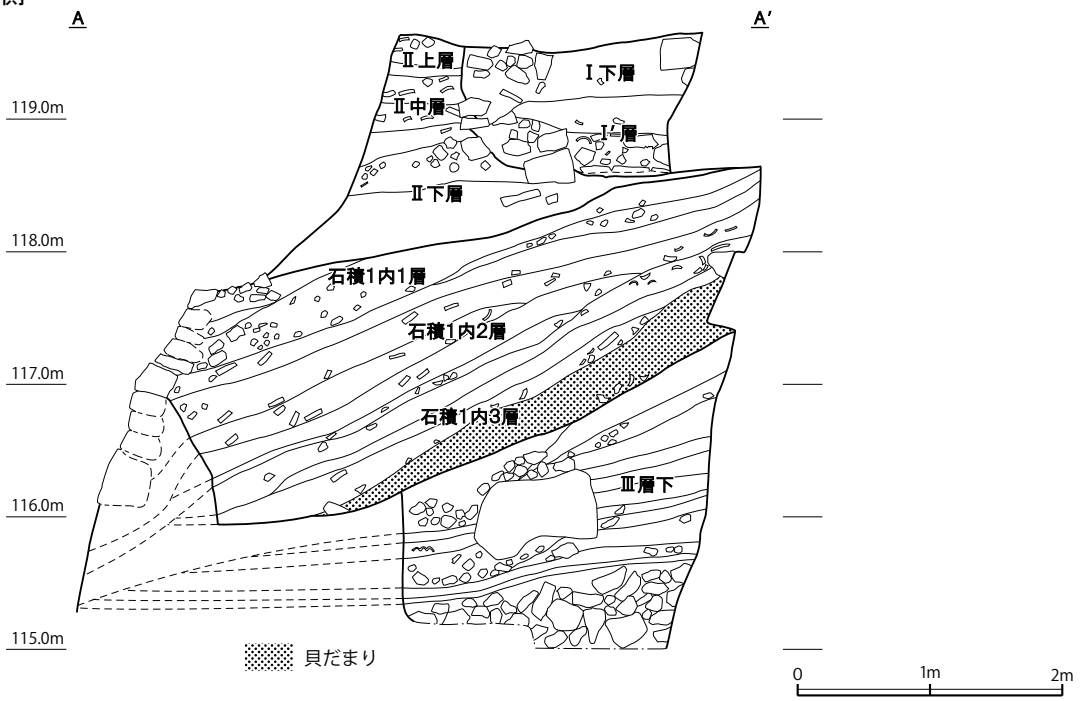
Ⅱ層　17 世紀後半　造成土

Ａ・Ｂ－ 10・11 で確認された厚さ１～３ｍの北側へ向かって傾斜する造成土で、石積み１はこれにより埋没した状況と考えられる（**写真３・４、図版９**）。土質・土色の特徴により 34 層に分けることができ、それぞれ厚さが 10 ～ 60㎝あるが、多くは標高が低い北西に向かって厚くなる傾向がある（**第 11・12・16 図**）。この各層は大きく２タイプにまとめることができ、マージを母材としたと考えられる褐色土と、それより色調が鈍くなったオリーブ褐色を主体とした土がある（**第９・12 図**）。全体的に、巨礫や瓦・塼・漆喰などが多く混入し、陶磁器や貝類・獣魚骨も含まれていたが、特に後者に多く見られた。また、漆や炭化材、炭が集中する部分なども確認できた（**図版 10 －１～５**）。前者はマージを母材としているためか比較的堅い印象を受けた。なお、Ⅱ層の西側への広がりは、現時点では石積み２の裏込めが検出されているＡ－ 12 には見られない。しかし、石積み２の傾斜角度から考えると、本来あった石積み２上面までは広がっていたものと思われる。

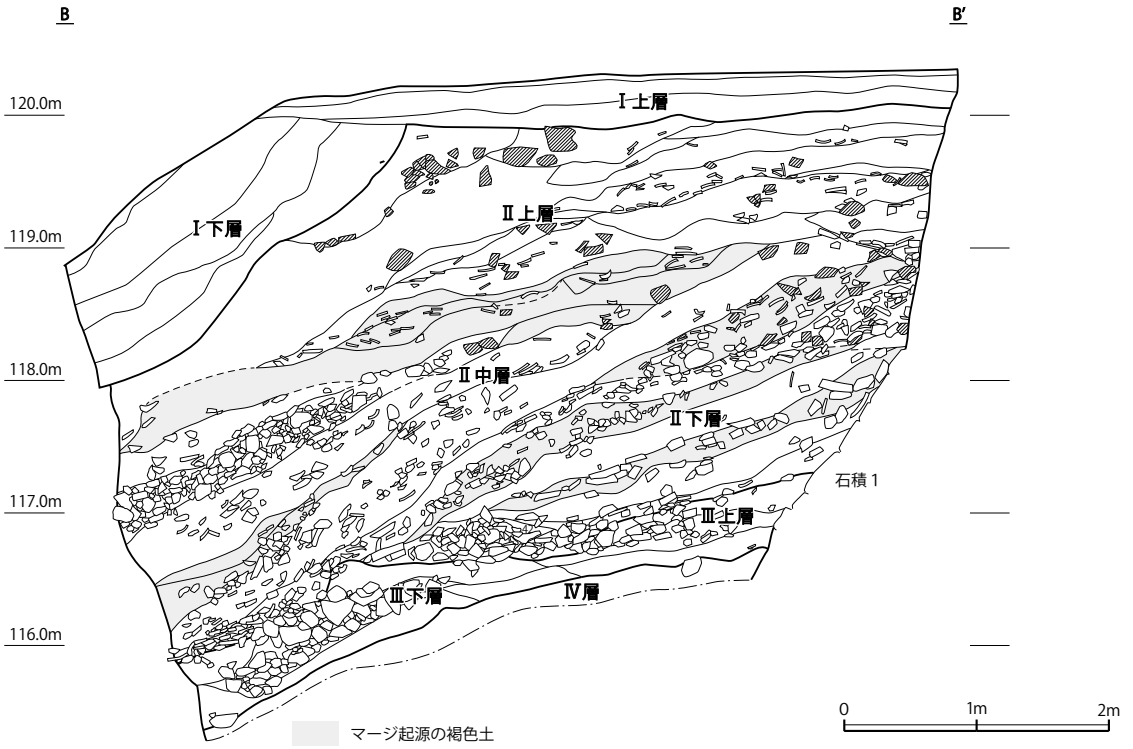
トレンチ１の掘削時に、時期的な違いを確認するために、一番上方の褐色土（土色 No23 ～ 26）より上層で比較的傾斜が緩やかな上層、その下から石積み１の上面までの中層、石積み１を覆う下層の３つに分けた。現場においてはこれらの３つに大きな時期差は考えられず、概ね 16 ～ 17 世紀代と判断した。資料整理時に改めて検討したところ、どの層も 16 世紀代の遺物が多く、量自体は少ないが全て 17 世紀後半の陶磁器を含んでいることが判明した。ただ、上層は石積み１の上面にも堆積しており、礫・瓦・塼が比較的少なく、傾斜もやや緩やかであるため、中・下層よりやや時期差がある可能性も想定される。しかしながら、南側から流し込んでいくような形で形成されるなら、上層が水平になっていったものと考えられる。そこで、不確定要素はあるが、遺物の時期差も明瞭でないことから考えると、17 世紀後半において比較的短期間で形成された造成土と考えたい。

写真３　トレンチ１東壁Ⅱ層堆積状況

石積み１内側



トレンチ１東壁



第９図　層序対応図（１）

Ⅲ層　16 世紀前半　遺物包含層・造成土

Ⅱ層とほぼ同様の範囲で確認された土層で、石積み１内側に堆積し、石積み２の裏込め東端やⅣ層を覆っている（**写真４、図版６－２・11－１**）。西側の広がりは、重機による石積み３除去時に掘削したため、明確なところは分からない。本層の時期は、現場時点ではⅡ層よりやや古い 16 世紀代の遺物が中心と考えられた。資料整理時においては、陶磁器の年代観では 15 世紀後半～ 16 世紀前半と、明らかに古いことが分かった。これらは現場時点において、次のような土層に分けて掘削した。まず、上層より状況を説明する。

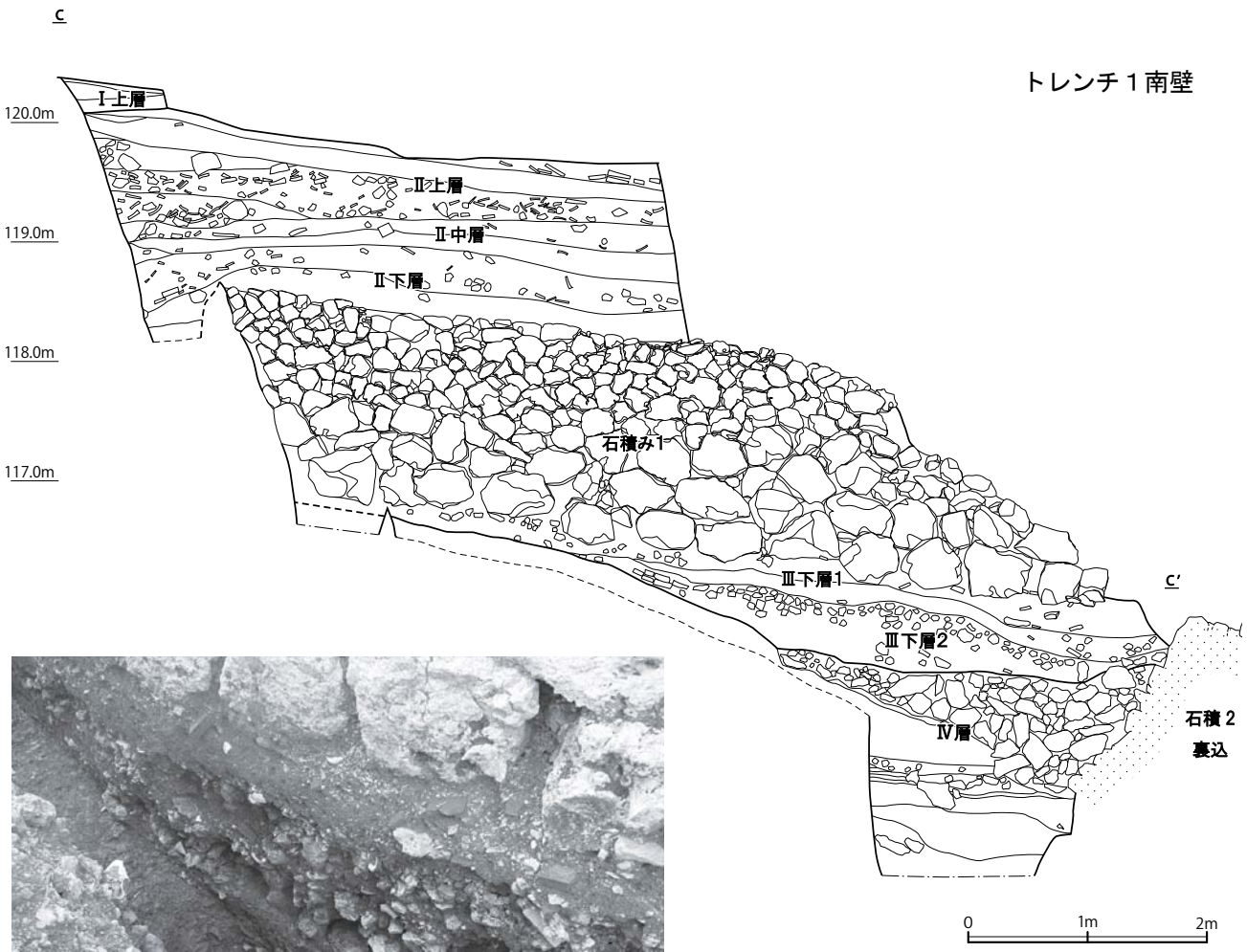
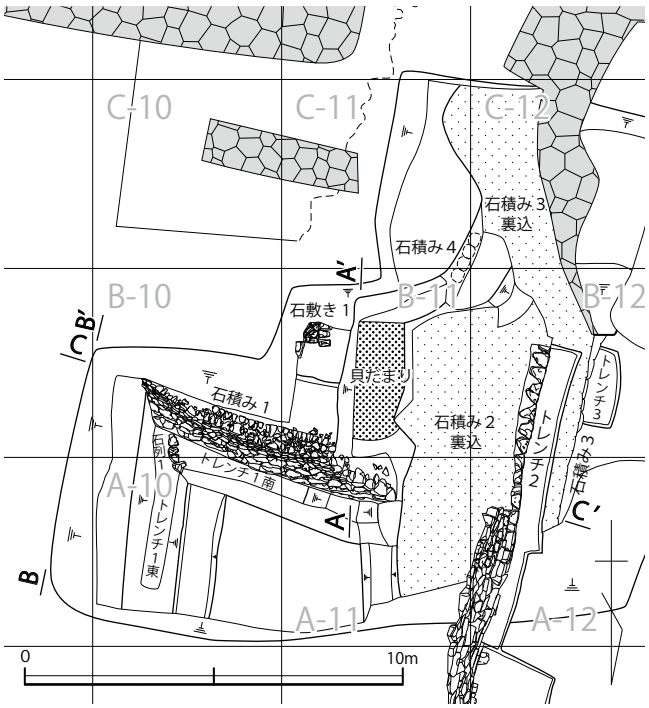


写真４　トレンチ１南壁Ⅲ下層堆積状況

第１表　層序対応表

調査区／層序	平成23年度調査区西	平成23年度調査区東				平成25年度調査区
		トレンチ1東壁	トレンチ1南壁	石積み1内側	その他	
Ⅰ層	Ⅰ層	Ⅰ層上・下	Ⅰ層上	Ⅰ層下	トレンチ3	Ⅰ層・トレンチ1
Ⅰ´層	—	—		Ⅰ´層	石積裏込・石敷き1	—
Ⅱ層	—	Ⅱ層上			—	—
		Ⅱ層中				
		Ⅱ層下				
Ⅲ層	—	Ⅲ層上		—	—	—
		Ⅲ層下（下1相当か）	Ⅲ層下1	石積1内 1層		
				石積1内 2層		
		—		石積1内 3層		
		—		貝だまり		
		—	Ⅲ層下2	Ⅲ層下（下2相当か）		
Ⅲ´層	—	—			トレンチ2	Ⅱ・Ⅲ層
Ⅳ層	—	Ⅳ層	Ⅳ層上・下	Ⅳ層		
Ⅴ層	—	—			Ⅴ層	Ⅴ層



第 10 図　層序対応図（２）

Ⅲ上層　石積み１の外側で根石より上方に厚さ約 30㎝で堆積した暗褐色を主体とした土で、これまでのⅡ層よりも炭が多く、より暗色が強い土色であった。塼・瓦・陶磁器・獣魚骨・貝類が含まれていた。Ⅱ層と同様に、標高が低い北西に向かって堆積している（**第 11 図**土色 No43 ～ 46）。

石積み１内側堆積土　石積み１の内側に見られた堆積土で、北側に向かって下っており、厚さは 1.0 ～ 1.6 mで 12 層に細分されるが、大きく１～３層にまとめている（**写真５・８、図版 11 ～ 15**）。１層は、巨礫が混じる黄褐色土で、石積み１内側に接している。２層は、暗褐色土で上方は石積み１内側に接しているが、下方は石積み１下側の堆積土であるⅢ下層（後述）と同一である。１層より、塼・瓦・陶磁器・獣魚骨・貝類など遺物が多く見られる。

３層は、非常に多く炭を含んだ黒褐色土で、石積み１内側に接しないが、石積み１下までには伸びないようである。遺物は非常に多く、特に貝類が目立ち、最下面にはヤコウガイ・サラサバティ・チョウセンサザエの殻破片が集中しているため、貝だまりと称した（**図版 11 ～ 15**）。後述するが、これらの貝類は完形品が少なく、研磨や切り取りなどで 1㎝以下の小片となったものが非常に多く見られ、螺鈿等貝製品の加工時に出た不要片が含まれると考えた。調査時は、１・２層と３層で時期差もあるものと考えたが、陶磁器での違いは分からなかった。

Ⅲ下層　当初、石積み１外側であるトレンチ１で石積み１下面より下層でⅣ層までの土層としていた（**図版 10 －６**）。東側では厚さ 10 ～ 20㎝と薄かったが、西側では 80㎝と厚くなっていた。土色は上方が黄褐色、下方が暗褐色土なので、掘削時の遺物取り上げに際しては下層１と下層２に分けた。後に、下層１は石積み１内２層、下層２は石積み１内３層のさらに下層部分（**第 12 図**土色 No23 ～ 36、**写真９、図版 15 －６**）に相当することが分かった。この下層部分は厚さ 10㎝前後で分かれる褐色～オリーブ褐色と色調に差がある土が堆積しており、長さ１mほどの巨石も見られる。そしてこの下層は石積み２の裏込めとなっている。つまり、この部分も造成土としての性格が考えられる。

以上、Ⅲ層についてまとめると、石積み１外側に堆積する＜Ⅲ層上部＞と、石積み１より古くその構築に伴う造成土と考えられる＜石積み１内１・２層とⅢ下層１＞、その下層である＜石積み内３層・Ⅲ下層２＞の３つに分けられる。Ⅲ上層は石積み１が構築された後の遺物包含層と考えられ、その下層である石積み１内側堆積土とⅢ層下部は石積み１の構築に伴う造成土と分けて考えることもできる。しかし後述するが、出土陶磁器はⅢ層全体で 15 世紀後半～ 16 世紀前半のものが主体であり、Ⅲ上層と石積み１内１・２層に新しい傾向のものが多いような傾向があるが明確な差としては提示できない。Ⅲ層全体の堆積状況が標高が高い南側から流れ込んでおり、100 年も及ぶ長期とは考えにくく、16 世紀前半の間に造成された可能性が高いと思われる。

Ⅲ´層　15 世紀後半　遺物包含層

石積み２前面のトレンチ２覆土と平成 25 年度調査区で確認されたⅡ・Ⅲ層である（**第 16・17 図、図版８－３、図版 16 －３**）。これらは、石積み２の根石の外側に堆積しており 15 世紀後半の陶磁器が主体である。近世の遺物は若干出土しているが、この調査区で最も多かった 16 世紀代の遺物が見られなかったことから、これらの上層には厚いⅠ層が見られることからその混入と考えたい。つまり、石積み２の上限が 15 世紀後半に遡る可能性が高い。また、この土層が堆積する石積み２の根石の上面、標高 112.5 m付近では、中国産青花や褐釉、そして大形のヒレジャコなどが見られた（**図版 16 －４～６**）。

Ⅳ層　15 世紀前半　造成土

トレンチ１で確認された最下層で、オリーブ褐色粘土が主体の土層で、固く締まっている（**第 16 図、図版 10 －６・７**）。現状では厚さ 1.5 m以上を図り、その下面は確認できていない。本層の上部は、巨礫で構成されている部分があり、石積み２裏込めの上方に相当する。この下方は、クチャが母材となったと思われるオリーブ褐色粘土主体となる。つまり、本層は石積み２の裏込めで、それに伴うもしくは以前の造成土と考えられる。トレンチ２では石積み２の根石が確認されており、標高 112.6 mを測る（**図版８－４**）。Ⅳ層の上面が 116.8 mなので、

写真５　石積み１内側堆積状況

約４mに及ぶ造成土と考えられる。出土遺物は少ないが、青花はなく、青磁Ⅳ・Ⅴ類が見られるので、14 世紀～15 世紀前半の時間幅で考えられる。現時点では、陶磁器の最新年代の 15 世紀前半と暫定しておきたい。

クチャ層　地山

トレンチ２より西側に確認された灰オリーブ粘土層である。最も高い位置では、先述した石積み２の根石、その西側のＣ－ 14 において 112.3 mで確認されており、112 m前後が基盤であったと考えられる（**写真６**）。

このクチャ層であるが、トレンチ２・３において褐鉄鉱と思われる薄い明赤褐色土が上下に 40㎝ずれていることが確認され、これは正断層と思われる（**写真 17、図版７－２・８－５**）。この原因としては地震なのかまたは別の要因による地滑りなのかは、今回の調査では断定できなかった。

断層の時期であるが、この部分より北側の根石が徐々に下がり、一番低いところでは 40㎝下がっていることから、石積み２より新しい可能性も考えられる。ただし、後述するように、この北のＺ－ 11 では根石のレベルはまた平坦になっており、根石の積み方も異なっていることから、本来このような地形であった可能性も考えられる。つまり、断層の時期も現時点では断定できない。

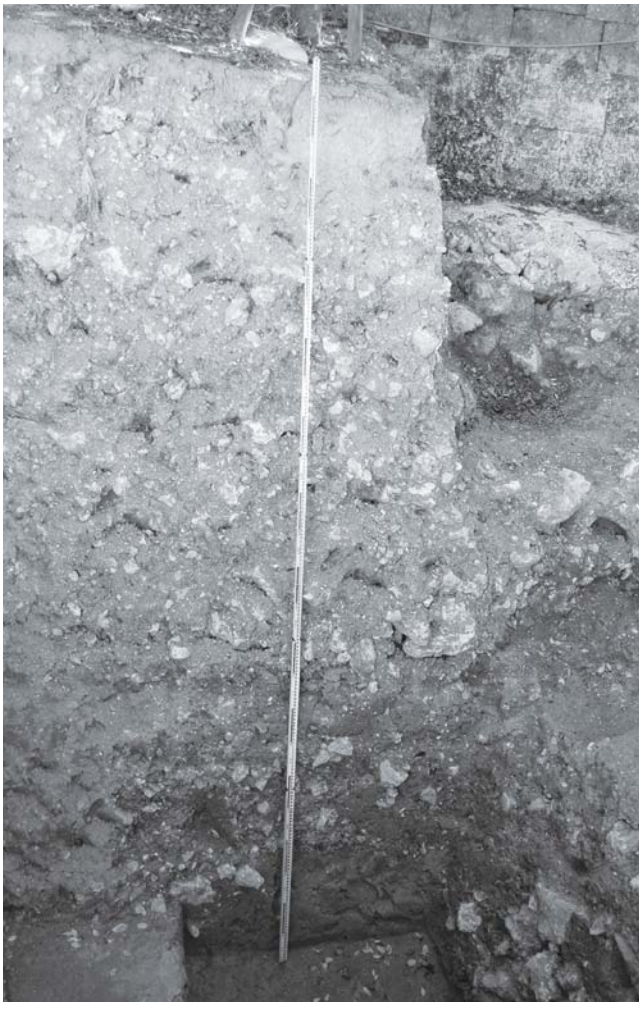
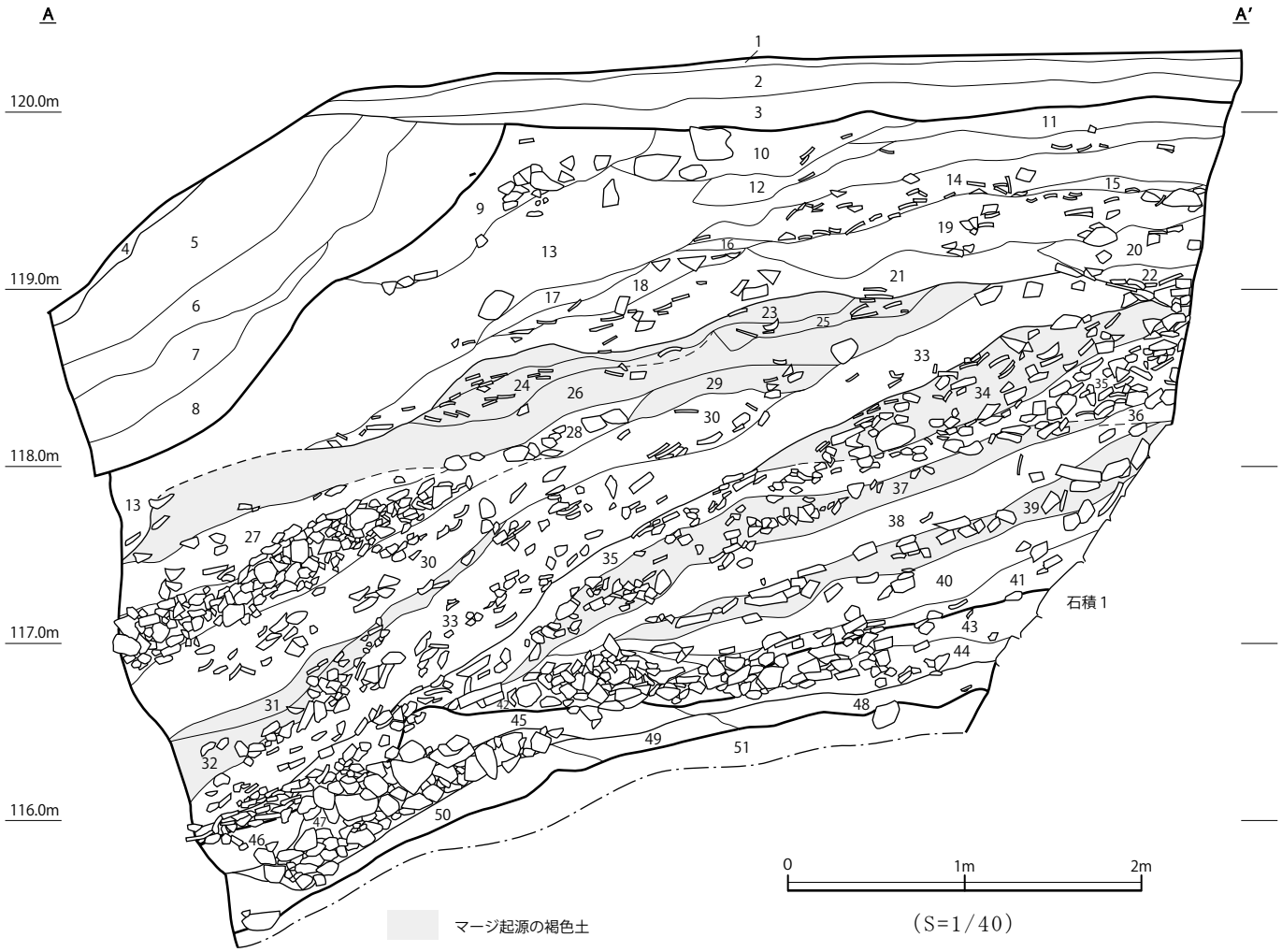
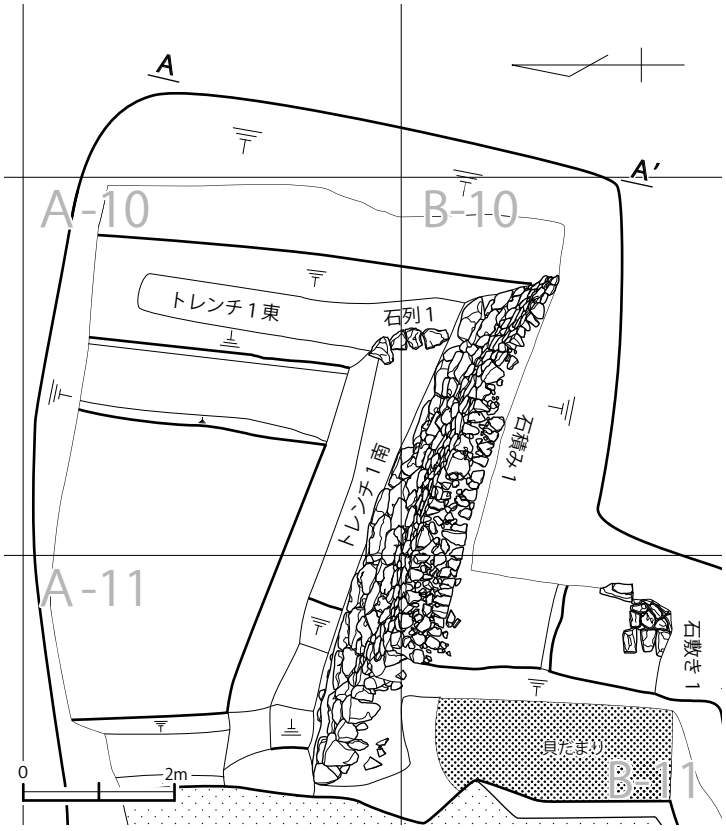


写真６　Ｃ -14 付近堆積状況





第 11 図　トレンチ 1 東壁断面

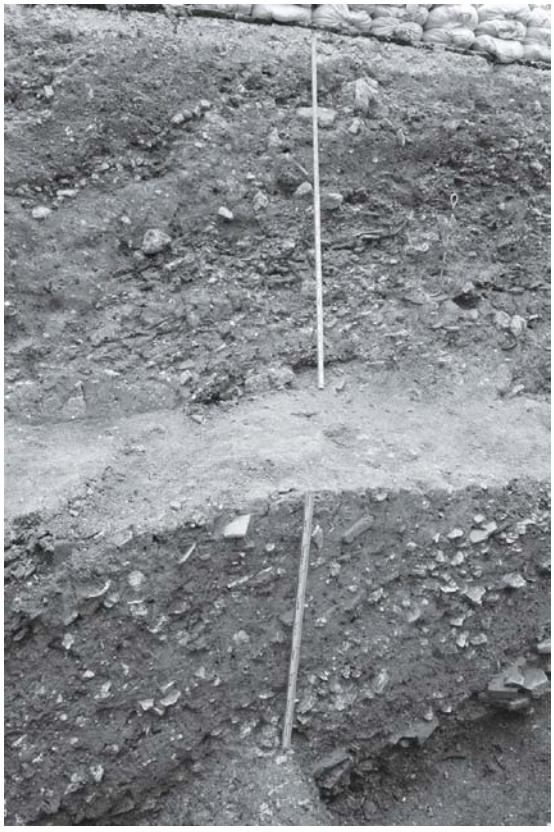


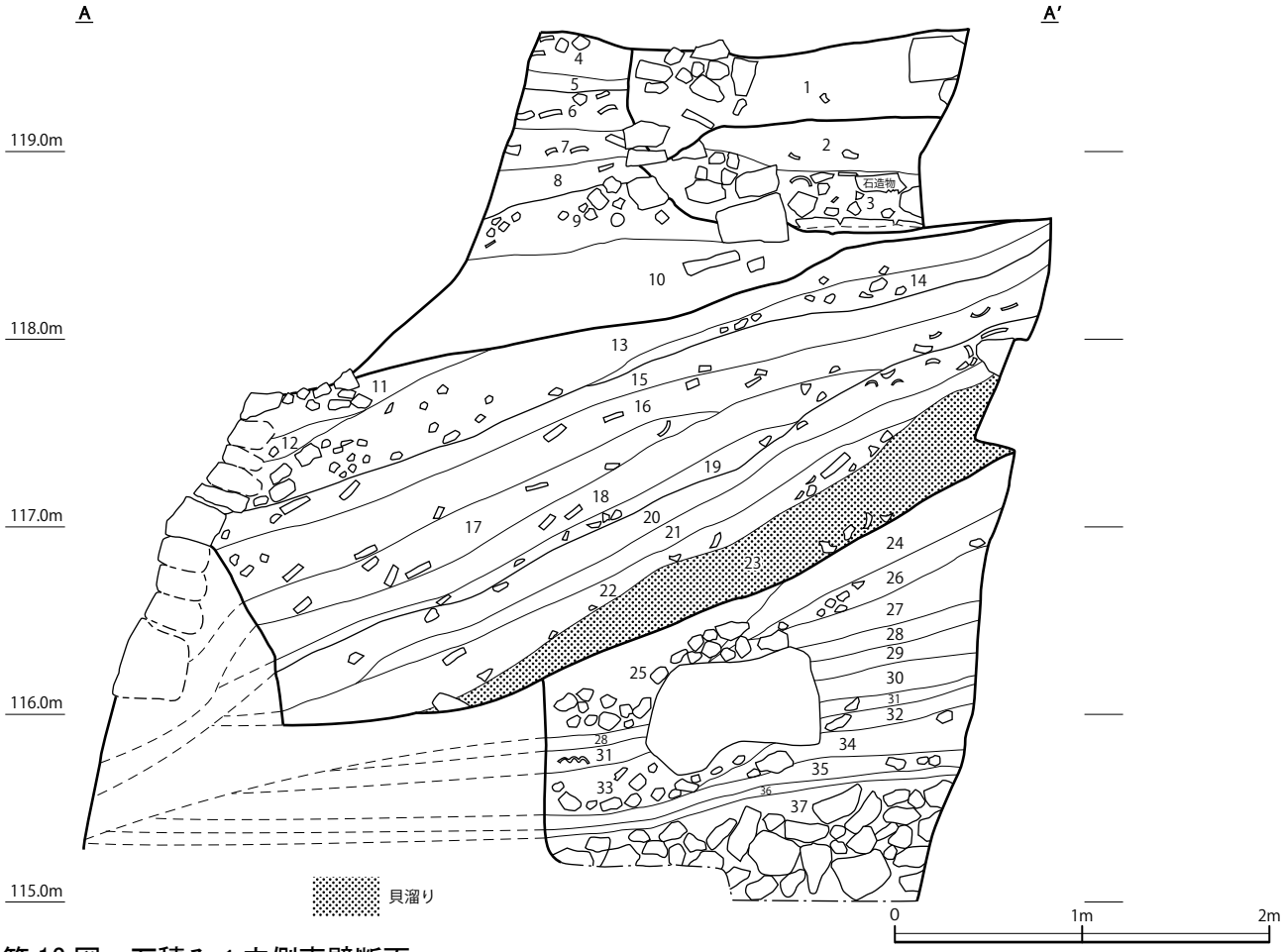
写真 7　トレンチ 1 東壁断面

第２表　トレンチ１東壁土色表

層序	土色No	土色(記号)	土色(色)	土質	混入物など
Ⅰ上層	1	－	－	アスファルト	－
	2	2.5Y8/4	淡黄色	細～中礫	中～粗砂混
	3	2.5Y7/8	黄色	シルト～極細砂	オリーブ褐色2.5Y4/4シルトブロック(クチャに由来？)・細～中礫混
	4	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト～極細砂	細礫混
Ⅰ下層	5	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト～極細砂	にぶい黄色2.5Y6/3シルトブロック(クチャに由来？)・細～中礫混　沖縄産陶器・瓦・釘・貝・ガラス少量含
	6	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト～細砂	にぶい黄色2.5Y6/3シルトブロック(クチャに由来？)・細～大礫混　陶磁器・瓦・貝・ガラス・サンゴ含
	7	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト～細砂	細～中礫多量混　沖縄産陶器・瓦・貝含
	8	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト～細砂	細～中礫混　大～巨礫極少量混　コンクリート片・陶磁器・瓦・鉄釘含
Ⅱ上層	9	10YR4/4	褐色	シルト～細砂	細～大礫混　瓦・鉄釘・ガラス・炭含
	10	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト～細砂	細～巨礫混　沖縄産陶器・瓦含
	11	2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト～細砂	細～中礫混　陶磁器・瓦・貝含
	12	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト～細砂	細～中礫混　貝・サンゴ多量含　瓦含
	13	2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト～極細砂	灰オリーブ5Y5/2シルトブロック・細～大礫混　瓦・貝・ガラス少量含　（南壁7と同一）
	14	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト～中砂	細～中礫多量混　大礫混　瓦・貝・サンゴ・炭含　（南壁8と同一）
	15	2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト～細砂	細～中礫多量混　瓦極少量含
	16	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト～中砂	細礫多量混　中礫混　瓦極少量含
	17	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト～中砂	細礫多量混　中礫混　瓦・サンゴ含
	18	2.5Y4/6	オリーブ褐色	シルト～細砂	細～大礫混　沖縄産陶器・瓦・貝・サンゴ・炭含
	19	2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト～細砂	細～大礫混　瓦・漆喰・貝・炭含　（石積み１内側6・南壁9と同一）
	20	2.5Y3/2	黒褐色	シルト～粗砂	細～中礫多量混　大礫混　瓦・塼・貝・サンゴ含
	21	2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト～細砂	細～中礫多量混　大礫混　瓦・塼・貝・炭含
	22	N1.5	黒色	極細砂（炭層）	瓦・塼多量含　（部分的に被熱の為か、白くなっている）
Ⅱ中層	23	10YR4/6	褐色	粘土～極細砂(マージ)	細～中礫少量混　瓦含
	24	10YR4/6	褐色	粘土～極細砂(マージ)	オリーブ褐色2.5Y4/3シルトブロック・細～中礫混　瓦・漆喰・炭含
	25	10YR4/4	褐色	粘土～極細砂(マージ)	細～中礫混　沖縄産陶器・瓦・貝・炭含
	26	10YR4/6	褐色	粘土～シルト(マージ)	細～中礫少量混　瓦・漆喰含
	27	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト	極細～細砂・細～中礫極少量混　瓦・漆喰少量混
Ⅱ中層	28	2.5Y6/4	にぶい黄色	細～中礫	シルト～細砂ブロック混　陶器・瓦・塼・多量含　貝・炭含
	29	10YR4/4	褐色	シルト～極細砂	粗砂～細礫混　陶磁器・瓦・貝含
	30	2.5Y4/6	オリーブ褐色	シルト～細砂	細～中礫混　Fe(鉄分)斑状混　瓦・漆喰・骨・貝・炭少量含
	31	10YR4/4	褐色	シルト～極細砂	粗砂～細礫混　瓦含
	32	7.5YR4/6	褐色	粘土～シルト	粗砂～中礫多量混　瓦含
	33	2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト～極細砂	細～中礫混　瓦・漆喰多量含　（石積み１内側8・南壁13と同一）
Ⅱ下層	34	7.5YR4/6	褐色	粘土～シルト(マージ)	粗砂～細礫混　瓦・漆喰多量含　炭少量含　（南壁14と同一）
	35	10YR4/6	褐色	シルト～細砂	細～大礫混　骨多量含　瓦・漆喰・炭含　（石積み１内側9・南壁15と同一）
	36	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト～極細砂	細～中礫多量混　炭含　（石積み１内側10・南壁16と同一）
	37	7.5YR6/6	橙色	粘土～シルト(マージ)	細～中礫多量混　陶器・瓦・漆喰・炭含　（南壁17と同一）
	38	10YR4/6	褐色	シルト～細砂	粗砂～細礫多量混　骨・貝・炭含
	39	10YR4/6	褐色	シルト～極細砂	細礫混　瓦・塼・骨・炭多量含
	40	10YR5/4	にぶい黄褐色	極細～細砂	粗砂～細礫多量混　骨・炭多量含　瓦・塼含
	41	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト～細砂	細礫混　瓦・塼・骨・炭含
	42	10YR5/3	にぶい黄褐色	中～大礫	細～粗砂混　瓦・塼含
Ⅲ上層	43	10YR3/3	暗褐色	シルト～極細砂	中～大礫混　陶磁器・塼・骨・貝・炭含
	44	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト～細砂	骨・炭多量含　瓦・塼・貝含
	45	2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト～細砂	細～中礫混　骨・貝・炭含
	46	2.5Y4/6	オリーブ褐色	シルト～細砂	細～中礫多量混　瓦・塼・漆喰・骨・貝・炭含
Ⅲ下層１	47	2.5Y6/6	明黄褐色	中～巨礫	オリーブ褐色2.5Y4/4シルト～極細砂混
	48	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト～細砂	細～中礫混　骨・炭多量混　陶磁器・銭貨極少量含　（南壁18と同一）
Ⅲ下層２	49	10YR4/4	褐色	シルト～極細砂	細～中礫混　岩含
	50	10YR5/6	黄褐色	極細砂～細砂	金雲母多量混　中礫極少量混
Ⅳ層	51	5Y5/3	灰オリーブ	シルト	シルトブロック(クチャを主体)混　（南壁26と同一）

第３表　石積み１内側東壁土色表

層序	土色No	土色(記号)	土色(色)	土質	混入物など
Ⅰ下層	1	10YR4/4	褐色	極細～細砂	細～中礫混　瓦・ガラス・木片含
Ⅰ´層	2	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	細～中礫混　沖縄産陶器・瓦・炭含
	3	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト～細砂	中～大礫混　瓦・石造物含
Ⅱ上層	4	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト～極細砂	中～大礫混　瓦・漆喰・炭含　（南壁4と同一）
	5	10YR5/6	黄褐色	中～粗砂	細礫混(いわゆるコーラルに近い)　（南壁5と同一）
	6	2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト～細砂	細～大礫混　瓦・漆喰・貝・炭含　（東壁19・南壁9と同一）
Ⅱ中層	7	10YR4/4	褐色	シルト～極細砂	細～中礫混　瓦・漆喰・石造物・貝類含　（南壁12と同一）
	8	2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト～極細砂	細～中礫混　瓦・漆喰多量含　（東壁33・南壁13と同一）
Ⅱ下層	9	10YR4/6	褐色	シルト～細砂	細～大礫混　瓦・漆喰・炭含　骨多量含　（東壁35と同一）
	10	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト～極細砂	細～中礫多量混　炭含　（東壁36・南壁16と同一）
石積１内１層	11	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト～極細砂	中～巨礫混　炭含　（石積1の裏込にあたる）
	12	10YR5/6	黄褐色	細～中砂	細～中礫混
	13	10YR6/6	明黄褐色	中～粗砂	細～中礫多量混　7.5YR5/6明褐シルトブロック(マージ？)混
	14	10YR4/6	褐色	シルト～極細砂	7.5YR5/6明褐シルトブロック(マージ？)5mm以下で混　中～大礫混
石積１内２層	15	10YR3/3	暗褐色	細砂	細礫混　瓦・炭・少量含　獣魚骨多量含
	16	10YR5/4	にぶい黄褐色	中～粗砂	細礫混　瓦・塼・貝・獣魚骨含
	17	10YR4/3	にぶい黄褐色	細～中砂	細～中礫混　7.5YR5/6明褐シルトブロック(マージ？)一部混　瓦・塼・獣魚骨含　（南壁19と同一）
	18	10YR3/4	暗褐色	シルト～細砂	細礫混　瓦・塼・貝・獣魚骨少量含
	19	10YR3/3	暗褐色	シルト～極細砂	7.5YR5/6明褐シルトブロック(マージ？)一部混　瓦・塼・貝・獣魚骨多量含　（南壁20と同一）
石積１内３層	20	10YR2/2	黒褐色	シルト～極細砂	瓦・塼・貝・炭・獣漁骨含
	21	10YR2/2	黒褐色	シルト	10YR5/8黄褐色細～中砂混　瓦・塼・貝・炭・獣魚骨含
	22	10YR2/2	黒色	シルト	5Y5/1灰シルトブロック(クチャ)混　陶磁器・瓦・塼・炭・獣魚骨含　貝類は下部に多量含(貝だまりと呼称)
Ⅲ下層（下層２に相当）	23	10YR4/4	褐色	シルト～極細砂	細～中礫混　塼含　貝類・獣魚骨多量含
	24	10YR6/4	にぶい黄橙色	細～中砂	細～中礫多量混　陶磁器・貝類・獣魚骨含
	25	10YR3/3	暗褐色	シルト～細砂	中～巨礫多量混　貝類・獣魚骨多量含　（南壁21と同一）
	26	10YR4/3	にぶい黄褐色	細砂	細～中礫多量混　陶磁器・瓦・貝類・獣魚骨含
	27	10YR4/6	褐色	シルト～極細砂	細～中礫混　炭・獣魚骨少量含
	28	10YR4/4	褐色	シルト	7.5YR5/6明褐シルトブロック多量混　細～中礫混
	29	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト～極細砂	貝類・炭含
	30	2.5Y4/6	オリーブ褐色	粘土～シルト	細～極細砂混　炭含
	31	2.5Y5/4	黄褐色	粘土～シルト	細礫混
	32	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土～シルト	細礫混
	33	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト～極細砂	中～大礫混　陶磁器・瓦・炭・獣魚含
	34	2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト	5Y5/1灰シルトブロック(クチャ)多量混　陶磁器含
	35	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土～シルト	中砂～細礫・大礫混　炭含
	36	10YR6/8	明黄褐色	シルト	シルト～細砂混
Ⅳ層	37	2.5Y6/4	にぶい黄色	粘土～シルト	5Y5/1灰シルトブロック(クチャ)・大～巨礫多量混　（南壁24と同一、石積み２の裏込めの一部か）



第 12 図　石積み１内側東壁断面

写真８　石積み１内側東壁断面

写真９　石積み１内側皿下層堆積状況

第 13 図　石積み１内側東壁位置

第３節　遺構

今回確認された遺構は、石積み４基、石敷き１基、石列１基である（**第 14 図、図版２・５**）。遺構を構成している石は全て琉球石灰岩である。以下、種類ごとに順に述べておく。

１．石積み１（**第 15・16 図、写真 10・11、図版６**）

調査区東側のＢ－ 10・11 において、東西方向に延びる北面する石積みで、長さ 7.2 ｍ検出した。西端は欠損しており、東端は調査区南東に続いており、全容は確認できなかった。根石と上面は残存しており、その高さは 1.6 ～ 1.8 ｍである。幅は西側が 0.6 ｍ、東側に向けてやや狭くなり 0.5 ｍである。石積み１内側の堆積土を確認した東壁を観察すると、上面の南端面に２段ほど積んでいるように見えたが、首里城の多くの石垣のように両面積とはなっていない。

石積みは、平面的に見ると、その軸方向は北から西に 70°で延び、わずかに弧を描くようである。その積み方は、根石に長さ 50 ～ 60㎝、高さ 30 ～ 40㎝のやや長方形の石を用い、東へ向かって８°で高くなる緩やかな傾斜面に置いている。その後３段目、高さ約１ｍまでは、一辺 30 ～ 50㎝の比較的方形に近い石を石の目を埋めるように積んでいる。その後、一辺 15 ～ 25㎝程度の礫を積み、上面には南北端に拳大のさらに小さな石の比較的平坦な面を各々外側に向けて形成し、その内側をさらに細かな礫を埋めている。面石の傾斜は、約 70°である。

先述したように、両面積みの石積みではないので、まず石を置いて南より造成土（石積み内１・２層）を流し込み、それを繰り返したものと考えられる。その際、根石の下の堆積土を断割りしたわけではなく、その左右の堆積状況からの推定であるが、石積み１内２層（**第 12 図**）は根石近くで落ち込んでいることが想定される。つまり、根石を置く際には内側の造成土に段を造ったことが考えられる。そして、上面近くになると、造成土の上面をスロープ状にして、その間に北面の内側に小礫を積み、南面の石を２段程度積んで最終的に埋めている状況

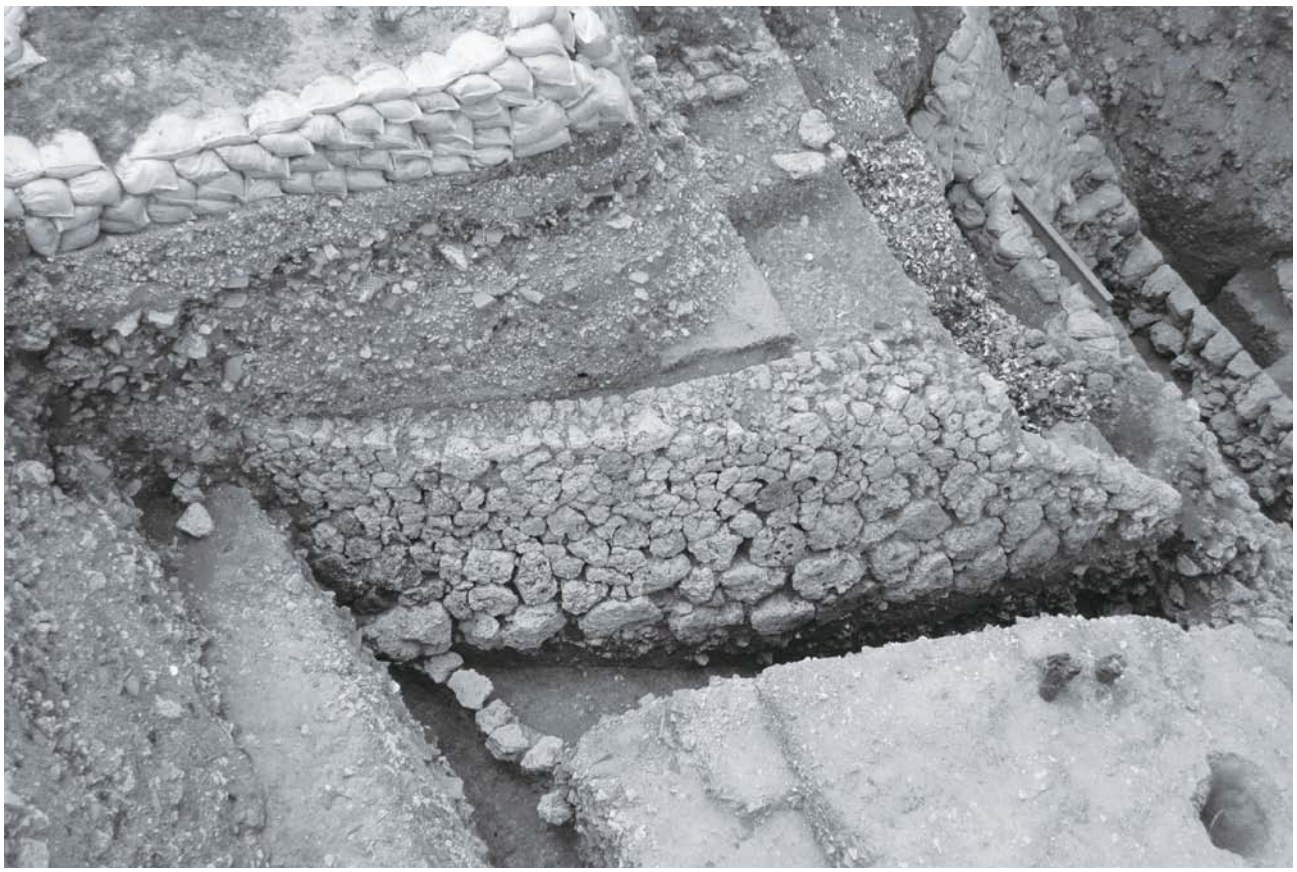
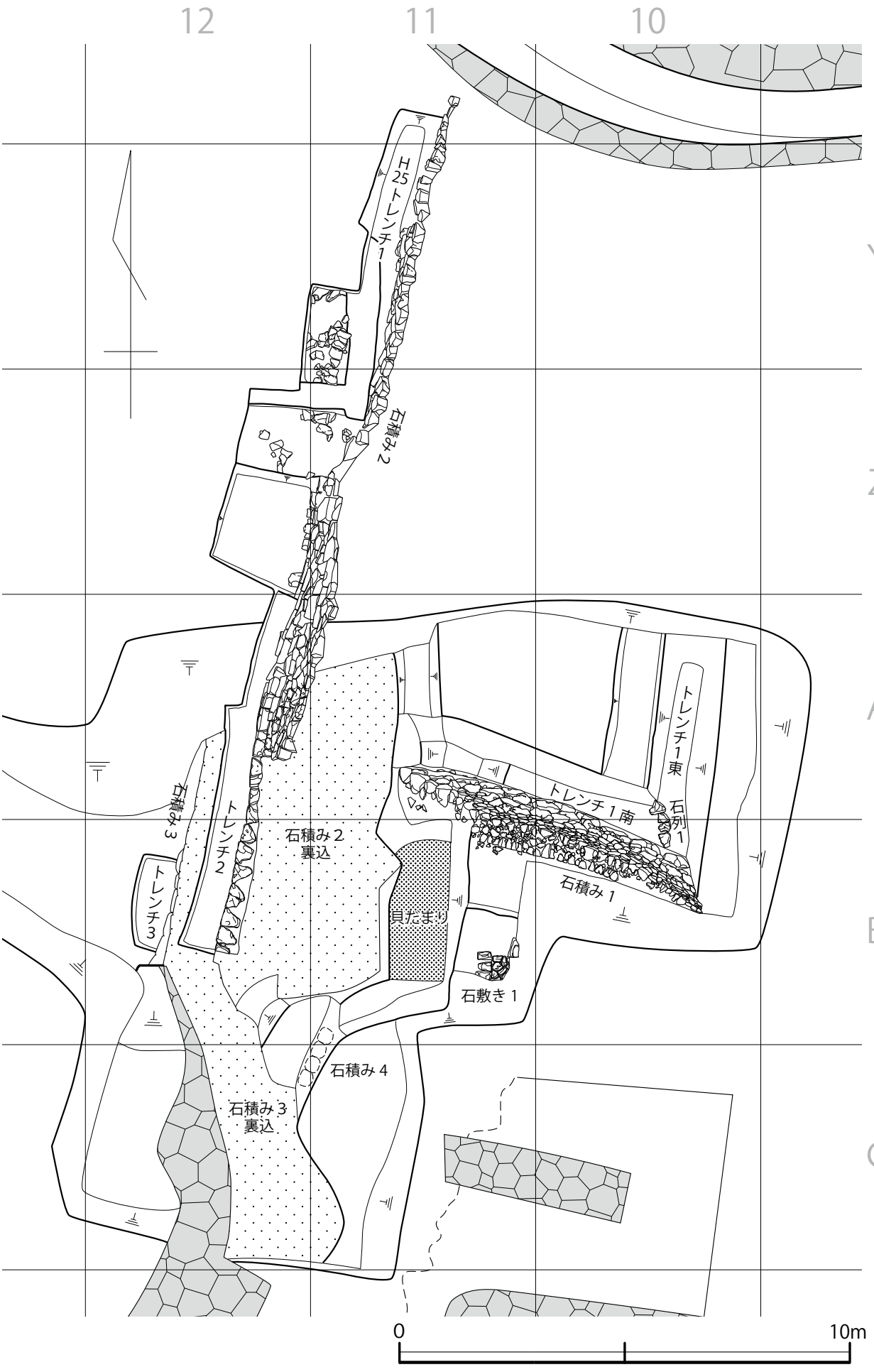
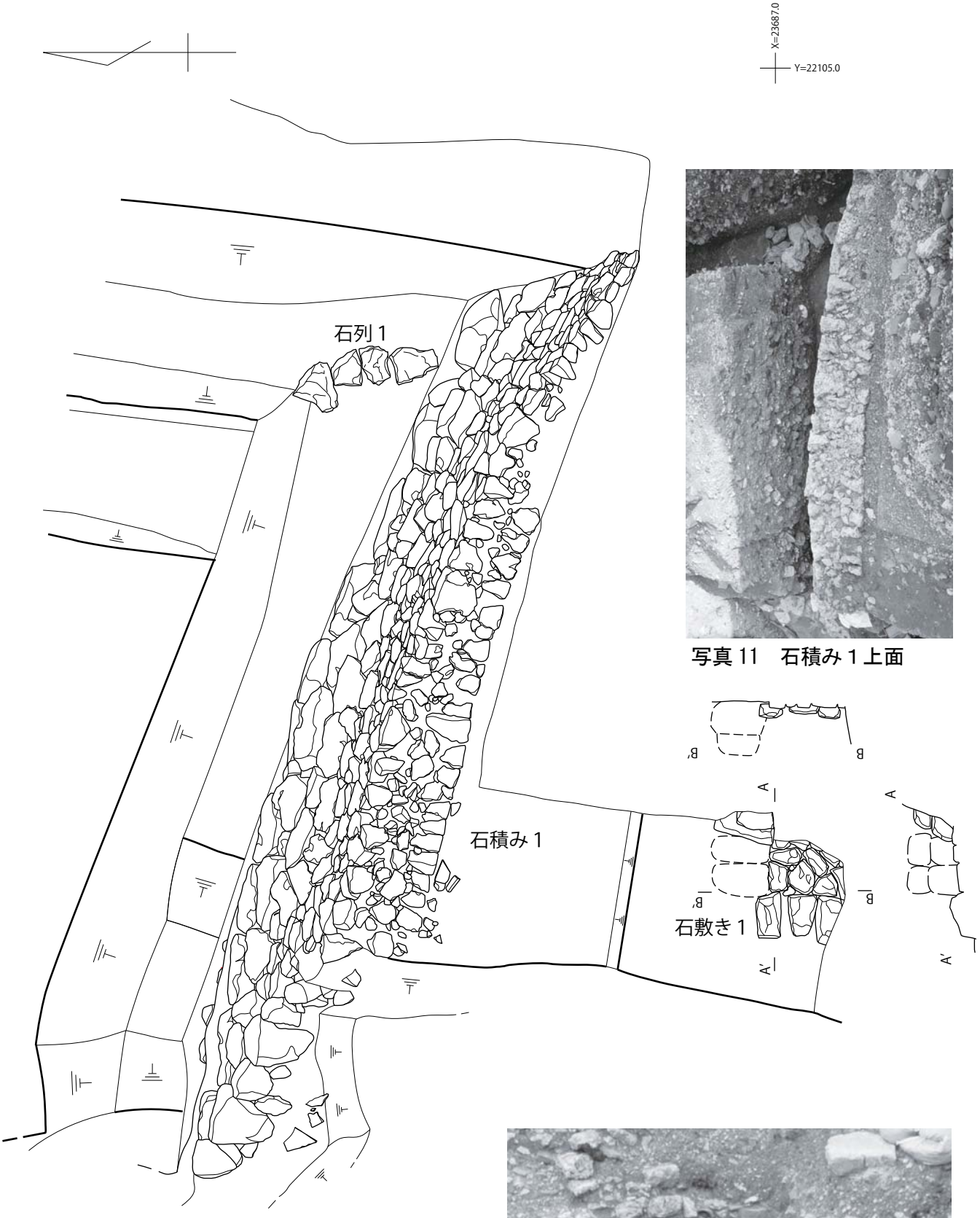


写真 10　石積み１（北より）



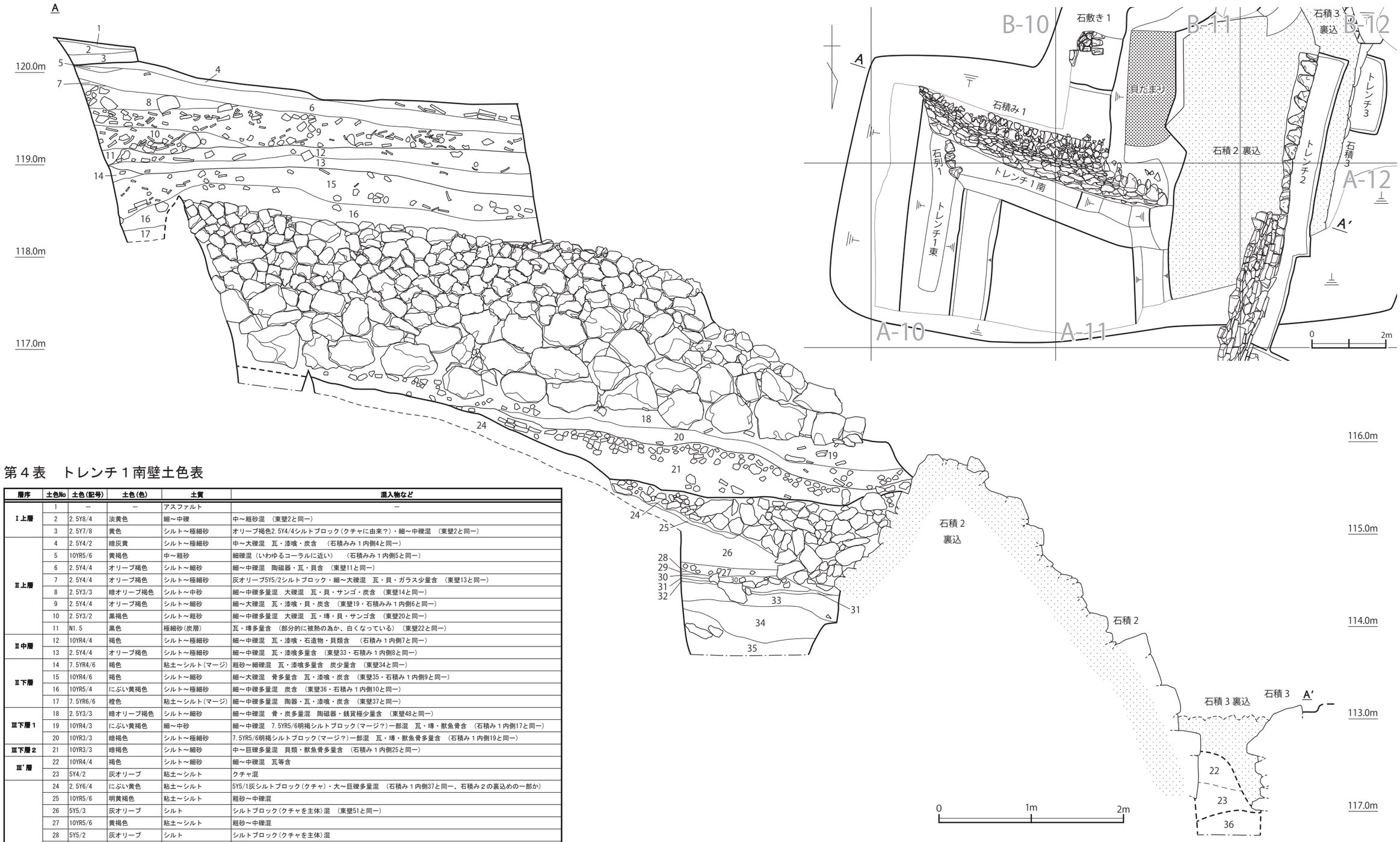
第 14 図　遺構全体平面図



第 15 図　石積み１・石敷き１

写真 11　石積み１上面

写真 12　石敷き１



第16図　トレンチ１南壁断面

第４表　トレンチ１南壁土色表

層序	土色No	土色(記号)	土色(色)	土質	混入物など
Ⅰ上層	1	―	―	アスファルト	―
	2	2.5Y8/4	淡黄色	細～中礫	中～粗砂混　(東壁2と同一)
	3	2.5Y7/8	黄色	シルト～極細砂	オリーブ褐色2.5Y4/4シルトブロック(クチャに由来?)・細～中礫混　(東壁2と同一)
Ⅱ上層	4	2.5Y4/2	暗灰黄	シルト～極細砂	中～大礫混　瓦・漆喰・炭含　(石積みみ１内側4と同一)
	5	10YR5/6	黄褐色	中～粗砂	細礫混(いわゆるコーラルに近い)　(石積みみ１内側5と同一)
	6	2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト～細砂	細～中礫混　陶磁器・瓦・貝含　(東壁11と同一)
	7	2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト～極細砂	灰オリーブ5Y5/2シルトブロック・細～大礫混　瓦・貝・ガラス少量含　(東壁13と同一)
	8	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト～中砂	細～中礫多量混　大礫混　瓦・貝・サンゴ・炭含　(東壁14と同一)
	9	2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト～細砂	細～大礫混　瓦・漆喰・貝・炭含　(東壁19・石積みみ１内側6と同一)
	10	2.5Y3/2	黒褐色	シルト～細砂	細～中礫多量混　大礫混　瓦・塼・貝・サンゴ含　(東壁20と同一)
	11	N1.5	黒色	極細砂(炭層)	瓦・塼多量含　(部分的に被熱のみあか、白くなっている)　(東壁22と同一)
Ⅱ中層	12	10YR4/4	褐色	シルト～極細砂	細～中礫混　瓦・漆喰・石造物・貝類含　(石積み１内側7と同一)
	13	2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト～極細砂	細～中礫混　瓦・漆喰多量含　(東壁33・石積み１内側8と同一)
Ⅱ下層	14	7.5YR4/6	褐色	粘土～シルト(マージ)	粗砂～細礫混　瓦・漆喰多量含　炭少量含　(東壁34と同一)
	15	10YR4/6	褐色	シルト～細砂	細～大礫混　骨多量含　瓦・漆喰・炭含　(東壁35・石積み１内側9と同一)
	16	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト～極細砂	細～中礫多量混　炭含　(東壁36・石積み１内側10と同一)
	17	7.5YR6/6	橙色	粘土～シルト(マージ)	細～中礫多量混　陶器・瓦・漆喰・炭含　(東壁37と同一)
Ⅲ下層１	18	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト～細砂	細～中礫混　骨・炭多量混　陶磁器・銭貨極少量含　(東壁48と同一)
	19	10YR4/3	にぶい黄褐色	細～中砂	細～中礫混　7.5YR5/6明褐シルトブロック(マージ?)一部混　瓦・塼・獣魚骨含　(石積み１内側17と同一)
	20	10YR3/3	暗褐色	シルト～極細砂	7.5YR5/6明褐シルトブロック(マージ?)一部混　瓦・塼・獣魚骨多量含　(石積み１内側19と同一)
Ⅲ下層２	21	10YR3/3	暗褐色	シルト～細砂	中～巨礫多量混　貝類・獣魚骨多量含　(石積み１内側25と同一)
Ⅲ'層	22	10YR4/4	褐色	シルト～細砂	細～中礫混　瓦等含
	23	5Y4/2	灰オリーブ	粘土～シルト	クチャ混
Ⅳ層	24	2.5Y6/4	にぶい黄色	粘土～シルト	5Y5/1灰シルトブロック(クチャ)・大～巨礫多量混　(石積み１内側37と同一、石積み２の裏込めの一部か)
	25	10YR5/6	明黄褐色	粘土～シルト	粗砂～中礫混
	26	5Y5/3	灰オリーブ	シルト	シルトブロック(クチャを主体)混　(東壁51と同一)
	27	10YR5/6	黄褐色	粘土～シルト	粗砂～中礫混
	28	5Y5/2	灰オリーブ	シルト	シルトブロック(クチャを主体)混
	29	2.5Y4/4	オリーブ褐色	粘土～シルト	金粉沈着
	30	2.5Y5/4	にぶい黄色	粘土～シルト	7.5YR5/8明褐シルトブロック(マージ?)少量混
	31	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土～シルト	7.5YR5/8明褐シルトブロック(マージ?)混
	32	10YR6/8	明黄褐色	粘土～シルト	5Y6/2灰オリーブシルトブロック(クチャ)混
	33	2.5Y4/4	オリーブ褐色	粘土～シルト	5Y5/2灰オリーブシルトブロック(クチャ)多量混　青磁含
	34	2.5Y5/3	オリーブ褐色	粘土～シルト	5Y5/2灰オリーブシルトブロック多量混
	35	2.5Y4/6	オリーブ褐色	粘土～シルト	7.5YR5/8明褐シルトブロック(マージ)・5Y5/2灰オリーブシルトブロック多量混　炭含
Ⅴ層	36	5Y5/1	灰色	シルト	シルトブロック(クチャを主体)混

が確認できた。

前節でも説明したが、石積み１内２層の下には、貝だまりを含む３層と、Ⅲ下層２に相当する非常に細かく積まれた土層が見られ、その下面は石積み２の裏込めとなっている（**写真９・図版 15 －６**）。石積み１内側に直接堆積する１・２層と共に、その下層も遺物では時期差がないために、石積み１を構築する際にかなり入念な地拵えを行ったものと考えたい。なお、後述するが、石積み１東端の下面より北に伸びる石列１が見られるが、本遺構との関連は明確にできなかった（**写真 18 －３**）。

最後に石積み１の時期であるが、それより古い石積み１～３層・Ⅲ下層は遺物から 16 世紀前半が下限であるので、これ以降に構築されたのは確かであろう。そして、17 世紀後半と考えられるⅡ層によって完全に埋没しており、この時期までは石積み１は露頭していたものと考えられる。

２．石積み２（第 18 図、写真 13 ～ 17、図版７・８・15・16）

調査区西側のＹ・Ｚ－ 11、Ａ・Ｂ－ 11・12 で確認された南北方向に延びる西面する石積みで、長さ 20 ｍ検出した。北端は、平成 13 年度調査で外郭城壁に接していることが確認されている。南端は、右掖門からの復元城壁に当たるため、調査が行えていない。

この石積み２は、南半に当たるＢ－ 11 からＺ－ 11 まで長さ 11 ｍの部分については、根石から残存部分の最高９段目まで一連のものとして確認されている。一方、北半のＹ－ 11 では排水管などのパイプや、琉球大学の校舎の基礎と思われるコンクリートなどの埋設により攪乱を受けており、この部分で石積みが一部途切れてしまっている。そして、その地点からの石積みの面石は 0.6 ｍ北側にずれているのである。また、石の積み方であるが、南半は根石から２～３段程度を長さ 40 ～ 60㎝、高さ 20 ～ 40㎝の長方形もしくは方形の切石を概ね水平及びほぼ垂直に積むいわゆる布積みとし、その上方は一辺 20 ～ 40㎝のやや不整形の石を組み合わせるように約 70°で積んでいる。北半は、南半の根石に当たるレベルでも南半の上方のような積み方となっている。この

写真 13　石積み２

ように北半と南半では時期差がある可能性も考えられる。

ただ、部分的に掘り下げたトレンチ２および平成 25 年度トレンチ１においては、根石のレベルが徐々に低くなって 0.8 ｍほど下がり、根石が切石ではなく 20㎝ほどの不整形な礫で積まれた範囲がある。この範囲では、クチャ層を段々状に掘り下げ、根石付近でさらに掘り下げ一番深いところでは 70㎝となっている。つまり、根石のこの部分は据えた後にすぐに埋めることで、南側の地面と揃えたものと考えられる。この埋土とその上層の根石外側の堆積土は、遺物では時期差がなく 15 世紀後半と考えられるⅢ´層にあたる。南半のＢ－ 11 の根石外側は、その前面のトレンチ２においては、やはりⅢ´層であった。一方、北半の根石はその下層を掘削していないため確認されていない状態であるので、南半と北半の違いが時期差かどうかは現状では確定できない。

Ａ－ 11 では、石積み２の内側に 10 ～ 20㎝程の礫の裏込めが確認されており、その最高所は 115.8 ｍとなり、この付近の根石は 112 ｍ前後なので、その高さは４ｍ以上あったことが想定される。しかし、この裏込めの東端はトレンチ１に掛かり、Ⅲ下層に覆われており、その下面はⅣ層である。つまり、石積み２はⅣ層による造成と共に造られたものと考えられる。そして、先述した石積み２構築後に、その根石下端にⅢ´層が堆積したものと思われ、この時には確実に石積みが機能したことになる。ただ、先述した石積み１との関係については、石積み１西端が欠損しており、今回は明確にできなかった。

３．石積み３

調査前に存在していた南北方向の西面する石積みで、北半が琉球大学時代のもので、その南半が右掖門付近の整備時に復元されたものとなっている（**写真 18 －１・４**）。琉球大学時代のものは、長さ 20 ～ 40㎝程度の方形の石をそのまま上に積み重ねていく形となっている。復元したものは、器面がほとんど凹みがないほどに仕上げられた長さ 60 ～ 80㎝の非常に大きな石を互い違いに積んでいる。どちらとも裏込めは、10 ～ 20㎝程度の礫を１ｍ程度の幅で積まれている（**図版８－１**）。なお、石積み３前面にトレンチ１を設定し、先述した断層が見られるクチャ層の上にほぼ水平で置かれていた（**図版８－５**）。

４．石積み４

重機掘削時に確認した一辺 40㎝の方形の切石が２段、長さ２ｍに亘って確認された南北方向で西面する石積みである（**写真 18 －２**）。石積み３とほぼ並行するが、石積み３の裏込めを外しⅠ´層とした盛土を外した２ｍほど東側で確認された。先述したように、記録前にすべて崩れ落ちてしまい、その地点は安全面のためⅢ層下部あたりまで掘削してしまっているので、詳細は不明である。

５．石敷き１

Ｂ－ 11 で部分的に検出された石敷きである（**第 15 図、写真 12**）。厚さ５㎝、10 ～ 20㎝程度の不整形な平石を敷き詰め、縁には現状では長さ 20 ～ 40㎝の長方形の石を２段積まれた西壁しか確認されていないが、北壁も同様にあったものと思われる。この部分はコーナー部分と考えられ、本来は未調査である南と東に続いていたものと思われる。壁面の石はⅡ層内に構築され、石敷きの上層はⅠ´層が堆積している（**第 12 図**）。つまり、Ⅱ層造成時に構築された可能性も考えられ、Ⅰ´層の時期である 18 世紀～戦前にあったものと考えられる。

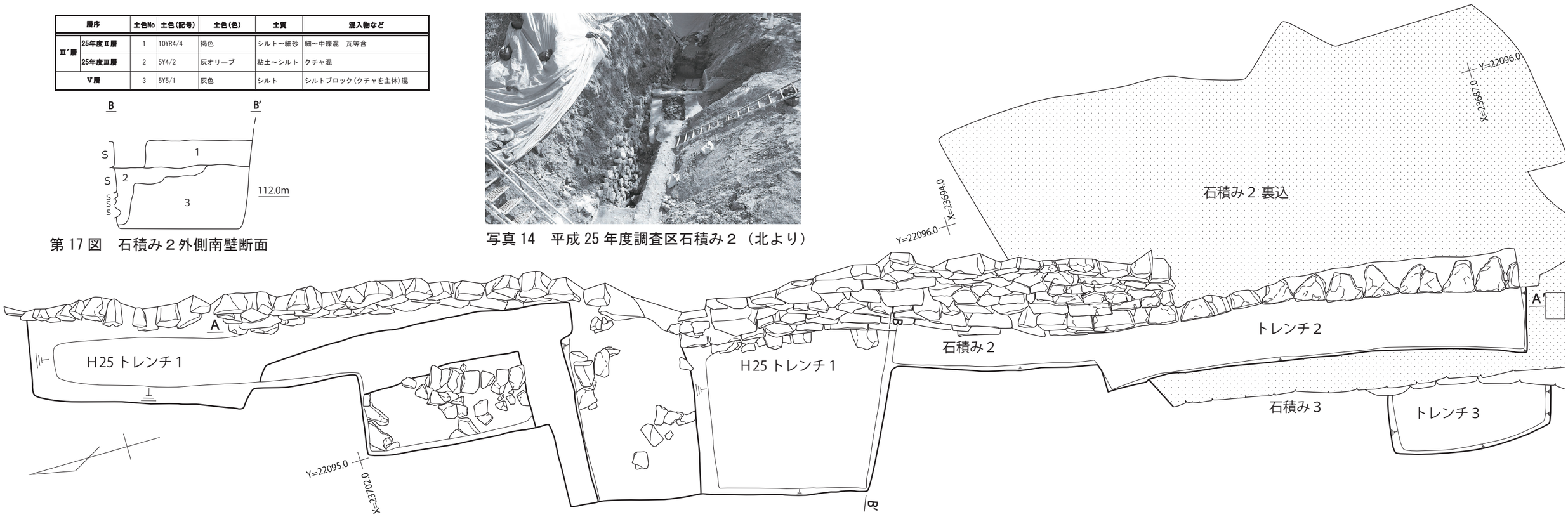
６．石列１

石積み１東端の下面から北へ延びる石列である（**第 15 図、写真 18 －３**）。石は長さ 20 ～ 30㎝の不整形な石を平坦な面を底にして置いている。石は、ほぼⅣ層直上に見られるが、石積み１の根石に接するように置いているので、同時期の可能性もあるが、その関係は明確にできなかった。

層序		土色No	土色(記号)	土色(色)	土質	混入物など
Ⅲ´層	25年度Ⅱ層	1	10YR4/4	褐色	シルト～細砂	細～中礫混　瓦等含
	25年度Ⅲ層	2	5Y4/2	灰オリーブ	粘土～シルト	クチャ混
Ⅴ層		3	5Y5/1	灰色	シルト	シルトブロック(クチャを主体)混

第 17 図　石積み２外側南壁断面

写真 14　平成 25 年度調査区石積み２（北より）



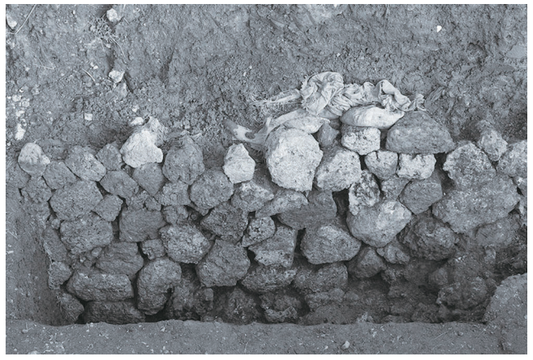
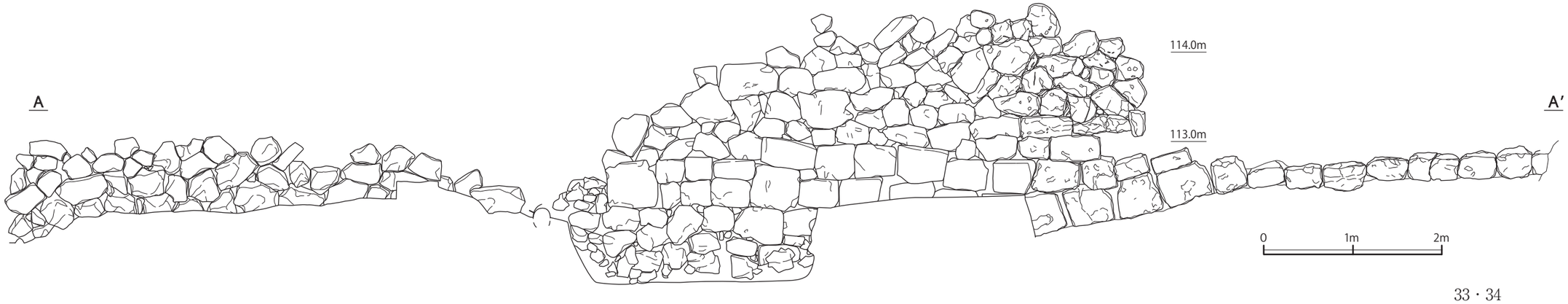


写真 15　石積み２北側

写真 16　石積み２中央

写真 17　石積み２南側クチャ層断層



第 18 図　石積み２

１．石積み３　調査前

２．石積み４

３．石列１

４．石積み３裏込め

写真 18　石積み３・４　石列１

第４節　遺物

遺物の種類としては、中国・ベトナム・タイ・韓半島、本土産の各陶磁器、沖縄産陶器、近代陶磁器、土器、瓦、塼、金属・骨・貝・石等の製品、玉類、貝類遺体、脊椎動物遺体、炭化物が出土している。最も出土数が多いのは瓦・塼、陶磁器では中国産が最も多い。なお、石積み１内３層では、炭化物が多く含んだ黒色土であったが、土壌を水洗した結果、千田寛之の指導を受け特定できたのはイネ３点のみであった（**第 45 表**）。

今回の遺物は、原則的にⅠ層、Ⅰ´層、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅲ´層、Ⅳ層ごとに報告する。Ⅱ・Ⅲ層についてはさらに細分されているが、時期幅としては明確な違いを見つけがたい。しかしながら、遺物量や組成に違いがある傾向が認められたので、細分した層ごとにそれぞれ分けて報告した。また、石積み１内３層で主に出土した含真珠層貝殻破片は、特徴的であるので本節９で別に記載している。

遺物数は原則的に破片の点数を数え、遺物の大種別ごと（**第５表**）、各遺物（**第６～ 46 表**）を作成している。これらの集計表においては、グリッドごとではなく、平成 23 年度調査区については 13 ラインを境に西区と東区、Ｚラインより北側を平成 25 年度調査区として分けた（**第８図**）。また、異なった層序で接合した遺物は、下層の項でカウントしている。1cm 以下の破片は個数を集計していないが、種類が分かるものについては重量を量り、**第５表**に加算している。

以下、各遺物の概要・分類を述べてから、各地区及び層序の様相を掲載した遺物を中心に説明する。なお、（数字）の表記は遺物番号であり、本報告書において全体での連番としている。

１．遺物の概要・分類

本項では、別項で記述した貝製品・含真珠層貝殻加工破片以外の遺物について、その概要と分類について説明する。なお、個別の特徴は観察表（**第 47 ～ 77・88 表**）を参照されたい。

①中国産陶磁器

中国産陶磁器には、主体的なものとして青磁・白磁・青花・褐釉陶器、少数なものとしては色絵・瑠璃釉などが見られる。以下、種類ごとに説明する。

１）青磁

総破片 1,838 点を数える（**第６表**）。碗・皿については、分類記号は（瀬戸・仁王・玉城・宮城・安座間・松原 2007・瀬戸 2015）に基づいているが、碗Ⅵ類では更に細分を行い、皿は文様ではなく形態による分類を行った。それ以外の器形については、個別に説明する。

碗　Ⅱ～Ⅶ類が出土しており、そのうちⅥ類が多く出土している。

Ⅱ類　鎬連弁文碗。高台断面が四角形でやや厚く、外底面及び畳付は露胎となる（1）。

Ⅲ類　高台は小さく、断面が三角形となり端部が釉剥ぎされる。釉は厚く、ガラス質の青緑色。連弁文を施すⅢ－１類がある（3）。

Ⅳ類　外底面が露胎するもので、高台断面が台形状となる。素地は軟質で、釉は失透明のオリーブ灰色で薄い。底部のみの出土のため、文様による細分は行っていない（４～６・538・667・762）。これらの多くは、Ⅳ類の中でも粗雑でやや小ぶりの傾向がある新相のものであるが、（762）は大振りで精良であるため、古相の可能性がある（瀬戸 2014）。また、（６）は底部・高台の形はⅣ類であるが、見込みが渦巻き状になっているなど、より後出する可能性もある。

Ⅴ類　底部を釉剥ぎするものが主体で、底部は全体的に重厚で、釉が厚いことが特徴である。釉は緑色が強く、素地も白色で硬質である。外面文様で、０類（無文）、１類（蓮弁）、２類（横帯文）、３類（その他の文様）

第５表　遺物全体集計表

種類／層序	Ⅰ				Ⅰ′	Ⅱ				Ⅲ											Ⅲ′		Ⅳ	合計	重量（kg）
	H23東	H23西	H23不明	H25	H23東	H23東				H23東											H23東	H25	H23東		
	表土・盛土				石敷・裏込	Ⅱ	Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ	Ⅲ上	石積1内1	石積1内2	石積1内3	石積1内3貝	石積1内不明	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2	トレンチ2	Ⅱ・Ⅲ	Ⅳ		
中国産青磁	482	32	88	67	25	3	11	174	248	1	70	13	82	190	49	2	147	84	54	9	2	5	1,838	29.010
中国産白磁	80	5	20	2	4		14	96	53		12	2	10	14	4		12	3	3				334	3.410
中国産青花	246	36	39	18	13		11	172	138		48	1	15	17	5		37	13	6	1	3		819	5.169
中国産褐釉陶器	1,269	110	232	869	73		36	204	285	2	96	37	123	877	107		294	210	141	67	65	2	5,099	125.391
中国産その他の陶磁器	52	7	5	2			2	9	11		4		2	42	3	3	6	2	4				154	1.529
タイ産褐釉陶器	253	18	37	220	11			52	74		26	9	30	186	24	1	69	37	26	7	13		1,093	45.708
タイ産土器			1	12					2		2		1	2	1		4	2		1	4		32	0.444
ベトナム産色絵	2														1			1					4	0.020
ベトナム産青花	3			1				2	2					3									11	0.089
ベトナム産白磁	1							1			1				3		2	2	1				11	0.144
ミャンマー産褐釉	1																						1	0.077
韓半島産青磁	2		1								1			1				1					6	0.094
カムィヤキ	1																						1	0.024
本土産近代陶磁器	253	35	25	12				3	3		1			1	2		2	1					338	2.692
本土産陶磁器	59	1	8	12	2		2	15	6		1						1	1					108	1.879
沖縄産施釉陶器	531	79	41	13	9		11	28	18		2	1		3	3		2	3	1	4			749	8.156
沖縄産無釉陶器	214	42	33	34	7	1	11	14	4				2	11			4	2	1		1		381	16.028
瓦質土器	3						1	1	2		6			3	1		5	1					23	7.178
陶質土器	111	6	14	6	1		3	6	3			1	2	1	1			1					156	1.171
土器	16	5	1	6					1		2			3	1		3	3	1	1	1	1	45	0.287
土製品											1				1								2	0.031
産地不明陶器	31	1	8	18	2			7	9		7	1	2	11	6		22	12	31	1			169	2.138
陶磁器　小計	**3,610**	**377**	**553**	**1,292**	**147**	**4**	**102**	**784**	**859**	**3**	**280**	**65**	**269**	**1,365**	**212**	**6**	**610**	**379**	**269**	**91**	**89**	**8**	**11,374**	**250.669**
陶磁器　合計	**5,832**				**147**	**1,749**				**3,458**										**180**		**8**		
ガラス玉			20		4		1	23	22		5		11	23	37		16		1			16	179	0.012
ガラス製品	2				1									1									4	0.039
プラスティック製品		1																					1	0.003
石材　（重量のみ）																							0	2.447
石製品	13							4				1	9	13	3		3	2	2				50	1.466
石造製品	1	2	1		1			3	1		1		4	5	1		1						21	6.974
ふいご														1									1	0.047
るつぼ	1													4									5	0.107
煙管	1																						1	0.002
漆							1		1					1									3	0.001
漆喰製品	1							1	3				1	2			1		1				10	3.447
銭貨（鉄銭）込み	86	1	7	7	6		11	55	60		21	1	10	11	7		51	3	15				352	0.400
金属製品	190	8	11	52	9	4	4	89	98		11	5	213	1,580	595		111	42	29	39	28		3,118	78.549
金属小片（重量のみ）																							—	1.754
円盤状製品	130	23	14	17	4		3	28	27		10		8	96	14	1	13	16	10				414	4.628
骨製品		5				1		2	5								2	1	1				17	0.043
塼	34	3	21	39	2		3	188	122	6	46		114	98	61		76	30			4		847	497.606
明朝系瓦（軒丸・軒平）	110	3	9	6	1		5	105	50		12		2		2		17	2	1	2			327	27.328
明朝系瓦（平・丸・他）	308	53	18	119	12		3	1,292	465	6	101	2	115	62	13	1	161	10	3	2	1		2,747	395.274
高麗系瓦	11	5		4			2		1								1						24	2.550
大和系瓦	20	4	2	8				2	1		1			2	1		2	1				1	45	2.995
貝製品	11		1	2	1			2	12				3	19	8		9	3	5				76	0.818
貝小片	3			21					1			1	110	617	4,519		1						5,273	12.604
炭化物　（重量のみ）																							—	2.923
イネ													1	2									3	0.001
陶磁器他　小計	**922**	**108**	**104**	**275**	**41**	**5**	**33**	**1,794**	**869**	**12**	**208**	**10**	**601**	**2,537**	**5,261**	**2**	**465**	**110**	**68**	**43**	**33**	**17**	**13,518**	**1,042.016**
陶磁器他　合計	**1,409**				**41**	**2,701**				**9,274**										**76**		**17**		
全体　小計	**4,532**	**485**	**657**	**1,567**	**188**	**9**	**135**	**2,578**	**1,728**	**15**	**488**	**75**	**869**	**3,900**	**5,474**	**8**	**1,075**	**489**	**337**	**134**	**122**	**25**	**24,892**	**1,292.685**
全体　総計	**7,241**				**188**	**4,450**				**12,733**										**256**		**25**		

がある。口縁がないものは、細分類では特定できない（7）。

Ⅴ－0類　今回は口縁が直口し、口縁部下に圏線が施されるもの（750）、外反碗（12）が出土している。

Ⅴ－1類　外面に蓮弁文を描くもの（2・10・11・15・463）。弁先は先が細くなるもの（2）、剣先となるもの (15) がある。

Ⅴ－2類　外面に横帯文を施すもの（533・661・662・748・749）。今回は雷文のみのもの (533)、胴部にヘラ描きの連弁文（662・748）やラマ式連弁文（661）を施すものがある。

Ⅴ－3類　その他の文様を施すもの。（13）は直口口縁で、外面に唐草文及び草花文が、内面に四方襷文及び唐草文が施されている。（14）は外反口縁で、外面に唐草文及び花弁文が、内面に雷文及びヘラ描きの草花文が施されている。

Ⅵ類　底部が小型化し厚みが増すもので、器壁や釉はⅤ類よりも薄い。外面文様は、0類（無文）、1類（蓮弁文）、2類（横帯文）で、2類は見られなかった。今回器形や底部の抉り、施釉方法からⅥａ類とⅥｂ類に細分を行った。

Ⅵａ類　釉は高台まで掛かるもので多くは外底面を釉剥ぎしており、高台の抉りが深いもの。器高及び腰が高く、口径が狭いものが多い。底部のみで文様による細分できないものがある（540・541）。

Ⅵａ－0類　外面が無文のもの（232・531・532・539・666・668）。口縁部が直口のものが多く、口縁部下部に一条または二条の圏線を施すものがある（532・666）。

Ⅵａ－1類　外面に線刻連弁文を描くもの（243・355・534・535・663・665）。花弁の幅が狭く、弁先が揃うものもある（535・663）。

Ⅵｂ類　外底が露胎または高台外面途中までしか施釉されず、高台の抉りが浅めのもの。器高が低く、口径も広くなり扁平状となるものが多い。底部のみで文様による細分できないものがある（247・248・357・359・465・664）。

Ⅵｂ－0類　外面が無文で、ロクロ目が顕著となり、焼成不良で釉調がオリーブ褐色や暗オリーブ色となるものが多くみられる。（246・358・360・503）。

Ⅵｂ－1類　外面に線刻連弁文を描くもので、弁先が揃わないものやないものなど粗雑な傾向である（244・245・356・504・536）。（367）は弁先が2重となっており、あまり見られないものである。

Ⅶ類　釉調は白磁に近くガラス質で、高台はⅥ類より広く「ハ」の字に開き、断面は三角形となるもの。外底面は露胎し、なかには胴部途中までしか施釉されないものもある。外面文様は、0類 (無釉)、1類 (連弁)、2類 (波状文・波濤文) がある。底部のみで文様による細分できないものがある（464）。

Ⅶ－0類　外面が無文で、口縁部は直口で、器高が低くなりⅥｂ類よりも扁平となる（249・251）。

Ⅶ－1類　外面に線刻連弁文を描くもので、蓮弁の幅は広いが、細く不鮮明となる（17・252・361）。

Ⅶ－2類　外面に波濤文または波状文（16・250・362・363・366）や簡略化された雷文（365）を描くもの。波濤文の下に弁先が省略された線刻連弁文が描かれるものもある（364）。

幅広高台タイプ　底部の畳付けの幅が広く平坦となり、端部が面取りされるのが特徴となり、典型的な龍泉窯のものではない印象がある（瀬戸 2014）。透明感がない深緑色の釉が外面高台途中まで施釉され、見込みは蛇の目釉剥ぎとなる。胴部はロクロ目が顕著で、腰より直線的に広がり、口縁部は直口（18）またはやや外反（233）となる。

Ⅲ　Ⅲ～Ⅵ類が確認されており、Ⅵ類が最も多い。また輪花皿については分類を行わず特徴を記載した。釉・素地などは碗と同様の特徴を示しており、説明を略する。なお、Ⅲの細分類については小片が多く、相当させるのが難しく、形態で分けることとした。

Ⅲ類　高台の畳み付けを釉剥ぎするもので、無文のものがある（22）。

第６表　中国産青磁集計表

点数				層序/調査区/遺構・土層																						小計	中計	総計
				Ⅰ層				Ⅰ´	Ⅱ層				Ⅲ層										Ⅲ´層		Ⅳ層			
				H23東	H23西	H23不明	H25	H23東	H23東				H23東										H23東	H25	H23東			
器種		分類	部位	表土・盛土				石敷・裏込	Ⅱ	Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ上	石積1内1	石積1内2	石積1内3	石積1内3貝	石積1内不明	Ⅲ不明	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2	トレンチ2	Ⅱ・Ⅲ	Ⅳ			
碗	Ⅱ		口			1																				1	1	977
	Ⅲ	Ⅲ-1	口	1																						1	2	
			胴	1																						1		
	Ⅳ		底	3			1									1				1			1		1	8	10	
			胴										1								1					2		
	Ⅳ´		口										2		1						1	1				5	5	
	Ⅴ	－	底	1				2				1			1					1		1				7	182	
			胴	18	1		9	2		1	6	3	1	1		5	2			9	6	4			1	69		
		Ⅴ-0	口	7		1	5				1					2				1	2	2	2			23		
			口～底																					1		1		
			底																						1	1		
			胴	3		1						1								1						6		
		Ⅴ-1	口	7	1		2						1							1						12		
			底	1								1														2		
			胴	9		1	4			1	1		1		1	3				1						22		
		Ⅴ-2	口	9			5	1					1		1	3	2			4		2	2			30		
			底			1																				1		
			胴	1			3									1				1						6		
		Ⅴ-3	口	1			1																			2		
	Ⅵ	Ⅵ-0	口												1	1					1					3	598	
		Ⅵa	底													2										2		
		Ⅵa-0	口	1			1				1				1	4				1						9		
			底							1						1						1				3		
			胴	1												1										2		
		Ⅵ-1	底	1									1													2		
		Ⅵa-1	口	2				1						1		2				3						9		
			口～底								1	1					1									3		
			底													1	1					1				3		
		Ⅵb	底								2	2	1								1					6		
		Ⅵb-0	口	25	1	9	3	2		1	22	21	7		10	8	1			11	4	1		1		127		
			口～底								1	2			1											4		
			底	9		1					2	4	1		1	3				1	2	1				25		
			胴	29	2	2	7	3		1	10	14	2	1	6	6	3			6	4	3	2			101		
		Ⅵb-1	口	41	1	6	1	1	1		6	21	6	2	21	26	9			19	7	3	1			172		
			口～底													1										1		
			底	1							1				1											3		
			胴	22	1	3	7	4			5	16	5	3	6	16	3			22	9	1				123		
	Ⅶ	－	口	8			2				2	2					1									15	159	
			底	3		1					3	5	1													13		
			胴	3		2	1				2	4								1						13		
		Ⅶ-0	口	4	1	4					5	6	2							2						24		
			口～底								2															2		
			底	5		2																				7		
			胴			1					3	2	2				1									9		
		Ⅶ-1	口	2								1														3		
			底								1	1														2		
			胴	3							3	2														8		
		Ⅶ-2	口	11		2		1			7	22	7		2					5						57		
			口～底								1	2														3		
			胴								3															3		
	幅広高台		口	4						2	8															14	20	
			口～底						1																	1		
			底																	1						1		
			胴	1					1		1	1														4		
皿	Ⅲ		底	1																						1	1	211
	Ⅳ		口																			1				1	4	
			底								1											1				2		
			胴									1														1		
	Ⅳ´		口	4	1		1				3	1	1		1											12	15	
			底	2												1										3		
	Ⅴ		口	20	4	3	6			1	3	6	1		1	10	4		1	1	2	2				65	92	
			口～底	1								1				2					1	2				7		
			底			3							1													4		
			胴	4		1	3			1	4		1			1	1									16		
	Ⅵ		口	22	1	2	1				1	5	2		5	2	1			8	4	3				57	96	
			口～底		1								1							1		1				4		
			底	8		1					1	1				4										15		
			胴	5		3				1	2	2	1		1		1			3	1					20		
	Ⅶ		底	1																						1	1	
	－		口								1															1	2	
			胴								1															1		
盤	高台		底	8							1	1	1		1	4	1			1	1	1				20	20	211
	碁笥底		底	3		2					2									1	2	1				11	11	
	玉縁口縁		口				1																			1	1	
	稜花口縁		口	21	1	2						5		2	2	8	2			3	5	1	1			53	56	
			口～底													2	1									3		
	肥厚口縁		口	6	1	2						2		1	1	5		1			3	1				23	25	
			口～底								1					1										2		
	口折口縁		口	2							1	1			2		1									7	7	
	直口口縁		口	1				1			1		1													4	4	
	－		口			1																				1	87	
			底	1				1				1				2										5		
			胴	21	1	5		1			3	6	4		6	16	1			5	9	2			1	81		
酒海壷	蓋		口																			2				2	3	11
			胴																			1				1		
	身		底				1															1				2	8	
			胴	1							2											3				6		
壷	－		口	1																1						2	21	21
			底	3											1	1					1					6		
			胴	3		2					2	1				2	2			1						13		
小壷	－		底	1																						1	1	1
鉢	－		口	1		1					1				1					3						7	7	7
擂鉢	－		口	1								1														2	3	3
			胴									1														1		
急須	－		胴	1																						1	1	1
香炉	－		口				1																			1	2	2
			胴																	1						1		
瓶	－		口									1														1	2	2
			胴				1																			1		
袋物	－		胴	2	1	2										1										6	6	6
不明	－		口	11	1	3		1			13	9	3		1	2				8	1					53	385	385
			底	2	1	1		1			2	2														9		
			胴	85	11	16		3		1	28	65	11	2	5	39	10	1		18	16	10			1	322		
			把手	1																						1		
小計				482	32	88	67	25	3	11	174	248	70	13	82	190	49	2	1	147	84	54	9	2	5	1838		
総計				669				25	436				692										11		5			

Ⅳ類　外底面は露胎し、高台が台形状となるもで、外面に連弁文を描く口折皿がある（674・675）。

Ⅳ´類　見込を釉剥ぎしている底部がある（549）。

Ⅴ類　緑色の強い釉が厚く施釉され、外底面が蛇の目釉剥ぎされるもので、蓮弁文を描く口折皿（23・24）、腰折皿（25・253・542・543・670・671）、直口皿（369）、稜花皿（370）がある。なお、少数であったため、腰折皿に含めたものとしては、内面に雷文が描かかれる八角皿（25）、胴部が緩やかに折れ外反するもの（543）がある。（23）は口唇部に雷文と内面胴部に草花文、見込みに双魚文が描かれており、釉・胎土も良質である。（21）は、やや大型の底部で内湾するものと思われる。

Ⅵ類　高台が小型化し、器高が低くなるもの。多くは、稜花皿（669・672・673）だが、口縁がなく判別できないものは腰折皿（20・254・544）としている。

盤　碗・皿の分類と対応ができておらず、口縁と底部形態よりを便宜的に分類している。多くは、Ⅴ・Ⅵ類の範疇にあたるものと思われる。

（372・545）は口折口縁で、直線的に伸びた口縁部下に波状文や唐草文が施される。

（27）は玉縁口縁で、外面胴部に圏線が、内面胴部にヘラ描きの草花文が施される。

（223）は直口口縁で、口縁部はやや肥厚し、内面に草花文が施される。

（255・548）は端部が上方に立ち上がる口折れの肥厚口縁。（255）は見込みに圏線が施される。（548）は外底面が蛇の目釉剥ぎされ、内面に幅５mm の蓮弁状の櫛描文が施される。

（505・546・678・679・680・751）は口縁部が稜花状となるもので、盤の中で多く出土している。口縁部下に稜花に沿った波状文が、また外面には連弁文が施されるものが多い。

（547）は、菊花状に成形されたものであるが、あまり例を見ない。

底部は、碁笥底のもの（28）と高台をもつもの（547・684）が出土している。

その他　瓶（30・371）、酒海壷の身（34・682）・蓋（681・685・686）、香炉 (32・683)、小壷（19）、鉢（29・242・676・677）、擂鉢 (33・368)、袋物（31）がある。これらの多くは、釉や文様はⅤ類に類似する。

２）白磁

総破片 334 点を数える（**第７表**）。景徳鎮窯系・福建産のものは、森田（森田 1982）、大宰府 (太宰府市 2000)、田中克子（2003）・新垣力（2005）、徳化窯系のものは陳（1999）の各研究を参考に分類を行った。以下、産地ごとに分類し、（瀬戸・玉城・仁王・宮城・安座間・松原 2007）の分類記号があるものはこれを付した。

景徳鎮窯系　碗・小碗・皿・器台・袋物が出土している。磁器質で器胎には小さな間隙が見られ、釉調は青白色・灰白色のものが多い。これらは、特に記したもの以外は、おおむねＥ群に相当するものと考えられる。

皿　端反皿が最も多く、口径 12cm、底径５～７cm 前後のものが多いが（265・266・376・507・554・687）、口径 14cm、底径８cm 以上の大型のもの（374・466・508・553・688）も見られる。他に、外反で碁笥底となるもの（49・267）、口縁・胴部に刻みが巡るもの（373）、稜花皿（231・268・381）、青花Ｃ群と同形の直口する碁笥底の皿（375）である。（44）は腰折皿で、より古相のＥ０群で、首里城跡二階殿地区で一定量出土している皿Ⅰ類が相当する（沖埋文 2005）。

碗　（377）は、底部で、高台外面端部が釉剥ぎされ、外底面の一部が露胎している。（691）は口縁部がやや端反する碗で、光沢のある乳白色の釉が施釉される。

小碗　（269）は腰が直角に折れる直口のもの、（270）は見込みが蛇の目釉剥ぎされるもの、（555）は見込みが蛇の目釉剥ぎされ、外底面は露胎し、胴部の縦方向の刻みより輪花形の可能性がある。

その他　器台の一部と思われる破片（557）、外面に波状文と思われる文様が施される袋物（558）が確認されており、Ｅ群もしくはＢ群と思われる。

第７表　中国産白磁集計表

点数				層序/調査区/遺構・土層																小計	総計
				Ⅰ層				Ⅰ´層	Ⅱ層			Ⅲ層									
				H23東	H23西	H23不明	H25	H23東	H23東			H23東									
産地	器種	分類	部位	表土・盛土				石敷・裏込	Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ上	石積1内1	石積1内2	石積1内3	石積1内3貝	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2		
景徳鎮	碗	−	口														1			1	184
		−	底								1									1	
		−	胴	1																1	
	皿	−	口	18		5		1		23	15	5		1	4	1	3			76	
		−	口～底	5		1				4	4		1	1	1		1			18	
		−	底	4	1				1	6	8	3		1	1		2	2		29	
		−	胴	11		4		1	3	13	10	2	1	3	2					50	
	小碗	−	口	1						1										2	
		−	底							1					1					2	
	袋物	−	胴																1	1	
		−	−													1				1	
	器台	−	胴												1					1	
	不明	−	胴												1					1	
福建	碗	C-2	底	1																1	135
		C-3	口			1														1	
			底												1					1	
			胴	2	1			1		1	2									7	
		D´	口	4		2				15	4			1		1	1	1		28	
			口～底						1	4										6	
			底	4						3	1									8	
			胴	5		2	1		2	6	3						1			20	
		V-2	口						3	3							2			8	
		V-4a類	口						1	1										2	
		Ⅶ-b	胴	1																1	
		その他	底	2																2	
		−	口		1	1														2	
	皿	A	口	1																1	
		D	口	4	1			1	1	3		1						1	1	13	
			口～底	2						1					1					4	
			底									1		1	1				1	4	
			胴			1				1				1						3	
		D´	口	1						9	2									12	
			底	1		1				1	1									4	
	袋物	−	底			1														1	
			胴	2																2	
		その他	底			1					1									2	
	香炉	その他	胴													1				1	
	不明	−	口	1																1	
徳化	皿	−	底	2																2	15
	小碗	−	口	3										1						4	
			底	1																1	
	袋物	−	不明	1	1															2	
	瓶	−	口						1											1	
	不明	−	胴	2			1		1		1									5	
小計				71	4	20	1	4	12	96	52	12	2	9	14	4	12	3	3	334	
総計				107				3	164			60									

福建産

碗・皿・袋物・香炉がある。福建省各地で生産されたもので、田中により各類の窯が明らかにされつつある。

大宰府Ⅴ－４ａ類　口縁部が外反し、端部内面に鋭い稜が特徴となる。胴部途中まで黄灰色または灰白色の釉が施釉されている（263・235）。

大宰府Ⅶ－ｂ類　胴部辺が出土しており、内面に櫛描きの草花文が施されている（35）。

Ａ群　口縁部が釉剥ぎされいわゆる「口禿」となるもの。直口口縁の皿が出土している（45）。

Ｃ群　胎土は灰色で軟質のものが大半で、高台の抉りが浅く厚手の内湾する一群で、福建省閩江流域の閩清窯や南平茶窯などが産地とされている。碗・皿があるが今回は碗のみが出土している。３つに細分されているが、今回はそのうちＣ－２群及びＣ－３群が出土している。

Ｃ－２群　内底面に丸みがあるもので、口縁部が内湾となるもの。今回は底部が出土しており、内底面に黄白色の釉が施釉され、底部下半は露胎している（37）。

Ｃ－３群　内底面が平坦で、口縁を外反させるものである。今回は口縁部が外反する碗の口縁部（36）と、内底面に圏線が施され、外面下半が露胎する碗の底部が出土している（550）。

Ｄ群　陶器質だが胎土のきめが細かく失透釉が施釉され、底部は厚いが高台は低く全体的に小型の一群である。福建省閩江流域の邵部四都窯が生産地とされる。高台が抉り高台となるものがあり、全面施釉されるもの（46・47・552）と内面や底部の一部が露胎するもの（260・551）がある。また見込みが釉剥ぎされるもの（506・689）もある。

Ｄ´群　胎土・釉調がＤ群と類似している一群だが、緑色がかった釉が全体に掛けられず、見込みまたは胴部下半が露胎しているのが特徴である。今回出土したものは、細部の違いはあるが浅型で内湾する碗（38～41・234・256～259・261・262・264・380・690）と、外反皿（379）がある。見込みの特徴とし

ては、「堂」字がスタンプされるもの（39）、蛇の目釉剥ぎされ「卍」文がスタンプされるもの（40）、露胎しないで印花文のもの（41）がある。口縁では、わずかに外反するもの（256）、薄手のもの（258・261）があるが、基本的には内湾で直口するものである。また、高台は比較的大きく端部が傾斜したものが多いが、短く直立するものもある（234）。

その他、胎土や釉から福建産と考えられるものがある。（42・43）は、胎土や施釉方法がD´群に類似するが、見込みが広く17世紀以降の福建・広東産とされる青花碗（新垣2003）とも類似する。この他、袋物（51・378）、香炉（556）も出土している。

徳化窯系　釉・胎土が混入物がほとんどない白色であることが特徴的で、清代の福建省徳化窯周辺で生産されたと考えられるものである。小碗（50）、皿（48）、袋物、瓶がある。

3）青花

総破片819点を数える（**第8表**）。元様式、明代、清代に分け、更に細分した。

元様式（52～54・82・298・409・703）　亀井明徳らの研究（2009）に基づく概念で、明代早期にも作られている可能性があるので、元様式と称した。壺（52・53）、盤（54）、瓶（82・298・409・703）が出土している。瓶はいわゆる玉壺春瓶とされる長頸瓶で、（82）は毛彫りによる草花文も施される。

明代　碗・皿・瓶・盤が出土している。産地は大半が景徳鎮窯だが、漳州窯系もある。

景徳鎮窯系　日本出土の青花の碗・皿については、小野正敏（小野1982）によって確立されているが、近年の資料増加に伴い、森毅（森毅1995・2005）、森達也（森達也2009）、柴田圭子（柴田2011）により追補されている。本調査区を含む首里城跡を始め沖縄出土のものは、小野分類に含まれていないものも見られ、後者3氏の研究を踏まえて、時期的に大きく3つに分けて整理し、形態等の違いにより細分している。なお、集計では、破片で細分出来ないものⅡ・Ⅲ類などと表現している。

碗　特定できるものでは、Ⅱ類が多い。

Ⅰ類　首里城跡京の内SK01や二階殿地区で出土した青花の一群で、小野分類ではB1群やそれに文様構成が類したもの、柴田により明代早～中期に位置づけられたものとした。

Ⅰ－1類（60・382・559・692・693・753・754）　見込みがほぼ平坦で広く深めの端反碗で、多くは小野B1群に含まれる。文様は、外面に唐草文、宝相華文、内面に雷文、四方襷文、見込みには福字文などがある。（754）は8割ほど残存しており、外面に線彫りによる波濤文、内面上方に雷文、見込みに梅樹文が描かれる。

Ⅰ－2類　直口碗で、見込みはやや丸みを帯びているが平坦に近いものである。後述するⅡ－1類に口縁や全体の器形がやや類似するが、やや深めである。今回の資料ではなかった。

Ⅱ類　小野分類でC・D群とされた明代中期の青花の一群と、本土ではあまり例が少ないが森達也や柴田の指摘により同時期と考えられる端反碗も含めた。本類は、胎土が軟質で釉調がやや暗めなどの特徴がある粗雑なものも一定量見られる。

Ⅱ－1類（58・386・389～392・469・475）　直口碗のうち、口が広く浅めの器形で見込みが凹むもの、いわゆる蓮子碗、小野分類C群である。文様は、外面に焦葉文、見込みに巻貝文を描くものが多い。（390）は軟質で、見込みが蛇の目釉剥ぎを施すやや粗雑なものである。

Ⅱ－2類（55・59・277～279・384・385・387・388・467・468・470～472・476・695）　直口碗のうち、見込みが平坦で広く深めの器形で大きめの高台をもち、腰が折れ胴部が直線的に開くもので、腰折碗とも呼ばれる小野分類D群である。文様は、外面が上半に雲状の横帯文、下半に鎖状の唐草文、見込みが十字文となったものが圧倒的に多い。胎土が軟質なもの（278・385）、文様が雑もしくは簡略されたもの（384・387・388・467・695）、畳み付けの処理がやや雑なもの（277）など、やや粗雑な一群が比較的

第８表　中国産青花集計表

時代	産地	器形	分類		部位	Ⅰ層				Ⅰ´層	Ⅱ層			Ⅲ層							Ⅲ´層		小計	中計	総計
						H23東	H23西	H23不明	H25	H23東	H23東			H23東							H23東	H25			
						表土・盛土				石敷・裏込	Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ上	石積1内1	石積1内2	石積1内3	石積1内3貝	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2	トレンチ2	Ⅱ・Ⅲ			
元様式	景徳鎮	壷	－		胴	1	1																	2		2
		盤	－		胴	1																		1		1
		瓶	－		口							1	1								1			3		4
					胴				1															1		
		元様式　小計				2	1		1			1	1								1					7
		元様式　合計				4					2			1												
明	景徳鎮	碗	Ⅰ1		口				2				2	1						1			7	28	401
					口～																	1	1			
					底			1	3					1					1				6			
					胴	2		1	2				1				4	1		1	1	1	14			
			Ⅱ1		口	1						1	1	1									4	19		
					底							1	3	1		1							6			
					胴	2	1	2				3		1									9			
			Ⅱ2		口	5		2	2	2		18	15	7					2	1			54	78	
					口～								1										1			
					底	1						5		1					1				8			
					胴	3				1		2	6	2	1								15			
			Ⅱ3		口					1		2	2	1					1			1	8	10		
					底	1								1									2			
			Ⅱ		底								4	1					1				6	6		
			Ⅱ・Ⅲ	外反	口	8	1					8	7	2		1			1	1	1		30	225		
					底	1						1											2			
					胴	2	1			1		1	1	1									7			
				直口	口	4						7	1	1						1			14			
				－	底	5		1			1	3	3	3					1	1			18			
					胴	37	11	5	2	4	1	41	33	5		2	1	2	7	3			154			
			Ⅲ		口	4					1	4	3										12	35		
					底	1						1	2										4			
					胴	3		2			1	8	2	1					1		1		19			
		小碗	Ⅰ		口							1											1	1		
			Ⅱ・Ⅲ	腰折	口	3						2	2				1						8	28		
					胴								1				1						2			
					底		1									1							2			
				－	口	3						3							1	1	1		9			
					口～												1						1			
					底	1																	1			
					胴	1		1				2	1										5			
			Ⅲ		口	3						4							1				8	12		
					胴							1	1						1		1		4			
		皿	Ⅰ		底			1											1				2	2		
			Ⅱ1		口	7		1				4	8	3		1	2		6	3			35	80		
					口～	3		2				3	1	1		2	2		1				15			
					底	3	1		1			4	8	1		4	1	1	4				28			
					胴	1													1				2			
			Ⅱ2		口	3		1			1	9	7	3					1				25	39		
					口～	1						1	2	1		1							6			
					底							1	1	1									3			
					胴	2							3										5			
			Ⅱ	大皿	底	1						3		1			2		1				8	13		
				鍔皿	口					1		2											3			
					胴	1						1											2			
			Ⅲ		口	3	3	3			1	5	1						1				17	26		
					口～							1											1			
					底	4					1	1											6			
					胴	1	1																2			
		小壷	－		口							1											1	1		
		壷	－		胴	1							1							1			3	3		
		鉢	－		底														1				1	2		
					胴											1							1			
		瓶	－		口	2						4	1										7	38		
					底									2									2			
					胴	9	1		2	2		3	5	4			2		1				29			
		蓋	－		口	1																	1	1		
		不明	－		底								1										1	2		
					胴							1											1			
	漳州	小碗	－		口	1																	1	1		
		碗	－		口						3	5	2										10	14		
					底	1																	1			
					胴	1						2											3			
		明　小計				137	21	23	14	12	10	170	133	48	1	14	17	5	37	13	5	1	3			664
		明　合計				195				12	313			140								4				
清	景徳鎮	皿	－		口	1																	1	1		
		碗	－		口	1																	1	2		
					底	0		1															1			
	福建・広東	皿	－		口	1		1															2	2		
		鉢	－		口			1															1	1		
		碗	－		口	13	2	2	1		1	1	2										22	46		
					底	3	1																4			
					胴	15	1	3								1							20			
	徳化	皿	－		口	3																	3	9		
					底	3		1		1													5			
					胴	1																	1			
		小碗	－		口	1	1																2	4		
					底	1	1																2			
		碗	－		口	23	4	1	1				2										31	83		
					底	11		1															12			
					胴	30	4	5	1														40			
		清　小計				107	14	16	3	1	1	1	4			1										148
		清　合計				140				1	6			1												
		小計				246	36	39	18	13	11	172	138	48	1	15	17	5	37	13	6	1	3			819
		総計				339				13	321			142								4				

見られる。

Ⅱ－３類（222・276・281・383・395・473・474・694・752） 端反碗であるが、Ⅰ－１類と比べると外面の文様が少なく、全体的に口縁がやや厚めで、腰部に丸みが帯び、高台は小さめで見込みは凹むものと考えられる（61・473）。口縁端部の反りが直角に近く急なもの（281・395）も見られるが、70°くらいのものが多い。また、口縁が稜花状となるものも見られる（474）。森達也分類では、端反碗Ⅱ類に相当するもので、器高が低いⅡ－Ｂ類、口縁端部の反りが急で高台がややハ字形に開くⅡ－Ｃ類に分けられている。

前述の（281・395）はⅡ－Ｃ類に相当し、沖縄では今帰仁城跡等で一定量出土しており、今帰仁城跡主郭Ⅳ類とされている（今帰仁村 1991）。胎土が軟質で釉調がやや暗め、文様も雑な印象を受け、全体的に粗製なものが多い。（393・394・400・477・696）は、底部だけであるが、多くは見込みが凹むが文様からⅠ類とは考えにくく、Ⅲ類よりは厚手な印象から、Ⅱ類の範疇と考えた。（400）は、見込みは平坦で蛇の目釉剥ぎを施す。

Ⅲ類（62・280・282・396・397） 小野分類Ｅ群を含めた森毅の研究で 16 世紀後半～ 17 世紀前半と考えられるものを、量的に少ないこともあり便宜上まとめた。いわゆる饅頭心碗の小野分類Ｅ群（62・396）、圏線だけのもの（280）、いわゆるペンシルドローイング（細線描き）や細線内をダミ塗りする技法が用いられ器壁は非常に薄いもの（282・397）がある。

小碗（64・66・297・566・567） 杯、小杯と称される場合もあるが、文様・形態的に碗との共通点が高いと考えたため、便宜的に小碗とした。（64）は端反でペンシルドローイングで描かれるもの、（66･297）は小形、（566・567）は腰折れの器形で胴部の中位に段が入り区画されるものである。これらは、碗Ⅰ類の文様とは異なるので、碗Ⅱ・Ⅲ類と同時期と思われる。

皿 碗と同様で、Ⅱ類が多く、特にⅡ－１類が多い。

Ⅰ類（79･699） 碗と同様の文様をもつ口径約 20㎝となる大形の端反皿である。（699）は外面に牡丹唐草文、（79）は見込みが麒麟文が描かれる。

Ⅱ類 小野分類のＢ１群とＣ群で、碗Ｃ・Ｄ群と時期的にも共通する一群で、同様に通例見られるものである。今回の資料では、概ね同時期と考えられる碗Ⅱ類と同様に、胎土・釉調等から精粗が見られる。

Ⅱ－１類（68 ～ 74・283 ～ 285・401 ～ 404・478・509・511・560 ～ 563・697・698・700・701）端反皿で、文様は外面に唐草文を描くものが多く、見込みに玉取り獅子文、十字文などが描かれ、ほぼ小野分類Ｂ１群に相当する。例が少ないものとして、見込みに草魚文が描かれるもの（72）もある。口径では、約９㎝、約 12㎝、約 15㎝の３サイズが見られ、約９㎝のものが多い。外面が無文のもの（700）、碁笥底状で胴部が直線的なもの（404）も文様等は類似しているので本タイプに含めた。粗雑のものとして、外底無釉のもの（69・563）、釉剥ぎの処理が甘いもの（285）、胎土が軟質や釉が灰色、呉須が鈍いもの（70・71・73・401・403）などがある。

Ⅱ－２類（75・286 ～ 290・405 ～ 407・479・510） 碁笥底皿で、文様は外面に蕉葉文などが描かれ、見込みに寿字文や花文などが見られ、ほぼ小野分類Ｃ群に相当する。外面、見込み共に梵字文のもの（75）もある。胎土が灰色、釉・呉須が不良なもの（287・288）がある。

（296・564）は鍔皿で、（295）は見込みが凹む底部で、大振りの花芯文や草花文からⅡ類の範疇と考えた。

Ⅲ類（76 ～ 78・291 ～ 294・408） 碗Ⅲ類とおおむね同時期と考えられる一群をまとめた。小野分類Ｅ群に相当する内湾皿（77・78・293・294・408）、森口縁内面に四方襷文を配するもの（291）、芙蓉手のもの（292）、器壁が非常に薄手で文様はペンシルドローイングで描かれるものとした。

鉢（702） 稜花形、高台上に雷文が施され、文様の特徴から碗・皿Ⅰ類に類似している。

瓶（81・410・411・480 ～ 482・565） 図化したものは長頸瓶だが、前述した元様式のものと比べると、文様がルーズであり、高台（480・482）は厚い。

小壺（299） 短頚壺で、内面胴部は無釉である。

漳州窯系 福建省漳州窯周辺で生産されたと考えられる資料で、景徳鎮窯系と比べると胎土が軟質で釉・呉須が鈍いものが多い（福建博物館 1997）。時期的には、明末清初とされ、16 世紀後半～ 17 世紀代とされている。碗・小碗が確認される。

碗（63･236･237･273～275･398･399） 口縁は直口し、浅く内湾する器形のものが出土している。底部（63）

は見込みが盛り上がるものである。

小碗（65） 口縁が端反するものだが、景徳鎮のものより厚手である。

清代 徳化窯系、窯が限定できない福建・広東系が多い。景徳鎮窯系は小片であったため掲載していない。

徳化窯系 胎土は白磁と同様で白く精良で、透明釉で光沢が強いことが特徴である。碗・皿があるが、今回はⅠ層出土であることと通例見られることから、図化しなかった。

福建・広東系 胴部下半や底部が露胎する一群である。碗は基本的に直口碗で、アラベスク風の文様を描くものなどがある。底部では見込みが広く蛇の目釉剥ぎが施されたものがある。今回は、事例が少ない皿（80）のみの図化した。

４）褐釉

破片数 5,099 点を数え、壺・碗・鉢が見られる（第９表）。

壷 一番多く出土しており、次の２たつに大きく分けた。

Ａ群（485・568・569・709・759・760） 断面方形状の口縁部をもち、大きく肩部が張り、胴部下半は窄まり、上げ底状の底部をもち無耳の大形壺である。沖縄出土資料による分類（瀬戸ほか 2007）の５類に当たる。ロクロ目が顕著であること、胎土は精良で白色粒を含むことも大きな特徴である。釉調は暗オリーブ色のものが多い。

Ｂ群（92 ～ 94・271・272・708・755・756・758） Ａ群以外のものを便宜的にまとめており、今回出土したものはそれより古い傾向のものである。Ａ群と比べると薄手で、器面は滑らかである。沖縄分類に該当するものとして、口縁が短く直立し上面が平坦な口縁をもつ壺２類（271）、玉縁状の口縁をもつ横耳の大型の壺３類（92）がある。

碗（91） 内外面に褐釉が施された深めの碗で、外底は無釉で、高台は台形状で丁寧である。

鉢（486･487･573･574） 丸く収めた口縁に内湾するもの（486）、Ｔ字状で縄目突帯をもつ口縁のもの（487･574）、楕円形に肥厚した口縁のもの（573）がある。

小壺（706） 先述の壺とは異なり、非常に薄く、小形の無頸壺である。

５）その他の中国産陶磁器

上記以外の中国産陶磁器には、色絵･瑠璃釉･緑釉･三彩･法花･鉄絵の他に、不明陶器、合計 154 点である（**第 10 表**）。

色絵（83・84）（83）は直口碗で、外面に金色で龍文、内面に青色で雷文を白磁に絵付けしたもので、徳化窯系で清代のものと思われる。（84）は皿で、見込みに赤･緑色で付したもので、白磁Ｅ群の器形であることから、明代の景徳鎮窯系のものと思われる。

瑠璃釉（85・86・412）（85）は、型造りの碗で徳化窯系と考えられる。（86）は、精良ではあるが、外底の

第９表　中国産褐釉集計表

器形	分類	部位	Ⅰ層				Ⅰ´層	Ⅱ層			Ⅲ層										Ⅲ´層		Ⅳ層	小計	総計
			H23東	H23西	H23不明	H25	H23東	H23東			H23東										H23	H25	H23東		
			表土･盛土				石敷･裏込	Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ	Ⅲ上	石積1内1	石積1内2	石積1内3	石積1内3貝	石積1内3貝（フロ）	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2	トレンチ2	Ⅱ･Ⅲ	Ⅳ層		
碗	－	底	1																					1	1
鉢	－	口										2			3			2						7	9
	－	底						1																1	
	－	胴																1						1	
壷	A群	口	15	3	5	10			4	5				1	11	1		7	5	4	2			73	5075
	B群		2	1	1	3			1					1	4							1		14	
	－	耳	3																	1				4	
	－	底	20	2		12			3	3				1		2		8	6	3	2	3		77	
	－	胴	1223	102	223	844	73	35	195	277	2	94	37	120	846	94	10	275	199	132	61	63	2	4907	
小壷	－	口																1						1	1
袋物	－	胴	4	2	3				1											1				11	11
瓶	－	胴	1												1									2	2
小計			1269	110	232	869	73	36	204	285	2	96	37	123	877	97	10	294	210	141	65	67	2		5099
総計			2480				73	525			1887										132		2		

第 10 表　中国産その他の陶磁器集計表

分類	器形	部位	Ⅰ層				Ⅱ層			Ⅲ層								小計	総計
			H23東	H23西	H23不明	H25	H23東			H23東									
			表土・盛土				Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ上	石積1内2	石積1内3	石積1内3貝	石積1内不明	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2		
色絵	碗	口	1															1	
		胴	4					1										5	
	皿	底	1															1	9
	小碗	口					1											1	
	不明	胴	1															1	
瑠璃釉	碗	口						1										1	
		底	1															1	
		胴						1	5									6	
	小碗	底	1															1	16
	皿	胴								1								1	
	袋物	胴	1								1				1			3	
	瓶	頸		1														1	
	不明	口						1	1									2	
鉄絵	壷	胴	1															1	1
彩釉	皿	口														1		1	
	盤	胴															1	1	
	壷	胴	1							1								2	8
	不明	底											1					1	
		胴	1					1							1			3	
三彩	鉢	口															1	1	
	水注	注口	1															1	
		底			1													1	9
		胴	4						1									5	
	不明	胴						1										1	
緑釉	袋物	胴	3	1	1				3									8	
	瓶	胴	1															1	
	水注	口～撮み						1										1	12
		把手									1							1	
	不明	不明	1															1	
宜興窯系	急須	胴	1															1	1
天目	碗	口	6	1	1				1	1		13	2		2	1		28	
		底	2	1								3					1	7	
		胴	14	2	2		1					25		3	1			48	84
		金属製品との溶着										1						1	
施釉	不明	胴		1											1			2	2
その他陶器	鉢	口				2												2	
		胴						1		1							1	3	9
	不明	口～底	1															1	
		胴	3															3	
その他磁器	不明	胴	2															2	2
不明	碗	底						1										1	1
小計			52	7	5	2	2	9	11	4	2	42	3	3	6	2	4	154	
総計			66				22			66									

字款が不明で景徳鎮窯系ではなく、徳化窯系と考えた。(412)は、景徳鎮窯系と思われる光沢が強い端反碗である。

法花（88・484・705） 器面に細い突線で文様や区画を作り、その上から直接施釉するもので、今回出土したものは外面が三彩で、内面が緑釉のものである。（88・484）は大型壺の破片、（705）はやや胴部が膨らむ直口する鉢である。

翡翠釉（704） 外反皿と思われる。

緑釉（301） 水注の蓋で、軟質である。

三彩（89・90・413） 型物の破片で、90 は鳥（鴨）形の頭部と思われる。

鉄絵（87） 磁州窯系と思われる掻き落としの鉄絵壺の胴部片である。

不明陶器（98・300） 胎土等から中国産の可能性が一番高いと思われるが、類例はないものである。（98）は、鍔皿のような器形だが、底部に穿孔があり、焜炉などとも思われるが不明である。（300）は、見込みが輪状に灰褐釉が施される陶器碗である。

②ベトナム産陶磁器

ベトナム産陶磁器は、白磁 11 点、青花 11 点、色絵 4 点、合計 26 点である（**第 11 表**）。

白磁　器種は端反口縁を呈する碗のみである。西村昌也・西野範子の分類（西村・西野 2005、西野 2011）を参考に検討した結果、成型方法や文様からⅡ類に細分される。以下、特徴を記す。

Ⅰ類:轆轤成形で外面に線彫りの文様を描くもの（579）。西村・西野分類の単体焼成及び最上置焼成例（西村・西野 2005）に相当すると考えられる。

Ⅱ類：型成形で口唇部は釉剥ぎとなり、内底に焼成時の目跡が残るもの。内面に型押し文様を施す（156、158）。西村・西野分類の口唇釉剥ぎ重ね合わせ A － 2 類（西野 2011）に相当する。

青花　器種は碗・鉢・壺・瓶が確認されているが、いずれも小片であり全形を窺える資料は非常に少ない。今回

第 11 表　タイ・ベトナム・ミャンマー・韓半島産陶磁器集計表

種類	器形		部位	Ⅰ層				Ⅰ´層	Ⅱ層		Ⅲ層								Ⅲ´層		小計	総計
				H23東	H23西	H23不明	H25	H23東	H23東		H23東								H23東	H25		
				表土・盛土				石敷・裏込	Ⅱ中	Ⅱ下	石積1内1	石積1内2	石積1内3	石積1内3貝	石積1内不明	Ⅲ上	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2	トレンチ2	Ⅱ・Ⅲ		
タイ産褐釉	壷	Ⅰ類	口	6		1	10						5				3					**25**	**1093**
			耳	4						1		1				1	2					**9**	
			底	1		1	3						8				1	1	1	1		**17**	
			胴	190	13	27	202	11	40	54	5	25	136	17	1	18	48	26	19	6	12	**850**	
		Ⅱ類	口			1			3	2		1										**7**	
			底	3						1							2					**6**	
			胴	46	5	7	4		8	14	4	3	35	6		6	13	10	5			**166**	
	中形壷		口										1	1							1	**3**	
			底										1									**1**	
			胴	1															1			**2**	
	瓶		口						1													**1**	
			底													1						**1**	
			胴	2						2												**4**	
	碗		底				1															**1**	
タイ産土器	蓋		口			1				2			2			2	3	2		1	2	**15**	**32**
			口～撮み				1															**1**	
			口～底				1															**1**	
			撮み				1															**1**	
			胴				9					1		1			1				2	**14**	
ベトナム産色絵	碗		口											1				1				**2**	**4**
			胴	2																		**2**	
ベトナム産青花	壷		胴						1													**1**	**11**
	鉢		胴						1													**1**	
	瓶		胴	2																		**2**	
	碗		口	1						1			2									**4**	
			胴				1			1			1									**3**	
ベトナム産白磁	碗		口											1			1	2				**4**	**11**
			口～底											1								**1**	
			胴	1					1					1		1	1		1			**6**	
ミャンマー産褐釉	壷		胴	1																		**1**	**1**
韓半島産青磁	壷		胴	1									1			1						**3**	**6**
	碗		底			1																**1**	
			胴	1														1				**2**	
小計				**262**	**18**	**39**	**233**	**11**	**55**	**78**	**9**	**31**	**192**	**29**	**1**	**30**	**75**	**43**	**27**	**8**	**17**		**1158**
総計				**552**				**11**	**133**		**437**									**25**			

は細分が可能な碗と、特徴的な資料が得られている瓶を図化した。

碗Ⅰ類：口唇部が釉剥ぎとなる薄手の端反口縁で、外面に線彫りの圏線や文様を描き、内面に呉須で圏線を巡らせる（414･415）。西村･西野分類の単体焼成及び最上置焼成例（西村･西野 2005）に相当すると考えられる。

碗Ⅱ類：全体的な器形はⅠ類に似るが器壁が厚くなる。両面に呉須で文様を描く（105）。西村・西野分類の断面扁平形輪状トチンＢ－２類（西村・西野 2005）に相当する。

碗Ⅲ類：前２者に比して器高が低く腰部が張るもの。両面に呉須で文様を描く（580）。中国産青花の可能性も考えられるが今回は本節で扱う。西村・西野分類の輪状釉剥ぎⅠ－１類（西村・西野 2005）に相当する。

瓶：いわゆる玉壺春瓶と称される形態の胴部片である。外面に呉須や貼付で文様を施す（106）。

色絵　器種は端反口縁を呈する碗のみが確認されており、両面に赤と緑で文様を描く（581・713）。西村・西野分類の単体焼成及び最上置焼成例（西村・西野 2005）に相当する。

③タイ産陶磁器

タイ産陶磁器は、褐釉陶器が 1,093 点、タイ産土器が 32 点、合計 1,125 点である（**第 11 表**）。なお、タイ産褐釉陶器に似るミャンマー産陶器は、小片のため図化しなかった。

褐釉陶器　器種は壷（器高 50 ～ 60㎝前後のもの）・中型壷（器高 30 ～ 45㎝前後のもの）・瓶の３種類が確認されている。壷の細分は向井亙による分類（向井 2003）を参考に実施した。以下、器種別に特徴を説明する。

壷　肩部が強く張り口縁部がラッパ状に開く平底の四耳壷で、胴部下半と内面は露胎となる。生産地から２種類に細分される。

Ⅰ類：シーサッチャナライ窯産と考えられるもの（101・103・576・710・761）。一般に焼成は良好で釉色は黒褐色～褐色を呈する例が多い。向井分類のシーサッチャナライ長頸及び短頸四耳壷の大型（向井 2003）に相当する。

Ⅱ類：メナムノイ窯産と考えられるもの（104・303・416・452）。焼成はⅠ類に比して不良な資料が多数確認される。釉色は褐色～緑褐色を呈する例が多い。向井分類のメナムノイ短頸Ⅱ類四耳壷の大型（向井 2003）に相当する。

第 12 表　本土産陶磁器集計表

産地	分類	器形	部位	Ⅰ層				Ⅰ´層	Ⅱ層			Ⅲ層			小計	総計
				H23東	H23西	H23不明	H25	H23東	H23東			H23東				
				表土・盛土				石敷・裏込	Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ上	Ⅲ下	Ⅲ下1		
肥前	褐釉	碗	胴							1					1	66
	施釉	碗	口	5						1					6	
			底	1		2				1					4	
			胴	10				1	1	2					14	
		皿	底	1											1	
			胴	1											1	
		不明	胴							1					1	
	染付	碗	口	5		1	1			5					12	
			底	8		1				1	1		1		12	
			胴	3						1					4	
		小碗	口～底	1											1	
			胴	1											1	
		皿	口	1						1					2	
			底	2											2	
			胴	1											1	
		鉢	口	1											1	
		瓶	胴	1											1	
		不明	胴	1											1	
薩摩	陶器	壷	胴	4											4	7
		鉢	口					1							1	
		瓶	口	1											1	
		不明	胴	1											1	
京系	褐釉	壷	胴				9								9	14
	施釉	碗	胴	1											1	
		小碗	口～底	1											1	
		蓋	口	1											1	
		不明	胴			1									1	
	色絵	小碗	底	1											1	
丹波	褐釉	擂鉢	胴	1											1	1
備前	陶器	擂鉢	口			1									1	1
九州	褐釉	壷	胴			1								1	2	2
産地不明	褐釉	皿	胴						1						1	17
	施釉	碗	底	1			1								2	
		蓋	口	1											1	
			底	1											1	
		不明	胴	2	1	1				1	5	1			11	
			不明				1								1	
小計				59	1	8	12	2	2	15	6	1	1	1		108
総計				80				2	23			3				

第 13 表　本土産近代陶磁器集計表

種類	器形	部位	Ⅰ層				Ⅱ層		Ⅲ層						総計
			H23東	H23西	H23不明	H25	H23東		H23東						
			表土・盛土				Ⅱ中	Ⅱ下	石積1内3	石積1内3貝	石積1内3貝(フロ5)	Ⅲ上	Ⅲ下	Ⅲ下1	
色絵	皿	口	2												2
		口～底	1												1
		底	2												2
	小碗	口		1											1
		口～底	1												1
		底	1												1
	碗	口	1												1
		口～底	1												1
		胴	3												3
色絵小計			12	1											13
染付	火入	口			1										1
	蓋	口	1		1										2
		摘み	2												2
		胴			1										1
	合子	底		1											1
	皿	口	14	1	2										17
		口～底	3												3
		底	4	2		1									7
		胴	3	1	1										5
	小杯	口	2												2
		底	1												1
	小碗	口	19		3										22
		口～底	5		1										6
		底	8	2		1									11
		胴	12	1	1										14
	袋物	口	2												2
	壷	胴	1		1										2
	杯	口	1										1		2
	碗	口	48	4	4	3							1		60
		口～底	1				1								2
		底	11			1									12
		胴	52	12	7	3	2	1		1	1	1			80
	不明	口	1	1											2
		胴	6	1		2			1						10
染付小計			197	26	23	11	3	1	1	1	1	1	2		267
白磁	急須	注口	1												1
	香炉	口	2												2
	皿	口	3												3
		口～底			1										1
		底	1												1
	小碗	口	5												5
		底	2												2
		胴	2		1										3
	袋物	口	3												3
		胴	1												1
	碗	口	13			1		1							15
		胴	5	3				1						1	10
	碗・小碗	胴		4											4
	不明	口	1												1
		胴	4												4
		不明	1												1
白磁小計			44	7	2	1		2						1	57
陶器	壷	底		1											1
陶器小計				1											1
小計			253	35	25	12	3	3	1	1	1	1	2	1	338
総計			325				6		7						338

中型壺　全体的な器形は前者に似るが、肩部の張り及び胴部の開きが弱いもので、胴部下半と内面は露胎となる。シーサッチャナライ窯産と考えられる（102・575・577）。向井分類のシーサッチャナライ長頸及び短頸四耳壺の中型（向井 2003）に相当する。

瓶　高台内刳りの浅い底部から立ち上がり、胴部下半に最大径を持つもので、シーサッチャナライ窯産と考えられる。胴部上半～口縁部までの形態的特徴から２種類に細分される。いずれも胴部下半は露胎。

Ⅰ類：双耳瓶になると考えられる短頸のもの（489）。

Ⅱ類：長頸で口縁部を杯状に成形するもの（302）。

土器　ハンネラとも称される硬質の土器で、蓋のみが出土している。形態は蓋表全体が半球状にくぼみ庇の端部を上面に折り返すもので、蓋表の中央には宝珠形の摘を貼付する（99・100・488・711）。

④韓半島産陶磁器

６点出土している（**第 11 表**）。全て象嵌青磁で、碗（107・108）、壺（582）である。

⑤本土産陶磁器

本土産陶磁器は 108 点を数える（第 12 表）。以下、図示した資料を中心に、産地ごとに傾向を概説する。

染付（109 ～ 111・304 ～ 306・308・417・418）　碗・小杯がある。釉は透明感がなく白色で、高台が比較的丁寧で、見込み中央が若干盛り上がり、比較的簡素な文様を描く。これらの特徴から、概ね肥前Ⅲ期（1650 ～ 1690 年代）と考えられる（九州近世陶磁学会 2000）。

陶器　備前、肥前系、京系、薩摩、産地不明のものがある。

備前（118）　擂鉢１で、口縁の形状より乗岡編年における中世５期（15 世紀中葉から末）のものと考えられる（乗岡 2005）。

肥前系（112 ～ 114・116・120・307）　碗・皿がある。碗は、高台が逆三角形、直口の深めのもので、銅緑釉（112・114）、透明釉（113・307）がある。皿は銅緑釉で、見込み蛇の目釉剥ぎのもの（116）、刷毛目文の鍔縁皿（120）がある。これらの特徴から、おおむね肥前Ⅲ期（1650 ～ 1690 年代）と考えられる（九州近世陶磁学会 2000）。

京系（115・117）　胎土が精良で、京焼を中心に畿内に産地が推定される一群で、碗・蓋がある。

薩摩（119・225）多くは黒褐・灰色の色調をもつ焼き締めの陶器で、（119）は瓶、（２２５）は鉢である。

産地不明（238）　緑釉の鍔縁皿で、本土産と考えたが、具体的な産地は限定できなかった。

なお、近代の本土産陶磁器は 338 点出土しているが、詳細は省略した（**第 13 表**）。

⑥産地不明陶器

169 点出土しており、多くは蓋である（**第 14 表**）。（168）は円形の蓋である。

⑦沖縄産陶器・土器・カムィヤキ

沖縄諸島等の琉球列島で生産されたものを、沖縄産陶器・土器・カムィヤキとしてまとめた。

１）施釉陶器

方言では「上焼（ジョウヤチ）」と称され、施釉や絵付けを生地土に直接行うＡ類と、化粧土の上から行うＢ類がある。器形には、碗・小碗・皿・鉢・鍋・火炉・火取・壺・急須・袋物・瓶・灯明具・香炉がある。破片数 749 点を数え、碗が圧倒的に多い（**第 15 表**）。実測できたものについてその特徴を述べる。

碗（122・224・310・757）Ａ類には灰釉碗（310）、Ｂ類は白釉碗（122・224・757）があり、（122）は

第 14 表　産地不明陶器集計表

器形	部位	Ⅰ層				Ⅰ´層	Ⅱ層		Ⅲ層							Ⅲ´層	総計
		H23東	H23西	H23不明	H25	H23東	H23東		H23東							H23東	
		表土・盛土				石敷・裏込	Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ上	石積1内1	石積1内2	石積1内3	石積1内3貝	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2	トレンチ2	
蓋	口	7		2	5	1	5	4	2		1	5	4	8	6	12		62
	胴	21	1	6	12	1	2	4	5	1	1	4	2	14	6	19	1	100
不明	胴	3			1			1				2						7
小計		31	1	8	18	2	7	9	7	1	2	11	6	22	12	31	1	169
総計		58				2	16		92								1	169

第 15 表　沖縄産施釉陶器集計表

器形	部位	Ⅰ層				Ⅰ´層	Ⅱ層			Ⅲ層							Ⅲ´層	小計	総計
		H23東	H23西	H23不明	H25	H23東	H23東			H23東							H23東		
		表土・盛土				石敷・裏込	Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ上	石積1内1	石積1内3	石積1内3貝	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2	トレンチ2		
碗	口	73	8	4	1		4	10	3	1							1	105	
	口～底	2				1												3	285
	底	38	7	2	1			1									1	50	
	胴	72	11	5	3	2	4	10	12		1	1	3	1	2			127	
小碗	口	15	1	2	1													19	
	口～底	1																1	29
	底	8		1														9	
碗・小碗	胴	100	24	3	1	1											1	130	130
火取	口	4		1														5	8
	胴	2	1															3	
火炉	口	3	1	1														5	5
蓋	口	4	1															5	
	口～撮み	2																2	12
	撮み	2																2	
	胴	3																3	
急須	口	10	1															11	
	耳	2	2															4	
	注口	4	2															6	101
	底	13	3	1		1												18	
	胴	45	4	6	1	4											1	61	
	把手	1																1	
皿	口	28	2	1	2													33	
	口～底	4																4	60
	底	16	1	1														18	
	胴	4	1															5	
壷	口～底	1																1	7
	胴	2						3	1									6	
鍋	口	1	1															2	3
	耳											1						1	
鉢	口	10	2	4														16	
	底	8	1		1		1											11	77
	胴	42	2	2	1					1						1		49	
	把手	1																1	
瓶	口				1													1	3
	胴	1	1															2	
瓶・袋物	胴	4						1										5	5
香炉	口	1																1	1
袋物	胴								2					1				3	3
水注	把手							1										1	1
秉燭	底	1																1	1
不明	底	1	2															3	18
	胴	2		7			2	2				1			1			15	
小計		531	79	41	13	9	11	28	18	2	1	3	3	2	3	1	4		749
合計		664				9	57			15							4		

第 16 表　沖縄産無釉陶器集計表

器形	部位	Ⅰ層				Ⅰ´層	Ⅱ層				Ⅲ層						Ⅲ´層	小計	総計
		H23東	H23西	H23不明	H25	H23東	H23東				H23東						H25		
		表土・盛土				石敷・裏込	Ⅱ	Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	石積1内2	石積1内3	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2		Ⅱ・Ⅲ		
碗	口	7	1	1				1					1					11	
	底	1			1													2	18
	胴	1	1	2	1													5	
鉢	口～底	2																2	
	口	9	1	3		1		1					1	1				17	34
	底	4																4	
	胴	7	1	1		2												11	
擂鉢	口	5																5	
	底	2		1	1													4	18
	胴	7	1										1					9	
壷	胴	1																1	
	口	7	2			1		1			1	1						13	
	耳	5	1															6	34
	底	5			2													7	
	胴					1			3	1		2						7	
甕	口		1						1									2	4
	胴	2																2	
壷・甕	底	2	1		1							1						5	67
	胴	30	3	5	1			7	7	1	1	7						62	
壷・甕・鉢	胴	105	28	18	27	2		1									1	182	182
火取	口								1									1	1
火炉	口	2		1					1	1								5	
	底	1																1	7
	胴												1					1	
急須	口	2		1														3	6
	注口	1						1							1			3	
蓋	撮み	1	1											1				3	4
	胴	1																1	
皿	口～底									1								1	1
瓶	口	2																2	3
	胴	1																1	
窯道具	口～底								1									1	2
	不明	1																1	
小計		214	42	33	34	7	1	11	14	4	2	11	4	2	1	1			381
合計		323				7	30				20						1		

青色の呉須で円文が描かれる。

小碗（123） B類の白釉小碗で、褐色の呉須で「…藝校友…」と描かかれる。

蓋（124） A類で褐釉の小型蓋で、円形の摘みをもち、内面に墨書が描かれる。

壺（125） A類で緑灰釉の口縁からわずかに肩が貼る円筒型の壺であるが、歪みがあり正円ではない可能性が高い。

2）無釉陶器

方言では「荒焼（アラヤチ）」と称され、比較的高温で焼成された焼き締め陶器で、自然釉などが掛かるものもある。この内、通有のものより色調が鈍く硬質で自然釉などが掛かる一群が、近年首里城跡で一定量確認され始めている湧田古窯跡で生産されたと考えられている「初期無釉陶器」がやはり出土しており（沖埋文 2010、新垣 2011）、A類とする。それ以外の通有の無釉陶器をB類とする。以下、A類とB類に分けて概要を説明する。

なお、両者合わせての破片数は 381 点を数え、鉢・擂鉢・壺・甕が主体である（**第 16 表**）。

A類 先述した「初期無釉陶器」と考えられる一群で、内外面の色調が灰・暗褐色で、自然釉・泥釉が掛かるものも見られる。皿・窯道具がある。

皿（419） 内湾皿があり、外底は凹凸が見られる。

窯道具（131・309） 共に円盤状のハマである。（131）は糸切痕が残り、（309）は平滑に仕上げられた径 5.5㎝の小型品である。

B類 内外面が明褐色や赤褐色を呈する通有の無釉陶器である。主なものには、皿・鉢・擂鉢・火炉・壺・甕がある。

鉢（126・130）（126）は球胴形の波状文を有するもの、（130）は底部に穿孔された小型の植木鉢である。

甕（127） 大形甕の肩部片で、「十八」と線刻される。

急須（128） 鉄釉が一部掛けられたやや扁平な球胴形である。

瓶（129） 細長い胴部をもつもので、いわゆる「鬼の手」と呼称されるものである。

第 17 表　土器集計表

種類	器形	部位	Ⅰ層				Ⅱ層	Ⅲ層						Ⅲ´層		Ⅳ層	総計
			H23東	H23西	H23不明	H25	H23東	H23東						H23東	H25	H23東	
			表土・盛土				Ⅱ下	石積1内3	石積1内3貝	Ⅲ上	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2	トレンチ2	Ⅱ・Ⅲ	Ⅳ	
グスク土器	不明	胴	10	4	1	5		1	1	2	3	3	1		1	1	33
パナリ焼		胴	1	1													2
宮古土器		胴												1			1
不明土器		胴	5			1	1	2									9
小計			16	5	1	6	1	3	1	2	3	3	1	1	1	1	45
総計			28				1	13						2		1	45

第 18 表　瓦質土器集計表

器形	部位	Ⅰ層	Ⅱ層			Ⅲ層					総計
		H23東	H23東			H23東					
		表土・盛土	Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ上	石積1内3	石積1内3貝	Ⅲ下	Ⅲ下1	
鉢	口				1						1
擂鉢	口	1									1
	胴								2		2
植木鉢	口				1	1					2
	底					1	1				2
	胴	2	1	1		4	1		3	1	13
不明	不明						1	1			2
小計		3	1	1	2	6	3	1	5	1	23
合計		3	4			16					23

第 20 表　カムィヤキ集計表

器形	部位	H23東 Ⅰ層 表土・盛土	総計
壺	胴	1	1
総計		1	1

第 19 表　陶質土器集計表

器形	部位	Ⅰ層				Ⅰ´層	Ⅱ層			Ⅲ層					総計
		H23東	H23西	H23不明	H25	H23東	H23東			H23東					
		表土・盛土				石敷・裏込	Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	石積1内1	石積1内2	石積1内3	石積1内3貝	Ⅲ下1	
鉢	口	9	2	1											12
鍋	口	6					1								7
	胴	11		1											12
鍋蓋	口	2		1				1							4
	胴	1													1
蓋	胴	1													1
火炉	耳	2													2
	底	4							1		1				6
急須	底	4													4
	把手	0	1												1
不明	口	1						1							2
	底	2	1			1									4
	胴	68	2	11	6		2	4	2	1	1	1	1	1	100
小計		111	6	14	6	1	3	6	3	1	2	1	1	1	156
総計		137				1	12			6					156

壺（239） 鉤状の口縁をもつものである。

３）土器

土器は 45 点を数え、グスク土器、パナリ焼、宮古式土器、不明がある（**第 17 表**）。全て胴部の小片であったため、図化は行わなかった。

４）陶質土器

方言で「アカムヌー」又は「カマグァーヤチ」などと称される軟質焼成の土器群である。器形には碗・皿・鉢・鍋・焙烙などが出土している。破片数で 156 点を数える（**第 19 表**）。今回は、小片であったため、図化は行わなかった。

５）瓦質土器

瓦に類した焼成をもつもので、破片数で 23 点を数える（**第 18 表**）。色調は黒・灰色が多いが、褐色のものも見られる。器形には、擂鉢・植木鉢・欄干がある。

擂鉢（132） 口縁が短く直立するもので、やや深めの器形である。湧田古窯跡で出土するタイプである。

植木鉢（133・420・421・491 ～ 494・584） 縄目文を付し、スタンプによる草花文をもつものと思われる。（421）は、口縁が外反するタイプである。（491 ～ 494）は、非常に大型のものである。スタンプ文様は、石井龍太によると、（133・494）は湧田古窯Ⅰであるが、後者は細部がつぶれた印象がある。（492）は湧田古窯Ｇである（石井 2009）。

欄干（583） 欄干の柱の受け部にあたる。湧田古窯跡では出土していないが胎土・色調には明瞭な違いはなく、首里城跡東のアザナ地区などで出土している。

６）カムィヤキ

１点出土している（**第 20 表**）。（121）はカムィヤキの壺胴部片で、A 群とされる古手の資料である（伊仙町 2005）。

⑧瓦

瓦は、高麗系瓦 24 点、大和系瓦 45 点出土しているが、小破片のため図は掲載しなかった（**第 21・22 表**）。

明朝系瓦は 3,074 点出土している（**第 23 表**）。明朝系瓦は、まず色調により大きく灰色系、赤色系に分けられ、おおまかに前者から後者に移行するものとされており、その分類については後述する。一方、瓦当の分類は、上原静（1994・2008・2013）と石井龍太（2006）の研究を参考にして分類したところ、その多くは該当するタイプであったので、両分類を併記して特徴を述べる。

色調・焼成　色調で見ると灰色系、褐色系、赤色系の３つに分けられる。それに、焼成の違いとして前３者よりは硬質で、後述する喜名系とは異なるものを陶器質として、計４つに分けた。

灰色系　灰色のものである。焼成不良のため、褐色系ともされる黄褐色～黄橙色のものも含む。

第 21 表　高麗系瓦集計表

色調	種類	部位	Ⅰ層			Ⅱ層		Ⅲ層	総計
			H23東	H23西	H25	H23東		H23東	
			表土・盛土			Ⅱ上	Ⅱ下	Ⅲ下	
灰色	丸瓦	玉縁部	1						1
	平瓦	筒部	8	1	3	2	1		15
褐色	平瓦	筒部	2	4	1			1	8
小計			11	5	4	2	1	1	24
総計			20			3		1	24

第 22 表　大和系瓦集計表

種類	部位	Ⅰ層				Ⅱ層		Ⅲ層					Ⅳ層	総計
		H23東	H23西	H23不明	H25	H23東		H23東					H23東	
		表土・盛土				Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ上	石積1内3	石積1内3貝	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅳ	
丸瓦	筒部		1											1
平瓦	筒部	2		2	8	2	1	1	2	1	2	1	1	23
不明	筒部	18	3											21
小計		20	4	2	8	2	1	1	2	1	2	1	1	45
総計		34				3		6					1	45

第 23 表　明朝系瓦集計表

種類	Ⅰ層				Ⅰ´層	Ⅱ層			Ⅲ層									Ⅲ´層		総計
	H23東	H23西	H23不明	H25	H23東	H23東			H23東									H23東	H25	
	表土・盛土				裏込・石敷	Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ	Ⅲ上	石積1内1	石積1内2	石積1内3	石積1内3貝	石積1内不明	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2	トレンチ2	Ⅱ・Ⅲ	
軒丸瓦	71	1	6	5	1	4	71	34		9		1		1		11	1	1	2		**219**
軒平瓦	39	2	3	1	0	1	34	16		3		1		1		6	1				**108**
丸瓦	57	9	4	40	1		365	133	2	29		7	7			45	3				**702**
平瓦	140	19	10	69	9	1	826	303	4	65	2	14	17	1	1	91	5		2	1	**1580**
不明	111	25	4	10	2	2	101	29		7		94	38	12		25	2	3			**465**
小計	**418**	**56**	**27**	**125**	**13**	**8**	**1397**	**515**	**6**	**113**	**2**	**117**	**62**	**15**	**1**	**178**	**12**	**4**	**4**	**1**	**3074**
総計	**626**				**13**	**1920**			**510**										**5**		**3074**

第 24 表　明朝系軒平瓦集計表

種類	分類		Ⅰ層				Ⅰ´層	Ⅱ層			Ⅲ層						Ⅲ´層	小計	総計
			H23東	H23西	H23不明	H25	H23東	H23東			H23東						H23東		
			表土・盛土				石敷・裏込	Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ上	石積1内2	石積1内3貝	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2	トレンチ2		
軒丸瓦	A-1-Ⅰ	浦添城A	1			1		1	5	4								**12**	**55**
		浦添城A？			1													**1**	
		西のアザナB			1					1								**2**	
		西のアザナC	6	1					1	1	1							**10**	
		西のアザナD	1		1				1	1	1							**5**	
		西のアザナF	1						1									**2**	
		西のアザナH							2	2	1							**5**	
		西のアザナI							1	1								**2**	
		天界寺B							1									**1**	
		天界寺C	1															**1**	
		天界寺C？								1								**1**	
		湧田古窯B	1		1													**2**	
		湧田古窯E	1						1	1								**3**	
		湧田古窯G							1	1								**2**	
		湧田古窯J	1						1	2								**4**	
		湧田古窯P	1															**1**	
		用持座A							1									**1**	
	A-2-Ⅱ	浦添城C	2						1									**3**	**10**
		浦添城D	1					1	3									**5**	
		天界寺D							2									**2**	
	B-2-Ⅱ	新(首銭東A)	1															**1**	**22**
		天界寺F	10															**10**	
		内間御殿A(灰)	3			1												**4**	
		内間御殿B	5															**5**	
		湧田古窯R	2															**2**	
	C-2-Ⅱ	内間御殿A(赤)							1									**1**	**3**
		内間御殿A(赤・逆)				1												**1**	
		内間御殿B	1															**1**	
	C-2-Ⅳ	内間御殿D	4															**4**	**8**
		内間御殿E	4															**4**	
	不明	牡丹Ⅰ	2															**2**	**41**
		牡丹Ⅱ(灰)	5		1		1		1									**8**	
		牡丹Ⅱ(赤)	1															**1**	
		牡丹Ⅱ？						1										**1**	
		牡丹Ⅲ	1															**1**	
		牡丹Ⅳ	1		1												1	**3**	
		不明(灰)	9						9	3		1	1	1		1		**25**	
	瓦当なし	灰色系	4			2		1	37	16	5			8	1		1	**75**	**80**
		赤色系	1						1		1			2				**5**	
	小計		**71**	**1**	**6**	**5**	**1**	**4**	**71**	**34**	**9**	**1**	**1**	**11**	**1**	**1**	**2**	**219**	**219**
	合計		**83**					**110**			**24**						**2**	**219**	**219**
軒平瓦	a-1-Ⅰ	新(首銭東A)							1									**1**	**29**
		西のアザナB	1						1	2	1			1				**6**	
		西のアザナC	1															**1**	
		天界寺D	1															**1**	
		湧田古窯A	1					1	5	5		1		1				**14**	
		湧田古窯I							1									**1**	
		湧田古窯P	2		1				2									**5**	
	a-2-Ⅱ	浦添城A	1						8					1				**10**	**12**
		崇元寺A	1															**1**	
		湧田古窯R	1															**1**	
	b-3-Ⅱ	淑順門西A	1															**1**	**6**
		天界寺B	4															**4**	
		木曳門B？	1															**1**	
	c-3-Ⅱ	御庭①	1															**1**	**8**
		天界寺C			1													**1**	
		内間御殿A	6															**6**	
	c-4-Ⅱ	仮称・円覚寺②	1															**1**	**1**
	不明	牡丹Ⅰ	3						1	1				2				**7**	**31**
		牡丹Ⅱ(灰)	3			1												**4**	
		牡丹Ⅱ(赤)	4	2	1					1								**8**	
		不明(灰)	1						4	2	1		1	1				**10**	
		復元瓦	2															**2**	
	瓦当なし	灰色系	3						11	5	1							**20**	**21**
		赤色系													1			**1**	
	小計		**39**	**2**	**3**	**1**	**0**	**1**	**34**	**16**	**3**	**1**	**1**	**6**	**1**	**0**	**0**	**108**	**108**
	合計		**45**								**12**						**0**	**108**	**108**
総計			**128**					**161**			**36**						**2**	**327**	**327**

赤色系　赤色、橙色のものとした。なお、マンガン釉と呼ばれる黒色の薄い釉が掛けられるものもある。

陶器質　焼成が堅緻で沖縄産無釉陶器に近くなっており、断面が赤色であるのが特徴である。

喜名窯系　陶器質のうち、淑順門西地区で出土した喜名窯で出土資料と類似するもの（上原ほか 2011）。

軒丸瓦

219 点出土している（**第 24 表**）。瓦当は、石井分類では大別５タイプ、上原分類では大別３タイプとなるが、それぞれ細分類によりおおむね対応できるものである。ただ、一部、該当しないもの、完全に同一とは言えないものや区別できないものもある。以下、分類及び細分類ごとに特徴を説明する。なお、石井は生産地の一つであ

る湧田古窯跡で出土した瓦当を明確にしているので、該当するものは「湧田古窯跡出土」と記しておきたい（石井 2007）。

Ａ－１－Ⅰ（石井）・側視１型ⅠＡ式（上原）

石井分類では、（Ａ）瓦当接合角度が直角で灰褐色、（１）陶笵で裏面側縁の笵バリが未整形、（Ⅰ）花芯が丸く花弁の先端がやや屈曲する表現でデザイン化された牡丹文様Ⅰのグループである。上原分類では、牡丹の茎・花の側面観が表現された側視１型の内、上段の花弁が兎の耳状に大きく長いⅠＡ式とする。

湧田古窯Ｂ（石井）・湧田ⅠＡｂ 02 式（上原）（181） 花芯は丸く格子目が入り、６枚の花弁と子葉と思われる表現が見られるが、花弁に取りつく蔓はない。湧田古窯跡出土。

天界寺Ｃ（石井）・首城下ⅠＡｂ 01 式（上原）（201） 湧田古窯Ｂに比べると、子葉の表現がなく、中段の花弁から上方と下方に伸びる２対の蔓がある。湧田古窯跡出土。

西のアザナＢ（石井）・湧田ⅠＡｂ 01 式（上原）（202・447） 天界寺Ｃと比べると、中段の花弁から伸びる蔓が上方の１対になったものである。湧田古窯跡出土。

湧田古窯Ｅ（石井）・湧田ⅠＡｂ 04 式（上原）（337） 花芯は大形で丸く格子目が入り、その上方に雌しべと思われる４本の縦線があり、茎が逆くの字に屈曲するものである。湧田古窯跡出土。

西のアザナＣ（石井）・首西ⅠＡａ 01 式（上原）（182・203・204・336） 花芯が逆三角形で格子目が入り、中下段の花弁は先端が角ばっている３本の太線で表現されたものである。湧田古窯跡出土。

西のアザナＤ（石井）・湧田ⅠＡｃ 05 式（上原）（183・446） 西のアザナＣに比べると、中下段の花弁は先端が丸い３本の太線で表現され、茎の蔓もない。湧田古窯跡出土。

西のアザナＦ（石井）・湧田ⅠＡｃ 01 式（上原）（205） 花芯は丸く格子目が入り、中下段の花弁が取り囲むように配置されるものである。湧田古窯跡出土。

天界寺Ｂ（石井）・天界ⅠＡｄ 03 式（上原）（347） 花芯は円を三分割したような表現がされ、中段の花弁は４本の蔓となり、茎は逆くの字となる。湧田古窯跡出土。

湧田古窯Ｇ（石井）・天界ⅠＡｄ 01 式（上原）（348・445） 天界寺Ｂと比べると、全体的に丸みを帯びた表現となり、中段の蔓は２本、茎はくの字に屈曲する。湧田古窯跡出土。

西のアザナＨ（石井）・首西ⅠＡｅ 02－１式（上原）（349・448・500） 花芯は３本の太線となり、花弁は大きく弧を描き上向きになり、蔓や茎は短い。（500）は他のものより左側の蔓が鮮明である。湧田古窯跡出土。

浦添城Ａ（石井）・首西ⅠＡｅ 03 式（上原）（338・350） 西のアザナＨに比べると、花弁は右上方以外は閉じておらず、蔓と茎の区別は不明瞭で珠文と接するような表現となるものである。湧田古窯跡出土。

西のアザナⅠ（石井）・首西ⅠＡｅ 04 式（上原）（449） 花芯は１本の長い線、花弁は本来花芯であった線と融合し左右の先端がアーチ状に接し、蔓・茎の表現は分からなくなる。石井によると、浦添城Ａのものと笵傷が一致するので、その彫り直しとされる。湧田古窯跡出土。

Ａ－１－Ⅰ相当（石井）・側視型ⅢＡ式（上原）

石井分類では、牡丹文様（Ⅰ）ではないが、（Ａ）と（１）の特徴をもつためＡ－１－Ⅰ相当と考えた。上原分類では、開いた花を複数の尖った花弁を重ねる蓮の花に似るとされたものである。

湧田古窯Ｐ（石井）・湧田ⅢＡａ 01 式（上原）（206） アーモンド形の花弁が円弧状に連なっており、中央部のものはつぼみのように表現され、小ぶりの珠文が巡る。石井は菊がモチーフとする。湧田古窯跡出土。

Ａ－１－Ⅰ相当（石井）・正視型Ⅰ式（上原）

石井分類では、前述のものと同様でＡ－１－Ⅰ相当である。上原分類では、花文の構図が正視型をなすもので、菊花などがモチーフとされる。

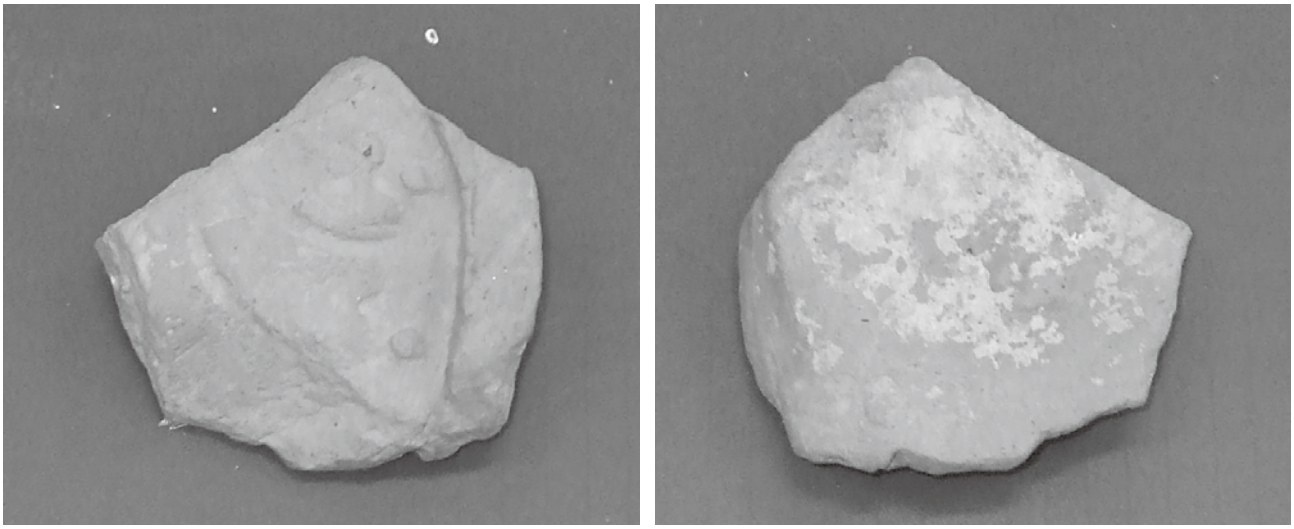


写真 19　瓦当の文様が天地逆に配される軒丸瓦（852）

湧田古窯Ｊ（石井）・湧田Ｉ 01（上原）（450・451） 花芯は中央が丸く盛り上がり、格子目と圏線をもつもので、五角形状の花弁が８枚連続したものが取りつき、二叉の蔓が花弁間より伸びる。湧田古窯跡出土。

Ａ－２－Ⅱ（石井）・側視１型ＩＢ式（上原）

石井分類では、（Ａ）瓦当接合角度が直角で灰褐色、（２）木笵で裏面側縁の笵バリを整形、（Ⅱ）花を斜め上から見た表現の牡丹文様Ⅱのグループである。上原分類では、側視１型の内、（ＩＢ式）花柱を備え、花弁が瓦当面全体に広がるものとする。

浦添城Ｄ（石井）・湧田ＩＢａ 01 式（上原）（339） 最も写実的な牡丹の表現と言え、花芯は上部がやや突出し横に長く、細かな格子目で雌しべが表現され、花弁は上に４枚、下に３枚配され、茎は下へ直線的に伸び一対の葉が付され、その葉脈が凸線細かく表現され、縁辺の鋸歯も細かい。全体的に焼成が良好、胎土も精良であり、外縁や裏面のナデ調整も丁寧である。湧田古窯跡出土。

天界寺Ｄ（石井）・湧田ＩＢａ 02 式（上原）（351） 浦添城Ｄとほぼ同様であるが、花弁が２枚増え、葉も大振りとなり、全体的に不鮮明である。また、浦添城Ｄに比べると、裏面のナデ調整はやや粗い。湧田古窯跡出土。

浦添城Ｃ（石井）・浦城ＩＢａ 01 式（上原）（340） 花芯は小さく逆三角形となり、上方の花弁は細長く、下方は小振りのものとなる。裏面のナデ調整は粗く、指頭圧痕が顕著である。（340）は、文様は鮮明だが、中央付近に水平方向の笵傷が見られる。湧田古窯跡出土。

Ｂ－２－Ⅱ（石井）・側視１型ＩＢ式（上原）

石井分類では、（Ｂ）瓦当接合角度が鈍角で灰褐色、（２）木笵で裏面側縁の笵バリを整形、（Ⅱ）牡丹文様Ⅱのうち花弁が長い表現のグループである。上原分類では、側視１型ＩＢ式の中でもやはり花弁が長いものとする。

湧田古窯Ｒ（石井）・首木ＩＢｂ 01 式（上原）（207） 花芯は天界寺Ｅと同様で、萼（がく）の上方の花弁は左５枚、右４枚、下方は小振りの葉もしくは花弁のような文様が３枚見られる。湧田古窯跡出土。

新タイプ＜銭蔵東Ａ＞（185） 湧田古窯Ｒに近いが、花弁が左５枚、右６枚と異なり、直接花芯から延びる萼の下は点状のものが一つとなっている。新タイプであり、石井の呼称法に基づき、銭蔵東Ａと仮称する。

内間御殿Ａ（石井）・内間ＩＢｂ 01 式（上原）（208・209） 花芯は半円形であるが格子目が施され、湧田古窯Ｒなどより下方に位置する。花弁は長細く表現され、左が５枚、右が６枚で、萼は横線となり、その下に１点の突起が見られる。

内間御殿Ｂ（石井）・内間ＩＢｂ 02 式（上原）（210） 内間御殿Ａとほぼ同じだが、花弁がやや細長くなっている点が異なる。

天界寺Ｆ（石井）・御茶ＩＢｂ 01 式（上原）（184・211） 花芯は内間御殿Ｂに比べると上縁が丸みを帯び、

花弁は５対となり、萼の横線が若干長い。

Ｃ－２－Ⅱ（石井）・側視１型Ｂ式（上原）

石井分類では、（Ｃ）瓦当接合角度が鈍角、赤色である点以外は、先述のＢ－２－Ⅱと共通している。上原分類でも、先の側視１型ＩＢ式の花弁の長く赤色系であるとする。

内間御殿Ａ（石井）・内間ＩＢｂ01式（上原）（352・852） 文様は先述と同じだが、瓦当接合角度が鈍角、色調が赤色であることが異なる。なお、（852）は小片ではあるが、天地が逆にスタンプされたと思われるものであまり例を見ない。

Ｃ－２－Ⅳ（石井）・側視２型Ⅲ式（上原）

石井分類では、（Ｃ）瓦当接合角度が鈍角で赤色、（２）木笵で裏面側縁の笵バリを整形、（Ⅳ）花を上から見下ろした表現の牡丹文様Ⅳのグループである。上原分類では、（側視２型）花部が大きく描かれたものの内、（Ⅲ式）隅丸方形状の花芯をもつものとする。

内間御殿Ｄ（石井）・円覚Ⅲａ01式（上原）（212） 花芯は隅丸方形状でその中央には凹線が３本である。

内間御殿Ｅ（石井）・内間Ⅲａ01式（上原）（213） 花芯は隅丸方形状でその中央には凹線が４本である。

軒平瓦

瓦当は、石井分類では大別４タイプ、上原分類では大別４タイプとなっているがその対応関係は一部整合していないが、細分類では対応している。なお、先述したように、湧田古窯跡出土瓦当（石井 2008）はその旨を記した。

ａ－１－Ｉ（石井）、側視１型ＩＡ・Ⅱ式（上原）

石井分類では、（ａ）瓦当裏面接合粘土が厚く、灰褐色、（１）陶笵で笵バリ未整形、瓦当裏面のナナメナデ、（Ｉ）花芯が丸く花弁が上中下の３段に配された牡丹文様Ｉのグループである。上原分類では、牡丹の茎・子葉・花の側面観が表現された側視１型の内、花芯を中心に花弁が３段に配されたＩＡ式が相当する。

湧田古窯Ａ（石井）・首西ＩＡａ01（上原）（341・354・452） 花芯は丸く格子目が入り、葉の縁は刻みは小さいが横位の葉脈も見られ、茎はくの字に屈曲する。湧田古窯跡出土。

第 25 表　明朝系丸・平瓦集計表

種類	色調	部位	角	Ⅰ層				Ⅰ´層	Ⅱ層			Ⅲ層									Ⅲ´層		総計
				H23東	H23西	H23不明	H25	H23東	H23東			H23東									H23東	H25	
				表土・盛土				石敷・裏込	Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ	Ⅲ上	石積1内1	石積1内2	石積1内3	石積1内3貝	石積1内不明	Ⅲ下	Ⅲ下1	トレンチ2等	Ⅱ・Ⅲ	
丸瓦		玉縁部・端部	角2・角1つ									1											1
	灰色	玉縁部	玉縁のみ	9	2	3	8	1		23	13		2		1	4				1			67
			角1つ	4	2	6	10			82	24	1	12		4	1			7	1			154
			角2つ	1		1	1			6	1								3				13
			角なし	1	1																		2
		筒部	角なし	1															2				3
			–	11	3	2	12			140	49		6		1	2			16				242
		端部	角1つ	4	1		3			60	22		6		1				4				101
			角2つ							2													2
			角なし	4		1				37	15		2						6				65
	赤色	玉縁部	玉縁のみ	3			2			4													9
			角1つ	1			2			2	3								3				11
			角2つ							1	1								2				4
			なし							2	1												3
		筒部	–	6			2			6	2		1						2				19
		端部	角1つ								1									1			2
			角なし	2							1												3
	喜名系	玉縁部	角1つ			1																	1
丸瓦 集計				47	9	14	40	1		365	133	2	29		7	7			45	3			702
平瓦		広端・狭端	角1つ							4	1												5
	灰色	広端部	角1つ	8		5	6			109	76		11			3			9				227
			角2つ							8	4								1				13
			なし	18	3	3	5	4	1	228	82		14	2	4	2			21	1	1		389
		筒部	–	29	5	1	34	1		214	58	1	18		8	6	1		21	1			398
		狭端部	角1つ	8	1	2	3	1		130	41	1	9			3		1	17	1			218
			なし	6	1	2	6			57	20		3		1	2			5	2			105
	赤色	広端部	角1つ							1													1
			なし	3	1	1		1		31	13	2	5						11				68
		筒部	–	22	4		8	1		12	2		4		1	1			1		1		57
		狭端部	なし	9	1	1				20	3		1						2				37
	赤褐色	広端部	角1つ							3									1				4
			なし	3			1																4
		筒部	–	6				1		2												1	10
		狭端部	角1つ	2		1				6	3												12
			なし	12	3	2	6												2				25
	喜名系	広端部	角1つ			1																	1
			角なし	4																			4
		筒部	–	1						1													2
平瓦 集計				131	19	19	69	9	1	826	303	4	65	2	14	17	1	1	91	5	2	1	1580
小計				178	28	33	109	10	1	1191	436	6	94	2	21	24	1	1	136	8	2	1	2282
総計				348				10	1628			293									3		2282

西のアザナＢ（石井）・首西ＩＡａ 02（上原）（453・502） 湧田古窯Ａと似るが、花芯が逆三角形で、花弁の裂け目が全体的に小さく、葉は細長く伸び、葉脈が中心に１本のみ見られるものである。湧田古窯跡出土。

第 26 表　明朝系瓦ヘラ記号集計表

種類	部位	Ⅰ層		Ⅱ層		Ⅲ層		総計
		H23東	H25	H23東		H23東		
		表土・盛土		Ⅱ中	Ⅱ下	石積1内2	石積1内3	
丸瓦	玉縁	2	2	4				8
	筒			1			1	2
	有					1		1
平瓦	有	2	1	18	6		1	28
軒平瓦	有			1				1
小計		4	3	24	6	1	2	40
総計		7		30		3		40

西のアザナＣ（石井）･天界ＩＡｅ 01 式（上原）（186） 西のアザナＣに比べると、花芯は横長の楕円形で中は縦線のみで、葉の先端が閉じない。湧田古窯跡出土。

新タイプ＜銭蔵東Ａ＞（342） 西のアザナＢより更に花弁の先端の裂け目がないもので、新タイプと考えられる。石井の呼称法に基づき、銭蔵東Ａと仮称する。

天界寺Ｄ（石井）・湧田ＩＡｃ 02（上原）（214） 上段の花弁が点状となり、下段の花弁も横方向に長く伸びた感じである。湧田古窯跡出土。

湧田古窯Ｉ（石井）・湧田ＩＡｅ 01 式（上原）（353） 花芯は円形で中央が窪んでおり、葉は葉脈が中心だけでなく縁辺にも向けており、茎は右側へ伸びる。湧田古窯跡出土。

ａ－１－Ⅰ相当（石井）、側視１型Ⅱ式（上原）

石井分類では、牡丹文様ではないが、（ａ）（１）が共通しているためａ－１－Ⅰに相当すると考えられる。上原分類では、牡丹の茎・子葉・花の側面観が表現された側視１型の内、花が上下に展開するⅡ式が相当する。

湧田古窯Ｐ（石井）・首西Ⅱ 01（上原）（344） 花芯が横長の楕円形で上方の花弁が扇状に表現され、葉は幅広のものである。湧田古窯跡出土。

ａ－２－Ⅱ（石井）、側視１型ＩＢ・ⅢＡ・ⅢＢ式（上原）

石井分類では、（ａ）瓦当裏面接合粘土が厚く、灰褐色、（２）木笵で笵バリ整形が不徹底、瓦当裏面のナナメナデ、（Ⅱ）花を斜め上から見た表現の牡丹文様Ⅱのグループである。上原分類では、側視１型のうち立体的な花芯をもつＩＢ式、写実的な花文のⅢＡ式、抽象的な花文のⅢＢ式に含まれる。

浦添城Ａ（石井）・首西ⅢＡ 01（上原）（215・343） 花芯はやや小振りの楕円形で、それを中心として５枚の花弁が配され、葉は縁辺の鋸歯が大きく表現されている。文様は比較的鮮明なものが多い。湧田古窯跡出土。

崇元寺Ａ（石井）・首下ⅢＢｂ 01 式（上原）（189） 花芯は横長の楕円形で格子目が入り、上方にはＶ字状の太線が見られ、５つの花弁が配され、葉は上方に伸びる。

ｂ－３－Ⅱ、側視１型ⅢＢ式（上原）

石井分類では、（ｂ）瓦当裏面接合粘土が薄く、灰褐色、（３）木笵で笵バリ整形が不徹底、瓦当裏面の横ナデ、（Ⅱ）花を斜め上から見た表現の牡丹文様Ⅱのうち花弁が小さくなったグループである。瓦当裏面の横ナデはあまり明瞭ではない。上原分類では、抽象的な花文のⅢＢ式のうち灰色系が相当する。

木曳門Ｂ（石井）・首管ⅢＢａ 02 式（上原）（218） 花芯は丸く格子目が入り、左右に２対、下に１枚の花弁が配置され、その横に葉脈が突き出たような葉、茎はＵ字状の線で表現される。今回出土したものは小片である。

天界寺Ｂ（石井）・御茶ⅢＢｂ 01 式（上原）（187・188・216） 木曳門Ｂに比べると、葉の葉脈の間隔が狭くなっている。

淑順門西Ａ＜仮称１＞（石井）（217） 天界寺Ｂに比べると、下の花弁が細くなっている。本資料は、石井によりこれまで出土遺跡が不明なものとして「仮称１」とされていたが、首里城跡淑順門西地区で出土しており、「淑順門西Ａ」としたものである（沖埋文 2013）。

ｃ－３－Ⅱ（石井）、側視１型ⅢＢ式（上原）

石井分類では、（ｃ）瓦当裏面接合粘土が薄く、赤色、（３）木笵で笵バリ整形が不徹底、瓦当裏面の横ナデ、（Ⅱ）花を斜め上から見た表現の牡丹文様Ⅱのうち花弁が小さくなったグループである。上原分類では、抽象的な花文のⅢＢ式の赤色系が相当する。

内間御殿A（石井）・御茶ⅢＢａ02式（上原）（190・219） 天界寺Ｂに比べると、花芯の格子目、花弁内の線、葉脈の間隔が広い。石井にによると、天界寺Ｂと笵傷の場所が一致するため、彫り直しと考えられている。

御庭①（石井）・御茶ⅢＢａ03式（上原）（220） 内間御殿Aと比べると、下の花弁の縦線が３本である。

丸瓦 破片数で 702 点見られる（**第 25 表**）。図化した（499）の全長は約 35㎝で、比較的計測できた淑順門西地区の資料よりやや大きい。

平瓦 破片数で 1,580 点見られる（**第 25 表**）。図化した（501）は、桶板綴じ痕が５か所見られた。

なお、丸瓦、平瓦、軒平瓦の平瓦部分にヘラ記号があるものは 40 点数える（**第 26 表**）。

⑨塼

塼は総破片数 847 点出土している（**第 27 表**）。上原静の分類（2011）を参考にして、形態により大きく４つに分けた。滑らかな面を上面とした。

正方形（345・346・454・526・657・738） 長さは、一辺 24 ～ 26cm である。ヘラ記号は、（345）が側面に３本線で矢印状、（346）が側面に「八」、（657）が上面に円圏内に「大」、（738）は分銅形がある。

第 27 表　塼集計表

色調	形状	厚さ	被熱	漆喰	角	Ⅰ層 H23東 表土・盛土	Ⅰ層 H23西 表土・盛土	Ⅰ層 H23不明 表土・盛土	Ⅰ層 H25 表土・盛土	Ⅰ´層 H23東 石敷・裏込め	Ⅱ層 H23東 Ⅱ上	Ⅱ層 H23東 Ⅱ中	Ⅱ層 H23東 Ⅱ下	Ⅲ層 H23東 Ⅲ	Ⅲ層 H23東 Ⅲ上	Ⅲ層 H23東 石積1内2	Ⅲ層 H23東 石積1内3	Ⅲ層 H23東 石積1内3貝	Ⅲ層 H23東 Ⅲ下	Ⅲ層 H23東 Ⅲ下1	Ⅲ´層 H25 Ⅱ・Ⅲ	総計
灰色	正方形	a	無	無	1	1					1	5	11		2	2	1	1	5		1	30
					2							1	2									3
					無				1			4	3						1			9
		b	無	無	1	1	1	1	3		1	31	26	2	5	11	4	1	11	7	1	106
					2							3	4			2			3			12
					3								1									1
					無	1			1			22	14		6	4	2		4			54
	三角形	a	無	無	1							3	3		1	1		1	1			10
					2								1				1					2
					無					1			1									2
		b	無	無	1				1			5	4		1	1			4	1		17
					2							1	1			1	1					4
					無							1	1		1			3				6
	噛み合わせ式	計測不可	無	無	1							3	5	1	1	2			4	3		19
					2	1		1								2				1		5
					無	4		1		1		5	5		6	3	3		12	2	1	43
				有	2								1									1
					無								1						2			3
	有文	計測不	無	無	無	1			1													2
	破片	計測不可	無	無	1	3			8		1	10	7		1	1	1		7	5		44
					2												1			1		2
					無	13	1	17	18			73	15		10	51	56	46	11	3	1	315
			有	無	無				1													1
灰色 小計						25	2	20	34	2	3	167	106	3	34	81	70	52	65	23	4	691
灰色 合計						81				2		276					328				4	691
赤色	正方形	a	無	無	1								1		2	1	1		2	1		8
					無											1	1					2
		b	無	無	1							6	4	1	5	2	1		5	4		28
					2							1	1		1				1			4
					3											1						1
					無	1						2		2	2			1				8
	三角形	a	無	無	1								2									2
					2								2									2
					無										1							1
		b	無	無	1							1										1
					無							1										1
	噛み合わせ式	計測不可	無	無	1							1				2						3
	有文	計測不	無	無	無	1																1
	破片	計測不可	無	無	1				1			1	4			1		1	1	1		10
					無	7	1	1	4			8	2		1	25	25	7	2	1		84
赤色 小計						9	1	1	5			21	16	3	12	33	28	9	11	7		156
赤色 合計						16						37					103					156
総計						97				2		313					431				4	847

第 28 表　塼ヘラ記号集計表

色調	刻印・記号		形状	Ⅰ層 H23東 表土・盛土	Ⅰ層 H25 表土・盛土	Ⅰ´層 H23東 石敷・裏込	Ⅱ層 H23東 Ⅱ中	Ⅱ層 H23東 Ⅱ下	Ⅲ層 H23東 石積1内2	Ⅲ層 H23東 石積1内3	Ⅲ層 H23東 Ⅲ下	総計
灰色	一本線	線刻	破片		1		1					2
		型押	正方形					1				1
	二本線	直線	三角形					1				1
			破片	1								1
		レンズ形	噛み合わせ式			1						1
	三本線		破片				1					1
	太（円圏）		三角形					1				1
	大		正方形					1				1
	大（円圏）		正方形						1		1	2
			三角形				1					1
	大二（円圏）		三角形						1	1		2
	分銅形		三角形								1	1
			正方形								1	1
	八		正方形				1					1
	不明		正方形							1		1
赤色	大（円圏）		三角形				1					1
小計				1	1	1	5	4	2	2	3	19
総計				2		1	9		7			19

三角形（455・527・658）（527）・（658）は上面に円圏内に「大二」である。長辺は推定で 31 ～ 35㎝ある。

噛み合わせ式（191・528・739）（191）は、暗渠とされるⅢ式Ａ類の蓋形、528 は下面に下駄状の突起をもち屋根の雨水処理に使用されたとされるⅣ式Ａ類、（739）は上原の分類にはないが縁辺に段をもち突起部があることからⅣ式に近いものと思われる。

なお、ヘラ記号を有するものは 19 点ある（**第 28 表**）。

⑩金属製品

金属製品は集計できたもので3,118点を数え、材質により青銅製品、鉄製品、アルミ製品がある（**第 29 表**）。なお、1cm 以下の金属製品小片は重量を量ったところ 1.754 ｇで、製品破片だけでなく、銅滓・鉄滓も含まれている（**第 30 表**）。今回の調査では青銅製品に比べ鉄製品が圧倒的に多く出土している。なお、アルミ製品は 1 点で、沖縄戦時と思われるアメリカ砲弾製の信管である（199）。

１）青銅製品

青銅製品は 307 点出土しており、冑金具、甲冑金具、刀装具、飾金具、香炉、釘、鋲、簪、薬莢、砲弾、青銅滓もしくは青銅溶着物、不明製品として分類した。このうち、鍍金が施されたものは 21 点あった。以下、図化したものについて説明する。なお、冑・甲冑金具、刀装具の用語は、（笹間 1997）を参考にした。

冑金具 (165・628・630)　冑に使用された金具である。冑の前面を装飾する立物である鍬形の中央飾の一部で、首里城跡京の内地区 (沖埋文 2009) 等で出土したタイプと同様のものである。

甲冑金具（167・168・431・631 ～ 633・634・643・729）　本報告では、甲冑に使用された飾金具を総称した。

八双金具は、甲冑の主に長方形で取りつけるために小孔を有した飾金具を指す。（167）は表面に鍍金されており、（631・632）は、線刻と魚々子で花紋のようなものが施される。

第 29 表　金属製品集計表

種類	器形	分類	Ⅰ層				Ⅰ´層	Ⅱ層				Ⅲ層										Ⅲ´層		総計
			H23東	H23西	H23不明	H25	H23東	H23東				H23東										H25	H23東	
			表土・盛土				石敷・裏込	Ⅱ	Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ上	石積1内1	石積1内2	石積1内3	石積1内3（フロ5）	石積1内3貝	石積1内3貝（フロ5）	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2	Ⅱ・Ⅲ	トレンチ2	
青銅製品	冑金具	鍬形	1												2									3
	甲冑金具	総角付環座									1				1									2
		八双金具	2												1	1	1							5
		覆輪	4			1									1		3			1		1		11
	刀装具	小柄									1													1
		鍔	1																					1
		切羽		1																				1
		柄縁											1		1									2
		柄頭															1							1
		目貫								1														1
	飾金具	花弁状								1														1
		環座																1						1
		不明								1	1								1	1	1			5
	釘	角釘	1	1	2																			4
		丸釘	3						1	3	2													9
	香炉		1																					1
	砲弾片		11		2		1																	14
	鋲		2							6	2			1	4		1		2					18
	薬莢		2		1		1																	4
	簪		1			1				1														3
	青銅滓もしくは溶着片										1				34		2	2	1					40
	不明		29	1	2	1	2			7	14	3		0	58	21	31		4	4	1		1	179
青銅製品 集計			58	3	7	3	4		1	20	22	3	1	1	102	22	39	3	8	6	2	1	1	307
鉄製品	甲冑小札		2		3						4			10	200	31	83	2	4	5	13			357
	甲冑金具	鎧板													1									1
		鎖					1			1	1		2	63	2	58	29							157
	釘	角釘	88	5	1	40	3	4	2	62	66	6	2	95	762		283		47	16	11	25	32	1550
		丸釘	11																					11
	くさび																1							1
	はさみ		1																					1
	薬きょう		1																					1
	鋲														1									1
	釣針														13		2							15
	鉄滓		1			1								1	9	19	16				1			48
	鉄鏃		1								1	1								1				4
	刀子														1		1							2
	不明鉄製品		26			8	1		1	5	4	1		43	228	131	136		52	14	2	2	6	660
鉄製品 集計			131	5	4	49	5	4	3	68	76	8	4	212	1217	239	551	2	103	36	27	27	38	2809
鉄・青銅製品　不明										1														1
鉄・青銅製品 集計										1														1
アルミ	砲弾・信管		1																					1
アルミ 集計			1																					1
小計			190	8	11	52	9	4	4	89	98	11	5	213	1319	261	590	5	111	42	29	28	39	3118
総計			261				9	195				2586										67		3118

総角付環座は、胸部と袖を緒で結ぶための金具である。(431) は切子状の頭部に環が通されたもの、(643) は袋状の頭部と鋲部分のみであるが、共に鍍金されている。勝連城跡に類似したものが出土している (勝連町 1990)。

第 30 表　金属製品小片（鉄・青銅滓含む）集計表

重量(g)		層序／調査区／遺構・土層							総計
		Ⅰ層		Ⅱ層	Ⅲ層				
		H23東	H25	H23東	H23東				
		表土・盛土		Ⅱ下	石積1内2	石積1内3	石積1内3(ﾌﾛ5)	石積1内3貝	
鉄製品	1cm以下	21.86	5.53	7.65	76.45	662.24	354.25	568.39	**1696.37**
青銅製品	1cm以下				2.6	49.36		5.76	**57.72**
小計		**21.86**	**5.53**	**7.65**	**79.05**	**711.6**	**354.25**	**574.15**	**1754.09**
総計		**27.39**		**7.65**	**1719.05**				**1754.09**

覆輪（168・633・634・729）は、甲冑を構成する鉄板の縁を覆う断面U字形の金具である。

刀装具（164・178・319・438・518・627・647） 刀及び鞘の部分に使用された金具を総称する。鍔（164）、その両面に添える薄い金具である切羽（178）、刀身と柄を支える柄縁（518・627）、柄の飾金具である目貫（319）・柄頭（647）、小柄（438）がある。

飾金具（320・324・629・730） 装飾的であるが、用途が特定できないものを含めた。（320）は、表面鍍金され花弁状で中央に穿孔されているので、何かに取りつけるためのものと思われる。（324）は、一端は花弁形になっている筒状の金具で、紐等を通す受け具の可能性がある。(629)は、放射状の刻みがある環座である。(730)は、フック状の金具で、全面に鍍金されている。

香炉（170） 連珠文から鼎型香炉の一部と思われるが、銭貨が溶着している。

釘（161 ～ 163・325 ～ 327・433・434） 頭部の形状により角釘と丸釘の２つに大別できる

角釘　頭部平面形が方形のもの（161）と頭部側面形が逆Ｌ字状を呈するもの (163) がある。

丸釘　頭部の側面形が円盤状のもの。長さによって細分できる

ａ類（25 ～ 327,433） 長さが 2.5㎝以下のもの。

ｂ類（162,434） 長さが 5.0㎝以下のもの。ａ類に比べ重厚感がある。

鋲（160・321・432・635 ～ 640） 脚部が二股になったもので、頭部の多くは笠形である。ただ、（321）は花弁状、（637）は扁平である。

かんざし（169,328） いずれも側差で、カブが耳かき状 (169) と匙状 (328) のものがある。

薬莢（171・198・230）（171・198）はスナイドル銃、（230）は村田銃のものである。

砲弾（200） ライフルマークが残存している砲弾の弾帯で、おそらく爆破した際の破片である。

青銅滓もしくは青銅溶着物（436・649・732） 図化したものは青銅滓で、(649・732）は明瞭な碗形滓で、(436）は不整な板状のものである。その他、銭貨など様々なものが溶着したものも見られる。

不明製品（166・226・322・323・435・437・641・642・644 ～ 646・648・731）

用途が特定できないものを一括した。特徴的なものについて述べる。（166）は、菊花紋が描かれた薄い板状のものが巻かれて棒状にされており、片面に孔が空く。（323・641）は、鉤状の金具である。（437・645）は環で、先述した総角付環座などのものの可能性が考えられる。（435）は、三角錐形の頭部と棒状の茎部があるが、孔を通す何らかの留め具であろうか。詳細は観察表を参照していただきたい。

２）鉄製品

鉄製品は 2,809 点出土しており、鉄鏃、甲冑小札、甲冑金具、刀子、釘、鋲、釣針、くさび、はさみ、不明製品に分類した。

鉄鏃（156・495） 共に、上原・宮城分類 (上原・宮城 2007) によるⅠ類の平頭式であるが、平面形は直線的なもの（156）、中央が窪むもの（495）と異なっている。

甲冑小札（157・519・605 ～ 612・721 ～ 724） 金山順雄（1999）の研究を参考にすると、碁石頭伊予札（157・605 ～ 607・609・610）、本札（612・721 ～ 723）、三目札（724）、長辺に刻みがある小札ではない可能性があるもの（608）、その他札頭がなく限定できないもの（519・611）がある。

甲冑金具（227・520・614・620・623） 甲冑に使用されたと考える金具である。

第 31 表　銭貨集計表

分類	時代	銭種	Ⅰ層				Ⅰ′層	Ⅱ層			Ⅲ層											小計	総計
			H23東	H23西	H23不明	H25	H23東	H23東			H23東												
			表土・盛土				石敷・裏込	Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ上	石積1内1	石積1内2	石積1内3	石積1内3（ブロ5）	石積1内3貝	石積1内3貝（ブロ3）	石積1内3貝（ブロ5）	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2		
中国銭	唐	開元通寶	1							2	1		1									**5**	**92**
	北宋	嘉祐元寶	2																			**2**	
		嘉祐通寶	1																			**1**	
		元豊通寶	2								1		1			1						**5**	
		元祐通寶																	1			**1**	
		皇宋通寶	1							3											1	**5**	
		至道元寶								1												**1**	
		祥符元寶																			1	**1**	
		政和通寶	1								1			1					1			**4**	
		聖宋元寶									1											**1**	
		天聖元寶	3			1				1	1		1						1			**8**	
		熙寧元寶	1							1				1								**3**	
	明	永楽通寶	6				1		2												1	**10**	
		洪武通寶	8		1			1	2	1	1								1		1	**16**	
	清	順治通寶			1																	**1**	
	不明	銭種不明	6		1		2			3	6		1		1	1		2	3	1	1	**28**	
日本銭	近世	寛永銭銭	1																			**1**	**5**
	近代	一銭硬貨	1	1																		**2**	
	現代	十円硬貨	2																			**2**	
無文銭			9		2				20	11			1	2					1		1	**47**	**255**
輪銭								6	14				1									**22**	
不明			41		2	6	3	4	17	37	9	1	4	5	2	2	1		41	2	9	**186**	
小計			**86**	**1**	**7**	**7**	**6**	**11**	**55**	**60**	**21**	**1**	**10**	**9**	**3**	**4**	**1**	**2**	**50**	**3**	**15**	**352**	
総計			**101**				**6**	**126**			**119**												

鎖は環が連続して繋がれたもので、首里城跡京の地区等（沖埋文 2009）で出土しており、鎖帷子や籠手などに使用されたと考えられる。（520・623）は八重鎖で、（227・620）は鎖が鉄板に取り付けられたものである。

（614）は、上方に摘み上げた縁があり、鎧板の部分ではないかと考えられる。

刀子（613・616） 共に刀子の基部と考えられるものである。

釘 (159・626) 角釘がほとんどで、図化したものと同様、頭部の側面形態が逆 L 状のものが多く出土している

鋲（624） 脚部が不明だが、笠状の頭部であり、通常の釘ではないので、鋲とした。

釣針 (625) 単式釣針でかえしはないが、先端がわずかに屈曲している。

くさび（617） 縦長の三角形を呈し、先端部が舌状になっているのでくさびと考えた。

はさみ（197） 洋はさみで、持ち手の大きさから考えると近代以降のものであろう。

不明製品（158・521・615・618・619・621・622・725 ～ 728）

用途が特定できないものを一括した。特徴的なものについて述べる。甲冑の板と考えられるものとして、如意頭が呈し小孔列がみられるもの（615）、厚みがあり直線的なもの（618・727・728）、バチ状のもの（621）、小孔列があるもの（725）がある。（726）は、断面 S 字状で、棒状の別個体が刺さっているように見え、何らかの留め具であろうか。詳細は観察表を参照していただきたい。

これらのほか、（318）は三角錐の部分が青銅で、それに接着された棒部分が鉄である。青銅製である（435）と形態が似ている。

⑪銭貨

中国銭 92 点、日本銭 5 点、無文銭 47 点、輪銭 22 点、銭種不明 186 点が出土している (第 31 表)。銭種の判別には（永井 1994）を用い、残存率が 1/4 程度の有文銭を銭種不明とする。

中 国 銭（172 ～ 176・180・331・332・334・440 ～ 443・496 ～ 498・524・525・653・654・656・733 ～ 736） 初鋳 621 年の開元通寶（525）が最も古く、初鋳 1644 年の順治通寶（104）が最も新しい。その内訳は唐銭 1 種 5 点、北宋銭 11 種 32 点、明銭 2 種 26 点、清銭 1 種 1 点、不明 28 点となる。また、背面に文字がある背文字銭（173・497）や方孔を円形に加工したもの（443）、刻みをいれるもの（441）、他と比べ外縁が小さい磨輪銭（331）を確認することができる。このほか、銭の文字を確認することはできなかったが、11 枚の銭貨が被熱を受けたものが出土している（334）。

日本銭（179・180） 初鋳 1739 年の寛永通寶の鉄銭（179）と一銭硬貨（180）が出土している。

無文銭（177・333・335・444・655） いずれも外縁径が 1.6 ～ 2.0cm の間に収まり、孔は方形である。外

縁径の差が小さく、孔径に対する外縁径の大きさで分類する方法 (是光 1993) を参考にすると、孔径の大きさが外縁径の 1/2 程度（335・444)、1/3 程度（177・333)、1/2 ～ 1/3 の間（655）の３つに分けることが可能である。

輪銭（329・330・737） 孔から外縁端が２㎜程度のものである。

出土傾向 Ⅲ層では中国銭、Ⅱ層になると無文銭や輪銭が多く出土する。銭種ごとの出土数は、無文銭が 40 点と最も多く、次に洪武通寶、天聖通寶と永樂通寶が続く。一方で、銭貨は破損したものが多く、火災等何らかの原因で被熱したものも少なからず見られた。これらは、銭貨を破砕し青銅製品の原材料として用いている可能性を指摘している（沖埋文 2007 ａ)。

⑫その他の製品

その他の製品には、骨・石・貝・ガラスの各製品といった素材別に加え、ガラス玉・円盤状製品・煙管・るつぼ・ふいご・漆喰・漆を一括した。なお、図化していないプラスチック製品には、ペンホルダーがある（**第 46 表**)。

１）骨製品

17 点数え、骨ベラやビート、歯ブラシなどが確認されるが、過半の資料は器種不明もしくは未成品とみられるものである（**第 32 表**)。

器種の推定できる製品（152、196、313、424、425、

第 32 表　骨製品集計表

種類	Ⅰ層	Ⅱ層			Ⅲ層			総計
	H23西	H23東			H23東			
	表土・盛土	Ⅱ	Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2	
ボタン	1							1
歯ブラシ	1							1
骨ヘラ				2		1		3
骨針			1					1
箸	1							1
不明	2	1	1	3	2		1	10
小計	5	1	2	5	2	1	1	17
総計	5	8			4			17

第 33 表　石製品集計表

点数		層序／調査区／遺構・土層														合計
		Ⅰ層			Ⅰ´層	Ⅱ層		Ⅲ層								
		H23東	H23西	H23不明	H23東	H23東		H23東								
種類	器種	表土・盛土			石敷・裏込	Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ上	石積1内1	石積1内2	石積1内3	石積1内3貝	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2	
石製品	硯	1									1					2
	硯？	1														1
	石球	6				3			1	5	9	1		1		26
	石盤										1		1			2
	砥石	1				1				2	1	1		1		7
	玉盤	1														1
	玉器残滓	1								1			1			3
	不明	2								1	1	1	1		2	8
石製品　小計		13				4			1	9	13	3	3	2	2	50
石製品　合計		13				4		33								50
石造物	勾欄	1														1
	積石				1											1
	礎石		2			2						1				5
	不明			1		1	1	1		4	5		1			14
石造物　小計		1	2	1	1	3	1	1		4	5	1	1			21
石造物　合計		4			1	4		12								21
小計		14	2	1	1	7	1	2	1	13	18	4	4	2	2	71
合計		17			1	8		45								71

第 34 表　石材集計表

重量(g)			Ⅰ層				Ⅱ層		Ⅲ層								Ⅲ´層	総計
			H23東	H23西	H23不明	H25	H23東		H23東								H23東	
種類	石材		表土・盛土				Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ上	石積1内1	石積1内2	石積1内3	石積1内3貝	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2	トレンチ2	
礫	火成岩	石英閃緑岩	60.6		13.3													73.9
	鉱物等	メノウ											0.1					0.1
		水晶									0.1		0.6					0.7
		石英									5.4	2.2	5.2					12.8
		碧玉					80.8											80.8
		翡翠											0.2					0.2
	堆積岩	サンゴ石										77.6						77.6
		スコリア										2.7	0.9					3.6
		チャート												1.3				1.3
		ニービ	119.1				7.7	46		17.8	30.9	120.1	84.5	2.1		14	26.8	469
		粟石石灰岩										9.7	14.7					24.4
		軽石									1.74	5.3	0.7			5.7		13.44
		古生代石灰岩	10.5															10.5
		石灰質砂岩	10.3								32.4	418.8	453.5					915
		中粒砂岩	78	11.1	3.7						1.8	16.1	1.1					111.8
		泥岩										1.3	7.7					9
		頁岩									0.1	10.7						10.8
		礫岩							0.8									0.8
	変成岩	千枚岩	1.5			5.1					6.3		1					13.9
		粘板岩	7.7									10.4	1.4	170.9				190.4
		片岩										2.9						2.9
		緑色岩	33.6															33.6
		緑色千枚岩	2.6					3.6			4.6							10.8
		緑色片岩	4.9															4.9
玉砂利	堆積岩	中粒砂岩	232.1		10.2										51.3			293.6
	変成岩	粘板岩		42.8														42.8
		緑色片岩	38.8															38.8
小計			599.7	53.9	27.2	5.1	88.5	49.6	0.8	17.8	83.34	677.8	571.6	174.3	51.3	19.7	26.8	2447.44
総計			685.9				138.1		1596.64								26.8	

516、716）（425・716）は方形に加工し、片側端部を使用痕から骨ベラとして使用したと推定される資料である。半月形で湾曲する端部を使用する骨ベラ（424）、ビート（516）は首里城跡御内原北地区をはじめ、首里城跡で多数の類例が得られている（沖埋文 2010）。ほかに骨針とみられるもの（313）、歯ブラシ（196）、ボタン（152）などが確認される。

器種不明・未成品（153、194、195、240、314、423、426、459、741 ～ 743） 棒状で研磨や擦切などの切断痕が残るもの（240、314、423、426、742、743）、椎骨を素材に中央部及び側面に使用痕がみられるもの（153）、欠損部が大きく全形が窺えないもの（194、195、741）などが挙げられる。切断痕が残る資料は御内原北地区でも確認されており（沖埋文 2013 b）、城内で骨製品加工が行われていたことを示唆する。

2）石製品・石造物・石材

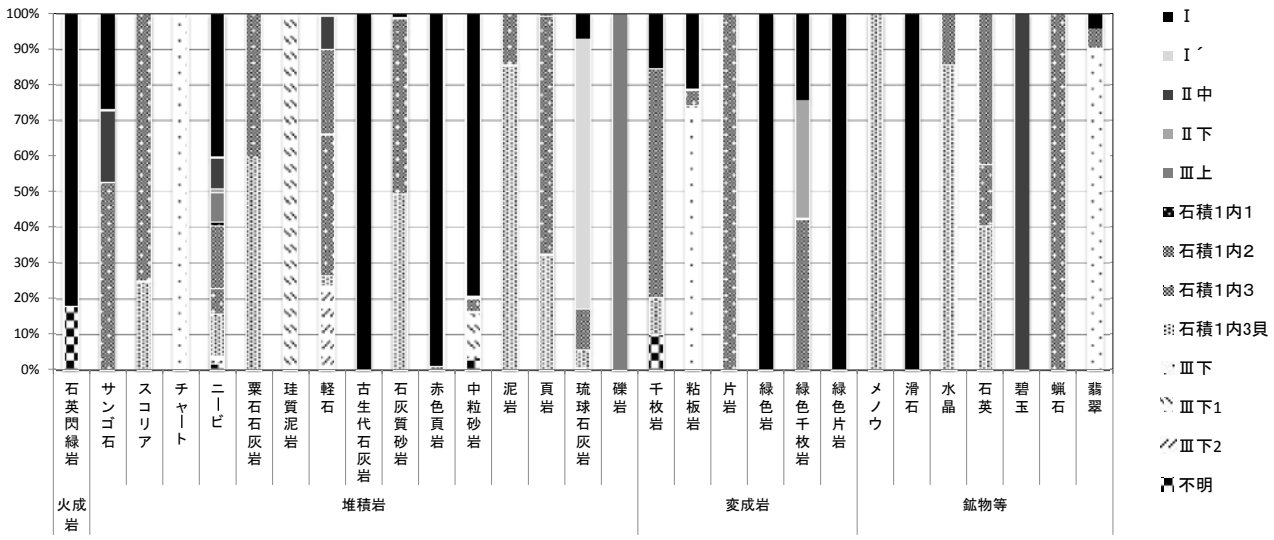
石製品には石球、硯、砥石、石盤、玉器とその関連資料、また石造物には石垣の積石、礎石、勾欄が得られ、合計 71 点である。器種組成は首里城跡の他の地区と概ね共通するが、石球が多量に出土している点が特徴的である（**第 33 表**）。ほか多種多様な石材が出土しており、約 2,477 g を量る（**第 34 表**）。層位による出土傾向の差は見出せないが、微視的には玉砂利は I 層に多く、石造物は I・I ´ 層に少ないことが看取される。以下に器種ごとの特徴について挙げる。なお、石材は当項の執筆分担者により、参考図書（加藤 1985、五十嵐 2006）及び石材サンプルを参考に同定を行った。

石球（135 ～ 137・311・513・514・586） 全 26 点が得られている。石材は細粒砂岩（いわゆるニービヌフニ）を主体に、琉球石灰岩、サンゴ石が素材に選択されている（仮 1 表）。形状は略円形から略方形で、大きさは直

第 35 表　石製品・石造物の種類ごとの石材表

石材		石製品								石造物				石材		合計
		硯	硯？	石盤	石球	砥石	短冊状砥石	玉盤	玉器残渣	勾欄	積石	礎石	不明	玉砂利か	石材※	
火成岩	石英閃緑岩														3	3
堆積岩	シルト岩		1													1
	泥岩														2	2
	珪質泥岩					1										1
	頁岩						1								2	3
	赤色頁岩	2														2
	チャート														1	1
	細粒砂岩（ニービヌフニ）				15	1	2			1		4	8		25	56
	石灰質砂岩														8	8
	中粒砂岩													7	10	17
	礫岩														1	1
	サンゴ石				3										1	4
	粟石石灰岩														2	2
	琉球石灰岩				4		3				1					8
	古生代石灰岩														1	1
	軽石					4									11	15
	スコリア														4	4
変成岩	千枚岩														6	6
	片岩														1	1
	緑色岩														1	1
	緑色千枚岩														3	3
	緑色片岩													2	2	4
	粘板岩			2										1	6	9
鉱物等	メノウ														1	1
	滑石							1								1
	蝋石						1									1
	石英														4	4
	水晶														2	2
	碧玉														1	1
	ヒスイ								3						1	4
その他	瓦質土器				1											1

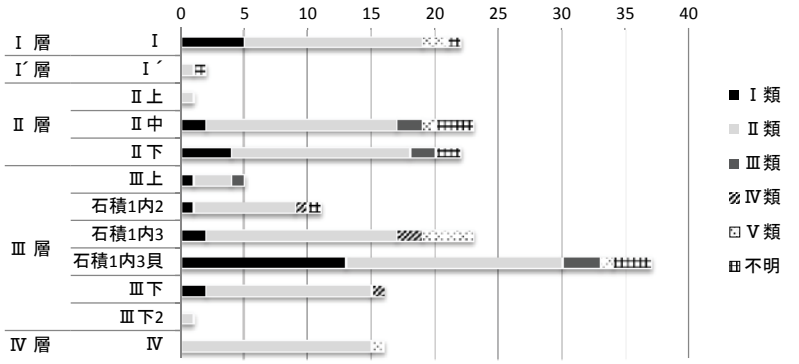
※フローテーション資料は未集計



第 19 図　石材ごとの層位別出土重量相関図

第 38 表　ガラス玉集計表

色調	Ⅰ層	Ⅰ´層	Ⅱ層			Ⅲ層														Ⅳ層	総計
	H23不明	H23東	H23東			H23東														H23東	
	表土・盛土	石敷・裏込め	Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	石積1内2	石積1内2(フロ3)	石積1内3	石積1内3(フロ2)	石積1内3(フロ3)	石積1内3貝	石積1内3貝(ウキ)	石積1内3貝(フロ)	石積1内3貝(フロ1)	石積1内3貝(フロ3)	石積1内3貝(フロ5)	Ⅲ上	Ⅲ下	Ⅲ下2	Ⅳ	
水	11	2	1	12	13	1	1	2		1		1	2	1	1	1	3	12	1	11	**77**
金							1	1		2											**4**
黄	1						2			2					9						**14**
黒							1		2						2						**5**
黒・白・不明					1																**1**
紺	1			1							1										**3**
水・白							1														**1**
青	2			4	6													1		4	**17**
赤	2	1		5	2		2			1					1		2	3		1	**20**
茶							1			1					4						**6**
白							1			2	1				3						**7**
半透明										1					3						**4**
緑	3	1							2						5						**11**
不明				1				1	1	4					2						**9**
小計	**20**	**4**	**1**	**23**	**22**	**1**	**10**	**4**	**5**	**14**	**2**	**1**	**2**	**1**	**30**	**1**	**5**	**16**	**1**	**16**	**179**
総計	**20**	**4**	**46**			**93**														**16**	**179**



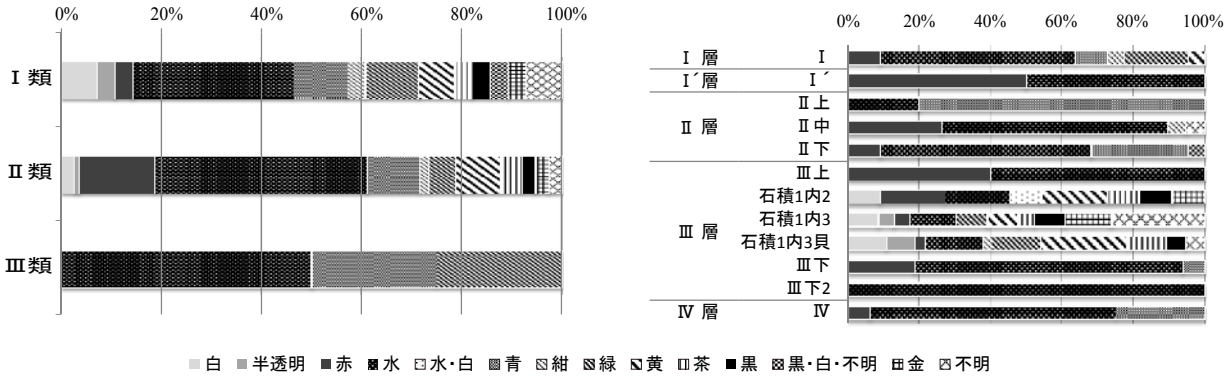
第 20 図　層位ごとのガラス玉分類別出土数

第 36 表　土製品集計表

種類	Ⅲ層		総計
	H23東		
	Ⅲ上	石積1内3貝	
球状土製品	1	1	**2**
総計	**1**	**1**	**2**

第 37 表　ガラス製品集計表

種類	Ⅰ層	Ⅰ´層	Ⅲ層	総計
	H23東	H23東	H23東	
	表土・盛土	石敷・裏込	石積1内3	
碁石		1	1	**2**
瓶	2			**2**
総計	**2**	**1**	**1**	**4**



第 21 図　色別ガラス玉出土傾向

径６㎝以上の大形品（135・514）と４㎝以下の小形品（136・311・513・586）に大別できる。首里城跡御内原北地区、同淑順門西地区や渡地村跡などに類例があり、これらは煤の付着から石弾と推定されている。

砥石（139・312・515・587・588） ７点が得られている。最も多い小形のものは粒度が細かく軟質の軽石が主に利用されており、仕上げ砥石と目される。（139・312・587）のように溝になるまで使用されているものが散見される。(588)は短冊状砥石の端部片で頁岩製。上記小形砥石との石質差から中砥の機能が想定される。

硯（141・142） ３点得られているが、いずれも首里城跡で頻出する本土産の硯である。（142）は赤褐色で緑色の斑点がみられる輝緑凝灰岩（いわゆる紫金石）が素材であることから、近世後半以降の赤間硯とみられる（岩﨑 2005、鈴木 2009）。なお硯背に釘書で文字が刻まれているが解読は困難。（141）はシルト岩製の粗製品。

石盤（715） ２点が出土しており、ともに粘板岩が利用されている。この器種は近代の筆記用具と目されているが（沖埋文 2012）、２点ともⅢ層より出土している点で年代観が異なるため、砥石の可能性も考えられる。

玉器・玉器残滓（140、138、530、746、850、851） 翡翠や碧玉等の美石（玉）を素材とした資料で、中国・台湾などで歴史的に重宝されているものである（北京故宮博物院 2008）。製品は（140）の玉盤のみで、梅花文を線刻するなどの特徴は首里城跡及び関連する遺跡に出土する類例と共通する（沖埋文 2011 ａ）。また幾何学形に整えられたヒスイの擦切片や碧玉の円礫、水晶のチップなども確認されている。これらも首里城内の各地点でしばしば確認されており、玉器の加工が城内で行われていた可能性を示唆する。

石造物 礎石の破片や勾欄の柱（134）が出土している。いずれも細粒砂岩を素材とし、形状・加工とも首里城内の各地点で出土したもの（例えば首里城跡御内原北地区２）と同様である。

石材 細粒砂岩や中粒砂岩が多い点は首里城跡の各地点と共通の傾向であるが、軽石が比較的多いことが注視される（**第 35・88 表、図版 78**）。これは軽石製砥石が多く、使用度も高いこととの関連性が挙げられ、特にⅢ層石積内に集中することも注目される。層位別傾向としては、石英閃緑岩や緑色千枚岩・片岩などの火成岩・変成岩がⅠ層に多いこと、スコリア、軽石や石英・メノウ・翡翠といった鉱物・美石はⅢ層石積１内に偏る傾向が認められた（**第 19 図**）。なお、サンゴ石も見られる（849）。

玉砂利（845 ～ 850） 無加工の円礫だが、遠隔地石材である点、また平坦な表裏の片側面のみ弱い磨面や風化が弱いことが確認される。人による幾度もの歩行によって生じたと考え、庭の玉石と推定した。なお、同様の特徴をもつ円礫は首里城跡の各地点でもみられる。石材はいずれも本島北部や周辺離島で得られるものである。

３）土製品

２点あり、瓦質土器に似る褐色（490）や灰色（585）の球状製品が出土している（**第 36 表**）。形状、大きさとも小形の石球と類似することから、同様の製品の可能性が挙げられる。

４）ガラス製品

４点数え、黒色の碁石（228、590）とガラス瓶（192、193）が得られている（**第 37 表**）。碁石は上原の分類上で鏡餅型となる（上原 2004）。またガラス瓶はいずれも薬瓶と考えられる。

５）ガラス玉

全 179 点が出土している（**第 38 表**）。これを、先例（沖埋文 2011 ｂ）を参考として形状等から、Ⅰ類：ほぼ円形を呈するもの（439）、Ⅱ類：扁平形を呈するもの（522）、Ⅲ類：コイル状に連なるもの（650、456、457、659）、Ⅳ類：被熱により複数の玉が溶着しているもの（523、651、652、740）、Ⅴ類：被熱により変形しているもの（229）に細別した（沖埋文 2011 ｂ）。この分類による集計結果が**第 20 図**である。各層ともにⅡ類が最多であることは、沖縄のガラス玉製作が通時的に巻き付け技法で行われていることを示唆している（岸本 2011）。また色調別では**第 21 図**のように、製作技法、層位とも特定の色との相関性はみらられず、総じて水色が最多で、ほかに赤、青、緑、黄色が多い傾向となっている。使用方法や対象には種々あることが分かっているが、(439)はガラス玉が銅線に綴られた状態で出土している。ガラス玉の使用状態を知る上で重要な資料である。

６）円盤状製品

全 413 点が得られている（**第 40 表**）。素材は中国産褐釉陶器の壺胴部片を主体に、中国産青磁、白磁、青花、明朝系瓦など多様な選択がなされている（便宜上、素材に分類記号を用いた。各素材の分類記号は**第 39 表**の通りである。）。

これらを加工方法より、１類：剥離（143、148、149、150、151、315、316、427-429、594-599、717、718、720） ２類：研磨（145、146、593） ３類：未成品（144、147、430、517）に分け、さらに剥離方向より１類を、ａ:内面（背面）より剥離（148、150、315、427、595、596、598） ｂ:外面（正面）より剥離（143、151、594、599） ｃ：内外両面より剥離（149、316、428、429、597、717、718）に細別した。また２類には研磨の後に剥離を行うもの（317、592、719）もみられた。

いずれの加工方法においても、中国産褐釉陶器が最も多く素材となっている。（**第 22 図上・中左**）。これは素材としての適不適よりは、素材の個体数が多量であり、かつ大形であることから素材の破片が１つの個体から多量に得られることが挙げられる。また２類については磁器素材が確認されず、磁胎に研磨が不適であったことが考えられる。出土層位と加工方法との間においても、総じて１類の剥離が全層を通じて多量である（**第 22 図中右**）。１類中の細分類にも目立った変化が認められず、素材形状や技量に応じて個々に選択されていたとみられる。ただし２類はⅢ層のみで確認されることが注意される。

また円盤状製品はサイズが５～ 10㎜、厚さ 20 ～ 35㎜が主体であるが、素材との関係性においては、磁器は小形、無釉陶器はやや大形、瓦は大形の製品が作られる傾向がみられる（**第 22 図下**）。この素材と形状の関係性については、中城御殿跡においても同様の傾向が認められている（沖埋文 2011 ｂ、2012）。さらに小形品は１ ｃによるものが多いことから、小形品の製作には多くの剥離回数を要したことが理解される。

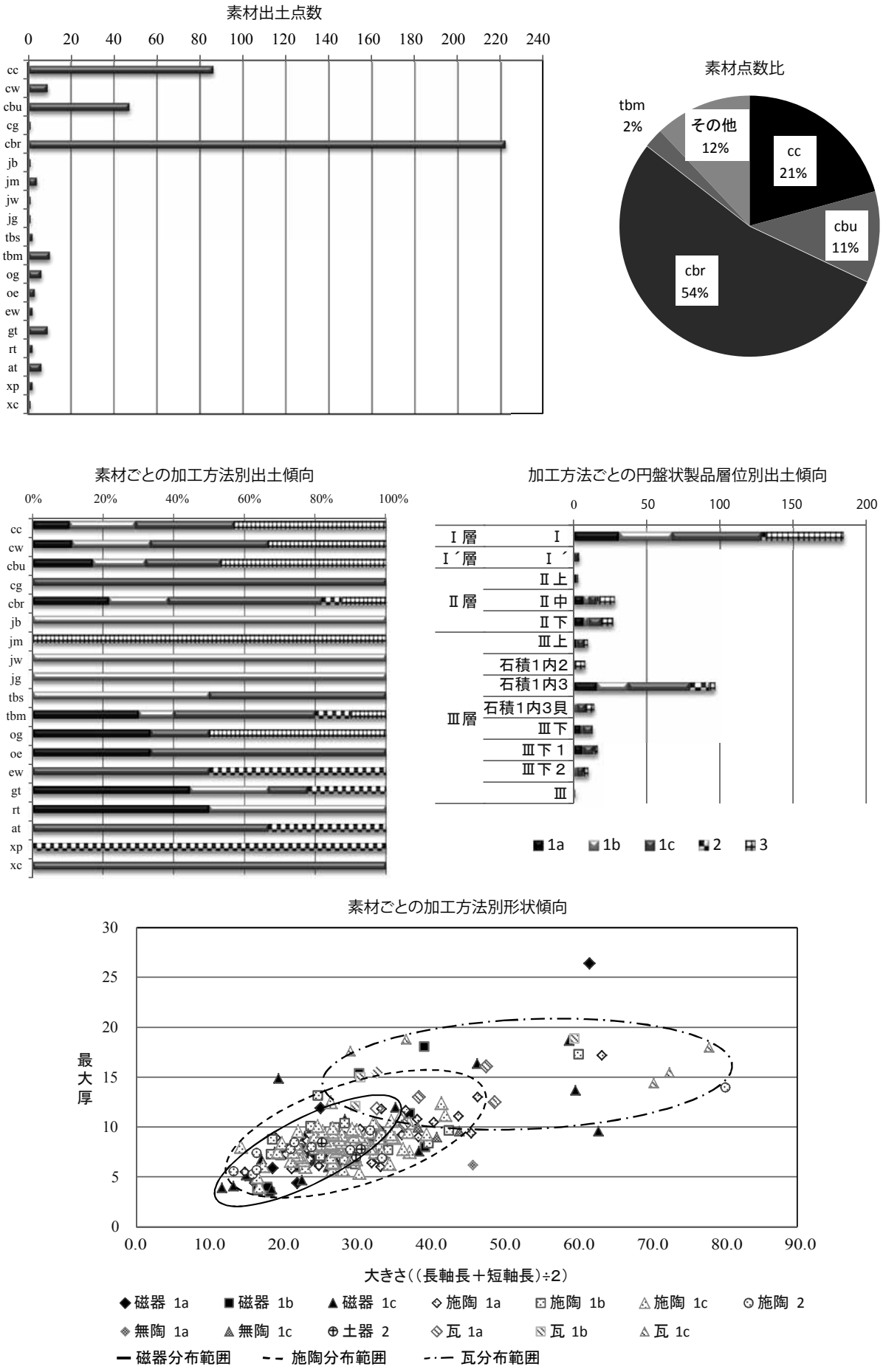
なお、円盤状製品の素材別出土点数を層位ごとに集計すると、Ⅲ層で中国産褐釉がほぼ主体となるのに対し、Ⅱ層では大きく減少して中国産青磁や染付の割合の増加や沖縄産製の出現、Ⅰ層では本土産製の出現など、層位ごとに顕著な変化が確認された。円盤状製品が２次加工品であるという性格を考慮すると、この利用傾向は当時の素材の個体数を反映している可能性が挙げられることから、陶磁器類の個体数比を検討する上で有効な分析方法の一つとなるとみられる。

第 39 表　円盤状製品素材分類

分類記号	分　　類
cc	中国産青磁
cw	中国産白磁
cbu	中国産染付
cg	中国産施釉陶器
cbr	中国産褐釉陶器
jb	本土産染付
jm	本土産近代磁器
jw	本土産白磁
jg	本土産施釉陶器
tbs	タイ産褐釉陶器(シーサッチャナライ)
tbm	タイ産褐釉陶器(メナムノイ)
og	沖縄産施釉陶器
oe	沖縄産無釉陶器
ew	陶質土器
gt	明朝系瓦（灰）
rt	明朝系瓦（赤）
at	その他瓦
xp	産地不明土器（所謂「半練陶器」）
xc	産地不明陶器

第 40 表　円盤状製品集計表

素材	Ⅰ層				Ⅰ´層	Ⅱ層			Ⅲ層								総計
	H23東	H23西	H23不明	H25	H23東	H23東			H23東								
	表土・盛土				石敷・裏込	Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ上	石積1内2	石積1内3	石積1内3貝	石積1内不明	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2	
タイ褐(シーサッチャナライ)											2						2
タイ褐(メナムノイ)	2						1				4			1	1	1	10
沖縄産施釉陶器	4		1							1							6
沖縄産無釉陶器	1	1					1										3
瓦	7	2	1					3			1			1	1	1	17
産地不明土器	1																1
産地不明陶器															1		1
中国産褐釉陶器	54	6	3	14	2	2	11	11	4	3	80	9		8	11	4	222
中国産青磁	34	7	7	1	1	1	5	7	3	3	4	4	1	2	2	4	86
中国産青花	1																1
中国産染付	20	5	1		1		9	5	3		2			1			47
中国産白磁	1		1	2			1	1		1	1	1					9
陶質土器											1						1
半練土器											1						1
本土産近代陶磁器	2	2															4
本土産施釉陶器	1																1
本土産染付	1																1
本土産白磁	1																1
小計	130	23	14	17	4	3	28	27	10	8	96	14	1	13	16	10	414
総計	184				4	58			168								414



第 22 図　円盤状製品の加工方法と素材・層位・形状の関係性

７）煙管

１点のみが確認されている。（154）は、首里城跡の分類（沖埋文 2013 b）における陶器製吸口のうち、羅宇接合部が肥大するタイプ（陶口Ⅱ類）である。

８）るつぼ・ふいご

るつぼ（155、600、601、603、604） ５点が出土しているほか（**第 42 表**）、漆喰製品の中にもこの製品の可能性のあるものがみられる。口縁部（601,603,604）、底部（155）のほか、蓋（60）とみられる円盤状の製品とが確認される。器形は平坦に面取りした口唇部と流滓のための凹部が共通するが、外耳状の突起を施すもの（601）もある。素材には漆喰製と陶器製とが認められる。いずれも釉状の残滓が貼り付いている。さらに金が付着するもの（600）もある（**図版 59**）。

ふいご（602） １点数え、るつぼと同様な石材であるが、筒形であり、内面には付着物が少ないことから、ふいごと考えた（**第 42 表**）。

９）漆喰製品

10 点出土している（**第 43 表**）。屋根や壁など建築部材と考えられるものとして、一面は平滑で対面に木舞状の圧痕が残るもの（221）、塼や瓦などと考えられる方形の圧痕が大形のもの（589）がある。小形品としては、傘状の形態を呈する何らかの蓋などと考えられるもの（422・529）、僧帽状のもの（460・461・744・745）、大部分が研磨されたもの（462・589・591）がある。

第 41 表　煙管集計表

種類	器形	部位	Ⅰ層 H23東 表土・盛土	総計
煙管	羅宇	吸口	1	1
総計			**1**	**1**

第 42 表　るつぼ・ふいご集計表

種類	Ⅰ層 H23東 表土・盛土	Ⅲ層 H23東 石積1内3	総計
るつぼ	1	4	**5**
ふいご		1	**1**
総計	**1**	**5**	**6**

第 43 表　漆喰製品表計表

種類	器形	Ⅰ層 H23東 表土・盛土	Ⅱ層 H23東 Ⅱ中	Ⅱ層 H23東 Ⅱ下	Ⅲ層 H23東 石積1内2	Ⅲ層 H23東 石積1内3	Ⅲ層 H23東 Ⅲ下	Ⅲ層 H23東 Ⅲ下2	総計
漆喰製品	蓋			1	1				**2**
	不明	1	1	2		2	1	1	**8**
小計		**1**	**1**	**3**	**1**	**2**	**1**	**1**	**10**
総計		**1**	**4**		**5**				**10**

第 44 表　漆集計表

種類	H23東 Ⅱ層 Ⅱ上	H23東 Ⅱ層 Ⅱ下	H23東 Ⅲ層 石積1内3	総計
漆	1	1	1	3
総計	**1**	**1**	**1**	**3**

第 45 表　イネ集計表

種類	Ⅲ層 H23東 石積1内2(フロ1HF)	Ⅲ層 H23東 石積1内3(ウキ＋フロ5)	Ⅲ層 H23東 石積1内3(フロ1HF)	総計
イネ	1	1	1	3
総計	**1**	**1**	**1**	**3**

第 46 表　プラスチック製品集計表

種類	Ⅰ層 H23西 表土・盛土	総計
ペンホルダー	1	**1**
総計	**1**	**1**

２．Ⅰ層出土遺物（遺物番号１～221・852　第23～33図、第47～56・77表写真19、図版18～33）

調査区の表土、城壁復元や琉球大学時の造成と思われる土層で、陶磁器類5,832点、その他1,409点、計7,241点出土している。時代幅は、グスク時代から近代のものであるが、量的にはグスク時代のものが多く、青磁Ⅱ・Ⅲ類、白磁Ｃ－２・３群など13･14世紀の古手のものも若干見られる。以下、各層の遺物様相においては、煩雑さをさけるために中国産の各種陶磁器については、「中国産」を省略している。

青磁（１～34）　碗（１～18）は、Ⅴ類（２・７～15）、Ⅵ･Ⅶ類（16･17）、幅広高台タイプ（18）の他、Ⅱ類（１）、Ⅲ類（３）Ⅳ類（４～６）などは首里城跡の中でも古手のものがある。また（13・14）はⅤ－３類であるが、釉調が良好で、文様も流麗である。皿（20～25）の多くはⅤ類だが、Ⅲ類（22）、Ⅵ類（20）などがある。他に、小壺（19）、盤（26～28）、鉢（29）、瓶（30）、袋物（31）、香炉（32）、擂鉢（33）、酒海壺（34）が見られる。

白磁（35～51）107点出土している。福建産では、大宰府Ⅶ－ｂ類（35）、Ｃ－２群（37）、Ｃ－３群（36）の各碗、Ａ群口禿皿（45）が古手のものである。量的に多いのは、Ｄ´群碗（38～41）、Ｄ群抉り高台皿（46･47）である。その他、やや深めの碗（42・43）、袋物の底部（51）などがある。景徳鎮産は皿を中心に多くみられ、腰折皿（44）、碁笥皿（49）などがある。徳化窯系には、大形の皿（48）、小碗（50）がある。

青花（52～82）　元様式が４点あり、壺（52･53）、盤（54）、瓶（82）がある。明代のもの（55～79･81）は、碗（55～63）、小碗（64～66）、皿（67～79）、瓶（81）がある。古手の碗Ⅰ類の他、碗･皿Ⅱ類が多いが、漳州窯系碗（65）、皿Ⅲ類（76～78）など本地区では新相のものも見られる。清代のものも多く見られるが、福建･広東系の内湾皿（80）のみを掲載した。

色絵（83・84）　徳化窯系と思われる碗（83）、おそらく端反と思われる明代景徳鎮窯系皿（84）がある。

瑠璃釉（85・86）　徳化窯系の碗（85）、おそらく同窯系の小碗（86）がある。

鉄絵（87）　磁州窯系の壺の胴部である。

法花（88）　壺胴部片、外面が貼り付け文で青・緑釉、内面が緑釉が施されるもので、（484）と類する。

三彩（89・90）　水注で、底部（89）、鴨と思われる鳥形の頭部（90）がある。

褐釉（91～94）（91）は、外底無釉の褐釉碗であまり例を見ない。（92～94）は、壺Ｂ群である。ただ、量的にはＡ群が多い。

天目（95～97）　底部脇を平坦にする同様のタイプで、口縁（95）、底部（96・97）である。

不明陶器（98）　底部に穿孔がある鍔形の浅めの器形であるが、産地・用途は不明である。

タイ産土器（99・100）　共にハンネラ土器の蓋である。

タイ産褐釉（101～104）（101・103）は壺Ⅰ類、（102）は中型壺、（104）は壺Ⅱ類である。

ベトナム産青花（105・106）（105）はⅡ類碗、（106）は瓶である。

韓半島産青磁（107・108）　碗の胴部（107）、底部（108）である。

本土産陶磁器（109～120）　肥前染付は、碗（109・111）、小碗（110）である。肥前陶器は、碗（111～114）、皿（116･120）がある。その他、京系の皿（115）、蓋（117）、備前擂鉢（118）、薩摩瓶（119）がある。

カムィヤキ（121）　１点出土しており、壺の胴部片である。

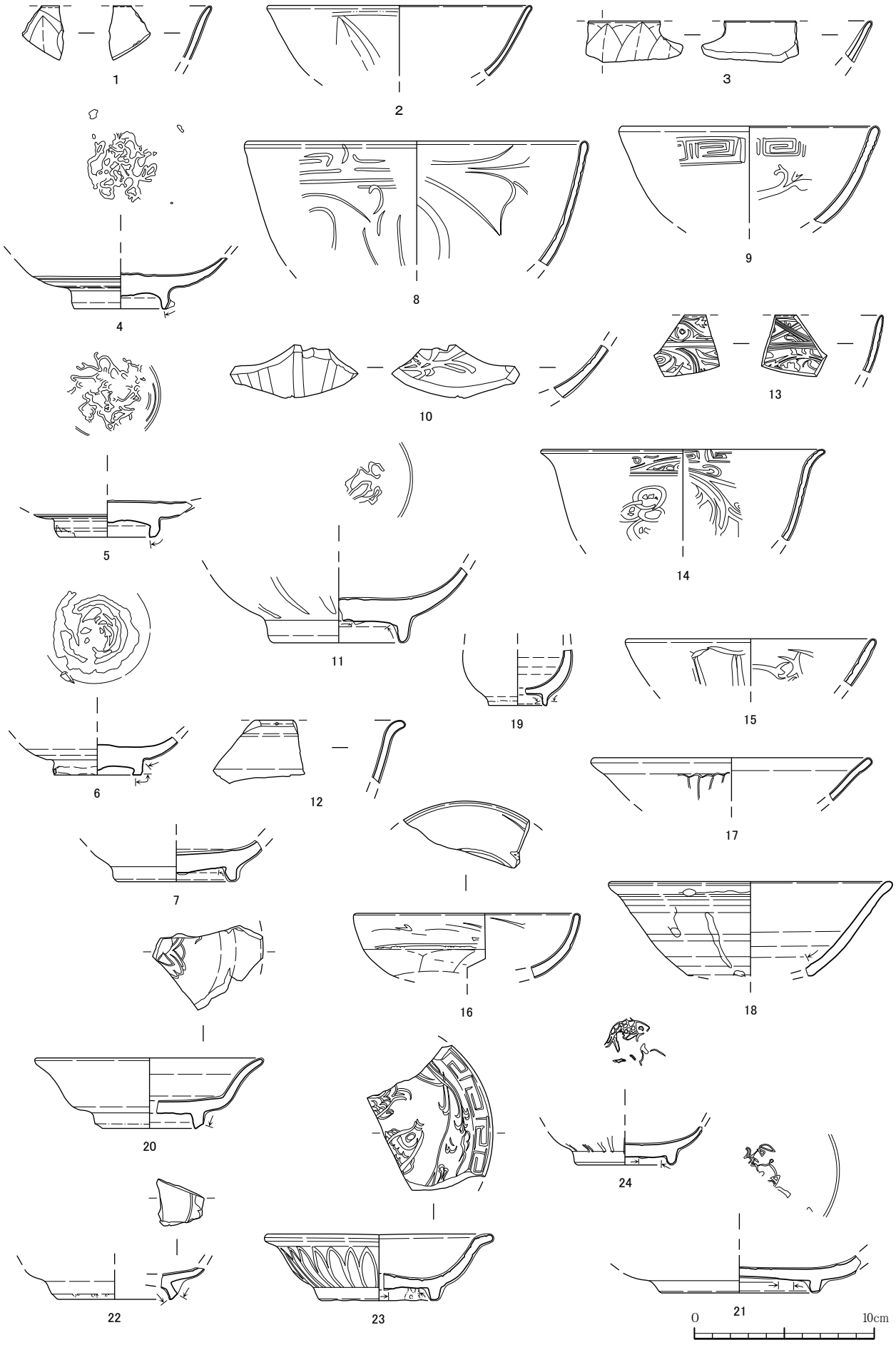
沖縄産施釉陶器（122～125）　碗（122）、小碗（123）、蓋（124）、壺（125）がある。

沖縄産無釉陶器（126～131）　Ａ類は窯道具のハマ（131）、Ｂ類は鉢（126･130）、甕（127）、急須（128）、瓶（129）がある。

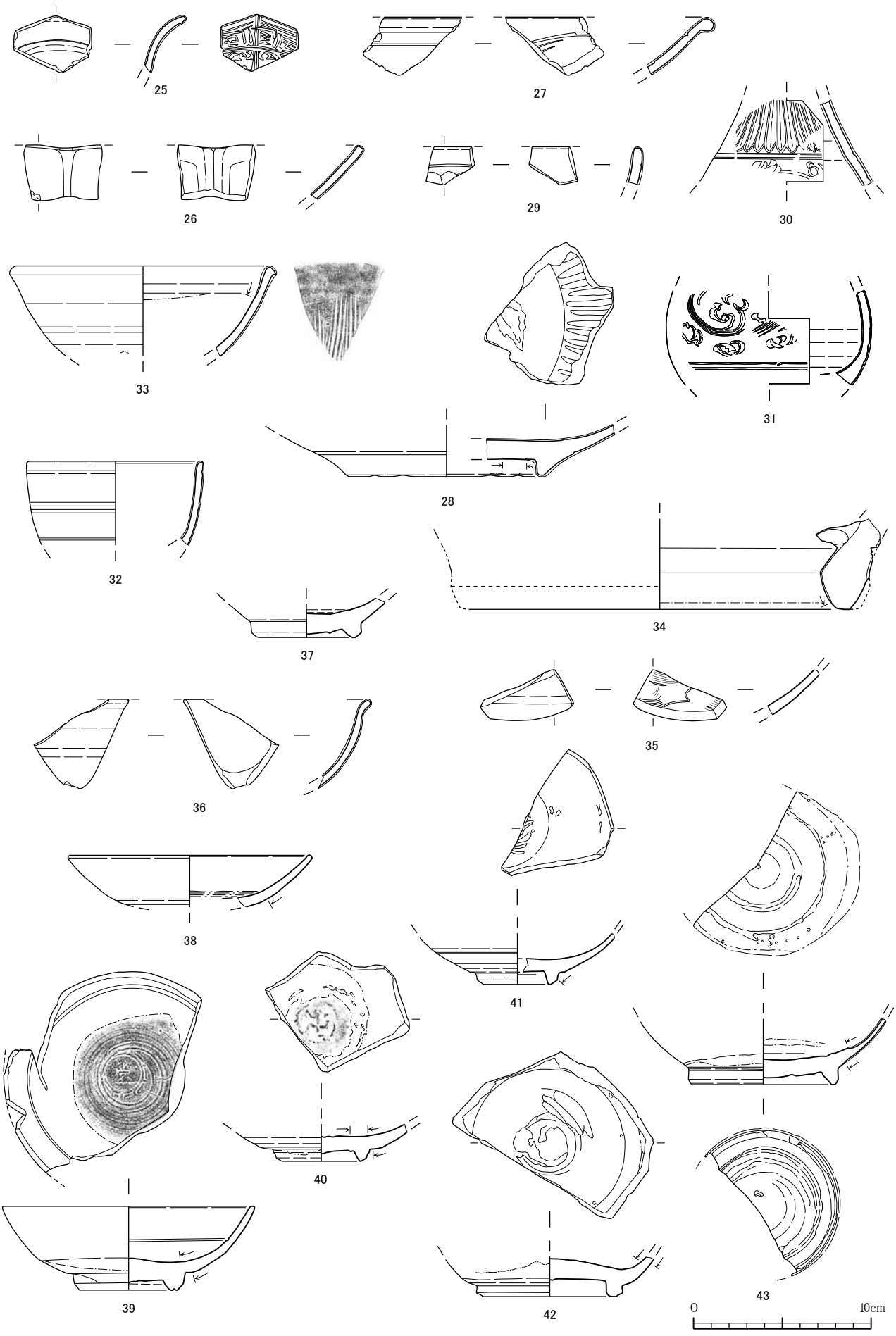
沖縄産瓦質土器（132・133）　擂鉢（132）、植木鉢（133）である。

石造物（134）　勾欄の一部である。

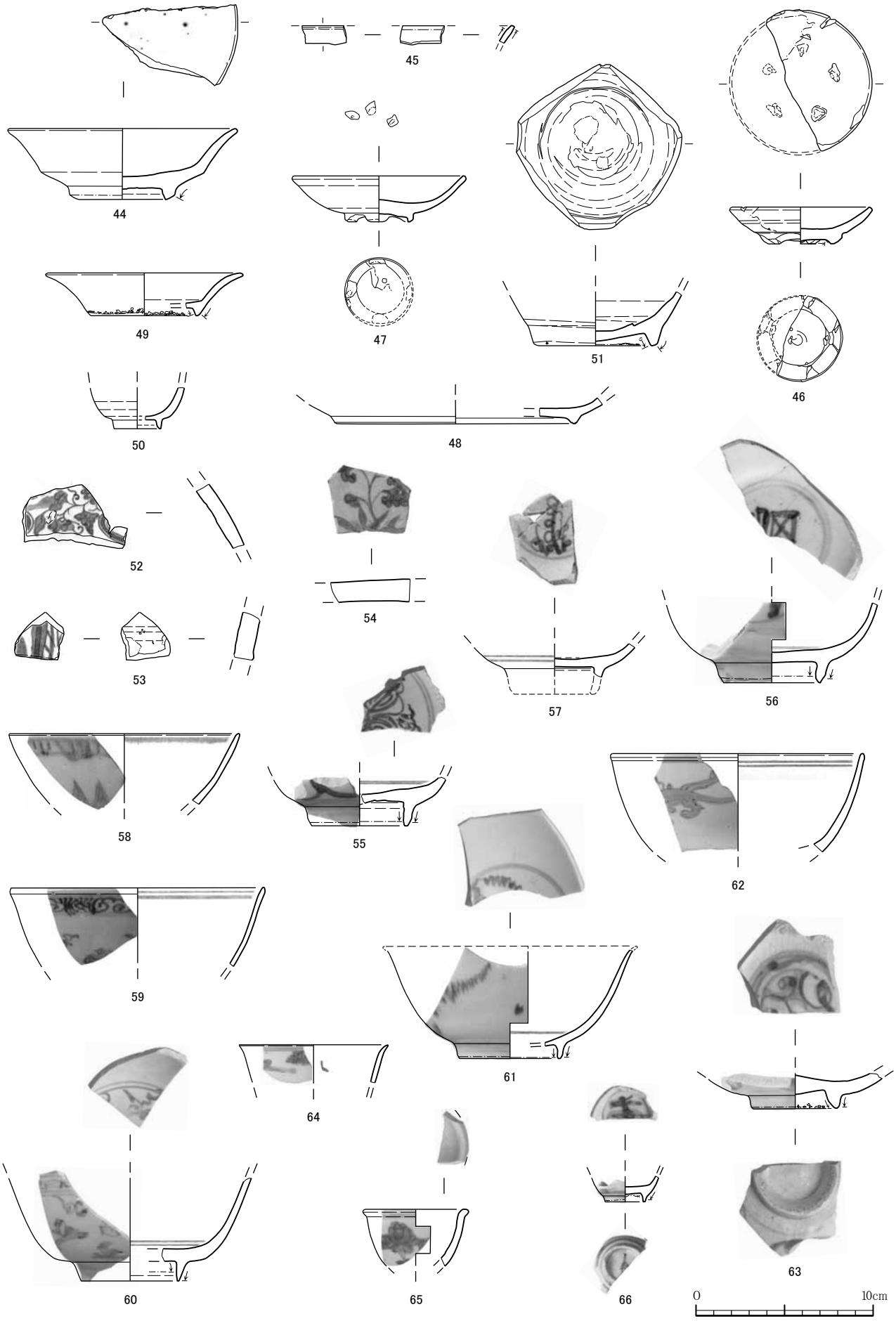
石製品（135～142）　石球（135～137）、翡翠製の玉器残滓（138）、滑石製と思われる玉器盤（140）、砥石（139）、



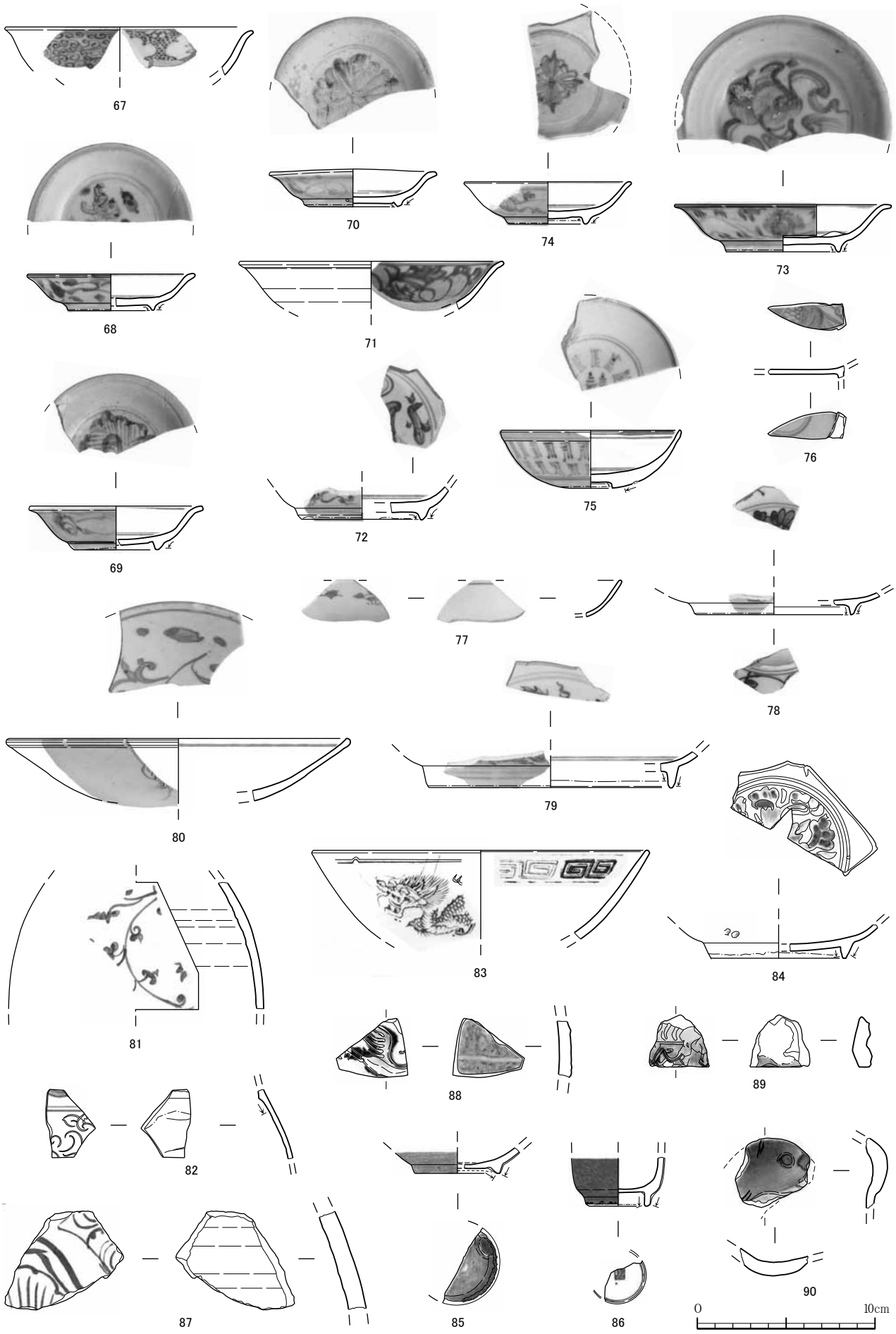
第23図　Ⅰ層出土遺物（1）



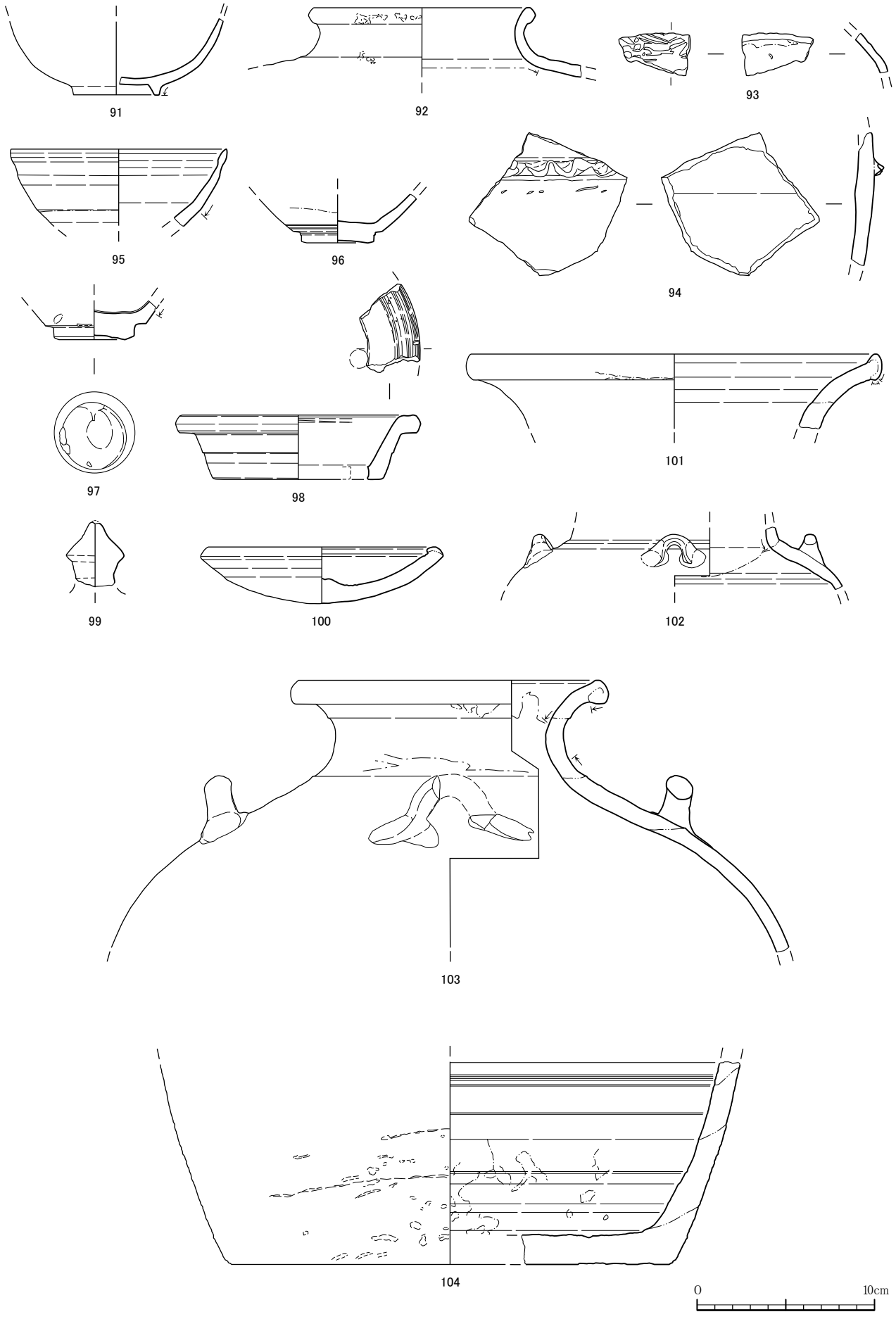
第24図　Ⅰ層出土遺物（2）



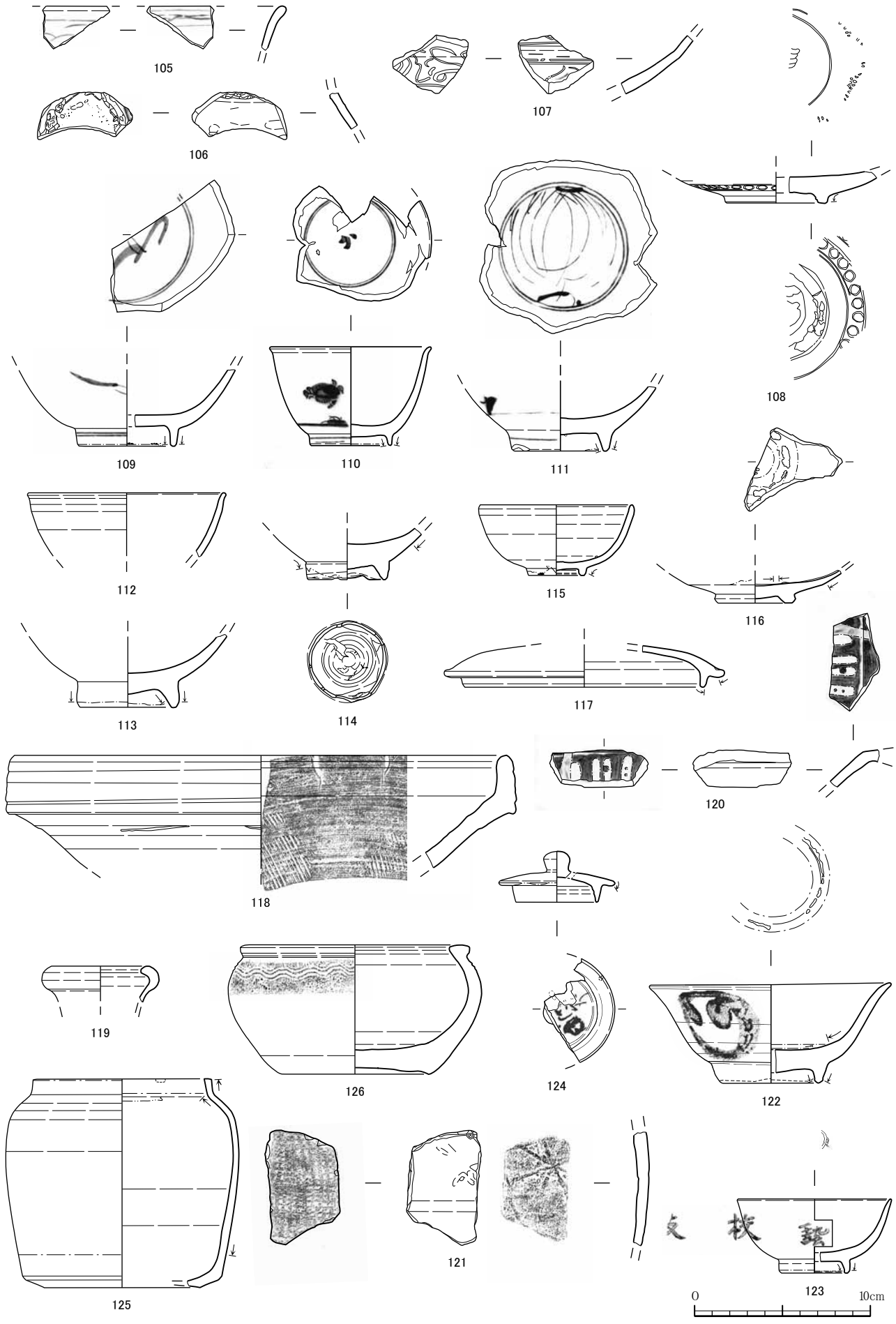
第25図　　Ⅰ層出土遺物（3）



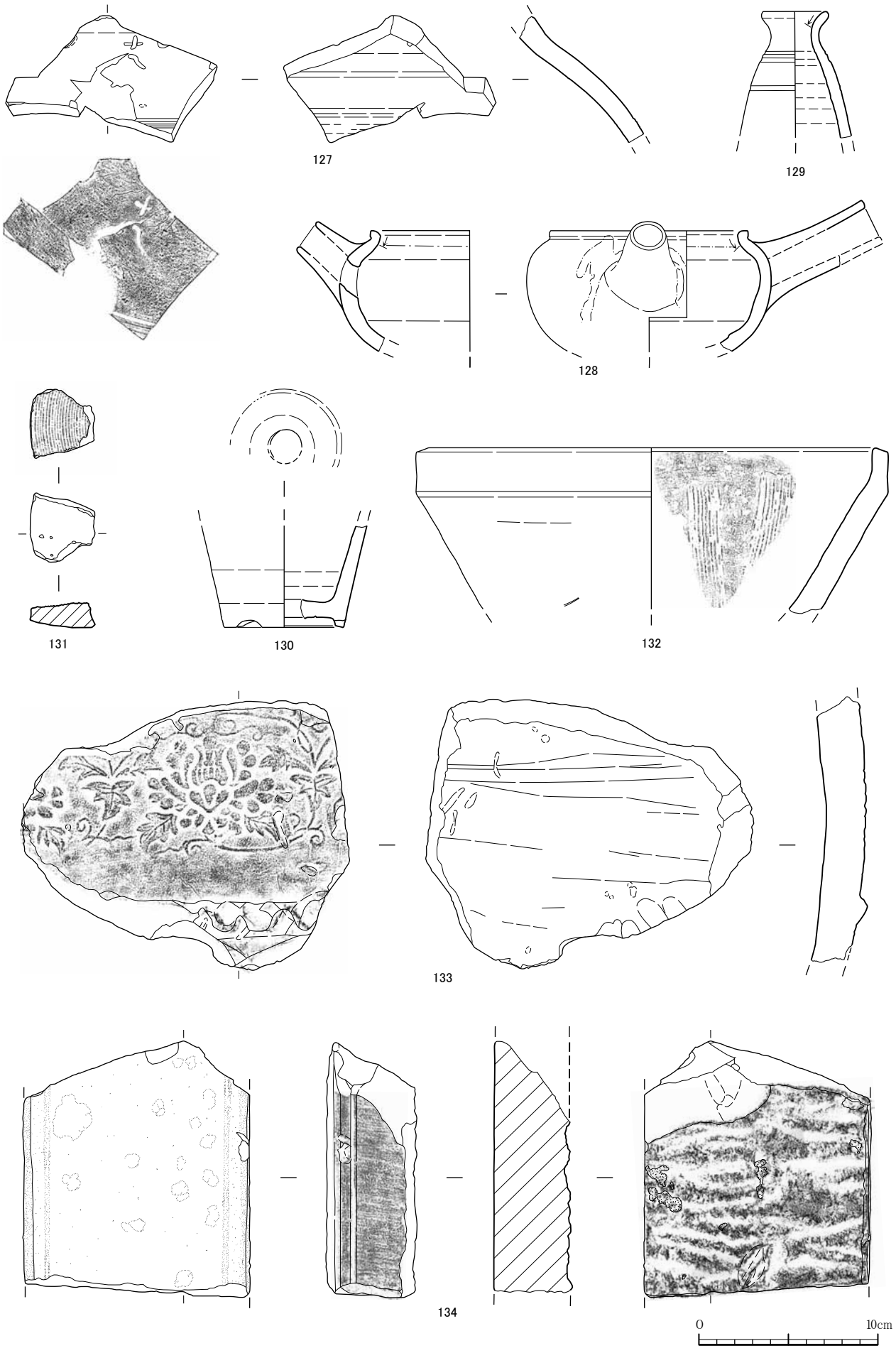
第26図　Ⅰ層出土遺物（4）



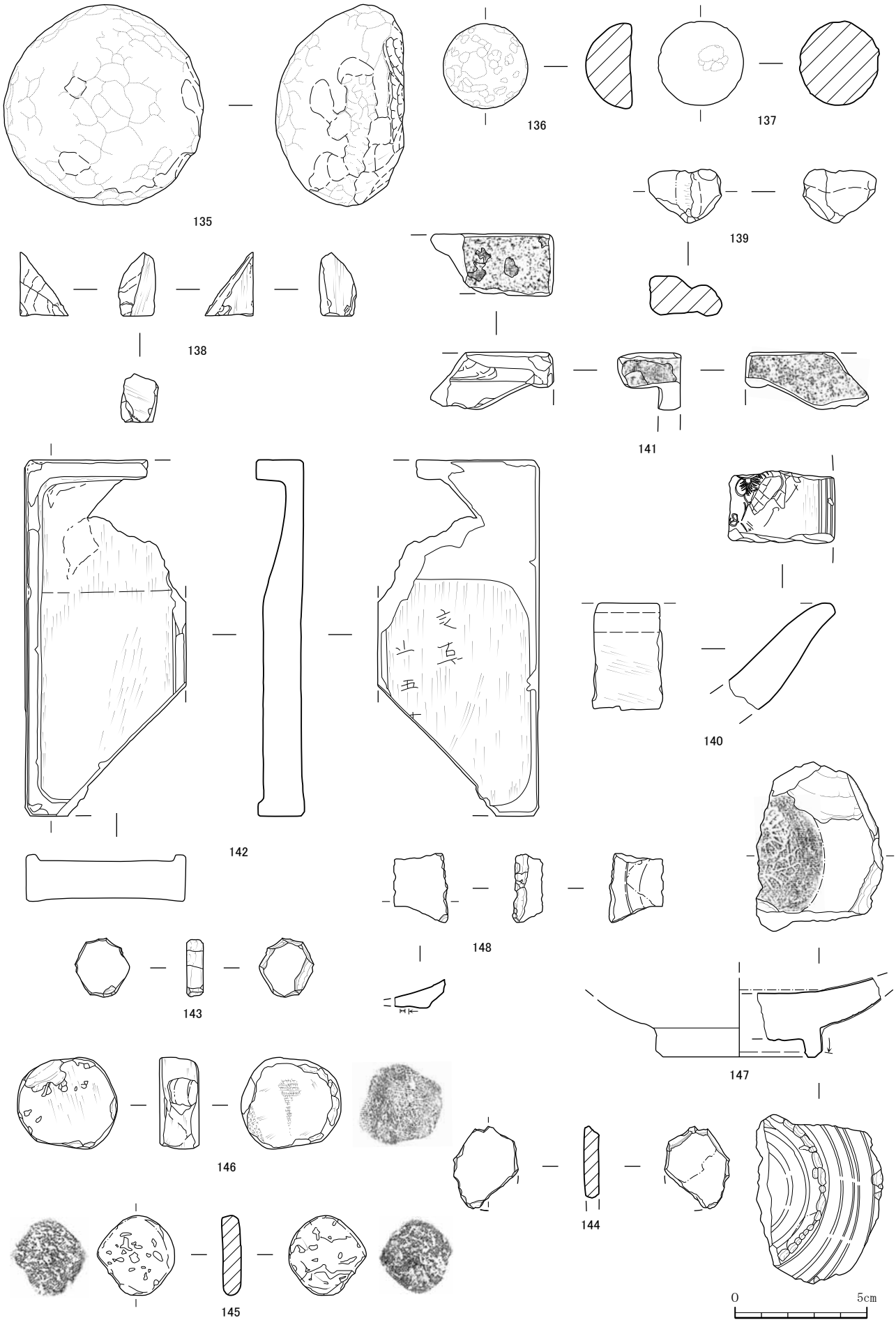
第27図　Ⅰ層出土遺物（5）



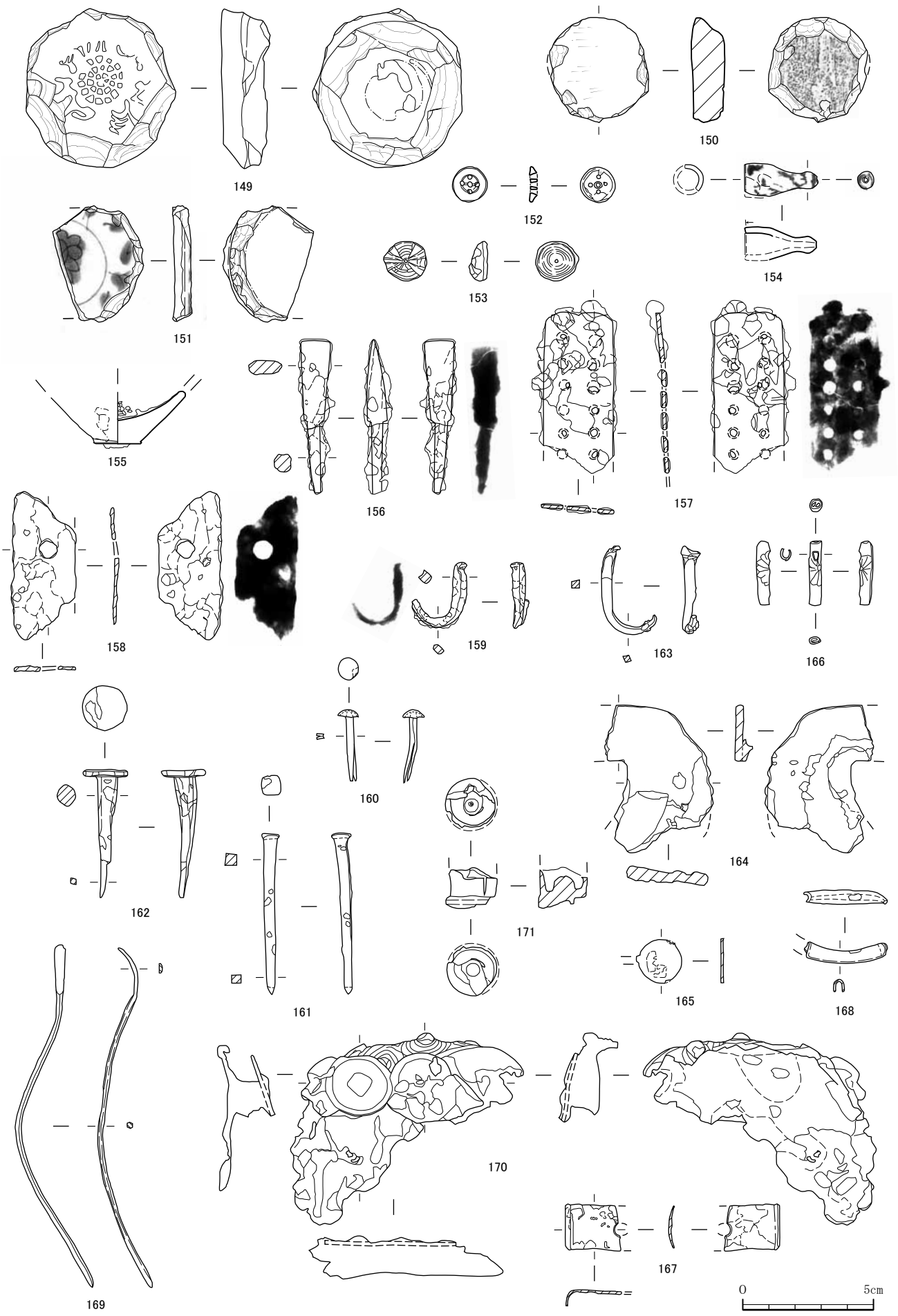
第28図　Ⅰ層出土遺物（6）



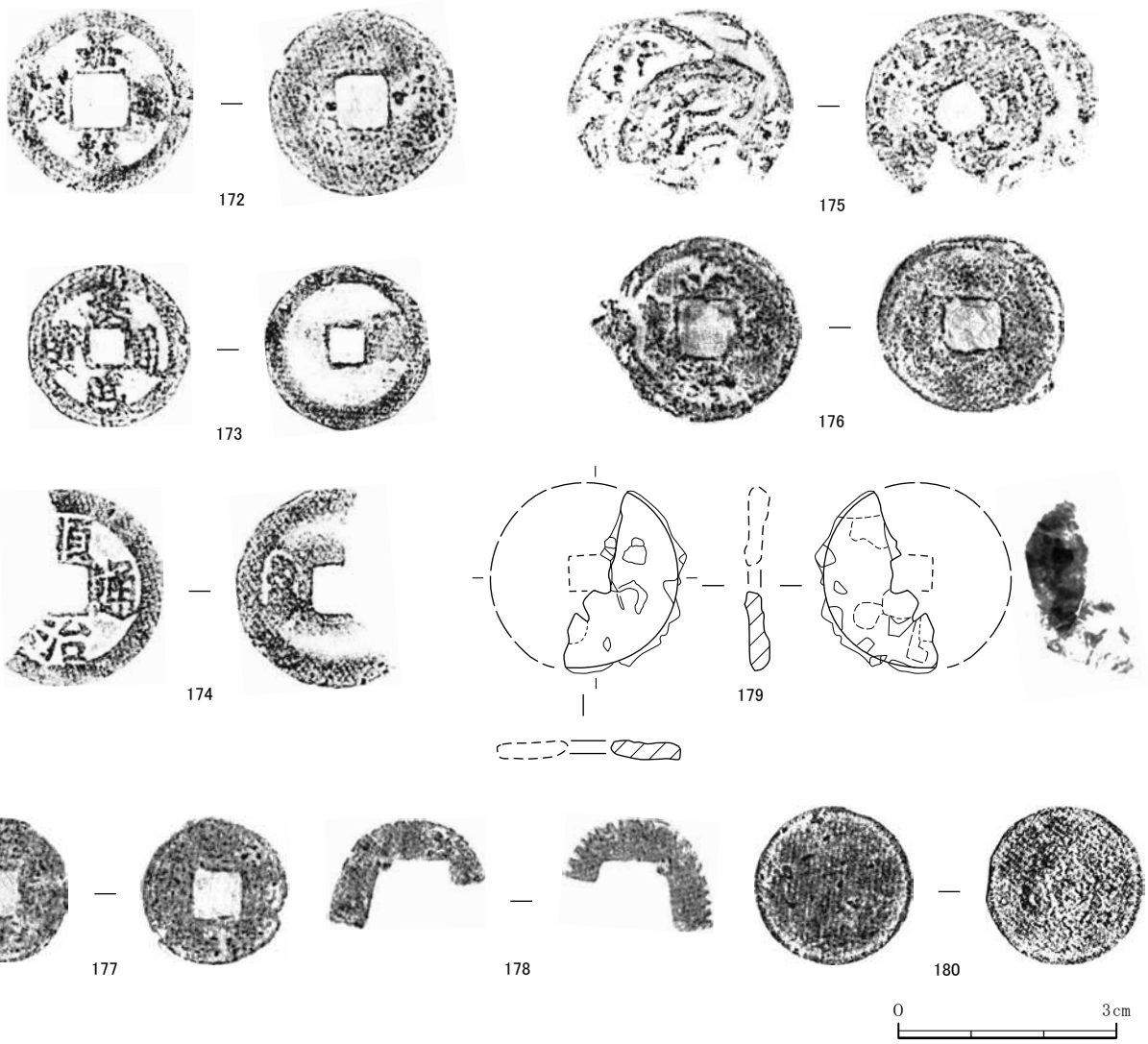
第29図　　I 層出土遺物（7）

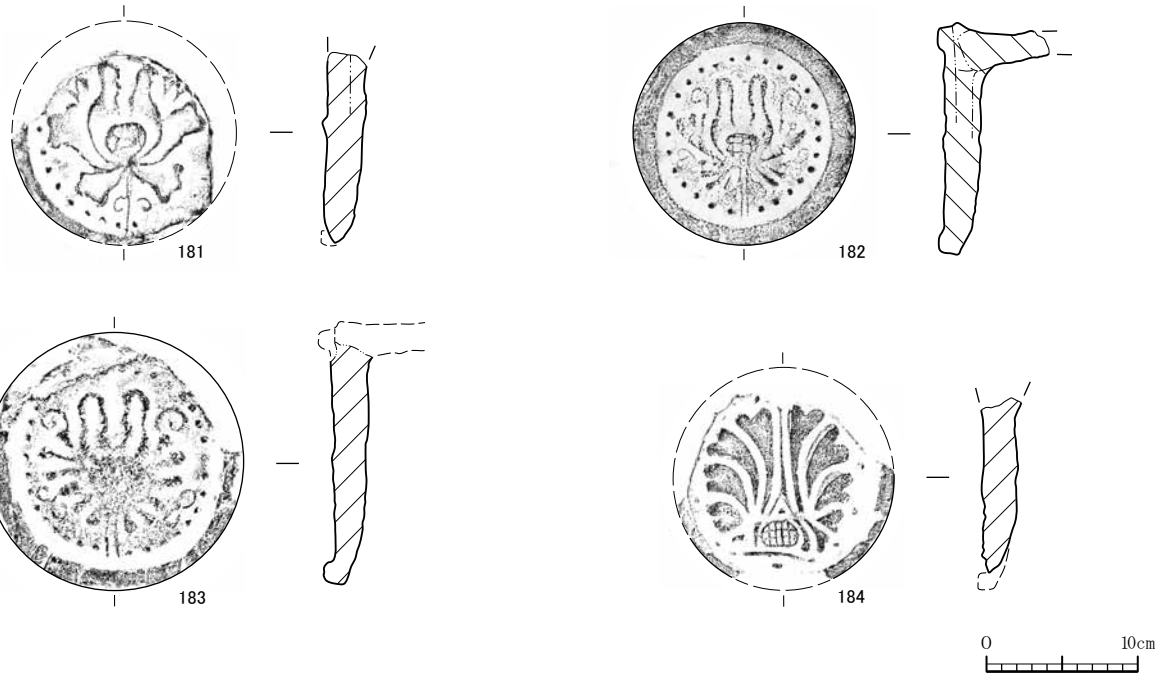


第30図　Ⅰ層出土遺物（8）

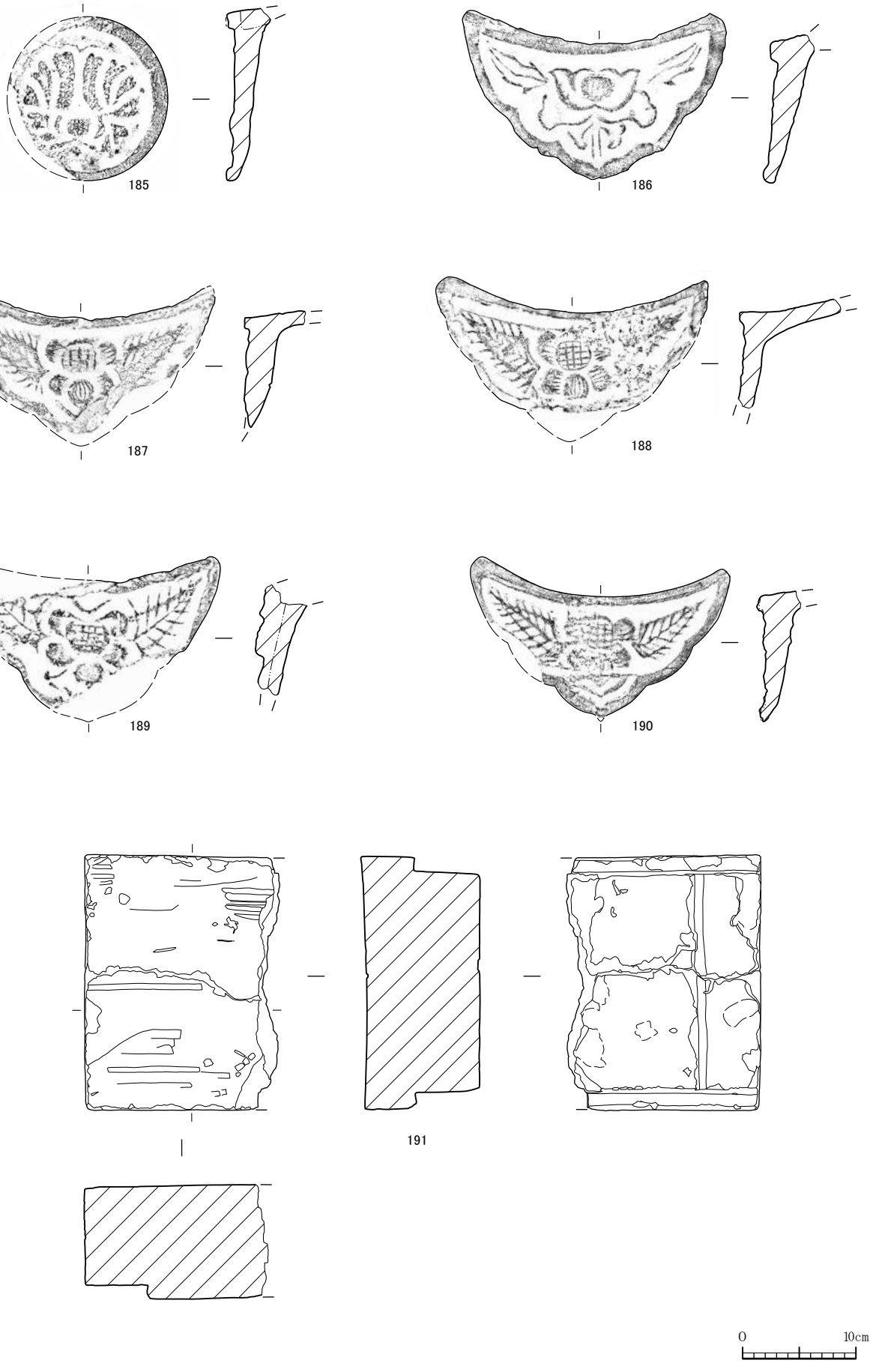


第31図　Ⅰ層出土遺物（9）





第32図　　Ⅰ層出土遺物（10）



第33図　　Ⅰ層出土遺物（11）

硯（141・142）、（142）は赤間硯である。

石材（845 ～ 848）（845 ～ 848）は玉砂利である。

円盤状製品（143 ～ 151） 184 点出土しており、そのうち９点掲載している。

骨製品（152・153・194 ～ 196） ボタン（152）、歯ブラシ（196）、不明製品（153・194・195）がある。

煙管（154） 羅宇煙管の吸口である。

るつぼ（155） 陶製の底部で、赤色の釉状残滓がある。

鉄製品（156 ～ 159･197） 鉄鏃（156）、甲冑小札（157）、釘（159）、不明の板状製品（158）、はさみ（197）がある。

青銅製品（160 ～ 171・198 ～ 200） 鋲（160）、釘（161 ～ 163）、鍔（164）、切羽（178）、鍬形（165）、八双金具（167）、覆輪（168）、かんざし（169）、鼎型香炉片に銭貨が溶着したもの（170）、スナイドル銃の薬莢（171）、不明製品（166）がある。

銭貨（172 ～ 180） 101 点出土しており、北宋銭（172･176）、明銭（173･175）が多いが、清銭の順治通寶（174）、寛永通寶と思われる鉄銭（179）、一銭（180）など近世～近代のものも少量ある。

瓦（181 ～ 190・201 ～ 220・852） 瓦は、明朝系が主体で、軒丸瓦Ａ～Ｃ類、軒平瓦ａ～ｃ類と多様なタイプが見られる。明朝系軒丸瓦の（852）は天地が逆にスタンプされたもので珍しい。

塼（191） 噛み合わせ式の蓋形である。

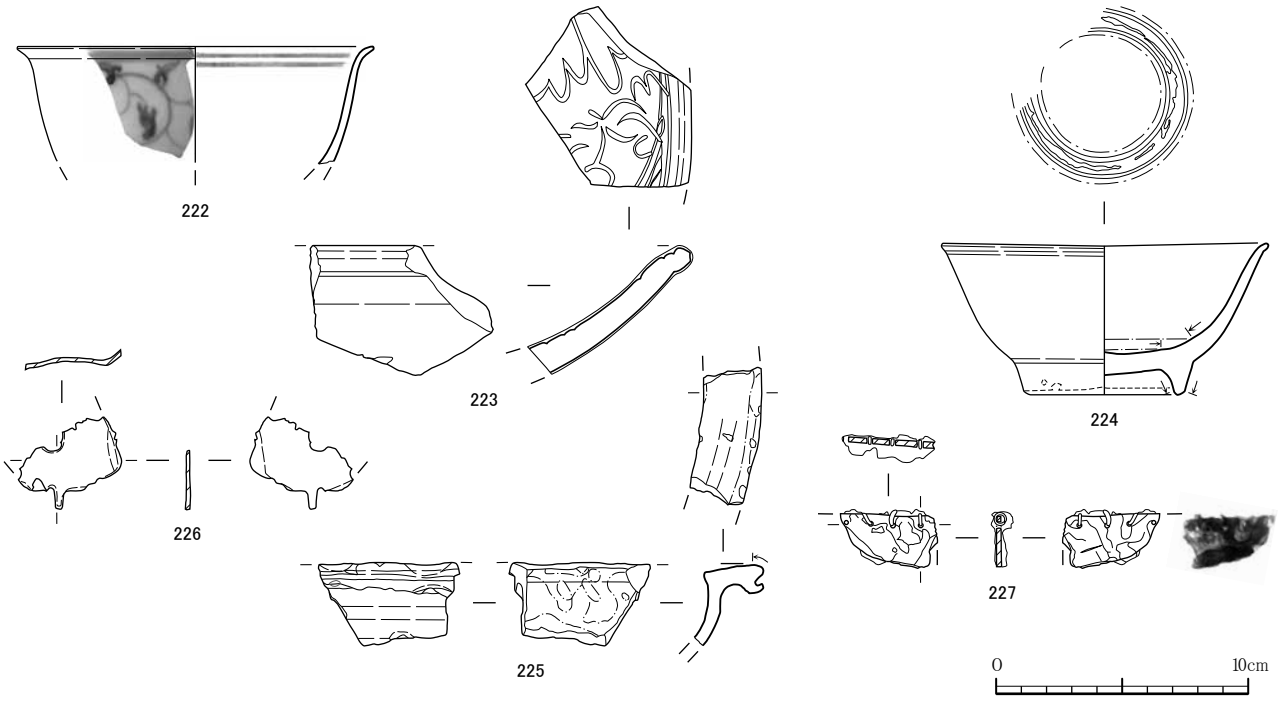
ガラス製品（192・193） 共にガラス瓶である。

漆喰製品（221） 一面は平滑で対面には木舞状の圧痕が見られるので、壁や屋根などの建築部材ではないかと考えられる。

以上の他、本土産近代陶磁器、陶質土器、土器、ガラス玉（20 点）、プラスティック製品がある。

３．Ⅰ´層出土遺物（遺物番号 222 ～ 230　第 34 図、第 55・56 表、図版 34）

戦前に遡る造成土などの土層で、陶磁器類 147 点、その他 41 点、合計 187 出土している。グスク時代～近代の遺物が出土しており、村田銃の薬莢などは沖縄戦時の可能性もあり、下限が戦前と考えられる。上限は後述



第34図　Ⅰ´層出土遺物

するⅡ層の下限が 17 世紀後半であること、沖縄産陶器の出土から 18 世紀ごろと考えた。

青花 (222)　明Ⅱ－３類碗である。

青磁（223）　盤である。

沖縄産施釉陶器（224）　B類碗である。

本土産陶磁器（225）　薩摩の鉢である。

青銅製品 (226・230)（226）は板状の不明製品、（230）は村田銃の薬莢である。

鉄製品（227）（227）は鉄板に鎖を通した籠手等と考えられる甲冑金具である。

ガラス製品（228）　黒色の碁石である。

ガラス玉 (229)　４点出土しており、水色の球である。

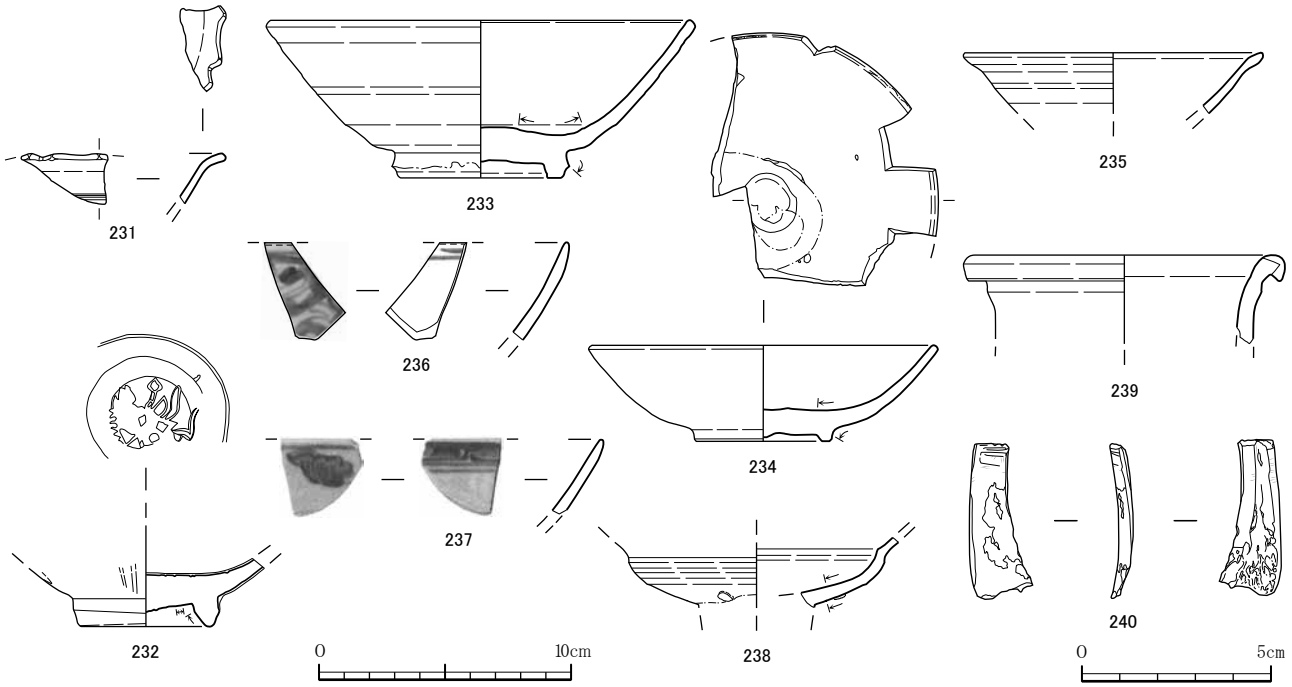
以上の他、白磁、褐釉、タイ産褐釉、沖縄産無釉陶器、陶質土器、石造製品、銭貨、円盤状製品、銭、瓦、貝製品が出土している。

４．Ⅱ層出土遺物（遺物番号 231 ～ 462　第 35 ～ 47 図、第 56 ～ 65 表、図版 33 ～ 49　）

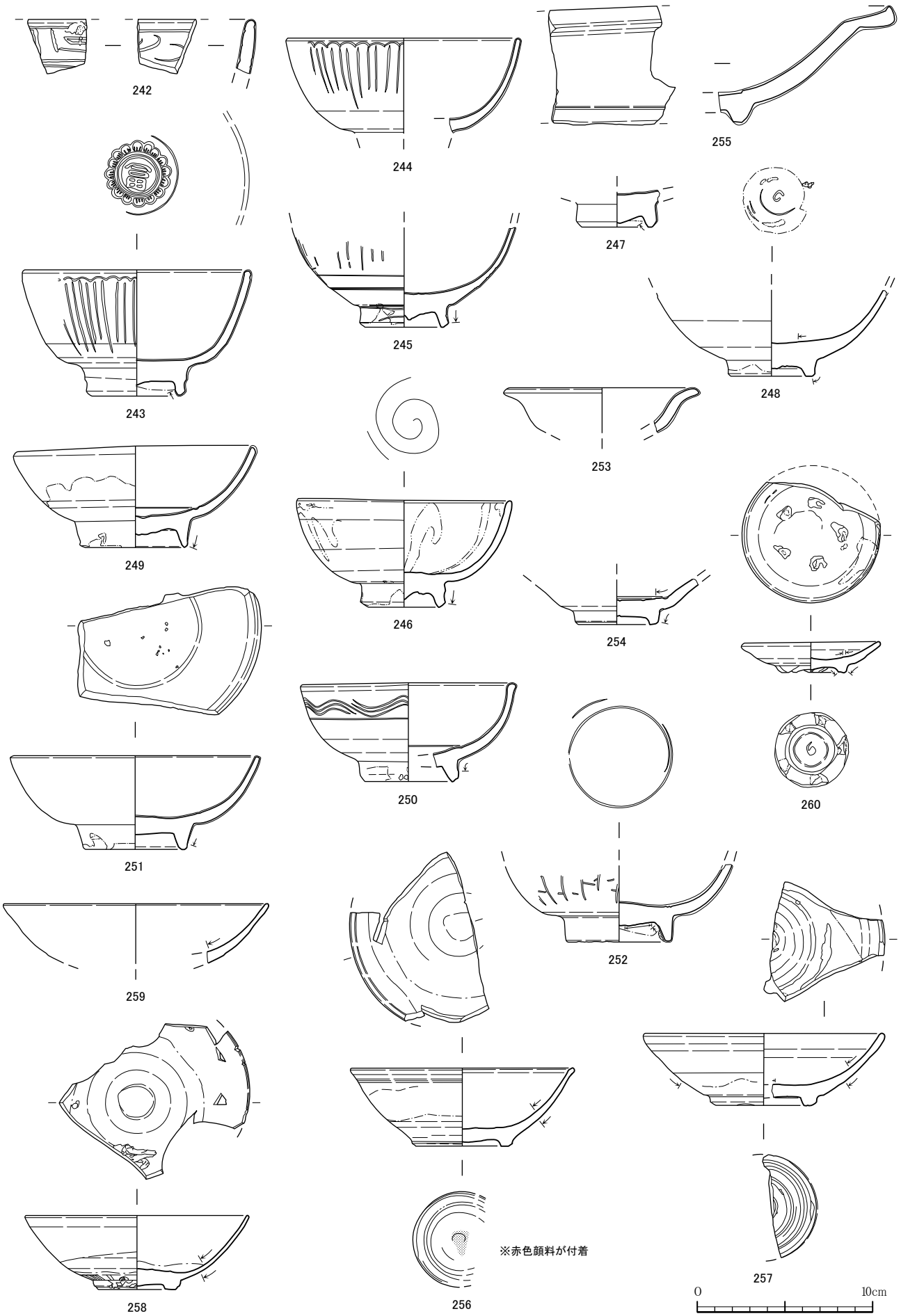
Ⅱ層は多くの礫や瓦・塼などが混じる造成土で、グスク時代～近世の遺物が多く含まれている。これらは、その堆積状況で上・中・下の３層に分けて遺物を取り上げた。下限を考えるうえでは、年代が明確な本土産陶磁器の肥前Ⅲ期のものが各層で見られ、17 世紀後半とされている（九州近世陶磁器学会 2000)。それは、通例 18 世紀以降に多くなる清代青花も６点とやはり少ないことと一致する（新垣 2003)。しかしながら、他地区の状況や今後の陶磁研究の進展などにより、時期の再検討が必要になることも想定して、下記のように３つに分けて掲載する。なお、近代陶磁器も出土しているが、Ⅱ層全体で６点であり、量的には 0.01％程度なので混入と考えている。

①Ⅱ上層出土遺物（232 ～ 241）

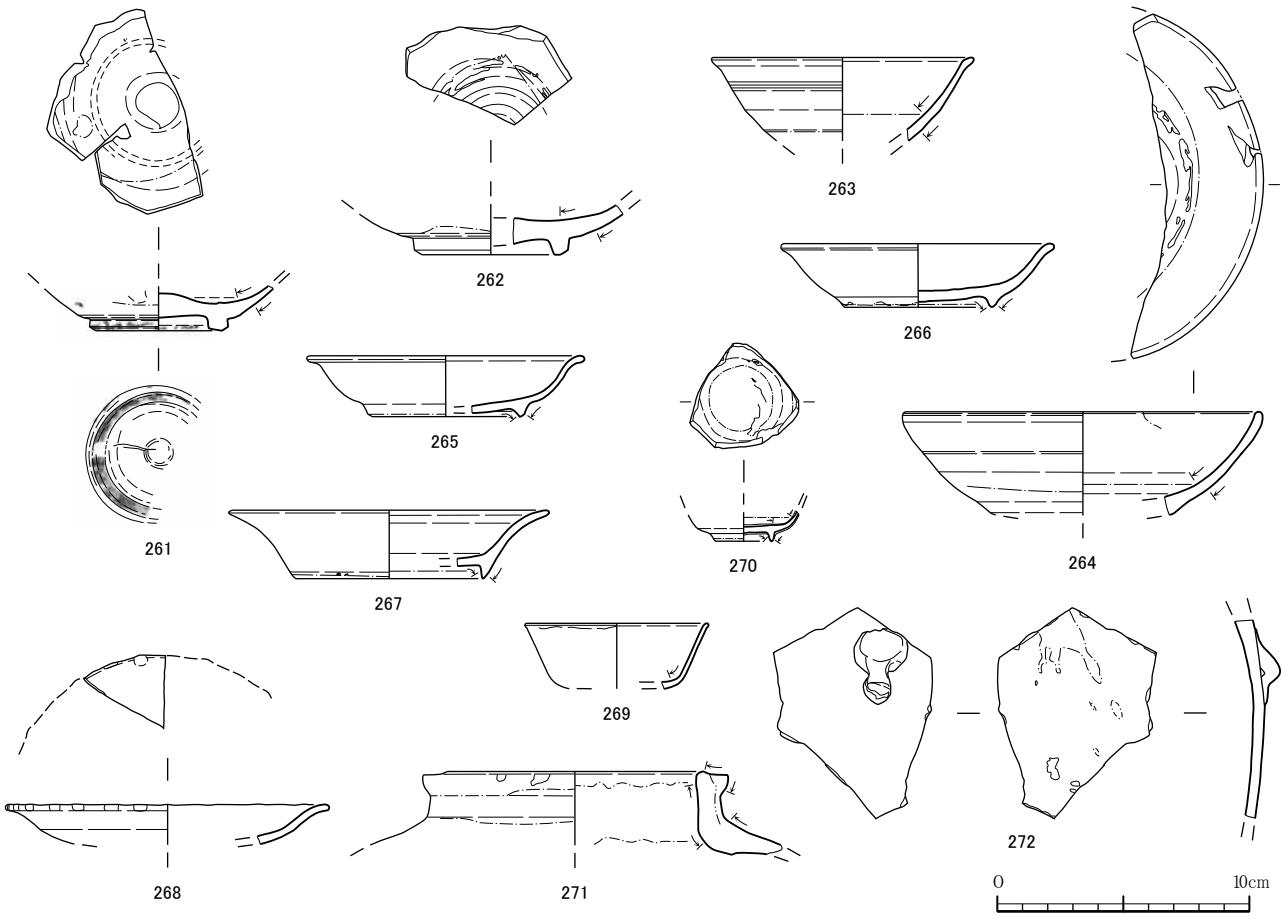
Ⅱ上層は、陶磁器類 102 点、その他 33 点、合計 135 点とⅡ層の中ではかなり少ない。ただ、本層の大半を重機で掘削してしまっており、下位と同様に比較することはできない。しかしながら、下位の層序よりも陶磁器



第35図　Ⅱ層出土遺物（1）　Ⅱ上層(232～240)、Ⅱ中層(231)



第36図　Ⅱ層出土遺物（2）　Ⅱ中層(242～257)



第37図　Ⅱ層出土遺物（3）　Ⅱ中層（261～272）

だけでなく瓦・塼なども少ないことは確かであった。グスク時代の遺物が多いが、本土産施釉陶器や沖縄産陶器などの近世の遺物も下位と同様に見られる。

青磁（232・233）（232）は碗Ⅵ類、（233）は幅広高台タイプである。

白磁（234・235）（234）は福建Ｄ´群の碗、（235）は福建Ｖ－４ａ類碗である。

青花（236・237） 漳州窯系碗である。

本土産陶磁器（238） 施釉陶器皿であるが、具体的な産地は不明である。

沖縄産無釉陶器（239）Ｂ類壺である。

骨製品（240）研磨が見られるが不明製品である。

漆（241） 具体的な製品は不明だが、黒・赤の二層構造になっている漆膜である（**図版 33**）。

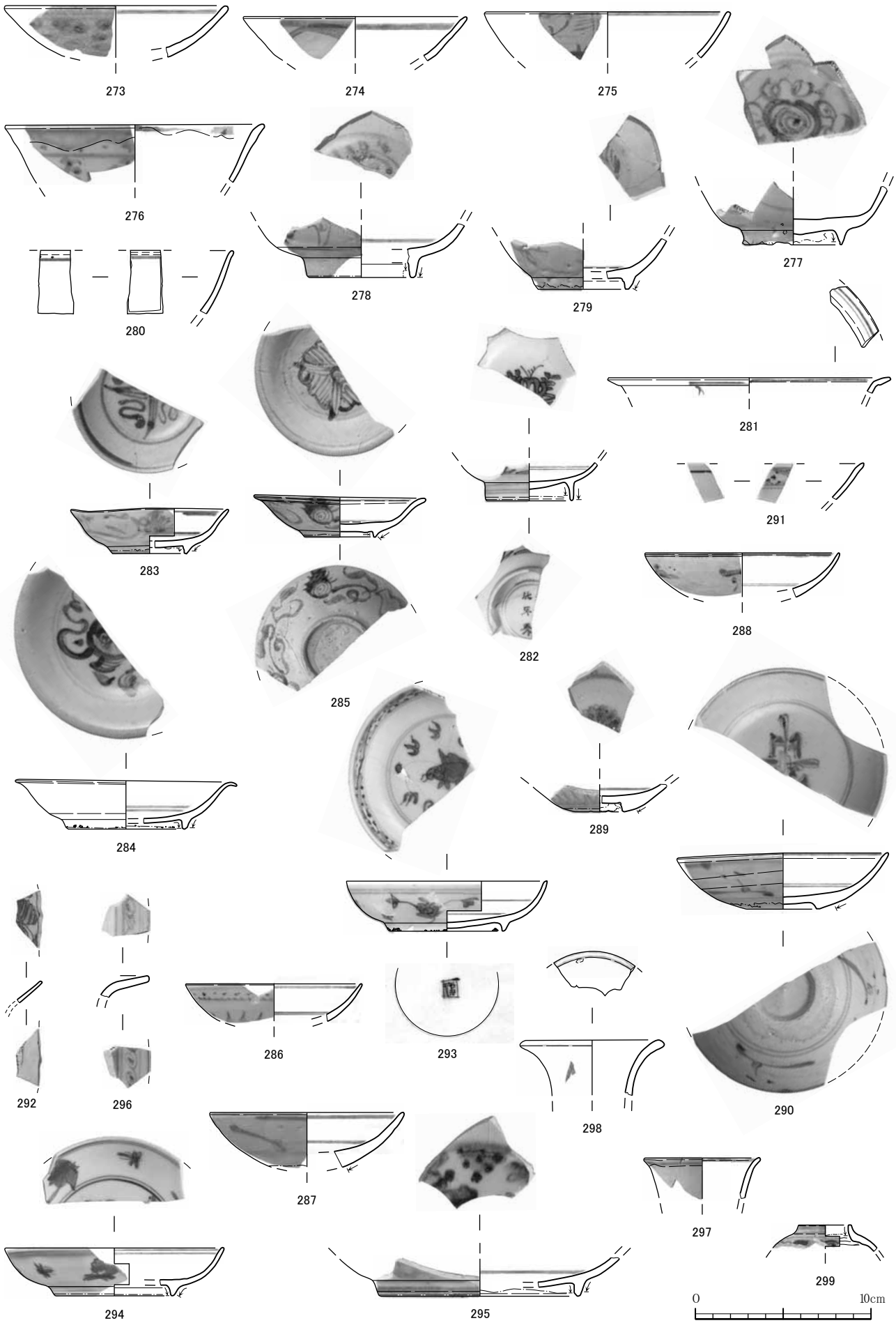
以上の他、中国産褐釉・その他陶磁器、沖縄産施釉陶器、瓦質土器、陶質土器、ガラス玉、銭貨、金属製品、円盤状製品、塼、瓦が出土している。

②Ⅱ中層出土遺物（231・242 ～ 354・380・384・462）

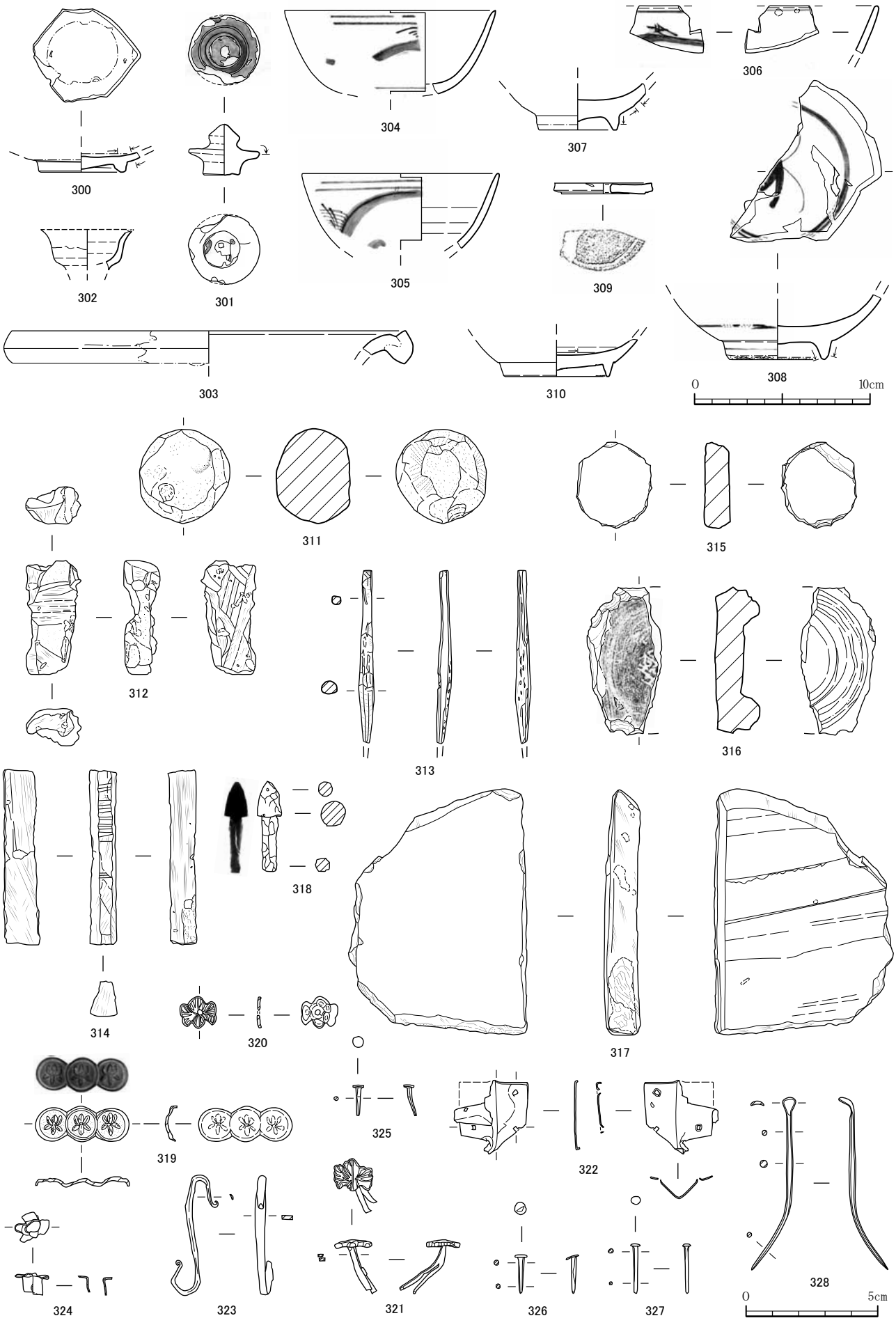
陶磁器類 784 点、その他 1,794 点、合計 2,578 点出土しており、Ⅱ層で最も多く出土しており、瓦がほぼ半分と圧倒的に多い。陶磁器類は、グスク時代の青磁・青花などが多いが、肥前Ⅲ期の本土産陶磁器が出土しており、下限年代は 17 世紀後半である。一方、グスク時代の遺物では、青磁Ⅶ類、青花明代Ⅲ類、白磁福建Ｄ´群など 16 世紀中葉・後半と考えられる遺物が比較的多い（瀬戸 2010）。

青磁（242 ～ 255） 碗は、Ⅵ類（243 ～ 248）、Ⅶ類（249 ～ 252）である。その他、皿（253・254）、盤（255）がある。

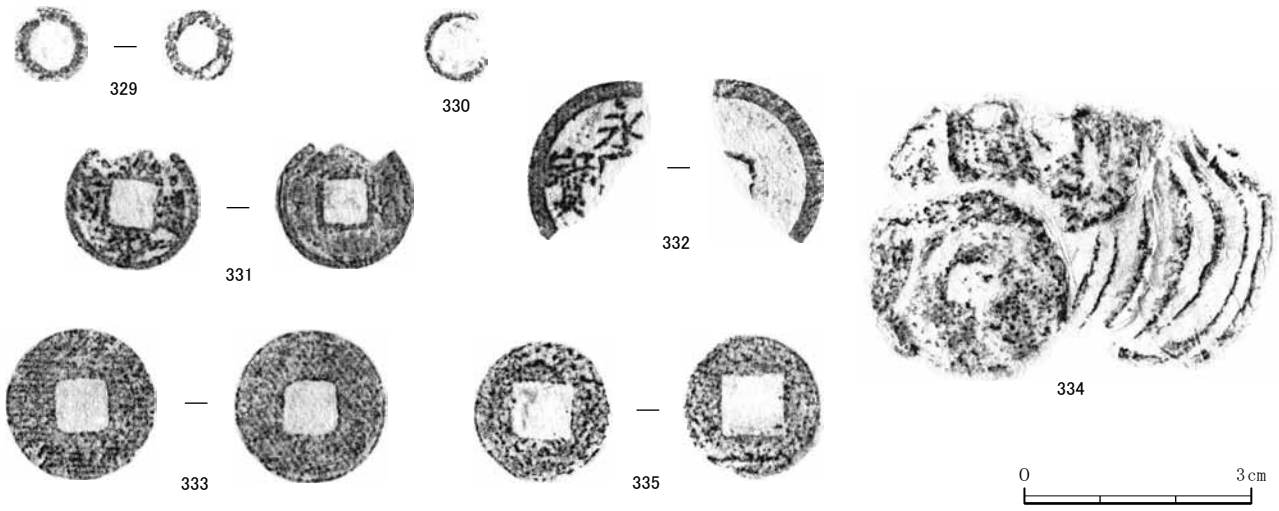
白磁（256 ～ 270・380） 碗は、Ｄ´群（256 ～ 259・261・262・264・380）、Ｖ－４ａ類（263）がある。

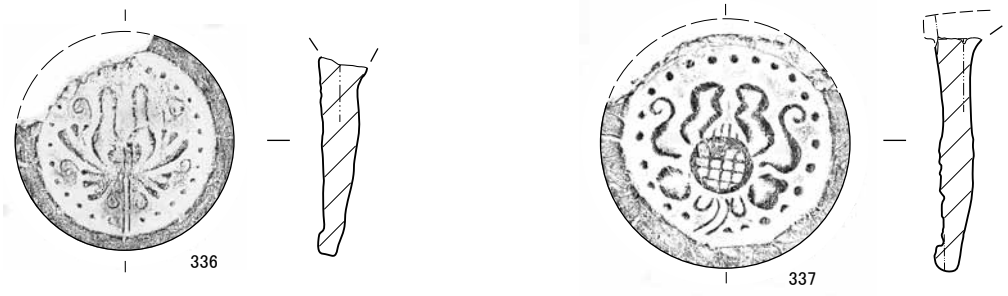


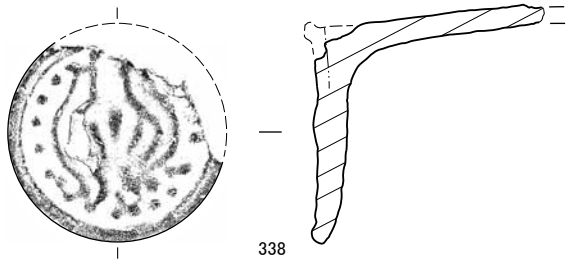
第38図　Ⅱ層出土遺物（4）　Ⅱ中層(273～299)

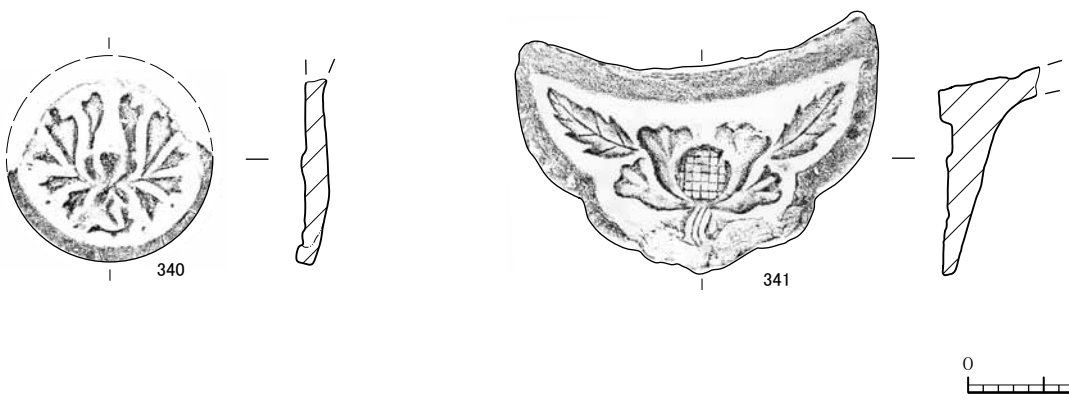


第39図　Ⅱ層出土遺物（5）　Ⅱ中層(300～328)

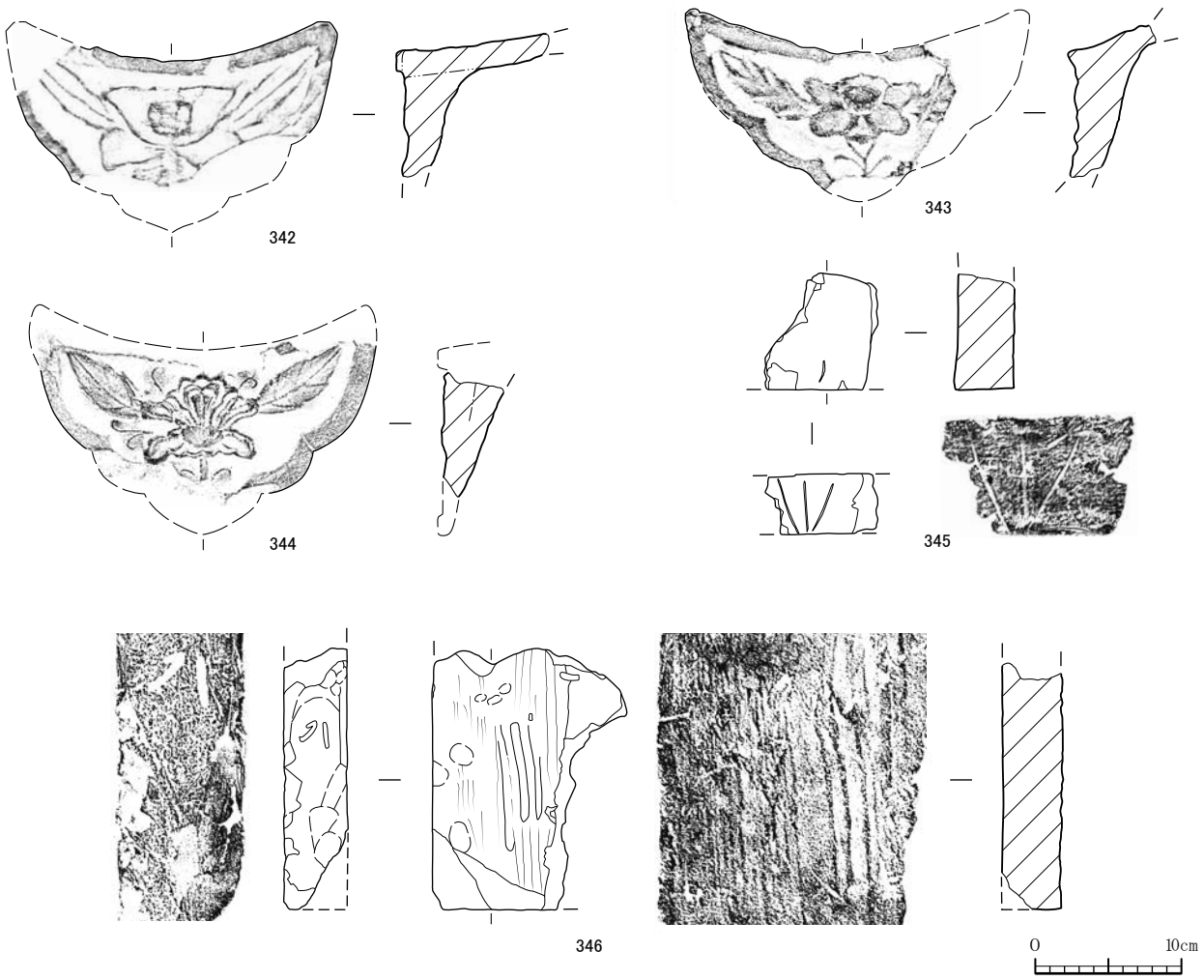








第40図　Ⅱ層出土遺物（6）　Ⅱ中層(329～341)



第41図　Ⅱ層出土遺物（7）　Ⅱ中層(342～346)

皿は、D群抉り高台皿（260）、E群皿（265 ～ 268）がある。小碗はE群（269・270）がある。

褐釉（271・272）（271・272）は壺B群であるが、量的にはA類が多い。

青花（273 ～ 299･384） 元様式は､瓶（298）がある。清代のものは量的には少なく､明代が主体である。碗は、Ⅱ－2類（277 ～ 279・384）、Ⅱ－3類（276・281）、Ⅲ類（280）、漳州窯系（273 ～ 275）がある。皿は、Ⅱ－1類（283 ～ 285）、Ⅱ－2類（286 ～ 290）、Ⅲ類（291 ～ 294）、他にⅡ類の大皿（295）、鍔皿（296）がある。他は、小碗（297）、瓶（298）、小壺（299）がある。

不明陶器（300） あまり例がない軟質、灰褐色の釉が掛けられ見込み釉剥ぎされる削りだし高台の碗である。

緑釉（301） 水注の蓋である。

タイ産褐釉（302・303）（302）は瓶Ⅱ類、（303）は壺Ⅱ類である。

本土産陶磁器（304 ～ 308） 染付碗（304 ～ 306・308）、肥前陶器碗（307）で、肥前Ⅲ期（17 世紀後半）のものである。

沖縄産無釉陶器（309） A類窯道具である。

沖縄産施釉陶器（310） A類碗である。

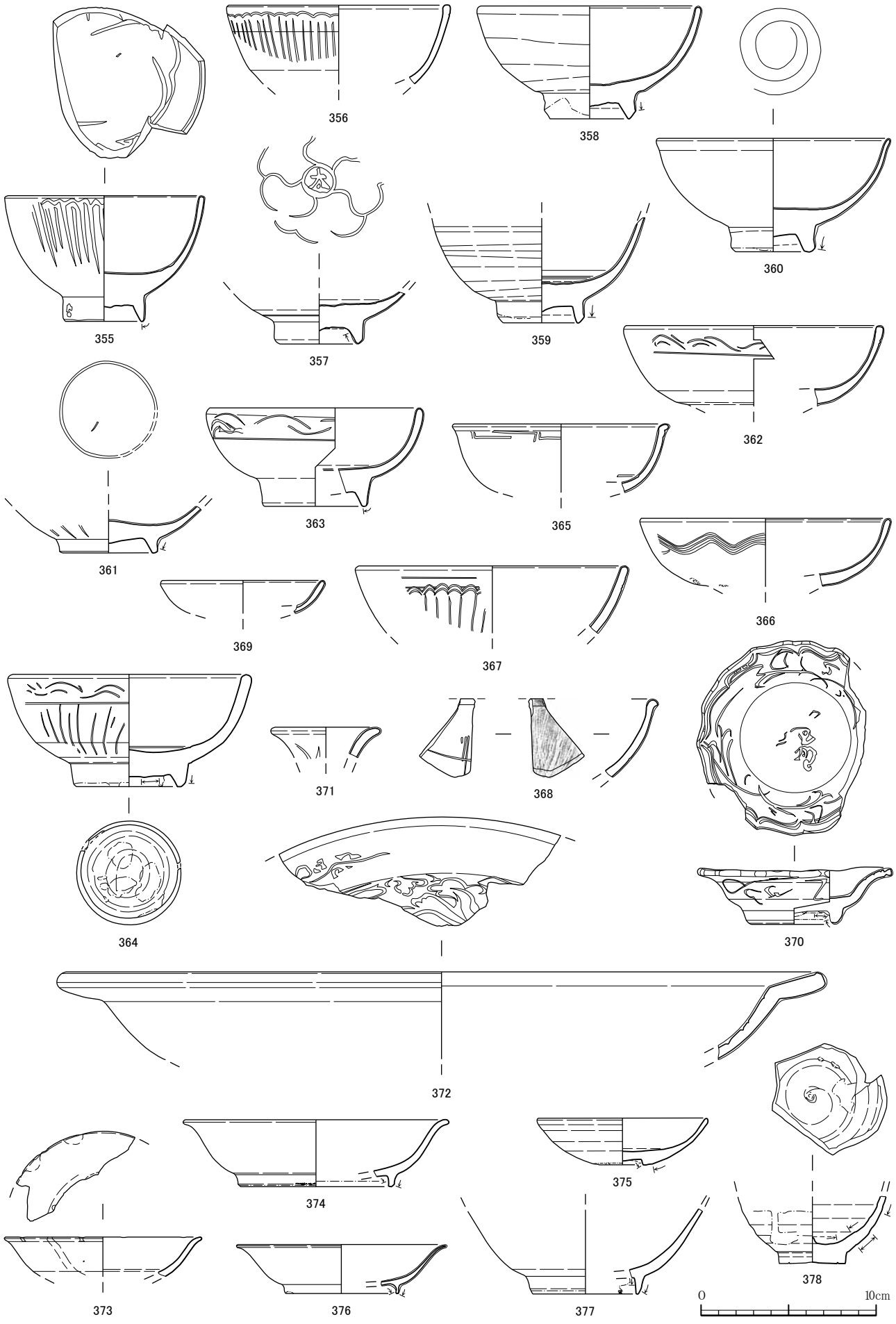
石製品（311・312・850）（311）は石球、（312）は砥石、（850）は玉器である。

骨製品（313・314）（313）は骨針と思われるもの、（314）は不明の棒状製品である。

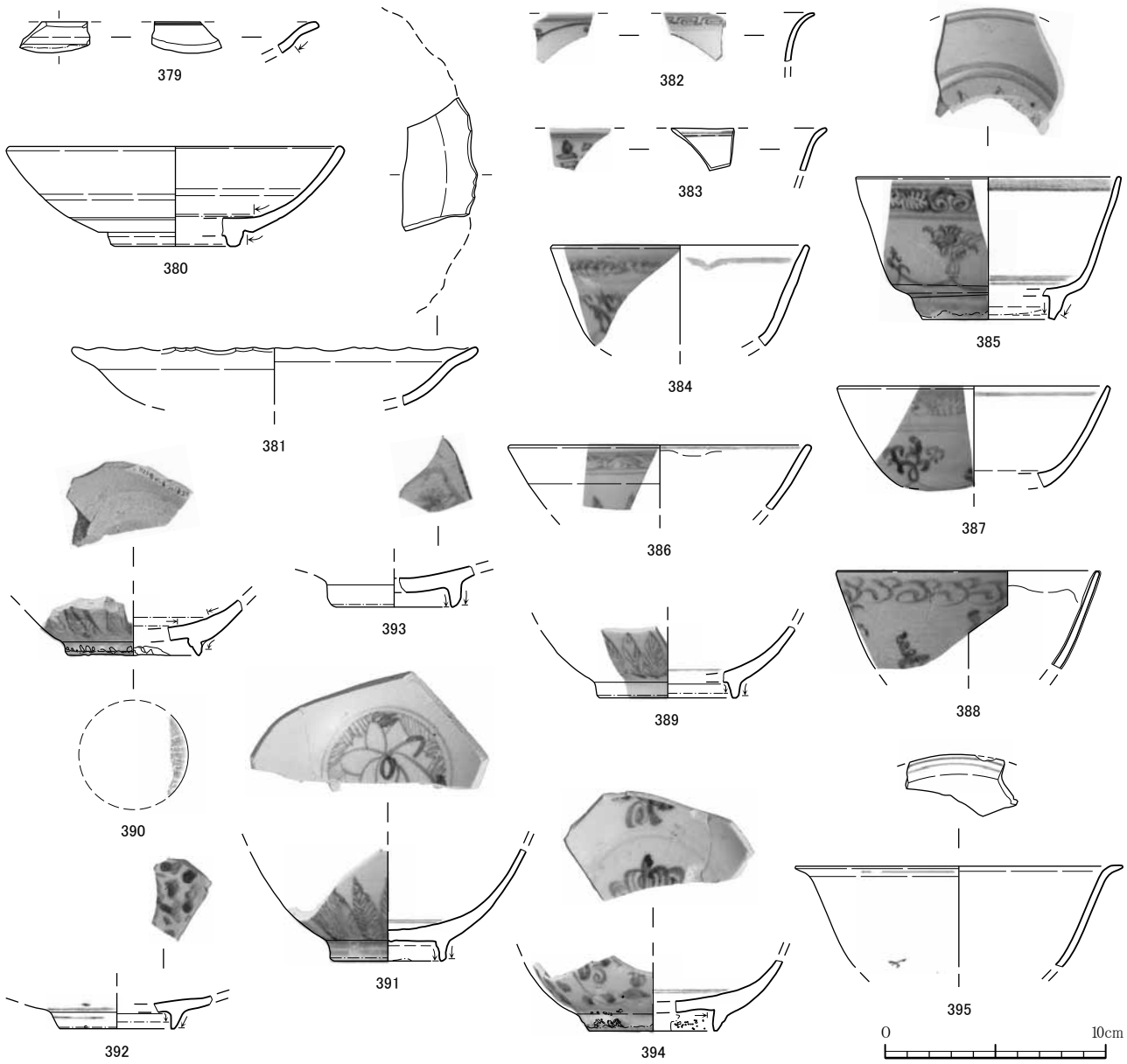
円盤状製品（315 ～ 317） 28 点出土しているが、掲載したものは3点である。

鉄・青銅製品（318） 青銅製の三角錐部に鉄製の棒部が接合されている。

青銅製品（319 ～ 328）（319）は目貫、（320･324）は飾金具、（321）は鋲、（322･323）は不明製品、（325



第42図　Ⅱ層出土遺物（8）　Ⅱ下層(355～378)



第43図　Ⅱ層出土遺物（9）　Ⅱ中層（380・384）、Ⅱ下層（379・381～395）

～327）は釘、（328）はかんざしの側差である。

銭貨（329～335）55点出土しているが、無文銭（333・335）、輪銭（329・330）が多い。（334）は11枚が重なって溶着している。

瓦（336～344・347～354） 明朝系瓦において、軒丸瓦Ａ－１－Ⅰ類・Ａ－２－Ⅱ類、軒平瓦ａ－１－Ⅰ類・同ａ－２－Ⅱ類（８点）が主体で、Ⅰ層で見られた軒丸瓦Ｂ・Ｃ類、軒平ｂ・ｃ類が見られないので、型式的に一定のまとまりがあるものと思われる。

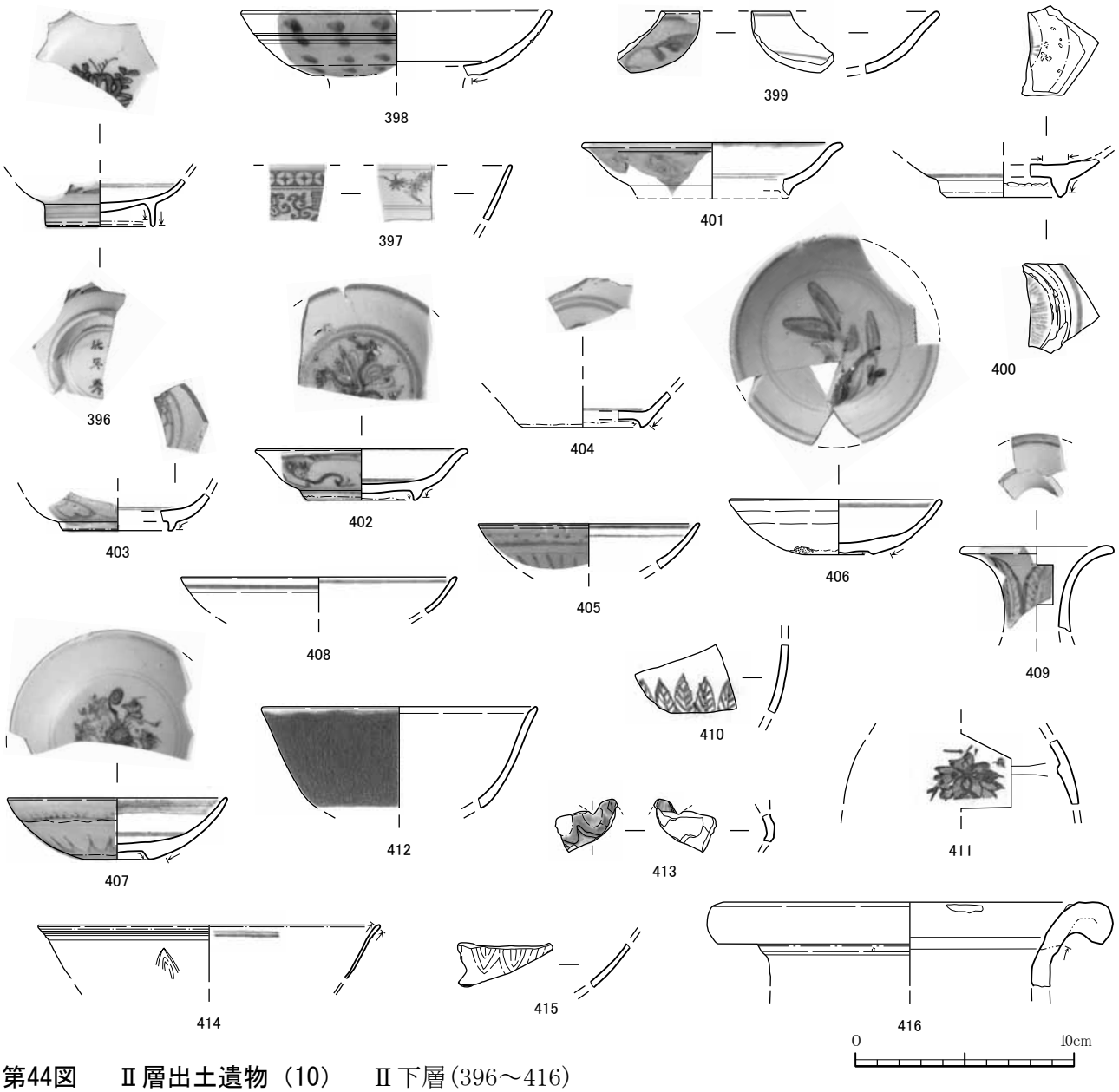
塼（345・346） 共に灰色系の正方形のものである。

漆喰製品（462） 全面が平坦面で、方形の圧痕があり何らかを固定したものか。

以上の他、ベトナム産陶磁器、本土産近代陶磁器、瓦質土器、陶質土器、産地不明陶器、ガラス玉（23点）、石製品、石造製品、円盤状製品、骨製品、貝製品が出土している。

③Ⅱ下層出土遺物（355～379・381～385・387～461）

陶磁器類857点、その他869点、合計1,726点出土している。本土産陶磁器や沖縄産陶器はⅡ中層より少ないが見られ、その年代の下限は17世紀後半のものである。グスク時代の遺物は大きな差はないが、青磁では



第44図　Ⅱ層出土遺物（10）　Ⅱ下層(396～416)

Ⅶ類、白磁では景徳鎮E群が多いこと、ベトナム産陶磁が見られることなどの特徴が窺える。

青磁（355 ～ 372） 碗は、Ⅵ類（335 ～ 360・367）、Ⅶ類（361 ～ 366）である。他は、皿（369・370）、擂鉢（368）、瓶（371）、盤（372）がある。

白磁（373 ～ 379・381）景徳鎮E群が多く、端反皿（374・376）、口縁・胴部に刻みが巡る皿（373）、碁笥底皿（375）、稜花皿（381）、端反碗（377）がある。その他、福建D ´ 群の外反皿（379）がある。

青花（382・383・385 ～ 411） 元様式は、瓶（409）がある。多くは明代である。碗は、Ⅰ類（382）、Ⅱ類（383 ～ 395･400）、Ⅲ類（396･397）、漳州窯系（398･399）がある。皿は、Ⅱ類（401 ～ 407）、Ⅲ類（408）である。その他、瓶（410・411）である。

瑠璃釉（412） 端反碗である。

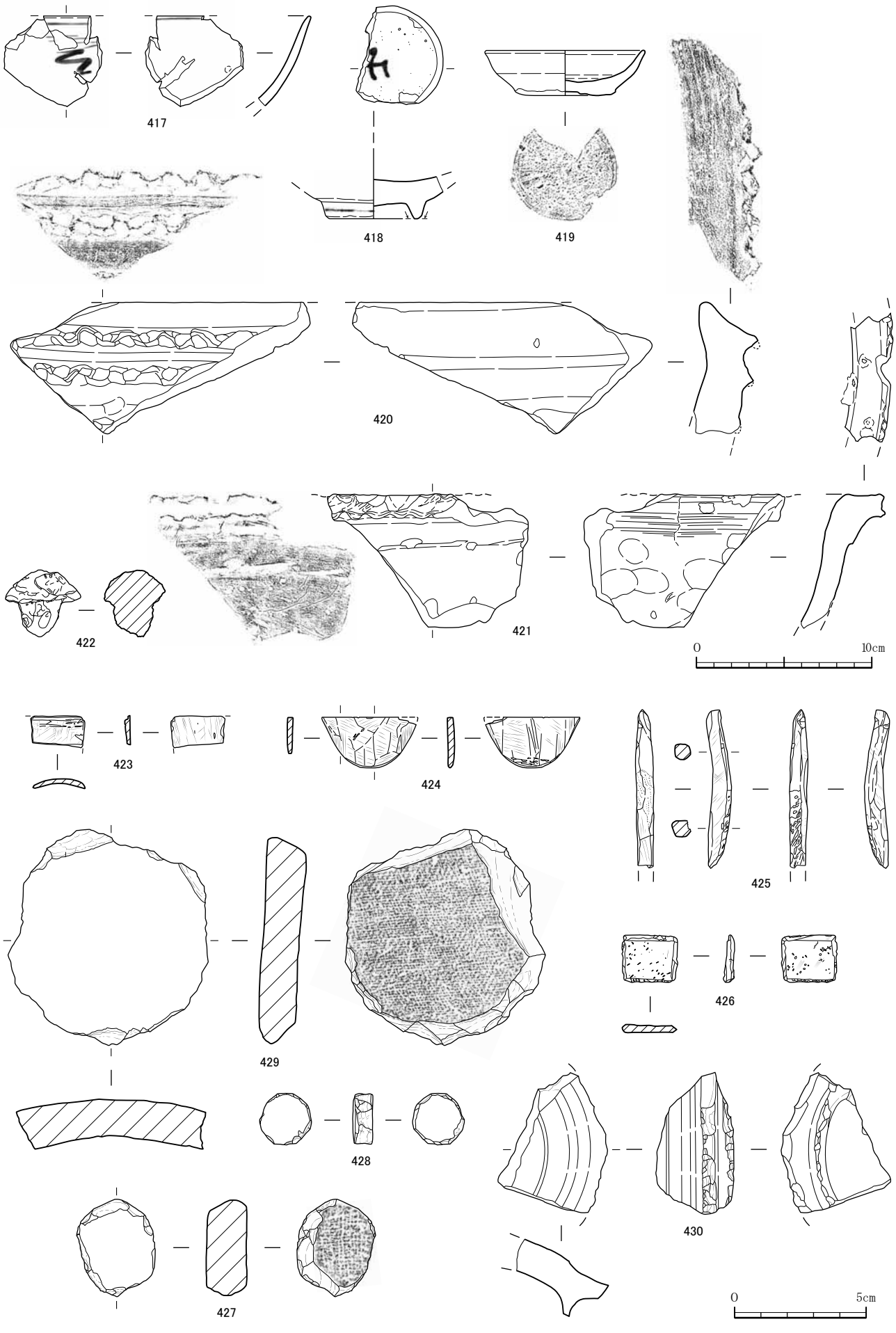
三彩（413） 水注である。

ベトナム産青花（414･415） 共に碗Ⅰ類で、外面に線刻による文様、内面に呉須による圏線などが描かかれる。

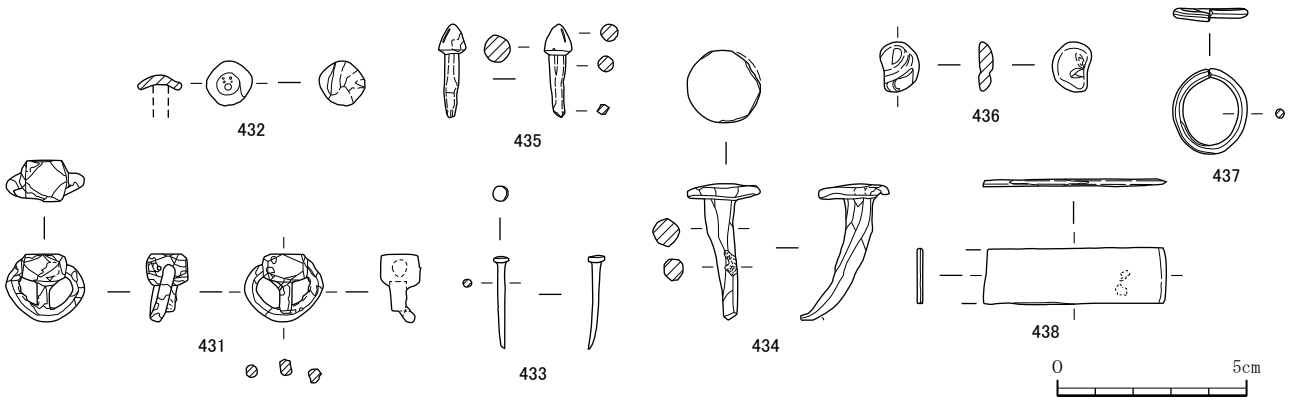
タイ産褐釉（416） 壺Ⅱ類である。

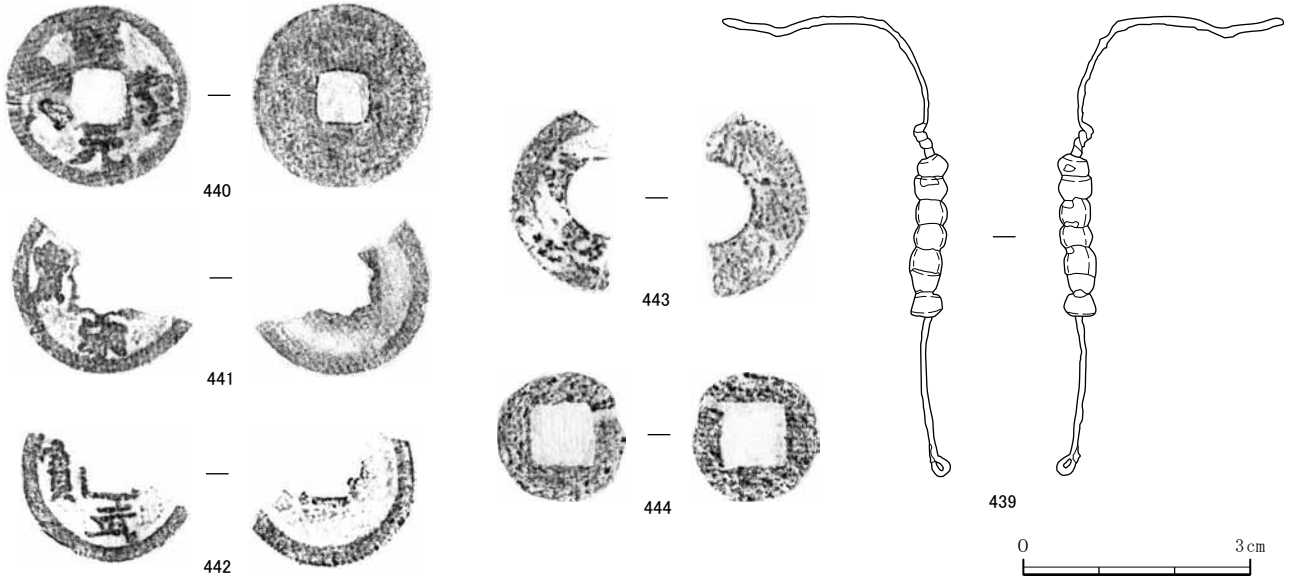
本土産陶磁器（417・418） 肥前染付碗で、肥前Ⅲ期（17 世紀後半）である。

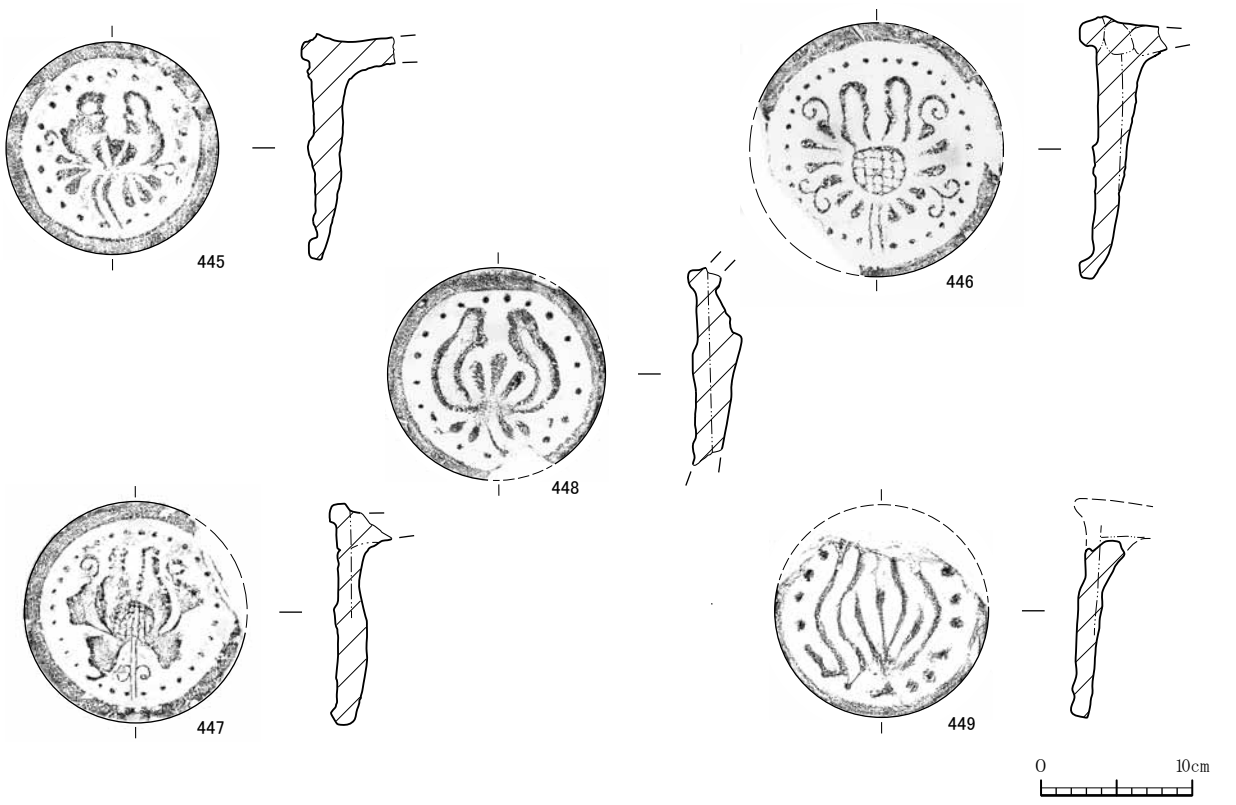
沖縄産無釉陶器（419） A類皿である。



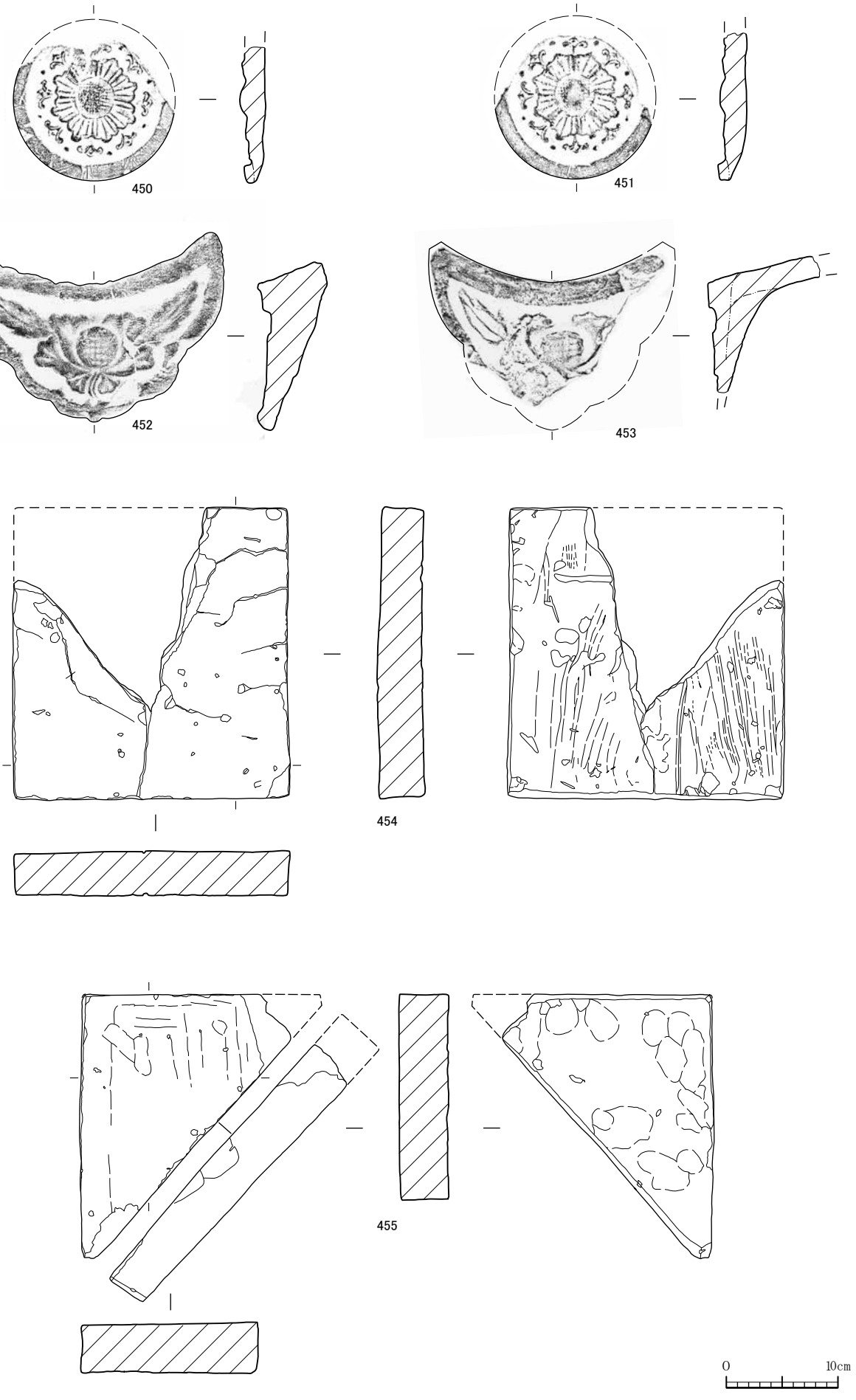
第45図　Ⅱ層出土遺物（11）　Ⅱ下層(417～430)







第46図　Ⅱ層出土遺物（12）　Ⅱ下層(431～449)



第47図　Ⅱ層出土遺物（13）　Ⅱ下層(450～455)

沖縄産瓦質土器（420・421）（420・421）は植木鉢である。

漆喰製品（422・460・461）（422）は蓋状、（460・461）は僧帽状を呈する。

骨製品（423 ～ 426・459）（424）は楕円状、（426）は棒状で骨ヘラと思われる。ほかは不明の板状製品で、（423）はカーブを有するもの、（426）は方形、（459）は長方形を呈する。

円盤状製品（427 ～ 430） 27 点出土しているうち、 4 点掲載した。

青銅製品（431 ～ 438）（431）は、甲冑金具の総角付環座、（432）は鋲、（433･434）は釘、（438）は小柄、（435・437）は不明製品、（436）は青銅滓である。

ガラス玉（439・456・457） 22 点出土しているうち、３点掲載した。

銭貨（440 ～ 444） 60 点出土している。北宋銭（440・441）、明銭（442）、無文銭（444）があり、（443）は銭種不明だが孔を円形に加工している。

瓦（445 ～ 453） 明朝系 515 点、高麗系 1 点、大和系 1 点が出土している。明朝系瓦は、軒丸瓦Ａ－１－Ⅰ類、軒平瓦ａ－１－Ⅰ類と、Ⅱ中層よりもさらに限定されたタイプで古手の傾向である

塼（454・455）（454）は灰色系の正方形、（455）は赤色系の三角形である。

漆（458） 赤漆の塗膜片である。

以上の他に、タイ産土器、本土産近代陶磁器、沖縄産施釉陶器、陶質土器、土器、石造製品、貝製品が出土している。

５．Ⅲ層出土遺物（遺物番号 463 ～ 747　第 48 ～ 64 図、第 65 ～ 76 表、図版 50 ～ 67）

Ⅲ層は、Ⅱ層の下に直接堆積するⅢ上・下層と、層位的には下層と対応する部分もある石積み１内１～３層が相当する。堆積状況の検討から、上層より①Ⅲ上層、②石積み１内１・２層、③石積み１内３層、④Ⅲ下層という層順で捉えられる。しかしながら、出土陶磁器では明確な違いを抽出する事は難しく、Ⅲ層全体の傾向として、上限は明青花・青磁Ⅴ類より 15 世紀中葉・後半、下限が明青花Ⅱ類より 16 世紀前半の年代幅が妥当と考えている。（瀬戸 2010）。ただ、今後の検証のためにも、細分した層ごとに掲載する。

また、先述のⅡ層で見られた本土産陶磁器、沖縄産施釉・無釉陶器、陶質土器、明青花Ⅲ類など、16 世紀後半～ 17 世紀後半の可能性があるものは 40 点と、全体の１％程度見られる。いずれの小片であるし、トレンチ１と石積１内側を合わせても 10㎡という小面積でもあることから、混入の可能性と見てよいと考えている。

ただ、塼 431 点、そして明朝系瓦 510 点も出土しており、混入とは考えにくい。その内瓦当はわずかであるがⅡ下層と同様の軒丸瓦Ａ－１－Ⅰ類、軒平瓦ａ－１－Ⅰ類が出土している。明朝系瓦や塼は、16 世紀後半以降の生産と考えられているが（上原 2011・2013）、今回の出土状況から遡るのか、また陶磁器の年代観を修正する必要があるのか、今回の調査だけでは決め難いので、更なる検証が必要である。今回は、先述したように、より本州との年代観が対応できる青花を中心とした陶磁器の年代観によるものとしている。

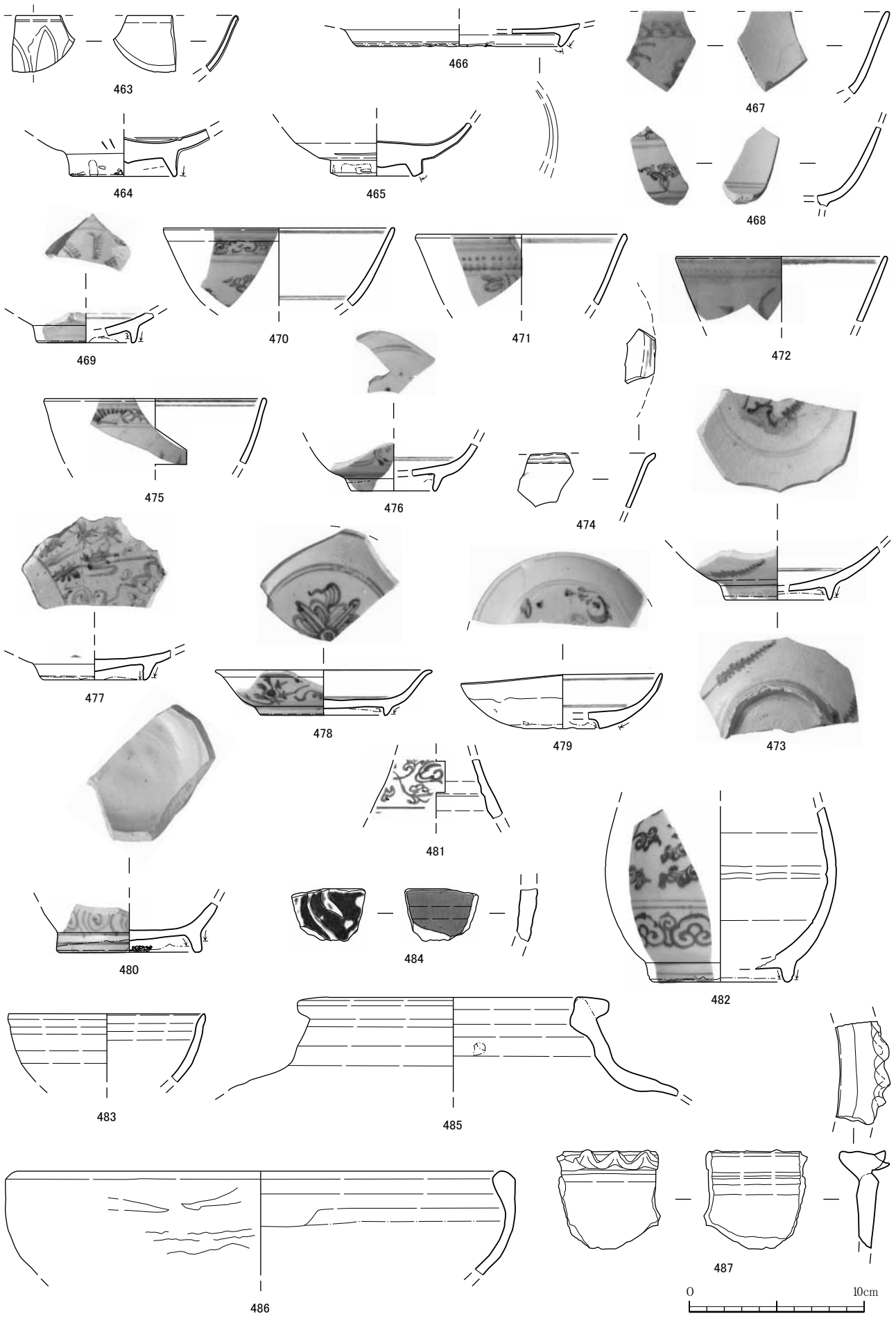
なお、Ⅲ層全体では陶磁器類 3,457 点、その他 9,276 点、合計 12,733 点と本調査区で最も多く出土している。

①Ⅲ上層出土遺物（463 ～ 500・502）

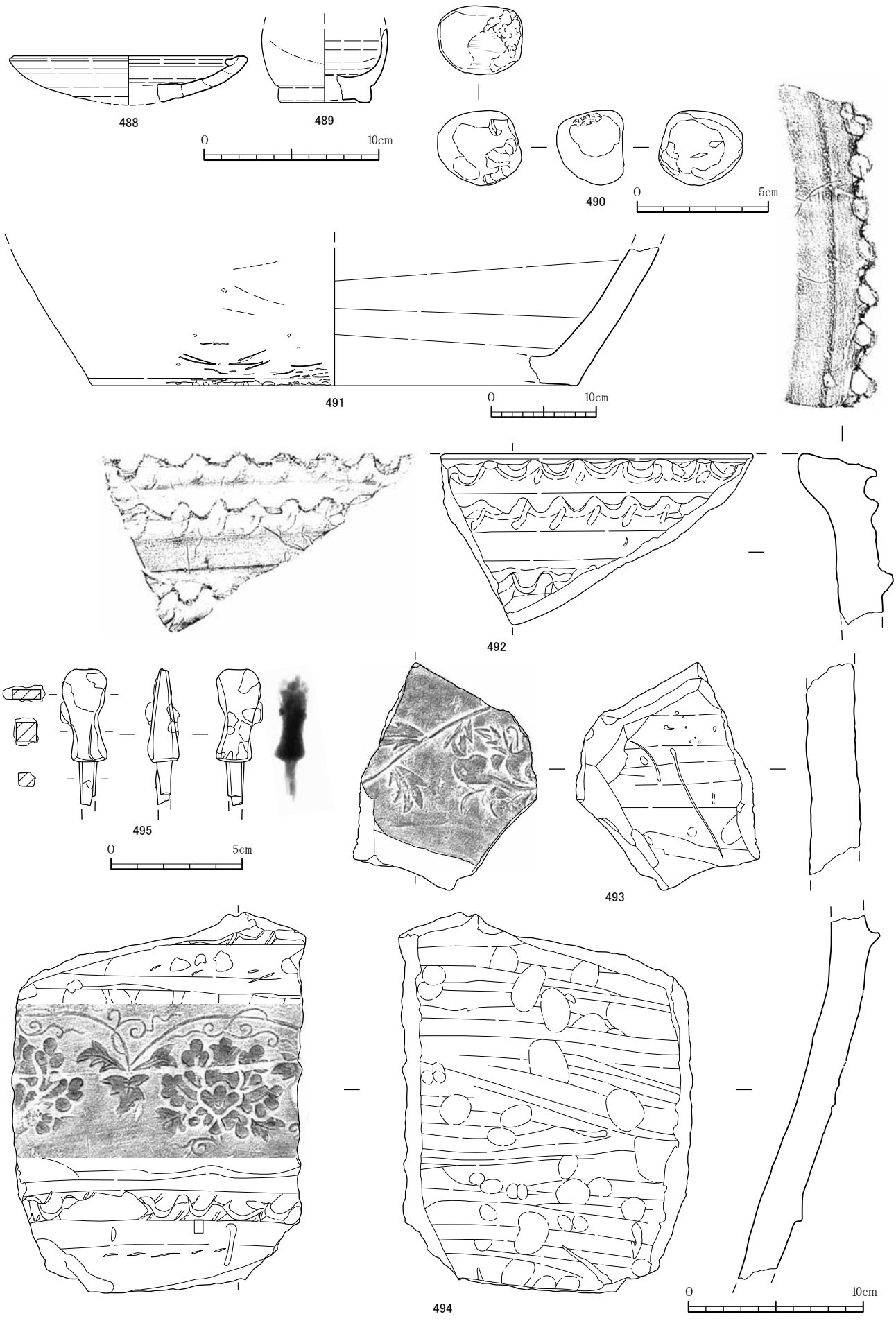
陶磁器類 279 点、その他 209 点、合計 488 点である。陶磁器類のうち、青磁 70 点に対し、青花が 48 点とⅢ層の中でも青花が目立つが、その型式差までは明確ではない。また先述したように、明朝系瓦 113 点、塼 46 点、そして瓦質土器も６点、混入と言うには多く出土している。なお、Ⅲ層のうち明確に細分して取り上げられなかった遺物が 15 点あり、便宜的にここで扱った。

青磁（463 ～ 465） 碗は、Ⅴ類（463）、Ⅵ類（465）、Ⅶ類（464）がある。

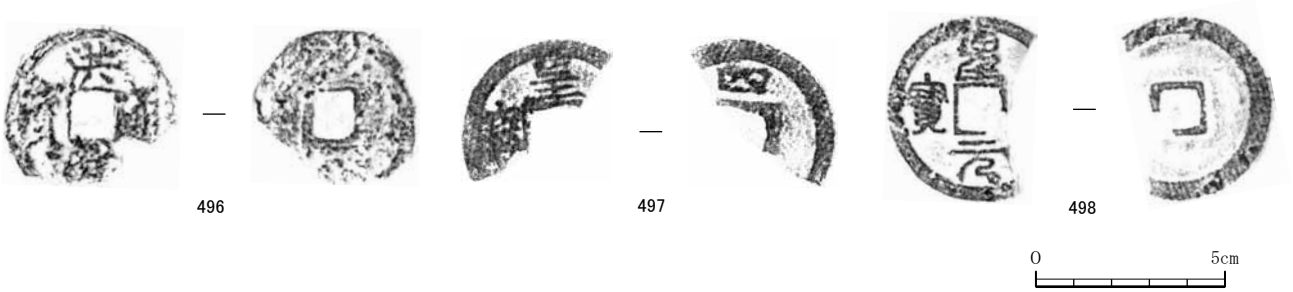
白磁（466） 景徳鎮窯系の端反皿である。

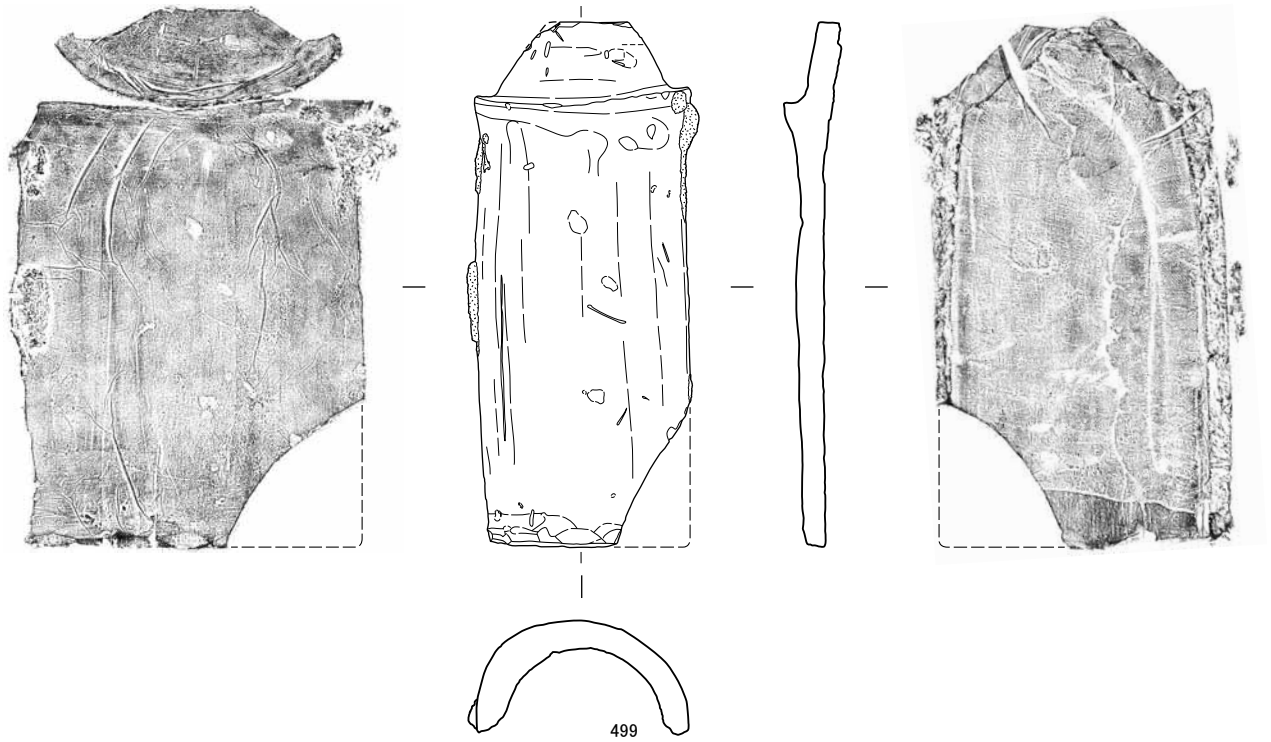


第48図　Ⅲ層出土遺物（1）　Ⅲ上層(463～487)

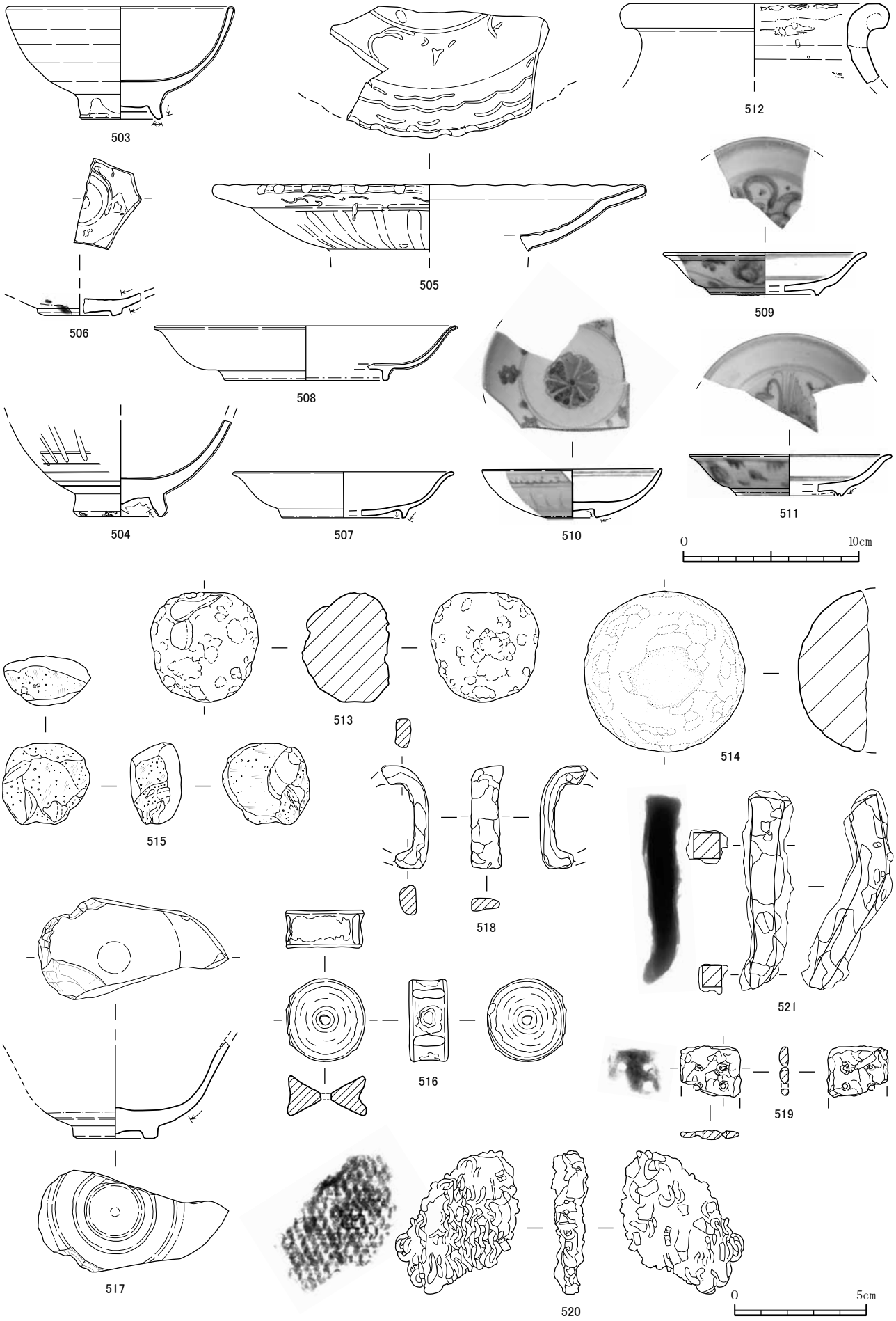


第49図　Ⅲ層出土遺物（2）　Ⅲ上層(488～495)





第50図　Ⅲ層出土遺物（3）　Ⅲ上層(496～500)、石積み1内3層(501)



第51図　Ⅲ層出土遺物（4） 石積み1内1層(507・518)、石積み1内2層(503・506、508～517・519・520)、石積1内3層(521)

青花（467 ～ 482） 明代のみである。碗の多くはⅡ類で、Ⅱ－１類（469・475）、Ⅱ－２類（467・468・470 ～ 472･476）、Ⅱ－３類（473･474）がある。皿は、Ⅱ－１類（478）、Ⅱ－２類（479）がある。その他、瓶（480 ～ 482）がある。

天目（483） やや丸みがある器形である。

法花（484） 壺で、外面貼り付け文で青・緑釉、内面緑釉で（88）と類似する。

褐釉（485 ～ 487） 壺はＡ群（485）、鉢は内湾するもの（486）、鍔縁口縁で胴部が直線的なもの（487）がある。

タイ産土器（488・489）

土製品（490） 球状製品である。

沖縄産瓦質土器（491 ～ 494） 全て植木鉢で、口縁（492）、胴部（493・494）、底部（491）である。

鉄製品（495） 鉄鏃である。

銭貨（496 ～ 498） 21 点出土。（496）は明銭、（497・498）は北宋銭。

瓦（499･500･502） 明朝系 113 点、大和系１点が出土している。明朝系瓦において、軒丸瓦Ａ－１－Ⅰ類（３点）、軒平瓦ａ－１－Ⅰ類（１点）が見られる。丸瓦（499）はほぼ完形である。

以上の他に、タイ産土器、ベトナム産白磁、韓半島産青磁、本土産近代陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産施釉陶器、産地不明陶器、ガラス玉、石・石造製品、円盤状製品がある。近世・近代のものはわずかである。

②石積み１内１・２層出土遺物（503 ～ 520・522 ～ 530）

陶磁器類は１層 65 点、２層 269 点、その他は１層 10 点、２層 601 点である。両層の違いが明瞭でなく、まとめている。２層では、明朝系瓦 117 点でうち軒平瓦軒平瓦ａ－１－Ⅰ類（１点）、塼 114 点とⅢ上層とほぼ同様である。青磁と青花の比率であるが、Ⅲ上層より１割と少なくなっているが、型式的な違いは見つけがたい。

青磁（503 ～ 505）（503・504）は碗Ⅵ類、（505）は稜花盤である。

白磁（506 ～ 508）（506）はＤ群内湾皿、（507・508）はＥ群端反皿である。

青花（509 ～ 511）（509・511）は明Ⅱ１類皿、（510）は明Ⅱ２類皿である。

タイ産褐釉（512） 壺Ⅱ類である。

石製品（513 ～ 515・530） 石球（513・514）、砥石（515）、製品残滓（530）である。

骨製品（516） メジロザメ椎骨のビートである。

円盤状製品（517） ２層で８点出土している。

青銅製品（518） 柄縁金物である。

鉄製品（519・520） 小札（519）、鎖帷子（520）である。

ガラス玉（522・523） ２層で 11 点出土している。

銭貨（524・525） １層で１点、２層で 10 点出土。

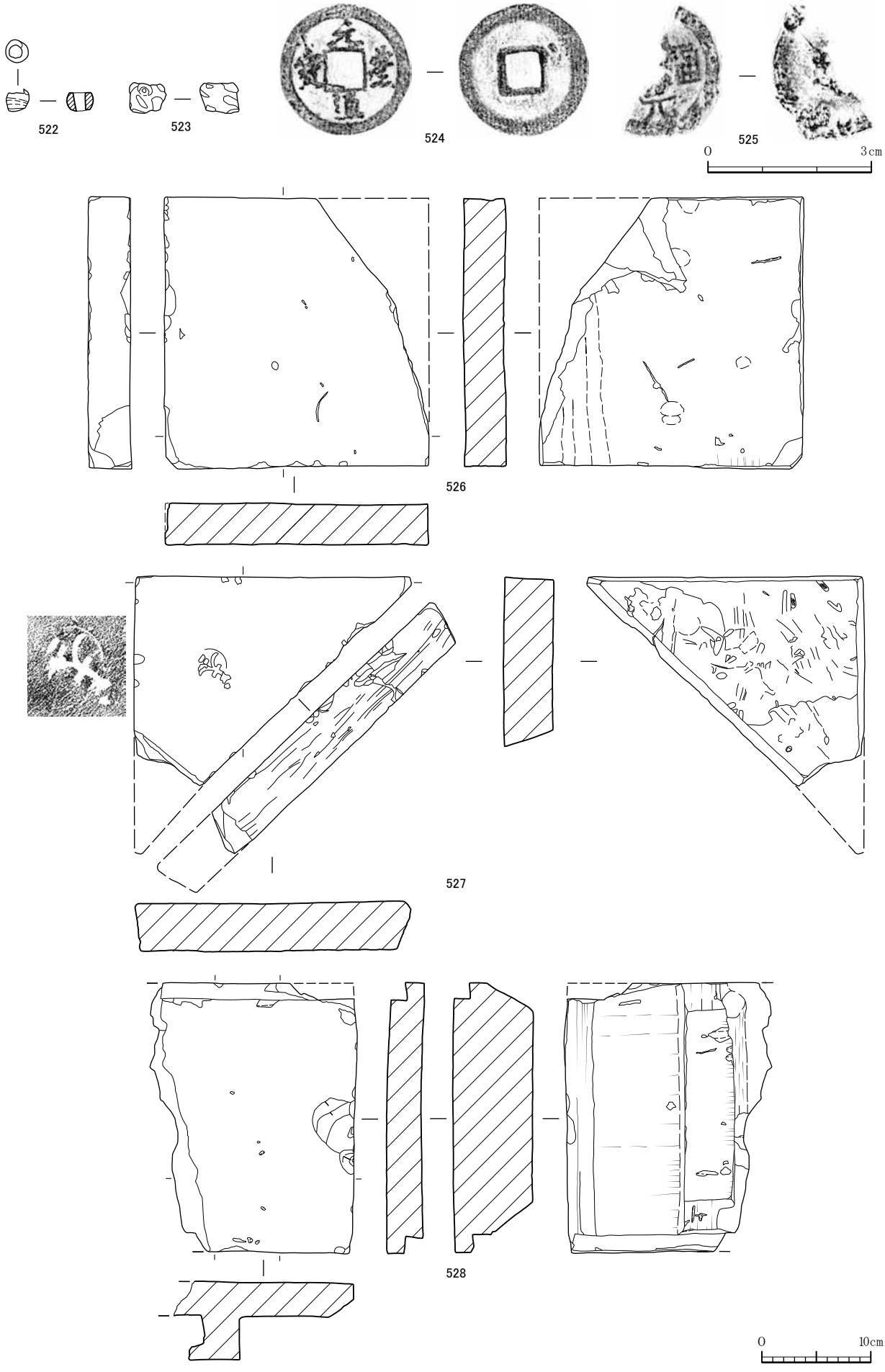
塼（526 ～ 528）（526）は正方形、（527）は三角形、(528）は噛み合わせ式である。

漆喰製品（529）（529）は蓋状のものである。

以上の他に、中国産褐釉・その他の陶磁器、沖縄産施釉・無釉陶器、貝製品、イネがある。

③石積み１内３層出土遺物（501・521・531 ～ 637・639 ～ 656・658 ～ 660）

石積み１内３層は、その最下部の貝だまりと分けて取り上げている。陶磁器類は３層 269 点、貝だまり 1,365 点、その他は３層 2,537 点、貝だまりは 5,262 点で、全合計 9,374 点と本調査区で最も多くの遺物が出土している。３層では金属製品 1,580 点、貝だまりでは中国産褐釉 877 点、貝小片 4,519 点、そして後述するヤコウガイ等含真珠層貝殻を中心とした巻貝類が 1,550 点という違いはあるが、各々の内容に大きな差は見つ



第52 図　Ⅲ層出土遺物（5）　石積み1内2層(522～528)

けがたい。また、青磁と青花の比率は１割で、Ⅲ上層を除いた本層全体の平均であり、型式差も明確ではない。瓦より塼が若干多くなっているが、大きな差とは言い難い。

青磁（531 ～ 549） 碗は、Ⅳ類（538）、Ⅴ類（533）、Ⅵ類（531・532・534 ～ 537・539 ～ 541）がある。皿は、Ⅳ類（549）、Ⅴ類（542・543）、Ⅵ類（544）である。（545 ～ 548）は盤である。

白磁（550 ～ 558） Ｃ－３群碗（550）、Ｄ群抉り高台皿（551・552）、Ｅ群端反皿（553・554）、Ｅ群小碗（555）、香炉 (556)、器台（557）、袋物（558）がある。

青花（559 ～ 567）明代のもので、碗Ⅱ１類（559）、皿Ⅱ１類（560 ～ 563）、大皿（564）、瓶（565）、腰折れの小碗（566・567）がある。

褐釉（568・569・573・574）（568・569）は壺Ａ群である。鉢は肥厚口縁をもつ内湾するもの（573）、鍔縁口縁のもの（574）がある。

天目（570 ～ 572） 口縁（571）、底部で円盤状となったもの（570・571）がある。

タイ産褐釉（575 ～ 577）（575・577）は中型壺、（576）は壺Ⅰ類である。

ベトナム産陶磁器（578 ～ 581）（578・579）は白磁碗、（580）は中国産の可能性もあるが青花碗、（581）は色絵碗である。

韓半島産青磁（582） 壺である。

沖縄産瓦質土器（583・584）（583）は欄干、（584）は植木鉢である。

土製品（585） 球状製品である。

石製品（586 ～ 588・851）（586）は石球、（587・588）は砥石、（851）は玉器残滓である。

石材（849）（849）は自然のサンゴ石である。

漆喰製品（589・591） 共に不明製品だが、（591）は円盤状でるつぼと類似する。

ガラス製品（590） 形状は碁石だが、凸面に２か所の穴がある。

円盤状製品（592 ～ 599） ３層で 96 点、貝だまりで 14 点で、Ⅰ層を除き最も多い。

るつぼ（600・601・603・604）（600）は蓋形で、金滴が付着。その他は碗形で、内外ともに赤・黒色の溶着物がある。

ふいご（602） るつぼと類する材質だが、筒形で内面に溶着物はみられないため、るつぼとした。

鉄製品（521・605 ～ 626）（605 ～ 612）は甲冑小札、（614）は甲冑鎧板、（620・623）は甲冑金具の鎖、（613・616）は刀子、（617）はくさび、（624）は鋲、（625）は釣針、（626）は鉄釘、（521・618・619・621・622）は不明製品である。

青銅製品（627 ～ 649）（627）は刀装具の柄縁、(647）は柄頭、(628･629）は鍬形、(631･632）は八双金具、（633・634）は覆輪、（640）は総角付環座、（629）は不明飾金具、（635 ～ 640）は鋲、（641・642・645・646・648）は不明製品、（649）は青銅滓である。

ガラス玉（650 ～ 652・659） ３層は 23 点、貝だまり 37 点と本調査区で最も多く出土しているが、土壌水洗を行ったことも要因しているものと思われる。

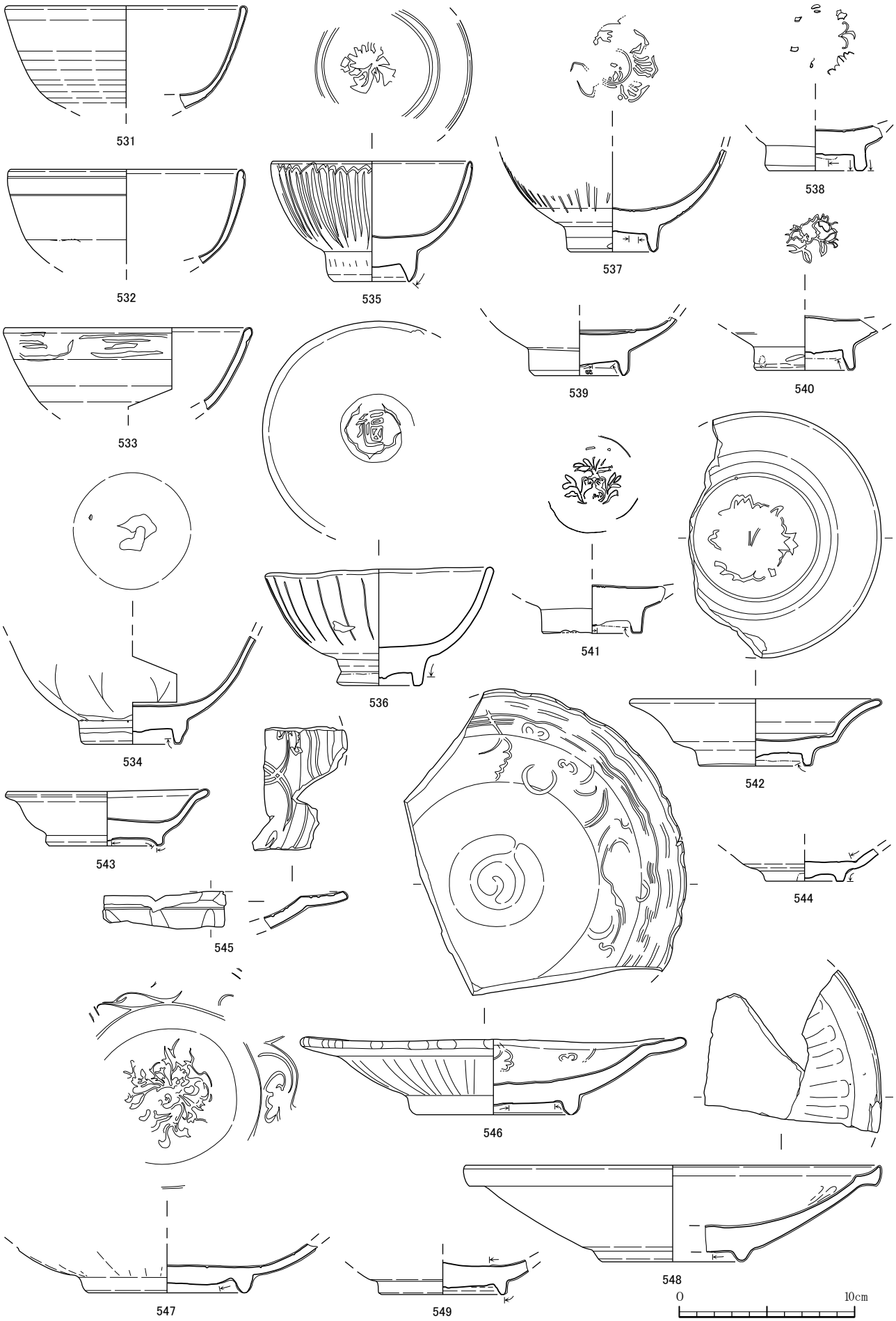
銭貨（653 ～ 656）（653・654・656）は北宋銭、（656）は無文銭である。

瓦（501）（501）は明朝系平瓦である。

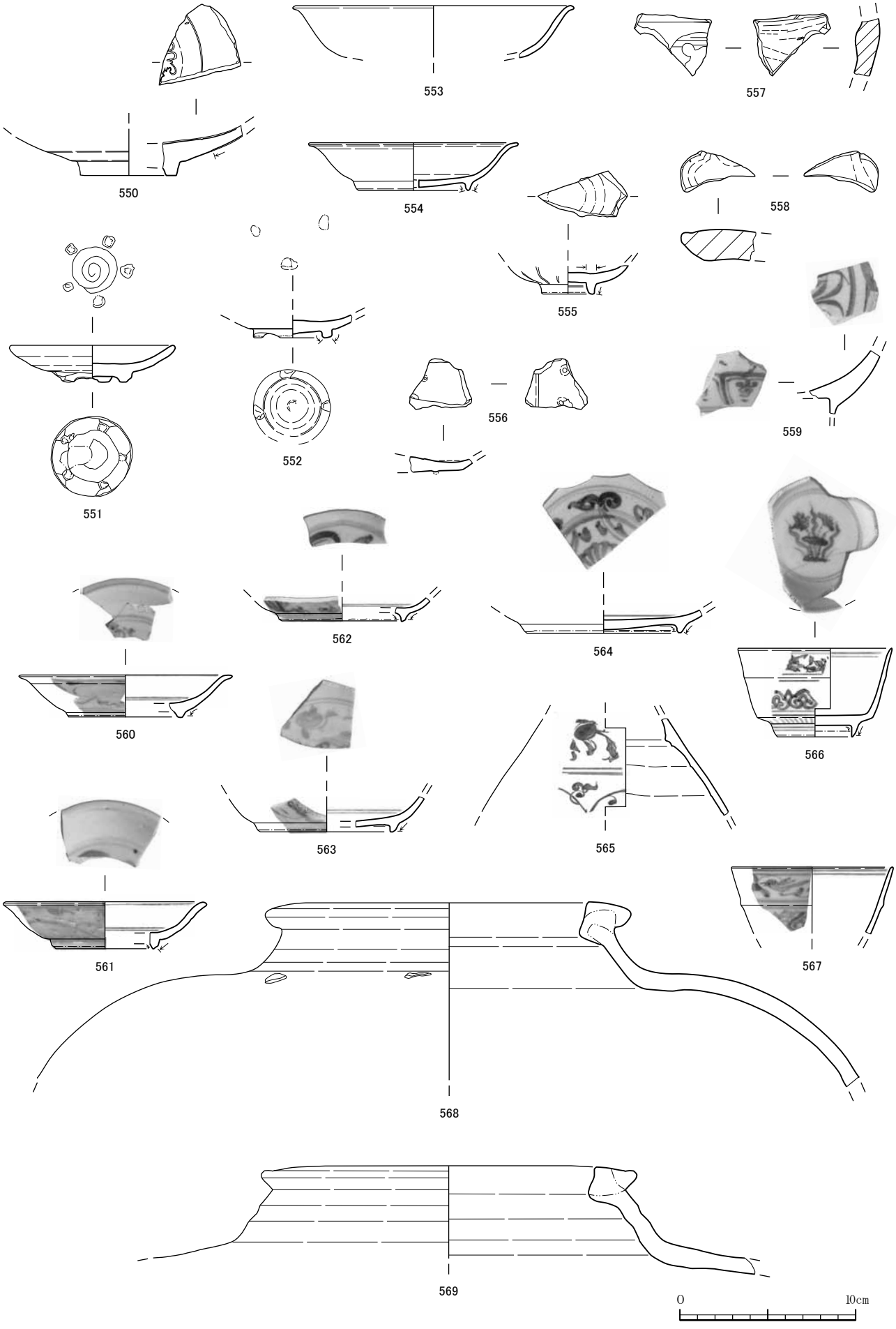
塼（658）（658）は灰色系の三角形のものである。

漆（660） 赤漆の塗膜片である。

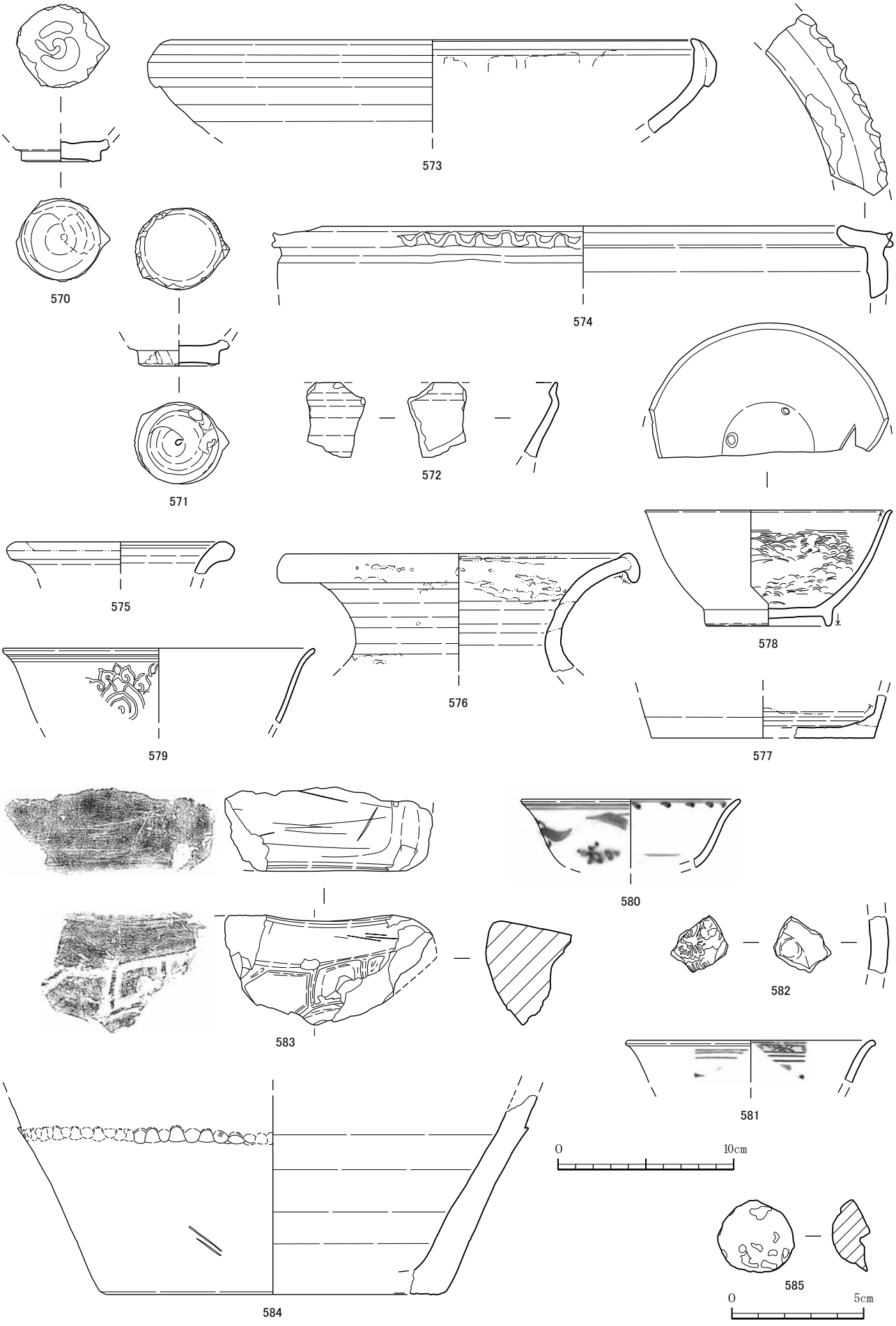
以上の他、タイ産土器、本土産近代陶磁器、沖縄産施釉・無釉陶器、陶質土器、土器、産地不明陶器がある。



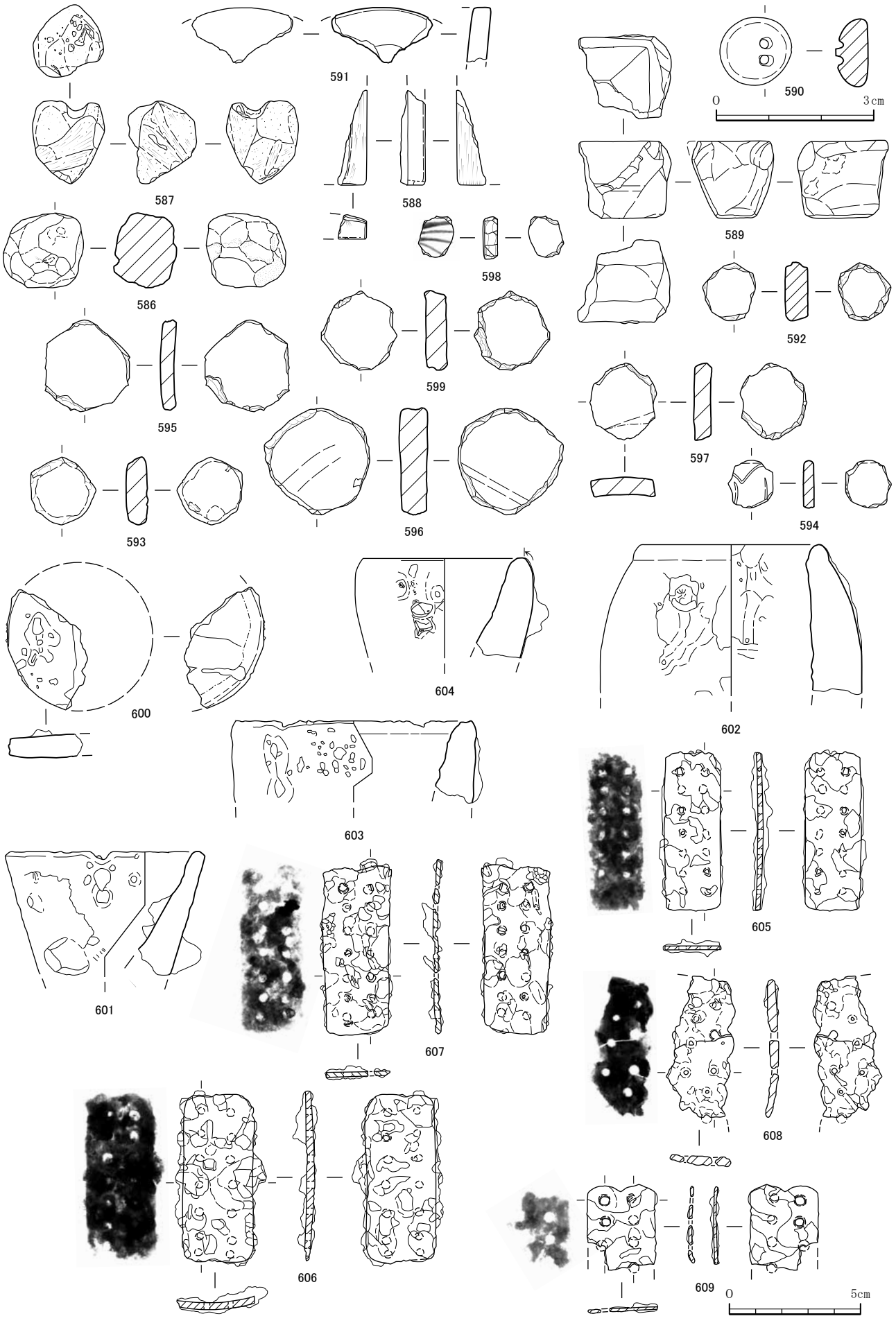
第53図　Ⅲ層出土遺物（6）　Ⅲ層石積み1内3層(531～549)



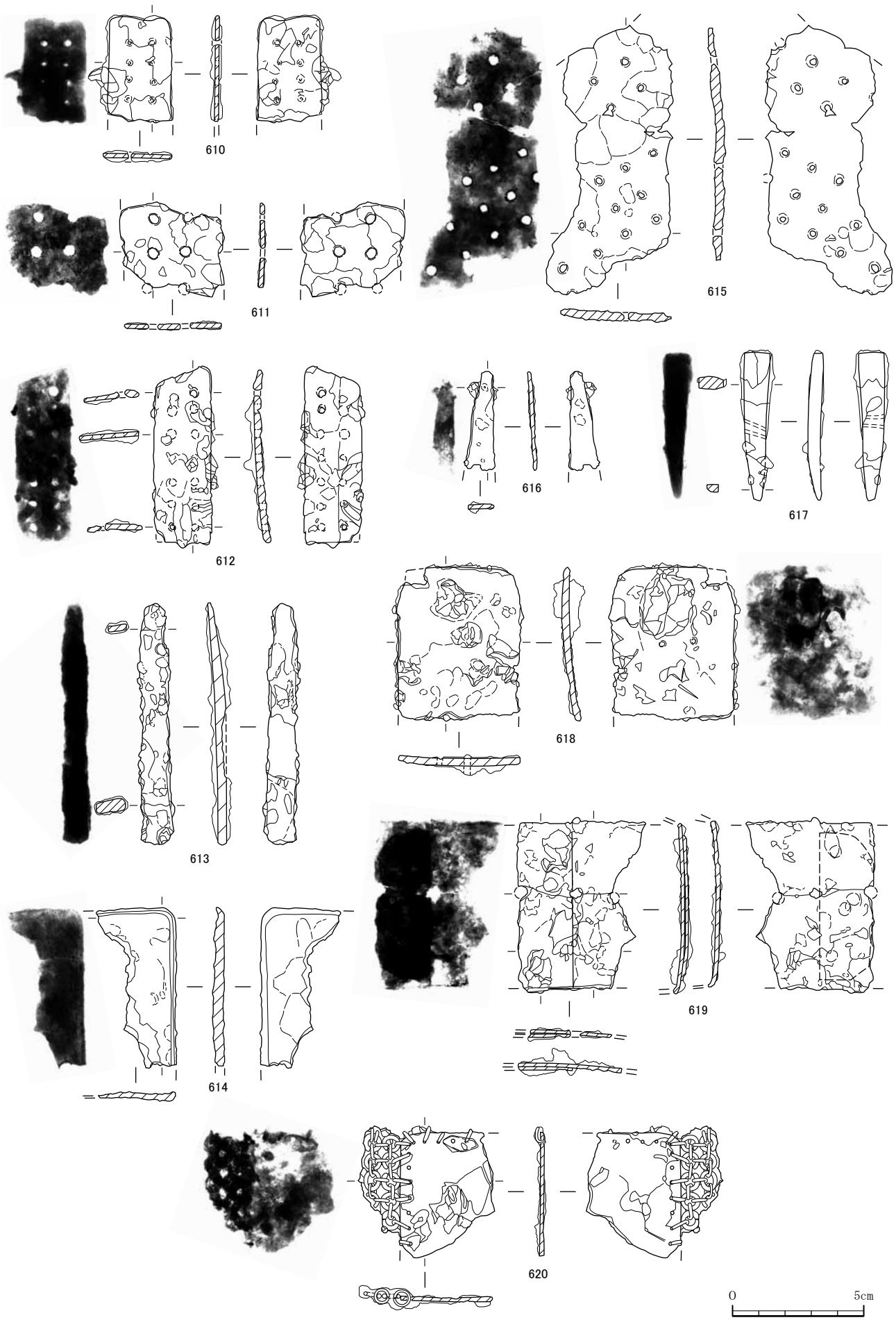
第54図　Ⅲ層出土遺物（7）　石積み1内3層(550～569)



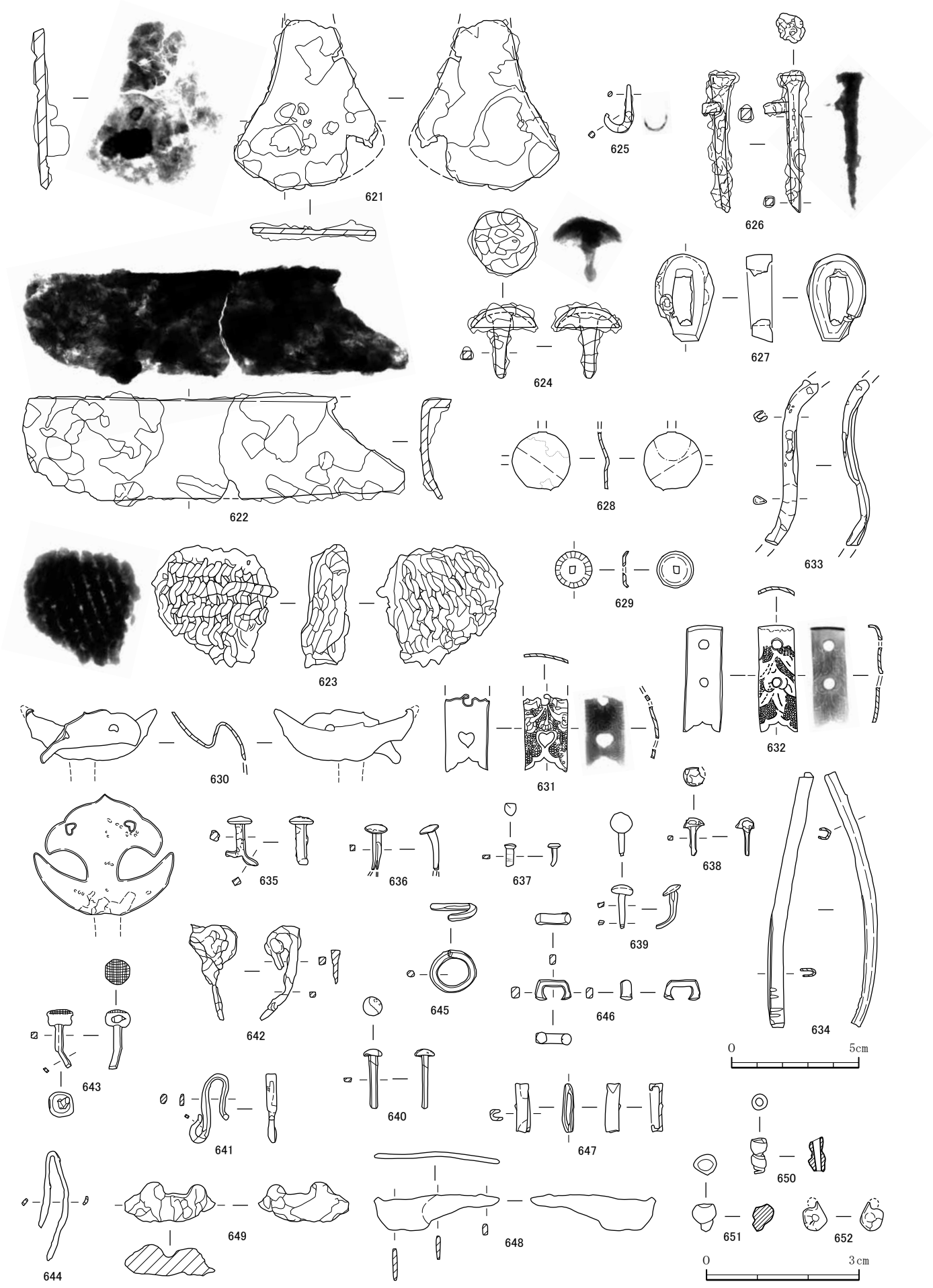
第55図　Ⅲ層出土遺物（8）　石積み1内3層（570～585）



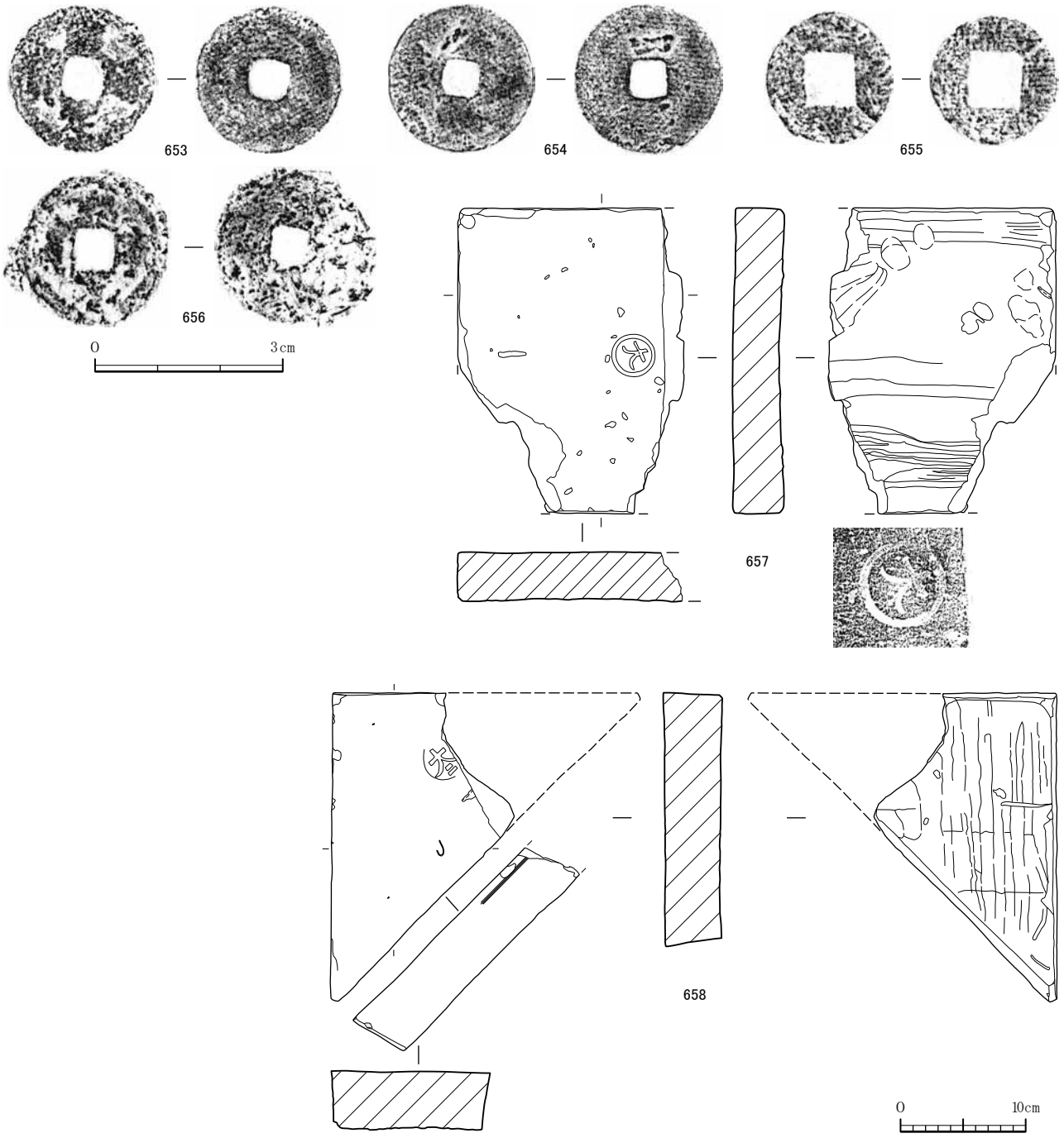
第56図　Ⅲ層出土遺物（9）　石積み1内3層(586～609)



第57図　Ⅲ層出土遺物（10）　石積み1内3層(610～620)



第58図　Ⅲ層出土遺物（11）　石積み1内3層(621～637・639～652)、Ⅲ下層(638)



第59図　Ⅲ層出土遺物（12） 石積み1内3層(653～656・658)、Ⅲ下層(657)

④Ⅲ下層出土遺物（638・657・661 ～ 747）

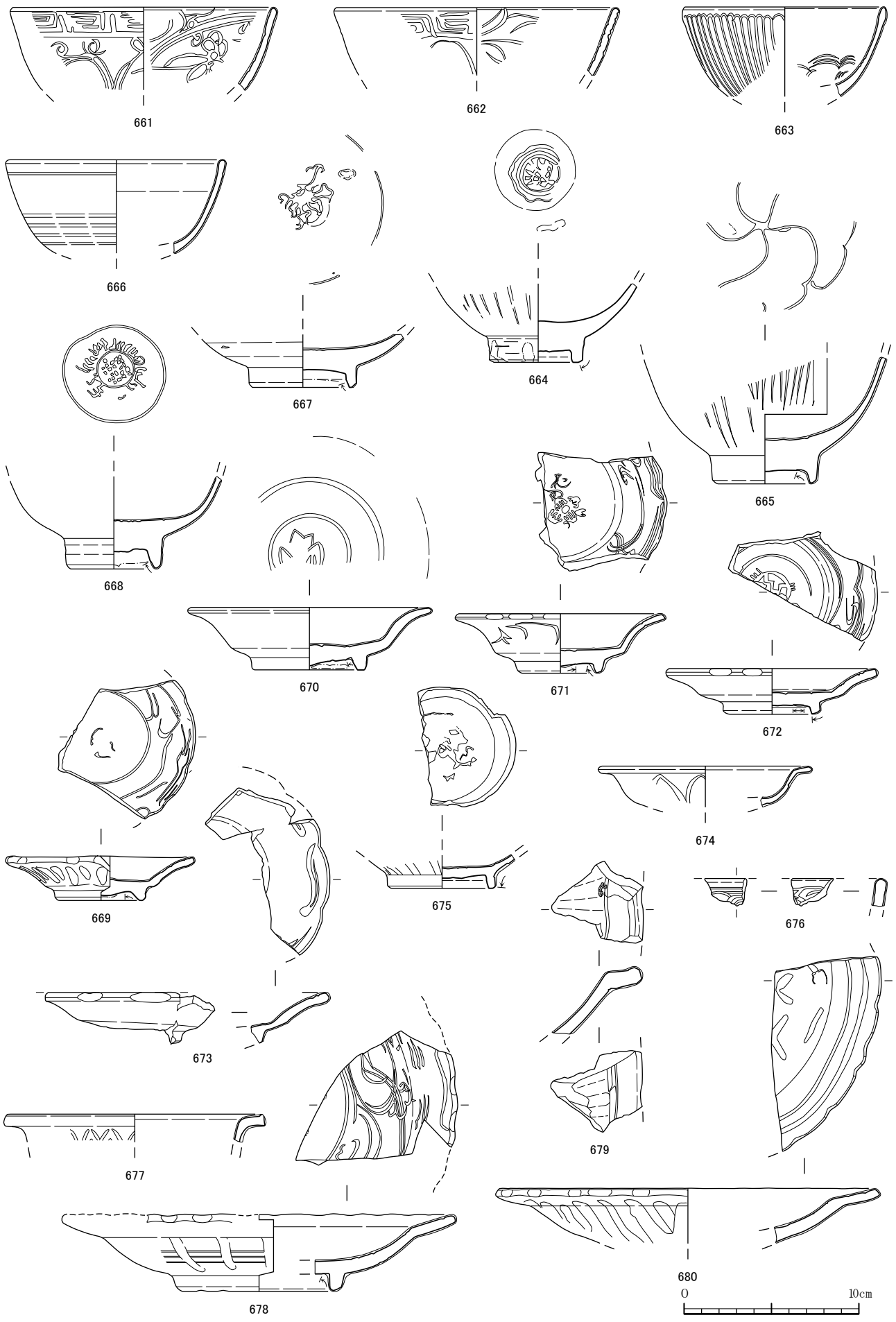
Ⅲ下層は、Ⅲ下層１とⅢ下層２と分けて取り上げているところもあるが、量が少ないこともありまとめた。その出土点数は、陶磁器類 1,258 点、その他 1,901 点で、石積み１内３層・貝だまりの次に多い。

陶磁器の種類には明確な違いは見つけがたく、瓦・塼も同様の稜が見られる。

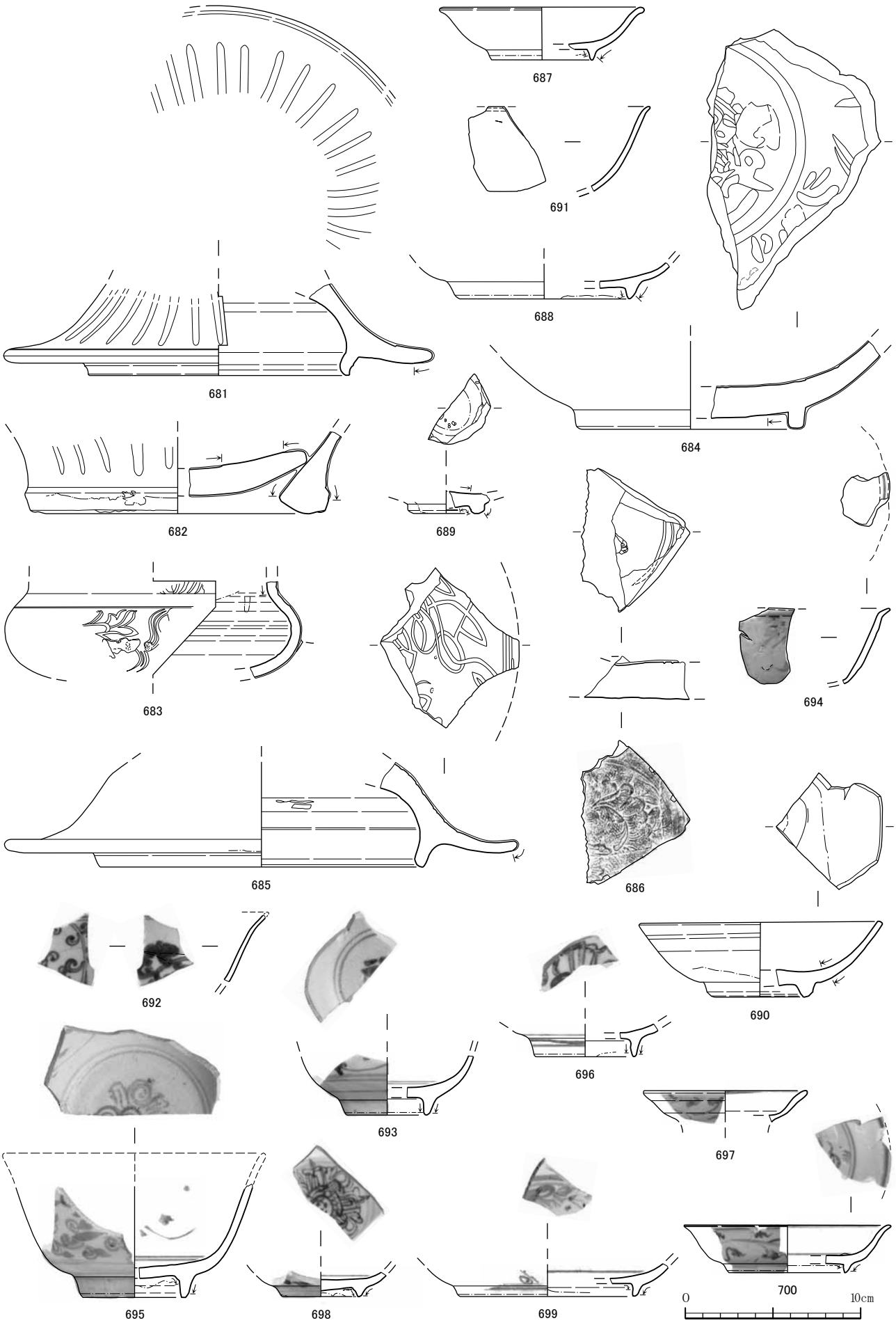
青磁（661 ～ 686）碗では、(667）がⅣ類、(661･662）がⅤ類、(663 ～ 666）がⅥ類である。Ⅲでは、(674･675）がⅣ類、(670・671）はⅤ類、(669・672・673）はⅥ類である。他に、(676・677）は鉢、(678 ～ 680・684）は盤、(681・685・686）は酒海壺の蓋、(682）は身、(683）は香炉である。

白磁（687 ～ 691）（687･688）はＥ群Ⅲ、(691）はＥ群碗、(689）はＤ群Ⅲ、(690）はＤ´群碗である。

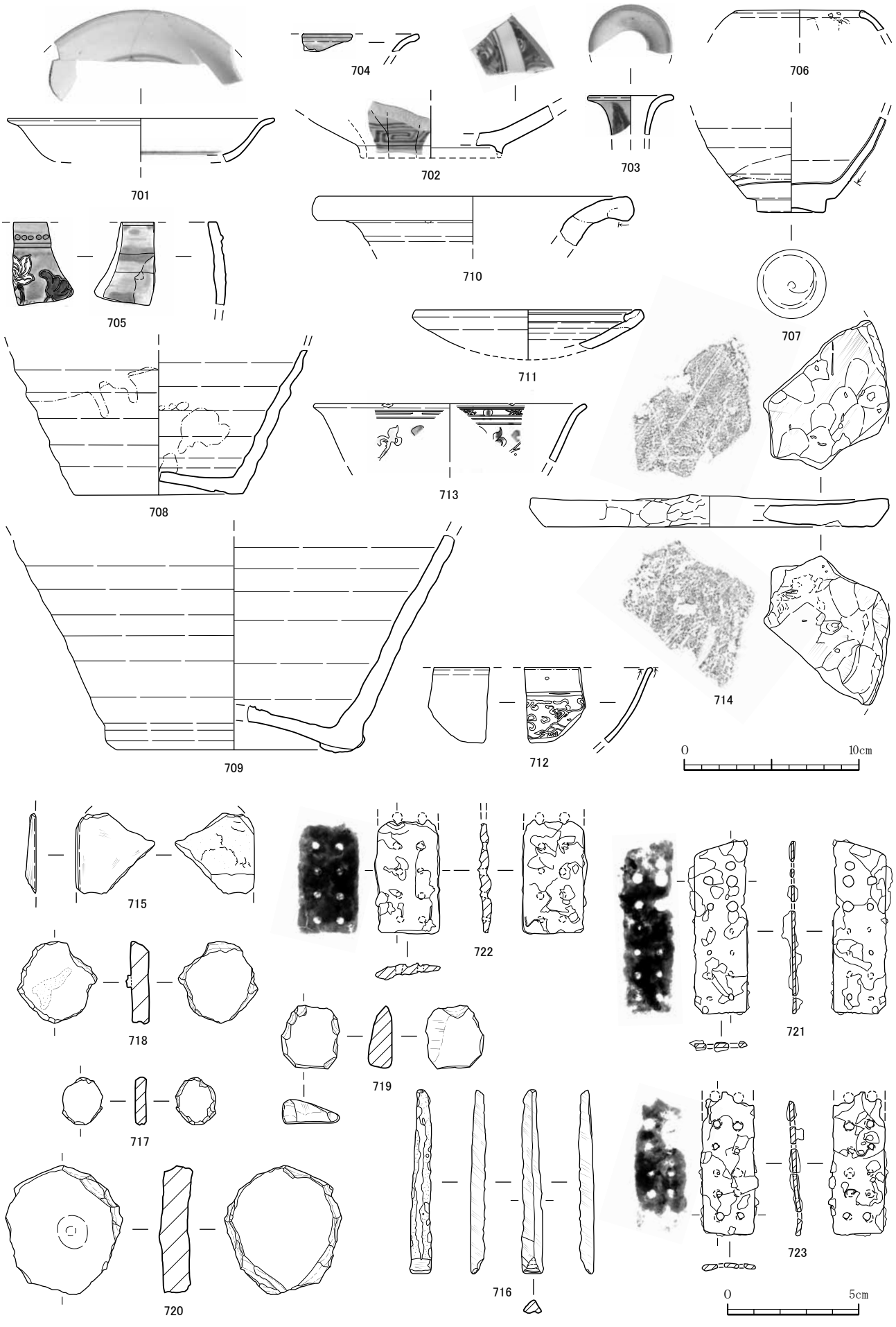
青花（692 ～ 703） 碗は、(691･692）が明Ⅰ１類、(694 ～ 696）が明Ⅱ類である。Ⅲは、(699）が明Ⅰ類、(697・698・700・701）は明Ⅱ１類である。他に、(702）は明代の鉢、(703）が元様式の瓶である。



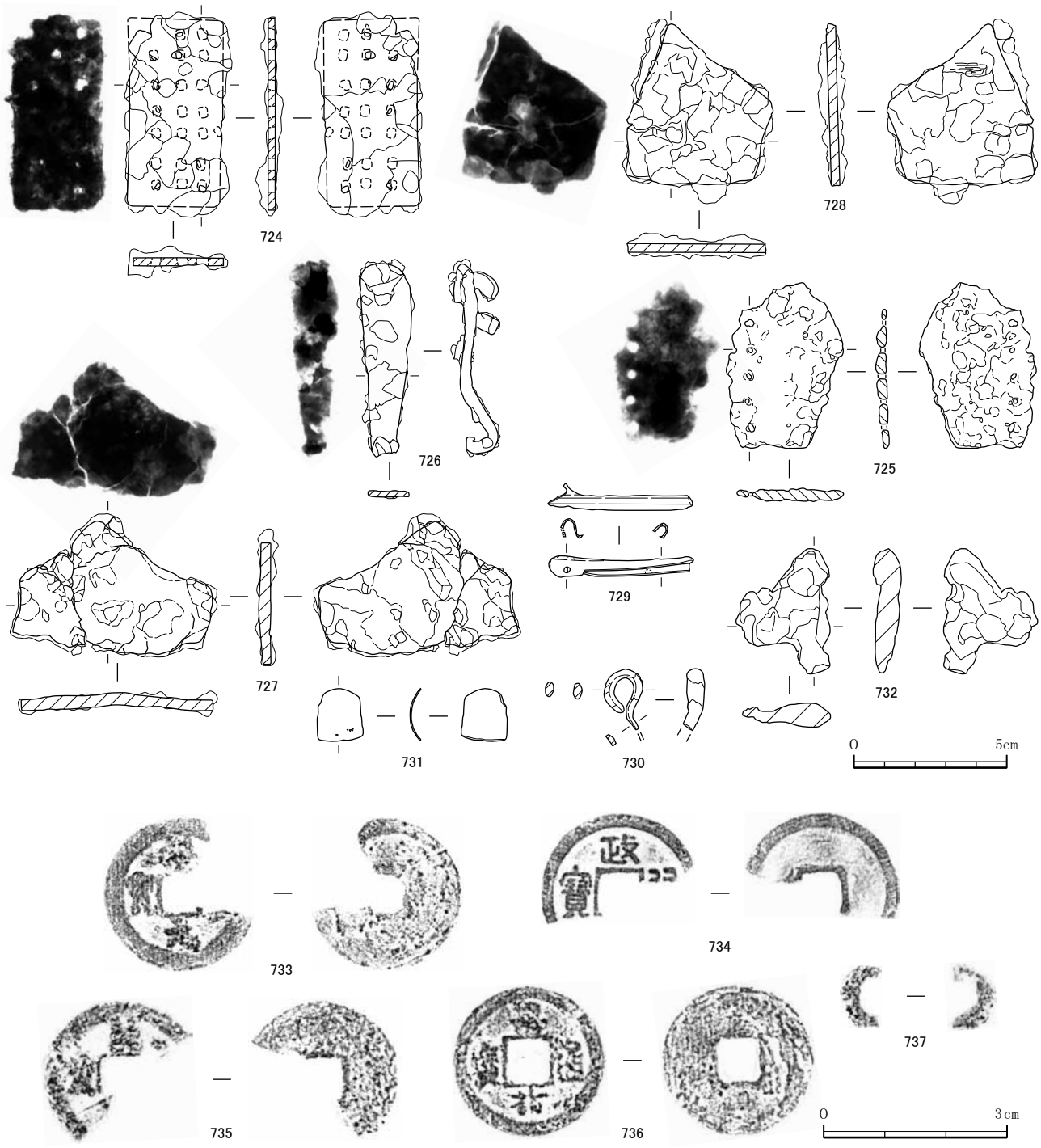
第60図　Ⅲ層出土遺物（13）　Ⅲ下層(661～680)



第61図　Ⅲ層出土遺物（14）　Ⅲ下層(681～700)



第62図　Ⅲ層出土遺物（15）　Ⅲ下層(701～723)



第63図　Ⅲ層出土遺物（16）　Ⅲ下層（724～737）

翡翠釉（704） Ⅲである。

法花（705） わずかに胴部が膨らむ直線的な鉢である。

褐釉（706・708・709）（706）は薄胎の無頸小壺、（709）は壺Ａ群、（708）は壺Ｂ群である。

天目（707）（707）は天目であるが高台際に同種別個体片が溶着している。

タイ産褐釉（710） 壺Ⅰ類である。

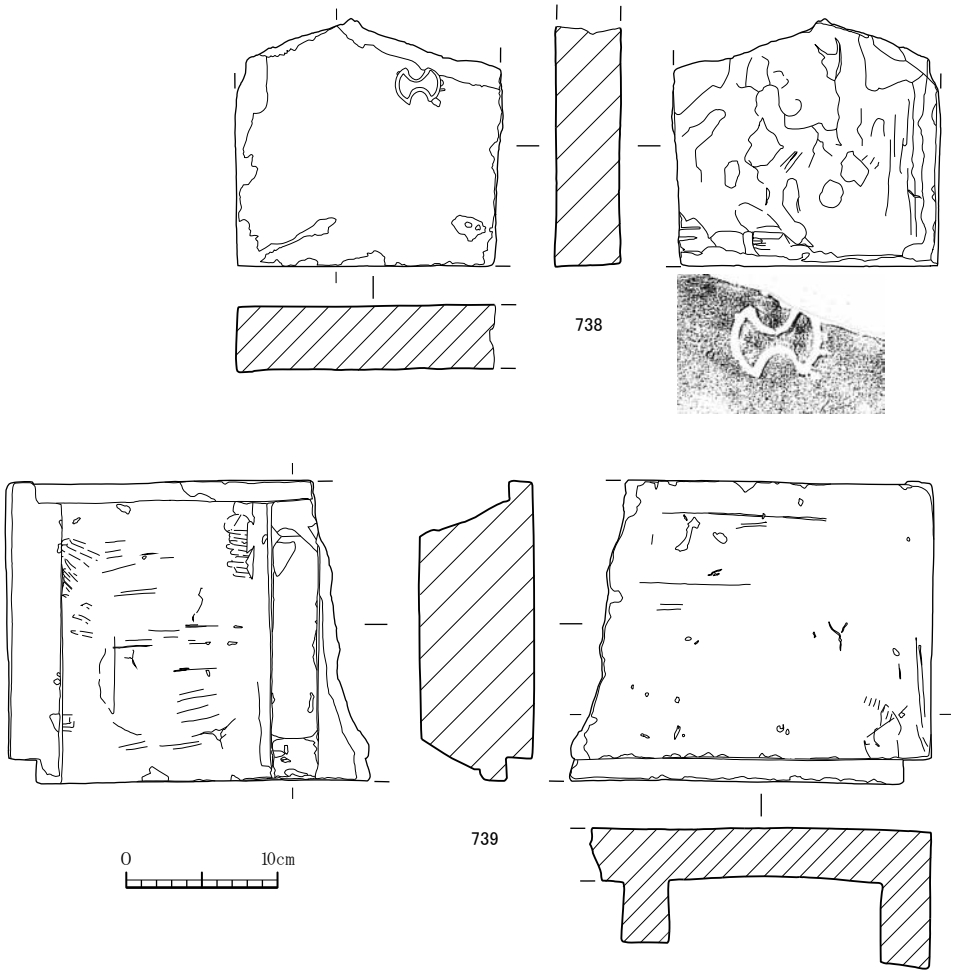
タイ産土器（711） ハンネラ土器の蓋である。

ベトナム産陶磁器（712・713）（712）は白磁碗、（713）は色絵碗である。

産地不明陶器（714） 円形蓋である。

石製品（715）（715）は粘板岩製の石盤である。

骨製品（716）（716）は棒状のヘラか。



第64図　Ⅲ層出土遺物（17）　Ⅲ下層（738・739）

円盤状製品（717 ～ 720） 39 点出土している。

鉄製品（721 ～ 728）（721 ～ 724）は甲冑小札、（725 ～ 728）は板状の不明製品である。

青銅製品（638･729 ～ 732）（638）は鋲、（729）は覆輪、（730）は不明の飾金具、（731）は不明製品、（732）は青銅滓である。

銭貨（733 ～ 737） 69 点出土しており、Ⅲ層では最も多い。（733・734・736）は北宋銭、（735）は銭種不明、（737）は輪銭である。

塼（657・738・739）（657・738）は灰色系の正方形、（739）は赤色系の噛み合わせ式である。

ガラス玉（740）17 点出土している。

骨製品（741 ～ 743）（741・742）は鹿角の不明製品、（743）はジュゴンの未製品である。

漆喰製品（744・745） 共に、僧帽状のものである。

石製品（746） 玉器残滓である。

人骨（747） 1 点出土。後述するように、17 ～ 25 歳程度と推定される下顎左第２大臼歯である。

これらの他、本土産近代陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産施釉・無釉陶器、瓦質土器、陶質土器、土器が出土している。近世・近代の遺物はⅢ層の中ではやや多いが 1 %には満たないので、混入と考えたい。

6．Ⅲ´層出土遺物（遺物番号 748 ～ 761　第 65・66 図、第 76・77 表、図版 68・69）

陶磁器類が 180 点、その他は 76 点で、合計 256 点である。石積み２外側に堆積する土層で、概ねグスク時代のもので 15 世紀中葉・後半の青磁Ⅴ類、明青花Ⅰ類が主体である（瀬戸 2010）。瓦・塼や、近世陶磁器も見られるが、３％程度である。これは、Ⅰ層がすぐ直上に堆積しており、調査区も狭小のための混入と考えている。

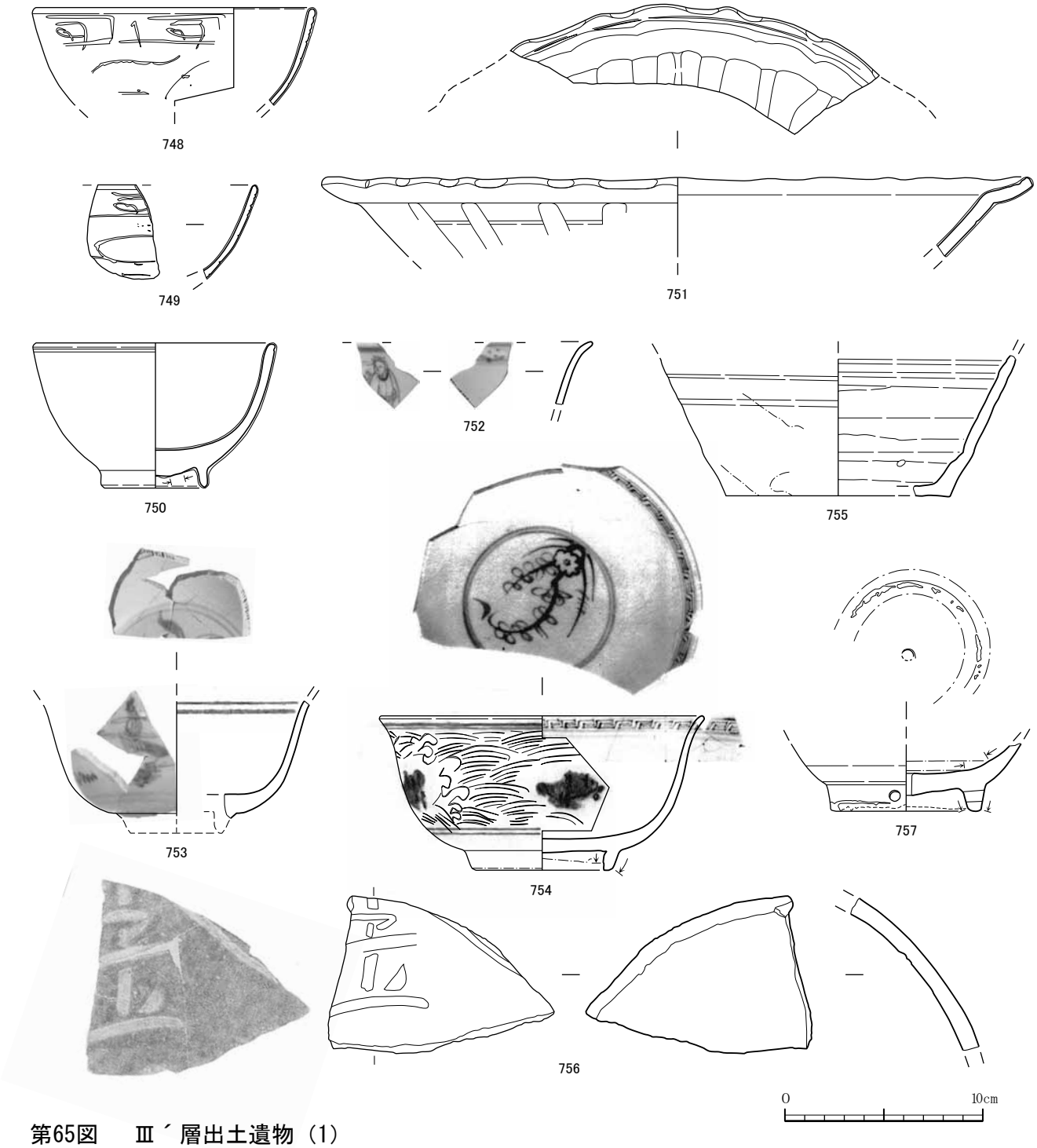
青磁（748 ～ 751）（748 ～ 750）は碗Ⅴ類、（751）は盤である。

青花（752 ～ 754）（753・754）は明Ⅰ類碗、（752）は明Ⅱ類碗である。

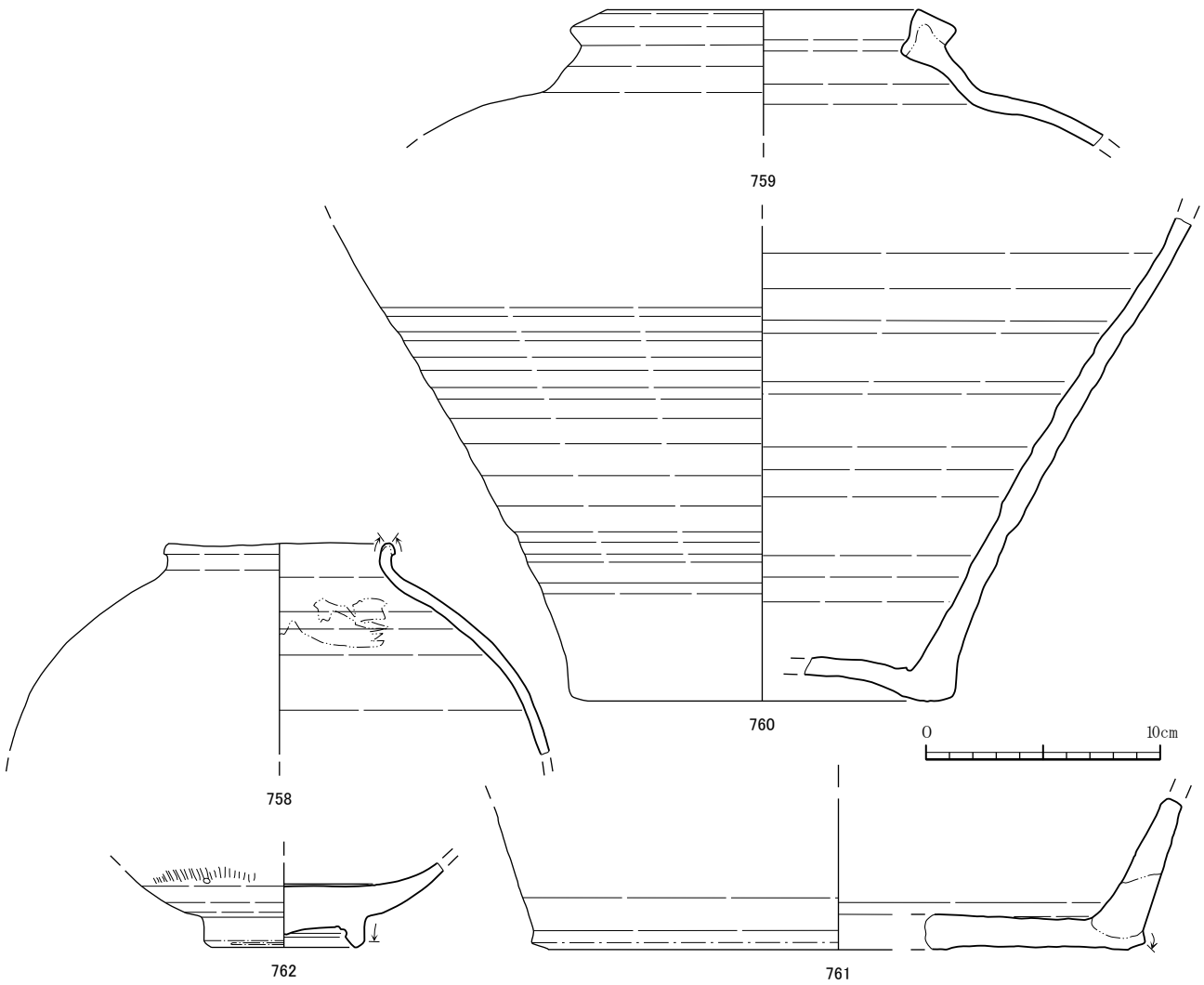
褐釉（755・756・758 ～ 760）（759・760）は壺Ａ群、（755・756・758）は壺Ｂ群である。

沖縄産施釉陶器（757）　Ｂ類碗である。

タイ産褐釉（761）　壺Ⅰ類である。



第65図　Ⅲ´層出土遺物（1）



第66図　Ⅲ´層（２）・Ⅳ層出土遺物　Ⅲ´層(758～761)、Ⅳ層(762)

７．Ⅳ層出土遺物（遺物番号 762　第 66 図、第 77 表、図版 69）

クチャ層に載る最下層の造成土からで、陶磁器類８点、その他 17 点の合計 25 点である。陶磁器類は、青磁と褐釉、他は大和系瓦、そしてガラス玉が 17 点も出土していることが注目される。ただ、非常に微小であるため、上層からの混入の可能性もあろう。青磁はⅣ・Ⅴ類、青花は出土しないことから、上限は 14 世紀、下限は 15 世紀前半と考えられる。

青磁（762）　Ⅳ類碗の底部で、比較的大ぶりのもので、14 世紀前半に遡る可能性がある（瀬戸 2015）。

第 47 表　遺物観察表（１）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
1	中国産青磁	碗	Ⅱ	－	－	－	直口口縁。胎土は灰白色。外面に鎬連弁文。	Ⅰ層	H23　首銭東　Ⅰ
2	中国産青磁	碗	Ⅴ－１	14.6	－	－	直口口縁。胎土は灰色。釉はやや厚く、オリーブ黒色。外面にヘラ描きの連弁文。	Ⅰ層	H25　首銭東　Y・Z-12
3	中国産青磁	碗	Ⅲ－１	－	－	－	直口口縁。胎土は灰白色。釉はオリーブ灰色で厚く、被熱のためか劣化している。外面に鎬連弁文。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-12　Ⅰ
4	中国産青磁	碗	Ⅳ	－	－	5.1	焼成悪く胎土は黄灰色または赤褐色、釉はオリーブ灰色。見込みに印花文。外底面は露胎で、一部に釉がかかる。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
5	中国産青磁	碗	Ⅳ	－	－	5.2	胎土は灰色。畳付または高台外面途中まで施釉。見込みに印花文と圏線。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-12　Ⅰ
6	中国産青磁	碗	Ⅳ	－	－	4.8	胎土は灰黒色。畳付、外底面露胎。高台の削りが浅い。見込みに印花文か。	Ⅰ層	H25　首銭東　Z-12 ﾄﾚ1
7	中国産青磁	碗	Ⅴ	－	－	6.4	胎土は灰白色。見込みに圏線。外底面は蛇の目釉剥ぎ。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
8	中国産青磁	碗	Ⅴ－２	18.6	－	－	直口口縁。胎土は灰白色。釉はやや厚く、ガラス質で細かい貫入あり。外面にヘラ描きの雷文と連弁文、内面にヘラ描きの草花文。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-10・11　Ⅰ+B-11・12　Ⅰ
9	中国産青磁	碗	Ⅴ－２	14.2	－	－	直口口縁。胎土は灰白色。釉は明緑灰色で細かい貫入あり。外面口縁部下に雷文、内面胴部にヘラ描きの草花文。	Ⅰ層	H25　首銭東　Z-12 ﾄﾚ1
10	中国産青磁	碗	Ⅴ－１	－	－	－	胎土は灰白色。釉は厚く、オリーブ灰色。外面胴部に幅の広い蓮弁文、内面にヘラ描きの蓮弁文。	Ⅰ層	H25　首銭東　Z-12 ﾄﾚ1
11	中国産青磁	碗	Ⅴ－１	－	－	7.2	胎土は灰白色。外面にヘラ描きの連弁文、見込みに印花文と圏線。外底面は蛇の目釉剥ぎ。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
12	中国産青磁	碗	Ⅴ－０	－	－	－	外反口縁。胎土は灰白色。内面口縁下に接ぎ跡か。	Ⅰ層	H25　首銭東　Z-12 ﾄﾚ1
13	中国産青磁	碗	Ⅴ－３	－	－	－	直口口縁。胎土は灰色。外面口縁部下に唐草文、胴部に草花文。内面口縁部下にに四方襷文、胴部に唐草文。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
14	中国産青磁	碗	Ⅴ－３	15.8	－	－	外反口縁。胎土は灰白色。釉は厚く、明緑灰色。外面口縁部下に唐草文、胴部にヘラ書きの花弁文か。内面口縁部下に雷文、胴部にヘラ描きの草花文。	Ⅰ層	H25　首銭東　Z-12 ﾄﾚ1
15	中国産青磁	碗	Ⅴ－１	13.7	－	－	直口口縁。胎土は灰白色。外面に剣先連弁文、内面にヘラ描きの草花文。	Ⅰ層	H25　首銭東　Z-12 ﾄﾚ1
16	中国産青磁	碗	Ⅶ－２	12.2	－	－	直口口縁。胎土は灰白色。釉はガラス質で厚く明青灰色。外面に波状文とその下に圏線。外面腰部ロクロ目顕著。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
17	中国産青磁	碗	Ⅶ－１	5.2	－	－	端反口縁。焼成不良のため胎土は灰赤色で軟質、釉は灰オリーブ色で細かい貫入あり。外面に線刻連弁文。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-11　Ⅰ
18	中国産青磁	碗	幅広高台タイプ	15.4	－	－	外反口縁。焼成悪く色むらがあり、灰黒色または赤褐色。外面はロクロ目顕著。見込みは蛇の目釉剥ぎ。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
19	中国産青磁	小壺	－	－	－	3.2	胎土は灰白色。釉はやや厚く、釉調は発色が悪く黄緑色。高台の端部及び畳付けを釉剥ぎ。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-12・13　Ⅰ
20	中国産青磁	皿	Ⅵ腰折	12.5	3.9	5.2	腰折皿。外反口縁。胎土は灰白色。畳付外面を釉剥ぎ、外底面は蛇の目釉剥ぎ。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-15　Ⅰ
21	中国産青磁	皿	Ⅴ	－	－	8.6	胎土は灰白色。釉は明緑色で厚い。見込みに印花文。外底面は蛇の目釉剥ぎで、露胎部分は明褐色。	Ⅰ層	H23　首銭東
22	中国産青磁	皿	Ⅲ	－	－	6.4	胎土は灰色。畳付けを釉剥ぎ。明緑色が厚く施釉。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
23	中国産青磁	皿	Ⅴ口折	12.4	3.7	6.3	口折皿。外面にヘラ描きの連弁文、口唇部に雷文、内面胴部に草花文、見込みに双魚文。外底面は蛇の目釉剥ぎ。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
24	中国産青磁	皿	Ⅴ口折	－	－	5.4	胎土は灰白色。釉はガラス質で貫入あり。外面にヘラ描きの蓮弁文。外底面は蛇の目釉剥ぎ。おそらく口折皿。	Ⅰ層	H23　首銭東
25	中国産青磁	皿	Ⅴ腰折	－	－	－	八角皿。内面口縁部下に雷文と胴部にヘラ描きの草花文。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-12・13　Ⅰ

第 48 表　遺物観察表（２）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
26	中国産青磁	盤	－	－	－	－	胎土は灰白色で軟質。釉は失透明でオリーブ灰色、細かい貫入あり。型押し成形で菊花状となる。	Ⅰ層	H23　首銭東
27	中国産青磁	盤	玉縁口縁	－	－	－	玉縁口縁。胎土は灰白色。釉はガラス質で貫入あり。外面胴部に圏線、内面胴部に草花文。	Ⅰ層	H25　首銭東　Z-12 ﾄﾚ1
28	中国産青磁	盤	碁笥底	－	－	11.0	胎土は灰白色。内面胴部に幅の狭い連弁状の櫛描文。外底面は蛇の目釉剥ぎ。高台を持つ。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-12・13　Ⅰ
29	中国産青磁	鉢	－	－	－	－	胎土は白色。釉は厚く、明オリーブ灰色。外面に圏線と線刻連弁文。	Ⅰ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1 南
30	中国産青磁	瓶	－	－	－	－	胎土は灰白色。釉は明オリーブ灰色でガラス質。外面頸部に剣先の連弁文、その上に圏線と唐草文。	Ⅰ層	H25　首銭東　Z-12 ﾄﾚ1
31	中国産青磁	袋物	－	－	－	－	胎土は灰白色。外面にヘラ描きの唐草文と三条の沈線、ラマ式連弁文か。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
32	中国産青磁	香炉	－	9.6	－	－	胎土は灰白色。外面に圏線が施される。釉は厚く碗Ⅴ類に類似。	Ⅰ層	H25　首銭東　Z-12 ﾄﾚ1
33	中国産青磁	擂鉢	－	14.2	－	－	胎土は灰色。釉はやや厚く、内面口縁部下より露胎。内面口縁部下より沈線が施される。碗Ⅴ類に類似	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
34	中国産青磁	酒海壷	－	－	－	－	胎土は灰白色。釉は厚く、明オリーブ色。畳付けを釉剥ぎ。	Ⅰ層	H25　首銭東　Y・Z-12
35	中国産白磁	碗	福建 Ⅶ－Ｂ	－	－	－	胎土は灰色で硬質。釉は青灰色。内面胴部に櫛描きによる草花文。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
36	中国産白磁	碗	福建Ｃ３	－	－	－	外反口縁。口縁部端やや太め。胎土は灰色で硬質。釉は灰白色で光沢あり。	Ⅰ層	H23　首銭東
37	中国産白磁	碗	福建Ｃ２	－	－	5.4	胎土は黄白色で軟質。釉は黄灰色で貫入あり。外底面露胎。見込みにくぼみ。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
38	中国産白磁	碗	福建D’	13.5	－	－	直口口縁。胎土は灰色で硬質。釉は灰色でガラス質、一部に貫入あり、外面胴下半より露胎。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-12　Ⅰ+B-11　Ⅰ
39	中国産白磁	碗	福建D’	14.1	4.7	5.5	直口口縁。胎土は黄白色で軟質。釉は灰白色で見込み及び外面高台より露胎。見込みに「堂」字文。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ+A-11　Ⅰ
40	中国産白磁	碗	福建D’	－	－	4.3	胎土は黄白色で軟質、、釉は明オリーブ灰色、外面高台より露胎、見込みを蛇の目釉剥ぎ。見込みに「卍」文。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
41	中国産白磁	碗	福建D’	－	－	3.8	胎土は黄白色で軟質。釉はオリーブ灰色で、外底面露胎、畳付を釉剥ぎ。見込み圏線内に印花文。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-10・11　Ⅰ
42	中国産白磁	碗	福建 （その他）	－	－	7.6	胎土は黄白色。釉は灰色、内外胴部下半より露胎。畳付け端部を面取り。見込みはやや盛り上がる。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
43	中国産白磁	碗	福建 （その他）	－	－	8.0	胎土は灰白色。被熱のためか釉が劣化しアバタが目立つ。釉は灰色で見込み及び高台部分が露胎。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-10　Ⅰ
44	中国産白磁	皿	景徳鎮	12.6	4.0	4.8	腰折皿。胎土は白色。釉は青白色、高台端部を釉剥ぎし、外底面露胎。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
45	中国産白磁	皿	福建Ａ	－	－	－	口禿。釉は青灰色。口唇部端に稜あり。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
46	中国産白磁	皿	福建Ｄ	7.7	2.1	3.7	内湾皿。胎土は軟質で黄白色。釉は乳白色で全面施釉、細かい貫入あり。抉り高台。見込みに重ね焼痕３ヶ所。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-11　Ⅰ
47	中国産白磁	皿	福建Ｄ	9.4	2.6	3.5	内湾皿。胎土は黄白色で軟質。釉は乳白色で全面施釉。抉り高台。見込みに重ね焼きの痕あり。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
48	中国産白磁	皿	徳化	－	－	13.5	胎土は白色で緻密。釉は乳白色でガラス質。畳付の端部は削られ、釉剥ぎされる。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-12・13　Ⅰ
49	中国産白磁	皿	景徳鎮	10.7	2.4	5.8	外反口縁で高台は碁笥底。胎土は灰白色。釉は灰色、畳付けを釉剥ぎ。畳付けに砂が付着。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-10・11　Ⅰ
50	中国産白磁	小碗	徳化	－	－	2.6	胎土は灰色で緻密。灰白色の失透明釉。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-12　Ⅰ

第 49 表　遺物観察表（３）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
51	中国産白磁	袋物	福建（その他）	－	－	6.5	胎土は灰色。釉は灰色、内面は露胎。畳み付けを釉剥ぎ。	Ⅰ層	H23　首銭東
52	中国産青花	壷	元様式	－	－	－	胎土白色硬質、釉・呉須良好、器面被熱のためかざらつく。外面は蔓唐草文と窓文。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
53	中国産青花	壷	元様式	－	－	－	胎土白色硬質、釉・呉須良好、器面被熱のためかざらつく。外面は葉脈が複線の蕉葉文。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-15　Ⅰ
54	中国産青花	盤	元様式	－	－	－	胎土白色硬質、釉・呉須良好、外底無釉、器面被熱のためかざらつく。見込みは牡丹唐草文	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
55	中国産青花	碗	明Ⅱ－２	－	－	5.5	胎土灰色、釉暗灰色、呉須濃青色。見込みは十字文か。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
56	中国産青花	碗	明Ⅰ－１	－	－	5.7	胎土灰白色、釉は白色、呉須は圏線が薄く、文様が濃い。外面は唐草文。見込みは圏線２条、おそらく福字文。	Ⅰ層	H25　首銭東　A-12　Ⅰ層
57	中国産青花	碗	明Ⅰ－１	－	－	推4.6	胎土灰白色、釉・呉須良好、やや貫入あり。見込みは圏線２条、梅樹文か。	Ⅰ層	H25　首銭東　Z-12
58	中国産青花	碗	明Ⅱ－１	13.0	－	－	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面上半不明横帯文、下半蕉葉文。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-10　Ⅰ
59	中国産青花	碗	明Ⅱ－２	14.3	－	－	胎土灰色、釉暗灰色、呉須濃青色。外面は雲状文横帯、下半は鎖状の草花文。器壁は2㎜と薄い。	Ⅰ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南
60	中国産青花	碗	明Ⅰ－１	－	－	5.5	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面は雷文横帯、下部簡略化した唐草文。見込みは圏線２条、不明文様。	Ⅰ層	H23　首銭東
61	中国産青花	碗	明Ⅱ－３	推14.1	推6.4	5.6	胎土白色、釉・呉須良好でガラス質。外面見込みまばらな草花文か。底部凹むが口縁は外反すると思われる。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
62	中国産青花	碗	明Ⅲ	14.2	－	－	胎土灰白色、釉白色、呉須鈍い。外面龍文か。おそらく饅頭心形。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10　Ⅰ
63	中国産青花	碗	明（漳州）	－	－	4.7	胎土黄灰色やや軟質、失透釉、貫入多い、呉須良好。饅頭心形。見込みは花芯が崩れた円文。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-11　Ⅰ
64	中国産青花	小碗	明Ⅱ・Ⅲ	8.3	－	－	胎土白色、釉・呉須良好、器壁2㎜。外面小ぶりの文様、ペンシルドローイング	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
65	中国産青花	小碗	明（漳州）	5.7	－	－	胎土灰白色、失透釉で厚め、呉須良好。外面ダミ塗りの花文。口縁端部わずかに端反り、丸い。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
66	中国産青花	小碗	明Ⅱ・Ⅲ	－	－	2.3	胎土白色、釉・呉須良好。見込みは寿字文か。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-10　Ⅰ
67	中国産青花	皿	明Ⅱ－１	12.7	－	－	胎土白色、釉・呉須良好。外面渦巻き状文、内面列点文を背景に花弁状の白抜き。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ+B-10　Ⅰ
68	中国産青花	皿	明Ⅱ－１	9.6	2.1	4.8	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面牡丹唐草文、見込み玉取獅子文は小ぶり。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10・11　Ⅰ+B-11　Ⅰ
69	中国産青花	皿	明Ⅱ－１	9.7	2.5	4.8	胎土灰色軟質、釉は青灰色で外底無釉、呉須にじむ。外面牡丹唐草文、見込み十字の花芯文だが、簡略が激しい。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-10　Ⅰ
70	中国産青花	皿	明Ⅱ－１	9.2	2.1	5.0	胎土灰白色、釉は失透、呉須鈍い。外面牡丹唐草文、見込み十字の花芯文だが、簡略が激しい。	Ⅰ層	H23　首銭東
71	中国産青花	皿	明Ⅱ－１	14.6	－	－	胎土灰色やや軟質、釉灰色、呉須にじむ。外面無文、内面全体に花弁文か、ダミ塗りあり。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10　Ⅰ
72	中国産青花	皿	明Ⅱ－１	－	－	6.8	胎土白色、釉・呉須良好。外面牡丹唐草文、見込み草魚文か。底部からすると口径12㎝クラス。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
73	中国産青花	皿	明Ⅱ－１	12.4	2.7	6.4	胎土灰色やや軟質、釉は青白色、呉須にじむ。見込み耐火土溶着。外面牡丹唐草文、見込み玉取獅子文、表現やや粗い。	Ⅰ層	H23　首銭東
74	中国産青花	皿	明Ⅱ－１	9.3	2.4	4.4	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面牡丹唐草文、見込み十字の花芯文は小ぶり。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
75	中国産青花	皿	明Ⅱ－２	10.0	3.3	2.4	胎土白色、釉・呉須良好。外面、見込み共に梵字文。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ

第 50 表　遺物観察表（４）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
76	中国産青花	皿	明Ⅲ	－	－	－	胎土白色、釉・呉須良好、器壁2㎜。見込み鳳凰文か。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
77	中国産青花	皿	明Ⅲ	－	－	－	胎土白色、釉・呉須良好。外面小ぶりの草花文、ペンシルドローイング。内湾皿。	Ⅰ層	H23　首銭東
78	中国産青花	皿	明Ⅲ	－	－	8.8	胎土白色、釉・呉須良好。内外面文様不明。見込み花弁文。内湾皿。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-12　Ⅰ
79	中国産青花	皿	明Ⅰ	－	－	13.7	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面下龍もしくは麒麟か。見込み不明。	Ⅰ層	H23　首銭東
80	中国産青花	皿	清（福建・広東）	19.0	－	－	胎土白色、失透釉で厚め、呉須良好。外面文様不明、内面ダミ塗りの草花文。大型の内湾皿。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
81	中国産青花	瓶	明（景徳鎮）	－	－	－	胎土灰白色、釉・呉須良好、貫入多い。外面唐草文。	Ⅰ層	H25　首銭東　Z-12
82	中国産青花	瓶	元様式	－	－	－	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面呉須及び毛彫りによる草花文あり。	Ⅰ層	H25　首銭東　Z-12 ﾄﾚ1
83	中国産色絵	碗	徳化？	18.8	－	－	釉は白色。外面に龍、内面に雷文。絵付けは青、赤、他は色あせて不明だが３～４色と思われる。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
84	中国産色絵	皿	景徳鎮	－	－	7.6	胎土は灰白色、透失性の白色釉。含量は緑、赤を確認。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-12　Ⅰ
85	中国産瑠璃釉	碗	徳化	－	－	4.8	見込みの凹み、高台の形状より型造りと思われる。釉は外面淡い群青色、内面灰白色。畳付に微細な砂付着。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
86	中国産瑠璃釉	小碗	徳化？	－	－	3.2	釉は外面鮮やかな群青色、内面灰白色。底部が１㎜と非常に薄いが景徳鎮ではない印象。外底に四角状の不明字款。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
87	中国産鉄絵	壺	磁州	－	－	－	胎土は灰黄色。外面は黒釉の掻き落とし。内面は黒釉。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
88	中国産法花	壺	－	－	－	－	胎土は白色で硬質精良。外面は貼り付け文を施し、青、緑釉。内面は緑釉。釉は全体的に禿げている。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
89	中国産三彩	水注	－	－	－	－	胎土は浅黄色で軟質精良。底部。釉は黄・緑を確認、透明感あり。	Ⅰ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1 南
90	中国産三彩	水注	－	－	－	－	胎土は浅黄色で軟質精良。鳥（鴨か？）形の頭部。釉は黄・緑・紫を確認、透明感あり。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-12・13　Ⅰ
91	中国産褐釉陶器	碗	－	－	－	4.8	内外面褐釉、外底無釉。胎土は精良で白色。高台細い角形。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10　Ⅰ+A・B-10～12　Ⅰ
92	中国産褐釉陶器	壷	Ｂ群（壺３類）	－	－	－	白釉、胎土浅黄色、白・褐色粒中量。内面頚部以下褐釉。玉縁口縁。	Ⅰ層	H25　首銭東　Z-12 ﾄﾚ1
93	中国産褐釉陶器	壷	Ｂ群	－	－	－	淡緑釉、内面は無釉で橙色。花文？の型押しあり。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
94	中国産褐釉陶器	壷	Ｂ群	－	－	－	外面黄橙、内・断面灰色。内面は無釉、外面も光沢無し。胴部に縄目状突帯。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-11　Ⅰ
95	中国産天目	碗	－	12.2	－	－	胎土暗灰色、白色微粒僅かに含む。褐～黒釉。	Ⅰ層	H23　首銭東
96	中国産天目	碗	－	－	－	3.8	胎土暗灰色、白色微粒僅かに含む。褐～黒釉。外底の抉り浅い。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-15　Ⅰ
97	中国産天目	碗	－	－	－	3.8	胎土浅黄橙色、気泡やや目立つ。褐釉。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10　Ⅰ
98	中国産不明陶器	不明	－	－	－	－	胎土は浅黄色、軟質。口縁は鍔形で、非常に浅い形。底部に径1.0㎝の穿孔がある。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
99	タイ産土器	蓋	－	－	－	－	胎土は浅黄橙色で緻密。黒色粒・褐色粒が混入。器面に回転調整痕が残る。	Ⅰ層	H25　首銭東　Z-12 ﾄﾚ1
100	タイ産土器	蓋	－	－	－	－	胎土は浅黄橙色で緻密。黒色粒・褐色粒・石英？が混入。外面に回転調整痕及びケズリ調整痕が残る。	Ⅰ層	H25　首銭東　Z-12 ﾄﾚ1

第 51 表　遺物観察表（５）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
101	タイ産褐釉	壺	Ⅰ類	23.0	－	－	胎土はにぶい赤褐色でやや緻密。白色粒・黒色粒・橙色粒が混入。輪積み成形で口唇部は内側折り返しか。褐色の釉薬を内面～口唇部まで施釉するが剥落が著しい。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
102	タイ産褐釉	中型壺	－	－	－	－	胎土は灰白色で堅緻。黒色粒がわずかに混入。輪積み成形。内面胴部～外面に緑黒色の釉薬を施釉。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10　Ⅰ
103	タイ産褐釉	壺	Ⅰ類	17.0	－	－	胎土は灰赤色で堅緻。白色粒・黒色粒が混入。輪積み成形で口唇部は外側折り返しか。外面頸部に貼付の圏線１条。黒褐色の釉薬を内面口縁部～外面に施釉。	Ⅰ層	H25　首銭東　Z-12ﾄﾚ1
104	タイ産褐釉	壺	Ⅱ類	－	－	24.6	胎土はにぶい橙色で堅緻。白色粒・黒色粒・褐色粒が混入。輪積み成形。内面にオリーブ褐色の釉薬が一部付着。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10　Ⅰ
105	ベトナム産青花	碗	Ⅱ類	－	－	－	胎土は浅黄色でやや緻密。両面に白化粧を施し、その上から透明釉を施釉。外面に圏線＋草花文、内面に唐草文。両面に細かい貫入。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
106	ベトナム産青花	瓶	－	－	－	－	胎土は灰白色で緻密。外面に白化粧を施し、その上から外面に透明釉を施釉。外面に唐草文？＋透かし彫り窓絵文の貼付。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
107	韓半島産青磁	碗	－	－	－	－	内外面に黒と白色の象嵌による施文。器面は滑らか。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10・11　Ⅰ
108	韓半島産青磁	碗	－	－	－	5.6	白色の象嵌により内面連点状、外面円文あり。全面施釉だが、畳付と外底は露胎か。器面被熱か風化のためかざらつく。	Ⅰ層	H23　首銭東
109	本土産染付	碗	肥前（Ⅲ期）	－	－	5.4	釉は白色。文様は外面、見込み共に不明。畳付にわずかに砂付着。外面にロクロ目あり。高台やや細く長い。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
110	本土産染付	小碗	肥前（Ⅲ期）	9.0	5.6	4.5	釉は青白色、呉須は濃青色、比較的精良。外面は小ぶりの花文、見込みは花弁の簡略したものか。口縁端部わずかに反る。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-10　Ⅰ
111	本土産染付	碗	肥前（Ⅲ期）	－	－	5.2	胎土は焼成不良のためか褐色。釉は灰色で鈍い。呉須も鈍く青灰色。見込みは簡略化された荒磯文か。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ+A-10　Ⅰ
112	本土産施釉陶器	碗	肥前（Ⅲ期）	11.1	－	－	胎土は浅黄色、精良。銅緑釉。口縁端部丸める。小ぶりの碗か。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
113	本土産施釉陶器	碗	肥前（Ⅲ期）	－	－	5.4	胎土は浅黄色、気泡目立つ。透明釉で細かな貫入目立つ。畳付釉剥ぎ。	Ⅰ層	H23　首銭東
114	本土産施釉陶器	碗	肥前（Ⅲ期）	－	－	4.4	胎土は灰白色、精良。釉は外面が高台より上が銅緑釉、見込みは剥げたのか灰色。外底無釉、ケズリ痕が目立つ。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
115	本土産施釉陶器	小碗	京系	8.6	4.0	3.2	胎土は灰色、精良。釉はやや透明感がある灰色だが、一部青灰色を呈す。高台は小さく削り出し、外底無釉。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
116	本土産施釉陶器	皿	肥前（Ⅲ期）	－	－	4.2	胎土は灰白色、精良。胴部上半に緑釉、見込みは蛇の目釉剥ぎ。削り出し高台で、外底中央は突出。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-11　Ⅰ
117	本土産施釉陶器	蓋	京系	13.6	－	庇径15.9	胎土は灰色、精良。釉はやや透明感がある灰色だが、一部青灰色を呈す。庇部内側のみ無釉。。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
118	本土産無釉陶器	擂鉢	備前（中世５期）	28.0	－	－	断面灰赤色、内外面赤褐色。口縁端部に黄灰色の自然釉かかる。胎土に白色微粒含む。擂目５本/１㎝。	Ⅰ層	H23　首銭東
119	本土産無釉陶器	瓶	薩摩	5.6	－	－	胎土に白色微粒僅かに含む。外面に灰・褐色の自然釉。断面灰赤色、内面鈍赤褐色、外面暗褐色。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
120	本土産施釉陶器	皿	肥前（Ⅲ期か）	－	－	－	鍔縁の大形皿。胎土は灰黄褐色、外面は無釉か。鍔部には白色で波状の細線（刷毛目文か）、胴部は銅緑釉と縦方向にかき分ける。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
121	カムィヤキ	壷	A群	－	－	－	器厚0.6㎝。外面格子タタキ目、内面タタキ目ナデ消し。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
122	沖縄産施釉陶器	碗	B類	13.5	5.7	5.4	白釉、見込み蛇の目釉剥ぎ、アルミナ塗布、重ね焼き痕。外面、呉須青色で円文。胎土灰色。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-12・13　Ⅰ+C-11　Ⅰ
123	沖縄産施釉陶器	小碗	B類	8.6	4.2	3.7	白釉、青色の斑点目立つ。胎土灰白色で精良。外面、呉須褐色で右から「…蟇校友…」と描く。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
124	沖縄産施釉陶器	蓋	A類	4.6	2.9	つまみ径1.5	褐釉、内面無釉。内面に墨書あり。庇径6.6㎝。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
125	沖縄産施釉陶器	壷	A類	9.6	11.9	8.8	緑灰釉、口縁端部、胴部下半は無釉。器形のゆがみから平面は正円ではない可能性あり。胴部最大径13.2㎝。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ

第 52 表　遺物観察表（６）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
126	沖縄産無釉陶器	鉢	Ｂ類	11.7	7.3	8.4	短頸球胴形。内外面鈍赤褐色、外面一部赤色、上面灰色、断面赤褐色。口縁直下にの波状文（3本/8㎜）。胴部横ナデ、外底未調整。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10　Ⅰ
127	沖縄産無釉陶器	甕	Ｂ類	－	－	－	大形甕の肩部か。色調鈍赤褐色。外面やや光沢有。「十八」の刻銘。その下方に２条の凹線。	Ⅰ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1
128	沖縄産無釉陶器	急須	Ｂ類	11.0	－	－	胴部は扁平な球形。口縁内面より外面に鉄釉か。外断面鈍赤褐色、内面赤色。内面注口径1.8㎝、把手は筒状で径2.5㎝。	Ⅰ層	H23　首銭東+A・B-12・13　Ⅰ
129	沖縄産無釉陶器	瓶	Ｂ類	3.6	－	－	長胴形。肩部から２条、空けて１条の凹線。外面自然釉のためか緑灰色、内断面赤褐色。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
130	沖縄産無釉陶器	鉢	Ｂ類	－	－	6.6	上に直線的に開く形。内外面鈍赤褐色、断面・外底灰色。外底焼成前穿孔（復元径1.9㎝）。高台の抉りは推定４ヶ所。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
131	沖縄産無釉陶器	窯道具	Ａ類	－	1.4	－	円盤状で、ハマと思われる。5㎜以下の白色礫含み、内外面赤褐色、断面灰色。上面糸切痕、下面ナデ。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
132	沖縄産瓦質土器	擂鉢	－	24.9	－	－	胎土に２㎜以下の赤・黒色粒わずか含む。擂目９本/1.7㎝。内外面灰色、断面黄灰色。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
133	沖縄産瓦質土器	植木鉢	－	－	－	－	胎土に１㎜以下の黒色粒僅かに含む。内面黒色、外面灰色、断面両際が黄灰色、中央が灰色。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-11　Ⅰ
134	石造物	勾欄	－	14.3+	4.4	12.8	石材：細粒砂岩（ニービヌフニ）。加工痕：ノミ痕、研磨痕。正面両側縁に凹状線。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
135	石製品	石球	－	7.6	4.8	7.6	石材：細粒砂岩（ニービヌフニ）。加工痕：全周に敲打痕。使用痕：背面に平坦面。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-10・11
136	石製品	石球	－	3.2	1.8+	3.2	石材：細粒砂岩（ニービヌフニ）。加工痕：全周に敲打痕。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10・11　Ⅰ
137	石製品	石球	－	3.2	3.0	3.2	石材：細粒砂岩（ニービヌフニ）。加工痕：全周に研磨痕。使用痕：背面中央部に敲打痕。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-10　Ⅰ
138	玉器	製品残滓	－	2.4	1.4	2.3	石材：翡翠。加工痕：磨面、擦切痕。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
139	石製品	砥石	－	2.8	5.0	2.1	石材：細粒砂岩（ニービヌフニ）。加工痕：特になし。使用痕：正面に有溝状砥面１条。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
140	玉器	玉盤	－	－	－	－	石材：滑石か。加工痕：微細な研磨痕、内面胴部に梅花文線刻。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
141	石製品	硯	－	4.6+	2.4	2.2+	石材：シルト岩。加工痕：全周に磨面。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-12・13　Ⅰ
142	石製品	硯	赤間硯	13.4	1.8	6.1	石材：輝緑凝灰岩。加工痕：全周に線条痕。使用痕：池部に墨がわずかに付着。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ+C-11　Ⅰ
143	円盤状製品	－	１Ｂ	2.2	0.6	2.1	素材：中国産青磁（Ｖ類）、胴部。加工：外面側より剥離。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
144	円盤状製品	－	3	2,4+	0.6	1.6	素材：中国産褐釉、胴部。加工：外面側より剥離。使用痕？：表面に粗磨痕。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
145	円盤状製品	－	2	3.0	0.7	3.0	素材：産地不明土器（所謂半練土器）。加工：側面研磨。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
146	円盤状製品	－	2	3.8	1.5	3.5	素材：沖縄産瓦（灰色）。加工：全面研磨。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
147	円盤状製品	－	3	6.4+	2.8	4.8+	素材：中国産青磁（Ⅳ類）、碗底部。加工：外面側より剥離。畳付部にも小剥離痕。未成品か。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-15　Ⅰ
148	円盤状製品	－	１Ａ	2.6+	0.8+	2.2+	素材：中国産白磁（福建）、皿底部。加工：内面側より剥離。	Ⅰ層	H25　首銭東　Z-12　ﾄﾚ1
149	円盤状製品	－	１Ｃ	6.1	1.9	5.7	素材：中国産青磁（Ⅵ類）、碗底部。加工：胴部内外面より剥離、畳付内外面からの剥離により除去。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
150	円盤状製品	－	１Ａ	4.0	1.3	3.7	素材：明朝系瓦（赤）。加工：内面側より剥離。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-10　Ⅰ

第 53 表　遺物観察表（７）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
151	円盤状製品	－	１Ｂ	4.4+	0.8	3.5+	素材：中国産青花、底部。加工：胴外面より剥離、畳付外面からの剥離で除去。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
152	骨製品	ボタン	－	1.4	0.3	1.4	素材不明。加工痕：研磨、穿孔。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
153	骨製品	不明	－	1.7	7.0	1.5	素材：マグロ類。加工痕：中央部に穿孔。使用痕：孔周辺のみ変色。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
154	煙管	羅宇	吸口	3.3	1.1	0.3	胎土：淡黄色（2.5Y8/3）、軟質やや細粒。施釉：緑釉。分類：陶口Ⅱ類。産地：沖縄産か。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
155	るつぼ	－	底部	－	－	1.9	素材：陶製。加工整形：底部平坦に研磨整形。使用痕跡：内面全面及び外面一部に発泡痕のある釉状残滓（赤色）付着。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-12・13　Ⅰ
156	金属製品（鉄）	鉄鏃	－	5.9	1.0	1.2	鏃部は平頭式、断面三角、先端幅1.2、基部幅0.9㎝。軸部は下方に狭くなり、最大幅・厚さ0.5㎝。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
157	金属製品（鉄）	甲冑小札	碁石頭伊予札	6.6	0.2	2.7	2列計12個の孔列。重量15.2ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10・11　Ⅰ
158	金属製品（鉄）	不明	板状	5.6	0.2	2.5	現状で平面台形の板状製品。中央やや右側に6㎜の穿孔。重量10.0g	Ⅰ層	H23　首銭東　B-10　Ⅰ
159	金属製品（鉄）	釘	角釘	2.5	0.5	2.1	頭部がやや欠損しているが頭部側面形が逆L字状を呈する。中央部分から変形。重量2.1ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
160	金属製品（青銅）	鋲	－	2.7	0.1	0.8	笠形の頭部のみに鍍金。脚部は二股に分かれる。重量0.9ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10・11　Ⅰ
161	金属製品（青銅）	釘	角釘	6.1	0.4	0.7	角釘で、頭部および身の部分の断面形もほぼ正方形。重量9.1ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東　A-10　Ⅰ
162	金属製品（青銅）	釘	丸釘Ｂ類	4.9	0.8	1.7	頭部が円盤状。断面形は頭部は楕円形だが、端部に向けて方形。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
163	金属製品（青銅）	釘	角釘	3.3	0.5	1.1	頭部欠損しているが、側面形が逆Ｌ字状を呈するものと推定される。中央部分から変形している。重量3.1ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東
164	金属製品（青銅）	刀装具	鍔	5.6	0.5	4.2	木瓜形。被熱による溶着物も見られ、側面形はやや湾曲しているものの、本来の厚みは均一である。重量36.5ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-12　Ⅰ
165	金属製品（青銅）	冑金具	鍬形	1.8	0.1	1.6	鍬形の中央飾の一部である小円部分。片面の一部に鍍金が施されている。重量1.1ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
166	金属製品（青銅）	不明	板・筒？状	2.4	0.5	0.5	板状のものを巻き込み筒状となっている。上部の片側に穴。中央に菊花文が線刻され、本来は別の金具であった可能性も考えられる。重量1.6ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
167	金属製品（青銅）	甲冑金具	八双金具	2.2+	0.1	1.7	表面のみ鍍金。線刻や魚々子は見られない。重量3.0ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
168	金属製品（青銅）	甲冑金具	覆輪	3.2	0.1	0.6	わずかに鍍金。断面逆U字形。重量2.1ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-12　Ⅰ
169	金属製品（青銅）	かんざし	側差	12.0	0.2	0.4	縦長の耳かき形。竿の部分が途中で変形。重量3.5ｇ	Ⅰ層	H25　首銭東　Z-12　ﾄﾚ1
170	金属製品（青銅）	香炉	－	9.2	1.8	4.5	連続する渦文の中央に粒珠が配された連珠文が見られ鼎型香炉の一部。それに銭貨が溶着。重量193.3ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
171	金属製品（青銅）	薬莢	－	1.6	1.5	1.9	スナイドル銃の薬莢底部。筒の部分は欠損し、基部も腐食が進んでいる。重量4.8ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東
172	銭貨	嘉祐通寶		2.58	0.12	0.71	真書体。3.6ｇ。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-10　Ⅰ
173	銭貨	洪武通寶(一銭)		2.27	0.15	0.42	背面右側の一銭は不明瞭。やや変形。真書体。3.9ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
174	銭貨	順治通「寶」		2.73	0.1	0.59	背面を扁平。重量2.4g	Ⅰ層	H23　首銭東　Ⅰ
175	銭貨	永楽通寶		2.55	0.15	0.6	永楽通寶と思われる資料が3枚、被熱を受け溶着。真書体。7.72ｇ。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ

第54表　遺物観察表（８）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
176	銭貨	嘉「祐」元寶		2.51	－	0.75	2枚が被熱により溶着。付着物や変形で文字がやや不明瞭。真書体。7.1ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
177	銭貨	無文銭？		1.96	0.07	0.59	外縁に欠損が見られる。孔径の大きさが外縁径の1/3。重量1.0ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
178	金属製品（青銅）	刀装具	切羽	－	0.1	－	楕円形で、外縁に刻みを施したもの。重量0.7ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東　C-15　Ⅰ
179	銭貨	鉄銭（寛永通寶）		－	－	－	全面錆に覆われており、銭文字も判然としない。重量1.7ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東　B-10　Ⅰ
180	銭貨	一銭硬貨		2.19	0.12	－	明（治）二?十年。青さびや摩耗で銭文がやや不明瞭。3.3ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
181	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	2.5	－	石井Ａ－１－Ⅰ（湧田古窯Ｂ）、上原側視１型（湧田ＩＡｂ02）。	Ⅰ層	H23　首銭東
182	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系（褐）	－	2.3	－	石井Ａ－１－Ⅰ（西のアザナＣ）、上原側視１型（首西ＩＡａ01）。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-11　Ⅰ
183	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	2.3	－	石井Ａ－１－Ⅰ（西のアザナＤ）、上原側視１型（湧田ＩＡｃ05）。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-10　Ⅰ
184	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	2.3	－	石井Ｂ－２－Ⅱ（天界寺Ｆ）、上原側視１型（御茶ＩＢＢ01）。表、裏面上半漆喰	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10　Ⅰ
185	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系（褐）	－	1.7	－	石井Ｂ－２－Ⅱ（銭蔵東Ａ＜湧田古窯Ｒに近い新タイプ＞）。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
186	明朝系瓦	軒平瓦	灰色系（褐）	－	3.2	－	石井Ａ－１－Ⅰ（西のアザナＣ）、上原側視１型（天界ＩＡｅ01）。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-10・11　Ⅰ
187	明朝系瓦	軒平瓦	灰色系	－	2.8	－	石井Ｂ－３－Ⅱ（天界寺Ｂ）、上原側視１型（御茶ⅢＢｂ01）。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-10　Ⅰ
188	明朝系瓦	軒平瓦	灰色系	－	2.3	－	石井Ｂ－３－Ⅱ（天界寺Ｂ）、上原側視１型（御茶ⅢＢｂ01）。漆喰瓦当面	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-12・13　Ⅰ
189	明朝系瓦	軒平瓦	赤色系	－	3.4	－	石井Ａ－２－Ⅱ（崇元寺Ａ）、上原側視１型（首下ⅢＢｂ01）。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
190	明朝系瓦	軒平瓦	赤色系	－	2.5	－	石井Ｃ－３－Ⅱ（内間御殿Ａ）、上原側視１型（御茶ⅢＢａ02）。漆喰瓦当面・上縁	Ⅰ層	H23　首銭東　C-10・11
191	塼	噛み合わせ	赤色系	－	11.5	22.5	重量5500g。約45%残存で、推定12.2kg。Ⅲ式Ａ類蓋形。全体的に表面が黒変。	Ⅰ層	H23　首銭東
192	ガラス製品	ガラス瓶	－	3.8	0.2	1.5	素材：透明ガラス。内面に白色の物質が僅かに残。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
193	ガラス製品	ガラス瓶	－	1.7	5.3	2.9	素材：透明ガラス。底部に商標（「石」？）、胴部底部側に「49」のスタンプあり	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
194	骨製品	不明	－	2.6+	1.0	1.2	素材：ウシもしくはウマ？。加工痕：全面研磨。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
195	骨製品	不明	－	2.6+	0.4	0.9	素材：ウシもしくはウマ？。加工痕：全面研磨。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-11　Ⅰ
196	骨製品	歯ブラシ	－	4.5+	0.4	1.1	素材：ウシもしくはウマ？。加工痕：全面研磨、穿孔。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
197	金属製品（鉄）	はさみ	－	12.2	0.5	5.0	洋はさみ。重量25.6g	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
198	金属製品（青銅）	薬莢	－	1.9	0.6	1.8	スナイドル銃の薬莢底部。鉄が付着する。重量3.6ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
199	金属製品（アルミ）	砲弾	信管	5.3	0.9	2.4	期限時期を示す目盛と、「ＣＨ　ＴＩＭＥ　Ｆ」という字が読み取れる。おそらくアメリカ製。重量17.6ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
200	金属製品（青銅）	砲弾	弾帯	8.3	0.4	3.3	砲弾の弾帯。旋条痕有り。重量90.2ｇ	Ⅰ層	H23　首銭東　A-10　Ⅰ

第 55 表　遺物観察表（９）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
201	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系（褐）	－	2.1	－	石井Ａ－１－Ⅰ（天界寺Ｃ）、上原側視１型（首城下ⅠＡｂ01）。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-11　Ⅰ
202	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	2.4	－	石井Ａ－１－Ⅰ（西のアザナＢ）、上原側視１型（湧田ⅠＡｂ01）。	Ⅰ層	H23　首銭東
203	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	2.6	－	石井Ａ－１－Ⅰ（西のアザナＣ）、上原側視１型（首西ⅠＡａ01）。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-10・11　Ⅰ
204	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系（褐）	－	1.7	－	石井Ａ－１－Ⅰ（西のアザナＣ）、上原側視１型（首西ⅠＡａ01）。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-11　Ⅰ
205	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	2.3	－	石井Ａ－１－Ⅰ（西のアザナＦ）、上原側視１型（湧田ⅠＡｃ01）。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-12　Ⅰ
206	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系（褐）	－	2.6	－	石井Ａ－１－Ⅰ相当か（湧田古窯Ｐ）、上原側視１型（湧田ⅢＡ01）。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-12・13　Ⅰ
207	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	2.0	－	石井Ｂ－２－Ⅱ（湧田古窯Ｒ）、上原側視１型（首木ⅠＢｂ01）。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
208	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	2.4	－	石井Ｂ－２－Ⅱ（内間御殿Ａ）、上原側視１型（内間ⅠＢｂ01）。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
209	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系（褐）	－	1.6	－	石井Ｂ－２－Ⅱ（内間御殿Ａ）、上原側視１型（内間ⅠＢｂ01）。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
210	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	1.7	－	石井Ｂ－２－Ⅱ（内間御殿Ｂ）、上原側視１型（内間ⅠＢｂ02）。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
211	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	1.6	－	石井Ｂ－２－Ⅱ（天界寺Ｆ）、上原側視１型（御茶ⅠＢｂ01）。上縁漆喰	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
212	明朝系瓦	軒丸瓦	赤色系	－	2.3	－	石井Ｃ－２－Ⅳ（内間御殿Ｄ）、上原側視２型（円覚ⅢＡ01）。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
213	明朝系瓦	軒丸瓦	赤色系（マンガン釉）	－	1.9	－	石井Ｃ－２－Ⅳ（内間御殿Ｅ）、上原側視２型（内間ⅢＡ01）。マンガン釉。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
214	明朝系瓦	軒平瓦	灰色系（褐）	－	3.1	－	石井Ａ－１－Ⅰ（天界寺Ｄ）、上原側視１型（湧田ⅠＡｃ02）。漆喰瓦当上縁	Ⅰ層	H23　首銭東　A-11　Ⅰ
215	明朝系瓦	軒平瓦	灰色系	－	2.8	－	石井Ａ－２－Ⅱ（浦添城Ａ）、上原側視１型（首西ⅢＡ01）。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10　Ⅰ
216	明朝系瓦	軒平瓦	灰色系	－	－	－	石井Ｂ－３－Ⅱ（天界寺Ｂ）、上原側視１型（御茶ⅢＢｂ01）。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11・12　Ⅰ
217	明朝系瓦	軒平瓦	灰色系	－	－	－	石井Ｂ－３－Ⅱ（淑順門西Ａ）。	Ⅰ層	H23　首銭東　A-10　Ⅰ
218	明朝系瓦	軒平瓦	灰色系	－	－	－	石井Ｂ－３－Ⅱ（木曳門Ｂ？）、上原側視１型（首管ⅢＢａ02）。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
219	明朝系瓦	軒平瓦	赤色系（マンガン釉）	－	2.3	－	石井Ｃ－３－Ⅱ（内間御殿Ａ）、上原側視１型（御茶ⅢＢａ02）。漆喰瓦当面	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
220	明朝系瓦	軒平瓦	赤色系	－	2.8	－	石井Ｃ－４－Ⅱ（御庭①）、上原側視１型（御茶ⅢＢａ03）。	Ⅰ層	H23　首銭東　C-11　Ⅰ
221	漆喰製品	漆喰	－	－	－	－	長軸約16㎝、短軸約９㎝、厚さ約３㎝。正面側に幅1㎝の縦横の圧痕があり、木舞状のものに塗ったものか。背面側は平坦面。	Ⅰ層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ
222	中国産青花	碗	明Ⅱ－３	14.0	－	－	胎土白色、釉・呉須良好。外面はやや粗い唐草文。口縁端反部1㎜と薄い。	Ⅰ´層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ2・3　Ⅰ
223	中国産青磁	盤	直口口縁	－	－	－	口縁はやや外反する。胎土は灰白色。内面にヘラ描きの草花文。	Ⅰ層＋Ⅰ´層	H23　首銭東　A・B-10～12　Ⅰ+石ﾂﾞﾐ2・3　ｳﾗｺﾞﾒ
224	沖縄産施釉陶器	碗	Ｂ類	12.8	6.0	5.8	白釉、見込み蛇の目釉剥ぎ、アルミナ塗布、重ね焼き痕。胎土灰色。	Ⅰ´層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ2・3　ｳﾗｺﾞﾒ
225	本土産無釉陶器	鉢	薩摩	－	－	－	鍔縁口縁、端部に刻み目。胎土に５㎜以下の白色礫多く含む。断面黒褐色、内外面暗褐色。	Ⅰ´層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ2・3　ｳﾗｺﾞﾒ

第 56 表　遺物観察表（10）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
226	金属製品（青銅）	不明	板状	2.5	0.1	2.3	木の葉形を呈する。	Ⅰ´層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ2・3　Ⅰ
227	金属製品（鉄）	甲冑金具	鎖	2.5	0.3	1.5	径4㎜の鎖が横方向に1.2㎝前後の間隔で穴があけられた鉄板に通されている。重量2.9ｇ	Ⅰ´層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1　ｳﾗｺﾞﾒ
228	ガラス製品	碁石	－	1.5	0.6	1.5	素材：黒色ガラス。全周にあばた状痕。	Ⅰ´層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ2・3　Ⅰ
229	ガラス玉	玉	Ｖ類	－	－	－	水色。扁平な玉が被熱により変形。	Ⅰ´層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ2・3　Ⅰ
230	金属製品（青銅）	薬莢	－	5.8	0.1	2.1	村田銃の薬莢で、弾頭部分が破損。基部の外面に「明」の文字があるので、明治年間に製造されたと思われる。13.6ｇ	Ⅰ´層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ2・3　Ⅰ
231	中国産白磁	皿	景徳鎮	－	－	－	稜花皿。外反口縁。胎土は灰白色。釉は明灰緑色。外面胴部に蓮弁文とその下に二重の圏線。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中（要確認）
232	中国産青磁	碗	ⅥＡ－０	－	－	5.2	胎土は灰色または黄灰色。見込みに印花文と圏線。外底面を蛇の目釉剥ぎ。外底面に焼き具が付着。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ上
233	中国産青磁	碗	幅広高台タイプ	16.6	6.3	6.4	直口口縁。胎土は灰黒色、露胎部分は赤褐色。外面口縁部下に飛び鉋か。見込みは蛇の目釉剥ぎ、中央が盛り上がる。外底面露胎、高台は端部を抉り、畳付けは平坦。	Ⅰ層＋Ⅱ層	H23　首銭東　C－10・11　Ⅰ+ﾄﾚ1東Ⅱ
234	中国産白磁	碗	福建Ｄ’	13.5	3.8	5.3	直口口縁。胎土は黄白色で軟質、釉はオリーブ灰色で、貫入あり。見込みを釉剥ぎ、外面高台付近より露胎。	Ⅰ層＋Ⅱ層	H23　首銭東　B－10　Ⅰ+ﾄﾚ1東　Ⅱ上
235	中国産白磁	碗	福建Ｖ－４Ａ	11.8	－	－	端反口縁。胎土は黄白色で軟質。釉は黄灰色で貫入あり。内面口縁部下に３条の沈線、稜あり。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ上
236	中国産青花	碗	明（漳州）	－	－	－	胎土白色、失透釉、貫入多い、呉須にじむ。外面全体に文様。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ上
237	中国産青花	碗	明（漳州）	－	－	－	胎土白色、失透釉、貫入多い、呉須にじむ。外面大振りの唐草文か、内面上半雷文横帯。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ上
238	本土産施釉陶器	皿	産地不明	－	－	－	鍔縁皿。胎土は灰白色、精良。胴部上半に緑釉。見込みは露胎し、釉剥ぎの可能性。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ上(10)
239	沖縄産無釉陶器	壺	Ｂ類	11.8	－	－	色調鈍赤褐色。外面やや光沢有。口縁は鉤状。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ上
240	骨製品	不明	－	1.7	0.6	4.1	素材：陸生哺乳類。加工痕：研磨、上端に削痕。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ
241	漆	不明	－	－	－	－	塗膜のみ残存。下層に黒、上層に朱の２層。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ上
242	中国産青磁	鉢	－	－	－	－	直口口縁。胎土は灰色。外面に雷文、内面に草文。釉が厚く、碗Ｖ類に類似。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
243	中国産青磁	碗	ⅥＡ－１	12.7	7.2	5.0	直口口縁。胎土は灰白色、釉はオリーブ色。外面に線刻蓮弁文、見込みに印花文と「富」。外底面は高台下半まで施釉。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
244	中国産青磁	碗	ⅥＢ－１	13.2	－	－	胎土は白色。釉はやや厚く、貫入が多い。外面に細蓮弁文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
245	中国産青磁	碗	ⅥＢ－１	－	－	4.5	胎土は灰色、高台のみ赤褐色。外面に細蓮弁文、その下に二条の圏線。高台下半より露胎。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
246	中国産青磁	碗	ⅥＢ－０	12.0	6.2	4.0	焼成悪く胎土は赤褐色、釉はオリーブ褐色。底径が小さく高台は厚い。ロクロ目顕著。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
247	中国産青磁	碗	ⅥＢ	－	－	4.0	焼成不良のためか胎土は白色、釉は灰オリーブ色。底部は底径が小さく、削りが浅い。見込みに印花文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
248	中国産青磁	碗	ⅥＢ	－	－	4.6	胎土は灰白色、露胎部分は黄灰色。高台外面下半より露胎。見込みが釉剥ぎされる。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
249	中国産青磁	碗	Ⅶ－０	12.9	5.8	5.6	直口口縁。胎土尾は赤褐色、釉は灰オリーブ色。内面口唇部端に稜あり。高台外面まで施釉。見込みに圏線。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
250	中国産青磁	碗	Ⅶ－２	14.0	5.6	5.0	直口口縁。胎土は灰色。釉はオリーブ黒色でやや厚く、ガラス質で貫入あり。高台外面途中まで施釉、一部に釉垂れと砂が付着。外面口縁下に波状文、見込みに圏線。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中

第57表　遺物観察表（11）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
251	中国産青磁	碗	Ⅶ－０	13.8	5.4	5.6	直口口縁。焼成が悪く胎土は赤褐色、釉は外面にアバタが目立つ。高台外面途中まで施釉。見込みに圏線。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
252	中国産青磁	碗	Ⅶ－１	－	－	5.8	胎土は白色。釉は厚くガラス質で、高台内面途中まで施釉、暗オリーブ色。高台内面が「ハ」の字に開く。見込みに圏線。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
253	中国産青磁	皿	Ⅴ腰折	10.6	－	－	腰折皿。釉は厚いが被熱のため劣化。胎土は灰白色。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
254	中国産青磁	皿	Ⅵ腰折	－	－	4.4	腰折皿。胎土は灰黒色。見込みと畳付より外底面露胎。見込みに圏線か。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
255	中国産青磁	盤	肥厚口縁	－	－	－	胎土は灰白色。高台を持つ。外面は無文、見込みに圏線。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
256	中国産白磁	碗	福建Ｄ’	12.7	4.5	4.4	口縁がわずかに外反。胎土は黄白色で軟質。釉は乳白色で内外胴下半より露胎。見込みを蛇の目にケズリか。見込みに段あり。外底には赤色顔料が付着。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ上+ﾄﾚ1東　Ⅱ中
257	中国産白磁	碗	福建Ｄ’	13.6	4.1	5.4	弱い内湾口縁。胎土は黄白色で軟質。釉はオリーブ灰色で貫入あり、内外胴部下半より露胎。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
258	中国産白磁	碗	福建Ｄ’	12.6	4.2	4.4	直口口縁。胎土は灰色で硬質、薄手。釉は灰白色で貫入あり、内外胴部下半より露胎。見込みに金属片(釘？)が付着。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
259	中国産白磁	碗	福建Ｄ’	15.0	－	－	直口口縁。胎土は黄白色で軟質。釉はオリーブ灰色で細かい貫入あり、内面見込み露胎。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
260	中国産白磁	皿	福建Ｄ	7.6	1.8	3.5	内湾皿。胎土は黄白色で軟質。釉は灰色で全面施釉されるが内面胴部の一部が露胎。抉り高台。見込みに重ね焼痕５ヶ所。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
261	中国産白磁	碗	福建Ｄ’	－	－	5.0	胎土は灰白色で硬質。釉は灰色で内外胴部下半より露胎。見込みが盛り上がる。	Ⅰ層＋Ⅱ層	H23　首銭東　Ａ・Ｂ-10　Ⅰ+ﾄﾚ1東　Ⅱ中
262	中国産白磁	碗	福建Ｄ’	－	－	5.1	胎土は黄白色で軟質。釉はオリーブ灰色で貫入あり。見込み及び外面下半より露胎。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
263	中国産白磁	碗	福建Ｖ－４Ａ	10.2	－	－	端反口縁。胎土は灰白色で硬質。釉は青灰色で内外下半露胎。内面口縁部下に稜あり。外面胴部に調整痕あり。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
264	中国産白磁	碗	福建Ｄ’	13.9	－	－	弱い内湾口縁。胎土は黄白色で軟質。釉は灰白色で内外胴下半より露胎。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中+ﾄﾚ1南　Ⅱ中
265	中国産白磁	皿	景徳鎮	10.6	1.4	5.8	端反口縁。胎土は灰色。釉は灰白色、畳付けを釉剥ぎ、砂が多く付着。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
266	中国産白磁	皿	景徳鎮	10.4	2.5	5.8	端反口縁。胎土は灰白色。釉は灰白色で畳付けを釉剥ぎ、砂が付着。。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
267	中国産白磁	皿	景徳鎮	12.5	2.4～2.7	7.4	外反口縁で高台は碁笥底。。胎土は白色。釉は灰白色で光沢なし、畳付けは釉剥ぎされ、砂がわずかに付着。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
268	中国産白磁	皿	景徳鎮	12.6	－	－	稜花皿。端反口縁。胎土は白色。釉は灰白色で失透明。器高は浅い。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
269	中国産白磁	小碗	景徳鎮	7.2	－	－	直口口縁。胎土は黄白色。釉は灰白色で見込みを蛇目釉剥ぎか。薄手。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
270	中国産白磁	小碗	景徳鎮	－	－	2.2	胎土は白色。釉は灰白色で光沢あり、高台内面及び外底面の一部が露胎。見込みは蛇目釉剥ぎ。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
271	中国産褐釉陶器	壷	Ｂ群（壺２類）	10.0	－	－	黄褐釉、胎土浅黄橙色、白・褐色粒中量。内面頸部以下無釉。口縁上面水平。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
272	中国産褐釉陶器	壷	Ｂ群	－	－	－	黄褐釉、胎土浅黄色、白・褐色粒多量。内面上方に部分的に釉掛かる。楯状耳。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
273	中国産青花	碗	明（漳州）	12.6	－	－	胎土黄灰色やや軟質、失透釉、貫入多い、呉須にじむ。外面連点文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
274	中国産青花	碗	明（漳州）	12.6	－	－	胎土灰白色、釉灰色で内面一部掛からない、呉須鈍い。外面文様不明。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
275	中国産青花	碗	明（漳州）	13.8	－	－	胎土黄灰色、釉灰白色、貫入お言い、呉須にじむ。外面文様不明。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中

第 58 表　遺物観察表（12）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
276	中国産青花	碗	明Ⅱ－３	14.6	－	－	胎土灰白色、釉は口縁端部で厚く、呉須にじむ。外面は横位の不明文。口縁若干外反するが、Ⅱ－２に似た印象。	Ⅱ＋Ⅰ´層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中+石ﾂﾞﾐ2・3　ｳﾗｺﾞﾒ
277	中国産青花	碗	明Ⅱ－２	－	－	5.6	胎土灰白色、釉はやや厚くガラス質、呉須はややにじむが良好。見込みは渦巻状で花芯文か。畳付釉剥ぎが雑。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中+ﾄﾚ1南　Ⅱ中
278	中国産青花	碗	明Ⅱ－２	－	－	6.0	胎土灰白色で軟質、釉・呉須鈍い。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
279	中国産青花	碗	明Ⅱ－２	－	－	6.2	胎土灰白色、外底無釉、外面下半の釉も部分的。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
280	中国産青花	碗	明Ⅲ	－	－	－	胎土灰白色、釉白色、呉須鈍い。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中(15)
281	中国産青花	碗	明Ⅱ－３	15.9	－	－	胎土白色、釉・呉須良好だがやや鈍い。外面は端部圏線２条、その下不明文。口縁端部はほぼ直角に近く折れる。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
282	中国産青花	碗	明Ⅲ	－	－	4.8	胎土白色、釉・呉須良好。内外面、見込み草花文、ペンシルドローイング。外底「（大明成）化年製」字款。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
283	中国産青花	皿	明Ⅱ－１	8.9	2.5	4.2	胎土灰白色、釉は青灰色、呉須にじむ。外面牡丹唐草文、見込み十字の花芯文。口縁端部の反り弱い。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
284	中国産青花	皿	明Ⅱ－１	12.0	2.8	6.6	胎土灰色、釉は青灰色、呉須にじむ。外面無文、見込み玉取獅子文か。口縁端部は強く反る。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
285	中国産青花	皿	明Ⅱ－１	9.7	2.4	4.0	胎土灰白色、釉は失透、呉須鈍い、外底釉剥ぎが輪状となる。外面牡丹唐草文、見込み十字の花芯文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
286	中国産青花	皿	明Ⅱ－２	10.0	－	－	胎土白色、釉・呉須良好。外面上半列点文、下半焦葉文、見込み不明文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
287	中国産青花	皿	明Ⅱ－２	11.0	－	－	胎土灰色、釉黄灰色、呉須にじむ。外面、見込み不明文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
288	中国産青花	皿	明Ⅱ－２	11.0	－	－	胎土白色、釉白色、呉須鈍い。外面、見込み不明文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
289	中国産青花	皿	明Ⅱ－２	－	－	2.8	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面下半焦葉文、見込み花芯文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
290	中国産青花	皿	明Ⅱ－２	11.9	3.2	4.2	胎土白色、釉・呉須良好。外面３か所に不明文、見込み寿字文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
291	中国産青花	皿	明Ⅲ	－	－	－	胎土白色、釉・呉須良好。内面上半四方襷文。内湾皿か。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
292	中国産青花	皿	明Ⅲ	－	－	－	胎土白色、失透釉、呉須鈍い、器壁1～2㎜。稜花口縁で、端部に縁取りの圏線ペンシルドローイング、いわゆる芙蓉手。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
293	中国産青花	皿	明Ⅲ	11.4	2.9	6.5	胎土白色、釉・呉須良好。外面牡丹唐草文、内面上半四方襷文、見込み魚文、外底字款「福」。内湾皿。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
294	中国産青花	皿	明Ⅲ	12.3	2.7	6.6	胎土白色、釉・呉須良好。内外面小ぶりの枝文、花文。見込み文様不明。内湾皿。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
295	中国産青花	皿（大形）	明Ⅱ	－	－	11.2	大形。外面文様不明、見込みダミ塗り文様不明。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
296	中国産青花	皿（鍔縁）	明Ⅱ	－	－	－	いわゆる鍔皿。鍔内外面に唐草文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
297	中国産青花	小碗	明Ⅱ・Ⅲ	6.4	－	－	胎土灰白色、釉・呉須鈍い。口縁端部外反する。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
298	中国産青花	瓶	元様式	7.5	－	－	胎土灰白色、失透釉、呉須鈍い。外面焦葉文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
299	中国産青花	小壺	明（景徳鎮）	3.0	－	－	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面は渦巻状文か。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
300	中国産不明陶器	碗	－	－	－	－	胎土は浅黄色、軟質でやや粗め。高台は削り出し。釉は灰褐色で高台より上方と見込みに輪状に見られる。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中

第 59 表　遺物観察表（13）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
301	中国産緑釉	水注蓋	－	撮み1.7	2.9	下辺2.1	胎土は浅黄色で軟質精良。外面に緑釉、下辺にも点状で掛かる。庇部径4.0㎝。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
302	タイ産褐釉	瓶	Ⅱ類	推5.2	－	－	胎土は灰白色で堅緻。白色粒・黒色粒が混入。轆轤成形。両面に暗褐色の釉薬を施釉。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
303	タイ産褐釉	壺	Ⅱ類	22.3	－	－	胎土は灰黄褐色でやや緻密。白色粒・黒色粒・橙色粒が混入。口唇部は内側折り返し。黒褐色の釉薬を内面から口唇部まで施釉。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
304	本土産染付	碗	肥前（Ⅲ期）	12.0	－	－	釉は灰白色。呉須も鈍く青灰色。口縁に圏線２条、草文か。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
305	本土産染付	碗	肥前（Ⅲ期）	11.2	－	－	釉は灰白色。呉須も鈍く青灰色。口縁に圏線２条、草文か。内面わずかにロクロ目あり。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
306	本土産染付	碗	肥前（Ⅲ期）	－	－	－	釉は灰白色。呉須も鈍く青灰色。口縁に圏線１条、草文か。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
307	本土産施釉陶器	碗	肥前（Ⅲ期）	－	－	4.4	胎土は浅黄色、気泡やや目立つ。淡緑色の透明釉。外底無釉。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
308	本土産染付	碗	肥前（Ⅲ期）	－	－	5.4	釉は灰白色。呉須も鈍く青灰色。底部中央内外共に突出。畳付にわずかに砂付着。文様は外面、見込み共に不明。	Ⅱ＋Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中+ﾄﾚ1東　Ⅲ下
309	沖縄産無釉陶器	窯道具	A類	5.5	0.6	5.5	円盤状。ハマ。上下面は比較的平滑。下面わずかに段あり。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
310	沖縄産施釉陶器	碗	A類	－	－	5.8	灰釉、胎土内・外－灰黄色、断一灰色。見込み中央に釉塗布。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
311	石製品	石球	－	3.6	2.8	3.3	石材：サンゴ石。加工痕：全周に研磨痕。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
312	石製品	砥石	－	4.3	1.4	2.1	石材：軽石。加工痕：上下両面に古いパティナの磨面。使用痕：表裏に有溝状砥面数条。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
313	骨製品	骨針？	－	6.6	0.5	0.6	素材：鹿角。加工痕：全面に線条痕、中央部に抉り。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
314	骨製品	不明	－	14.0	1.0	6.6	素材：ウシもしくはウマ四肢骨。加工痕：全面に線条痕。使用痕：表面中央部に擦痕残る凹部あり。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
315	円盤状製品	－	１A	3.3	2.9	1.0	素材：中国産褐釉、壺胴部。加工：内面より剥離。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
316	円盤状製品	－	１C	5.6	1.7	－	素材：中国産白磁(D')碗底部。加工：内外面より剥離。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
317	円盤状製品	－	２・３	9.3	1.4	6.8	素材：タイ（メナムノイ）産褐釉、壺胴部。加工：側面研磨、のち右側面内外面より剥離。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
318	金属製品（鉄・青銅）	不明	不明	3.4	0.5	0.9	三角錐部は青銅製、長1.2、径0.9㎝。それに接合された棒部は鉄製、長2.2、径0.5㎝。留具と目釘か。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
319	金属製品（青銅）	刀装具	目貫	3.5	0.1	1.4	円を三連つなげた形で菊花文魚々子を施し、表面鍍金され、短刀等の目貫と思われる。重量2.8ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
320	金属製品（青銅）	飾金具	花弁状	1.3	0.1	1.2	花弁を象っており、中央に穿孔。表面のみ鍍金。表面は、草花文の線彫り。裏面中央付近に敲打痕。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
321	金属製品（青銅）	鋲	－	2.0	0.1	1.4	頭部のみ鍍金で、草花類と思われるものが彫りこまれている。脚部は、二股に分かれる。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
322	金属製品（青銅）	不明	板状	2.9	2.7	0.1	板状製品で小孔が見られ、2つ折りされており何らかの部材の角を覆うものか。重量2.0ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
323	金属製品（青銅）	不明	鉤状	4.5	0.1	1.8	鉤状を呈する棒状製品で、両端とも外側に短く巻き込む。重量2.4ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
324	金属製品（青銅）	飾金具	不明	1.3	0.1	0.8	円筒状に成形し、一端は花弁状に折り曲げられる。側面に溶接痕有り。重量1.1ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
325	金属製品（青銅）	釘	丸釘A類	1.1	0.1	0.4	頭部が円盤状。重量0.2ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中

第 60 表　遺物観察表（14）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
326	金属製品（青銅）	釘	丸釘Ａ類	1.4	0.1	0.4	頭部が円盤状。下端部に向けて徐々に細くなる。重量0.3ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
327	金属製品（青銅）	釘	丸釘Ａ類	1.8	0.1	0.3	頭部が円盤状。重量0.3ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
328	金属製品（青銅）	かんざし	側差	7.6	0.3	0.4	カブは匙形で頸部から竿に向かう部分で厚みがわずかに増す。断面形は、頸部略六角形、竿略方形。重量2.1ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
329	銭貨	輪銭		0.95	0.08	0.52	ほぼ円形で、身の部分も330の資料に比べ厚い。0.18ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
330	銭貨	輪銭		0.92	0.04	0.68	いびつな円形で、身の部分が細い。0.04ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
331	銭貨	「洪」武通寶		1.78	0.08	0.55	一般の中国銭に比べ小さく厚みもない。外縁を削る磨輪銭の可能性。真書体。0.79ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1Ⅱ中
332	銭貨	永「楽」「通」寶		－	0.16	－	付着物はあるものの字は明瞭。真書体。1.54ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
333	銭貨	無文銭		1.97	0.07	0.69	孔径の大きさが外縁径の1/3。重量1.29ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
334	銭貨	銭種不明		－	－	－	文字が見えない。11枚が被熱を受け溶着。37.15ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
335	銭貨	無文銭		1.81	0.08	0.72	孔径の大きさが外縁径の1/2程度。重量0.84ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
336	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系（褐）	－	2.4	－	石井Ａ－１－Ⅰ（西のアザナＣ）、上原側視１型（首西ⅠＡａ01）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
337	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	2.2	－	石井Ａ－１－Ⅰ（湧田古窯Ｅ）、上原側視１型（湧田ⅠＡｂ04）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
338	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	2.2	－	石井Ａ－１－Ⅰ（浦添城Ａ）、上原側視１型（首西ⅠＡｅ03）。やや文様がルーズか。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
339	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	2.6	－	石井Ａ－２－Ⅱ（浦添城Ｄ）、上原側視１型（湧田ⅠＢａ01）。裏下縁に漆喰	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
340	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系（褐）	－	1.6	－	石井Ａ－２－Ⅱ（浦添城Ｃ）、上原側視１型（浦城ⅠＢａ01）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
341	明朝系瓦	軒平瓦	灰色系	－	2.7	－	石井Ａ－１－Ⅰ（湧田古窯Ａ）、上原側視１型（首西ⅠＡａ01 ）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
342	明朝系瓦	軒平瓦	灰色系	－	3.9	－	石井Ａ－１－Ⅰ（銭蔵東Ａ＜西のアザナＣに近い新タイプ＞）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
343	明朝系瓦	軒平瓦	灰色系	－	3.7	－	石井Ａ－２－Ⅱ（浦添城Ａ）、上原側視１型（首西ⅢＡ01）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
344	明朝系瓦	軒平瓦	灰色系（褐）	－	3.7	－	石井Ａ－１－Ⅰ相当か（湧田古窯Ｐ）、上原側視１型（首西Ⅱ01）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
345	塼	正方形	灰色系	－	4.1	－	重量250g。側面に三本線のヘラ印あり。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
346	塼	正方形	灰色系	－	4.3	－	重量1230g。側面に「八」字の刻印あり。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中(15)
347	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	1.9	－	石井Ａ－１－Ⅰ（天界寺Ｂ）、上原側視１型（天界ⅠＡｄ03）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
348	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	2.7	－	石井Ａ－１－Ⅰ（湧田古窯Ｇ）、上原側視１型（天界ⅠＡｄ01）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ中
349	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	2.7	－	石井Ａ－１－Ⅰ（西のアザナＨ）、上原側視１型（首西ⅠＡｅ02-1）。	Ⅱ層	H23　首銭東　B-11　Ⅱ中(9)
350	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	1.9	－	石井Ａ－１－Ⅰ（浦添城Ａ）、上原側視１型（首西ⅠＡｅ03）。やや文様がルーズか。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中

第 61 表　遺物観察表（15）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
351	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系（褐）	－	1.6	－	石井Ａ－２－Ⅱ（天界寺Ｄ）、上原側視１型（湧田ＩＢａ02）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
352	明朝系瓦	軒丸瓦	赤色系	－	2.0	－	石井Ｃ－２－Ⅱ（内間御殿Ａ）、上原側視１型（内間ＩＢｂ01）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
353	明朝系瓦	軒平瓦	灰色系（褐）	－	2.7	－	石井Ａ－１－Ⅰ（湧田古窯Ⅰ）、上原側視１型（湧田ＩＡｅ01か）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
354	明朝系瓦	軒平瓦	灰色系	－	3.7	－	石井Ａ－１－Ⅰ（湧田古窯Ａ）、上原側視１型（首西ＩＡａ01 ）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中
355	中国産青磁	碗	ⅥＡ－１	11.0	7.2	4.4	直口口縁。胎土は灰白色。外面に線刻蓮弁文。口径及び底径がやや小さい。外底面は蛇の目釉剥ぎ。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
356	中国産青磁	碗	ⅥＢ－１	12.5	－	－	焼成が悪く胎土は灰黒色、釉は発色悪い。外面に細蓮弁文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下+ﾄﾚ1南　Ⅱ中
357	中国産青磁	碗	ⅥＢ	－	－	4.4	胎土は灰色。高台内下半まで施釉。見込みに印花文に中心は「太」が施される。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
358	中国産青磁	碗	ⅥＢ－０	12.8	6.4	4.6	直口口縁。焼成不良のためか胎土は赤褐色、釉は暗オリーブ色。外面高台下半、外底面露胎。ロクロ目顕著。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下+ﾄﾚ1南　Ⅱ中
359	中国産青磁	碗	ⅥＢ	－	－	4.3	焼成が悪く胎土は赤褐色、釉は暗オリーブ色、外面は細かい気泡が目立つ。底径は小さく、高台畳付及び外底面露胎。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
360	中国産青磁	碗	ⅥＢ－０	13.0	6.5	4.2	焼成不良のため胎土は赤褐色、釉はオリーブ褐色。底径が小さく、高台が厚い。畳付、外底面露胎。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
361	中国産青磁	碗	Ⅶ－１	－	－	5.2	胎土及び釉は灰白色。高台は「ハ」の字に開き、外面のみ施釉。外面に細蓮弁文、見込みに圏線。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
362	中国産青磁	碗	Ⅶ－２	14.5	－	－	直口口縁。胎土は灰黒色。釉はガラス質で厚い。外面口縁下に波状文、その下に圏線。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
363	中国産青磁	碗	Ⅶ－２	12.0	5.6	5.8	直口口縁。胎土はは白色、釉は明オリーブ灰色。畳付けまで施釉され、外底面は露胎するが一部に釉が付着。外面に波状文とその下に圏線。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
364	中国産青磁	碗	Ⅶ－２	13.2	6.4	5.9	直口口縁。焼成が悪く胎土は黄褐色、釉は灰黄色。高台外面途中まで施釉。外面に波状文とそそ下に圏線及び線刻連弁文 、見込みに圏線。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下+ﾄﾚ1南　Ⅱ下
365	中国産青磁	碗	Ⅶ－２	12.2	－	－	外反口縁。胎土は灰白色。釉はガラス質で貫入あり。外面口縁下に雷文か。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
366	中国産青磁	碗	Ⅶ－２	14.2	－	－	内碗口縁。胎土は灰白色。釉はガラス質で厚い。外面口縁下に波状文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下+ﾄﾚ1南　Ⅱ中
367	中国産青磁	碗	ⅥＢ－１	15.2	－	－	胎土は灰白色。釉はガラス質で貫入あり。外面に細蓮弁文、弁先は二重となり蓮弁と揃う。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
368	中国産青磁	擂鉢	－	－	－	－	玉縁口縁。胎土は灰色。内面高台下より露胎する。内面は１㎜幅の擂目が交叉しながら施され、赤色顔料も付着。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1Ⅱ下
369	中国産青磁	皿	Ｖ直口	9.2	－	－	直口皿。胎土は灰白色、釉は明緑灰色で厚い。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
370	中国産青磁	皿	Ｖ稜花	10.9	2.3	5.0	稜花皿。胎土は灰色。外底面蛇の目釉剥ぎ。釉はオリーブ灰色、ガラス質で貫入あり。内面口縁下二条の圏線、草花文、見込みに印花文。外面に草花文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1Ⅱ下
371	中国産青磁	瓶	－	5.8	－	－	外反口縁。胎土は灰白色。外面にヘラ描きの蓮弁文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
372	中国産青磁	盤	口折口縁	43.0	－	－	胎土は灰白色。内面口縁部下に唐草文、胴部にヘラ描きの草花文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1Ⅱ中下+ﾄﾚ1東　Ⅱ中
373	中国産白磁	皿	景徳鎮	11.2	－	－	端反口縁で、胴部ともに刻みが入る。胎土は灰白色。釉は乳白色で失透明。内面胴部に圏線。。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
374	中国産白磁	皿	景徳鎮	14.6	3.8	8.6	端反口縁。胎土は灰白色。釉は乳白色、畳付けを釉剥ぎ、砂が付着。口径が広く、器高は深い。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
375	中国産白磁	皿	景徳鎮	9.7	2.7	2.6	直口口縁。碁笥底。胎土は白色。釉は灰白色、畳付けを釉剥ぎ。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下+ﾄﾚ1南　Ⅱ中

第 62 表　遺物観察表（16）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
376	中国産白磁	皿	景徳鎮	11.8	2.8	6.4	端反口縁。胎土は灰白色。、釉はムラがあり、灰色または黄白色、畳付けを釉剥ぎ、砂が付着。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
377	中国産白磁	碗	景徳鎮	－	－	6.0	胎土は灰白色。釉は青白色で高台内面の一部が露胎、高台外面端を釉剥ぎ。	Ⅰ層＋Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1+ﾄﾚ1東　Ⅱ下+ﾄﾚ1南　Ⅱ下
378	中国産白磁	袋物	福建	－	－	3.8	胎土は灰白色。釉は青白色。内面まで施釉し、見込みの一部及び胴部下半は露胎。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
379	中国産白磁	皿	福建D’	－	－	－	外反皿。釉は少し青みがかり、外面胴部途中まで施釉。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
380	中国産白磁	碗	福建D’	15.0	4.5	5.4	弱い内湾口縁。胎土は黄白色で軟質。釉はオリーブ灰色で貫入あり、見込みを釉剥ぎ、外面高台より露胎。	Ⅰ層＋Ⅱ層	H23　首銭東　B-10　Ⅰ+ﾄﾚ1東　Ⅱ中
381	中国産白磁	皿	景徳鎮	18.2	－	－	胎土は白色。釉は灰色で厚く貫入あり。口縁部は鍔縁状、口唇部は稜花。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
382	中国産青花	碗	明Ⅰ－1	－	－	－	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面は唐草文。内面は雷文横帯。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
383	中国産青花	碗	明Ⅱ－3	－	－	－	胎土白色、釉・呉須良好。外面は囍字文か。口縁は70°程折れる。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
384	中国産青花	碗	明Ⅱ－2	11.5	－	－	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面上半横位の粗い雲状文、下半は草花文か。	Ⅰ層＋Ⅱ層	H23　首銭東　A-11　Ⅰ+ﾄﾚ1南　Ⅱ中
385	中国産青花	碗	明Ⅱ－2	12.0	6.5	6.0	胎土黄灰色で軟質、釉は緑灰色。外面は雲状文横帯、下半は鎖状の草花文。見込み圏線太目２条。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
386	中国産青花	碗	明Ⅱ－1	13.6	－	－	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面上半横帯の波頭文か、下半蕉葉文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
387	中国産青花	碗	明Ⅱ－2	12.1	－	－	胎土灰色、釉暗灰色で内面一部掛からない、呉須濃青色。外面は雲状文横帯、下半は鎖状の草花文だが、表現は粗い。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
388	中国産青花	碗	明Ⅱ－2	11.9	－	－	胎土灰色、釉暗灰色で内面上半に厚く掛り、呉須濃青色。外面上半横位の渦巻文、下半はかなり粗い草花文か。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
389	中国産青花	碗	明Ⅱ－1	－	－	6.2	胎土灰白色で空隙多く、釉・呉須良好。外面下半蕉葉文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
390	中国産青花	碗	明Ⅱ－1	－	－	6.0	胎土は薄橙色で軟質、外底無釉、見込み蛇の目釉剥ぎ、畳付砂付着。外面焦葉文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
391	中国産青花	碗	明Ⅱ－1	－	－	4.9	胎土灰白色で空隙多く、釉・呉須良好。外面下半蕉葉文。見込みは圏線２条、外側斜線、大きめの花弁文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
392	中国産青花	碗	明Ⅱ－1	－	－	4.5	胎土白色で硬質、釉・呉須良好。見込みは大きめの列点文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
393	中国産青花	碗	明Ⅱ	－	－	5.2	胎土黄灰色で軟質、釉は透明で薄く、見込みの呉須は薄青色。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
394	中国産青花	碗	明Ⅱ	－	－	5.8	胎土灰白色、釉は外面下半一部掛からず、畳付砂多く付着。外面唐草文、内面草花文、見込み十字文か。底部凹む。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
395	中国産青花	碗	明Ⅱ－3	14.7	－	－	胎土白色、釉・呉須良好だがやや鈍い。外面下半に不明文。口縁端部はほぼ直角に折れる。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
396	中国産青花	碗	明Ⅲ	－	－	4.1	胎土白色、釉・呉須良好。内面、見込み文様不明。外底「永（保長）春」字款。見込みが膨らむ饅頭心形。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
397	中国産青花	碗	明Ⅲ	－	－	－	胎土白色、釉・呉須良好、器壁2㎜薄い。外面丸菱、蔓唐草文。内面上半花枝文。ペンシルドローイング。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
398	中国産青花	碗	明（漳州）	13.9	－	－	胎土白色硬質、釉ガラス質の緑白色で外面下半無釉、呉須にじむ。外面連点文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
399	中国産青花	碗	明（漳州）	－	－	－	胎土灰白色、失透釉、貫入多い、呉須にじむ。外面簡略化した草文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
400	中国産青花	碗	明Ⅱ	－	－	5.2	胎土灰白色、外底無釉、見込み蛇の目釉剥ぎ。無釉部橙色。見込みの釉部分に文様あり。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下

第 63 表　遺物観察表（17）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
401	中国産青花	皿	明 Ⅱ－１	11.6	－	－	胎土灰色やや軟質、釉灰色、呉須薄い。外面牡丹唐草文、簡略が激しい。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　Ⅱ上+ﾄﾚ1　Ⅱ中+ﾄﾚ1東　Ⅱ下
402	中国産青花	皿	明 Ⅱ－１	9.8	2.4	5.1	胎土灰白色、釉・呉須良好。見込みに一部砂付着。外面牡丹唐草文、見込み十字の花芯文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　南　Ⅱ下
403	中国産青花	皿	明 Ⅱ－１	－	－	4.9	胎土黄灰色やや軟質、釉は灰白色、呉須やや鈍い。底部からすると口径９㎝クラス。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　東　Ⅱ下
404	中国産青花	皿	明 Ⅱ－１	－	－	5.4	胎土白色、釉・呉須良好。外面無文、見込不明文様。底部は碁笥底状で、胴部は直線的に伸びる。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　Ⅱ下
405	中国産青花	皿	明 Ⅱ－２	10.0	－	－	胎土灰白色、釉黄灰色、呉須良好。外面上半列点文、下半縦線状文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　東　Ⅱ下+ﾄﾚ1東　Ⅱ中
406	中国産青花	皿	明 Ⅱ－２	9.7	2.6	3.2	胎土白色、釉・呉須良好、底部に耐火土付着。外面無文、見込み草文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　Ⅱ下
407	中国産青花	皿	明 Ⅱ－２	9.9	2.8	2.9	胎土白色、釉・呉須良好、口縁端部釉が厚い。外面上半列点文、下半焦葉文、見込み花芯文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　南　Ⅱ下
408	中国産青花	皿	明Ⅲ	12.6	－	－	胎土白色、釉・呉須良好。内湾皿。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　東　Ⅱ+ﾄﾚ1東　Ⅱ下+ﾄﾚ1東　Ⅱ中
409	中国産青花	瓶	元様式	6.5	－	－	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面焦葉文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　南　Ⅱ下
410	中国産青花	瓶	明 （景徳鎮）	－	－	－	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面焦葉文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　南　Ⅱ下
411	中国産青花	瓶	明 （景徳鎮）	－	－	－	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面牡丹唐草文。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　南　Ⅱ下
412	中国産 瑠璃釉	碗	景徳鎮	12.6	－	－	釉は外面濃い群青色、内面は青白色で光沢がある。厚保さ1㎜。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　東　Ⅱ下
413	中国産 三彩	水注	－	－	－	－	胎土は灰白色で軟質精良。釉は黄・緑を確認。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　南　Ⅱ下
414	ベトナム産 青花	碗	Ⅰ類	15.6	－	－	胎土は灰白色で緻密。両面に白化粧を施し、その上から透明釉を施釉後口唇部を釉剥ぎ。外面に陰圏線３条＋蓮弁文、内面に圏線２条。両面に細かい貫入。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　南　Ⅱ下
415	ベトナム産 青花	碗	Ⅰ類	－	－	－	胎土は灰白色で緻密。両面に白化粧を施し、その上から透明釉を施釉。外面に蓮弁文＋圏線。両面に細かい貫入。内面に石灰分が付着。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　南　Ⅱ下
416	タイ産褐釉	壺	Ⅱ類	17.0	－	－	胎土はにぶい黄橙色で堅緻。白色粒・黒色粒・橙色粒が混入。輪積み成形で口唇部は外側折り返し。外面に暗褐色の釉薬を施釉。内面口縁部に焼成時の溶着跡が残る。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　南　Ⅱ下
417	本土産染付	碗	肥前 （Ⅲ期）	－	－	－	釉は灰白色。呉須も鈍く青灰色。口縁に圏線２条、文様不明。外面にロクロ目あり。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　東　Ⅱ中+ﾄﾚ1南　Ⅱ下
418	本土産染付	碗	肥前 （Ⅲ期）	－	－	5.0	釉は灰白色。呉須も鈍く青灰色。底部中央内外共に突出し、やや厚い。畳付にわずかに砂付着。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　東　Ⅱ下
419	沖縄産 無釉陶器	皿	A類	9.0	2.6	3.8	1㎜以下の白色粒含み、内外面鈍赤褐色、断面灰色。胴部横ナデ、内外底やや凹凸残し、外底２条の沈線あり。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　Ⅱ下+ﾄﾚ1東　Ⅱ中
420	沖縄産 瓦質土器	植木鉢	－	－	－	－	胎土に１㎜以下の黒色粒僅かに含む。外面灰黄色、外面灰色、断面黄灰色。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　南　Ⅱ下
421	沖縄産 瓦質土器	植木鉢	－	－	－	－	胎土に５㎜以下の赤色粒含む。内外面灰色、断面褐色。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　Ⅱ中下
422	漆喰製品	蓋	－	4.3	3.5	3.8	上部は雑な面取整形、下部は棒状。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　南　Ⅱ下
423	骨製品	不明	－	2.0	0.2	1.2	素材：陸生哺乳類。加工痕：表裏・側面に線条痕、上面に擦切痕。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　東　Ⅱ下
424	骨製品	骨ヘラ	－	3.6+	0.3	1.9	素材：ウシもしくはウマ。加工痕：全面に研磨痕。使用痕：表裏両端部に縦方向の線条痕。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　南　Ⅱ下
425	骨製品	骨ヘラ？	－	6.0	0.6	0.7	素材：ウシもしくはウマ。加工痕：全面に磨面、上端に抉り。使用痕：下端に線条痕。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1　Ⅱ下

第 64 表　遺物観察表（18）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
426	骨製品	不明	－	2.1	0.5	1.8	素材：陸生哺乳類。加工痕：表裏面に磨面、全側面に切断痕。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
427	円盤状製品	－	１Ａ	3.6	3.0	1.6	素材：明朝系瓦（灰色）。加工：背面より剥離。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
428	円盤状製品	－	１Ｃ	2.0	7.5	1.9	素材：中国産褐釉、胴部。加工：内外面より剥離。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
429	円盤状製品	－	１Ｃ	8.0	1.8	7.6	素材：明朝系瓦（灰色）。加工：表裏から剥離。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
430	円盤状製品	－	３	5.3+	2.3+	4.3+	素材：中国産白磁(福建）、蓋。加工：外面側より剥離。口受け部にも小剥離痕。未成品か。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
431	金属製品（青銅）	甲冑金具	総角付環座	2.1	1.0	1.9	全面鍍金。左右は非対称で、頭部を切子状に面取り。全体を薄い青錆が覆っている。重量6.8ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
432	金属製品（青銅）	鋲	－	1.2	0.3	1.2	鍍金の有無は青錆に覆われいるため不明。頭部は笠形だが、脚部欠損。頭部の根元付近から切断の可能性。重量0.6ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
433	金属製品（青銅）	釘	丸釘Ａ類	2.4	0.2	0.4	円盤状の頭部。重量0.5ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
434	金属製品（青銅）	釘	丸釘Ｂ類	3.7	0.7	2.0	円盤状の頭部で、断面形は不整形な六角形。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
435	金属製品（青銅）	不明	不明	2.5	0.3	0.7	棒状の先に三角錐形の頭部が付く。重量2.8ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
436	金属製品（青銅）	青銅滓	－	1.3	0.4	1.1	不整な半円状を呈する。重量2.4ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
437	金属製品（青銅）	不明	環	2.2	0.2	1.9	円環で、両端は接合されていない。断面形は円形で、厚みも一定。重量2.3ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
438	金属製品（青銅）	刀装具	小柄	4.8	0.2	1.4	小柄の柄。表面及び側面の一部に鍍金。重量7.1ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
439	ガラス玉	玉飾り	Ⅰ類	－	－	－	白色３、黒色１。銅線で連結。銅線片側端は輪状に屈曲、玉直下はねじり。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
440	銭貨	熙寧元寶		2.40	0.88	0.66	背面扁平。付着物や摩耗により文字がやや不明瞭。真書体。2.77ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
441	銭貨	「皇」宋「通」寶		－	0.11	－	孔の内郭に刻みを入れている。真書体。2.04ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
442	銭貨	「洪」武「通」寶		－	0.14	－	真書体。1.69ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
443	銭貨	銭種不明		－	0.12	－	方孔を円形に加工。青錆や付着物により文字が不明瞭。1.46ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
444	銭貨	無文銭		1.65	0.06	0.81	孔径の大きさが外縁径の1/2。重量0.55ｇ	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
445	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	2.0	－	石井Ａ－１－Ⅰ（湧田古窯Ｇ）、上原側視１型（天界ＩＡｄ01）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
446	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	2.0	－	石井Ａ－１－Ⅰ（西のアザナＤ）、上原側視１型（湧田ＩＡｃ05）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
447	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系（褐）	－	1.9	－	石井Ａ－１－Ⅰ（西のアザナＢ）、上原側視１型（湧田ＩＡｂ01）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
448	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	2.7	－	石井Ａ－１－Ⅰ（西のアザナＨ）、上原側視１型（首西ＩＡｅ02-1）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
449	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	1.5	－	石井Ａ－１－Ⅰ（西のアザナⅠ）、上原側視１型（首西ＩＡｅ04）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
450	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	2.2	－	石井Ａ－１－Ⅰ相当か（湧田古窯Ｊ）、上原正視型（湧田Ⅰ01）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下

第 65 表　遺物観察表（19）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
451	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系	－	2.2	－	石井Ａ－１－Ⅰ相当か（湧田古窯Ｊ）、上原正視型（湧田Ⅰ01）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
452	明朝系瓦	軒平瓦	灰色系	－	3.6	－	石井Ａ－１－Ⅰ（湧田古窯Ａ）、上原側視１型（首西ＩＡａ01）。漆喰平瓦部外面	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
453	明朝系瓦	軒平瓦	灰色系	－	3.7	－	石井Ａ－１－Ⅰ（西のアザナＢ）、上原側視１型（首西ＩＡａ02）。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
454	塼	正方形	灰色系	26.3	4.1	24.8	重量2850g。約70％残存で、推定4.1kg。上面はざらつき、下面は溝状の調整痕が顕著。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
455	塼	三角形	赤色系	推31.0	4.6	23.7	重量1580g。約90％残存で、推定1.8kg。上面は平滑だが磨滅も見られ、下面は凹凸がやや見られる。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
456	ガラス玉	玉	Ⅲ類	－	－	－	青。ガラス帯が螺旋状に巻き付きコイル形をなす。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
457	ガラス玉	玉	Ⅲ類	－	－	－	水色。ガラス帯が螺旋状に巻き付きコイル形をなす。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下
458	漆	不明	－	－	－	－	塗膜のみ残存。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
459	骨製品	不明	－	4.7+	0.2	1.4	素材：ウシもしくはウマ。加工痕：全周を入念な研磨。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
460	漆喰製品	漆喰	－	5.3	4.7	3.3	加工：僧帽状に面取整形、下面中央に穿孔。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
461	漆喰製品	漆喰	－	5.9	6.3	3.2	加工：僧帽状に粗雑な面取整形、下面突起部貼り付け。使用痕：下面のみ平坦かつ風化による変色弱、接着面か。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ下
462	漆喰製品	漆喰	－	－	－	－	長軸25Ｃm、短軸10cm大。全面平坦面、一側面に方形のスタンプ残る。固定材として使用か。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中+ﾄﾚ1南　Ⅱ中
463	中国産青磁	碗	Ⅴ－１	－	－	－	直口口縁。胎土は白色。外面口縁部下に圏線とヘラ描きの蓮弁文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ上
464	中国産青磁	碗	Ⅶ	－	－	5.8	胎土は灰白色。釉はガラス質で貫入あり。高台は内面が「ハ」の字に開き、外面途中まで施釉。見込みに圏線。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
465	中国産青磁	碗	ⅥB	－	－	4.3	胎土は黄灰色で一部は焼成不良のため赤みを帯びる。外面高台下半より露胎。ロクロ目顕著。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ上
466	中国産白磁	皿	景徳鎮	－	－	11.6	胎土は白色。釉は青白色、畳付は釉剥ぎされ、砂が付着。高台内面は内側に傾く	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ上
467	中国産青花	碗	明Ⅱ－２	12.0	－	－	胎土灰色、釉暗灰色、呉須濃青色。外面上半横位の粗い渦巻文、下半はかなり粗い草花文か。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
468	中国産青花	碗	明Ⅱ－２	－	－	－	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面上半雲状文横帯、鎖状の草花文で、共に丁寧。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
469	中国産青花	碗	明Ⅱ－１	－	－	5.4	胎土灰白色で空隙多く、釉・呉須良好だが、畳付の処理が雑。外面下半、見込み共に凡字状文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
470	中国産青花	碗	明Ⅱ－２	13.2	－	－	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面上半雲状文横帯、鎖状の草花文で、共に丁寧。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
471	中国産青花	碗	明Ⅱ－２	12.0	－	－	胎土灰白色、釉はやや厚い。外面上半横位の列点文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
472	中国産青花	碗	明Ⅱ－２	12.0	－	－	胎土灰白色、釉はやや厚い。外面上半横位の列点文、下半は草花文か。	Ⅱ層＋Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ上+ﾄﾚ1南　Ⅲ上
473	中国産青花	碗	明Ⅱ－３	－	－	5.9	胎土灰白色で軟質、釉・呉須良好だが貫入ややあり。外面見込みまばらな草花文か。底部凹むがⅡ－１の文様ではない。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
474	中国産青花	碗	明Ⅱ－３	－	－	－	胎土白色、釉・呉須良好だがやや鈍い。外面は端部圏線２条、その下不明文。口縁は70°程折れる。口縁は稜花形。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
475	中国産青花	碗	明Ⅱ－１	12.6	－	－	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面上半横帯の波頭文か、下半蕉葉文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上

第 66 表　遺物観察表（20）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
476	中国産青花	碗	明Ⅱ－2	－	－	4.8	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面下半鎖状の草花文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
477	中国産青花	碗	明Ⅱ	－	－	5.9	胎土は薄橙色で軟質、釉は透明で薄い。見込みは粗いタッチで風景画的な表現。	Ⅱ層＋Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下+ﾄﾚ1南Ⅲ上
478	中国産青花	皿	明Ⅱ－1	12.4	2.5	7.2	胎土灰白色、釉・呉須良好、外底は白色。外面牡丹唐草文、見込み十字の花芯文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
479	中国産青花	皿	明Ⅱ－2	11.4	3.2	4.2	胎土白色、釉・呉須良好。外面無文、見込み草文か。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
480	中国産青花	瓶	明（景徳鎮）	－	－	8.0	胎土灰白色、釉・呉須良好。畳付釉剥ぎ。外面下半渦巻状文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ上
481	中国産青花	瓶	明（景徳鎮）	－	－	－	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面唐草文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ上
482	中国産青花	瓶	明（景徳鎮）	－	－	6.8	胎土灰白色、釉・呉須良好。畳付釉剥ぎ部赤色。外面下半唐草文、双頭文。	Ⅱ層＋Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1Ⅱ中下+ﾄﾚ1東Ⅱ下+ﾄﾚ1南Ⅲ上
483	中国産天目	碗	－	11.2	－	－	胎土暗灰色、ややざらつく印象あり。黒釉。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
484	中国産法花	壺	－	－	－	－	胎土は白色で硬質精良。外面は貼り付け文を施し、青、緑釉。内面は緑釉。釉は残りが良い。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ上
485	中国産褐釉陶器	壷	A群（壺５類）	17.6	－	－	緑褐釉部分的にコバルト、胎土精良で灰黄色。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ下+ﾄﾚ1南Ⅲ上
486	中国産褐釉陶器	鉢	－	27.4	－	－	橙色で光沢のない釉で、内面上半まで掛かる。胎土褐灰色、白・赤色粒微量。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
487	中国産褐釉陶器	鉢	－	－	－	－	外面鈍黄褐釉、内面赤色、白色粒中量。口縁に縄目状突帯。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
488	タイ産土器	蓋	－	－	－	－	胎土は鈍橙色で緻密。白色粒・黒色粒・橙色粒が混入。外面に回転調整痕及びケズリ調整痕が残る。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ上
489	タイ産褐釉	瓶	Ⅰ類	－	－	5.0	胎土はにぶい橙色でやや緻密。白色粒・黒色粒が混入。轆轤成形。外面胴部に褐色の釉薬を施釉。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
490	土製品	球状土製品	－	2.9	2.4	3.1	素材：瓦質（褐色）。加工痕：全周に研磨痕。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
491	沖縄産瓦質土器	植木鉢	－	－	－	46.2	胎土に１㎜以下の黒色粒僅かに含む。全体的に灰色、断面両際は黄灰色。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
492	沖縄産瓦質土器	植木鉢	－	－	－	－	胎土に５㎜以下の黒色粒含む。内面黒色、外面灰色、断面両際灰白色、中央灰色。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
493	沖縄産瓦質土器	植木鉢	－	－	－	－	胎土に５㎜以下の白色粒僅かに含む。全体的に灰色、断面両際は黄灰色。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ上
494	沖縄産瓦質土器	植木鉢	－	－	－	－	胎土に１㎜以下の黒色粒僅かに含む。内面黒色、外面灰色、断面両際が灰白色、中央が灰色。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
495	金属製品（鉄）	鉄鏃	－	5.2	1.0	1.5	鏃部は平頭式だが、中央部が窪む。先端幅1.5、基部幅1.2㎝。軸部は、最大幅・厚さ0.5㎝。軸部は鏃部に差し込んで接合したものと思われる。重量10.3ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
496	銭貨	洪武通寶		－	0.13	0.54	熱による変形や溶着で文字がやや不明瞭。真書体。2.40ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ上
497	銭貨	皇「宗」「通」寶か皇「宗」「元」寶		－	0.12	－	背面に四の字。真書体。1.54ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
498	銭貨	聖「宋」元寶		2.43	0.14	0.50	篆書体。2.56ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上
499	明朝系瓦	丸瓦	灰色系	34.7	1.9	14.1	玉縁端部平坦に整形。布目1㎜。漆喰長軸に付着。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ
500	明朝系瓦	軒丸瓦	灰色系（褐）	－	2.3	－	石井Ａ－１－Ⅰ（西のアザナH）、上原側視１型（首西ⅠＡｅ02-1）。従来より古手か。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ上

第 67 表　遺物観察表（21）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
501	明朝系瓦	平瓦	灰色系（褐）	－	1.7	27.5	桶板綴じ痕５ヶ所。布目2㎜。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3
502	明朝系瓦	軒平瓦	灰色系	－	3.2	－	石井Ａ－１－Ⅰ（西のアザナＢ）、上原側視１型（首西ⅠＡａ02）。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ上
503	中国産青磁	碗	ⅥＢ－０	12.6	6.4	4.4	焼成が悪いためか釉に色ムラがある。胎土は灰黒色。畳付及び外底面露胎。ロクロ目顕著。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　2
504	中国産青磁	碗	ⅥＢ－１	－	－	4.8	胎土は黒灰色。外底面は高台途中まで施釉。高台は「ハ」の字に開く。外面に細蓮弁文。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　2
505	中国産青磁	盤	稜花口縁	24.2	－	－	焼成が悪く胎土は赤褐色、釉は灰オリーブ色。外面胴部に蓮弁文、外面と内面口縁下に波状文、胴部に草花文か。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　2
506	中国産白磁	皿	福建Ｄ	－	－	4.0	胎土は黄灰色で軟質。釉は乳白色。見込みは釉剥ぎ、外底面は露胎。見込みに重ね焼痕３ヶ所。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　2
507	中国産白磁	皿	景徳鎮	12.3	2.6	6.8	端反口縁。胎土は白色。釉は乳白色、畳付けを釉剥ぎし、砂が付着。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　1
508	中国産白磁	皿	景徳鎮	17.0	3.0	9.0	端反口縁。胎土は白色。釉は灰白色、畳付は釉剥ぎされ、砂がわずかに付着。口径が広く、器高は深い。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　2
509	中国産青花	皿	明Ⅱ－１	11.5	2.4	6.2	胎土灰白色、釉は青白色、呉須にじむ。外面牡丹唐草文、見込み玉取獅子文か。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　2
510	中国産青花	皿	明Ⅱ－２	10.2	2.8	2.4	胎土白色、釉・呉須良好。外面上半列点文、下半焦葉文、見込み花弁文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下+石ﾂﾞﾐ1内2（15）
511	中国産青花	皿	明Ⅱ－１	11.5	2.4	6.0	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面牡丹唐草文、見込み玉取獅子文か。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　2
512	タイ産褐釉	壺	Ⅱ類	14.2	－	－	胎土は灰黄褐色でやや緻密。白色粒・黒色粒・橙色粒が混入。輪積み成形で口唇部は外側折り返し。内面口唇部～外面にオリーブ褐色の釉薬を施釉。口唇部に焼成時の痕跡？が残る。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　2
513	石製品	石球	－	4.2	3.3	4.1	石材：琉球石灰岩。加工痕：全周に敲打痕。使用痕：背面中央部に敲打による凹み。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　2
514	石製品	石球	－	6.1	2.7+	6.1	石材：細粒砂岩（ニービヌフニ）。加工痕：全周に敲打痕。使用痕：正面中央部に弱磨面。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　2
515	石製品	砥石	－	3.3	2.0	3.1	素材：軽石。使用痕：ほぼ全周に砥面。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　2
516	骨製品	ビート	－	3.1	1.5	3.0	素材：メジロザメ椎骨。加工痕：中央部に穿孔。使用痕：上下、左側面中央部に磨滅痕、右側面に凹み、縁辺と孔周囲の間のみ風化弱。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　2
517	円盤状製品	－	3	7.0	3.7	3.7	素材：中国産白磁（徳化）、碗底部。加工：内面側より剥離。片側胴部未剥離、未成品。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　2
518	金属製品（青銅）	刀装具	柄縁	4.0	0.5	1.2+	全体的に薄く青錆が覆っているものの、つくりは表･裏面とも丁寧。重量15.6ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　1
519	金属製品（鉄）	甲冑小札	－	2.2	0.3	1.8	札足の部分、2列計4個の孔列。孔の大きさは直径2～3㎜で、丁寧に穿孔されている。重量2.7ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　2
520	金属製品（鉄）	甲冑金具	鎖	5.8	0.9	3.6	鎖の部分と思われる。八重鎖。重量23.4ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　2
521	金属製品（鉄）	不明	－	7.3	1.6	1.5	重厚感があり鉄釘の可能性がある資料だが、上下の部分が欠損しているため全形は不明。重量54.9g	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3
522	ガラス玉	玉	Ⅱ類	0.4	0.1	0.4	黄色ガラス。螺旋状の筋あり。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　2
523	ガラス玉	玉	Ⅳ類	－	－	－	水色６、白１。被熱で溶着。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　2
524	銭貨	元豊通寶		2.41	0.14	0.61	真書体。3.74ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　2
525	銭貨	「開」元通「寶」		－	0.14	－	青錆や付着物で文字がやや不明瞭。1.71ｇ。新書体。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　2

第 68 表　遺物観察表（22）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
526	塼	正方形	赤色系	25.0	4.0	24.4	重量3090g。約85%残存で、推定3.6kg。上面は非常に平滑で磨滅も少ない。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　2
527	塼	三角形	灰色系	推35.0	4.5	25.3	重量2340g。約90%残存で、推定2.6kg。上面に「大二（円圏あり）」字の刻印あり。上面はやや磨滅、下面は凹凸は少ない。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　2
528	塼	噛み合わせ	灰色系	24.9	3.4	－	重量2560g。Ⅳ式Ａ類。全体的に丁寧。突起部厚7.3㎝。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　2
529	漆喰製品	蓋	－	－	0.7	－	加工：表裏面を平坦に整形。本来は円形か。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　2
530	玉器	製品残滓	－	3.0+	2.1+	0.9+	石材：翡翠。加工痕：正面に摺切痕、左側・下・背面に磨面、下面に敲打痕。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　2
531	中国産青磁	碗	ⅥＡ－０	13.4	－	－	直口口縁。胎土は灰白色。被熱のためか表面が劣化している。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
532	中国産青磁	碗	ⅥＡ－０	13.2	－	－	胎土は灰色。直口口縁で、口縁部下に二条の圏線。胴部の一部が露胎し素地が赤褐色となる。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　1+石ﾌﾞﾐ1内　2+石ﾌﾞﾐ1内　3
533	中国産青磁	碗	Ｖ－２	14.0	－	－	直口口縁。胎土は灰白色。釉はやや厚く、ガラス質で貫入あり。外面口縁部下に雷文帯。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3+石ﾌﾞﾐ1内　3貝
534	中国産青磁	碗	ⅥＡ－１	－	－	5.4	焼成が悪く胎土は赤褐色、釉はやや厚く、オリーブ色で色ムラあり。高台内面途中まで施釉。外面にヘラ描きの蓮弁文、見込みに印花文。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3+石ﾌﾞﾐ1内　3貝
535	中国産青磁	碗	ⅥＡ－１	11.1	6.9	4.3	直口口縁。胎土は灰白色。釉は灰オリーブ色で、ガラス質。外底面は蛇の目釉剥ぎ、焼き具が付着。外面に線刻連弁文、見込みに印花文。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
536	中国産青磁	碗	ⅥＢ－１	－	－	4.4	直口口縁。胎土は灰色。高台は中央部分がくぼむ。高台外面途中まで施釉。外面に弁先の無い線刻連弁文、見込みに印花文。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
537	中国産青磁	碗	ⅥＡ－１	－	－	4.8	胎土は灰白色。外底面は蛇の目釉剥ぎ。外面に線刻連弁文。内面に印花文。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
538	中国産青磁	碗	Ⅳ	－	－	5.4	胎土は灰白色。底径はやや小さい。高台内側まで施釉、外底面の一部に釉がかかる。畳付を釉剥ぎ。見込みに印花文。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
539	中国産青磁	碗	ⅥＡ－０	－	－	5.1	胎土は灰色、見込みの一部に割れがありその部分の胎土は赤褐色。外底面は蛇の目釉剥ぎ。見込みに幅の広い圏線。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
540	中国産青磁	碗	ⅥＡ	－	－	5.4	胎土は灰色。高台内面途中まで施釉。高台はやや小さい。見込みに印花文。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
541	中国産青磁	碗	ⅥＡ	－	－	5.6	胎土は灰白色。高台内途中まで施釉、外底面の一部に釉がかかる。畳付の一部を釉剥ぎ。高台はやや小さい。見込みに印花文と圏線。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
542	中国産青磁	皿	Ｖ腰折	14.0	3.9	6.3	腰折皿。胎土は灰色。高台内面途中より露胎。見込みに草花文。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
543	中国産青磁	皿	Ｖ腰折	11.5	3.2	6.4	外反口縁。胎土は灰白色。高台の抉りが浅く、外底面は露胎で一部に釉がかかる。	Ⅱ層＋Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅱ下+石ﾌﾞﾐ1内　3
544	中国産青磁	皿	Ⅵ腰折	－	－	4.5	腰折皿。胎土は灰黒色。見込みを釉剥ぎ、外底面は露胎。見込みに圏線。	Ⅰ層＋Ⅲ層	H23　首銭東　Ⅰ＋石ﾌﾞﾐ1内　3
545	中国産青磁	盤	口折口縁	－	－	－	焼成不良のためか釉はオリーブ褐色。胎土は灰色。内面口縁下に波状文、胴部に草花文。外面胴部に幅の広い蓮弁文。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3+石ﾌﾞﾐ1内　3貝
546	中国産青磁	盤	稜花口縁	20.2	4.4	18.0	胎土は灰白色。高台を持ち、外底面は蛇の目釉剥ぎ。外面胴部に蓮弁文。内面口縁下に口唇部に沿った波状文、胴部に草花文、見込みに渦文か。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
547	中国産青磁	盤	高台	－	－	9.0	焼成不良のため胎土は赤灰色、釉はオリーブ褐色。内面胴部に草花文、見込みに印花文。外面胴部に幅の広い蓮弁文。底部は高台を持ち、外底面蛇の目釉剥ぎ。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
548	中国産青磁	盤	肥厚口縁	23.6	5.5	8.0	胎土は灰色。オリーブ灰色釉。内面胴部に幅の広い連弁文。底部は高台を持ち、外底面時蛇の目釉剥ぎ。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
549	中国産青磁	皿	Ⅳ´	－	－	7.0	被熱のためか劣化している。胎土は赤褐色、釉は灰色。見込みは釉剥ぎ、外底面は露胎。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
550	中国産白磁	碗	福建Ｃ３	－	－	5.4	胎土は灰色で硬質。釉は緑灰色でガラス質、外面胴部下半より露胎。畳み付けは平坦で幅が広い。見込みに圏線内に細線の草花文。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3

第 69 表　遺物観察表（22）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
551	中国産白磁	皿	福建D	9.2	2.2	3.5	内湾口縁。胎土は黄白色で軟質。釉は乳白色で細かい貫入あり、全面施釉されるが底部の一部露胎。抉り高台。見込みに重ね焼痕５ヶ所。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
552	中国産白磁	皿	福建D	－	－	3.6	胎土は黄白色で軟質。釉は乳白色で全面施釉。抉り高台。見込みに重ね焼痕あり。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
553	中国産白磁	皿	景徳鎮	15.6	－	－	端反口縁。胎土は白色。釉は灰白色。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
554	中国産白磁	皿	景徳鎮	11.7	2.7	6.2	端反口縁。胎土は白色。釉は乳白色、畳付けを釉剥ぎ。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　2+石ﾌﾞﾐ1内　3
555	中国産白磁	小碗	景徳鎮	－	－	2.8	胎土は灰白色。釉は白色。外底面露胎、見込みは蛇目釉剥ぎ。外面胴部に縦方向の刻みが見られ、輪花形の可能性。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
556	中国産白磁	香炉	福建（その他）	－	－	－	胎土は乳白色。釉は青みがかり、ガラス質で貫入あり。底部に足あり。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
557	中国産白磁	器台	景徳鎮（その他）	－	－	－	胎土は灰白色。釉は青白色で失透明。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
558	中国産白磁	袋物	景徳鎮（その他）	－	－	－	胎土は灰白色。釉は青白色で失透明。外面に波状文か。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
559	中国産青花	碗	明Ⅰ－１	－	－	－	胎土灰白色だが空隙多い、釉・呉須良好。外面下半ラマ式蓮弁、見込み水草文か。高台細く、底部が薄い。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
560	中国産青花	皿	明Ⅱ－１	12.0	2.4	6.5	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面牡丹唐草文、見込み玉取獅子文か。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
561	中国産青花	皿	明Ⅱ－１	10.8	2.7	5.0	胎土灰白色、釉は失透、呉須鈍い。外面牡丹唐草文、見込み不明文様。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
562	中国産青花	皿	明Ⅱ－１	－	－	6.9	胎土白色、釉・呉須良好。外面牡丹唐草文か、見込み不明文様。底部からすると口径12㎝クラス。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
563	中国産青花	皿	明Ⅱ－１	－	－	7.6	胎土灰色、釉・呉須良好、外底無釉。外面牡丹唐草文、見込み玉取獅子文か。口径12㎝より大きいか。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
564	中国産青花	皿	明Ⅱ	－	－	8.8	大形、鍔皿の底部か。見込み花芯文か。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
565	中国産青花	瓶	明（景徳鎮）	－	－	－	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面唐草文。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
566	中国産青花	小碗（腰折）	明Ⅱ・Ⅲ	8.8	5.0	4.3	胎土灰白色、釉・呉須良好。腰折れ。外面横帯文、上段は草花文、下段は双頭文、見込みは蓮池文。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
567	中国産青花	小碗（腰折）	明Ⅱ・Ⅲ	9.0	－	－	胎土灰白色、釉・呉須良好。腰折れ。外面横帯文、上段は鳥花、下段は草文か。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
568	中国産褐釉陶器	壷	A群（壺５類）	16.0	－	－	緑褐釉、胎土灰黄色、白色粒微量。肩部に耐火土付着。	Ⅰ層＋Ⅲ層	H23　首銭東　A・B-10・11　Ⅰ+A・B-12　Ⅰ+石ﾌﾞﾐ1内　3
569	中国産褐釉陶器	壷	A群（壺５類）	16.8	－	－	暗褐釉、断面灰褐色、白色粒微量。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3+石ﾌﾞﾐ1内　3貝
570	中国産天目	碗	－	－	－	4.5	胎土灰色、黒釉。外底の抉り浅い。見込み渦状の凹み。円盤状製品の可能性。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
571	中国産天目	碗	－	－	－	4.6	胎土灰色、黒釉。外底の抉り浅い。円盤状製品の可能性。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
572	中国産天目	碗	－	－	－	－	胎土灰白色、黒褐釉。口縁端部く字状に屈曲。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
573	中国産褐釉陶器	鉢	－	29.7	－	－	内外面鈍黄褐釉、大きめの白色粒（５㎜以下）中量。貼り付けによる幅広の口縁。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
574	中国産褐釉陶器	鉢	－	29.6	－	－	外面浅黄、内面鈍黄褐、断面褐灰色。口縁は縄目状突帯で、内側に広く伸びる。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
575	タイ産褐釉	中型壷	－	12.0	－	－	胎土は灰赤色で堅緻。白色粒が混入。口唇部は外側折り返しか。両面に黒褐色の釉薬を施釉するが内面は剥落が著しい。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝

第 70 表　遺物観察表（24）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
576	タイ産褐釉	壺	Ⅰ類	19.4	－	－	胎土は灰赤色で堅緻。白色粒・黒色粒・橙色粒が混入。輪積み成形で口唇部は内側折り返し。黒褐色の釉薬を両面に施釉するが剥落が著しい。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
577	タイ産褐釉	中型壺	－	－	－	12.6	胎土は灰褐色で堅緻。白色粒・黒色粒が混入。輪積み成形。内面にオリーブ褐色の釉薬を施釉。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
578	ベトナム産白磁	碗	Ⅱ類	14.0	6.7	7.0	胎土は灰白色で緻密。外底を除く器面全体に白化粧を施し、透明釉を内底から高台外面まで施釉後、口唇部釉剥ぎ。内面に陽圏線３条＋波濤文、内底に花文。内底に目跡、畳付に目跡溶着痕。全体に石灰分が付着。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
579	ベトナム産白磁	碗	Ⅰ類	17.6	－	－	胎土は灰白色で緻密。両面に白化粧を施し、その上から透明釉を施釉。外面に陰圏線３条＋宝相華文。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
580	ベトナム産青花	碗	Ⅲ類	12.4	－	－	胎土は灰白色でやや緻密。両面に白化粧を施し、その上から透明釉を施釉。外面に圏線２条＋唐草文、内面に圏線１条＋瓔珞文か。呉須の発色はやや不良。全面に細かい貫入。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
581	ベトナム産色絵	碗	－	14.0	－	－	胎土は淡黄色でやや緻密。両面に白化粧を施し、その上から透明釉を施釉。外面に圏線３条＋花唐草文、内面に四方襷文＋圏線＋花唐草文。全体に細かい貫入。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
582	韓半島産青磁	壺	－	－	－	－	外面に白色の象嵌で菊花文。器面はやや磨滅しているが滑らか。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
583	沖縄産瓦質土器	欄干	－	－	－	－	上面黒色、他は黄灰・灰色。断面黄灰色。器面はミガキが施され、上面は特に平滑。貼り付けによる区画文。欄干の柱の受け部か。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
584	沖縄産瓦質土器	植木鉢	－	－	－	19.0	胎土は精良だが、空隙見られる。内外面明黄褐色、断面鈍黄橙色。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
585	土製品	球状土製品	－	2.8+	－	2.9+	素材：瓦質（灰色）。加工痕：全周研磨。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
586	石製品	石球	－	3.1	2.4	2.9	石材：琉球石灰岩。加工痕：全周に敲打痕。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
587	石製品	砥石	－	3.2	2.6	2.7	石材：軽石。加工痕：全面に古いパティナの磨面。使用痕：各面に有溝状砥面。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
588	石製品	砥石	短冊状砥石	3.6+	0.9	1.1+	石材：頁岩。加工痕：側面・下面に古いパティナの磨面。使用痕：表裏に線条痕。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
589	漆喰製品	不明	－	3.1+	3.1+	2.9	素材：漆喰。加工痕：背面を除く全周に光沢をなす磨面。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
590	ガラス製品	碁石	鏡餅形	1.4	1.6	1.3	素材：黒色ガラス。表面中央部に穿孔２か所。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
591	漆喰製品	坩堝？	－	－	－	－	全面に研磨による線条痕残。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
592	円盤状製品	－	１C、２	2.2	0.9	2.1	素材：中国産褐釉、胴部。加工：側面研磨、内外面より剥離。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
593	円盤状製品	－	2	2.6	0.9	2.5	素材：陶質土器。加工：側縁研磨。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
594	円盤状製品	－	１B	1.8	0.4	1.8	素材：中国産青磁（Ⅳ-1類）、碗口縁部。加工：外面側を剥離。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
595	円盤状製品	－	１A	3.5	0.6	3.2	素材：中国産褐釉、胴部。加工：内面を剥離。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
596	円盤状製品	－	１A	4.1	1.1	4.0	素材：タイ（メナムノイ）産褐釉、胴部。加工：内面側より剥離。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
597	円盤状製品	－	１C	2.9	0.7	2.6	素材：中国産染付、胴下半部。加工：内外面より剥離。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
598	円盤状製品	－	１A	1.6	0.6	1.4	素材：中国産青花、胴部。加工：内面側より剥離。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
599	円盤状製品	－	１B	3.0	0.9	2.9	素材：タイ（シーサッチャナライ）産褐釉、壺胴部。加工：外面側より剥離。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
600	るつぼ	－	蓋？	－	－	－	素材：漆喰。加工整形：円盤状に研磨整形。使用痕跡：赤色化（特に内面側激しい）、内面側に鉄滓、外面側に顕微観察により金・銅付着。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3

第 71 表　遺物観察表（25）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
601	るつぼ	－	口縁部	7.2	－	－	素材：漆喰。加工整形：口唇面取り一部凹み、外面胴部に外耳状突起。使用痕跡：内外面とも発泡痕のある釉状残滓（赤色）、内面には残滓付着。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3
602	ふいご	－	－	6.6	－	－	白色の石製か。内外面・割れ口の一部が赤色で、外面は透明緑釉が付着。内面は付着物少ない。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3
603	るつぼ	－	口縁部	－	－	－	素材：漆喰。加工整形：口唇面取り、口唇一部に凹み。使用痕跡：内面赤色化、外面発泡痕のある釉状残滓（黒色）、口唇凹部下に鉄滓付着。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3
604	るつぼ	－	口縁部	7.0	－	－	素材：漆喰。加工整形：口唇面取り。使用痕跡：内外面とも赤色化、外面発泡痕のある釉状残滓（緑色）・琉球石灰岩小礫付着。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3
605	金属製品（鉄）	甲冑小札	碁石頭伊予札	6.1	0.2	2.4	2列計14個の孔列。孔の大きさは2～3㎜程度	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3
606	金属製品（鉄）	甲冑小札	碁石頭伊予札	5.5	0.9	3.4	2列計14個の孔列。孔の大きさは3～4㎜。重量20.6ｇ。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3
607	金属製品（鉄）	甲冑小札	碁石頭伊予札	6.6	0.8	2.7	2列計14個の孔列。孔の大きさは3㎜程度。重量12.2ｇ。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3
608	金属製品（鉄）	甲冑小札	切付小札	5.3	0.5	2.3+	2列計8つの孔、片側は穴の並びが歪んでいる。重量9.5g	Ⅲ層	H23　首銭東　B－11　石積1内3　(ﾌﾛ5)
609	金属製品（鉄）	甲冑小札	碁石頭伊予札	3.2	0.2	2.7	札頭の部分。2列計8個の孔列で、孔は直線的に並ぶ。重量3.9ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3
610	金属製品（鉄）	甲冑小札	碁石頭伊予札	3.9	0.4	2.4	2列計8個の孔列で、孔は直線的に並び孔の大きさは2～3㎜。重量10.88ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3
611	金属製品（鉄）	甲冑小札	－	3.9	0.2	3.4	2列計5個の孔列で、孔の大きさは4㎜。重量7.5g	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3
612	金属製品（鉄）	甲冑小札	本札	6.7	0.3	2.5	2列計13個の孔列。孔の大きさは3～4㎜である。重量14.8ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3
613	金属製品（鉄）	刀子	－	9.2	0.9	1.4	幅が狭い長方形のため、刀子などの茎部の可能性が考えられる。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3貝
614	金属製品（鉄）	甲冑金具	鎧板	6.0	0.2	3.0	厚さはほぼ一定。縁が上方に摘みあげられており、鎧の何れかの板か。重量11.1ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3
615	金属製品（鉄）	不明	板状	8.8	0.4	4.3	縁辺が如意頭状に成形された鉄板で、径2㎜の孔列が見られる。重量26.8ｇ。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3
616	金属製品（鉄）	刀子	－	3.7	0.2	1.2	平面形はバチ形で刀子の基部か。重量1.9ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3
617	金属製品（鉄）	くさび	－	5.7	0.5	1.3	平面が縦長の三角形の板状製品。先端部が舌状になてっおり、くさびか？重量7.2ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3貝
618	金属製品（鉄）	不明	板状	6.0	0.4	5.0	長方形の板状製品。中央に直径3㎜の孔が2つあり、うち一つは針金らしきものが埋まっている。重量22.8ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3貝
619	金属製品（鉄）	不明	箱状？	6.5	0.6	4.8	両端が続く可能性があり、本来は箱状か。別の板状製品（小札か？）が付着しており、１枚の厚さは2～3㎜である。重量24.2ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3
620	金属製品（鉄）	甲冑金具	鎖	5.2	0.2	5.0	板の２辺に小孔があり鎖が四方に連結される喰合鎖である。重量17.4ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3
621	金属製品（鉄）	不明	板状	6.7	0.6	5.6	バチ形の板状製品。厚みは6㎜で均一。重量33.9ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3
622	金属製品（鉄）	不明	板状	14.9	0.5	4.5	長方形の板状製品で、一端は直角に折り曲がっている。重量74.5ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3
623	金属製品（鉄）	甲冑金具	鎖	5.0	1.5	4.8	網目状に鎖が連結された八重鎖。鎖が重層状に溶着。重量49.4ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3
624	金属製品（鉄）	鋲	－	3.0	0.6	2.8	平面形が傘形で、全体的に錆に覆われている。大きさは異なるが青銅製の鋲に形が類似する。重量9.1ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3
625	金属製品（鉄）	釣針	－	1.9	0.3	1.2	単式釣針。「J」の字形で、明瞭なかえしはないが端部がわずかに屈曲している。重量0.4ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾐ1内　3

第 72 表　遺物観察表（26）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
626	金属製品（鉄）	釘	角釘	5.6	0.6	1.1	頭部の側面形が逆L字状。錆により、別の釘の末端部分が付着している。重量7.0ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
627	金属製品（青銅）	刀装具	柄縁	3.4	0.6	2.3	青錆に覆われている。作りは表面は丁寧だが、裏面はやや粗い。重量21.0ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
628	金属製品（青銅）	冑金具	鍬形	2.3	0.1	2.2	鍬形の一部。重量2.1g	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
629	金属製品（青銅）	飾金具	環座	1.4	0.1	1.4	僅かに鍍金が見られる。周縁に放射状の刻みが施され、中央に一辺約5㎜程の略方形の孔。重量1.0g	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
630	金属製品（青銅）	冑金具	鍬形	5.2	0.1	1.8	先端が如意頭を呈しており、首里城跡で多く見られる鍬形の先端部分。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
631	金属製品（青銅）	甲冑金具	八双金具	2.8	0.1	1.5	端部が魚尾状。魚々子が重なる部分があるほど、密に打たれている。左側には蓮と思われる線刻が施されている。重量2.9g	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
632	金属製品（青銅）	甲冑金具	八双金具	3.8	0.1	1.6	完形品。端部が魚尾状。部分的に魚々子や線刻が施されている。裏面から穿孔。重量3.9ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
633	金属製品（青銅）	甲冑金具	覆輪	6.5+	0.1	0.5	表面のみ鍍金。S字状に湾曲し、断面は逆U字形。重量4.5ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
634	金属製品（青銅）	甲冑金具	覆輪	9.8	0.1	0.6	ごくわずかに鍍金。表面右側に削り痕。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
635	金属製品（青銅）	鋲	－	1.9	0.4	0.9	頭部がやや扁平な笠形で鍍金が施されている。脚部が二股に分かれる。重量2.0ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
636	金属製品（青銅）	鋲	－	1.8	0.2	0.9	頭部がやや扁平な笠形。脚部は二股に分かれる。重量0.8ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
637	金属製品（青銅）	鋲	－	0.9	0.3	0.4	頭部が楕円形状で平たい。脚部は二股に分かれる。重量0.4ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
638	金属製品（青銅）	鋲	－	4.8	0.2	0.5	笠形の頭部のみ鍍金。重量0.6ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
639	金属製品（青銅）	鋲	－	1.8	0.2	0.9	頭部のみ鍍金で、扁平に近い笠形。脚部は二股に分かれる。重量0.9	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
640	金属製品（青銅）	鋲	－	2.3	0.3	0.7	頭部が笠形で鍍金が施されている。脚部は判然としないが2股に分かれる可能性がある。重量1.3ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
641	金属製品（青銅）	不明	鉤状	2.7	0.3	0.4	鉤状を呈する棒状製品。重量1.9ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
642	金属製品（青銅）	不明	板状	3.8	0.2	1.8	両端が棒状に延びる板状製品。重量7.0ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
643	金属製品（青銅）	甲冑金具	総角付環座	2.3	0.3	1.0	頭部全体は袋状で２側面が貫通しているため環座の可能性がある。なお鍍金、上面に線刻が施される。脚部は二股に分かれるものと思われる。重量3.0ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
644	金属製品（青銅）	不明	棒状製品	4.3	0.1	0.3	細長く扁平な棒状製品。中央付近で折れ曲がる。重量1.0ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
645	金属製品（青銅）	不明	環	1.6	0.3	1.8	棒を螺旋状に巻いた環。厚みは一定。重量2.2g	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
646	金属製品（青銅）	不明	棒状	0.8	0.4	1.4	コの字形を呈した棒状製品。端面が広がっており、別個体に接続されていた可能性もあり。重量1.4ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
647	金属製品（青銅）	刀装具	柄頭	1.9	0.4	0.6	一方を空けた袋状になっており、短刀の柄頭か、表面鍍金。重量1.14ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
648	金属製品（青銅）	不明	板状	5.3	0.2	2.2	全体的に敲打痕が見られるが、不定形であるため何らかの未製品か。重量4.0ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
649	金属製品（青銅）	青銅滓	－	3.5	1.0	1.5	平面は不定形だが、断面は碗形になっており青銅滓である。重量16.85g。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
650	ガラス玉	玉	Ⅲ類	－	－	－	緑色２。２点がコイル状に連結。両方とも螺旋状の筋あり。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11　石積1内3貝（7ﾛ3）

第 73 表　遺物観察表（27）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
651	ガラス玉	玉	Ⅳ類	－	－	－	白２。うち完形１点。被熱により２点が溶着。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3
652	ガラス玉	玉	Ⅳ類	－	－	－	赤２。うち完形１点。被熱により２点が溶着。	Ⅲ層	H23　首銭東　B－11　石積1内3　（ﾌﾛ3）
653	銭貨	「嘉」定通寶または「紹」定通寶		2.33	0.08	0.62	表･背面とも扁平。摩耗により字がやや不鮮明。新書体。1.83ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3貝
654	銭貨	元豊通寶		2.37	0.10	0.55	表・背面とも扁平。摩耗により文字が不明瞭。3.34ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3貝
655	銭貨	無文銭		2.05	0.07	0.83	孔径の大きさが外縁径の1/2～1/3の間。重量0.9ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3
656	銭貨	「熙」寧元寶		2.35	0.16	0.57	被熱で溶着と変形。加えて、摩耗により文字が不明瞭。4.36ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3
657	塼	正方形	灰色系	24.5	4.0	－	重量2290g。約50％残存で、推定4.6kg。上面に「大（円圏あり）」字の刻印あり。上面はやや磨滅、下面は溝状の調整痕ややあり。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
658	塼	三角形	灰色系	推35.0	4.7	24.7	重量1600g。約70％残存で、推定2.3kg。上面に「大二（円圏あり）」字の刻印あり。上面は平滑、下面は溝状の調整痕あり。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3
659	ガラス玉	玉	Ⅲ類	－	－	－	緑３。コイル形をなす小玉３点が連結。	Ⅲ層	H23　首銭東　B－11　石積1内3貝（ﾌﾛ3）
660	漆	不明	－	－	－	－	塗膜のみ残存。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3
661	中国産青磁	碗	Ⅴ－２	15.0	－	－	直口口縁。胎土は白色。外面口縁部下に雷文とラマ式連弁文、内面胴部にヘラ描きの草花文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ下
662	中国産青磁	碗	Ⅴ－２	16.0	－	－	直口口縁。胎土は白色。釉はオリーブ灰色で細かい貫入あり。外面に雷文帯とヘラ描きの蓮弁文。内面にヘラ描きの草花文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
663	中国産青磁	碗	ⅥA－１	11.4	－	－	直口口縁。胎土は灰白色。釉は緑灰色で厚い。外面に幅の狭い線刻連弁文、内面に櫛目文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
664	中国産青磁	碗	ⅥB	－	－	4.8	胎土は灰色。高台外面途中まで施釉。外面に線刻連弁文、見込みに印花文	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下1
665	中国産青磁	碗	ⅥA－１	－	－	5.4	胎土は灰色。外底面は方形に釉剥ぎ。外面に線刻連弁文、内面に捻花文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下2
666	中国産青磁	碗	ⅥA－０	12.3	－	－	直口口縁。胎土は灰白色。釉はガラス質で貫入あり。外面口縁部下に圏線。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
667	中国産青磁	碗	Ⅳ	－	－	5.7	胎土は灰白色。高台内面下半まで施釉。見込みに印花文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
668	中国産青磁	碗	ⅥA－０	－	－	5.0	胎土は灰色。釉は薄く、色ムラあり。外底面を蛇の目釉剥ぎ。見込みに印花文と圏線。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下2
669	中国産青磁	皿	Ⅵ稜花	16.0	2.5	4.8	稜花皿。胎土は灰黒色。外底面露胎。口縁下に口唇部に沿った二条の圏線と草花文、見込みに印花文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
670	中国産青磁	皿	Ⅴ腰折	13.5	3.6	6.2	腰折皿。胎土は灰色。釉は被熱のためか劣化している。見込みに圏線と印花文。外底面は蛇の目釉剥ぎ。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下2
671	中国産青磁	皿	Ⅴ腰折	11.6	3.4	4.4	稜花皿。胎土は灰色。外底面蛇の目釉剥ぎ。内面口縁下に口唇部に沿った二条の圏線、その下に草花文、見込みに印花文。外面胴部に草花文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下2
672	中国産青磁	皿	Ⅵ稜花	11.8	2.6	4.6	稜花皿。胎土は灰黒色。外底面露胎。口縁下に口唇部に沿った二条の圏線と草花文、見込みに印花文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下2
673	中国産青磁	皿	Ⅵ稜花	－	－	－	稜花皿。胎土は灰黒色。口縁下に口唇部に沿った波状文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ下+ﾄﾚ1南　Ⅲ下
674	中国産青磁	皿	Ⅳ口折	11.8	－	－	口折皿。胎土は灰白色。外面にヘラ描きの蓮弁文。	Ⅲ層	H23　首銭東　B－11　Ⅲ下2(23)
675	中国産青磁	皿	Ⅳ口折	－	－	5.8	胎土は灰白色、外底面は露胎し赤褐色。畳付は釉剥ぎ。外面に無鎬蓮弁文、見込みに印花文か。おそらく口折皿。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下2

第 74 表　遺物観察表（28）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
676	中国産青磁	鉢	－	－	－	－	胎土は灰白色。釉は厚く、オリーブ灰色。外面に圏線と線刻連弁文か。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
677	中国産青磁	鉢	－	－	－	－	胎土は灰白色。釉は厚く緑灰色。口縁部は鍔縁状となる。外面胴部にヘラ描きの連弁文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
678	中国産青磁	盤	稜花口縁	22.0	4.4	8.8	胎土は灰色。外面胴部に幅の広い連弁文、３条の圏線。内面口縁下に波状文、胴部に草花文。底部は高台を持ち、外底面を釉剥ぎ。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下1+石ﾌﾞﾐ1内　3
679	中国産青磁	盤	稜花口縁	－	－	－	胎土は灰白色。内外面胴部に幅の広い蓮弁文。内面口縁下に金属片(銅？)が付着。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
680	中国産青磁	盤	稜花口縁	21.6	－	－	胎土は灰白色。被熱のためか釉は劣化している。内面口縁下に縁に沿った圏線、外面胴部に幅の広い連弁文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下1
681	中国産青磁	酒海壷蓋	－	14.8	－	－	胎土は灰白色。外面に厚く施釉され、内面は露胎。外面に連弁文。	Ⅰ層＋Ⅲ層	H23　首銭東　A・B-12・13　Ⅰ+ﾄﾚ1南　Ⅲ下2
682	中国産青磁	酒海壷	－	－	－	15.1	胎土は灰白色。釉はオリーブ灰色畳付と高台下半を釉剥ぎ、見込みは蛇の目釉剥ぎ。外面に蓮弁文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下2
683	中国産青磁	香炉	－	－	－	－	胎土は灰白色。外面にヘラ描きの草花文と波状文。	Ⅰ層＋Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1+ﾄﾚ1南　Ⅲ下
684	中国産青磁	盤	高台	－	－	12.6	胎土は外面部分は灰黒色となるが、内面側は赤色となる。釉は厚く貫入あり。見込みに印花文か。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下2
685	中国産青磁	酒海壷蓋	－	18.4	－	－	胎土は灰白色。外面に暗オリーブの釉が厚く施釉され、内面は露胎。外面胴部に草花文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下2
686	中国産青磁	酒海壷蓋	－	－	－	－	胎土は灰白色。内面は露胎し、印花文。外面に取っ手か。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下2
687	中国産白磁	皿	景徳鎮	11.2	3.0	5.8	端反口縁。胎土は白色。釉は灰白色、畳付けを釉剥ぎされ、砂がわずかに付着。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下+ﾄﾚ1南　Ⅲ上
688	中国産白磁	皿	景徳鎮	－	－	9.6	胎土は灰白色。釉は乳白色だが内面は被熱のためか劣化している。畳付を釉剥ぎ。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
689	中国産白磁	皿	福建Ｄ	－	－	3.8	胎土は灰白色で硬質。釉は灰色で高台付近より底部にかけて露胎、見込みを蛇の目釉剥ぎ。畳み付け幅が広い。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下2
690	中国産白磁	碗	福建Ｄ’	13.5	4.3～4.2	5.0	直口口縁。胎土は黄白色で軟質。釉はオリーブ灰色で内外胴下半より露胎。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ下
691	中国産白磁	碗	景徳鎮	－	－	－	端反口縁。胎土は白色。釉は乳白色で光沢有。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
692	中国産青花	碗	明Ⅰ－1	－	－	－	胎土灰白色、釉・呉須良好。内外面は唐草文、葉を塗りつぶす表現。胴部の形状から稜花の可能性。	Ⅰ層＋Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南+ﾄﾚ1南　Ⅲ下2
693	中国産青花	碗	明Ⅰ－1	－	－	5.7	胎土灰白色、釉は白色、呉須は圏線が薄く、文様が濃い。貫入多い。見込みは圏線２条、おそらく福字文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
694	中国産青花	碗	明Ⅱ－3	－	－	－	胎土白色、被熱のためか器面ざらつく。外面は文様不明。口縁70°程折れる。稜花形。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ下
695	中国産青花	碗	明Ⅱ－2	－	－	5.6	胎土灰白色、釉・呉須やや鈍く、貫入多い。外面渦巻き・草文か、内面上半雑な唐草文、見込み圏線２条、渦巻き状の花芯文か。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11　Ⅲ下(25)
696	中国産青花	碗	明Ⅱ	－	－	5.6	胎土白色、釉・呉須良好。見込み水草文か。内底凹む。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
697	中国産青花	皿	明Ⅱ－1	9.2	－	－	胎土灰白色、釉やや厚く、呉須良好。外面牡丹唐草文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
698	中国産青花	皿	明Ⅱ－1	－	－	4.4	胎土白色、釉・呉須良好。外面牡丹唐草文か、見込み十字文。底部からすると口径９㎝クラス。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ下
699	中国産青花	皿	明Ⅰ	－	－	9.4	大形の端反皿で見込みが平坦。胎土白色、釉・呉須良好。外面牡丹唐草文、見込不明文様。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
700	中国産青花	皿	明Ⅱ－1	11.7	2.7	6.6	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面牡丹唐草文、見込み玉取獅子文か。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ下

第 75 表　遺物観察表（29）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
701	中国産青花	皿	明 Ⅱ－１	15.1	－	－	胎土灰白色やや軟質、釉灰色。外面無文、見込み文様不明。口縁端部内側釉剥ぎ、鉄錆塗布か。	Ⅰ＋Ⅲ層	H23首銭東Ａ・Ｂ-10Ⅰ+石ﾌﾞﾐ1内2+ﾄﾚ1南Ⅲ下1
702	中国産青花	鉢	明 （景徳鎮）	－	－	推8.0	胎土灰白色、釉・呉須良好。外面下半雷文横帯。稜花形。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
703	中国産青花	瓶	元様式	4.7	－	－	胎土灰白色、釉・呉須良好。器面被熱のためかざらつく。外面焦葉文。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下2
704	中国産 翡翠釉	皿	－	－	－	－	胎土は白色で精良。釉は部分的に禿る。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下1
705	中国産 法花	鉢	－	－	－	－	胎土は白色で硬質精良だがやや気泡多い。外面は貼り付け文を施し、黄、緑釉。内面は緑釉。釉は透明感あり。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下2
706	中国産 褐釉陶器	小壷	－	7.0	－	－	薄胎陶器。無頚壷で口縁丸く仕上げる。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
707	中国産天目	碗	－	－	－	3.9	胎土灰白色、黒褐釉。外底の抉り部分的にいびつ。高台際に同種天目の別個体片が溶着。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下2(4)
708	中国産 褐釉陶器	壷	Ｂ群	－	－	9.6	外面上方黒褐釉、他は無釉、大きめの白色粒（５㎜以下）中量。ロクロ目顕著。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下2
709	中国産 褐釉陶器	壷	Ａ群 （壺５類）	－	－	13.4	内外面暗褐釉、胎土褐灰色、白色粒多量。外底に耐火土付着。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下2+ﾄﾚ1南Ⅲ下2（4）
710	タイ産褐釉	壺	Ⅰ類	17.6	－	－	胎土は灰赤色で堅緻。白色粒が混入。輪積み成形で口唇部は外側折り返し。黒褐色の釉薬を内面～口唇部まで施釉。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ下
711	タイ産土器	蓋	－	－	－	－	胎土は橙色で緻密。黒色粒・褐色粒が混入。外面に回転調整痕及びケズリ調整痕が残る。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下1
712	ベトナム産 白磁	碗	Ⅱ類	－	－	－	胎土は灰白色で緻密。器面全体に白化粧を施し、その上から透明釉を施釉後、口唇部を釉剥ぎ。内面に陽圏線２条＋波濤文か。	Ⅲ層＋Ⅰ´層	H23　首銭東　ﾄﾚ1Ⅲ下1+石ﾌﾞﾐ2・3ｳﾗｺﾞﾒ
713	ベトナム産 色絵	碗	－	15.3	－	－	胎土は淡黄色でやや緻密。両面に白化粧を施し、その上から透明釉を施釉。外面に圏線３条＋花唐草文、内面に四方襷文＋圏線＋花唐草文。全体に細かい貫入。上絵付けの剥落は著しい。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下1
714	産地不明陶器	蓋	－	20.4	－	－	胎土軟質、浅黄橙色。器厚1.4cm。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
715	石製品	石盤	－	3.1+	0.4+	3.0+	石材：粘板岩。加工痕：側面に研磨痕。使用痕：正面に線条痕。背面は原礫面残。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ下
716	骨製品	骨ヘラ？	－	7.0	0.6	0.7	素材：鹿角。加工痕：表面に粗い擦痕、背面に弱い磨面、下端背面に入念な磨面。使用痕：表面下端に擦痕、衝撃剥離痕。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1Ⅲ下1
717	円盤状製品	－	１Ｃ	1.8	1.6	0.2	素材：中国産褐釉、胴部。加工：内外面より剥離。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下1
718	円盤状製品	－	１Ｃ	3.1	0.8	3.1	素材：中国産褐釉、壺胴部。加工：内外面より剥離。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下1
719	円盤状製品	－	１Ｂ・２	2.5	0.9	2.1	素材：明朝系瓦（灰色）。加工：側面研磨、背面より剥離。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下2
720	円盤状製品	－	１Ａ	4.9	1.3	4.5	素材：中国産褐釉、壺底部。加工：内面より剥離。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下1
721	金属製品 （鉄）	甲冑小札	本札	6.7	0.2	2.0	2列計13個の孔列。孔の大きさは下端部は2～3㎜、上端部は3～4㎜。重量10.5ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下2
722	金属製品 （鉄）	甲冑小札	本札	4.3	0.3	2.4	2列計10個の孔列で、孔の大きさは3㎜程度。重量8.9ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下1
723	金属製品 （鉄）	甲冑小札	本札	5.4	0.1	2.2	札頭欠損。2列計10個の孔列。重量6.8ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　Ｂ-11　Ⅲ下2(32)
724	金属製品 （鉄）	甲冑小札	三目札	6.7	0.2	3.3	孔列が3列計20個あり、孔の大きさ3～4㎜。 重量24.5ｇ。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下1
725	金属製品 （鉄）	不明	板状	5.4	0.4	3.6	1列4個の孔列が見られる板状製品。重量12.6ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下1

第 76 表　遺物観察表（30）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
726	金属製品（鉄）	不明	板状	6.3	0.2	1.8	側面形が縦長のＳ字形で、棒状の別個体が付着している。重量9.5ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下1
727	金属製品（鉄）	不明	板状	6.5	0.4	4.4	厚みのある板状製品。重量34.5ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
728	金属製品（鉄）	不明	板状	5.3	0.5	4.7	厚みのある板状製品。。重量35.5g	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下1
729	金属製品（青銅）	甲冑金具	覆輪	4.8	0.1	0.5	表面のみ鍍金。一端に径1㎜の小孔あり。重量3.0ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下1
730	金属製品（青銅）	飾金具	不明	2.0	0.5	0.5	部分的に剥げるが全面鍍金。フック状を呈する。重量2.9ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下1
731	金属製品（青銅）	不明	板状	1.7	0.1	1.5	平面形は角の取れた駒形をしており、両端が中央に向けて緩やかに湾曲している。重量1.2ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下1
732	金属製品（青銅）	青銅滓	－	4.1	0.9	3.1	中央部が窪んでおり碗形滓と考えられる。重量25ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
733	銭貨	「祥」「符」元寶		2.48	0.11	0.56	溶着や摩耗で文字がやや不鮮明	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1Ⅲ下2
734	銭貨	政「和」「通」寶		－	0.14	0.60	篆書体。1.86ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
735	銭貨	「」「」「」寶		－	0.13	－	付着物と摩耗により文字が不鮮明。1.59ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
736	銭貨	「嘉」祐通寶		2.48	0.13	0.65	付着物や摩耗によって文字がやや不明瞭。新書体。3.60ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
737	銭貨	輪銭		－	0.10	－	内外面に付着物があり、元来は身の部分が小さかったと思われる。0.1ｇ	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
738	塼	正方形	灰色系	－	4.3	－	重量1750g。上面に分銅形の刻印あり。上面は非常に平滑で磨滅も少なく、下面も凹凸は少ない。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
739	塼	噛み合わせ	赤色系	－	3.5	20.1	重量3210g。中央部に突起があるがかえりがない。突起部厚7.5、9.3㎝。全体的に丁寧なつくり。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
740	ガラス玉	玉	Ⅳ類	－	－	－	水色10以上。被熱により溶着。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ下
741	骨製品	不明	－	3.7+	0.5	0.5	素材：鹿角？。加工痕：全面研磨。上部欠損。茎部か。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅲ下
742	骨製品	不明	－	2.0	1.0	1.3+	素材：鹿角？。加工痕：上下面に削痕。下半欠損。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
743	骨製品	未成品？	－	3.6	1.6	2.6	素材：ジュゴン。加工痕：上面に削痕。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下2
744	漆喰製品	漆喰	－	6.9	6.0	3.7	加工：僧帽状に面取整形、下面中央に穿孔。使用痕：下面のみ風化による変色弱、接着面か。灰色、褐色の瓦小片混じる。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
745	漆喰製品	漆喰	－	6.1	5.8	4.3	加工：僧帽状に面取整形、下面より穿孔。灰色、褐色の瓦小片混じる。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下2
746	玉器	製品残滓	－	9.0+	1.9+	5.4+	石材：翡翠。加工痕：正面・背面に摺切痕、両側・下面に磨面。正面は原礫面。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下
747	人骨(歯)	－	－	－	－	－	永久歯、下顎左第２大臼歯。咬耗より17～25歳程度と推定。Ｃ３段階の齲歯、歯槽骨が退縮する病理の可能性。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅲ下1
748	中国産青磁	碗	Ⅴ－２	14.0	－	－	直口口縁。胎土は灰白色。外面口縁部下に雷文、その下に連弁文。	Ⅲ´層	H23　首銭東　ﾄﾚ2下
749	中国産青磁	碗	Ⅴ－２	－	－	－	直口口縁。胎土は灰色。外面口縁部下に雷文と草花文か。	Ⅲ´層	H23　首銭東　ﾄﾚ2
750	中国産青磁	碗	Ⅴ－０	12.0	7.3	5.0	直口口縁。焼成悪く胎土は灰褐色、釉は暗オリーブ色。口縁部下に圏線。外底面は蛇の目釉剥ぎ。	Ⅰ＋Ⅲ´層	H23　首銭東+H25首銭東　Z-12　ﾄﾚ1+A-12　Ⅱ層

第 77 表　遺物観察表（31）

No.	種類	器形	分類	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
751	中国産青磁	盤	稜花口縁	35.4	－	－	胎土は灰白色。内面口縁下に波状文、胴部に幅の広い蓮弁文。外面に蓮弁文	Ⅲ´層	H23　首銭東　ﾄﾚ2
752	中国産青花	碗	明Ⅱ－３	－	－	－	胎土白色、釉・呉須良好。外面人物文、内面上位四方襷文。口縁緩やかに外反。	Ⅲ´層	H25　首銭東　A-12　Ⅲ層
753	中国産青花	碗	明Ⅰ－１	－	－	推4.6	胎土灰白色、釉・呉須良好、やや貫入あり。外面は下部唐草文に花芯文。内面上部横帯、見込みは圏線２条、不明文様。	Ⅲ´層	H23　首銭東　ﾄﾚ2
754	中国産青花	碗	明Ⅰ－１	16.2	7.8	6.7	胎土白色、釉は青白色、呉須は青色。内面は雷文、見込みに梅樹文。外面は亀？文と、線彫りによる波濤文か。	Ⅲ´層	H25　首銭東　A-12　Ⅱ層
755	中国産褐釉陶器	壷	Ｂ群	－	－	11.3	白釉、胎土赤色。外面胴部下半、内面無釉。	Ⅰ＋Ⅲ´層	H25　首銭東　Z-12 ﾄﾚ1+A-12　Ⅰ層+A-12　Ⅱ層
756	中国産褐釉陶器	壷	Ｂ群	－	－	－	鈍黄褐釉、胎土赤灰色、白色粒微量。釉掻き取り、不明字を描く。	Ⅰ＋Ⅲ´層	H25　首銭東　Z-12 ﾄﾚ1+A-12　Ⅱ層
757	沖縄産施釉陶器	碗	Ｂ類	－	－	7.0	白釉、見込み蛇の目釉剥ぎ、アルミナ塗布、重ね焼き痕。胎土浅黄色。焼成前穿孔高台３（推定４）、見込みに１か所。	Ⅲ´層	H23　首銭東　ﾄﾚ2
758	中国産褐釉陶器	壷	Ｂ群	9.5	－	－	白釉、胎土赤色。内面頚部以下無釉。	Ⅰ＋Ⅲ´層	H25　首銭東　Z-12 ﾄﾚ1+A-12　Ⅱ層
759	中国産褐釉陶器	壷	Ａ群（壺５類）	13.4	－	－	緑褐釉、胎土灰色、白・黒色粒微量。	Ⅲ´層	H23　首銭東　ﾄﾚ2+ﾄﾚ2下
760	中国産褐釉陶器	壷	Ａ群（壺５類）	－	－	14.8	鈍褐釉、胎土赤灰色、白色粒微量。底部縁辺剥離部あり。	Ⅰ＋Ⅲ´層	H25　首銭東　Z-12 ﾄﾚ1+A-12　Ⅱ層
761	タイ産褐釉	壷	Ⅰ類	－	－	24.6	胎土は灰赤色で堅緻。白色粒・黒色粒が混入。輪積み成形。外面に鈍い黄褐色の釉薬？が一部付着。	Ⅲ´層	H23　首銭東　ﾄﾚ2
762	中国産青磁	碗	Ⅳ	－	－	6.2	胎土は灰色。外底面は露胎。底部は厚く、高台端部を釉剥ぎ。見込みに圏線。	Ⅳ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南　Ⅳ(16)
852	明朝系瓦	軒丸瓦	赤色系	－	2.5	－	石井Ｃ－２－Ⅱ（内間御殿Ａ）、上原側視１型（内間ＩＢｂ01）。瓦当が天地逆に取り付けられている。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東　Ⅱ中

8．人骨

歯１点がトレンチ１南Ⅲ下層より出土している（**図版 67 － 747**）。歯は永久歯で、下顎左第２大臼歯である。咬耗は舌側が弱いにもかかわらず、頬側から遠位にかけて特に顕著な磨耗が認められることから、下顎左の第３大臼歯は無かった可能性が考えられる。したがって年齢は Brothwell（1981）の基準に従って 17 ～ 25 歳程度と推定される。生活痕として、遠心歯頚部にＣ３段階の齲歯が認められる。また、歯根部にはほぼ全面にセメント質の増殖が認められ、特に、遠位側歯根部は瘤状の突起を有する。生前、歯槽骨が退縮するような病理を患っていた可能性が示唆される。

この歯は 15 世紀後半～ 16 世紀前半の包含層であるⅢ下層より出土した。多くの瓦・セン・礫、陶磁器・獣魚骨などとも共伴することから、生前に脱落し共に廃棄された可能性がある。首里城跡の調査では、御内原北地区の 17 世紀前半とされる廃棄土坑であるシーリ（方言）遺構でも獣魚骨や小型貝類・糞石などと遊離歯が出土している。つまり、首里城では廃棄場所に人の歯も共に廃棄されることがあったものと思われる。

引用文献

Brothwell DR (1981) Digging up Bones. Cornell University Press.

９．貝製品・含真珠層貝殻破片（第 67 ～ 69 図、図版 71 ～ 77）

今回の調査では、通例の貝製品の他に、真珠層を含んでいるヤコウガイ等の貝殻破片が大量に出土したことが特徴である。これらは螺鈿などの真珠層を取るために生じたと考えており、含真珠層貝殻破片として仮称したい。

１）含真珠層貝殻破片・製品

含真珠層貝殻破片とは、今回の調査においては、ヤコウガイ・チョウセンサザエ・サラサバテイラ・ギンダカハマの真珠層をもつものである。これらの破片のうち、1㎝前後まで細かくなったものが多く出土しており、今回の調査では後述するように加工小片と仮称した。

加工小片　含真珠層貝殻破片は、特に石積み１内３層及び貝だまりで出土しており、その中でも１㎝前後となった小片が非常に多い。これらは、長方形・円形などの形を呈したものが複数見られ、その縁辺が直線的となっていること、縁辺に線状痕が見られることから、その多くは人工的に産出されたものと考えられる。さらに１㎝未満のもの多いとので、何らかの製品を製作する場合に生じた残滓である可能性が考えられる。ただ、円・長方形などを呈しているものがあることから、螺鈿細工の部品として考えることもできるが、今後は具体的な製品・使用例の検討が必要であろう。なお、この加工小片は第４章第２・３節での破片数には含まれないものである。

加工小片の分類　ヤコウガイでは長さ約４㎝、チョウセンサザエ・サラサバテイラ・ギンダカハマでは長さ約２㎝以下のものを断面構造・形態・サイズより次のように分類を行った。なお、殻頂を有するものは、先述のサイズ以下でも加工小片から除外している。

断面構造　断面構造は、和田浩爾・赤松蔚・奥谷喬司（1996）、木下尚子（2009）の用語を参考にして、外側から**表皮**（殻皮）、不透明な硬質の部分である**稜柱層**、最も内側である非常にもろく層状に剥離する**真珠層**という３層構造で捉えることとした。その残存状況から次の３つに、さらに形態・サイズについても分類した。

①表皮が残るもの　②表皮がなく稜柱層が残るもの　③真珠層のみが残るもの

形　　態　　**ａ長方形　ｂ方形　ｃ円形　ｄその他**

サ イ ズ　　**小**＜ 1.5㎝未満＞　**大**＜ 1.6㎝以上＞

なお、加工小片の抽出については可能な限り行い、5,272 点検出した（**第 79 表**）。しかし、時間の制約等から貝加工小片を含んでいる可能性がある未分類の貝小片が残され、それについては重量を測った（**第 80 表**）。図を掲載したものについては、厚さの最大・最小をデジタルノギスにより計測し、㎝以下小数点第２位までを表記した（**第 84 ～ 87 表**）。

破片　ここで言う破片とは、加工小片より大きい完形ではない貝殻破片のことで、第４章第２節で殻頂が残存している完形ではないものも含めている。後述するように、これらの多くもおそらく割り取ったものと考えられる。

製品　この破片のうち、円盤状製品や貝匙などと考えられるものは、製品として取り扱っている。

以下、貝種ごとに検討していく。

ヤコウガイ（763・765 ～ 794・806 ～ 825）

完形（806）　本調査区では、ヤコウガイ貝殻の完形は３点しか出土しておらず、破片や加工小片が最も多く出土している石積み１内３層及び貝だまりからは出土していない。このヤコウガイには、約１㎝前後の円形の小孔が開けられているものが見られる。

蓋と貝殻の関係　ヤコウガイ蓋は全体で完形303点、頂部残存244点を合わせて最少個体数547点である。一方、貝殻は完形３点、殻頂残存 832 点を合わせて最少個体数 834 点である。つまり、蓋よりも貝殻が多く出土しており、これまでの首里城跡の調査区とは異なる傾向である。また、最も多く出土している石積み１内３層貝だまりで見ると、最少小個体数で蓋（完形と核頂）42 点、貝殻（殻頂）428 点と圧倒的に後者が多い（**第 78 表**）。

なお、本項における蓋と貝殻の最小個体数が、第４章第２・３節とは異なっているので、説明しておく。蓋は、本節と前同第３節では、頂部が残っていても縁辺部に欠けがあれば完形とは見なしていない。一方、前同第２節ではこれも完形としているが、一方頂部が残っていても２／３以下のものは最低個体数に含めていない。一方､貝殻は、本項と前同第２節では殻頂と完形の合計であるが、前同第３節では破片しか出土していないグリッドや層序では最低個体数は１点としている。本来ならば、どちらかに統一すべきであったが、この状況について認識することが遅くなったため、このような不一致を生んでしまった。

第 78 表　含真珠層貝殻破片集計表

層序		残存部位	ギンタカハマ	サラサバテイラ	ヤコウガイ	チョウセンサザエ	ヤコウガイの蓋	チョウセンサザエの蓋
Ⅰ層		完形				28	137	26
		殻(核)頂	1	53	108	56	89	
		破片	2	54	332	26	27	
Ⅰ´層		完形				1	1	
		殻(核)頂		2	2	3		
		破片			2			
Ⅱ層		完形		1		8	36	30
		殻(核)頂	1	1	13	17	52	
		破片		2	45	10	18	
Ⅲ層	Ⅲ層上	完形				2	9	111
		殻(核)頂		1	2	2	2	2
		破片					6	3
	石積み1内1層	完形				2	11	4
		殻(核)頂		19	23	5	11	
		破片	1	10	19			
	石積み1内2層	完形				1	33	5
		殻(核)頂		40	50	10	14	
		破片		28	134	2	2	
	石積み1内3層	完形				9	21	28
		殻(核)頂	2	94	143	74	24	
		破片		206	378	76	36	
	石積み1内3層貝だまり	完形	4	1		15	26	111
		殻(核)頂		126	428	271	16	2
		破片	11	1,022	3,191	1,695	62	3
	Ⅲ層下	完形		2	3	10	18	9
		殻(核)頂		10	60	14	28	
		破片		12	63	3	9	
Ⅲ´層		完形				1	11	
		殻(核)頂		2	2	1	8	
		破片		3	3		6	
Ⅳ層		完形						
		殻(核)頂			1			
		破片			2			
合計		完形	4	4	3	77	303	324
		殻(核)頂	4	348	832	453	244	4
		破片	14	1,337	4,169	1,812	166	6
中計			22	1,689	5,004	2,342	713	334
総計			9,057				1,047	

※殻頂は殻、核頂は蓋の各々の頂部を指す。

破片（807 ～ 825） 殻頂を有する破片が 832 点、体層片が 3,207 点、軸唇片が 692 点となる。これらの破片は第４章第１節で破片の形態・大きさなどについて分析を行っている。殻頂を有する破片の多くは、体層が大きく欠損していることや（807・808・810 ～ 812）、体層片は一辺が縦位 20 ～ 60㎝、横位 40 ～ 80㎝に集中する傾向が指摘されている。体層片は、表皮が残存しているもの（814・815・817 ～ 819）が 2,632 点、真珠層が露出しているもの（820 ～ 825）が 835 点を数える。軸唇を有する破片（809・813・816）は、体層部分はほとんど残っておらず、また真珠層が露出したものも見られない（**第 81 表**）。

那覇市渡地村跡でもヤコウガイ貝殻の破片が多く出土しており、若干の比較検討を行う（那覇市 2012）。非常に細かな分類が行われているが、比較の為に簡略化すると、完形（ＩＡ・Ｂ類）15、殻頂と体層中央部を残すもの（ＩＣ～Ｊ類）46、体層は大きく欠損し螺塔を残すもの（Ⅱ類、Ⅲ類、Ⅴ類）141、螺塔がなく軸唇か臍盤を残すもの（Ⅳ類）18、体層片 396、合計 616 点である。体層片も細分されており、製品の可能性があるとし長さ５㎝以上と見られるもの（破片Ａ）106、薄片とされる真珠層が露出したものも含む長さ５㎝以下と見られるもの（破片Ｂ）64、螺肋を残す幅 2㎝以下と見られる細片（破片Ｃ）239 点となっている。

このように、体層が大きく欠損した破片と、真珠層が露出した体層片があることは、今回と類似していると思われる。ただ、この結果だけでは、体層を利用する製品の残滓であることは言えても、螺鈿だけでなく貝匙などの製作も否定しきれない。しかしながら、殻頂以外の部分をほとんど割り取っていることから、貝匙製作だけとも考えにくい。

加工小片（763・765 ～ 786） ヤコウガイの加工小片は、4,477 点、2877.85 ｇを抽出した（**第 79・80 表**）。図に掲載したものを図ったところ、厚さは 0.02 ～ 0.43㎝の間であったが、破片全体が 0.1㎝以下のものは多くはなかった。

①類（773 ～ 782） 形状では長方形（ａ）･方形（ｂ）が多く､サイズは 1㎝未満（小）が多い。このａ･ｂには、真珠層がほとんど残っていないものもあり（776 ～ 780）､真珠層を徹底的に剥ぎ取ったものと思われる。また、断面が台形状となり真珠層が層状に剥離しているもの（774）などは、真珠層を剥ぎ取っていく過程で残されたものであろう。その他、円形の破片を取るための穿孔した痕と思われるもの（773）や、表皮が部分的に残って

第 79 表　含真珠層貝殻加工小片集計表

貝種	断面構造	形態	サイズ	Ⅰ層 H23東 表土・盛土	Ⅰ層 H25 表土・盛土	Ⅱ層 H23東 Ⅱ下	Ⅲ層 H23東 石積1内1	石積1内2 (フロ3)	石積1内2 (フロ5)	石積1内3	石積1内3 (フロ3)	石積1内3 (フロ5)	石積1内3貝	石積1内3貝 (フロ3)	石積1内3貝 (フロ5)	Ⅲ下	小計	総計
ヤコウガイ	1	a	大									1			3		**4**	**1361**
			小							11	6	7	10	90	13		**137**	
		b	小							32	12		12	130	9		**195**	
		c	小											2	2		**4**	
		d	大					1	7		24	22	19	24	16		**113**	
			小					23	7	10	67	14	178	585	24		**908**	
	2	a	小		1			1			4		13	71	16		**106**	**888**
		b	小										6	25	8		**39**	
		d	大										8	5	22		**35**	
			小		7					19	4	1	54	548	75		**708**	
	3	a	小											27			**27**	**2228**
		b	大												1		**1**	
			小											12	1		**13**	
		c	大												2		**2**	
			小							11	9		22	146	14		**202**	
		d	大		2	1		1	2		5	5			59		**75**	
			小	2				56	11	71	248	20	262	1079	159		**1908**	
ヤコウガイ 集計				**2**	**10**	**1**		**82**	**27**	**154**	**379**	**70**	**584**	**2744**	**424**		**4477**	**4477**
チョウセンサザエ	1	a	小											20			**20**	**321**
		b	小											2			**2**	
		d	大							1				8			**9**	
			小										9	277	4		**290**	
	2	d	小											16			**16**	**16**
	3	c	大							1							**1**	**318**
			小											3	2		**5**	
		d	大												4		**4**	
			小		11					2			9	250	36		**308**	
チョウセンサザエ 集計					**11**					**4**			**18**	**576**	**46**		**655**	**655**
サラサバテイラ	1	a	大											1			**1**	**117**
			小											1			**1**	
		d	大	1			1		1		3	4	3	1	8		**22**	
			小								2			79	11	1	**93**	
	2	d	小												2		**2**	**2**
	3	d	大											1			**1**	**18**
			小											17			**17**	
サラサバテイラ 集計				**1**			**1**		**1**		**5**	**4**	**3**	**100**	**21**	**1**	**137**	**137**
ギンタカハマ	1	a	大									1					**1**	**2**
		c	小											1			**1**	
	3	c	小												1		**1**	**1**
ギンタカハマ 集計												**1**		**1**	**1**		**3**	**3**
小計				**3**	**21**	**1**	**1**	**82**	**28**	**158**	**384**	**75**	**605**	**3421**	**492**	**1**		**5272**
総計				**24**		**1**					**5247**							

第 80 表　含真珠層貝殻加工小片重量表

重量(g)	Ⅰ層 H23東	Ⅰ層 H25	Ⅱ層 H23東		Ⅲ層 H23東												Ⅲ´層 H25	総計
貝種	表土・盛土		Ⅱ中	Ⅱ下	石積1内1	石積1内2	石積1内2 (フロ3)	石積1内2 (フロ5)	石積1内3	石積1内3 (フロ3)	石積1内3 (フロ5)	石積1内3貝	石積1内3貝 (フロ3)	石積1内3貝 (フロ5)	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅱ・Ⅲ	
ヤコウガイ	0.63	4.1		1			5.12	12.33	13.28	41.18	51.26	57.78	197.83	2493.34				2877.85
チョウセンサザエ	0	0.57							3.76			2.65	44.35	8.92				60.25
サラサバテイラ	1.05				2.33			1.4		5.38	17.83	1.41	15.76	12.48	0.35			57.99
ギンタカハマ											2.2		0.02	0.03				2.25
小片含む未分類のもの	39.11		3.62	30.3	18.5	13.61			131.19			1252.68	1663.36	6445.93	3.29	7.81	12.78	9622.18
小計	**40.79**	**4.67**	**3.62**	**31.3**	**20.83**	**13.61**	**5.12**	**13.73**	**148.23**	**46.56**	**71.29**	**1314.52**	**1921.32**	**8960.7**	**3.64**	**7.81**	**12.78**	
総計	**45.46**		**34.92**		**12527.36**												**12.78**	**12620.52**

第 81 表　ヤコウガイ破片集計表

層序 / 分類		Ⅰ層	Ⅰ´層	Ⅱ層	Ⅲ層 石積1内 1	2	3	貝	Ⅲ上	Ⅲ下	Ⅲ´層	Ⅳ層	総計
体層片	表皮残存	175	2	34	12	70	245	2041		50	3		2632
	真珠層露出	61		2		25	32	712		3			835
	製品	1		2			5			2			10
軸唇片		95		7	7	39	96	438		8		2	692
破片合計		332	2	45	19	134	378	3191		63	3	2	4169

いるもの（772）なども見られる。

②類（783 ～ 786）　形状では長方形（a）・方形（b）が多く、サイズは 1㎝未満（小）が多い。

③類（763・765 ～ 772）　形状では円形（c）が多い。また、しずく形(770･771)に整形しているものは本類のみと思われる。小孔が見られるものがあり、1㎜以下のもの（766・767）は人工的なものかどうか不明だが、5mm 前後のもの（768・769）は断面が台形状を呈しているので穿孔した痕跡と思われる。

円盤状製品（787 ～ 789）　縁辺部及び表皮を研磨し丸く成形したものである。（787）は、表皮側に径・深さ 1 ㎜の貫通していない小穴が見られ、穿孔する予定があったものかもしれない。

未製品（790 ～ 794）　体層片のうち、縁辺部に研磨があり、何らかの未製品ではないかと考えた。ただ、多くは螺肋が残り、製作途中の残滓の可能性もある。

チョウセンサザエ（797 ～ 799、832 ～ 837）

完形（832）　全体で 77 点出土しており、ヤコウガイほどではないが殻頂片 453 点と殻頂がない破片 1812 点からみると圧倒的に少ない。なお、小穴を有するものが 16 点ある（**第 78 表**）。

蓋と貝殻の関係　蓋は完形と頂部を合わせた最低個体数 324 点で、貝殻の最低個体数 530 点に比べると３：５の比率である。石積み１内３層でも概ね同様で、ヤコウガイほど極端に貝殻が多いわけではないと言える。

破片（833 ～ 837）　残存度より以下のように分類した（**第 82 表**）。

Ⅰ類（832）完形　　Ⅱ類（833）殻頂 1/2 以上　　Ⅲ類（835）殻頂 1/4 以上 1/2 以下

Ⅳ類（834）殻頂 1/4 以下　　Ⅴ類（836・837）殻頂がない破片

殻頂を残すものは、圧倒的にⅣ類が多く、螺塔部分と体層を切り離すことが多かったと言える。食糧としての利用のみであれば、体層の下半分を割取れば十分であるので、やはり体層を別の用途で利用することが目的であったと思われる。ただ、体層破片は全破片の 78％に昇っており、体層も全てを利用するというわけではなかったようである。場所も時代も異なるが、宮古島市アラフ貝塚ではチョウセンサザエ殻が多く出土しているが、今回最も多かったⅣ類とした殻頂付近しか残さないものは少なく、その意図が異なるものと思われる（アラフ遺跡発掘調査団 2003）。

加工小片（797 ～ 799）　チョウセンサザエの加工小片は 655 点、60.25 ｇ抽出した（**第 79・80 表**）。厚さは 0.04 ～ 0.27㎝と、計測した数も少ないが、ヤコウガイより総じて薄いものが多かった。

①類（798・799）　長方形（ａ）のものが見られ、羅肋部分を使用している（798・799）。

②類　この稜柱層を残すタイプは多くなく、ヤコウガイに比べて、厚みが薄いことも考えられる。

③類（797）　非常に薄いものが多く、（797）は円形である。

サラサバテイラ（800 ～ 803・826 ～ 831）

殻頂を有するものは 352 点を数え、そのうち完形は４つしかない（**第 78 表**）。殻頂を有する破片は体層が５段以上残すものが多い（826 ～ 828）。一方、体層破片であるが、最下段のものが大半で全周残っているものもあまり見られない（829 ～ 831）。

サラサバテイラの加工小片（800 ～ 803）は、137 点、57.99 ｇ抽出した（**第 79・80 表**）。①類（801 ～ 803）は、不整形なもの（ｄ）が多いが、その中には三角形（800・801）、楕円形（802・803）がある。②・③類は認識しにくく、数は少ない。

ギンダカハマ（764・804）

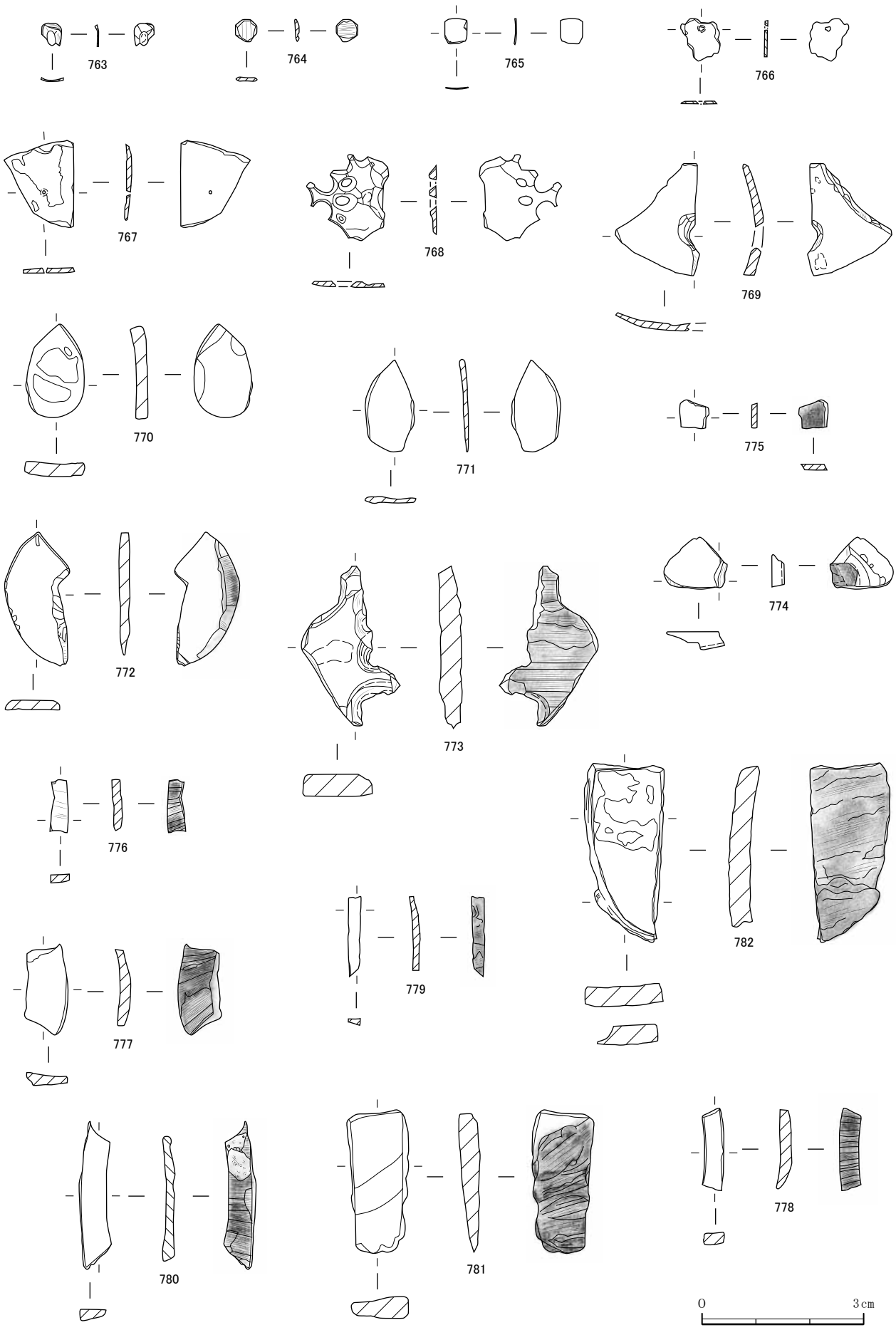
完形４点、殻頂を有する破片４点、体層等の破片は 14 点しか出土しておらず、３種よりも圧倒的に少ない（**第 78 表**）。また、加工小片は可能性があるものを含めて３点、2.25 ｇで（**第 79・80 表**）、真珠層の白っぽい色彩から推定した円形のもの（795）、平坦な底面のもの（804）がある。

第 82 表　チョウセンサザエ集計表

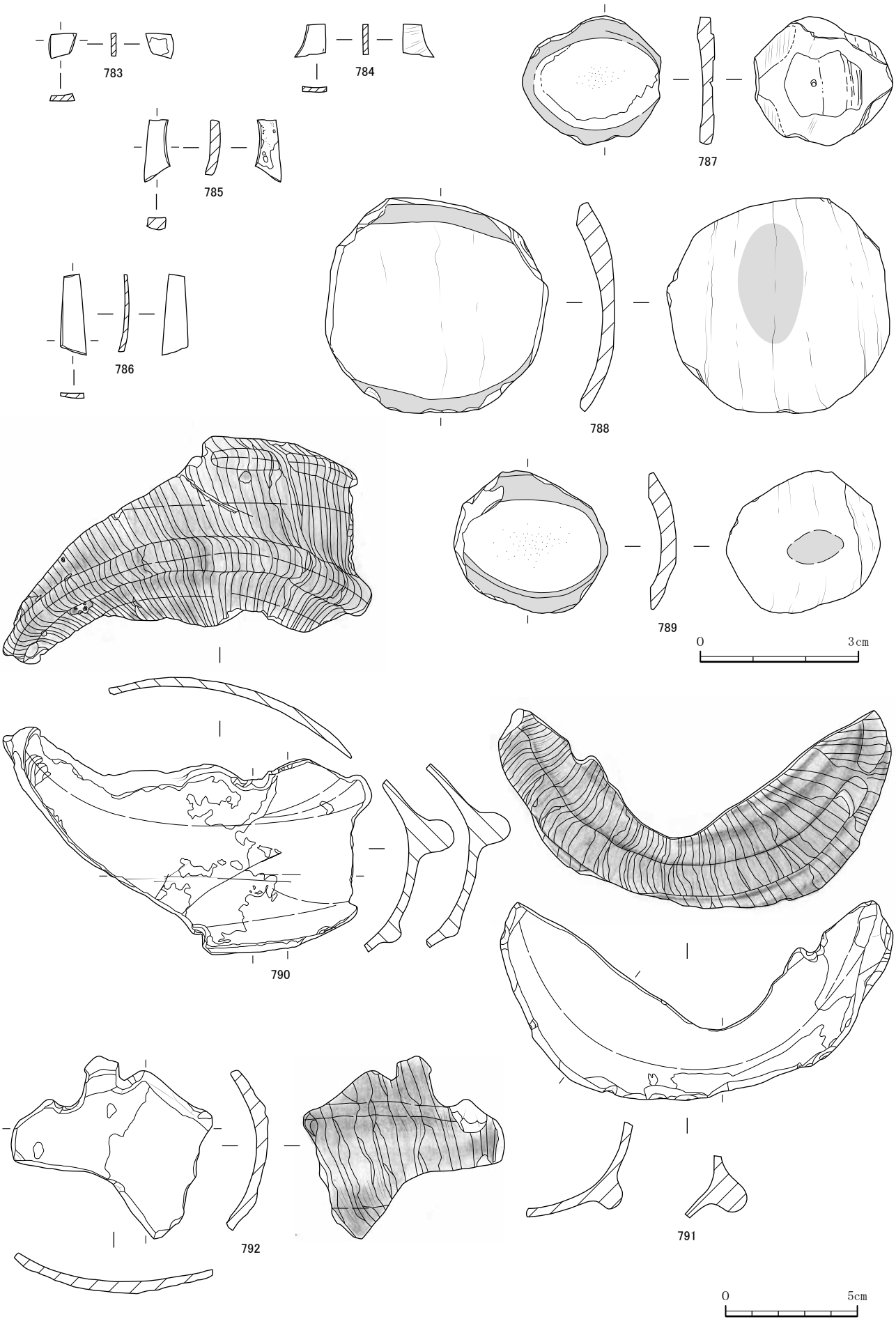
層序/分類		Ⅰ層	Ⅰ´層	Ⅱ層	Ⅲ層 石積1内 1	2	3	3貝	Ⅲ上	Ⅲ下	Ⅲ´層	中計	合計
完形	Ⅰ	19	1	5	2	1	8	13	2	10		61	77
	Ⅰ－有孔	9		3			1	2			1	16	
殻頂	Ⅱ	15		4		2	3	4	1			29	37
	Ⅱ-孔	3	1	1						2	1	8	
	Ⅲ	17	1	4	1	1	12	42	1	4		83	83
	Ⅳ	21	1	8	4	7	59	225		8		333	333
殻頂合計		84	4	25	7	11	83	286	4	24	2	530	530
破片	Ⅴ	26		10		2	76	1692		3		1809	1812
	Ⅴ－有孔							3				3	
破片合計		26		10		2	76	1695		3		1812	
総合計					7	13			4		2	2342	

第 83 表　貝製品集計表

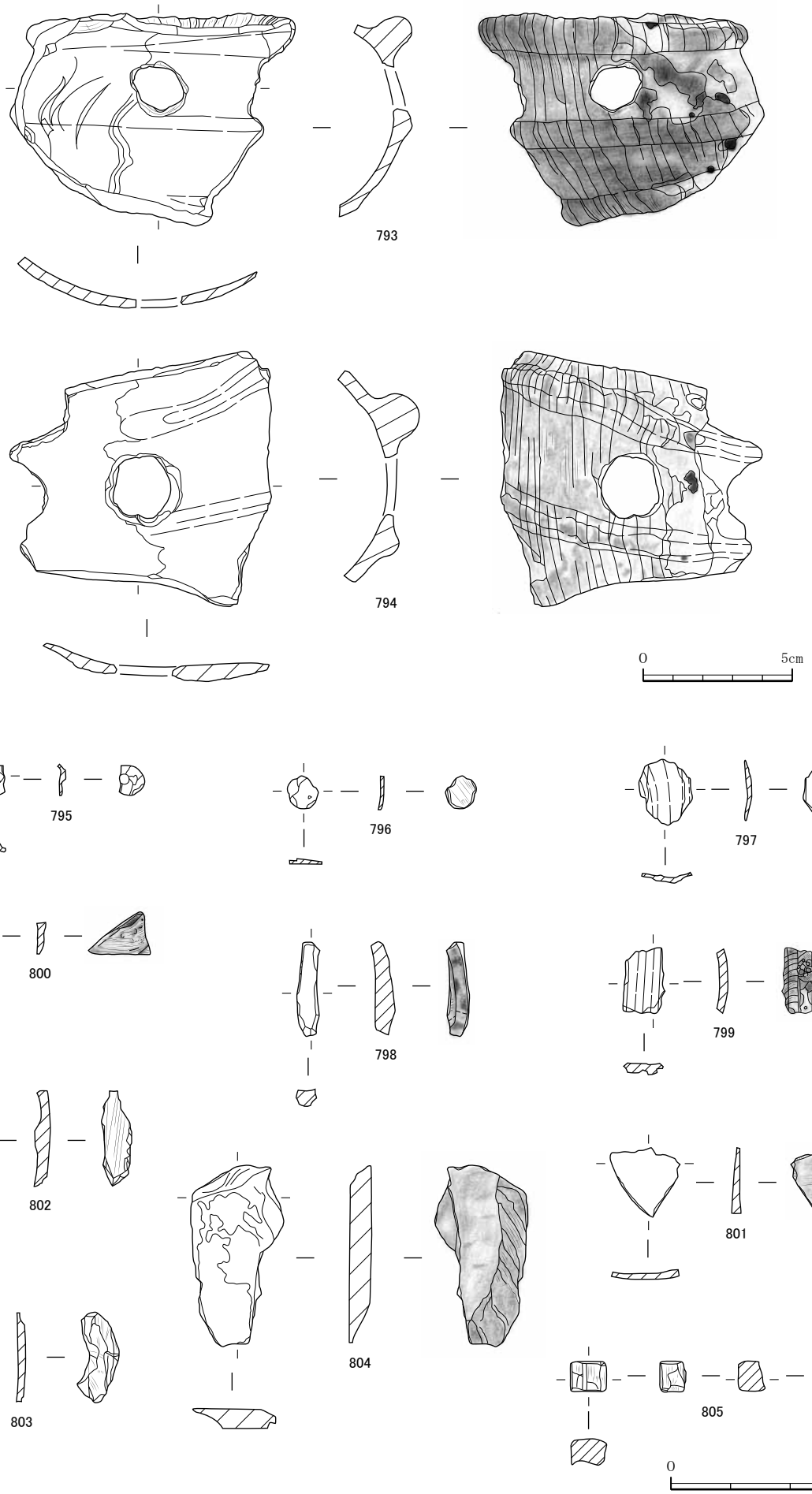
個数			層序/調査区/遺構・土層 Ⅰ層 H23東	H23不明	H25	Ⅰ´層 H23東	Ⅱ層 H23東 Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅲ層 H23東 石積1内2	石積1内3	石積1内3（フロ5）	石積1内3貝	石積1内3貝（フロ3）	石積1内3貝（フロ5）	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2	小計	合計
	貝種	形態	表土・盛土			石敷・裏込													
巻貝	ヤコウガイ	円盤状製品						2							1			3	10
		貝匙等未製品								2								2	
		有孔製品								3								3	
		不明製品	1													1		2	
	マガキガイ	コマ状製品	1			1				2				2	1		1	8	8
	ハナビラダカラ	殻口残核										1						1	21
		背面剥片	2				1	4		5				2	3		3	20	
	ハナマルユキ	背面剥片	7	1	1		1	6	3	5	1	3		1	4	1	1	35	35
	キイロダカラ	殻口残核								1								1	1
	ヤナギシボリダカラ	背面剥片														1		1	1
巻貝合計			11	1	1	1	2	12	3	18	1	4		5	9	3	5	76	76
二枚貝	リュウキュウサルボウ	有孔製品			1													1	1
二枚貝 合計					1													1	1
貝種不明		直方体状製品											1					1	1
貝製品小計			11	1	2	1	2	12	3	18	1	4		5	9	3	5		78
貝製品合計			14			1	14		49										



第67図　貝製品・含真珠層出土遺物（1）



第68図　貝製品・含真珠層出土遺物（2）



第69図　貝製品・含真珠層出土遺物（3）

２）その他の貝製品

タカラガイ製品（838 ～ 840） タカラガイの背面を剥ぎとり、下半部を貝錘とされるもので 50 点を数える（**第 83 表**）。今回、背面剥片も見られたが、製品としては集計していない（838）。

リュウキュウサルボウ製品（844） 殻頂側に穿孔されたもの 1 点である（**第 83 表**）。

マガキガイ製品（841 ～ 843） ８点あり、コマ状製品とされることも多い（**第 83 表**）。一方、（841）などを殻頂を加工した貝玉の未製品とする見方がある（勝連町 1990・那覇市 2012）。

不明貝製品（805） 1 点ある（**第 83 表**）。一辺 0.4 ～ 0.6㎝の直方体状を呈している。貝種は不明である。

３）含真珠層貝殻破片の顕微鏡観察

含真珠層貝殻破片について、人為的な加工痕を確認するために、実体顕微鏡による観察を行った。その所見は以下の通りである。

断面の加工 当地区の貝片には、断面が平坦なものが多数得られている。これを 10 ～ 20 倍で観察すると、①長軸に平行する線条痕 ②長軸に斜方向の線条痕 ③短軸方向で弧状の線条痕 ④線条痕なし の４種が確認された（**写真 20**）。このうち、①及び②については、線条痕の間隔がおよそ一定でかつ長いことから、研磨による線条痕と推定される。また③は方向が一定でないことから、切断に伴う線条痕である可能性が挙げられる。一方で④は資料が螺殻の大形片であることから、剥離された断面と理解される。

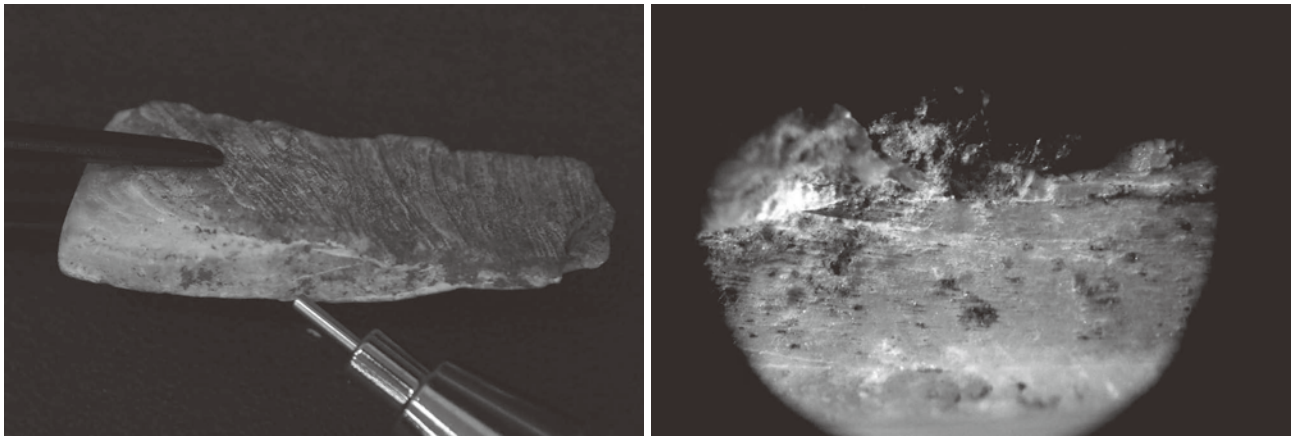
また、1 点のみであるが、線条痕を残す断面の縁辺部に微小剥離を残すものが確認された（**写真 21**）。これは切断時に縁辺に加わった力によって剥離された可能性が挙げられる。確認される資料が少ないのは、切り取り後に研磨を加えて整形されるためだろう。

平面加工 特に正面部に研磨の認められる資料がある。中でも稜柱層には粗い線条痕が認められることから、稜柱層を研磨によって除去し、真珠層を検出していた可能性が挙げられる（**写真 22**）。一方、真珠層のみが残される資料については、研磨された可能性が高いと目されるものの、線条痕が認められる資料はほとんど得られなかった（**写真 23**）。

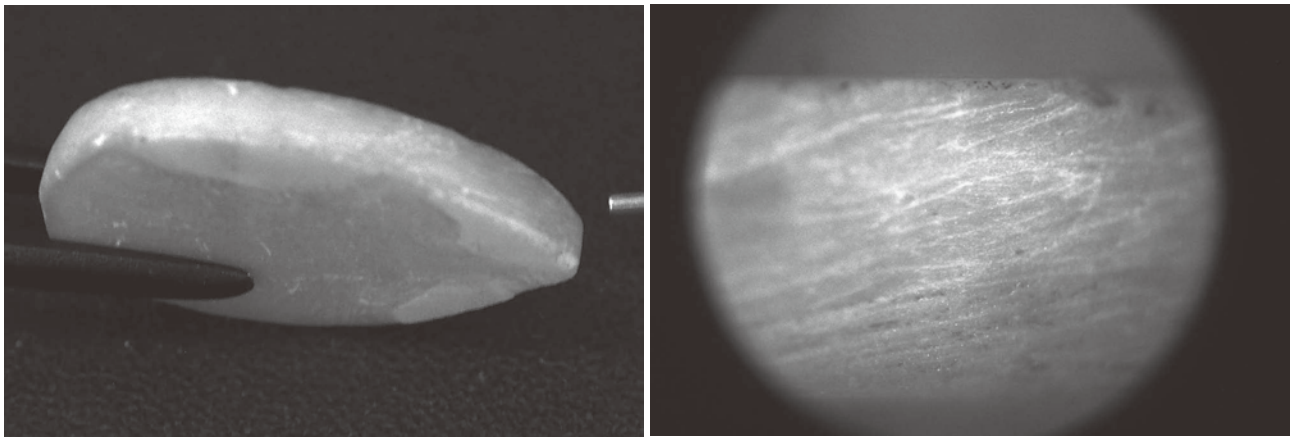
内面についても肉眼では線条痕と推定されるものがみられたため、顕微観察を行った。観察の結果、真珠層が薄く剥落したとみられる痕跡が確認された。これは表面でも一部の資料で確認されたものであるが、これが研磨によって生じたものであるか判然としない（**写真 24**）。

ヤコウガイ有孔製品及び円盤状製品 貝殻製品中には、様々な有孔製品やその結果とみられる円盤状の製品が認められる。穿孔の方法については、２種の痕跡を認めることができる。第一の工法はノミのような鋭利な端部をもった工具による打撃を円周状に繰り返すことで加撃部内を円形に割り取る方法で、数点の資料にその痕跡が認められる（**写真 25**）

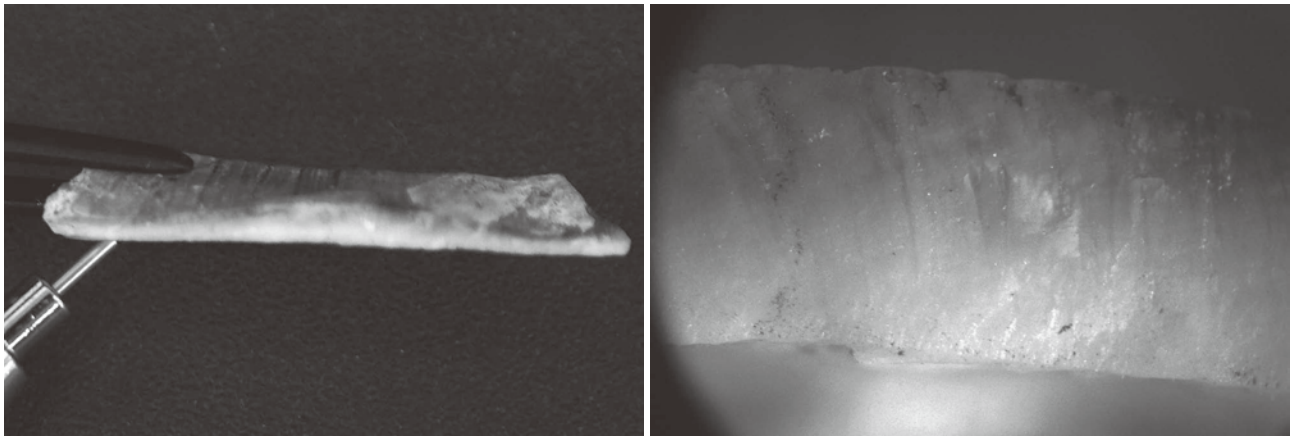
もう一つの工法は、中心部に凹みを残し、円の縁部に溝が残る資料にその痕跡が認められる。またこの工法によって作出されたとみられる円盤状の製品についても、中心部に凹みを残すものが確認される（**写真 26**）。そのことから、作出部の中心部を軸とし、回転によって円盤状製品を作出する工具があった可能性が挙げられる。



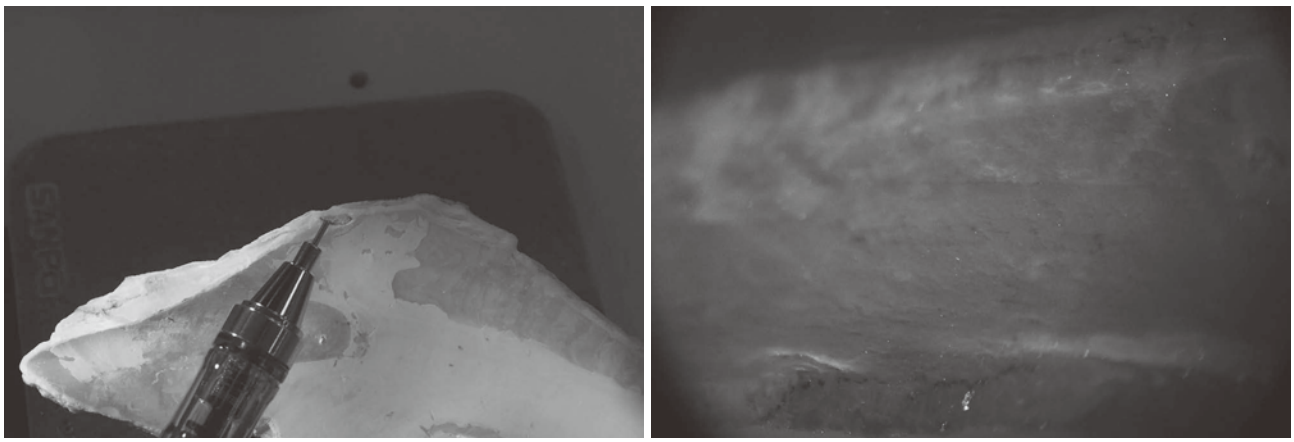
1．長軸に並行する線条痕（781）（右：20 倍）



2．長軸に斜方向の線条痕（770）（右：20 倍）



3．短軸方向で弧状の線条痕（780）（右：20 倍）



4．線条痕の認められない断面（794）（右：20 倍）

写真 20　線条痕の残る断面（１～３）と残らない断面（４）

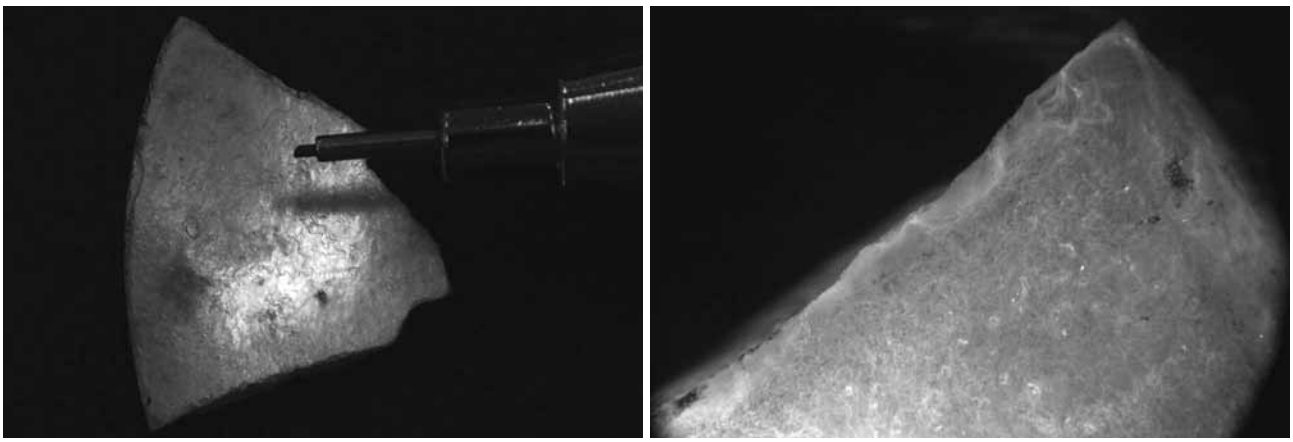
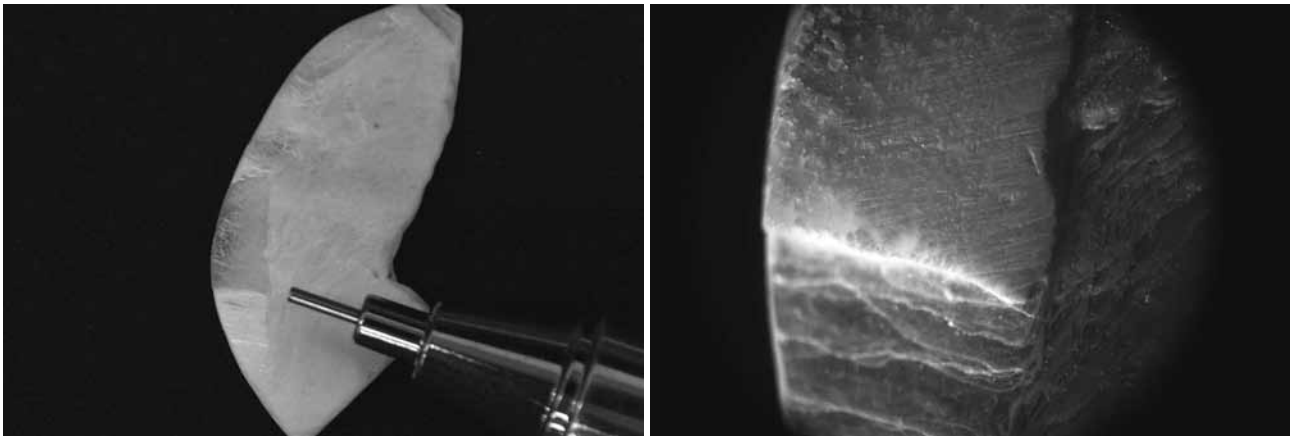
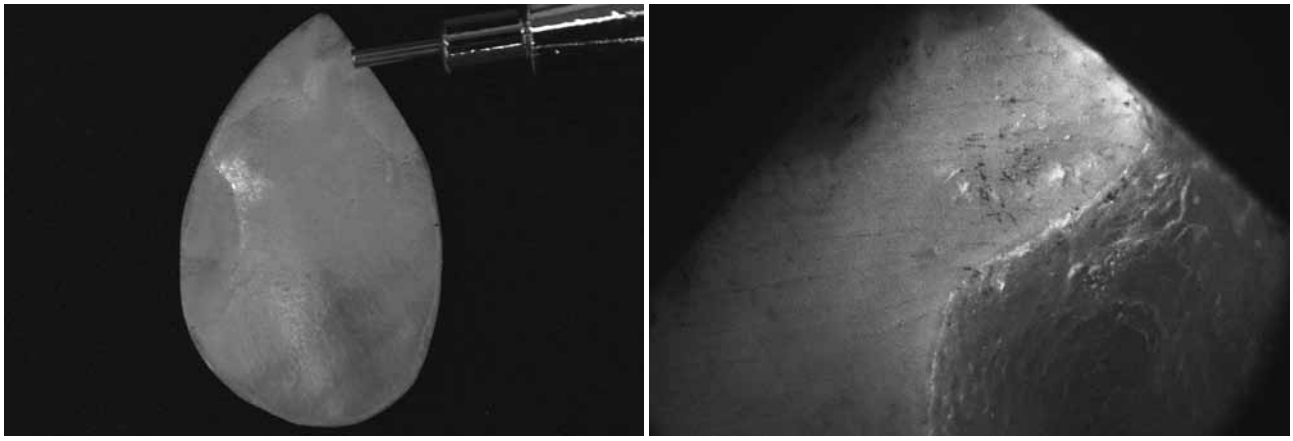


写真 21　縁辺に残る微細剥離痕（801）（右：20 倍）



1．（772）（右：15 倍）



2．（770）（右：15 倍）

写真 22　稜柱層に残る線条痕の残る断面

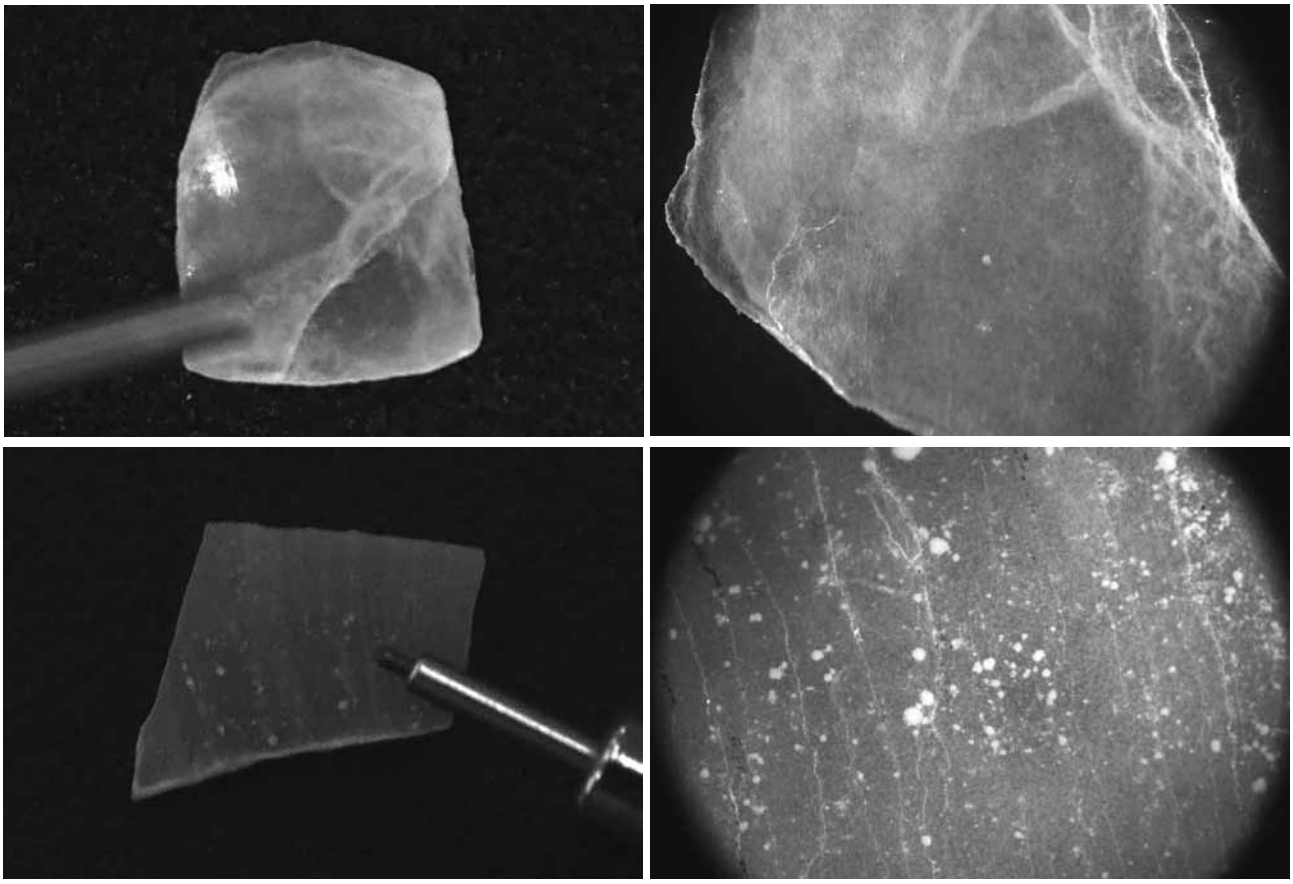


写真 23　真珠層の表面（上：765　下：784）（右：20 倍）

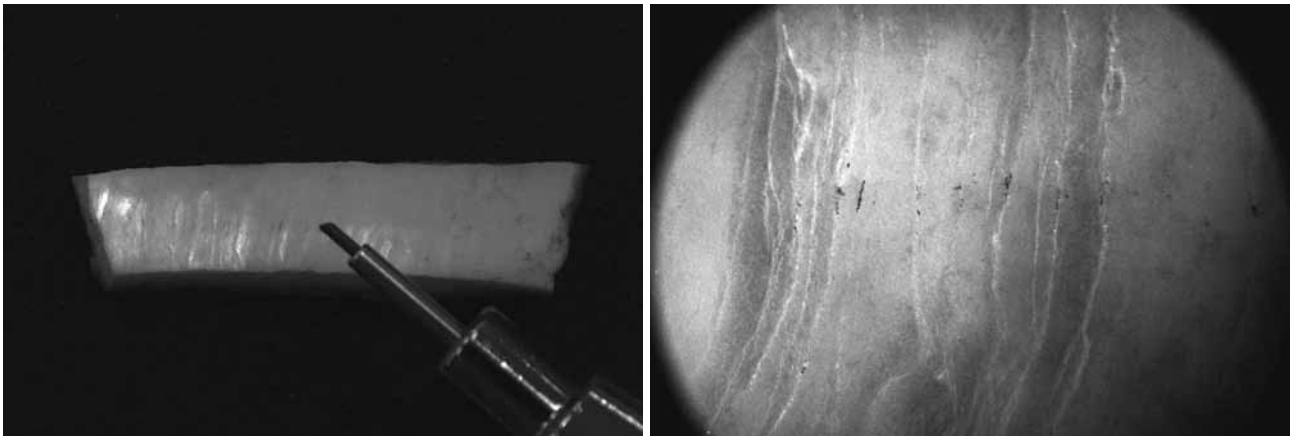
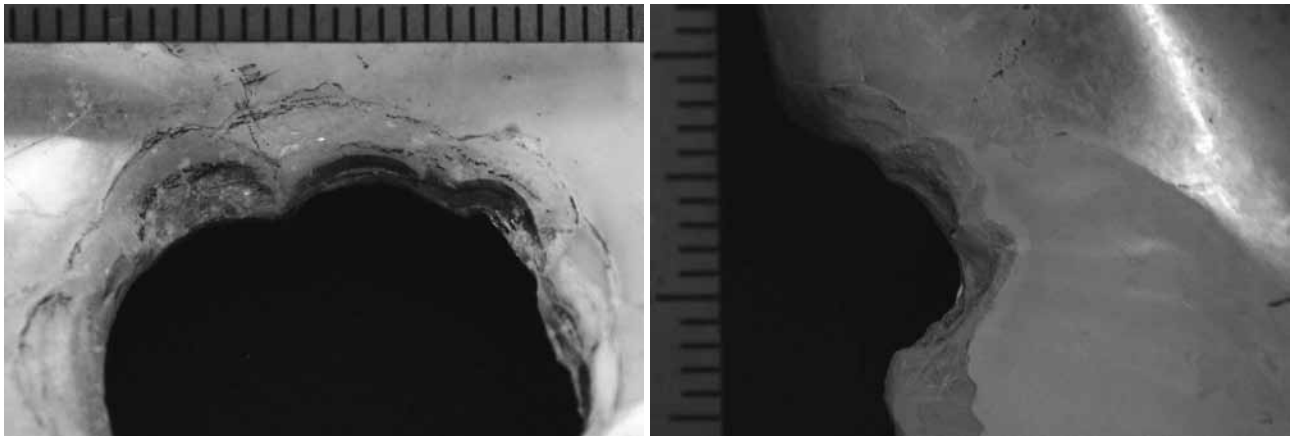


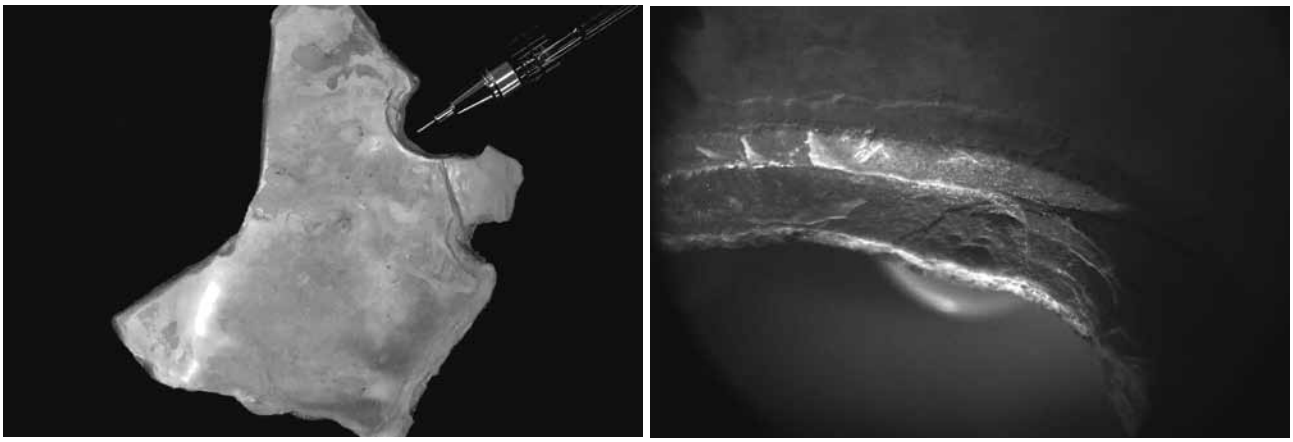
写真 24　真珠層の剥離痕（778）（右：20 倍）



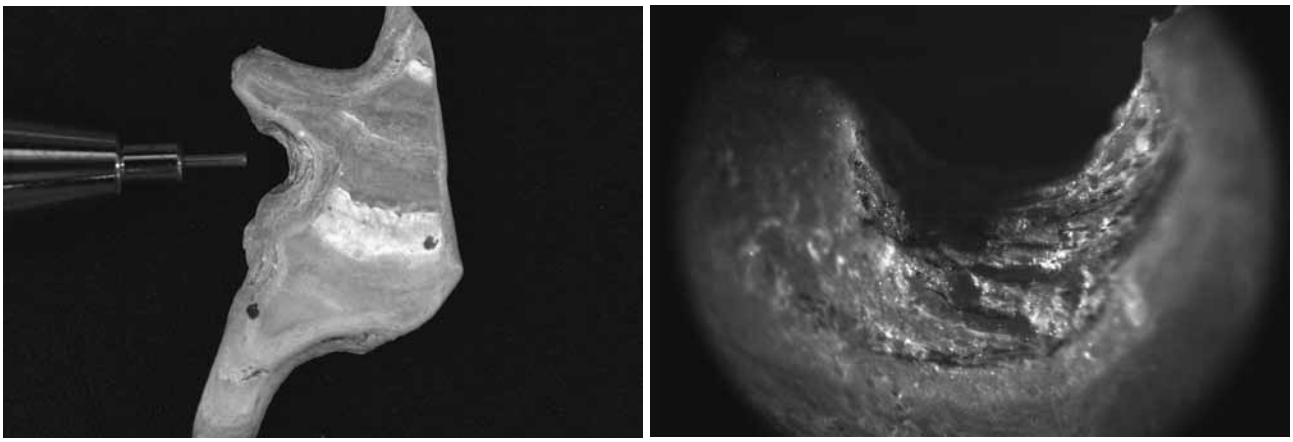
1．（794）（10 倍）　　2．（791）（10 倍）

写真 25　打撃による穿孔

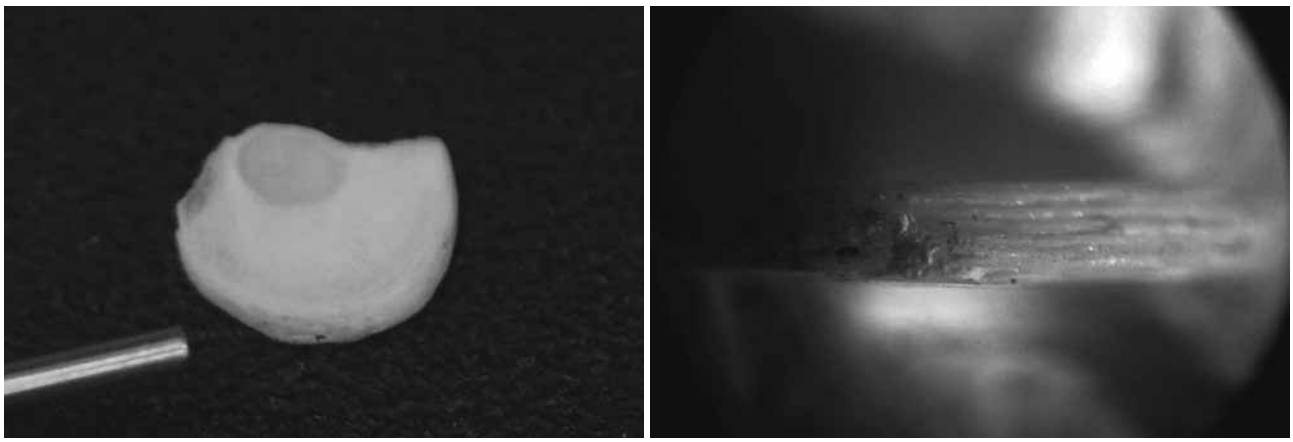
1．未成品部の中心に残る凹みと縁辺の溝（792）（右：20 倍）



2．回転によって生じた螺旋状の線条痕（792）（右：5 倍）



3．回転によって生じた螺旋状の線条痕（773）（右：10 倍）



4．円盤状施製品断面の螺旋状の線条痕（795）（右：12.5 倍）

写真 26　回転具とみられる工具による穿孔

第 84 表　含真珠層貝殻破片・貝製品観察表（１）

No.	貝種	分類	長軸	短軸	厚さ（高さ）	重量 g	観察事項	出土層序	ナンバリング
763	ヤコウガイ	加工小片 ③－ｃ－小	0.4	0.4	※0.04, 0.05	0.01	中央部が凹む。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾛ3)
764	ギンダカハマ？	加工小片 ①－ｃ－小	0.4	0.4	※0.07, 0.08	0.02	表皮が黄白色で全体的にに薄く、ギンダカハマの可能性？	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾛ3)
765	ヤコウガイ	加工小片 ③－ｂ－小	0.5	0.5	※0.02, 0.03	0.02	黄白色半透明の薄い真珠層。正方形に近い。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾛ3)
766	ヤコウガイ	加工小片 ③－ｂ－小	0.7	0.5	※0.05	0.04	径1㎜の小孔があるか人為か不明。不整な台形状。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾛ5)
767	ヤコウガイ	加工小片 ③－ｂ－大	1.6	1.2	※0.05, 0.10	0.24	径1㎜の小孔があるか人為か不明。台形状。内面は白色半透明の真珠層。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾛ5)
768	ヤコウガイ	加工小片 ③－ｄ－小	1.4	1.0	※0.03, 0.16	0.25	内面から穿孔したと考えられる（半）楕円形の小孔（径0.2～0.4cm）７か所あり。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾛ5)
769	ヤコウガイ	加工小片 ③－ｄ－大	2.0	1.7	※0.06, 0.21	0.86	内面は白色半透明の薄膜が全面にあり。外面左縁に半円状、右縁に微小の剥離痕あり。現状では三角形を呈する。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾛ5)
770	ヤコウガイ	加工小片 ③？－ｄ－大	1.7	1.0	※0.23, 0.25	0.94	右面に不透明な白色部分があり、稜柱層が残る可能性あり。しずく型に整形し、側縁も平滑に研磨。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内2　(ﾌﾛ5)
771	ヤコウガイ	加工小片 ③－ｄ－小	1.5	0.9	※0.06, 0.15	0.27	側縁が研磨され、しずく型に整形。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内2　(ﾌﾛ3)
772	ヤコウガイ	加工小片 ③－ｄ－大	2.5	0.9	※0.19, 0.20	1.00	側縁、両面共に研磨。表皮がわずかに残る。へ字状。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1東 Ⅱ下
773	ヤコウガイ	加工小片 ①－ａ－大	3.0	1.3	※0.24, 0.40	1.91	側縁は研磨されており、半円状の剥離痕も見られる。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾛ5)
774	ヤコウガイ	加工小片 ①－ｂ－小	1.1	0.9	※0.04, 0.32	0.28	表皮は部分的に残されており、真珠層が層状に剥離している。台形状。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾛ5)
775	ヤコウガイ	加工小片 ①－ｂ－小	0.6	0.5	※0.10, 0.11	0.07	真珠層はほぼなく、緑色不透明の稜柱層が表出。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾛ3)
776	ヤコウガイ	加工小片 ①－ａ－小	1.0	0.3	※0.15, 0.16	0.11	真珠層はほぼなく、白色不透明の稜柱層が表出。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾛ5)
777	ヤコウガイ	加工小片 ①－ａ－小	1.5	0.7	※0.16, 0.28	0.46	真珠層はほぼなく、白色不透明の稜柱層が表出。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾛ5)
778	ヤコウガイ	加工小片 ①－ａ－小	1.5	0.4	※0.19, 0.27	0.27	真珠層はほぼなく、白色不透明の稜柱層が表出。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾛ5)
779	ヤコウガイ	加工小片 ①－ａ－小	1.4	0.2	※0.08, 0.12	0.08	真珠層はほぼなく、緑色不透明の稜柱層が表出。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾛ5)
780	ヤコウガイ	加工小片 ①－ａ－大	2.7	0.6	※0.14, 0.23	0.45	真珠層はほぼなく、白色不透明の稜柱層が表出。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾛ5)
781	ヤコウガイ	加工小片 ①－ａ－大	2.5	1.0	※0.17, 0.43	1.80	表皮は一部剥離し、稜柱層と真珠層が見える。真珠層は黄白色半透明。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3　(ﾌﾛ5)
782	ヤコウガイ	加工小片 ①－ａ－大	3.2	1.4	※0.10, 0.41	3.70	内面の縁一部が層状に剥離されている。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾛ5)
783	ヤコウガイ	加工小片 ②－ｂ－小	0.5	0.4	※0.10, 0.14	0.06	白色不透明の稜柱層のみ。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾛ3)
784	ヤコウガイ	加工小片 ②－ｂ－小	0.6	0.4	※0.12, 0.13	0.08	白色不透明の稜柱層のみ。台形状。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾛ5)
785	ヤコウガイ	加工小片 ②－ａ－小	1.2	0.4	※0.16, 0.21	0.20	白色不透明の稜柱層のみ。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾛ5)
786	ヤコウガイ	加工小片 ②－ａ－小	1.5	0.4	※0.06, 0.12	0.15	白色不透明の稜柱層のみ。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾛ5)

第 85 表　含真珠層貝殻破片・貝製品観察表（２）

No.	貝種	分類	長軸	短軸	厚さ（高さ）	重量 g	観察事項	出土層序	ナンバリング
787	ヤコウガイ	円盤状製品	2.5	2.3	0.2	3.04	側縁、外面研磨。外面中央平滑で真珠層が表出。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南 Ⅱ下
788	ヤコウガイ	円盤状製品	4.2	4.0	0.3	12.35	側縁、外面研磨。外面中央平滑。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南 Ⅲ下
789	ヤコウガイ	円盤状製品	2.9	2.5	0.3	5.29	側縁、外面研磨。外面中央平滑。	Ⅱ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1南 Ⅱ下
790	ヤコウガイ	貝匙等未製品	14.0	7.3	0.3	125.30	螺肋部分は最大厚1.5cm。側縁部分的に磨滅あり。内外面に切り痕あり。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3
791	ヤコウガイ	貝匙等未製・欠損品	14.9	4.5	0.3	116.83	螺肋部分は最大厚1.6cm。側縁部分的に磨滅あり。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3
792	ヤコウガイ	有孔製品	7.6	7.0	0.5	28.16	側縁に２か所半楕円状（長径1.5、1.0cm）の窪みあり。別の未成・欠損品の可能性もある。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3
793	ヤコウガイ	有孔製品	9.1	7.1	0.3	67.71	螺肋部分は最大厚1.5cm。体層中央に楕円形孔（長1.7、短1.2cm）あり。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3
794	ヤコウガイ	有孔製品	9.2	8.2	0.4	76.39	螺肋部分は最大厚1.5cm。体層中央に円形の孔（径2.1cm）あり。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3
795	ギンダカハマ	加工小片 ③－ｃ－小	0.5	0.4	※0.08, 0.09	0.03	中央側縁が円形（径1mm）の範囲が窪んでいる。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾙ5)
796	ヤコウガイ	加工小片 ③－ｃ－小	0.5	0.5	※0.05, 0.09	0.01	両面とも薄い膜状の剥離部分が見られる。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾙ3)
797	チョウセンサザエ	加工小片 ③－ｃ－小	1.1	0.9	※0.04, 0.09	0.10	非常に脆い。側縁の整形は不明。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾙ5)
798	チョウセンサザエ	加工小片 ①－ａ－小	1.5	0.3	※0.15, 0.27	0.21	螺肋の１本分を横方向に切取り。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾙ3)
799	チョウセンサザエ	加工小片 ①－ａ－小	1.1	0.7	※0.09, 0.14	0.17	螺肋の２本分を横方向に切取り。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾙ3)
800	サラサバティ	加工小片 ①－ｄ－小	1.0	0.7	※0.08, 0.16	0.13	内面は白色半透明で、真珠層が残存しているものと思われる。三角形状。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾙ5)
801	サラサバティ	加工小片 ①－ｄ－小	1.2	1.0	※0.10, 0.17	0.27	内面は光沢があり、真珠層が残っている。三角形状。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾙ5)
802	サラサバティ	加工小片 ①－ａ－大	1.6	0.5	※0.17, 0.23	0.21	内面の真珠層は層状に剥離している。やや不整な長方形状。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾙ3)
803	サラサバティ	加工小片 ①－ａ－小	1.5	0.5	※0.09, 0.14	0.20	表皮は部分的に風化か。内面は光沢があり、真珠層が残っている。やや扇状。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾙ3)
804	ギンダカハマ？	加工小片 ①－ａ－大	3.0	1.5	※0.06, 0.40	2.20	表皮は側縁が層状に剥離し、真珠層が露出。厚さより底面で大形のものか。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3　(ﾌﾙ5)
805	貝類不明	不明製品	0.6	0.5	0.4	0.21	骨や石ではないため、貝種は不明だが貝を直方体状に研磨等により整形したものと考えた。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11 石積1内3貝　(ﾌﾙ3)
806	ヤコウガイ	完形	18.4	16.3	0.3～2.2	1166.13	肩部に円形孔（径1.8cm）あり。セ計測値47㎜。外唇剥離痕あり。	Ⅲ層	H23　首銭東　ﾄﾚ1 Ⅲ下1
807	ヤコウガイ	殻頂片 (西野Ⅲ－②)	18.0	10.5	0.3～0.8	531.27	体層９割欠損。軸唇部に折れ。セ計測値52㎜。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3貝
808	ヤコウガイ	殻頂片 (西野Ⅲ－②)	14.5	9.1	0.3～0.8	287.76	体層ほぼ欠損。軸唇俺。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3貝
809	ヤコウガイ	軸唇片 (西野Ⅲ - ①)	13.6	6.3	0.4～1.2	272.33	軸唇下部残存。上下端大きく折れ。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　1
810	ヤコウガイ	殻頂片 (西野Ⅲ－①)	6.1	5.2	0.4～1.0	57.86	螺塔のみ残存。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3貝

第 86 表　含真珠層貝殻破片・貝製品観察表（３）

No.	貝種	分類	長軸	短軸	厚さ（高さ）	重量 g	観察事項	出土層序	ナンバリング
811	ヤコウガイ	殻頂片（西野Ⅲ－①）	11.0	8.0	0.2～1.0	324.97	螺塔から肩残存。軸唇部に折れ。セ計測値42㎜。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
812	ヤコウガイ	殻頂片（西野Ⅲ－①）	9.8	8.5	0.1～1.1	204.89	螺塔から肩残存。縁辺に外面からの剥離痕。セ計測値37㎜。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
813	ヤコウガイ	軸唇片（西野Ⅲ－①）	9.3	5.5	0.3～1.2	123.16	軸唇下部残存。上端大きく折れ。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　1
814	ヤコウガイ	体層片（表皮あり）	13.1	4.6	0.1～1.1	70.36	肩部残存。肩部に楕円形（0.9、1.5㎝）の孔あり。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　1
815	ヤコウガイ	体層片（表皮あり）	13.9	7.5	0.2～1.5	132.89	肩から中央部残存。長辺上縁側に内側からの剥離痕か。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　1
816	ヤコウガイ	軸唇片（西野Ⅲ－①）	7.1	5.7	0.2～1.3	109.05	軸唇下部残存。上端大きく折れ。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　1
817	ヤコウガイ	体層片（表皮あり）	10.2	8.2	0.3～1.0	83.23	肩から中央部残存。長辺下縁側に外側からの剥離痕。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
818	ヤコウガイ	体層片（表皮あり）	6.0	5.6	0.3～0.6	33.50	中央部残存。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
819	ヤコウガイ	体層片（表皮あり）	8.5	5.5	0.3～1.5	70.21	肩部残存。内面部分的に黄白色不透明の真珠層露出。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
820	ヤコウガイ	体層片（真珠層露出）	5.9	4.8	※0.07，0.54	15.52	外面一部表皮残存。内面真珠層はほぼ白色半透明。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
821	ヤコウガイ	体層片（真珠層露出）	8.5	5.6	※0.09，0.52	36.92	体層中央部。外面一部表皮残存。楕円形の有孔（1.2、1.4㎝）。内面真珠層が層状に剥離し、部分的に白色半透明。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
822	ヤコウガイ	体層片（真珠層露出）	5.9	4.5	※0.12，0.48	24.65	外面ほぼ真珠層露出し、内面は白色半透明。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
823	ヤコウガイ	体層片（真珠層露出）	4.6	3.2	※0.03，0.41	4.39	外面真珠層露出し、内面は白色半透明。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
824	ヤコウガイ	体層片（真珠層露出）	4.7	2.5	※0.04，0.24	3.61	内外面共に黄白色半透明の真珠層。縁辺やや磨滅。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
825	ヤコウガイ	体層片（真珠層露出）	2.9	2.5	※0.02，0.20	2.05	内外面共に黄白色半透明の真珠層。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3
826	サラサバティ	殻頂片	8.2	7.1	0.3～0.7	196.86	螺塔より体層５段残存。軸部除去。外面石灰質多く付着。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
827	サラサバティ	殻頂片	9.0	6.5	0.2～0.5	143.91	螺塔より体層４段残存。軸部突出。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
828	サラサバティ	殻頂片	8.6	8.2	0.2～0.8	196.39	螺塔より体層６段途中残存。軸部除去。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
829	サラサバティ	体層片	9.5	3.1	0.2～0.6	71.95	体層最下段の半分残存。上面研磨か。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
830	サラサバティ	体層片	11.2	8.5	0.2～1.0	183.68	体層最下段の７割残存。軸部折れ。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
831	サラサバティ	体層片	13.5	6.2	0.2～0.7	193.07	体層最下段の半分残存。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
832	チョウセンサザエ	完形	7.7	5.8	0.2	79.23	外唇縁辺わずかに剥離痕。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
833	チョウセンサザエ	殻頂片（Ⅱ）	6.1	5.0	0.2	50.12	殻頂と体層半分残存。軸唇折れ。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝
834	チョウセンサザエ	殻頂片（Ⅳ）	2.6	2.5	0.2	10.24	螺塔のみ残存。軸唇折れ。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾌﾞﾐ1内　3貝

第 87 表　含真珠層貝殻破片・貝製品観察表（４）

No.	貝種	分類	長軸	短軸	厚さ（高さ）	重量 g	観察事項	出土層序	ナンバリング
835	チョウセンサザエ	殻頂片（Ⅲ）	5.1	4.2	0.2	21.87	縦方向に欠損し、４割残存。軸唇折れ。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3貝
836	チョウセンサザエ	体層片（Ⅴ）	5.4	2.7	0.2	27.20	体層下端のみ残存。軸唇折れ。	Ⅰ層	H23　首銭東　B-11　Ⅰ
837	チョウセンサザエ	体層片（Ⅴ）	4.0	3.5	0.2	9.92	体層中央残存。径8㎜の孔あり。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3貝
838	ハナマルユキ	背面剥片	2.6	2.2	1	2.77	殻頂側より剥離。明瞭な磨滅・研磨なし。色残り。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　2
839	キイロダカラ	殻口残核	2.4	1.9	0.8	2.87	背面割れ口やや磨滅か。若干色残り。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3
840	ハナビラダカラ	殻口残核	2.2	1.5	0.7	1.48	明瞭な磨滅・研磨なし。色残り。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3貝
841	マガキガイ	コマ状製品	2.1	1.9	1.2	5.97	体層・殻軸欠損。表面風化し剥落。	Ⅰ´層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ2・3　ｳﾗｺﾞﾒ
842	マガキガイ	コマ状製品	2.6	2.4	2.6	8.91	体層ほぼ欠損。色残り。	Ⅲ層	H23　首銭東　石ﾂﾞﾐ1内　3
843	マガキガイ	コマ状製品	2.1	1.9	3.3	7.88	体層ほぼ欠損。全体的に磨滅。	Ⅲ層	H23　首銭東　B-11　石積1内3貝　（ﾌﾛ5）
844	リュウキュウサルボウ	有孔製品	6.8	4.3	2.1	22.14	右殻（Ｒ）。殻頂側に孔（長2.9、短2.2cm）あり。腹縁内側磨滅。	Ⅰ層	H25　首銭東　Z-12　ﾄﾚ1

※厚さはデジタルノギスによる小数点2位以下までの計測値。

第 88 表　石材・玉器観察表

No.	種類	器形	口径（長軸）	器高（厚さ）	底径（短軸）	観察事項	出土層序	ナンバリング
845	石材	玉砂利	5.1	1.8	2.9	石材：砂岩、扁平な楕円礫。一面のみ弱く研磨された平坦面あり。	Ⅰ層	H23 首銭東 B-11 Ⅰ
846	石材	玉砂利	4.9+	1.3	4.7	石材：砂岩、扁平な楕円礫。一面のみ弱く研磨された平坦面あり。	Ⅰ層	H23 首銭東 B-11 Ⅰ
847	石材	玉砂利	8.1	1.7	5.1	石材：砂岩、扁平な楕円礫。一面のみ弱く研磨された平坦面あり。	Ⅰ層	H23 首銭東 B-11 Ⅰ
848	石材	玉砂利	4.7	1.7	3.6	石材：粘板岩、扁平な楕円礫。片側表面のみマトリックスが付着。	Ⅰ層	H23 首銭東 C-15 Ⅰ
849	石材（サンゴ）	－	－	－	－	石材：ｻﾝｺﾞ石。持ち込まれた自然石。観賞用？	Ⅲ層	H23 首銭東 石ﾂﾞﾐ1内 3
850	玉器	石製品	4.9	2.9	3.5	石材：碧玉、円礫。剥離面を３面もつが水磨を受けている。80.8ｇ。	Ⅱ層	H23 首銭東 ﾄﾚ1南 Ⅱ中
851	玉器	製品　残滓	1.8+	0.4+	0.7+	石材：水晶。破砕によって生じたチップ。	Ⅲ層	H23 首銭東 石ﾂﾞﾐ1内 3貝

第４章　自然遺物の分析

第１節　首里城跡銭蔵東地区から出土した脊椎動物遺体

早稲田大学　樋泉 岳二

はじめに

平成 23 年度に沖縄県立埋蔵文化財センターによって実施された首里城銭蔵東地区の発掘調査では，おびただしい数の脊椎動物遺体（骨類）が採集されている． ここではその分析結果について記載し，本地区における脊椎動物遺体群の特徴について考察する．今回得られた資料はグスク時代（14 世紀後半～ 17 世紀後半）から近現代にいたる首里城内での動物資源利用の様相を示す資料として重要である．

１．分析資料と分析方法

（１）分析資料の産出層準と年代

調査区の位置は首里城外郭北側の旧銭蔵所在地の東側に相当する一角である．骨類を出土した層準と年代は下位からⅣ層（14 世紀後半～ 15 世紀），Ⅲ’層（15 世紀後半），Ⅲ層（15 世紀後半～ 16 世紀前半：下部と上部に細分される），Ⅱ層（17 世紀後半），Ⅰ’層（18 世紀～戦前），Ⅰ層（戦後：琉球大学建設以後）である．これらのうちⅡ層とⅢ層は「石積１」（調査区東側で検出された東西方向の石積遺構）の北側に設定されたトレンチ１で確認されたもので，出土資料はトレンチ１東とトレンチ１南に大別されている．なお石積１の内側（南側）の堆積物は年代的には石積１外側（北側）のⅢ層に相当するが，堆積状況が大きく異なっており，下位から３層貝だまり（図表では「３貝」と表記），３層，２層，１層に細分されている．これら石積１内の堆積物と石積１外Ⅲ層との層序関係は，Ⅲ層下部が石積１構築に先立つ造成土，Ⅲ層上部が石積１構築後の堆積層と考えられている（瀬戸哲也氏のご教示による）．

なお，以下の記載における「Ⅲ層上部」・「Ⅲ層下部」は石積１外側の堆積物のみを指し，石積１内側の堆積物は含まないので注意されたい。

（２）分析資料の採集方法

分析資料は，その採集方法によって，「ピックアップ資料」と「水洗選別資料」）の２種類に分かれる．

ピックアップ資料：発掘現場において目視確認され，手で拾い上げられた資料である．

水洗選別資料：堆積物サンプルを水洗選別して回収された資料である．堆積物サンプルは石積１内側の３ｍ×１ｍの区画内から２層（厚さ約 50㎝）は土嚢 10 袋分（81.1㎏）、３層および３層貝だまり（厚さ約 50㎝）はほぼ全量が採集された．サンプル採取は沖縄県立埋蔵文化財センター（以下「県センター」とする）によって行われた．なお石積１外側の堆積物については，サンプル採取と水洗選別は実施されていない．

骨類の分析は，一部のサンプルを抽出して実施した．分析対象としたサンプルの詳細を**第 89 表**に示す．サンプルの水洗作業は，県センターによって実施されたものと，黒住耐二氏によって実施されたものがあり，それぞれ方法が異なるので以下に詳細を記載する．

県センター水洗サンプル：石積１内２層・３層については一部の未水洗サンプル（試料番号 934・1000）を抽出し，分析対象とした．水洗に使用されたメッシュは 5mm，2.5mm，1mm の３種類で，このうち 5mm メッシュと 2.5mm メッシュの回収資料（以下 5mm 資料，2.5mm 資料とする）は全量，1mm メッシュの回収資料（以下 1mm 資料）は半量を分析した．骨類の抽出作業は，5mm・2.5mm 資料については県センター，1mm 資

第 89 表　首里城跡銭蔵東地区における骨類分析用水洗選別試料の一覧

「−」は未計測または不明.

*1「3貝」の試料809・815・830の水洗前重量は不明.

*2 使用メッシュ　埋文センター：5mm・2.5mm・1mm，黒住耐二氏：9.5mm・4mm・2mm・1mm.

*3 分析率：水洗後試料総量（A）中に占める骨分析実施試料（B）の比率（乾重量比）

*4「3貝」からの採取試料については，すでに全サンプルが水洗作業を完了しており，全体が5mm・2.5mm・1mmに分離されていたため，それぞれの一部を任意に抽出して分析した．このためメッシュ別の産出数の比率や全メッシュを総和した組成等は不明である.

採取位置/層準	試料番号	水洗者	水洗選別前試料総重量(g) A *1	メッシュ *2	水洗選別後総重量(g)	分析試料		分析率(%) *3 B/A×100
						重量(g) B	骨重量(g)	
石積1内/2層	934	沖縄県立埋文センター	10300	5mm	3035	3035	42	100
				2.5mm	581	581	29	100
				1mm	407	202	−	50
				合計	4023	3818	−	−
	992	黒住耐二氏	9100	9.5mm	1970	1970	−	100
				4mm	794	794	−	100
				2mm	383	192	−	50
				1mm	402	201	−	50
				合計	3549	3157	−	−
石積1内/3層	991	黒住耐二氏	10260	9.5mm	2620	2620	−	100
				4mm	622	622	−	100
				2mm	344	172	−	50
				1mm	377	189	−	50
				合計	3963	3603	−	−
	1000	沖縄県立埋文センター	7250	5mm	2220	2220	165	100
				2.5mm	320	320	98	100
				1mm	297	147	−	50
				合計	2837	2687	−	−
石積1内/3貝 *4	809	沖縄県立埋文センター	−	5mm	−	−	619	100
	815		−	2.5mm	1429	−	576	100
	830		−	1mm	808	202	−	25

料は筆者が行った.

なお，石積１内３層貝だまりについては，すでに全サンプルが水洗作業を完了しており，全体が 5mm・2.5mm・1mm に分離されていたため，それぞれの一部を任意に抽出して分析した．したがって，各メッシュの抽出試料は同一の堆積物サンプルに帰属するものではないため，メッシュ別産出量の比率や全メッシュを総和した組成等は不明である.

黒住氏水洗サンプル：石積１内２層・３層の一部の未水洗サンプル（試料番号 991・992）を分析対象とした．水洗に使用されたメッシュは 9.5mm，4mm，2mm，1mm の４種類で，このうち 9.5mm・4mm 資料は全量，2mm・1mm 資料は半量を分析した．骨類の抽出は 9.5mm・4mm 資料は黒住氏，2mm・1mm 資料は筆者が行った.

（３）分析方法

同定対象部位については，魚類は主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・椎骨を必須部位とし，それ以外にも分類群に応じて同定可能な部位を適宜同定対象資料とした．魚類以外については，部位の判別可能な資料を同定対象とした．ただし鳥類と哺乳類の四肢骨骨幹破片のうち，骨幹の全周を残さないものは対象外とした．同定方法は原則として現生標本との比較によった。比較に使用した標本は筆者の所蔵標本のほか，沖縄県立埋蔵文化財センターおよび西本豊弘氏の所蔵表標本も参照させていただいた.

２．分析結果

同定結果を**第 91 ～ 93 表**（ピックアップ資料），**第 95 表**（水洗選別資料）に示す．また同定標本数（NISP）と最小個体数（MNI）による組成を**第 94 表**（ピックアップ資料），**第 98 表**（水洗選別資料）に示す.

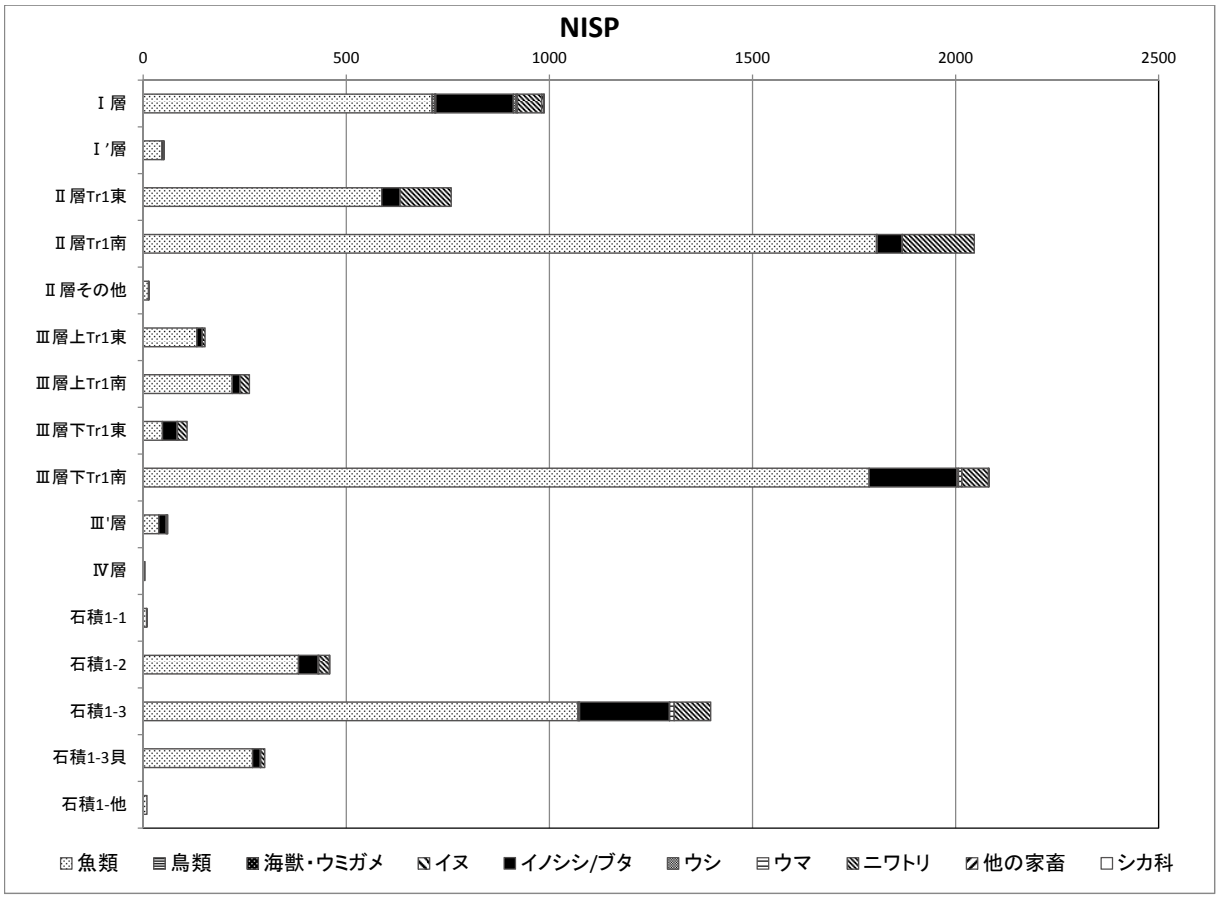
（１）脊椎動物遺体群の概要

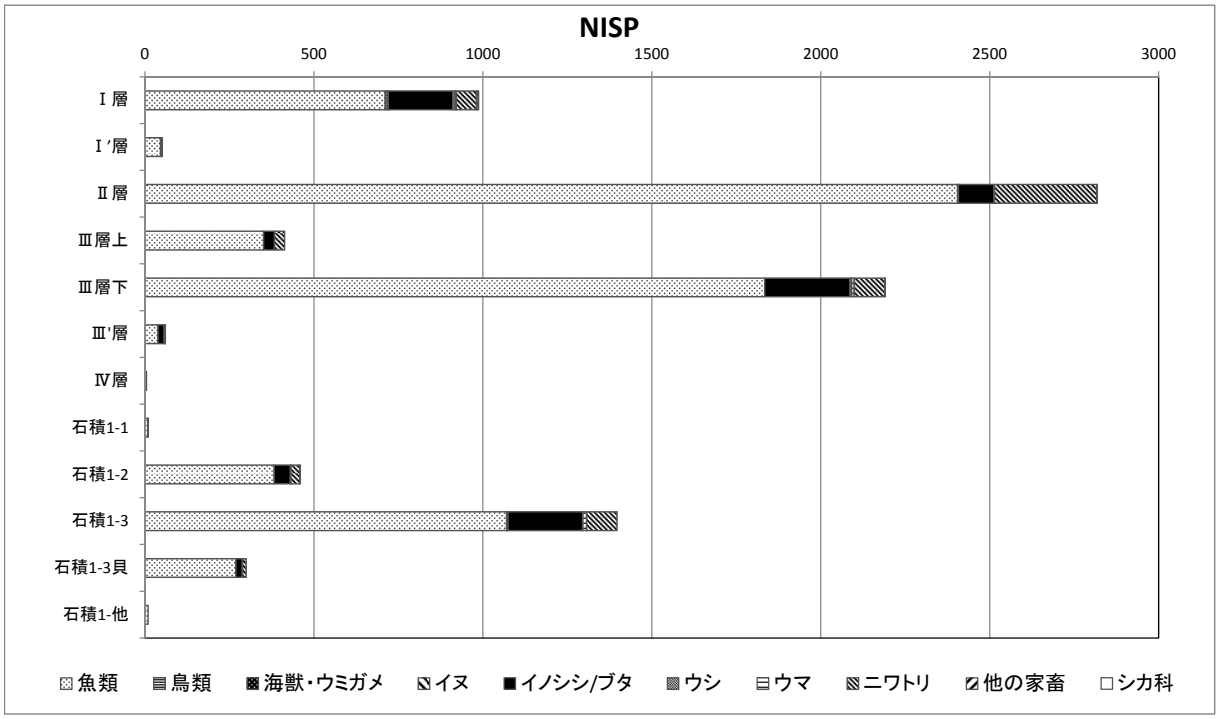
出土数：ピックアップ資料の層・地区別の出土数（図１）をみると，石積１外ではⅡ層とⅢ層下部，石積１内では３層に強いピークが認められた．なお，Ⅲ層下部はトレンチ１南からの出土資料が大半をしめており，Ⅱ層でもトレンチ１南からの出土量がとくに多い．これら以外では，Ⅰ層，Ⅲ層上部，石積１内２層・３層貝だまりか

らの出土数もやや多いが，他の層準はごく少ない．以上から，骨類の層位的・平面的な分布状況は，少なくともピックアップで採集されるような比較的大型の骨に関する限り，石積１外Ⅱ層・Ⅲ層下部のトレンチ１南付近および石積１内の３層に集中していたと推定される．

脊椎動物遺体群全体の組成：魚類，両生類，爬虫類，鳥類，哺乳類が確認された（**第 90 表**）．

ピックアップ資料では魚類,哺乳類（大半はイノシシ／ブタを主とする家畜類）および鳥類（大半はニワトリ）





第 70 図　首里城跡銭蔵東地区から採集された脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の層位別出土数（NISP）

上：層準・地区別の詳細，下：Ⅱ層・Ⅲ層上部・Ⅲ層下部をそれぞれ合算．

が資料の大部分を占める．本地区の資料では魚類の比率が特に高い点が特徴で，MNI 比で約 80 ～ 90%，NISP 比でも 70 ～ 90%前後を占める（**第 71 図**）．こうした基本的傾向については層位的にも明確な変化傾向はみられず，石積 1 の内外でも明確な差は認められない．ただしⅢ層下部のトレンチ 1 東では魚類が少ない点で特異的である．またⅠ層でも MNI 比では魚類がわずかながら減少する．なお，鳥獣類（鳥類＋哺乳類）のみに限った組成でみると，Ⅲ層下部と石積 1 内では哺乳類が卓越するのに対し，Ⅲ層上部～Ⅱ層で鳥類が増加し，Ⅰ層では再び哺乳類が増加する（詳細は後述）．

水洗選別資料のデータは石積 1 内のみだが，魚類が圧倒的多数を占めており，その他はごく少ない（図 7）．

以上をまとめると，全体的に魚類と哺乳類・鳥類（おもに家畜とニワトリ）が大半を占めており，とくに魚類の優占が著しい点が特徴である．

（2）魚類

①同定記載

軟骨魚綱 4 分類群，硬骨魚綱 59 分類群が確認された（**第 90 表**）。以下、同定結果に注釈を要する分類群について記載する。

ニシン科：頭部骨格（主上顎骨・角骨・主鰓蓋骨・基後頭骨）および第 1 ・第 2 椎骨にはマイワシ，サッパ，コノシロに近似するものがみられた．前二者が多い．

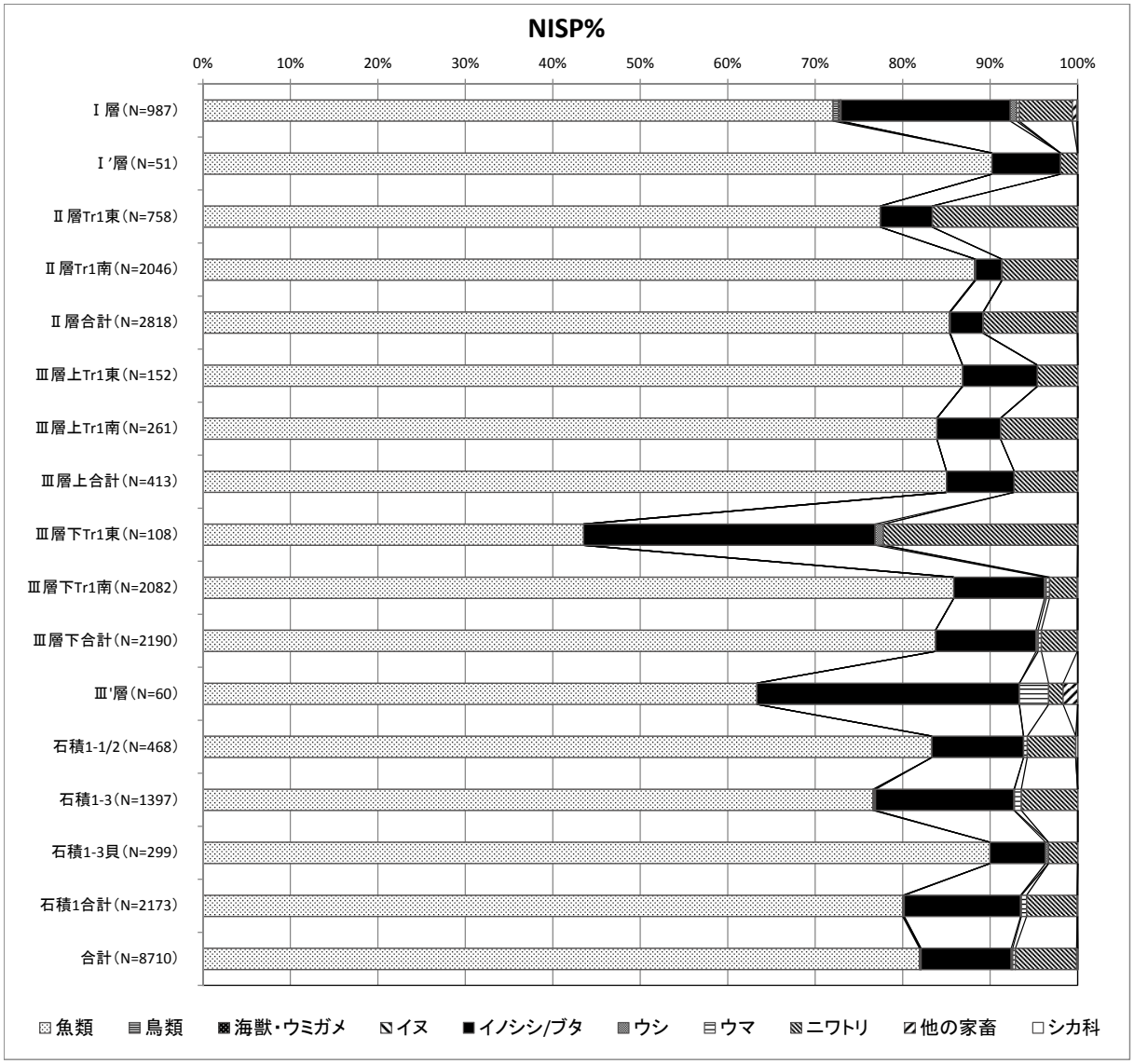
第 90 表　首里城跡銭蔵東地区から採集された脊椎動物遺体の種名一覧

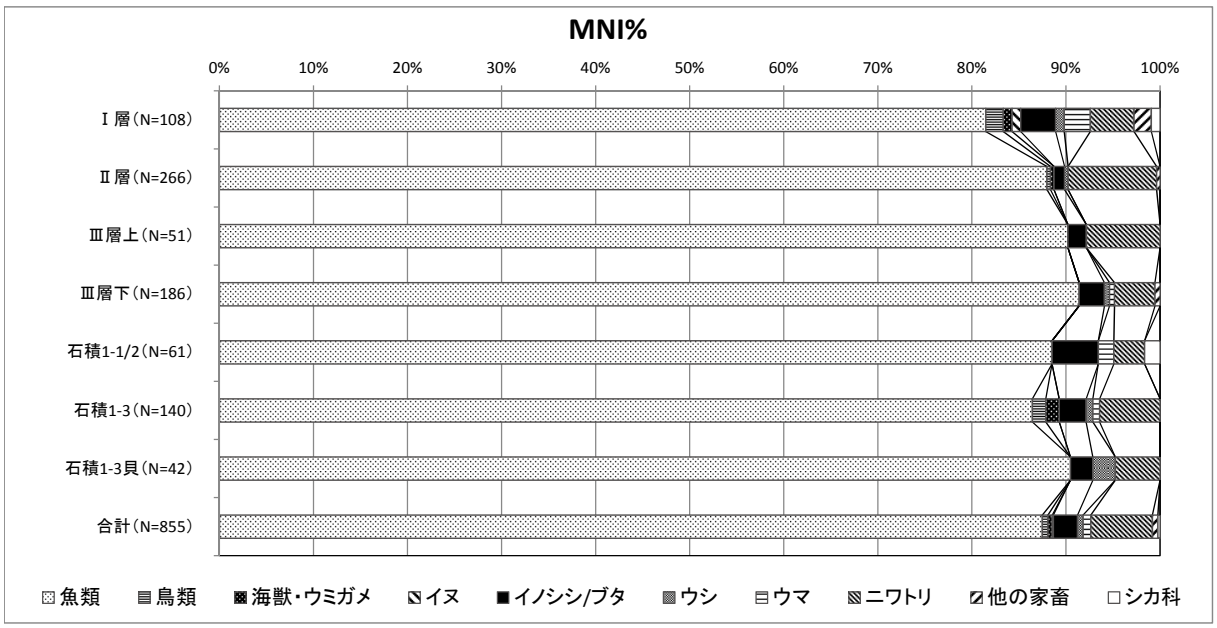
水洗：水洗選別資料からの検出種，PU：ピックアップ資料からの検出種．

軟骨魚綱	CHONDICHTHYES	水洗	PU
メジロザメ科	Carcharhinidae	○	
ミズワニ科？	Odontaspididae ?	○	
アオザメ属？	*Isurus* ?	○	
トビエイ科	Myliobatididae	○	○
硬骨魚綱	OSTEICHTHYES		
ニシン科	Clupeidae	○	
カタクチイワシ科	Engraulididae	○	
ウナギ属	*Anguilla*	○	
ウツボ科	Muraenidae	○	○
アナゴ科	Congridae	○	
コイ科	Cyprinidae	○	
エソ科	Synodontidae	○	
ダツ科	Belonidae	○	○
サヨリ科	Hemiramphidae	○	
トビウオ科	Exocoetidae	○	
イットウダイ科	Holocentridae	○	○
トウゴロウイワシ科？	Atherinidae ?	○	
ボラ科	Mugilidae	○	○
カマス科	Sphyraenidae	○	○
ハタ科（マハタ型）	Serranidae cf. *Epinephelus*	○	○
ハタ科（バラハタ型）	Serranidae cf. *Variola*		○
ハタ科（スジアラ型）	Serranidae cf. *Plectropomus*	○	○
キス科	Sillaginidae	○	
アジ類（小型種）	Carangidae (small)	○	○
アジ類（大型種）	Carangidae (large) spp.	○	○
ブリ属	*Seriola*		○
シイラ属	*Coryphaena*	○	○
ヒメジ科	Mullidae	○	
メジナ科	Girellidae	○	
イスズミ科	Kyphosidae	○	○
フエダイ亜科	Lutjaninae	○	○
コショウダイ属	*Plectorhynchus*	○	○
コトヒキ属	*Terapon*	○	
イトヨリダイ科	Nemipteridae	○	○
マダイ亜科	Pagrinae		○
ヘダイ	*Sparus sarba*		○
クロダイ属	*Acanrhpagrus*	○	○
ヨコシマクロダイ	*Monotaxis grandoculis*	○	○
ノコギリダイ属	*Gnathodentex*	○	
メイチダイ属（メイチダイ型）	*Gymnocranius* cf. *G. griseus*	○	○
メイチダイ属（シログイ型）	*Gymnocranius* cf. *G. japonicus*		○
キツネフエフキ	*Lethrinus miniatus*		○

（右段につづく）

硬骨魚綱（つづき）	OSTEICHTHYES (cont.)	水洗	PU
フエフキダイ属（アマミフエフキ型）	*Lethrinus* cf. *L.. amamianus*	○	○
フエフキダイ属（ハマフエフキ型）	*Lethrinus* cf. *L.. nebulosus*	○	○
チョウチョウウオ科	Chaetodontidae	○	
スズメダイ科	Pomacentridae	○	
ベラ科（シロクラベラ型）	Labridae cf. *Cherodon shoenleinii*	○	○
ベラ科（タキベラ型）	Labridae cf. "*Bodianus perditio* "		○
ベラ科A	Labridae A	○	○
ベラ科B	Labridae B	○	○
ベラ科（その他）	Labridae (others)		○
イロブダイ属	*Bolbometopon*		○
アオブダイ属	*Scarus* spp.	○	○
カマスサワラ	*Acanthocybium solandri*		○
ソウダガツオ属	*Auxis*	○	
スマ	*Euthynus affinis*		○
マグロ属	*Thunnus*		○
サバ科（小型種）	Scombridae (small)	○	
タチウオ科	Trichiuridae	○	○
ニザダイ科	Acanthrinidae	○	○
アイゴ属	*Siganus*	○	○
コチ科	Platycephalidae	○	○
モンガラカワハギ科	Balistidae	○	○
ハリセンボン科？	Diodontidae ?		○
両生綱	AMPHIBIA		
カエル類	Salientia	○	○
爬虫綱	RRPTILIA		
ヘビ類	Ophidia	○	
ウミガメ類	Cheloniidae		○
鳥綱	AVES		
カモ類	Anatidae (small)		○
ハト科	Columbidae		○
クイナ科	Rallidae		○
ニワトリ	*Galus galus*	○	○
哺乳綱	MAMMALIA		
トガリネズミ科	Soricidae	○	
ネズミ亜科	Murinae	○	○
イヌ	*Canis familiaris*		○
ネコ	*Felis catus*		○
ウマ	*Equus feres*		○
イノシシ／ブタ	*Sus scrofa*	○	○
シカ科（中型）	Cervidae (middle)		○
ヤギ	*Capra hircus*		○
ウシ	*Bos taurus*		○
ジュゴン	*Dugong dugon*		○





第 71 図　首里城跡銭蔵東地区から採集された脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の組成

上：NISP比，下：MNI比

イットウダイ科：前鰓蓋骨には長く鋭い棘をもつイットウダイ亜科のものが確認されたほか，歯骨にはアカマツカサに近似するものがみられた．

ハタ科：前上顎骨，歯骨，前鰓蓋骨にはマハタ，バラハタとスジアラに近似するものがあり，それぞれ「マハタ型」，「バラハタ型」，「スジアラ型」とした（ただし前上顎骨ではマハタとバラハタの判別は困難であるため，すべてマハタ型とした）．また主鰓蓋骨と擬鎖骨にはマハタに類するタイプとそれ以外のタイプがみられたが，後者については分類群との対応関係が不明なので，それぞれタイプ A・B とした．椎骨（第 1 椎骨を除く）はフエダイ科等との判別が確実でないことから「ハタ型」とした．

アジ科：カスミアジ・ギンガメアジまたはイトヒキアジの現生標本に近似するものを「アジ科（大型種）」，アジ科の小型種と思われるものを「アジ科（小型種）」とした．前者には形態にかなりの変異があり，複数種が混在していると推定される．後者はメアジに近似するものが多い．

フエフキダイ科：主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・腹椎でヨコシマクロダイ，主上顎骨・前上顎骨でノコギリダイ属，前上顎骨・方骨・口蓋骨でメイチダイ属とフエフキダイ属が同定された．メイチダイ属の前上顎骨にはメイチダイとシロダイに類するタイプ（それぞれ「メイチダイ型」，「シロダイ型」とした），フエフキダイ属の前上顎骨にはキツネフエフキおよびハマフエフキとアマミフエフキに類するタイプ（それぞれ「ハマフエフキ型」，「アマミフエフキ型」とした）がみられた（前上顎骨の同定は名島・樋泉 2008 による）．上記以外の部位はフエフキダイ科として一括したが，腹椎の後半～尾椎はタイ科などとの判別が難しいため「タイ型」とした．

ベラ科：咽頭骨には「シロクラベラ型」（菅原 2008），「タキベラ型」，「ベラ科 A」，「ベラ科 B」（金子 1996 を一部修正．樋泉 2005）およびこれら以外のタイプがみられた．椎骨については種ごとの形態変異が著しく，ベラ科としての確実な判別基準を把握できていないが，コブダイやシロクラベラの椎骨はそれぞれ特徴が比較的明確であり，前者に近似したものを「椎骨 A」，後者に近似したものを「椎骨 B」とした．

ブダイ科：咽頭骨・前上顎骨・歯骨によってイロブダイ属とアオブダイ属が同定された．

サバ科：骨によってカマスサワラ，ソウダガツオ属，スマ，マグロ属および比較的小型のサバ科が同定された．小型のサバ科は，腹椎はサバ属に似るが，尾椎はサバ属とカツオ類の中間的特徴を示しており，別属と考えられる（グルクマか）．なお比較的大型の尾柄部椎骨はスマ・カツオ・マグロ属の判別が困難であったため「カツオ・マグロ類」とした．

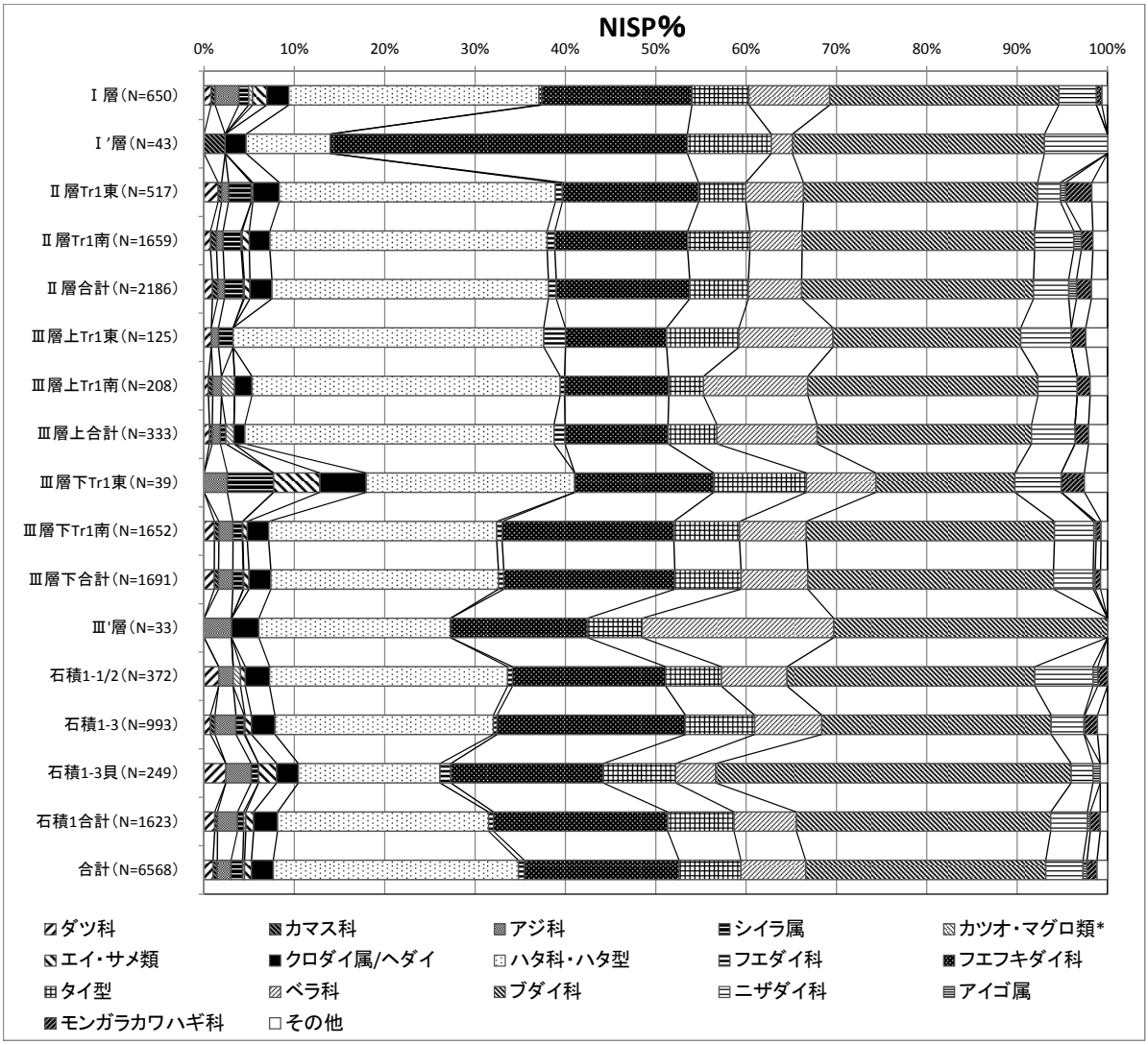
未同定真骨類：未同定真骨類のうち，石積 1 内 3 層出土の歯骨は大型で歯がみられない．同種と思われる資料は今帰仁城（樋泉ほか 2009），勝連城（菅原 2011）および首里城淑順門西地区（樋泉 2013）でも確認されている．

②組成

ピックアップ資料（第 72・73 図）：ハタ科，ブダイ科，フエフキダイ科が卓越し，ベラ科，ニザダイ科，クロダイ属も普通である．この傾向は本地区全体を通じて一貫しており，層準や地区によって若干の変動はあるものの，明確な傾向的変化は認められない．石積 1 の内外でも差はみられない．強いて変化点を挙げれば，石積 1 内の 3 層貝だまりから 2 層，石積 1 外のⅢ層下部からⅢ層上部・Ⅱ層にかけてハタ科が若干増加し，ブダイ科がわずかに減少するようにみえる．

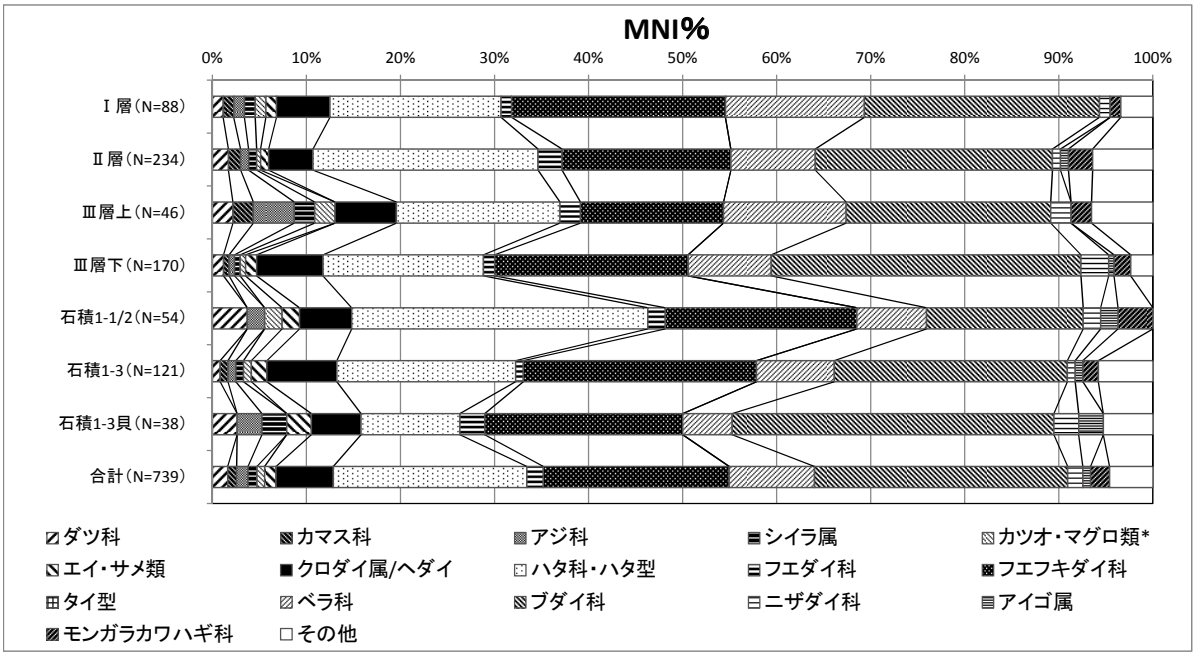
水洗選別資料：サンプルが得られているのは石積 1 内の 2 層・3 層・3 層貝だまりのみである．

メッシュ別の魚骨検出数（NISP）の比率（**第 76 図**）をみると，2 層・3 層では各サンプルともに大メッシュ（4mm または 5mm）と中メッシュ（2mm または 2.5mm）の検出資料が全体の 8～9 割前後を占めており，小メッシュ（1mm）の検出資料は比較的少ない（3 層貝だまりは比率不明）．3 層の試料 No.1000 では 1 mm の比率がやや高いが，本来的な層位差をとらえたものか，サンプル採取地点における偶然の偏りを示しているかは判断が難しい．なお，県センターの水洗試料（No.934・1000）と黒住氏水洗試料（No.991・992）を比較すると，後者では大メッシュの比率がやや高いが，これは使用されたメッシュサイズの違いに起因するものと思われる．



第 72 図　首里城跡銭蔵東地区から採集された魚類遺体（ピックアップ資料）の組成（NISP 比）

＊カツオ・マグロ類はカマスサワラを含む．石積1-1は石積1-2と合算した．



第 73 図　首里城跡銭蔵東地区から採集された魚類遺体（ピックアップ資料）の組成（MNI 比）

＊カツオ・マグロ類はカマスサワラを含む．石積1-1は石積1-2と合算した．

第 91 表　首里城跡銭蔵東地区から採集された魚類遺体（ピックアップ資料）の同定結果　※Tr：トレンチ

種類	部位	Ⅰ層										Ⅰ'層			Ⅱ層			
		A11	A12	A-B 10-11	A-B 10-12	B11	B 11-12	Tr1	Y-Z 12	不明・その他	合計	石積2/3裏込め	その他	合計	Tr1東	Tr1南	その他	合計
サメ類(ホシザメ型)	椎骨					1	1				2					1		1
サメ類(メジロザメ型)	椎骨			1	1	2	3	1			8				1	11		12
トビエイ科	歯										0							0
エイ目	椎骨										0					1		1
板鰓類？	椎骨？										0							0
ウツボ科	歯骨										0 / 0				1 /	/ 1		1 / 1
ウツボ科	椎骨					1					1							0
ダツ科	前上顎骨										0 / 0				1 / 1	/ 3		1 / 4
ダツ科	前上顎骨fr					/ 1					0 / 1				1 / 1			1 / 1
ダツ科	歯骨										0 / 0				1 / 1	1 / 2		2 / 3
ダツ科	歯骨fr										0 / 0							0 / 0
ダツ科	角骨										0 / 0							0 / 0
ダツ科	第1椎骨										0							0
ダツ科	椎骨	2					1			1	4				2	6		8
イットウダイ科	歯骨										0 / 0					1 / 1		1 / 1
イットウダイ科	角骨										0 / 0					1 /		1 / 0
イットウダイ科	前鰓蓋骨										0 / 0				1 / 1	3 / 1		4 / 2
イットウダイ科？	主上顎骨										0 / 0							0 / 0
ボラ科	主鰓蓋骨										0 / 0				/ 1	/ 2	1	0 / 4
ボラ科	椎骨										0				1	2		3
カマス科	前上顎骨										0 / 0							0 / 0
カマス科	歯骨									1 / 0	1 / 0				/ 1	3 / 2		3 / 3
カマス科	口蓋骨										0 / 0	1 /		1 /				0 / 0
カマス科	椎骨	2									2				1	6		7
マハタ型	前上顎骨	2 /			/ 1	/ 3	2 / 1	1 / 0	1 / 0		6 / 5	1 /		1 /	6 / 5	11 / 21		17 / 26
マハタ型	歯骨	1 / 1	1 /			1 / 1		0 / 1		3 / 1	6 / 4	1 / 1		1 / 1	5 / 7	12 / 16		17 / 23
マハタ型	前鰓蓋骨		/ 1	1 /		/ 1		0 / 1			1 / 3				1 / 4	8 / 3		9 / 7
バラハタ型	歯骨										0 / 0				1 / 2	1 / 1		2 / 3
バラハタ型	前鰓蓋骨										0 / 0							0 / 0
スジアラ型	前上顎骨							0 / 1		0 / 1	0 / 2					1 / 1		1 / 1
スジアラ型	歯骨	2 /						1 / 0			3 / 0				1 / 2	4 / 1		5 / 3
スジアラ型	前鰓蓋骨									1 / 0	1 / 0					2 /		2 / 0
ハタ科	主上顎骨	2 / 5		/ 1	/ 1	2 / 3	/ 1	1 / 3	1 / 0	0 / 1	6 / 15				4 / 2	18 / 12		22 / 14
ハタ科	角骨	2 / 1				1 / 1			0 / 1	1 / 1	4 / 4				1 / 6	20 / 28		21 / 34
ハタ科	方骨	/ 2		1 /		2 /		1 / 0			4 / 2				8 / 4	13 / 16		21 / 20
ハタ科	前鰓蓋骨			1 /	/ 1	1 /					2 / 1				5 / 2	6 / 9		11 / 11
ハタ科	主鰓蓋骨A		/ 1			/ 1					0 / 2				2 / 1	4 / 3		6 / 4
ハタ科	主鰓蓋骨B										0 / 0				/ 2	1 / 4		1 / 6
ハタ科	主鰓蓋骨										0 / 0				/ 2	2 / 1		2 / 3
ハタ科	擬鎖骨A	3 / 7	1 /	2 / 1	1 / 1	1 / 1		1 / 1	0 / 2	0 / 2	9 / 15				16 / 11	35 / 31		51 / 42
ハタ科	擬鎖骨B	2 /								0 / 1	2 / 1				2 / 1	3 / 4		5 / 5
ハタ科	第1椎骨								1		1					3		3
ハタ科？	主上顎骨									1 / 0	1 / 0							0 / 0
ハタ科？	方骨										0 / 0					/ 1		0 / 1
ハタ型	椎骨	19	1	3	4	14	8	16	8	7	80	1		1	55	213	2	270
アジ類(小型種)	尾椎										0					3		3
アジ類(大型種)	主上顎骨										0 / 0							0 / 0
アジ類(大型種)	前上顎骨		1 /								1 / 0							0 / 0
アジ類(大型種)	歯骨										0 / 0				1 /			1 / 0
アジ類(大型種)	角骨					/ 1					0 / 1							0 / 0
アジ類(大型種)	方骨										0 / 0					1 /		1 / 0
アジ類(大型種)	主鰓蓋骨										0 / 0							0 / 0
アジ類(大型種)	椎骨	3			1	2	2	2	4	1	15				3	6		9
アジ類(大型種)？	方骨										0 / 0							0 / 0
アジ類(大型種)？	尾椎										0					2		2
ブリ属	腹椎										0							0
シイラ属	前上顎骨										0 / 0				/ 1			0 / 1
シイラ属	歯骨										0 / 0							0 / 0
シイラ属	椎骨	4			1	1		1			7				12	33		45
イスズミ科	歯骨										0 / 0					/ 1		0 / 1
フエダイ科	主上顎骨	1 /									1 / 0				/ 1			0 / 1
フエダイ科	前上顎骨										0 / 0				/ 2	6 / 2		6 / 4
フエダイ科	歯骨					1 /					1 / 0							0 / 0
フエダイ科	角骨										0 / 0				1 /	3 / 1		4 / 1
フエダイ科	方骨										0 / 0					2 /	1 /	3 / 0
フエダイ科	前鰓蓋骨										0 / 0							0 / 0

第 91 表（つづき）

種類	部位	Ⅰ層										Ⅰ'層			Ⅱ層			
		A11	A12	A-B 10-11	A-B 10-12	B11	B 11-12	Tr1	Y-Z 12	不明・その他	合計	石積2/3裏込め	その他	合計	Tr1東	Tr1南	その他	合計
コショウダイ類	主上顎骨										0 / 0				/ 1			0 / 1
コショウダイ類	前上顎骨					1 /					1 / 0					2 / 1		2 / 1
コショウダイ類	歯骨										0 / 0					1 / 1		1 / 1
コショウダイ類	角骨										0 / 0				1 /			1 / 0
コショウダイ類	方骨										0 / 0				1 /			1 / 0
イトヨリダイ科？	主上顎骨										0 / 0							0 / 0
マダイ亜科	歯骨										0 / 0					1 /		1 / 0
ヘダイ	主上顎骨										0 / 0					/ 1		0 / 1
ヘダイ	前上顎骨										0 / 0		1 /	1 /		2 / 3		2 / 3
ヘダイ	歯骨		/ 1			1 /			1 / 0		2 / 1					1 / 2		1 / 2
ヘダイ	方骨										0 / 0							0 / 0
クロダイ属	主上顎骨	/ 1							0 / 1	0 / 1	0 / 3				3 / 1	4 / 4		7 / 5
クロダイ属	前上顎骨	/ 1	1 /	1 / 0		/ 1		1 / 1			3 / 3				2 / 2	4 / 5		6 / 7
クロダイ属	歯骨	1 / 1	/ 1								1 / 2				3 / 2	5 / 4		8 / 6
クロダイ属	角骨										0 / 0				/ 1	1 / 1		1 / 2
クロダイ属	方骨										0 / 0							0 / 0
クロダイ属	口蓋骨										0 / 0							0 / 0
クロダイ属	主鰓蓋骨	/ 1									0 / 1				1 /	1 /		2 / 0
メイチダイ属メイチダイ型	前上顎骨										0 / 0					2 /		2 / 0
メイチダイ属シロダイ型	前上顎骨							0 / 1			0 / 1					3 / 2		3 / 2
メイチダイ属	方骨							1 / 0			1 / 0				1 /	1 /		2 / 0
メイチダイ属？	主上顎骨										0 / 0					3 /		3 / 0
メイチダイ属？	歯骨	1 /									1 / 0					6 / 2		6 / 2
ヨコシマクロダイ	主上顎骨							0 / 1			0 / 1					1 /		1 / 0
ヨコシマクロダイ	前上顎骨										0 / 0				1 /	/ 1		1 / 1
ヨコシマクロダイ	歯骨					1 /			1 / 0		2 / 0	1 /		1 /		1 / 1		1 / 1
ヨコシマクロダイ	角骨										0 / 0	1 /		1 /				0 / 0
ヨコシマクロダイ	方骨										0 / 0							0 / 0
ヨコシマクロダイ	腹椎	2									2							0
キツネフエフキ	前上顎骨				1 /						1 / 0					2 /		2 / 0
アマミフエフキ型	前上顎骨					3 / 1		0 / 2		1 / 2	4 / 5	1 /		1 /	4 / 3	8 / 13		12 / 16
ハマフエフキ型	前上顎骨	1 / 1	1 /	2 / 1	/ 2	/ 3		1 / 2	1 / 1	4 / 1	10 / 11	3 / 2		3 / 2	5 / 6	8 / 12		13 / 18
フエフキダイ属	前上顎骨										0 / 0					1 /		1 / 0
フエフキダイ属	方骨										0 / 0				1 /	1 /	/ 1	2 / 1
フエフキダイ属	口蓋骨	/ 2	1	1 / 1	/ 1	2 / 3	1 / 1	0 / 4	0 / 1	3 / 0	8 / 13				4 / 7	14 / 14		18 / 21
フエフキダイ科	主上顎骨	2 / 4		1 / 0		1 /		1 / 0	1 / 1	1 / 0	7 / 5	3 /		3 /	4 / 8	9 / 14		13 / 22
フエフキダイ科	前上顎骨			0 / 1							0 / 1				1 /	3 /		4 / 0
フエフキダイ科	歯骨	4 / 2		0 / 2				1 / 0			5 / 4	/ 2		/ 2	7 / 5	21 / 24		28 / 29
フエフキダイ科	角骨	1 / 3							1 / 0	0 / 1	2 / 4	/ 1		/ 1	1 / 2	10 / 8		11 / 10
フエフキダイ科	方骨	/ 3								1 / 1	1 / 4				1 /	4 / 7		5 / 7
フエフキダイ科	前鰓蓋骨	1 / 1	/ 1			1 /				0 / 2	2 / 4	1 /		1 /	2 / 3	4 / 9		6 / 12
フエフキダイ科	主鰓蓋骨	1 /									1 / 0	1 /		1 /	1 / 1	6 / 5		7 / 6
フエフキダイ科	第1椎骨								1		1				1	2		3
フエフキダイ科	腹椎		2	1			3		1		7		1	1	9	22		31
タイ型	椎骨	14	4	1		4	1	9	3	5	41	4		4	27	114	1	142
シロクラベラ型	上咽頭骨										0 / 0							0 / 0
シロクラベラ型	下咽頭骨	1	2				1	1	1		6				1	1		2
タキベラ型	上咽頭骨					/ 1					0 / 1							0 / 0
タキベラ型	下咽頭骨										0							0
ベラ科A	下咽頭骨	1								1	2				2	8		10
ベラ科B	上咽頭骨	/ 1									0 / 1					2 /		2 / 0
ベラ科B	下咽頭骨	1				1		2			4					8		8
ベラ科(その他)	上咽頭骨										0 / 0							0 / 0
ベラ科(その他)	下咽頭骨										0							0
ベラ科	主上顎骨			0 / 1		1 /	1 /				2 / 1				/ 2	2 / 2		2 / 4
ベラ科	前上顎骨	1 / 1	/ 2			/ 3		1 / 2	0 / 4	1 / 1	3 / 13				3 / 5	18 / 6		21 / 11
ベラ科	歯骨	1 / 1	/ 1		/ 1	/ 1	1 /		1 / 1	0 / 1	3 / 6				1 / 3	10 / 7		11 / 10
ベラ科	前上顎/歯骨								1	1	2	1		1	1	1		2
ベラ科	角骨					1 /		1 / 0	1 / 0	0 / 1	3 / 1				4 /	4 / 1		8 / 1
ベラ科	方骨		/ 1								0 / 1					1 / 3		1 / 3
ベラ科	第1椎骨										0					1		1
ベラ科	椎骨A		2		1	2				3	8				10	15		25
ベラ科	椎骨B										0							0
ベラ科	椎骨			1							1				1	6		7
イロブダイ属	上咽頭骨		/ 1								0 / 1					1 / 1		1 / 1
イロブダイ属	前上顎骨							1 / 0			1 / 0				/ 1	2 / 1		2 / 2
イロブダイ属	歯骨		1 /	1 / 1				1 / 0	0 / 1		3 / 2				1 /	/ 4		1 / 4

第 91 表（つづき）

種類	部位	Ⅰ層										Ⅰ'層			Ⅱ層			
		A11	A12	A-B 10-11	A-B 10-12	B11	B 11-12	Tr1	Y-Z 12	不明・その他	合計	石積2/3裏込め	その他	合計	Tr1東	Tr1南	その他	合計
アオブダイ属	上咽頭骨	1 /			/ 1			1 / 0	0 / 1		2 / 2				2 / 3	8 / 9		10 / 12
アオブダイ属	下咽頭骨		1					1	1	1	4				2	11		13
アオブダイ属	前上顎骨	1 / 6	2 / 1			1 / 3		7 / 2	4 / 4	4 / 3	19 / 19	1 / 2		1 / 2	7 / 14	34 / 41		41 / 55
アオブダイ属	歯骨	1 / 2	/ 1	1 / 0	1 /	1 /	1 / 2	1 / 4	2 / 1	1 / 1	9 / 11	1 / 1		1 / 1	10 / 12	35 / 34		45 / 46
アオブダイ属	前上顎/歯骨										0 / 0							0 / 0
ブダイ科	主上顎骨					2 /		0 / 1		0 / 1	2 / 2	/ 1		/ 1	3 / 5	7 / 14		10 / 19
ブダイ科	角骨	/ 1	1 / 1			/ 1					1 / 3				1 / 4	1 / 4		2 / 8
ブダイ科	方骨	2 / 2				/ 2		2 / 1		1 / 0	5 / 5	1 /		1 /	1 / 6	11 / 17		12 / 23
ブダイ科	主鰓蓋骨	1 /						1 / 1		1 / 1	3 / 2				3 / 2	8 / 4		11 / 6
ブダイ科	第1椎骨										0					5		5
ブダイ科	椎骨	14	5	2	2	18	5	13	4	6	69	5		5	57	175		232
カマスサワラ	尾椎										0							0
スマ	尾椎										0					2		2
カツオ/スマ	腹椎										0							0
カツオ・マグロ類	尾椎(尾柄部)										0							0
マグロ属	椎骨			1	2						3							0
タチウオ科	前上顎骨										0 / 0							0 / 0
タチウオ科	腹椎										0						1	1
ニザダイ科	前上顎骨										0 / 0							0 / 0
ニザダイ科	方骨										0 / 0					2 /		2 / 0
ニザダイ科	舌顎骨										0 / 0				1 /			1 / 0
ニザダイ科	主鰓蓋骨										0 / 0				/ 1			0 / 1
ニザダイ科	擬鎖骨										0 / 0				1 / 1	/ 1		1 / 2
ニザダイ科	第1椎骨										0					1		1
ニザダイ科	椎骨	6	1	2		9	2	4	1	1	26	3		3	9	65		74
ニザダイ科	楯鱗							1			1					3		3
アイゴ属	前頭骨										0 / 0					1 / 1	/ 1	1 / 2
アイゴ属	椎骨										0				3	12	1	16
コチ科	歯骨										0 / 0							0 / 0
コチ科	椎骨										0					2		2
モンガラカワハギ科	前上顎骨										0 / 0				1 / 1	2 /		3 / 1
モンガラカワハギ科	歯骨										0 / 0							0 / 0
モンガラカワハギ科	歯					1					1					1		1
モンガラカワハギ科	方骨										0 / 0							0 / 0
モンガラカワハギ科	舌顎骨									0 / 1	0 / 1				2 / 1	3 /		5 / 1
モンガラカワハギ科	擬鎖骨										0 / 0				1 /	2 /		3 / 0
モンガラカワハギ科	腰帯							1			1				1	4		5
モンガラカワハギ科	第1椎骨										0					1		1
モンガラカワハギ科	椎骨										0				4	6		10
モンガラカワハギ科	背鰭棘						1				1				4	2		6
ハリセンボン科？	方骨							1 / 0			1 / 0							0 / 0
フグ科/ハリセンボン科	椎骨										0							0
真骨類(未同定)	主上顎骨										0 / 0					/ 1		0 / 1
真骨類(未同定)	歯骨										0 / 0							0 / 0
真骨類(未同定)	椎骨	1									1				1	5	1	7
真骨類(保留)	主上顎骨										0 / 0				/ 1			0 / 1
真骨類(保留)	角骨										0 / 0					/ 1		0 / 1
真骨類(保留)	方骨					1 /					1 / 0							0 / 0
真骨類(保留)	第1椎骨										0 / 0							0 / 0
真骨類(保留)	椎骨	9		6	4	8	7	3	4	5	46		2	2	53	92	1	146
真骨類(同定不可)	歯骨										0 / 0							0 / 0
真骨類(同定不可)	前上顎/歯骨										0							0
真骨類(同定不可)	方骨										0 / 0					/ 1		0 / 1
真骨類(同定不可)	椎骨	1	2			4	2	1	3	1	14		1	1	16	52	2	70
合計		165	43	39	28	126	48	112	67	83	711	41	5	46	587	1805	13	2405

メッシュ別の組成をみると，大メッシュ資料（4mm または 5mm. **第 77 図**）ではブダイ科を筆頭に，ハタ科・フエフキダイ科が優占し，ベラ科・ニザダイ科・クロダイ属などがこれに次ぐ点でピックアップ資料と同傾向だが，ダツ科，カマス科，アジ科，サバ科などの回遊魚類もやや多い（これらの骨は比較的小型であり，ピックアップ資料ではその多くが採集漏れとなっていると推測される）．なお回遊魚類は，全体としては上位に向けて増加傾向を示し，とくに２層ではサバ科の増加が目立つ．

中メッシュ資料（2mm または 2.5mm. **第 78 図**）ではアイゴ属が卓越するほか，アジ類，カマス科をはじめ，ダツ科，ニシン科，サバ科，トビウオ科，サヨリ科といった比較的小型の回遊魚類も全体として３～４割前後の比率を占める．ただし２層では回遊魚類が減少し(大メッシュとは逆傾向)，クロダイ属・ボラ科が増加する．いっぽう，ブダイ科，ハタ科，ニザダイ科などは大メッシュよりも少ない．

第 91 表（つづき）

種類	部位	Ⅲ層上			Ⅲ層下			Ⅲ'層			石積1						層不明	合計
		Tr1東	Tr1南	合計	Tr1東	Tr1南	合計	A12	Tr2	合計	1	2	3	3貝	その他	合計		
サメ類(ホシザメ型)	椎骨			0			0									0		3
サメ類(メジロザメ型)	椎骨			0	2	6	8					2	6			8	2	38
トビエイ科	歯			0			0						1	5		6		6
エイ目	椎骨			0		1	1									0		2
板鰓類？	椎骨？			0		1	1									0		1
ウツボ科	歯骨			0 / 0			0 / 0									0 / 0		1 / 1
ウツボ科	椎骨			0			0									0		1
ダツ科	前上顎骨			0 / 0		2 /	2 / 0					/ 2	/	1 / 1		1 / 3		4 / 7
ダツ科	前上顎骨fr			0 / 0			0 / 0						/ 1			0 / 1		1 / 3
ダツ科	歯骨		1	0 / 1		/ 1	0 / 1					/ 1	1 /			1 / 1		3 / 6
ダツ科	歯骨fr			0 / 0		/ 1	0 / 1									0 / 0		0 / 1
ダツ科	角骨			0 / 0		1 / 1	1 / 1						1 / 1			1 / 1		2 / 2
ダツ科	第1椎骨			0			0						1			1		1
ダツ科	椎骨	1		1		13	13					3	2	4		9		35
イットウダイ科	歯骨			0 / 0			0 / 0									0 / 0		1 / 1
イットウダイ科	角骨			0 / 0			0 / 0									0 / 0		1 / 0
イットウダイ科	前鰓蓋骨	1 / 1	1 /	2 / 1			0 / 0						2 / 1			2 / 1		8 / 4
イットウダイ科？	主上顎骨		1 /	1 / 0			0 / 0									0 / 0		1 / 0
ボラ科	主鰓蓋骨		1 /	1 / 0			0 / 0									0 / 0		1 / 4
ボラ科	椎骨		1	1		5	5							1		1		10
カマス科	前上顎骨		1 /	1 / 0		/ 1	0 / 1									0 / 0		1 / 1
カマス科	歯骨			0 / 0		1 /	1 / 0						1 /			1 / 0		6 / 3
カマス科	口蓋骨			0 / 0			0 / 0									0 / 0		1 / 0
カマス科	椎骨			0		6	6						4			4		19
マハタ型	前上顎骨	1 / 2	/ 5	1 / 7		10 / 16	10 / 16					1 / 2	8 / 4	3 / 2		12 / 8		47 / 62
マハタ型	歯骨	2 / 1	3 / 5	5 / 6	/ 2	17 / 15	17 / 17	1 / 1		1 / 1		4 / 4	12 / 9	1 / 1		17 / 14		64 / 66
マハタ型	前鰓蓋骨	/ 1	1 / 2	1 / 3		1 / 8	1 / 8					1 / 2	4 / 2			5 / 4	1 /	18 / 25
バラハタ型	歯骨			0 / 0		1 / 1	1 / 1									0 / 0		3 / 4
バラハタ型	前鰓蓋骨			0 / 0		4 / 2	4 / 2						1 /			1 / 0		5 / 2
スジアラ型	前上顎骨			0 / 0		5 / 1	5 / 1	/ 1		/ 1		1 / 1	1 / 1			2 / 2		8 / 7
スジアラ型	歯骨			0 / 0		3 /	3 / 0						1 / 2	1 /		2 / 2		13 / 5
スジアラ型	前鰓蓋骨			0 / 0		1 / 1	1 / 1					/ 1	1 / 1			1 / 2		5 / 3
ハタ科	主上顎骨		4 / 4	4 / 4		9 / 16	9 / 16	1 /		1 /		4 / 4	12 / 9	1 /		17 / 13		59 / 62
ハタ科	角骨	5 / 3	2 / 1	7 / 4	/ 1	9 / 14	9 / 15					5 / 6	14 / 9	3 /		22 / 15		63 / 72
ハタ科	方骨	5 /	1 / 3	6 / 3		13 / 8	13 / 8					/ 2	8 / 5	/ 2	1 /	9 / 9		53 / 42
ハタ科	前鰓蓋骨	/ 1	3 /	3 / 1		6 / 8	6 / 8					1 / 1	2 / 4	/ 2		3 / 7		25 / 28
ハタ科	主鰓蓋骨A		1 /	1 / 0		3 / 2	3 / 2					/ 2	2 / 3			2 / 5	/ 1	12 / 14
ハタ科	主鰓蓋骨B			0 / 0		/ 3	0 / 3						2 / 2			2 / 2		3 / 11
ハタ科	主鰓蓋骨		7 / 2	7 / 2		/ 2	0 / 2						15 / 18			15 / 18		24 / 25
ハタ科	擬鎖骨A	/ 3		0 / 3	/ 1	23 / 25	23 / 26				/ 1	12 / 13		/ 1	1 /	13 / 15		96 / 101
ハタ科	擬鎖骨B		1 /	1 / 0		3 / 3	3 / 3					/ 3	1 / 2	/ 1		1 / 6		12 / 15
ハタ科	第1椎骨			0		1	1							1		1		6
ハタ科？	主上顎骨			0 / 0			0 / 0									0 / 0		1 / 0
ハタ科？	方骨			0 / 0			0 / 0	1 /		1 /						0 / 0		1 / 1
ハタ型	椎骨	19	26	45	5	183	188	1	1	2		27	85	20		132	1	719
アジ類(小型種)	尾椎			0			0									0		3
アジ類(大型種)	主上顎骨			0 / 0	/ 1		0 / 1					/ 1	1 / 1			1 / 2		1 / 3
アジ類(大型種)	前上顎骨			0 / 0			0 / 0						1 / 1	/ 1		1 / 2		2 / 2
アジ類(大型種)	歯骨		/ 1	0 / 1			0 / 0						1 /			1 / 0		2 / 1
アジ類(大型種)	角骨		/ 1	0 / 1		1 / 1	1 / 1						1 / 1			1 / 1		2 / 4
アジ類(大型種)	方骨			0 / 0			0 / 0									0 / 0		1 / 0
アジ類(大型種)	主鰓蓋骨			0 / 0		/ 1	0 / 1							1 /		1 / 0		1 / 1
アジ類(大型種)	椎骨			0		23	23	1		1		4	16	5		25		73
アジ類(大型種)？	方骨			0 / 0			0 / 0					1 /				1 / 0		1 / 0
アジ類(大型種)？	尾椎			0			0									0		2
ブリ属	腹椎	1		1			0									0		1
シイラ属	前上顎骨			0 / 0			0 / 0									0 / 0		0 / 1
シイラ属	歯骨			0 / 0		1 /	1 / 0									0 / 0		1 / 0
シイラ属	椎骨	2		2	2	16	18						9	2		11		83
イスズミ科	歯骨			0 / 0			0 / 0									0 / 0		0 / 1
フエダイ科	主上顎骨	1 / 1		1 / 1		1 /	1 / 0						/ 1	/ 1		0 / 2		3 / 4
フエダイ科	前上顎骨	/ 1		0 / 1		2 / 1	2 / 1					/ 1	1 /	1 /		2 / 1		10 / 7
フエダイ科	歯骨			0 / 0		2 /	2 / 0									0 / 0		3 / 0
フエダイ科	角骨		1 /	1 / 0		/ 2	0 / 2							/ 1		0 / 1		5 / 4
フエダイ科	方骨			0 / 0		/ 1	0 / 1					/ 1	1 / 1			1 / 2		4 / 3
フエダイ科	前鰓蓋骨			0 / 0		/ 1	0 / 1									0 / 0		0 / 1

第 91 表（つづき）

種類	部位	Ⅲ層上			Ⅲ層下			Ⅲ'層			石積1						層不明	合計
		Tr1東	Tr1南	合計	Tr1東	Tr1南	合計	A12	Tr2	合計	1	2	3	3貝	その他	合計		
コショウダイ類	主上顎骨			0 / 0		/ 1	0 / 1									0 / 0		0 / 2
コショウダイ類	前上顎骨			0 / 0			0 / 0						/ 1			0 / 1		3 / 2
コショウダイ類	歯骨			0 / 0			0 / 0									0 / 0		1 / 1
コショウダイ類	角骨			0 / 0			0 / 0									0 / 0		1 / 0
コショウダイ類	方骨			0 / 0		/ 1	0 / 1									0 / 0		1 / 1
イトヨリダイ科？	主上顎骨			0 / 0			0 / 0							1 /		1 / 0		1 / 0
マダイ亜科	歯骨			0 / 0			0 / 0									0 / 0		1 / 0
ヘダイ	主上顎骨		/ 1	0 / 1			0 / 0						/ 2			0 / 2		0 / 4
ヘダイ	前上顎骨			0 / 0		1 / 1	1 / 1						1 / 1			1 / 1		5 / 5
ヘダイ	歯骨			0 / 0		2 / 1	2 / 1									0 / 0		5 / 4
ヘダイ	方骨			0 / 0		/ 1	0 / 1									0 / 0		0 / 1
クロダイ属	主上顎骨			0 / 0		5 / 1	5 / 1					/ 2	2 / 1	/ 1	1 /	3 / 4		15 / 13
クロダイ属	前上顎骨		/ 2	0 / 2		4 / 10	4 / 10					1 / 1	/ 5	1 / 1		2 / 7		15 / 29
クロダイ属	歯骨		/ 1	0 / 1	1 / 1	3 / 2	4 / 3	/ 1		/ 1		1 / 1	7 / 1	2 /		10 / 2		23 / 15
クロダイ属	角骨			0 / 0		2 / 2	2 / 2					/ 3	4 /	/ 1		4 / 4		7 / 8
クロダイ属	方骨			0 / 0		/ 1	0 / 1									0 / 0		0 / 1
クロダイ属	口蓋骨			0 / 0		/ 2	0 / 2									0 / 0		0 / 2
クロダイ属	主鰓蓋骨			0 / 0		1 /	1 / 0					1 /	/ 2			1 / 2		4 / 3
メイチダイ属メイチダイ型	前上顎骨	/ 1		0 / 1			0 / 0									0 / 0		2 / 1
メイチダイ属シロダイ型	前上顎骨			0 / 0		2 / 1	2 / 1						/ 2			0 / 2		5 / 6
メイチダイ属	方骨			0 / 0		1 / 1	1 / 1							/ 1		0 / 1		4 / 2
メイチダイ属？	主上顎骨			0 / 0		2 /	2 / 0					/ 1	1 /			1 / 1		6 / 1
メイチダイ属？	歯骨		/ 1	0 / 1		/ 2	0 / 2						3 /			3 / 0		10 / 5
ヨコシマクロダイ	主上顎骨			0 / 0			0 / 0									0 / 0		1 / 1
ヨコシマクロダイ	前上顎骨			0 / 0			0 / 0						2 / 2			2 / 2		3 / 3
ヨコシマクロダイ	歯骨			0 / 0			0 / 0						/ 1	1 /		1 / 1		5 / 2
ヨコシマクロダイ	角骨			0 / 0			0 / 0									0 / 0		1 / 0
ヨコシマクロダイ	方骨			0 / 0		/ 1	0 / 1					1 /				1 / 0		1 / 1
ヨコシマクロダイ	腹椎			0		5	5						3			3		10
キツネフエフキ	前上顎骨			0 / 0		1	0 / 1									0 / 0		3 / 1
アマミフエフキ型	前上顎骨	2 /	1 / 3	3 / 3	/ 1	8 / 11	8 / 12					3 / 2	4 / 14			7 / 16		35 / 52
ハマフエフキ型	前上顎骨	1 /	1 /	2 / 0	/ 1	14 / 18	14 / 19				1 /	5 / 5	9 / 11	2 / 1		17 / 17		59 / 67
フエフキダイ属	前上顎骨			0 / 0			0 / 0						/ 1			0 / 1		1 / 1
フエフキダイ属	方骨			0 / 0		1 /	1 / 0						/ 1	1 / 2		1 / 3		4 / 4
フエフキダイ属	口蓋骨	2 /	4 / 3	6 / 3	1 / 1	21 / 17	22 / 18	/ 1	1 /	1 / 1	/ 1	3 / 1	15 / 16	6 / 1	1	24 / 20		79 / 76
フエフキダイ科	主上顎骨	/ 1	/ 2	0 / 3	/ 1	17 / 23	17 / 24	/ 2		/ 2		3 / 3	13 / 15	1 / 2		17 / 20		57 / 76
フエフキダイ科	前上顎骨			0 / 0		4 / 2	4 / 2						4 / 2	/ 2		4 / 4		12 / 7
フエフキダイ科	歯骨	1 / 2	/ 4	1 / 6		24 / 24	24 / 24					6 / 9	18 / 13	6 / 1		30 / 23		88 / 88
フエフキダイ科	角骨		1 / 1	1 / 1	/ 1	16 / 17	16 / 18					3 / 3	6 / 10	3 / 2		12 / 15		42 / 49
フエフキダイ科	方骨	1 /	1 /	2 / 0		9 / 16	9 / 16					/ 2	3 / 6	1 /		4 / 8		21 / 35
フエフキダイ科	前鰓蓋骨	/ 1		0 / 1		5 / 12	5 / 12					3 / 1	3 / 4			6 / 5		20 / 34
フエフキダイ科	主鰓蓋骨		1 /	1 / 0		4 / 4	4 / 4					1 / 1	4 / 5	1 / 1		6 / 7		20 / 17
フエフキダイ科	第1椎骨			0		2	2						2	1		3		9
フエフキダイ科	腹椎	2	1	3		29	29	1		1		5	14	6		25		97
タイ型	椎骨	10	8	18	4	120	124	2		2		23	76	20		119		450
シロクラベラ型	上咽頭骨			0 / 0		2 /	2 / 0									0 / 0		2 / 0
シロクラベラ型	下咽頭骨	1		1		5	5	4		4			5			5		23
タキベラ型	上咽頭骨			0 / 0		1 / 2	1 / 2									0 / 0		1 / 3
タキベラ型	下咽頭骨			0		1	1									0		1
ベラ科A	下咽頭骨		1	1		3	3				1					1		17
ベラ科B	上咽頭骨			0 / 0		2 /	2 / 0	/ 1		/ 1		1 /	1 /			2 / 0		6 / 2
ベラ科B	下咽頭骨	2	1	3		4	4	1		1		2	2	1		5		25
ベラ科(その他)	上咽頭骨		/ 1	0 / 1			0 / 0									0 / 0		0 / 1
ベラ科(その他)	下咽頭骨			0		1	1									0		1
ベラ科	主上顎骨	1 /		1 / 0		4	0 / 4				/ 1		2 / 5			2 / 6		7 / 15
ベラ科	前上顎骨	1 / 2	4 / 3	5 / 5	1 /	12 / 11	13 / 11					3 / 4	7 / 10			10 / 14	1 /	53 / 54
ベラ科	歯骨		2 / 2	2 / 2	1 /	12 / 8	13 / 8					3 / 2	6 / 5	1 /		10 / 7		39 / 33
ベラ科	前上顎/歯骨			0		7	7							1		1		13
ベラ科	角骨		1 / 1	1 / 1		1 / 2	1 / 2					1 /	1 / 4	/ 1		2 / 5		15 / 10
ベラ科	方骨			0 / 0		2 / 2	2 / 2							1 /		1 / 0		4 / 6
ベラ科	第1椎骨		1	1			0							1		1		3
ベラ科	椎骨A	4	6	10	1	28	29	1		1		5	24	4		33		106
ベラ科	椎骨B			0			0						1			1		1
ベラ科	椎骨	2	1	3		12	12					4	1	1		6		29
イロブダイ属	上咽頭骨			0 / 0		1 /	1 / 0	1 /		1 /						0 / 0		3 / 2
イロブダイ属	前上顎骨		1 / 1	1 / 1		/ 2	0 / 2						/ 2	1 /		1 / 2		5 / 7
イロブダイ属	歯骨			0 / 0		2 / 1	2 / 1	1 /		1 /			/ 3			0 / 3		7 / 10

第 91 表（つづき）

種類	部位	Ⅲ層上			Ⅲ層下			Ⅲ'層			石積1						層不明	合計
		Tr1東	Tr1南	合計	Tr1東	Tr1南	合計	A12	Tr2	合計	1	2	3	3貝	その他	合計		
アオブダイ属	上咽頭骨	1 /	1 /	2 / 0		2 / 4	2 / 4	1 /		1 /	1	1 / 1	/ 6			2 / 7		19 / 25
アオブダイ属	下咽頭骨		3	3	1	11	12					3	4	1		8		40
アオブダイ属	前上顎骨	3 / 1	5 / 8	8 / 9	/ 1	46 / 53	46 / 54	2 / 1		2 / 1		6 / 9	27 / 22	12 / 3	2 / 1	47 / 35		164 / 175
アオブダイ属	歯骨	3 / 4	4 / 4	7 / 8	/ 1	30 / 36	30 / 37					6 / 4	22 / 13	7 / 8		35 / 25		127 / 128
アオブダイ属	前上顎/歯骨			0	1		1									0		1
ブダイ科	主上顎骨	/ 1	3 / 1	3 / 2		17 / 14	17 / 14				/ 1	5 / 1	3 / 4	2 / 1		10 / 7		42 / 45
ブダイ科	角骨		1 /	1 / 0		6 / 7	6 / 7					1 / 1	5 / 1	3 / 4		9 / 6		19 / 24
ブダイ科	方骨	2 /	1 / 4	3 / 4		17 / 19	17 / 19				/ 1	2 / 3	9 / 8	5 / 2		16 / 14		54 / 65
ブダイ科	主鰓蓋骨		2 /	2 / 0		11 / 7	11 / 7					3 / 3	7 / 6	3 / 3		13 / 12		40 / 27
ブダイ科	第1椎骨			0		6	6					3	3	1		7		18
ブダイ科	椎骨	11	14	25	2	162	164	4		4		47	107	42	2	198	2	699
カマスサワラ	尾椎			0			0					3				3		3
スマ	尾椎		1	1			0									0		3
カツオ/スマ	腹椎			0			0						1			1		1
カツオ・マグロ類	尾椎(尾柄部)		2	2		1	1									0		3
マグロ属	椎骨			0			0									0		3
タチウオ科	前上顎骨			0 0 0			0 / 0						/ 1			0 / 1		0 / 1
タチウオ科	腹椎			0			0									0		1
ニザダイ科	前上顎骨			0 / 0			0 / 0							/ 1		0 / 1		0 / 1
ニザダイ科	方骨			0 / 0			0 / 0									0 / 0		2 / 0
ニザダイ科	舌顎骨			0 / 0		3 / 5	3 / 5					/ 1	/ 1	/ 1		0 / 3		4 / 8
ニザダイ科	主鰓蓋骨			0 / 0		/ 1	0 / 1						/ 1			0 / 1		0 / 3
ニザダイ科	擬鎖骨	1 /		1 / 0		/ 3	0 / 3						1 /			1 / 0		3 / 5
ニザダイ科	第1椎骨			0		2	2							1		1		4
ニザダイ科	椎骨	6	7	13	2	47	49					23	27	3		53		218
ニザダイ科	楯鱗		2	2		11	11						6			6		23
アイゴ属	前頭骨			0 / 0			0 / 0									0 / 0		1 / 2
アイゴ属	椎骨			0		4	4					2	1	2		5	1	26
コチ科	歯骨			0 / 0			0 / 0						/ 2			0 / 2		0 / 2
コチ科	椎骨			0		2	2						1			1		5
モンガラカワハギ科	前上顎骨			0 / 0			0 / 0						1 /			1 / 0		4 / 1
モンガラカワハギ科	歯骨			0			0 / 0					1 /	1 /			2 / 0		2 / 0
モンガラカワハギ科	歯			0			0						1			1		3
モンガラカワハギ科	方骨			0 / 0		1 /	1 / 0									0 / 0		1 / 0
モンガラカワハギ科	舌顎骨	1 /		1 / 0		1 / 1	1 / 1						2 /			2 / 0		9 / 3
モンガラカワハギ科	擬鎖骨			0 / 0			0 / 0					2 / 1	1 / 1			3 / 2		6 / 2
モンガラカワハギ科	腰帯			0		3	3						2			2		11
モンガラカワハギ科	第1椎骨			0			0						5			5		6
モンガラカワハギ科	椎骨	1	2	3	1	1	2									0		15
モンガラカワハギ科	背鰭棘		1	1		2	2									0		10
ハリセンボン科？	方骨			0 / 0		1 /	1 / 0									0 / 0		2 / 0
フグ科/ハリセンボン科	椎骨			0			0						1			1		1
真骨類(未同定)	主上顎骨			0 / 0			0 / 0									0 / 0		0 / 1
真骨類(未同定)	歯骨			0 / 0		1 /	1 / 0									0 / 0		1 / 0
真骨類(未同定)	椎骨	1		1	1 /	1	2						2			2		13
真骨類(保留)	主上顎骨			0 / 0			0 / 0									0 / 0		0 / 1
真骨類(保留)	角骨			0 / 0		1 /	1 / 0							/ 1		0 / 1		1 / 2
真骨類(保留)	方骨			0 / 0			0 / 0									0 / 0		1 / 0
真骨類(保留)	第1椎骨			0		1	1							1		1		2
真骨類(保留)	椎骨	6	7	13	4	80	84	1		1		15	56	13		84	1	377
真骨類(同定不可)	歯骨			0 / 0			0 / 0	1 /		1 /						0 / 0		1 / 0
真骨類(同定不可)	前上顎/歯骨			0		1	1									0		1
真骨類(同定不可)	方骨			0 / 0			0 / 0						1 /			1 / 0		1 / 1
真骨類(同定不可)	椎骨	1	4	5	4	52	56	3		3		3	20	5		28	1	178
合計		132	219	351	47	1787	1834	36	2	38	8	382	1070	269	9	1738	11	7134

小メッシュ資料（1mm. **第 79 図**）では検出資料数が少ないため傾向を読み取りにくいが（とくに２層），ニシン科が最も多い点では共通しており，３層と同貝だまりではアイゴ属も多い.

２層・３層の各サンプルについて，全メッシュを合算（半量分析のメッシュの資料数は２倍にして加算）した全体的な組成をみると，NISP（**第 80 図**）では全体的にブダイ科とアイゴ属が最も多く，アジ科，カマス科，ハタ科がこれに次ぐ．その他にもニシン科，ダツ科，サバ科，クロダイ属，フエフキダイ科，ベラ科，ニザダイ科なども普通である．MNI（**第 81 図**）では，資料数が少ない（とくに２層）ことも一因ではあるが，卓越した種類はみられず，上記の主要種が僅差で混在している．層位的にみても２層でサバ科が増加する以外は明確な変化は認められない.

第 92 表　首里城跡銭蔵東地区から採集された両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類遺体（ピックアップ資料）の同定結果　※Tr：トレンチ

種類	部位	残存位置	Ⅰ層										Ⅰ'層	Ⅱ層			
			A11	A12	A-B 10-11	A-B 10-12	B11	B 11-12	Tr1	Y-Z 12	不明・その他	合計	石積2/3裏込め	Tr1東	Tr1南	その他	合計
カエル	四肢骨	m				1						1					
ウミガメ	指骨																
カモ類	上腕骨	m-d					/ 1					0 / 1					
カモ類	中手骨	<p->-d					/ 1					0 / 1					
カモ類？	烏口骨	ほぼw					/ 1					0 / 1					
カモ類？	尺骨	m-d					1 /					1 / 0					
ハト科	尺骨	w										0 / 0			1 /		1 / 0
ハト科	尺骨	p	/ 1									0 / 1					
ハト科	尺骨	p-m															
クイナ科	足根中足骨	m-d															
ニワトリ	烏口骨	w	1 /									1 / 0		3 / 1			3 / 1
ニワトリ	烏口骨	肩端				1 /					2 /	3 / 0		4 / 5	2 / 6		6 / 11
ニワトリ	烏口骨	中間部												2 /			2 / 0
ニワトリ	烏口骨	胸骨端												5 / 1	3 / 1		8 / 2
ニワトリ	肩甲骨		/ 1								1 /	1 / 1		1 / 3	4 / 4		5 / 7
ニワトリ	上腕骨	w															
ニワトリ	上腕骨	p								1 /		1 / 0		/ 1	1 / 1		1 / 2
ニワトリ	上腕骨	p-m							1 /			1 / 0		1 /	2 /		3 / 0
ニワトリ	上腕骨	<p->-m													/ 1		0 / 1
ニワトリ	上腕骨	m-(d-)												1 /			1 / 0
ニワトリ	上腕骨	m-d			1						1 /	1 1 0		1 /			1 / 0
ニワトリ	上腕骨	d	1 /		/ 1							1 / 1		/ 1	4 / 4		4 / 5
ニワトリ	橈骨	p												1 /	1 /		2 / 0
ニワトリ	橈骨	p-m													/ 1		0 / 1
ニワトリ	橈骨	d									1 /	1 / 0			3 /		3 / 0
ニワトリ	尺骨	w															0 / 0
ニワトリ	尺骨	p			1 /						1 /	2 / 0		3 /	1 / 2		4 / 2
ニワトリ	尺骨	p-m					/ 1					0 / 1			1 / 1		1 / 1
ニワトリ	尺骨	p-<d->															
ニワトリ	尺骨	<p->									/ 1	0 / 1					
ニワトリ	尺骨	<p->-m															
ニワトリ	尺骨	m-d					/ 1					0 / 1		/ 1	/ 1		0 / 2
ニワトリ	尺骨	d												1 /	/ 1		1 / 1
ニワトリ	中手骨	w													1 /		1 / 0
ニワトリ	中手骨	p						1 /				1 / 0			1 /		1 / 0
ニワトリ	中手骨	p-m												/ 1	/ 2		0 / 3
ニワトリ	中手骨	m-d					1 /					1 / 0					
ニワトリ	中手骨	<d->												/ 1			0 / 1
ニワトリ	中手骨	d													1 /		1 / 0
ニワトリ	寛骨	臼													/ 1		0 / 1
ニワトリ	大腿骨	w												1 /	1 /		2 / 0
ニワトリ	大腿骨	p			1 /							1 / 0		3 / 3	6 / 5		9 / 8
ニワトリ	大腿骨	p-m												1 /			1 / 0
ニワトリ	大腿骨	<p->													1 /		1 / 0
ニワトリ	大腿骨	m-<d->													1 /		1 / 0
ニワトリ	大腿骨	m-(d-)													1 /		1 / 0
ニワトリ	大腿骨	m-d												/ 1	1 /		1 / 1
ニワトリ	大腿骨	<d->							1 /			1 / 0					
ニワトリ	大腿骨	d	1 /							1 /		2 / 0		6 / 1	5 / 2		11 / 3
ニワトリ	脛骨	p					/ 1				/ 1	0 / 2		/ 3	4 /		4 / 3
ニワトリ	脛骨	p-m												1 /	1 /		2 / 0
ニワトリ	脛骨	(p-)				/ 1						0 / 1		1 /			1 / 0
ニワトリ	脛骨	(p-)-m									1 /	1 / 0					
ニワトリ	脛骨	m-d		/	1				/ 1			1 / 1		/ 1	2 / 1		2 / 2
ニワトリ	脛骨	<d->	/ 1	/	1							1 / 1		3 / 1	5 / 2		8 / 3
ニワトリ	脛骨	d					/ 1				/ 1	0 / 2	1 /	3 / 2	6 / 7		9 / 9
ニワトリ	足根中足骨	p	1 /	/	2							3 / 0		1 / 7	5 / 5		6 / 12
ニワトリ	足根中足骨	p-m				/ 1	/ 1					0 / 2					
ニワトリ	足根中足骨	p-<d->															
ニワトリ	足根中足骨	<p->-m				1 /						1 / 0					
ニワトリ	足根中足骨	<p->-<d->													1 /		1 / 0
ニワトリ	足根中足骨	m												1 / 1	/ 2		1 / 3
ニワトリ	足根中足骨	m-<d->															
ニワトリ	足根中足骨	m-(d-)												/ 1			0 / 1
ニワトリ	足根中足骨	m-d				1 /						1 / 0		2 /	1 / 1		3 / 1
ニワトリ	足根中足骨	(d-)													1 /		1 / 0
ニワトリ	足根中足骨	d			1 /		/ 1		1 /			2 / 1		1 / 4	4 / 4		5 / 8
ニワトリ	複合仙骨													1	2		3
ニワトリ?	上腕骨	p-<d->															
ニワトリ?	上腕骨	(p-)												1 /	1 /		2 / 0
ニワトリ?	上腕骨	<p->												1 /			1 / 0
ニワトリ?	上腕骨	<p->-m			/ 1							0 / 1			/ 1		0 / 1
ニワトリ?	上腕骨	m					2 /		1 /			3 / 0		4 / 1	2 / 1		6 / 2
ニワトリ?	上腕骨	m-<d->													1 /		1 / 0
ニワトリ?	上腕骨	<d->					/ 1					0 / 1		2 / 3	/ 1		2 / 4
ニワトリ?	橈骨	p													1 /		1 / 0
ニワトリ?	橈骨	p-m												/ 1			0 / 1
ニワトリ?	橈骨	m-<d->															
ニワトリ?	橈骨	<d->					1 /					1 / 0		/ 1			0 / 1
ニワトリ?	尺骨	(p-)-m													/ 1		0 / 1
ニワトリ?	尺骨	<p->													/ 1		0 / 1
ニワトリ?	尺骨	<p->-m												1 /			1 / 0
ニワトリ?	尺骨	m												1	2		3
ニワトリ?	尺骨	m-<d->					1 /					1 / 0					
ニワトリ?	尺骨	m-(d-)												1 /			1 / 0
ニワトリ?	尺骨	<d->													/ 1		0 / 1
ニワトリ?	尺骨	(d-)															

第 92 表（つづき）

種類	部位	残存位置	Ⅰ層										Ⅰ'層	Ⅱ層			
			A11	A12	A-B 10-11	A-B 10-12	B11	B 11-12	Tr1	Y-Z 12	不明・その他	合計	石積2/3裏込め	Tr1東	Tr1南	その他	合計
ニワトリ?	大腿骨	p													1		1
ニワトリ?	大腿骨	<p->															0 / 0
ニワトリ?	大腿骨	<p->-m												/ 1	1 / 2		1 / 3
ニワトリ?	大腿骨	m	1 /				/ 1					1 / 1		/ 3	3 /		3 / 3
ニワトリ?	大腿骨	m-<d->				/ 1						0 / 1					
ニワトリ?	大腿骨	<d->				/ 1						0 / 1		/ 1	1 / 2		1 / 3
ニワトリ?	大腿骨	(d-)															
ニワトリ?	脛骨	<p->												/ 1	/ 1		0 / 2
ニワトリ?	脛骨	m							1 /			1 / 0		3 / 2	3 / 5		6 / 7
ニワトリ?	脛骨	m-<d->															
ニワトリ?	脛骨	<d->									/ 1	0 / 1		/ 4	/ 7		0 / 11
ニワトリ?	足根中足骨	<p->												1 /	1 /		2 / 0
ニワトリ?	足根中足骨	<p->-m															
ニワトリ?	足根中足骨	m	1									1		2	1		3
ニワトリ?	足根中足骨	m-<d->			/ 1					1 /		1 / 1					
ニワトリ?	足根中足骨	<d->												2 /	4 / 1		6 / 1
ニワトリ?	足根中足骨	d												1 /			1 / 0
ニワトリ?	胸骨														1		1
ニワトリ?	複合仙骨														2		2
鳥類(未同定)	橈骨	p-m					1					1					
鳥類(同定不可:ごく小)	上腕骨	w					1 /					1 / 0					
鳥類(同定不可:ごく小)	大腿骨	w					/ 1					0 / 1					
鳥類(同定不可:ごく小)	足根中足骨	w					1 /					1 / 0					
鳥類(同定不可:中型)	上腕骨	<p->-<d->					1 /					1 / 0					
鳥類(同定不可:中型)	上腕骨	m					/ 1					0 / 1					
鳥類(同定不可)	上腕骨	m					1					1		1	2		3
鳥類(同定不可)	橈骨	m												10	3		13
鳥類(同定不可)	尺骨	m															0
鳥類(同定不可)	脛骨	<d->													2 /		2 / 0
鳥類(同定不可)	足根中足骨	(d-)												1 /			1 / 0
鳥類(同定不可)	足根中足骨	d												/ 1			0 / 1
鳥類(同定不可)	指骨									1	1	2		3			3
鳥類(同定不可)	四肢骨	m	1	1	3	5	3			1	4	18		21	18		39
鳥類(同定不可)	椎骨		1									1			1		1
ネズミ科	下顎骨														/ 1		0 / 1
ネズミ科	上腕骨																
ネズミ科	寛骨		1 /			1 /						2 / 0					
ネズミ科	大腿骨													1 /	1 / 1		2 / 1
ネズミ科	脛骨						1 /					1 / 0	1 /		1 / 1		1 / 1
イヌ	下顎	C					1 /					1 / 0					
イヌ	大腿骨	m															
ネコ	上腕骨	<d->									1 /	1 / 0					
ネコ	上腕骨	d									/ 1	0 / 1					
ネコ	中手骨	w														1	1
シカ科(中型)	肩甲骨	m-d															
シカ科(中型)	中足骨	p-m				1 /						1 / 0					
イノシシ/ブタ	頬骨			/ 1		/ 1						0 / 2					
イノシシ/ブタ	側頭骨+頬骨																
イノシシ/ブタ	側頭骨	関節結節															
イノシシ/ブタ	頭頂骨									1 /		1 / 0					
イノシシ/ブタ	後頭骨	後頭顆								1 /		1 / 0			1 / 1		1 / 1
イノシシ/ブタ	後頭骨	fr								2		2					
イノシシ/ブタ	上顎骨	表5参照		2								2					
イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	表5参照		1						1	1	3					
イノシシ/ブタ	下顎骨	表5参照					1	1		1		3			1		1
イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	表5参照					4			1	1	6					
イノシシ/ブタ	環椎	fr					1					1			3		3
イノシシ/ブタ	軸椎																
イノシシ/ブタ	軸椎	fr															
イノシシ/ブタ	頸椎	椎体													2		2
イノシシ/ブタ	頸椎	fr												1			1
イノシシ/ブタ	胸椎	椎体	1									1					
イノシシ/ブタ	胸椎	棘突起	1	2								3		3	3		6
イノシシ/ブタ	胸椎	fr													1		1
イノシシ/ブタ	腰椎	椎体						1				1					
イノシシ/ブタ	腰椎	側突起															
イノシシ/ブタ	腰椎	fr				1	1					2		2	2		4
イノシシ/ブタ	仙椎												1				
イノシシ/ブタ	仙椎	fr															
イノシシ/ブタ	尾椎													1			1
イノシシ/ブタ	肩甲骨	m					/ 1					0 / 1		/ 1			0 / 1
イノシシ/ブタ	肩甲骨	m-d		/ 1								0 / 1					
イノシシ/ブタ	肩甲骨	d	/ 1					1 /				1 / 1	1 /	1 / 1			1 / 1
イノシシ/ブタ	上腕骨	(p)									/ 1	0 / 1					
イノシシ/ブタ	上腕骨	(p-)					1 /					1 / 0					
イノシシ/ブタ	上腕骨	(p-)-m															
イノシシ/ブタ	上腕骨	(p-)-<d->															
イノシシ/ブタ	上腕骨	(p-)-(d-)															
イノシシ/ブタ	上腕骨	m					/ 1					0 / 1					
イノシシ/ブタ	上腕骨	m-<d->							1 /			1 / 0					
イノシシ/ブタ	上腕骨	m-d					1 /					1 / 0					
イノシシ/ブタ	上腕骨	<d->					1 /			ブタ→ 1		1 1 0					
イノシシ/ブタ	上腕骨	(d-)										0 / 0					
イノシシ/ブタ	上腕骨	d								1 /		1 / 0					
イノシシ/ブタ	上腕骨	(d)															

第 92 表（つづき）

種類	部位	残存位置	Ⅰ層										Ⅰ'層	Ⅱ層			
			A11	A12	A-B 10-11	A-B 10-12	B11	B 11-12	Tr1	Y-Z 12	不明・その他	合計	石積2/3裏込め	Tr1東	Tr1南	その他	合計
イノシシ/ブタ	橈骨	w															
イノシシ/ブタ	橈骨	p					1 /					1 / 0		1 /			1 / 0
イノシシ/ブタ	橈骨	p-m					/ 1					0 / 1					
イノシシ/ブタ	橈骨	p-(d-)					/ 1		1 /			1 / 1					
イノシシ/ブタ	橈骨	(p-)					1 /					1 / 0		/ 1			0 / 1
イノシシ/ブタ	橈骨	<p->															
イノシシ/ブタ	橈骨	<p->-<d->															
イノシシ/ブタ	橈骨	m					/ 1					0 / 1					
イノシシ/ブタ	橈骨	m-(d-)															
イノシシ/ブタ	橈骨	m-d															
イノシシ/ブタ	橈骨	(d-)															
イノシシ/ブタ	橈骨	(d)		/ 1				1 /				1 / 1			1 /		0 / 1
イノシシ/ブタ	尺骨	滑車切痕						1 / 1	1 /			2 / 1					
イノシシ/ブタ	尺骨	滑車切痕-m												1 /			1 / 0
イノシシ/ブタ	尺骨	m								1 /		1 / 0			1 /		0 / 1
イノシシ/ブタ	尺骨	m-(d-)				/ 1						0 / 1					
イノシシ/ブタ	尺骨	d						1 /				1 / 0					
イノシシ/ブタ	中間手根骨													/ 1			0 / 1
イノシシ/ブタ	第3手根骨																
イノシシ/ブタ	第4手根骨							/ 1				0 / 1					
イノシシ/ブタ	第2中手骨	w	1 /						1 /			2 / 0		/ 1			0 / 1
イノシシ/ブタ	第2中手骨	p					1 /					1 / 0					
イノシシ/ブタ	第2中手骨	p-m															
イノシシ/ブタ	第2中手骨	p-(d-)												1 /			1 / 0
イノシシ/ブタ	第3中手骨	p															
イノシシ/ブタ	第3中手骨	p-m							1 /			1 / 0		1 /	1 / 1		2 / 1
イノシシ/ブタ	第3中手骨	p-(d-)					1 /			/ 1		1 / 1			1 /		1 / 0
イノシシ/ブタ	第4中手骨	w															
イノシシ/ブタ	第4中手骨	p				/ 1						0 / 1					
イノシシ/ブタ	第4中手骨	p-m	1 /									1 / 0					
イノシシ/ブタ	第4中手骨	p-(d-)													1 /		1 / 0
イノシシ/ブタ	第5中手骨	w															
イノシシ/ブタ	第5中手骨	p								1 /		1 / 0					
イノシシ/ブタ	第5中手骨	p-(d-)					/ 1			/ 1		0 / 2					
イノシシ/ブタ	中手骨	p															
イノシシ/ブタ	寛骨	臼												1 /			1 / 0
イノシシ/ブタ	寛骨(腸骨)	臼						/ 1			1 /	1 / 1					
イノシシ/ブタ	寛骨(腸骨)	fr										0 / 0			/ 1		0 / 1
イノシシ/ブタ	寛骨(恥骨)	臼									/ 1	0 / 1					
イノシシ/ブタ	寛骨(座骨)	臼												/ 1	1 / 1		1 / 2
イノシシ/ブタ	寛骨(座骨)	fr															
イノシシ/ブタ	大腿骨	(p)															
イノシシ/ブタ	大腿骨	p															
イノシシ/ブタ	大腿骨	(p-)															
イノシシ/ブタ	大腿骨	m															
イノシシ/ブタ	大腿骨	m-<d->															
イノシシ/ブタ	大腿骨	m-(d-)															
イノシシ/ブタ	大腿骨	<d->															
イノシシ/ブタ	大腿骨	(d-)															
イノシシ/ブタ	大腿骨	(d)															
イノシシ/ブタ	膝蓋骨			/ 1								/ 1		1 /	/ 1		1 / 1
イノシシ/ブタ	脛骨	(p)															
イノシシ/ブタ	脛骨	p															
イノシシ/ブタ	脛骨	(p-)															
イノシシ/ブタ	脛骨	(p-)-m								1 / 1		1 / 1					
イノシシ/ブタ	脛骨	(p-)-(d-)															
イノシシ/ブタ	脛骨	(p-)-d															
イノシシ/ブタ	脛骨	<p->-m															
イノシシ/ブタ	脛骨	<p->-d															
イノシシ/ブタ	脛骨	m		/ 1						/ 1		0 / 2			1 /		1 / 0
イノシシ/ブタ	脛骨	m-<d->			1 /							1 / 0					
イノシシ/ブタ	脛骨	<d->															
イノシシ/ブタ	脛骨	(d-)															
イノシシ/ブタ	脛骨	d	1 /						1 /	1 /	1 / 1	4 / 1					
イノシシ/ブタ	脛骨	(d)															
イノシシ/ブタ	腓骨	(p-)															
イノシシ/ブタ	腓骨	<d->					/ 1					0 / 1		/ 1			0 / 1
イノシシ/ブタ	腓骨	(d-)															
イノシシ/ブタ	距骨							1 /				1 / 0			1 /		1 / 0
イノシシ/ブタ	踵骨			1 /			/ 1	1 /				2 / 1		/ 1	1 / 2		1 / 3
イノシシ/ブタ	中心足根骨																
イノシシ/ブタ	第4足根骨																
イノシシ/ブタ	第2中足骨	w															
イノシシ/ブタ	第2中足骨	p															
イノシシ/ブタ	第2中足骨	p-m															
イノシシ/ブタ	第2中足骨	p-(d-)															
イノシシ/ブタ	第3中足骨	w									/ 1	0 / 1			/ 1		0 / 1
イノシシ/ブタ	第3中足骨	p												/ 1			0 / 1
イノシシ/ブタ	第3中足骨	p-m															
イノシシ/ブタ	第4中足骨	w															
イノシシ/ブタ	第4中足骨	p													/ 1		0 / 1
イノシシ/ブタ	第4中足骨	p-m															
イノシシ/ブタ	第4中足骨	p-(d-)					/ 1					0 / 1					
イノシシ/ブタ	第5中足骨	w															
イノシシ/ブタ	第5中足骨	p															
イノシシ/ブタ	第5中足骨	p-m															
イノシシ/ブタ	第5中足骨	p-(d-)															

第 92 表（つづき）

種類	部位	残存位置	Ⅰ層										Ⅰ'層	Ⅱ層			
			A11	A12	A-B 10-11	A-B 10-12	B11	B 11-12	Tr1	Y-Z 12	不明・その他	合計	石積2/3裏込め	Tr1東	Tr1南	その他	合計
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	p			1							1					
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	p-(d-)															
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	<p->															
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	m			1		1					2					
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	m-(d-)															
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	m-d															
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	(d-)					2	1				3		1	1		2
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	d		1	1		2					4			1		1
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	(d)													2		2
イノシシ/ブタ	基節骨	w	1	1			1			3		6			2		2
イノシシ/ブタ	基節骨	(p)															
イノシシ/ブタ	基節骨	p					2					2					
イノシシ/ブタ	基節骨	(p-)-d		1			1				1	3		1	2		3
イノシシ/ブタ	中節骨	w									1	1					
イノシシ/ブタ	中節骨	(p)															
イノシシ/ブタ	中節骨	(p-)-m															
イノシシ/ブタ	末節骨		1									1		1	1		2
イノシシ/ブタ	胸骨						1					1					
イノシシ/ブタ?	椎骨	椎体		2				1				3		1	2		3
イノシシ/ブタ?	椎骨	fr			1			1				2		1	1		2
イノシシ/ブタ?	肋骨	p	2	1	1	1	7		3	1		16		3	11		14
イノシシ/ブタ?	肋骨	m	4	1	1	8	29	4	7	2	2	58	2	13	7		20
イノシシ/ブタ?	肋骨	d			1							1		1			1
ヤギ	頸椎	椎体									1	1					
ヤギ	中手骨	p-<d->															
ヤギ	大腿骨	<p->															
ヤギ	大腿骨	m	/	1								1 / 0					
ヤギ	脛骨	m-d	/	1								1 / 0					
ウシ	上顎遊離歯	表5参照		1							1	2					
ウシ	下顎骨	表5参照								1		1					
ウシ	下顎遊離歯	表5参照			1						1	2			1		1
ウシ	上腕骨	<d->								1 /		1 / 0					
ウシ	橈骨	(p-)-m															
ウシ	尺骨	滑車切痕															
ウシ	中手骨	p								1 /		1 / 0					
ウシ	基節骨	w															
ウシ	基節骨	p															
ウシ	中節骨	w															
ウマ	上顎	頬歯															
ウマ	下顎骨	関節突起															
ウマ	肩甲骨	m-d															
ウマ	上腕骨	d															
ウマ	橈骨	<p-> -m															
ウマ	手根骨																
ウマ	橈側手根骨																
ウマ	中手骨	w															
ウマ	寛骨	臼															
ウマ	大腿骨	(d)					/ 3					0 / 3					
ウマ	膝蓋骨																
ウマ	脛骨	(p)															
ウマ	脛骨	m-<d->															
ウマ	脛骨	m-(d-)															
ウマ	距骨																
ウマ	足根骨																
ウマ	中足骨	p															
ウマ	中足骨	m															
ウマ	中足骨	m-d															
ウマ	中足骨	d															
ウマ	基節骨	d															
ウマ	中節骨	w															
ウマ?	脛骨?	m															
ウシ/ウマ	大腿骨	(d)fr															
ウシ/ウマ	肋骨	p				1	4			1		6		1	2		3
ウシ/ウマ?	肋骨	m	2	3	2	2	10	2	3	2	3	29	2	10	13	1	24
ジュゴン	肋骨	fr													1		1
ジュゴン	部位不明	fr									1	1					
ジュゴン?	肋骨?						1					1					
哺乳類(保留)	四肢骨	m													1		1
哺乳類(同定不可)	椎骨	fr					1				1	2					
哺乳類(同定不可)	上腕骨	(p)												1			1
哺乳類(同定不可)	脛骨	m											1				
哺乳類(同定不可)	四肢骨	m		2								2			1		1
哺乳類(同定不可)	肋骨	p								1		1		1	1		2
哺乳類(同定不可)	肋骨	m					1					1					
合計			28	27	25	31	118	21	25	34	39	348	9	222	290	2	514

（3）両生類・爬虫類

両生類ではカエル類，爬虫類ではヘビ類･ウミガメ類が同定された（**第 90 表**）．いずれも出土数はごく少なく，カエル類はピックアップ資料と水洗選別資料からそれぞれ四肢骨１点，ヘビ類は水洗選別資料から椎骨９点，ウミガメ類はピックアップ資料から指骨１点が検出されたのみである．カエル類とヘビ類は自然遺骸の可能性が高い．

（4）鳥類

４分類群が確認された（**第 90 表**）．出土資料のほとんどはニワトリであり，その他の種ではピックアップ資料からカモ類４点，ハト科３点，クイナ科および未同定鳥類が各１点確認されたのみである（**第 94 表**）．なお出

第 92 表（つづき）

種類	部位	残存位置	Ⅲ層上			Ⅲ層下			Ⅲ'層			Ⅳ層	石積1					その他層不明	合計
			Tr1東	Tr1南	合計	Tr1東	Tr1南	合計	A12	Tr2	合計	Tr1南	1	2	3	3貝	合計		
カエル	四肢骨	m																	1
ウミガメ	指骨														1		1		1
カモ類	上腕骨	m-d																	0 / 1
カモ類	中手骨	<p->-d																	0 / 1
カモ類？	烏口骨	ほぼw																	0 / 1
カモ類？	尺骨	m-d																	1 / 0
ハト科	尺骨	w																	1 / 0
ハト科	尺骨	p																	0 / 1
ハト科	尺骨	p-m													/ 1		0 / 1		0 / 1
クイナ科	足根中足骨	m-d													/ 1		0 / 1		0 / 1
ニワトリ	烏口骨	w	1 /		1 / 0									1 /	/ 1		1 / 1		6 / 2
ニワトリ	烏口骨	肩端		1 / 2	1 / 2	1 / 1		1 / 1						1 /	1 / 2		2 / 2		13 / 16
ニワトリ	烏口骨	中間部																	2 / 0
ニワトリ	烏口骨	胸骨端					/ 1	0 / 1						/ 1			0 / 1		8 / 4
ニワトリ	肩甲骨					1 / 2	1 / 1	2 / 3	/ 1		/ 1			2 /	2 /		4 / 0		12 / 12
ニワトリ	上腕骨	w		/ 1	0 / 1		/ 1	0 / 1											0 / 2
ニワトリ	上腕骨	p													/ 1	1 /	1 / 1		3 / 3
ニワトリ	上腕骨	p-m					/ 1	0 / 1							/ 1		0 / 1		4 / 2
ニワトリ	上腕骨	<p->-m																	0 / 1
ニワトリ	上腕骨	m-(d-)																	1 / 0
ニワトリ	上腕骨	m-d		/ 1	0 / 1		/ 2	0 / 2						1 /	/ 1		1 / 1		3 1 4
ニワトリ	上腕骨	d					2 / 2	2 / 2						/ 1	2 / 2		2 / 3		9 / 11
ニワトリ	橈骨	p					1 /	1 / 0											3 / 0
ニワトリ	橈骨	p-m																	0 / 1
ニワトリ	橈骨	d	1 / 1		1 / 1														5 / 1
ニワトリ	尺骨	w					2 /	2 / 0											2 / 0
ニワトリ	尺骨	p					1 /	1 / 0							1 / 1		1 / 1		8 / 3
ニワトリ	尺骨	p-m																	1 / 2
ニワトリ	尺骨	p-<d->												/ 1			0 / 1		0 / 1
ニワトリ	尺骨	<p->					/ 1	0 / 1											0 / 2
ニワトリ	尺骨	<p->-m					/ 2	0 / 2											0 / 2
ニワトリ	尺骨	m-d												1 / 1	1 /		2 / 1		2 / 4
ニワトリ	尺骨	d					/ 1	0 / 1							4 / 1	/ 1	4 / 2		5 / 4
ニワトリ	中手骨	w		1 /	1 / 0										/ 1		0 / 1		2 / 1
ニワトリ	中手骨	p					/ 1	0 / 1											2 / 1
ニワトリ	中手骨	p-m																	0 / 3
ニワトリ	中手骨	m-d																	1 / 0
ニワトリ	中手骨	<d->																	0 / 1
ニワトリ	中手骨	d																	1 / 0
ニワトリ	寛骨	臼												/ 1		/ 2	0 / 3		0 / 4
ニワトリ	大腿骨	w															0 / 0		2 / 0
ニワトリ	大腿骨	p		1 / 3	1 / 3		/ 3	0 / 3						1 / 1	3 /		4 / 1		15 / 15
ニワトリ	大腿骨	p-m													2 / 2		2 / 2		3 / 2
ニワトリ	大腿骨	<p->																	1 / 0
ニワトリ	大腿骨	m-<d->																	1 / 0
ニワトリ	大腿骨	m-(d-)																	1 / 0
ニワトリ	大腿骨	m-d					1 /	1 / 0						/ 1	/ 2		0 / 3		2 / 4
ニワトリ	大腿骨	<d->					1 /	1 / 0											2 / 0
ニワトリ	大腿骨	d		/ 1	0 / 1		1 / 1	1 / 1						2 /	/ 4		2 / 4		16 / 9
ニワトリ	脛骨	p				2 / 2	1 /	3 / 2							2 / 2	1	2 / 3		9 / 10
ニワトリ	脛骨	p-m		/ 1	0 / 1		1 /	1 / 0											3 / 1
ニワトリ	脛骨	(p-)					1 /	1 / 0											2 / 1
ニワトリ	脛骨	(p-)-m					/ 1	0 / 1							1 /		1 / 0		2 / 1
ニワトリ	脛骨	m-d					1 / 2	1 / 2						1 /	/ 1	1	2 / 1		6 / 6
ニワトリ	脛骨	<d->		1 /	1 / 0		1 /	1 / 0						1 /			1 / 0		12 / 4
ニワトリ	脛骨	d		/ 1	0 / 1	1 / 1	2 / 3	3 / 4							5 / 5		5 / 5		18 / 21
ニワトリ	足根中足骨	p	1 /		1 / 0	/ 1	2 / 1	2 / 2							4 / 2		4 / 2		16 / 16
ニワトリ	足根中足骨	p-m					/ 1	0 / 1											0 / 3
ニワトリ	足根中足骨	p-<d->													1 /		1 / 0		1 / 0
ニワトリ	足根中足骨	<p->-m																	1 / 0
ニワトリ	足根中足骨	<p->-<d->																	1 / 0
ニワトリ	足根中足骨	m																	1 / 3
ニワトリ	足根中足骨	m-<d->													2 /		2 / 0		2 / 0
ニワトリ	足根中足骨	m-(d-)																	0 / 1
ニワトリ	足根中足骨	m-d												1 /	1 /		2 / 0		6 / 1
ニワトリ	足根中足骨	(d-)																	1 / 0
ニワトリ	足根中足骨	d		/ 1	0 / 1	/ 1	2 / 1	2 / 2							1 /	1 / 1	2 / 1		11 / 13
ニワトリ	複合仙骨					1		1											4
ニワトリ?	上腕骨	p-<d->													1 /		1 / 0		1 / 0
ニワトリ?	上腕骨	(p-)																	2 / 0
ニワトリ?	上腕骨	<p->																	1 / 0
ニワトリ?	上腕骨	<p->-m																	0 / 2
ニワトリ?	上腕骨	m				1 /		1 / 0						1 / 1		1 / 1	2 / 2		12 / 4
ニワトリ?	上腕骨	m-<d->													1 /		1 / 0		2 / 0
ニワトリ?	上腕骨	<d->													1 /		1 / 0		3 / 5
ニワトリ?	橈骨	p																	1 / 0
ニワトリ?	橈骨	p-m																	0 / 1
ニワトリ?	橈骨	m-<d->		/ 1	0 / 1														0 / 1
ニワトリ?	橈骨	<d->																	1 / 1
ニワトリ?	尺骨	(p-)-m																	0 / 1
ニワトリ?	尺骨	<p->																	0 / 1
ニワトリ?	尺骨	<p->-m				1 /		1 / 0											2 / 0
ニワトリ?	尺骨	m				2		2							1		1		6
ニワトリ?	尺骨	m-<d->																	1 / 0
ニワトリ?	尺骨	m-(d-)																	1 / 0
ニワトリ?	尺骨	<d->				1 /	1 /	2 / 0							1 /		1 / 0		3 / 1
ニワトリ?	尺骨	(d-)	/ 1		0 / 1														0 / 1

第 92 表（つづき）

種類	部位	残存位置	Ⅲ層上			Ⅲ層下			Ⅲ'層			Ⅳ層	石積1					その他層不明	合計
			Tr1東	Tr1南	合計	Tr1東	Tr1南	合計	A12	Tr2	合計	Tr1南	1	2	3	3貝	合計		
ニワトリ?	大腿骨	p																	1
ニワトリ?	大腿骨	<p->		/ 1	0 / 1														0 / 1
ニワトリ?	大腿骨	<p->-m					1 /	1 / 0							/ 1		0 / 1		2 / 4
ニワトリ?	大腿骨	m		/ 1	0 / 1		2 / 2	2 / 2							1 /		1 / 0		7 / 7
ニワトリ?	大腿骨	m-<d>																	0 / 1
ニワトリ?	大腿骨	<d>					1 /	1 / 0							1 / 1		1 / 1		3 / 5
ニワトリ?	大腿骨	(d-)					/ 1	0 / 1											0 / 1
ニワトリ?	脛骨	<p->					/ 1	0 / 1											0 / 3
ニワトリ?	脛骨	m	1 /	1 /	2 / 0	1 / 1	2 / 4	3 / 5						1 /	2 / 9		3 / 9		15 / 21
ニワトリ?	脛骨	m-<d>				/ 1		0 / 1							/ 1		0 / 1		0 / 2
ニワトリ?	脛骨	<d>					/ 1	0 / 1							1 / 2		1 / 2		1 / 15
ニワトリ?	足根中足骨	<p->													1 /		1 / 0		3 / 0
ニワトリ?	足根中足骨	<p->-m				1 /		1 / 0											1 / 0
ニワトリ?	足根中足骨	m		2	2	1		1						3	2		5		12
ニワトリ?	足根中足骨	m-<d>					/ 1	0 / 1							1 /		1 / 0		2 / 2
ニワトリ?	足根中足骨	<d>		/ 1	0 / 1		1 / 1	1 / 1											7 / 3
ニワトリ?	足根中足骨	d	/ 1	/ 1	0 / 2														1 / 2
ニワトリ?	胸骨																		1
ニワトリ?	複合仙骨													1			1		3
鳥類(未同定)	橈骨	p-m																	1
鳥類(同定不可:ごく小)	上腕骨	w																	1 / 0
鳥類(同定不可:ごく小)	大腿骨	w																	0 / 1
鳥類(同定不可:ごく小)	足根中足骨	w																	1 / 0
鳥類(同定不可:中型)	上腕骨	<p->-<d>																	1 / 0
鳥類(同定不可:中型)	上腕骨	m																	0 / 1
鳥類(同定不可)	上腕骨	m					1	1							1		1		6
鳥類(同定不可)	橈骨	m												1	1		2		15
鳥類(同定不可)	尺骨	m	1		1														1
鳥類(同定不可)	脛骨	<d>												1 /			1 / 0		3 / 0
鳥類(同定不可)	足根中足骨	(d-)																	1 / 0
鳥類(同定不可)	足根中足骨	d																	0 / 1
鳥類(同定不可)	指骨						1	1											6
鳥類(同定不可)	四肢骨	m	1	2	3	4	5	9	2		2			4	19	1	24		95
鳥類(同定不可)	椎骨																		2
ネズミ科	下顎骨																		0 / 1
ネズミ科	上腕骨														1		0 / 1		0 / 1
ネズミ科	寛骨																		2 / 0
ネズミ科	大腿骨		/ 1		0 / 1		1 /	1 / 0							2 /		2 / 0		5 / 2
ネズミ科	脛骨						1 / 1	1 / 1											4 / 2
イヌ	下顎	C																	1 / 0
イヌ	大腿骨	m										/ 1							0 / 1
ネコ	上腕骨	<d>																	1 / 0
ネコ	上腕骨	d																	0 / 1
ネコ	中手骨	w																	1
シカ科(中型)	肩甲骨	m-d												1 /			1 / 0		1 / 0
シカ科(中型)	中足骨	p-m																	1 / 0
イノシシ/ブタ	頬骨																		0 / 2
イノシシ/ブタ	側頭骨+頬骨						/ 1	0 / 1											0 / 1
イノシシ/ブタ	側頭骨	関節結節					/ 1	0 / 1	/ 1		/ 1								0 / 2
イノシシ/ブタ	頭頂骨								/ 1		/ 1								1 / 1
イノシシ/ブタ	後頭骨	後頭顆																	2 / 1
イノシシ/ブタ	後頭骨	fr																	2
イノシシ/ブタ	上顎骨	表5参照					1	1	1		1								4
イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	表5参照					2	2							3	1	4		9
イノシシ/ブタ	下顎骨	表5参照					1	1		1	1				2		2		8
イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	表5参照					1	1							3		3		10
イノシシ/ブタ	環椎	fr													1		1		5
イノシシ/ブタ	軸椎														1		1		1
イノシシ/ブタ	軸椎	fr				1		1							1		1		2
イノシシ/ブタ	頸椎	椎体					1	1							1		1		4
イノシシ/ブタ	頸椎	fr					1	1							2		2		4
イノシシ/ブタ	胸椎	椎体					2	2							2		2		5
イノシシ/ブタ	胸椎	棘突起					4	4	1		1				2		2		16
イノシシ/ブタ	胸椎	fr					2	2							2		2		5
イノシシ/ブタ	腰椎	椎体					1	1							3		3		5
イノシシ/ブタ	腰椎	側突起																	0
イノシシ/ブタ	腰椎	fr					4	4						2	6		8		18
イノシシ/ブタ	仙椎														2		2		3
イノシシ/ブタ	仙椎	fr												1			1		1
イノシシ/ブタ	尾椎						1	1											2
イノシシ/ブタ	肩甲骨	m				1 / 1	1 /	2 / 1											2 / 3
イノシシ/ブタ	肩甲骨	m-d							/ 1		/ 1				/ 1		0 / 1		0 / 3
イノシシ/ブタ	肩甲骨	d					/ 2	0 / 2							1 / 1		1 / 1		4 / 5
イノシシ/ブタ	上腕骨	(p)													1 /		1 / 0		1 / 1
イノシシ/ブタ	上腕骨	(p-)												/ 1	1 /		1 / 1		2 / 1
イノシシ/ブタ	上腕骨	(p-)-m					1 /	1 / 0											1 / 0
イノシシ/ブタ	上腕骨	(p-)-<d>													/ 1		0 / 1		0 / 1
イノシシ/ブタ	上腕骨	(p-)-(d-)												/ 1			0 / 1		0 / 1
イノシシ/ブタ	上腕骨	m					/ 1	0 / 1											0 / 2
イノシシ/ブタ	上腕骨	m-<d>													1 /		1 / 0		2 / 0
イノシシ/ブタ	上腕骨	m-d																	1 / 0
イノシシ/ブタ	上腕骨	<d>					/ 1	0 / 1											1 1 1
イノシシ/ブタ	上腕骨	(d-)		/ 1	0 / 1														0 / 1
イノシシ/ブタ	上腕骨	d	1 /		1 / 0		2 / 1	2 / 1							1 / 1		1 / 1		5 / 2
イノシシ/ブタ	上腕骨	(d)					/ 3	0 / 3											0 / 3

第 92 表（つづき）

種類	部位	残存位置	Ⅲ層上			Ⅲ層下			Ⅲ'層			Ⅳ層	石積1					その他層不明	合計
			Tr1東	Tr1南	合計	Tr1東	Tr1南	合計	A12	Tr2	合計	Tr1南	1	2	3	3貝	合計		
イノシシ/ブタ	橈骨	w					/ 1	0 / 1											0 / 1
イノシシ/ブタ	橈骨	p												3 /	1 / 2	1 /	5 / 2		7 / 2
イノシシ/ブタ	橈骨	p-m					/ 1	0 / 1											0 / 2
イノシシ/ブタ	橈骨	p-(d-)												/ 1	2 /		2 / 1		3 / 2
イノシシ/ブタ	橈骨	(p-)					2 /	2 / 0							1 / 1		1 / 1		4 / 2
イノシシ/ブタ	橈骨	<p->					1 /	1 / 0							/ 1		0 / 1		1 / 1
イノシシ/ブタ	橈骨	<p->-<d->													/ 1		0 / 1		0 / 1
イノシシ/ブタ	橈骨	m				1 /	/ 1	1 / 1											1 / 2
イノシシ/ブタ	橈骨	m-(d-)													/ 1		0 / 1		0 / 1
イノシシ/ブタ	橈骨	m-d												1 /			1 / 0		1 / 0
イノシシ/ブタ	橈骨	(d-)					/ 1	0 / 1											0 / 1
イノシシ/ブタ	橈骨	(d)					/ 1	0 / 1											1 / 3
イノシシ/ブタ	尺骨	滑車切痕				1 /	2 / 2	3 / 2		1 /	1 /			1 / 2	4 / 2		5 / 4		11 / 7
イノシシ/ブタ	尺骨	滑車切痕-m													/ 1		0 / 1		1 / 1
イノシシ/ブタ	尺骨	m								1 /	1 /					1 /	1 / 0		3 / 1
イノシシ/ブタ	尺骨	m-(d-)					/ 1	0 / 1											0 / 2
イノシシ/ブタ	尺骨	d																	1 / 0
イノシシ/ブタ	中間手根骨														1 /	1 /	2 / 0		2 / 1
イノシシ/ブタ	第3手根骨		1 /		1 / 0		1 /	1 / 0							1 / 1		1 / 1		3 / 1
イノシシ/ブタ	第4手根骨																		0 / 1
イノシシ/ブタ	第2中手骨	w													1 / 1	/ 1	1 / 2		3 / 3
イノシシ/ブタ	第2中手骨	p					1 /	1 / 0											2 / 0
イノシシ/ブタ	第2中手骨	p-m				/ 1	/ 1	0 / 2											0 / 2
イノシシ/ブタ	第2中手骨	p-(d-)	/ 1		0 / 1		1 / 1	1 / 1							/ 1		0 / 1		2 / 3
イノシシ/ブタ	第3中手骨	p		/ 1	0 / 1	/ 1	1 / 2	1 / 3							1 /		1 / 0		2 / 4
イノシシ/ブタ	第3中手骨	p-m					1 /	1 / 0							1 /		1 / 0		5 / 1
イノシシ/ブタ	第3中手骨	p-(d-)					2 / 1	2 / 1							1 /		1 / 0		5 / 2
イノシシ/ブタ	第4中手骨	w													2 / 1		2 / 1		2 / 1
イノシシ/ブタ	第4中手骨	p				/ 1	1 / 1	1 / 2						1 /			1 / 0		2 / 3
イノシシ/ブタ	第4中手骨	p-m		1 /	1 / 0		1 / 1	1 / 1							/ 1		0 / 1		3 / 2
イノシシ/ブタ	第4中手骨	p-(d-)				/ 1	/ 1	0 / 2						2 /	1 /		3 / 0		4 / 2
イノシシ/ブタ	第5中手骨	w					1 /	1 / 0							/ 1		0 / 1		1 / 1
イノシシ/ブタ	第5中手骨	p															0 / 0		1 / 0
イノシシ/ブタ	第5中手骨	p-(d-)					/ 1	0 / 1						1 /	2 / 1		3 / 1		3 / 4
イノシシ/ブタ	中手骨	p													1		1		1
イノシシ/ブタ	寛骨	臼					1 /	1 / 0							1 /		1 / 0		3 / 0
イノシシ/ブタ	寛骨(腸骨)	臼					/ 1	0 / 1						ブタ?→	1 / 1		1 / 1		2 / 3
イノシシ/ブタ	寛骨(腸骨)	fr		1 /	1 / 0		ブタ?→1	0 / 1						1 / 1	2 / 2	←1点はブタ?	3 / 3		4 / 5
イノシシ/ブタ	寛骨(恥骨)	臼																	0 / 1
イノシシ/ブタ	寛骨(座骨)	臼					1 /	1 / 0						1 / 1	1 /		2 / 1		4 / 3
イノシシ/ブタ	寛骨(座骨)	fr					1 / 2	1 / 2						/ 1	1 / 1		1 / 2		2 / 4
イノシシ/ブタ	大腿骨	(p)					1 /	1 / 0								1 /	1 / 0		2 / 0
イノシシ/ブタ	大腿骨	p								1	1								1
イノシシ/ブタ	大腿骨	(p-)					/ 1	0 / 1							/ 2		0 / 2		0 / 3
イノシシ/ブタ	大腿骨	m													1 / 1		1 / 1		1 / 1
イノシシ/ブタ	大腿骨	m-<d->					1 /	1 / 0	/ 1		/ 1								1 / 1
イノシシ/ブタ	大腿骨	m-(d-)												1 /			1 / 0		1 / 0
イノシシ/ブタ	大腿骨	<d->													2 / 1		2 / 1		2 / 1
イノシシ/ブタ	大腿骨	(d-)					1 /	1 / 0							/ 1		0 / 1		1 / 1
イノシシ/ブタ	大腿骨	(d)													/ 3		0 / 3		0 / 3
イノシシ/ブタ	膝蓋骨					/ 1	1 /	1 / 1		1 / 1	1 / 1								3 / 4
イノシシ/ブタ	脛骨	(p)					/ 1	0 / 1											0 / 1
イノシシ/ブタ	脛骨	p													/ 1		0 / 1		0 / 1
イノシシ/ブタ	脛骨	(p-)					1 / 2	1 / 2							1 /		1 / 0		2 / 2
イノシシ/ブタ	脛骨	(p-)-m																	1 / 1
イノシシ/ブタ	脛骨	(p-)-(d-)												1点はブタ?→	2 /		2 / 0		2 / 0
イノシシ/ブタ	脛骨	(p-)-d													1 /		1 / 0	1 /	2 / 0
イノシシ/ブタ	脛骨	<p->-m													/ 1		0 / 1		0 / 1
イノシシ/ブタ	脛骨	<p->-d					1 /	1 / 0											1 / 0
イノシシ/ブタ	脛骨	m					/ 1	0 / 1							2 / 2		2 / 2		3 / 5
イノシシ/ブタ	脛骨	m-<d->																	1 / 0
イノシシ/ブタ	脛骨	<d->					1 /	1 / 0											1 / 0
イノシシ/ブタ	脛骨	(d-)				/ 1	/	0 / 1											0 / 1
イノシシ/ブタ	脛骨	d		1 /	1 / 0	1 /	1 /	2 / 0							/ 1		0 / 1		7 / 2
イノシシ/ブタ	脛骨	(d)					1 / 1	1 / 1											1 / 1
イノシシ/ブタ	腓骨	(p-)					1 /	1 / 0											1 / 0
イノシシ/ブタ	腓骨	<d->																	0 / 2
イノシシ/ブタ	腓骨	(d-)				/ 1	/ 1	0 / 2											0 / 2
イノシシ/ブタ	距骨		1 /		1 / 0	/ 1	1 / 3	1 / 4							1 /		1 / 0		5 / 4
イノシシ/ブタ	踵骨		/ 1		0 / 1		3 / 1	3 / 1						2 /	1 / 3		3 / 3		9 / 9
イノシシ/ブタ	中心足根骨						1 /	1 / 0							/ 1		0 / 1		1 / 1
イノシシ/ブタ	第4足根骨						2 /	2 / 0							1 / 1		1 / 1		3 / 1
イノシシ/ブタ	第2中足骨	w		/ 1	0 / 1										/ 1		0 / 1		0 / 2
イノシシ/ブタ	第2中足骨	p					1 /	1 / 0											1 / 0
イノシシ/ブタ	第2中足骨	p-m	1 /		1 / 0														1 / 0
イノシシ/ブタ	第2中足骨	p-(d-)					/ 1	0 / 1							1 / 1		1 / 1		1 / 2
イノシシ/ブタ	第3中足骨	w																	0 / 2
イノシシ/ブタ	第3中足骨	p				/ 1	1 / 1	1 / 2		/ 1	/ 1				2 /		2 / 0		3 / 4
イノシシ/ブタ	第3中足骨	p-m					1 / 1	1 / 1						1 /		/ 1	1 / 1		2 / 2
イノシシ/ブタ	第4中足骨	w												各1点は交連→		/ 1	0 / 1		0 / 1
イノシシ/ブタ	第4中足骨	p				1 /	/ 3	1 / 3							3 /		3 / 0		4 / 4
イノシシ/ブタ	第4中足骨	p-m														/ 1	0 / 1		0 / 1
イノシシ/ブタ	第4中足骨	p-(d-)													1	1 / 1	1 / 2		1 / 3
イノシシ/ブタ	第5中足骨	w					1 /	1 / 0								1 / 2	1 / 2		2 / 2
イノシシ/ブタ	第5中足骨	p														/ 1	0 / 1		0 / 1
イノシシ/ブタ	第5中足骨	p-m														1 / 1	1 / 1		1 / 1
イノシシ/ブタ	第5中足骨	p-(d-)					2 / 1	2 / 1											2 / 1

第 92 表（つづき）

種類	部位	残存位置	Ⅲ層上			Ⅲ層下			Ⅲ'層			Ⅳ層	石積1					その他層不明	合計
			Tr1東	Tr1南	合計	Tr1東	Tr1南	合計	A12	Tr2	合計	Tr1南	1	2	3	3貝	合計		
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	p																	1
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	p-(d-)							1		1								1
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	<p->				1	1	2								1	1		3
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	m					1	1						1	2		3		6
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	m-(d-)				1	1	2						1	3		4		6
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	m-d					1	1									0		1
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	(d-)					6	6						1	4	1	6		17
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	d				1	2	3						2			2		10
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	(d)					1	1	2		2				2		2		7
イノシシ/ブタ	基節骨	w				2	9	11	1		1			2	5		7		27
イノシシ/ブタ	基節骨	(p)											1	1			2		2
イノシシ/ブタ	基節骨	p																	2
イノシシ/ブタ	基節骨	(p-)-d				2	6	8							4		4		18
イノシシ/ブタ	中節骨	w		2	2		1	1											4
イノシシ/ブタ	中節骨	(p)				1		1											1
イノシシ/ブタ	中節骨	(p-)-m														2	2		2
イノシシ/ブタ	末節骨						2	2							4	1	5		10
イノシシ/ブタ	胸骨						1	1							2	1	3		5
イノシシ/ブタ?	椎骨	椎体					3	3							1		1		10
イノシシ/ブタ?	椎骨	fr					2	2							3		3		9
イノシシ/ブタ?	肋骨	p		6	6	3	26	29	1		1			5	17		22	1	89
イノシシ/ブタ?	肋骨	m	7	5	12	9	38	47				3		8	39	7	54		196
イノシシ/ブタ?	肋骨	d																	2
ヤギ	頸椎	椎体																	1
ヤギ	中手骨	p-<d->							/ 1		/ 1								0 / 1
ヤギ	大腿骨	<p->					/ 1	0 / 1											0 / 1
ヤギ	大腿骨	m																	1 / 0
ヤギ	脛骨	m-d																	1 / 0
ウシ	上顎遊離歯	表5参照					2	2											4
ウシ	下顎骨	表5参照																	1
ウシ	下顎遊離歯	表5参照																	3
ウシ	上腕骨	<d->																	1 / 0
ウシ	橈骨	(p-)-m													/ 1		0 / 1		0 / 1
ウシ	尺骨	滑車切痕					1 /	1 / 0											1 / 0
ウシ	中手骨	p																	1 / 0
ウシ	基節骨	w					1	1											1
ウシ	基節骨	p														1	1		1
ウシ	中節骨	w				1		1											1
ウマ	上顎	頬歯					/ 1	0 / 1											0 / 1
ウマ	下顎骨	関節突起					/ 1	0 / 1											0 / 1
ウマ	肩甲骨	m-d													/ 1		0 / 1		0 / 1
ウマ	上腕骨	d								/ 1	/ 1								0 / 1
ウマ	橈骨	<p-)-m					/ 1	0 / 1											0 / 1
ウマ	手根骨														1		1		1
ウマ	橈側手根骨								1 /		1 /								1 / 0
ウマ	中手骨	w													/ 1		0 / 1		0 / 1
ウマ	寛骨	臼													1 /		1 / 0		1 / 0
ウマ	大腿骨	(d)																	0 / 3
ウマ	膝蓋骨													/ 1			0 / 1		0 / 1
ウマ	脛骨	(p)													1 /		1 / 0		1 / 0
ウマ	脛骨	m-<d->													1 /		1 / 0		1 / 0
ウマ	脛骨	m-(d-)													/ 1		0 / 1		0 / 1
ウマ	距骨						1 /	1 / 0											1 / 0
ウマ	足根骨						1 /	1 / 0											1 / 0
ウマ	中足骨	p													/ 1		0 / 1		0 / 1
ウマ	中足骨	m													1 /		1 / 0		1 / 0
ウマ	中足骨	m-d					/ 1	0 / 1											0 / 1
ウマ	中足骨	d													/ 1		0 / 1		0 / 1
ウマ	基節骨	d					1	1											1
ウマ	中節骨	w					1	1						1	1		2		3
ウマ？	脛骨?	m																1	1
ウシ/ウマ	大腿骨	(d)fr													1		1		1
ウシ/ウマ	肋骨	p					7	7							4	1	5		21
ウシ/ウマ?	肋骨	m	2	7	9	3	40	43	4		4			28	43	10	81		192
ジュゴン	肋骨	fr													1		1		2
ジュゴン	部位不明	fr																	1
ジュゴン?	肋骨?																		1
哺乳類(保留)	四肢骨	m																	1
哺乳類(同定不可)	椎骨	fr					1	1											3
哺乳類(同定不可)	上腕骨	(p)																	1
哺乳類(同定不可)	脛骨	m												1			0 / 1		0 1 1
哺乳類(同定不可)	四肢骨	m				1	4	5											8
哺乳類(同定不可)	肋骨	p				1	3	4							1		1		8
哺乳類(同定不可)	肋骨	m					1	1					1				1		3
合計			25	51	76	70	361	431	20	8	28	4	2	112	400	42	556	3	1969

土した鳥骨の中には，ニワトリと形態は一致するものの骨端などの欠損のため他種との判別が確実でない資料が多数含まれており，これらについては「ニワトリ？」とした．ただし，そのほとんどはニワトリとみて間違いないと思われるので，組成（NISP・MNI）の集計の際にはニワトリと一括して扱った．

ニワトリは全体的に成鳥が大部分を占めるが，若鳥も若干混じる．出土部位の大半は四肢骨で，各部位が出土しているが，全体的に前肢（とくに上腕骨～中手骨）が少なく，後肢（とくに大腿骨～中足骨）が多い傾向にあり，とくにⅡ層では顕著である．またⅠ～Ⅱ層では烏口骨がやや多い傾向がある．解体痕については，全体的にカットマークがかなり頻繁に認められ（Ⅲ層下部･石積１内で１割弱，Ⅲ層上部～Ⅰ層で１～２割程度），上腕骨･大腿骨・脛骨・中足骨では骨端が切断されているものが普通にみられた．性比については，判別の基準となる中

第 93 表　首里城跡銭蔵東地区から採集されたイノシシ／ブタ・ウシの顎骨・歯の詳細

＊残存位置凡例：［ ］は顎骨の残存範囲（記載のないものは遊離歯），×は脱落歯，〈 〉は未萌出歯，（ ）は萌出中の歯を示す．

種類	層	地区	部位	残存位置＊	左右	数	備考
イノシシ/ブタ	Ⅰ	A12	上顎骨	[P4-M1]	R	1	
			上顎骨	[M2]	R	1	
			上顎遊離歯	M3	R	1	
		A-B12-13	下顎遊離歯	I2	L	1	未崩出
		B11	下顎骨	[M1×(M2×)]	R	1	
			下顎遊離歯	C	L	1	♂
			下顎遊離歯	C	L	2	♂
			下顎遊離歯	M1	R	1	
		B11-12	下顎骨	下顎角	L	1	
		B15	上顎遊離歯	I1	R	1	
		Y-Z12	下顎骨	連合部	L	1	
		Z12	上顎遊離歯	P3	R	1	
		Z12 トレ1	下顎遊離歯	I1	L	1	
	Ⅱ	トレ1南	下顎骨	歯槽最後部	R	1	
	Ⅲ下	トレ1南	上顎骨	[M1-M2]	L	1	
			上顎遊離歯	i2	L	1	
			上顎遊離歯	I1	L	1	崩出中
			下顎骨	関節突起	L	1	
			下顎遊離歯	C	R	1	♂
	Ⅲ’	A12	上顎骨	[P1×dm2]?	L	1	
		トレ2	下顎骨	下顎角	?	1	
	石積1内-3		上顎遊離歯	I1	L	1	
			上顎遊離歯	I2	R	1	
			上顎遊離歯	C	R	1	♂
			下顎骨	歯槽最後部	L	1	
			下顎骨	[dm2<P3><P4××M1-M2]	R	1	
			下顎遊離歯	I1	L	2	
			下顎遊離歯	P3	R	1	
	石積1内-3貝		上顎遊離歯	C	L	1	♂
ウシ	Ⅰ	A12	上顎遊離歯	P3	L	1	
		A-B10-11	下顎遊離歯	I	L	1	
		C15	上顎遊離歯	M	R	1	
		Z12 トレ1	下顎骨	関節突起	L	1	
		-	下顎遊離歯	M	?	1	
	Ⅱ	トレ1南	下顎遊離歯	M1/M2	R	1	
	Ⅲ下	トレ1南	上顎遊離歯	P2	L	1	
		トレ1南	上顎遊離歯	M1?	R	1	

足骨の資料数が少ないため明確でない．

鳥獣類中に占めるニワトリの比率には顕著な層位的変化が認められた（**第 74・75 図**）．すなわち，Ⅲ層下部および石積１内では NISP 比で３割前後，MNI 比で５割前後だが，Ⅲ層上部～Ⅱ層で急増し，Ⅱ層では NISP 比で７割強，MNI 比で約８割を占めるようになり，Ⅰ層では NISP 比・MNI 比ともに２割程度に激減する．

（５）哺乳類

10 分類群が同定された（**第 90 表**）．以下，同定結果に注釈を要する種類について所見を記載する．

①同定記載

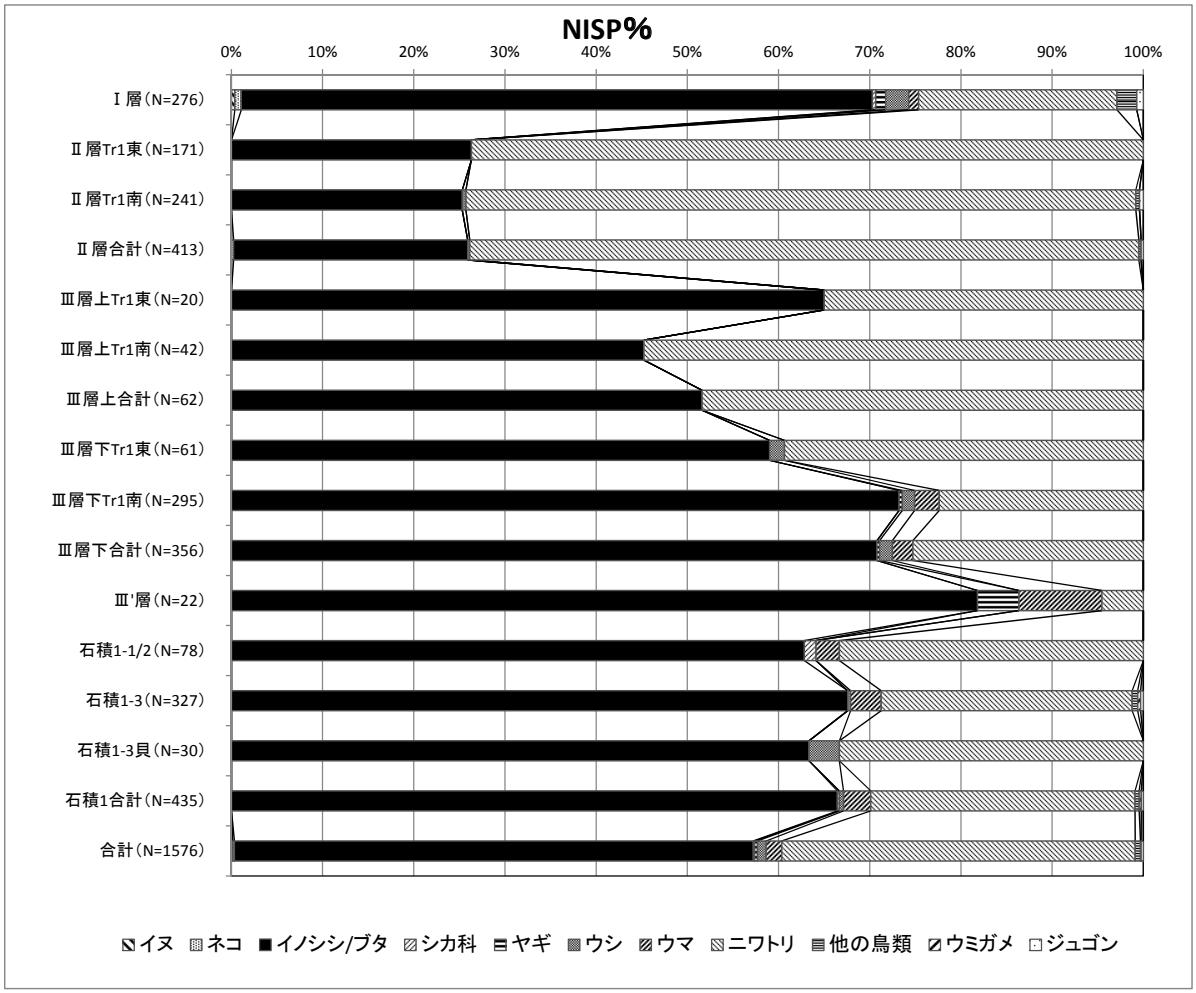
トガリネズミ科：水洗選別試料 No.815（石積１内３層貝だまり）から上顎骨１点検出された．詳細な検討が未了のため，ここではトガリネズミ科にとどめたが，淑順門西地区でジャコウネズミの上顎骨破片が確認されており（樋泉 2013），本標本も同種に同定される可能性がある．

ネズミ科：顎骨・臼歯はすべてネズミ亜科で，比較的小型の種である．自然の遺骸である可能性が高い

イノシシまたはブタ：検討が不十分であるため，ここでは概要を記載するにとどめ，詳細は今後の課題としておきたい．

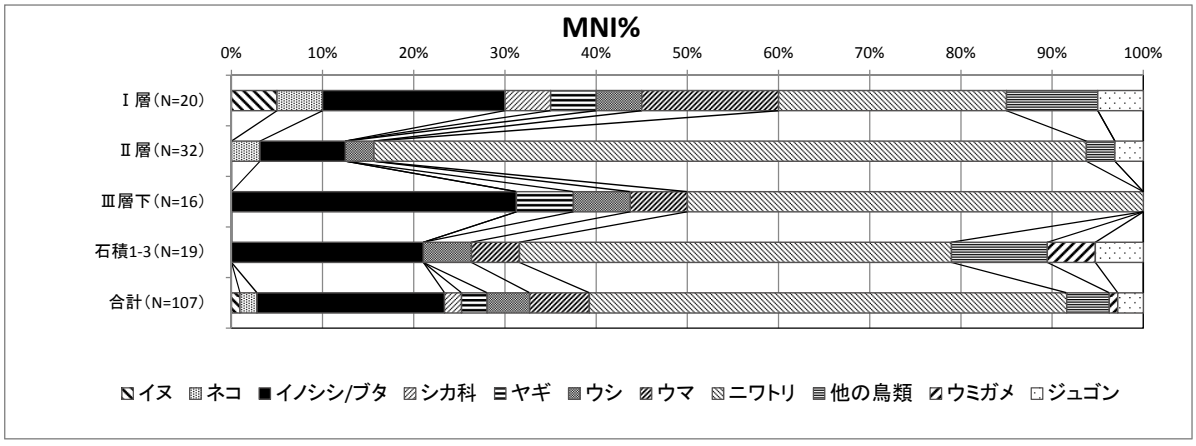
形質的な検討は未了だが，年代・状況的にみて，大半は飼育個体／家畜種（ブタ）の可能性が高いと考えられる．ただし，形質的には野生種か家畜種かを明確に判別することが困難な資料が多かったため，ここでは一括して「イノシシ／ブタ」とした．ただしⅠ層Ｃ－11 出土の右上腕骨遠位端は滑車上孔が閉鎖していること，Ⅲ層下部トレンチ南出土の左橈骨・左脛骨は短縮傾向が明確であるからブタと判断されるほか，Ⅲ層下部トレンチ南出土の寛骨および石積１内３層出土の寛骨２点もブタの可能性が高い．

部位構成については，各層ともに全身の部位が出土しているが，Ⅰ層を除き，顎骨／頭骨の比率が少ない点が



第 74 図　首里城跡銭蔵東地区から採集された鳥獣類遺体（ピックアップ資料）の組成（NISP 比）

N>10の層準・地区のみ表示(石積1-1は石積1-2と合算した).



第 75 図　首里城跡銭蔵東地区から採集された鳥獣類遺体（ピックアップ資料）の組成（MNI 比）

N>10の層準のみ表示.

特徴である.

年齢構成については顎骨が少ないため詳細な検討は困難だが，主要四肢骨（上腕骨・橈骨・大腿骨・脛骨・中手／中足骨・基節骨）の骨端癒合状況を資料数の多いⅢ層／石積 1 内についてみると，橈骨近位端（癒合年齢 1 歳．Schmid（1972）による）の未癒合率は約 25%，以下同様に，上腕骨遠位端と基節骨近位端（癒合年齢 1.5 歳前後）は 45%程度，脛骨遠位端と中手／中足骨遠位端（癒合年齢 2 歳）は前者が約 30%，後者が約 70%，上腕骨近位端・橈骨遠位端・大腿骨近位端／遠位端・脛骨近位端（癒合年齢 3.5 歳）は約 75 ～ 100%であった．以上から，年齢の累積傾向（癒合年齢の高い部位ほど未癒合率が高い）に合致しない脛骨遠位端を除外して

年齢構成を推定すると，当歳個体が 25％程度，１～２歳が 45％程度，２～ 3.5 歳が 20％程度，3.5 歳以上の成獣が 10％程度となり，大部分は未成獣で，とくに２歳未満の若獣が主体をなしているものと考えられる．Ⅰ～Ⅱ層は資料数が少ないため不明確だが，基本的に同傾向と思われる．ただしⅠ層では２～ 3.5 歳の個体がやや多いように思われる．

性比については，判定に有効な犬歯の出土資料５点はすべて雄だが，資料数が少ないため傾向性の判断は困難である．

解体痕については，全体的にカットマークやスパイラルフラクチャーが普通に認められた．

シカ科：Ⅲ層から肩甲骨，Ⅰ層から中足骨が各１点確認された．いずれもシカ科の特徴をもち，ニホンジカ Cervus Nippon 程度の中型のシカである．九州以北または大陸からの搬入品と推定されるが，出土資料はいずれも断片的（肩甲骨・中足骨各１点）であり，具体的にどのような形態で持ち込まれたかは不明である．

ウシ：出土数は全体的に少なく，またその多くはⅠ層と石積１外Ⅲ層下部から得られたもので，他の層準ではごく少ない．顎骨・歯と四肢骨が確認されたが，そのうち歯が半数を占めておりやや目立つ．資料数が少ないため年齢構成の特徴は明確でない．解体痕は確認されなかった．

ウマ：石積１内３層と石積１外Ⅲ層下部からややまとまった資料が得られているが，他の層準からの出土数はごく少ない．出土部位の大半を四肢骨が占めている点が特徴で，歯は１点確認されたのみである．資料数が少ないため年齢構成の特徴は明確でない．解体痕については，カットマークやスパイラルフラクチャーが普通に認められた．

なお，ウシまたはウマと思われる肋骨破片が各層準からやや多く出土しており，これらにはカットマークが普通に認められた．

ジュゴン：Ⅰ層で部位不明破片，Ⅱ層と石積１内３層で肋骨破片が各１点確認された．

以上の他に，イヌ，ネコ，ヤギが確認されたが，いずれも出土数はごく少ない．

②組成

ピックアップ資料では全ての層準・地区を通じてイノシシ／ブタが大半を占めており，Ⅲ’層～Ⅲ層下部および石積１内ではウシ・ウマもやや多い（**第 74・75 図**）．これに対してⅢ層上部～Ⅱ層ではイノシシ／ブタ以外はまれとなるが，Ⅰ層ではウシ・ウマが復活し，イヌ・ネコ・ヤギなども加わって組成がやや多様化する．

３．考察

（１）首里城跡銭蔵東地区の脊椎動物遺体からみた動物資源利用の特徴

今回の調査で得られた資料の多くは，自然遺骸の可能性の高いカエル類・ヘビ類・トガリネズミ類・ネズミ類を除き，大部分は人為的な廃棄物と推定される．したがって，その内容は首里城内での動物資源利用の様相の一端を示すものと考えられる．遺体の大半は魚類およびイノシシ／ブタ・ニワトリ・ウマ・ウシを主とする家畜・家禽類である．これらの遺体は，魚類・イノシシ／ブタ・ニワトリはもとより，ウマにも解体痕が普通にみられたことから，基本的に食用とされたものの残滓とみてよいと思われる．

なお，本地区の発掘現場において地層断面における堆積状況を詳細に観察した結果，石積１内の堆積層や石積１外Ⅲ層において薄い魚骨の集中層が繰り返し堆積している状況が観察された．さらに，石積１内３層で検出された「貝だまり」（おびただしい量の貝殻の集中的出土）もあわせ考えれば，少なくとも石積１内および石積１外Ⅲ層の遺体群については，別の場所に廃棄されていたものが造成工事に伴って本地区に搬入され再堆積したものとは考えにくく，一次的な廃棄物とみてよいと思われる．このことは石積１の構築やその後の造成工事に際して，骨や貝殻などの廃棄物が「造成土」として利用されていた可能性を示す．

遺体群の内容については，魚類が全層準を通じて MNI 比約 80 ～ 90％ときわめて高い比率を示しており，計

63 分類群以上におよぶ多様な魚種が確認されている．サイズ的にもピックアップ資料にみられる大型魚に加え，水洗選別が行われた石積１内２層～３層貝だまりでは小型魚も多く検出されており，様々なサイズの魚が利用されている．これらはグスク時代～近世（15 世紀後半～ 17 世紀後半）の城内における魚食の活発さと多様さを示している．魚類組成はハタ科，ブダイ科，フエフキダイ科，アイゴ属，ベラ科，ニザダイ科など，サンゴ礁やその周辺に生息する沿岸性種が主体である．また，水洗選別資料から検出された小型魚ではアジ科，カマス科，ニシン科，ダツ科，サバ科といった外海域を主な生息域とする回遊魚類も多く，とくにアジ類には，詳細な分類群の特定には至っていないものの，大型種から小型種までかなり多様な種が含まれている点も特徴である．こうした様相は，少なくともピックアップ資料に関する限り，全期間を通じて一貫しており，明確な年代的変化は認められない．

鳥獣類はⅢ層／石積１内（15 世紀後半～ 16 世紀前半）からⅠ層（戦後）にいたるまで，一貫してイノシシ／ブタとニワトリを主体とする様相が継続しているが，Ⅲ層上部からⅡ層にかけて，明確なイノシシ／ブタの減少とニワトリの増加がみられる．また，Ⅲ層下部では少数ながらウマ・ウシもみられるのに対して，Ⅲ層上部～Ⅱ層ではイノシシ／ブタとニワトリ以外の鳥獣類がほとんどみられなくなる．このように，鳥獣類組成にはⅢ層上部を境として大きな年代的変化が認められる．この変化は 16 世紀後半～ 17 世紀後半の間に生じたと考えられることから，薩摩入りに伴う変革の影響を示している可能性も考えられる（ただし，以下に述べる通り，淑順門西地区ではこうした変化は確認されていない）．

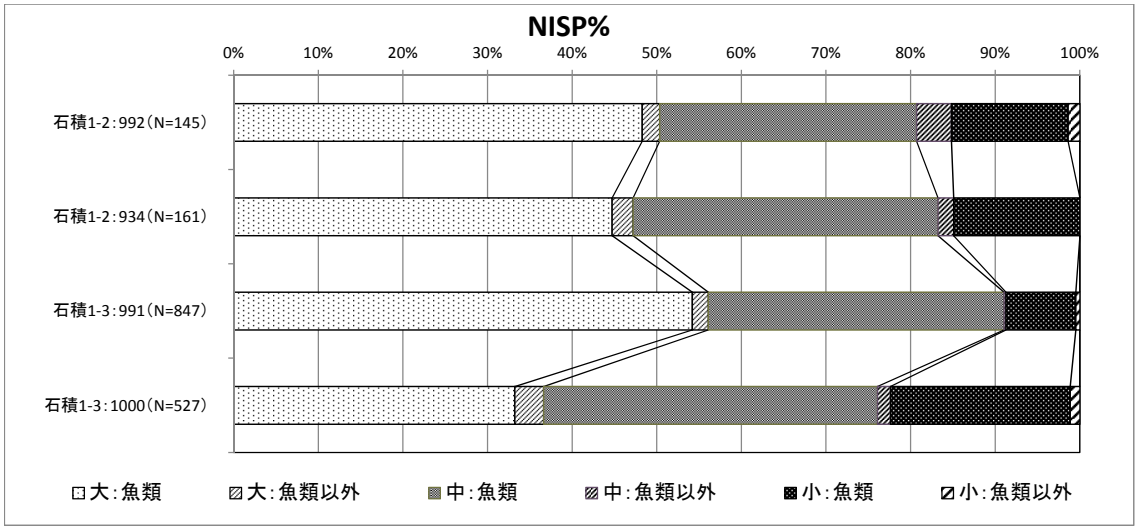
なお，Ⅰ層（戦後）ではニワトリの激減とイノシシ／ブタの急増がみられるほか，哺乳類組成の多様化（ウシ・ウマの復活，イヌ・ネコ・ヤギなどの増加）や不明確ながら魚類の減少傾向が確認されている．これらの変化は近世と戦後（首里城焼失後）の城内域での活動内容の変化を反映しているものと思われる．

（２）淑順門西地区との比較

今回得られた結果を，本地区の南東約 30m に位置する淑順門西地区（おもに 14 世紀後半～近世）のデータ（樋泉 2013）と比較すると，以下のような明確な差異が認められる．

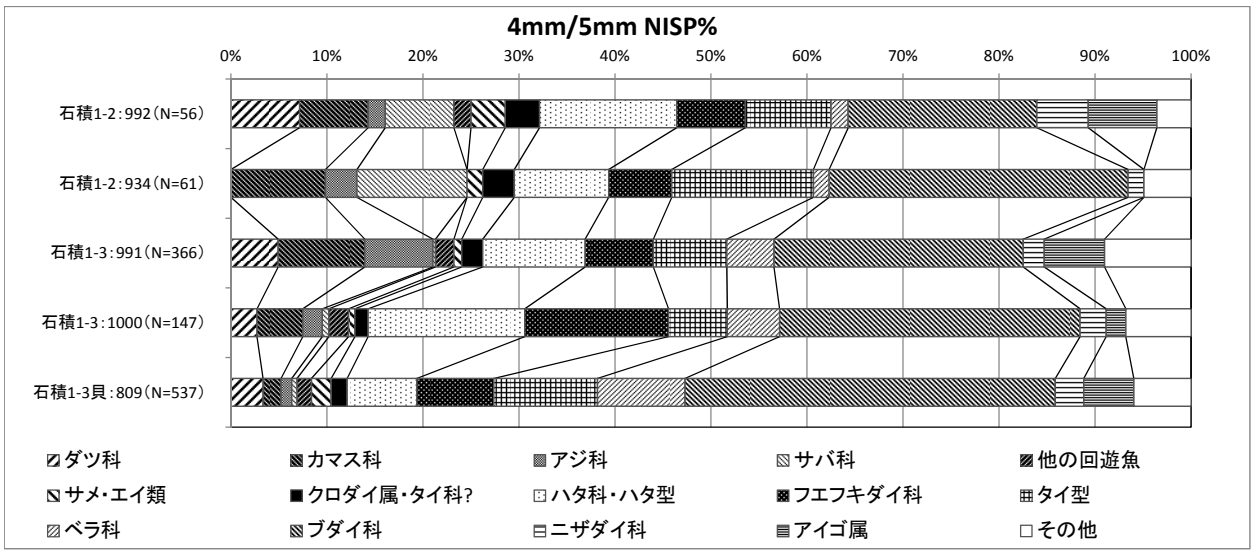
・本地区と淑順門西地区は魚類が最多である点では共通しているが，その比率は淑順門西地区が MNI 比で約 50 ～ 70％にとどまるのに対し，本地区では約 80 ～ 90％と著しく高い．この差異はグスク時代（少なくとも 15 世紀後半以降）から近世にいたる長期間にわたって一貫して認められる．

・本地区と淑順門西地区の鳥獣類組成はイノシシ／ブタとニワトリを主体とする点では共通しているが，本地区



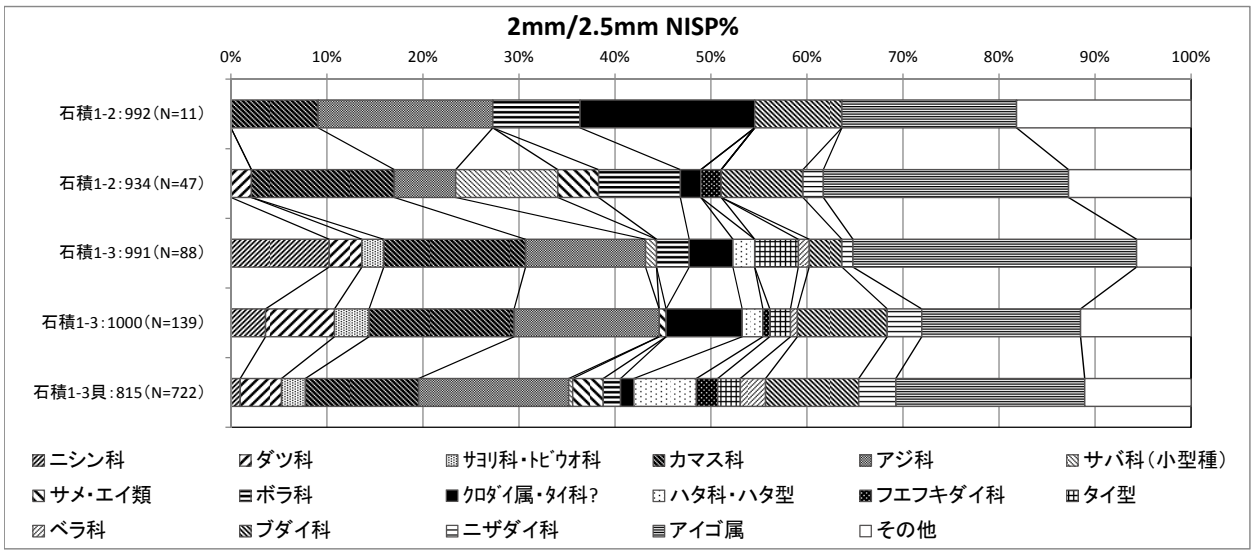
第 76 図　首里城跡銭蔵東地区における水洗選別試料検出骨のメッシュ別比率（NISP 比）

メッシュサイズ　992・991：大＝9.5mm+4mm，中＝2mm，小＝1mm．934・1000：大＝5mm，中＝2.5mm，小＝1mm．
石積1-3貝は各メッシュのデータの合算不可のため表示していない．



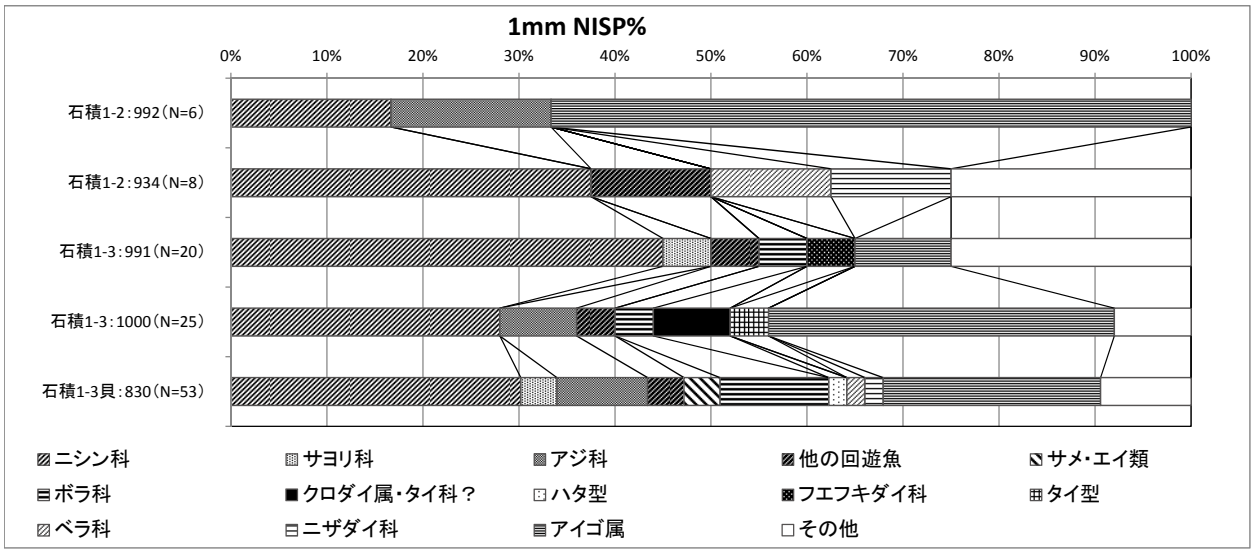
第 77 図　首里城跡銭蔵東地区の水洗選別試料（4 ㎜ /5 ㎜ﾒｯｼｭ）における魚類遺体の組成（NISP 比）

メッシュサイズ　992・991：9.5mm+4mm，その他：5mm.



第 78 図　首里城跡銭蔵東地区の水洗選別試料（2 ㎜ /2.5 ㎜ﾒｯｼｭ）における魚類遺体の組成（NISP 比）

メッシュサイズ　992・991：2mm，その他：2.5mm.

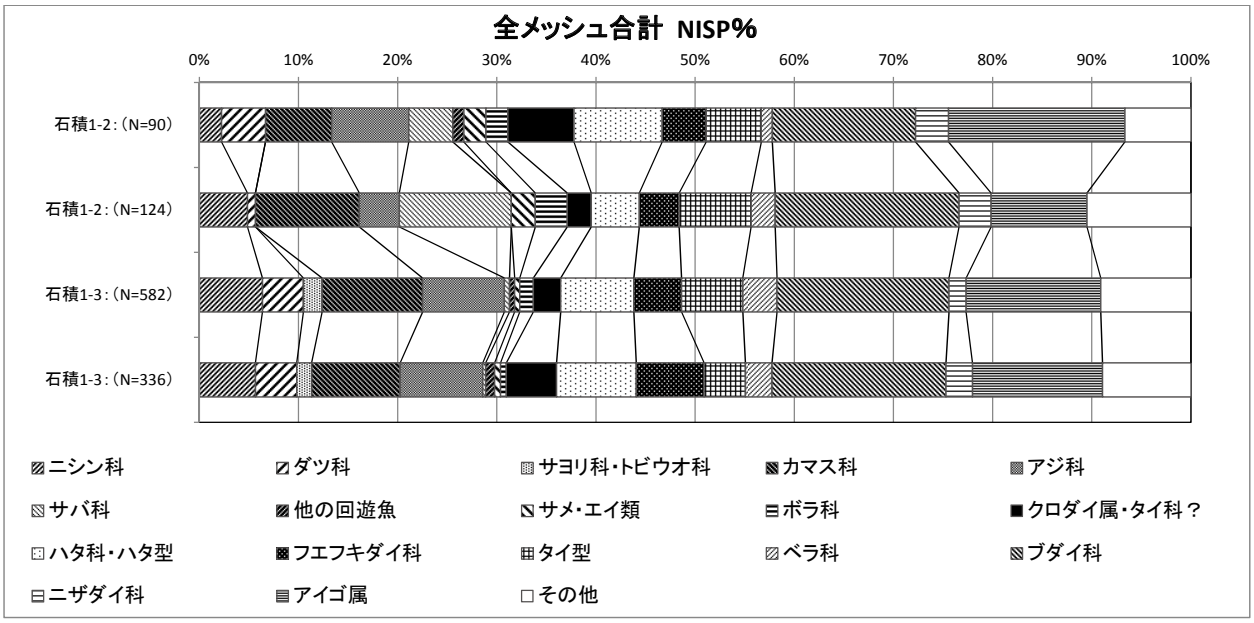


第 79 図　首里城跡銭蔵東地区の水洗選別試料（1 ㎜ﾒｯｼｭ）における魚類遺体の組成（NISP 比）

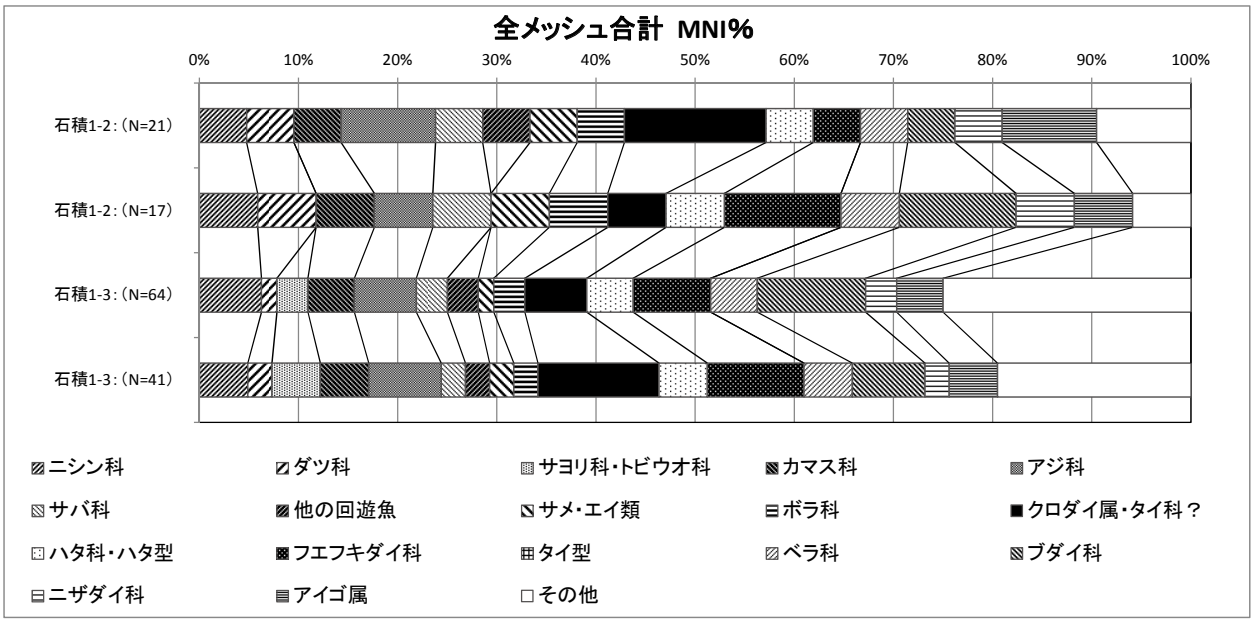
では 16 世紀後半～ 17 世紀後半の間にイノシシ／ブタの減少とニワトリの増加という明確な変化が認められるのに対して，淑順門西地区では組成の変化は明確でない．また，淑順門西地区ではウシの比率がかなり高く（グスク時代～近世での NISP 比 16 ～ 17%）ウマが少ないのに対して，本地区では両種ともに少なく，またウシよりもウマが多い．

本地区と淑順門西地区は比較的近接した位置にあり，なおかつ年代的にも大きく重複しており，長期間にわたって大局的には同時並行して堆積が進行したと考えられるにもかかわらず，両地区の遺体群の内容には上記のように時代を超えた差異が確認された．このことから，グスク時代～近世における首里城内における調理－食事－残滓廃棄のラインには複数の異なった系統ないしはパターンが併存しており，両地区の遺体群は各時代を通じてそれぞれ異なった給源からもたらされていた可能性が考えられる．

なお，本地区Ⅰ層でみられた戦後におけるイノシシ／ブタの急増は，淑順門西地区（Ⅰ層）においても同様に



第 80 図　首里城跡銭蔵東地区の水洗選別試料（全ﾒｯｼｭ合計）における魚類遺体の組成（NISP 比）
石積1-3貝は各メッシュのデータの合算不可のため表示していない．



第 81 図　首里城跡銭蔵東地区の水洗選別試料（全ﾒｯｼｭ合計）における魚類遺体の組成（MNI 比）
石積1-3貝は各メッシュのデータの合算不可のため表示していない．

確認されている．

謝辞：調査分析に際しては，沖縄県立埋蔵文化財センター瀬戸哲也氏に全面的なご教示・ご助力を賜った．千葉県立中央博物館黒住耐二には水洗選別作業の一部を行っていただき，また有意義なご教示を賜った．西本豊弘氏には現生標本を参照させていただいた．厚く御礼申し上げる．

参考文献

阿部　永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明 1994『日本の哺乳類』東海大学出版会

金子浩昌 1996「平敷屋トウバル遺跡出土の動物遺体（軟体動物を除く）」『平敷屋トウバル遺跡』沖縄県文化財調査報告書第 125 集 沖縄県教育委員会

菅原広史 2008「津堅島キガ浜貝塚出土脊椎動物遺体の再分析」南島考古 27

菅原広史 2011「勝連城跡四の曲輪から出土した脊椎動物遺体のピックアップ資料」『勝連城跡－四の曲輪北区発掘調査報告書－』うるま市教育委員会

樋泉岳二 2005「津堅貝塚から出土した脊椎動物遺体群」『津堅貝塚－中城湾港（アギ浜地区）港湾改修事業に伴う緊急発掘調査報告書－』勝連町教育委員会

樋泉岳二 2007「今帰仁城跡周辺遺跡出土の脊椎動物遺体群－Ⅲ区ｂ・東７区・シニグンニー」『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ』今帰仁村教育委員会

樋泉岳二 2013「首里城跡淑順門西地区から出土した脊椎動物遺体」『首里城跡－淑順門西地区・奉神門埋甕地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター

樋泉岳二・名島弥生・菅原広史 2009「今帰仁城主郭東斜面から出土した脊椎動物遺体」『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅳ』今帰仁村教育委員会

名島弥生・樋泉岳二 2008「南東考古学におけるフエフキダイ科魚類の属レベルでの同定とその意義」，動物考古学 25

Schmid, E. 1972 Atlas of Animal Bones for Prehistorians, Archaeologists and Quarternary Geologist. Elsevier Publishing Company.

第 94 表　首里城跡銭蔵東地区から採集された脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の組成　※Tr：トレンチ

種類	NISP(同定資料数)																						MNI(最小個体数)								
	Ⅰ層	Ⅰ'層	Ⅱ層				Ⅲ層上			Ⅲ層下			Ⅲ'層	Ⅳ層	石積1						層不明	合計	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層		Ⅲ'層	石積1			合計
			Tr1東	Tr1南	その他	合計	Tr1東	Tr1南	合計	Tr1東	Tr1南	合計			1	2	3	3貝	他	合計					上	下		1/2	3	3貝	
サメ類(ホシザメ型)	2	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	1	0	1	0	1	1	0	5
サメ類(メジロザメ型)	8	0	1	11	0	12	0	0	0	2	6	8	0	0	0	2	6	0	0	8	2	38									
トビエイ科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	0	6	0	6	0	0	0	0	0	0	1	0	1
エイ目	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	1	0	0	0	1	3
板鰓類？	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ウツボ科	1	0	1	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	1	0	0	0	0	0	0	2
ダツ科	5	0	8	12	0	20	1	1	2	0	19	19	0	0	0	6	7	6	0	19	0	65	1	4	1	2	0	2	1	1	12
イットウダイ科(?)	0	0	2	7	0	9	2	2	4	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	0	16	0	4	2	0	0	0	2	0	8
ボラ科	0	0	2	4	1	7	0	2	2	0	5	5	0	0	0	0	0	1	0	1	0	15	0	4	1	1	0	0	0	1	7
カマス科	3	1	2	11	0	13	0	1	1	0	8	8	0	0	0	0	5	0	0	5	0	31	1	3	1	1	0	0	1	0	7
マハタ型	25	3	28	71	0	99	7	16	23	2	67	69	2	0	0	14	39	7	0	60	1	282	〈6〉	〈26〉	〈7〉	〈17〉	1	〈4〉	〈12〉	3	〈76〉
バラハタ型	0	0	3	2	0	5	0	0	0	0	8	8	0	0	0	0	1	0	0	1	0	14	〈0〉	〈3〉	〈0〉	〈4〉	0	〈0〉	〈1〉	0	〈8〉
スジアラ型	6	0	3	9	0	12	0	0	0	0	11	11	1	0	0	3	7	1	0	11	0	41	〈3〉	〈5〉	〈0〉	〈5〉	1	〈1〉	〈2〉	1	〈18〉
ハタ科	68	0	69	213	0	282	17	29	46	2	148	150	1	0	1	53	108	11	2	175	1	723	16	56	8	29	〈1〉	17	23	〈3〉	153
ハタ科？	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3									
ハタ型	80	1	55	213	2	270	19	26	45	5	183	188	2	0	0	27	85	20	0	132	1	719	－	－	－	－	－	－	－	－	－
アジ類(小型種)	0	0	0	3	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	0	0	0	0	0	0	1
アジ類(大型種)(?)	17	0	4	9	0	13	0	2	2	1	26	27	1	0	0	6	23	7	0	36	0	96	1	1	1	1	1	1	1	1	8
ブリ属	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1
シイラ属	7	0	13	33	0	46	2	0	2	2	17	19	0	0	0	0	9	2	0	11	0	85	1	2	1	1	0	0	1	1	7
イスズミ科	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1
フエダイ科	2	0	4	14	1	19	3	1	4	0	10	10	0	0	0	2	4	3	0	9	0	44	1	6	1	2	0	1	1	1	13
コショウダイ類	1	0	3	5	0	8	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	1	0	0	1	0	12	1	2	0	1	0	0	1	0	5
イトヨリダイ科？	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1
マダイ亜科	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1
ヘダイ	3	1	0	9	0	9	0	1	1	0	6	6	0	0	0	0	4	0	0	4	0	24	2	3	1	2	0	0	2	0	10
クロダイ属	13	0	15	29	0	44	0	3	3	2	33	35	1	0	0	10	22	6	1	39	0	135	3	8	2	10	1	3	7	2	36
メイチダイ属(メイチダイ型)	0	0	0	2	0	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	2	1	0	0	0	0	0	〈3〉
メイチダイ属(シロダイ型)	1	0	0	5	0	5	0	0	0	0	3	3	0	0	0	0	2	0	0	2	0	11	1	3	0	2	0	0	〈2〉	0	〈8〉
メイチダイ属	2	0	1	12	0	13	0	1	1	0	6	6	0	0	0	1	4	1	0	6	0	28	〈1〉	〈3〉	〈1〉	〈2〉	0	1	3	1	12
ヨコシマクロダイ	5	2	1	4	0	5	0	0	0	0	6	6	0	0	0	1	8	1	0	10	0	28	2	1	0	1	0	1	2	1	8
キツネフエフキ	1	0	0	2	0	2	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	1	2	0	1	0	0	0	0	4
フエフキダイ属(アマミフエフキ型)	9	1	7	21	0	28	2	4	6	1	19	20	0	0	0	5	18	0	0	23	0	87	5	16	〈3〉	12	0	3	14	0	53
フエフキダイ属(ハマフエフキ型)	21	5	11	20	0	31	1	1	2	1	32	33	0	0	1	10	20	3	0	34	0	126	11	18	〈2〉	19	0	6	11	〈2〉	69
フエフキダイ属	21	0	12	30	1	43	2	7	9	2	39	41	2	0	1	4	33	10	1	49	0	165	〈13〉	〈21〉	6	〈22〉	〈1〉	〈3〉	〈16〉	6	〈88〉
フエフキダイ科	48	9	46	148	0	194	8	11	19	2	208	210	3	0	0	40	122	27	0	189	0	672	〈7〉	〈29〉	〈6〉	〈24〉	2	〈9〉	〈18〉	〈6〉	〈101〉
タイ型	41	4	27	114	1	142	10	8	18	4	120	124	2	0	0	23	76	20	0	119	0	450	－	－	－	－	－	－	－	－	－
シロクラベラ型	6	0	1	1	0	2	1	0	1	0	7	7	4	0	0	0	5	0	0	5	0	25	6	〈2〉	1	5	4	0	〈5〉	0	23
タキベラ型	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1	〈0〉	0	2	0	0	0	0	3
ベラ科A	2	0	2	8	0	10	0	1	1	0	3	3	0	0	1	0	0	0	0	1	0	17	2	〈10〉	1	3	0	〈1〉	0	0	17
ベラ科B	5	0	0	10	0	10	2	1	3	0	6	6	2	0	0	3	3	1	0	7	0	33	4	〈8〉	3	4	1	〈2〉	〈2〉	1	25
ベラ科(その他)	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	〈0〉	1	1	0	0	0	0	2
ベラ科	44	1	30	77	0	107	10	21	31	3	101	104	1	0	1	22	66	10	0	99	1	388	〈13〉	21	〈5〉	〈13〉	0	4	10	1	〈67〉

第 94 表 （つづき）

種類	NISP																						MNI									
	Ⅰ層	Ⅰ'層	Ⅱ層				Ⅲ層上			Ⅲ層下			Ⅲ'層	Ⅳ層	石積1						層不明	合計	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層		Ⅲ'層	石積1			合計
			Tr1東	Tr1南	その他	合計	Tr1東	Tr1南	合計	Tr1東	Tr1南	合計			1	2	3	3貝	他	合計					上	下		1/2	3	3貝	
イロブダイ属	7	0	2	9	0	11	0	2	2	0	6	6	2	0	0	0	5	1	0	6	0	34	3	4	1	2	1	0	3	1	15
アオブダイ属	66	5	50	172	0	222	12	25	37	4	182	186	4	0	1	30	94	31	3	159	0	679	19	55	9	54	2	9	27	12	187
ブダイ科	92	7	82	246	0	328	14	26	40	2	266	268	4	0	2	69	153	66	2	292	2	1033	〈5〉	〈23〉	〈4〉	〈19〉	〈1〉	〈5〉	〈9〉	〈5〉	〈71〉
カマスサワラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3	0	3	0	0	0	0	0	1	0	0	1
スマ	0	0	0	2	0	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	1	0	0	0	0	0	2
カツオ/スマ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1
カツオ・マグロ類	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	〈1〉	1	0	0	0	0	1
マグロ属	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	1
タチウオ科	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	2	0	1	0	0	0	0	1	0	2
ニザダイ科	27	3	13	72	0	85	7	9	16	2	72	74	0	0	0	24	36	6	0	66	0	271	1	2	1	5	0	1	1	1	12
アイゴ属	0	0	3	14	2	19	0	0	0	0	4	4	0	0	0	2	1	2	0	5	1	29	0	2	0	1	0	1	1	1	6
コチ科	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	3	0	0	3	0	7	0	1	0	1	0	0	2	0	4
モンガラカワハギ科	4	0	15	21	0	36	2	3	5	1	9	10	0	0	0	4	14	0	0	18	0	73	1	6	1	3	0	2	2	0	15
ハリセンボン科？	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	1	0	0	0	0	2
フグ科/ハリセンボン科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1
真骨類(未同定)	1	0	1	6	1	8	1	0	1	1	2	3	0	0	0	0	2	0	0	2	0	15	－	－	－	－	－	－	－	－	－
真骨類(保留)	47	2	54	93	1	148	6	7	13	4	82	86	1	0	0	15	56	15	0	86	1	384	－	－	－	－	－	－	－	－	－
真骨類(同定不可)	14	1	16	53	2	71	1	4	5	4	53	57	4	0	0	3	21	5	0	29	1	182	－	－	－	－	－	－	－	－	－
魚類合計	711	46	587	1805	13	2405	132	219	351	47	1787	1834	38	0	8	382	1070	269	9	1738	11	7134	88	234	46	170	14	54	121	38	748
カエル	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1
ウミガメ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1
カモ類(?)	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	1	0	0	0	0	0	0	0	1
ハト科	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	3	1	1	0	0	0	0	1	0	3
クイナ科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ニワトリ	44	1	88	128	0	216	4	15	19	14	47	61	1	0	0	19	62	8	0	89	0	431	5	25	4	8	1	2	9	2	56
ニワトリ?	16	0	38	49	0	87	3	8	11	10	19	29	0	0	0	7	28	2	0	37	0	180									
鳥類(未同定)	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－
鳥類(同定不可)	27	0	37	26	0	63	2	2	4	4	7	11	2	0	0	6	21	1	0	28	0	135	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ネズミ科	3	1	1	5	0	6	1	0	1	0	3	3	0	0	0	0	3	0	0	3	0	17	2	2	1	1	0	0	2	0	8
イヌ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	1
ネコ	2	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	1	0	0	0	0	0	0	2
シカ科(中型)	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	2	1	0	0	0	0	1	0	0	2
イノシシ/ブタ	111	2	26	40	0	66	6	8	14	24	147	171	17	0	1	35	161	12	0	209	1	591	4	3	1	5	1	3	4	1	22
イノシシ/ブタ?	80	2	19	21	0	40	7	11	18	12	69	81	1	3	0	13	60	7	0	80	1	306	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ヤギ	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1	0	0	1	1	0	0	0	3
ウシ	7	0	0	1	0	1	0	0	0	1	4	5	0	0	0	0	1	1	0	2	0	15	1	1	0	1	0	0	1	1	5
ウマ	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	8	2	0	0	2	11	0	0	13	1	27	3	0	0	1	1	1	1	0	7
ウシ/ウマ?	35	2	11	15	1	27	2	7	9	3	47	50	4	0	0	28	48	11	0	87	0	214	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ジュゴン(?)	2	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	4	1	1	0	0	0	0	1	0	3
哺乳類(同定不可)	6	1	2	3	0	5	0	0	0	2	9	11	0	0	1	1	1	0	0	3	0	26	－	－	－	－	－	－	－	－	－
鳥獣類合計	348	9	222	290	2	514	25	51	76	70	361	431	28	4	2	112	400	42	0	556	3	1969	23	34	6	17	4	7	21	4	116

第 95 表　首里城跡銭蔵東地区における水洗選別試料検出骨の同定結果

＜＞のついた値はNISPに算入していない.

934・1000の1mmメッシュ試料は半量分析のため，5mm・2.5mmと合算する際には×2とした．991・992の2mm・1mmメッシュ試料は半量分析のため，9.5mm・4mmと合算する際にはそれぞれ×2とした．石積1-3貝の各メッシュのデータは合算不可のため合計値は示していない.

種類	部位	残存位置	石積1-2層									石積1-3層									石積1-3貝層		
			試料992					試料934				試料991					試料1000				試料809	試料815	試料830
			9.5mm	4mm	2mm	1mm	合計	5mm	2.5mm	1mm	合計	9.5mm	4mm	2mm	1mm	合計	5mm	2.5mm	1mm	合計	5mm	2.5mm	1mm
メジロザメ科	歯						0		1		1					0				0		4	1
ミズワニ科？	歯						0				0					0				0		1	
アオザメ属？	歯						0				0					0				0	1		
サメ類(ホシザメ型)	椎骨						0				0		1			1	1			1			
サメ類(メジロザメ型)	椎骨			2			2		1		1		2			2		1		1	8	5	1
トビエイ科	歯						0				0					0				0	1	1	
エイ目	椎骨						0				0					0				0	1	10	
板鰓類	椎骨						0	1			1					0				0		2	
ニシン科	主上顎骨						0 / 0				0 / 0				1 /	2 / 0			/ 1	0 / 2			1 /
ニシン科	角骨						0 / 0				0 / 0			1 / 1	1 / 1	4 / 4			1 /	2 / 0			
ニシン科	主鰓蓋骨						0 / 0				0 / 0			1 /		2 / 0				0 / 0		/ 1	1 /
ニシン科	基後頭骨						0				0					0		1		1		1	
ニシン科	第1椎骨						0				0					0				0			1
ニシン科	第2椎骨						0				0				1	2				0			
ニシン科	腹椎						0			1	2		1	2	3	11		2	3	8		2	2
ニシン科	尾椎					1	2			2	4			4	2	12		2	2	6		3	11
カタクチイワシ科	尾椎						0				0				1	2				0			
ウナギ属	前鋤骨板						0				0					0				0		1	
ウナギ属	尾椎						0				0					0				0		1	
ウツボ科	歯骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1 /		
ウツボ科	椎骨						0				0		1			1				0		1	
アナゴ科	腹椎						0				0					0	1			1		1	
アナゴ科	尾椎						0				0					0				0		2	
コイ科	咽頭歯						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0			/ 1
エソ科	腹椎						0				0					0				0		1	
ダツ科	前上顎骨	fr					0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1		
ダツ科	方骨						0 / 0				0 / 0		/ 1			0 / 1				0 / 0			
ダツ科	腹椎		2	2			4				0		16	2		20	2	3		5	12	21	
ダツ科	尾椎						0		1		1		1	1		3	2	7		9	5	10	
サヨリ科	腹椎						0				0		1		1	3		1		1			2
サヨリ科	尾椎						0				0		1	1		3				0			
サヨリ科？	腹椎						0				0					0				0		4	
トビウオ科	腹椎						0				0		2	1		4		2		2	1	7	
トビウオ科	尾椎						0				0		1			1		2		2		7	
イットウダイ科	主上顎骨						0 / 0				0 / 0		/ 1			0 / 1	1 /			1 / 0			
イットウダイ科	歯骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1 /		
イットウダイ科	角骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1 /		
イットウダイ科？	方骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0		1 /	
トウゴロウイワシ科？	腹椎						0				0					0				0			2
ボラ科	涙骨						0 / 0				0 / 0			1 /		2 / 0				0 / 0			
ボラ科	主鰓蓋骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0		2 / 1	
ボラ科	第1椎骨						0		1		1					0				0			
ボラ科	腹椎				1		2		2		2			1		2			1	2	3	6	4
ボラ科	尾椎						0		1		1			1		2				0	2	4	2
ボラ科？	主上顎骨						0 / 0				0 / 0				/ 1	0 / 2				0 / 0			
カマス科	主上顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0		2 / 2	
カマス科	前上顎骨						0 / 0				0 / 0			/ 1		0 / 2				0 / 0	1 /	5 / 2	
カマス科	歯骨			1 /			1 / 0				0 / 0		1 / 2	1 /		3 / 2	/ 1			0 / 1	1 / 1	/ 2	
カマス科	角骨			1 /			1 / 0	/ 1			0 / 1		1 /	1 /		3 / 0	1 / 1	1 /		2 / 1	1 / 1	/ 1	
カマス科	方骨			1 /			1 / 0				0 / 0		2 /			2 / 0			/ 1	0 / 2		2 /	

第 95 表 （つづき）

種類	部位	残存位置	石積1-2層									石積1-3層									石積1-3貝層		
			試料992					試料934				試料991					試料1000				試料809	試料815	試料830
			9.5mm	4mm	2mm	1mm	合計	5mm	2.5mm	1mm	合計	9.5mm	4mm	2mm	1mm	合計	5mm	2.5mm	1mm	合計	5mm	2.5mm	1mm
カマス科	第1椎骨						0				0		1			1		2		2	1	3	
カマス科	腹椎			1			1	4	2		6		18	5		28	1	9		10	3	38	
カマス科	尾椎				1		2	1	5		6		8	5		18	3	9		12	1	28	
マハタ型	前上顎骨			/ 1			0 / 1				0 / 0		/ 2			0 / 2	2 /			2 / 0	1 / 2	3 / 2	
マハタ型	歯骨						0 / 0	/ 1			0 / 1	1 /	1 /			2 / 0	1 / 1	/ 1		1 / 2	/ 3	1 / 4	
マハタ型	前鰓蓋骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0		1 /		1 / 0	/ 2		
スジアラ型	前上顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1 /		
スジアラ型	前鰓蓋骨						0 / 0				0 / 0		/ 1			0 / 1				0 / 0			
ハタ科	主上顎骨						0 / 0				0 / 0	1 /	/ 1			1 / 1	1 /			1 / 0	1 / 1	3 / 2	
ハタ科	角骨			1 /			1 / 0	1 /			1 / 0					0 / 0	1 /			1 / 0	1 / 1	/ 1	
ハタ科	方骨						0 / 0				0 / 0	1 /	1 / 2			2 / 2	2 / 1			2 / 1	/ 1	1 / 1	
ハタ科	前鰓蓋骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0	1 /			1 / 0		1 /	
ハタ科	主鰓蓋骨A						0 / 0				0 / 0					0 / 0	/ 1			0 / 1	2 / 3		
ハタ科	主鰓蓋骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1 /	1 / 1	
ハタ科	擬鎖骨A			/ 1			0 / 1				0 / 0	1 / 2		1 /		3 / 2	/ 1			0 / 1	2 / 4	1 /	
ハタ科	擬鎖骨B						0 / 0				0 / 0	1 /				1 / 0				0 / 0			
ハタ科	第1椎骨			1			1				0	1	2			3				0	2		
ハタ型	腹椎		1	1			2	3			3	4	7			11	10	1		11	4	13	1
ハタ型	尾椎		1	1			2	1			1	6	4	1		12	2			2	7	12	
キス科	方骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0		1		1 / 0			
キス科	腹椎						0				0					0				0		6	
キス科	尾椎						0				0					0				0		1	
アジ科(小型種)	主上顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0		1 /		1 / 0		/ 2	
アジ科(小型種)	前上顎骨						0 / 0				0 / 0		1 /	1 /		3 / 0		/ 1		0 / 1	1 /	2 / 3	
アジ科(小型種)	歯骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1 /	1 / 3	
アジ科(小型種)	角骨						0 / 0				0 / 0			1 /		2 / 0		1 / 1		1 / 1		5 / 4	1 /
アジ科(小型種)	方骨						0 / 0				0 / 0			/ 1		0 / 2		/ 1	1	0 / 3		/ 1	
アジ科(小型種)	主鰓蓋骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0	/ 1	/ 1		0 / 2		1 /	
アジ科(小型種)	第1椎骨						0				0					0		2		2		6	
アジ科(小型種)	腹椎			1			1				0		3	2		7				0			
アジ科(小型種)	尾椎						0				0		2	4		10	1			1			
アジ科(小型種)	尾部棒状骨						0				0			1		2				0			
アジ科(大型種)	前上顎骨						0 / 0				0 / 0		/ 1			0 / 1				0 / 0			
アジ科(大型種)	歯骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0		1 /	
アジ科(大型種)	角骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1 /	1 / 1	
アジ科(大型種)	方骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	/ 1		
アジ科(大型種)	第1椎骨						0				0					0				0		3	1
アジ科	主上顎骨				1 /		2 / 0				0 / 0					0 / 0	/ 1			0 / 1			
アジ科	歯骨						0 / 0				0 / 0			1 /		2 / 0				0 / 0			
アジ科	角骨					1 /	2 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0			
アジ科	方骨						0 / 0				0 / 0		/ 1			0 / 1			1 /	2 / 0		3 / 2	
アジ科	主鰓蓋骨				/ 1		0 / 2				0 / 0					0 / 0				0 / 0			
アジ科	腹椎						0		1		1		5			5		7		7	2	39	
アジ科	尾椎						0	2	1		3		13			13		6		6		34	2
アジ科	尾部棒状骨						0		1		1					0				0		1	1
アジ科	稜鱗					〈1〉	〈2〉				0		〈5〉	〈5〉	〈1〉	〈17〉	〈2〉	〈12〉	〈2〉	〈16〉	〈4〉	〈26〉	〈5〉
シイラ属	腹椎						0				0		1			1	2			2	5		
シイラ属	尾椎			1			1				0					0	1			1	2		
ヒメジ科	前上顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0		/ 1	
ヒメジ科	歯骨			1 /			1 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0			
ヒメジ科	方骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0		1 /	
ヒメジ科	腹椎						0				0					0				0		2	

第 95 表 （つづき）

種類	部位	残存位置	石積1-2層									石積1-3層								石積1-3貝層		
			試料992					試料934				試料991					試料1000				試料809	試料815	試料830
			9.5mm	4mm	2mm	1mm	合計	5mm	2.5mm	1mm	合計	9.5mm	4mm	2mm	1mm	合計	5mm	2.5mm	1mm	合計	5mm	2.5mm	1mm
メジナ科	歯骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0	1 / 1			1 / 1			
メジナ科	角骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0	/ 1			0 / 1			
イスズミ科	前上顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	/ 1		
イスズミ近似種	第1椎骨						0				0			1	1	4				0			
フエダイ科	主上顎骨						0 / 0				0 / 0		/ 2			0 / 2				0 / 0	1 /	1 /	
フエダイ科	前上顎骨						0 / 0				0 / 0		/ 2	2 /		4 / 2		/ 1		0 / 1	1 / 1	/ 2	
フエダイ科	歯骨						0 / 0				0 / 0		/ 1			0 / 1				0 / 0		2 /	/ 1
フエダイ科	角骨						0 / 0				0 / 0		/ 1			0 / 1				0 / 0			
フエダイ科？	第1椎骨			1			1				0					0				0			
コショウダイ類	主上顎骨						0 / 0				0 / 0	/ 1				0 / 1				0 / 0	1 /		
コショウダイ類	角骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	/ 1		
コトヒキ属	主上顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0		/ 1		0 / 1			
コトヒキ属	腹椎						0				0					0		1		1			
コトヒキ属？	方骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0		1 /		1 / 0		/ 2	
イトヨリダイ科	主上顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0		1 / 1	
イトヨリダイ科	前上顎骨						0 / 0				0 / 0		1 /			1 / 0				0 / 0			
イトヨリダイ科	歯骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0		/ 1	
イトヨリダイ科	方骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	/ 1	1 / 1	
クロダイ属	主上顎骨				1 /		2 / 0				0 / 0			1 / 1		2 / 2	/ 1	/ 1		0 / 2	/ 1	2 /	
クロダイ属	前上顎骨						0 / 0				0 / 0		1 /	/ 2		1 / 4		1 / 1		1 / 1	1 / 1		
クロダイ属	歯骨			1 / 1	/ 1		1 / 3				0 / 0	/ 1	1 / 1			1 / 2	/ 1	1 / 4		1 / 5	1 / 1	2 /	
クロダイ属	角骨						0 / 0	1 / 1			1 / 1	/ 1	1 / 1			1 / 2		/ 1		0 / 1	2 /	/ 1	
クロダイ属	方骨						0 / 0		/ 1		0 / 1					0 / 0			1 /	2 / 0		1 / 2	
クロダイ属	口蓋骨						0 / 0				0 / 0		/ 1			0 / 1				0 / 0			
クロダイ属	主鰓蓋骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1 /	2 /	
タイ科？	第1椎骨						0				0					0		1	1	3	1		
タイ科？	第2椎骨						0				0					0		1		1			
ヨコシマクロダイ	歯骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1		
ヨコシマクロダイ	第2椎骨						0				0					0				0	1		
ヨコシマクロダイ	腹椎						0				0		1			1				0			
ノコギリダイ属	主上顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0		1 /	
ノコギリダイ属	前上顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0	/ 1			0 / 1			
メイチダイ属メイチダイ型	前上顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1 /		
アマミフエフキ型	前上顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0	/ 1			0 / 1	1 / 2		
ハマフエフキ型	前上顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0	1 / 2			1 / 2	/ 2		
フエフキダイ属	方骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0	1 /			1 / 0	4 / 2	3 / 1	
フエフキダイ属	口蓋骨			1 /			1 / 0	1 / 2			1 / 2	/ 1	3 / 3			3 / 4	/ 2			0 / 2	1 / 2		
フエフキダイ科	主上顎骨						0 / 0				0 / 0	1 /	1 / 2			2 / 2	2 /			2 / 0	3 / 1	/ 1	
フエフキダイ科	前上顎骨						0 / 0				0 / 0		/ 2			0 / 2	/ 1			0 / 1			
フエフキダイ科	歯骨						0 / 0				0 / 0	/ 1	/ 2		1	2 / 3	1 / 1			1 / 1	/ 2	3 / 1	
フエフキダイ科	角骨		/ 1				0 / 1				0 / 0	1 / 1	1 / 1			2 / 2	/ 1	1 /		1 / 1	1 / 2	1 /	
フエフキダイ科	前鰓蓋骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0	1 / 2			1 / 2	/ 3		
フエフキダイ科	主鰓蓋骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0	/ 2			0 / 2			
フエフキダイ科	第1椎骨			1			1				0	1	1			2				0	5	3	
フエフキダイ科	腹椎		1				1	1	1		2		3			3	3			3	9	2	
タイ型	腹椎			2			2				0	2	4	3		12	3	1		4	24	6	
タイ型	尾椎			3			3	9			9	7	15	1		24	6	2	1	10	34	11	
チョウチョウウオ科	腹椎						0				0					0				0		1	
スズメダイ科	歯骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0		1 /	
スズメダイ科	角骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0		2 /	
スズメダイ科	第1椎骨						0				0			1		2				0			
スズメダイ科？	腹椎						0				0					0			1	2			

第 95 表　（つづき）

種類	部位	残存位置	石積1-2層									石積1-3層									石積1-3貝層		
			試料992					試料934				試料991					試料1000				試料809	試料815	試料830
			9.5mm	4mm	2mm	1mm	合計	5mm	2.5mm	1mm	合計	9.5mm	4mm	2mm	1mm	合計	5mm	2.5mm	1mm	合計	5mm	2.5mm	1mm
シロクラベラ型	下咽頭骨						0				0	1				1				0	1		
ベラ科A	上咽頭骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1 / 1	1 / 1	
ベラ科A	下咽頭骨						0				0		1			1				0		1	
ベラ科B	上咽頭骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1		
ベラ科	下咽頭骨						0			1	2					0				0			
ベラ科	主上顎骨						0 / 0				0 / 0		/ 1	/ 1		0 / 3				0 / 0	2 / 1	1 /	
ベラ科	前上顎骨			/ 1			0 / 1				0 / 0					0 / 0				0 / 0	4 /	1 /	
ベラ科	歯骨						0 / 0				0 / 0	1 /				1 / 0	/ 1			0 / 1	2 / 1	1 / 2	
ベラ科	前上顎骨／歯骨						0	1			1	1	1			2				0	1	1	
ベラ科	角骨						0 / 0				0 / 0	/ 1				0 / 1				0 / 0	/ 2	/ 1	
ベラ科	方骨						0 / 0				0 / 0		/ 1			0 / 1	1 / 1	1 /		2 / 1	3 / 2	2 / 6	
ベラ科	第1椎骨						0				0					0				0			1
ベラ科	腹椎A						0				0	2				2				0	8		
ベラ科	尾椎A						0				0	3	2			5	2			2	10		
ベラ科	腹椎B						0				0		2			2				0	2		
ベラ科	尾椎B						0				0		1			1	1			1	5	1	
ベラ科	腹椎						0				0					0	2			2	2		
アオブダイ属	上咽頭骨			/ 1			0 / 1				0 / 0		/ 1			0 / 1	1 /			1 / 0	2 / 1	/ 2	
アオブダイ属	下咽頭骨						0				0	2				2	1			1	1		
アオブダイ属	前上顎骨						0 / 0				0 / 0		4 / 1			4 / 1	2 3			2 / 3	6 / 7	1 / 2	
アオブダイ属	歯骨						0 / 0	/ 1			0 / 1	5 /	2 / 3			7 / 3	1			0 / 1	5 / 6	/ 2	
アオブダイ属	前上顎骨／歯骨						0				0					0				0		1	
ブダイ科	主上顎骨						0 / 0	1 /			1 / 0	/ 1	3 / 1			3 / 2	1 / 3	1 /		2 / 3	6 / 5		
ブダイ科	角骨						0 / 0				0 / 0		1 / 2	/ 1		1 / 4	1 / 1	1 / 2		2 / 3	5 / 1	3 / 2	
ブダイ科	方骨						0 / 0	1 /	1 /		2 / 0	1 /	4 / 1			5 / 1	/ 1	/ 1		0 / 2	5 / 3	2 / 1	
ブダイ科	主鰓蓋骨						0 / 0	/ 1			0 / 1					0 / 0	1 / 1			1 / 1	2 / 4	2 /	
ブダイ科	第1椎骨						0	1			1	1	2			3	1	1		2	5	4	
ブダイ科	腹椎			3			3	1			1	4	20			24	12	3		15	59	21	
ブダイ科	尾椎		2	5	1		9	13	3		16	6	30	2		40	16	4		20	84	27	
サバ科(小型種)	歯骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0		1 / 1	
サバ科(小型種)	腹椎			1			1	3	3	1	8			1		2				0	1	1	
サバ科(小型種)	尾椎			3			3	4	2		6					0	1			1	1		
ソウダガツオ属	尾椎						0				0		1			1				0	1		
タチウオ科	腹椎						0				0		2			2				0	1		
タチウオ科	尾椎						0				0		3			3				0		4	
ニザダイ科	前上顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0	1 /			1 / 0			
ニザダイ科	歯骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1 /		
ニザダイ科	方骨						0 / 0				0 / 0			/ 1		0 / 2				0 / 0		1 /	
ニザダイ科	舌顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0		/ 1		0 / 1	1 /		
ニザダイ科	主鰓蓋骨			1 /			1 / 0				0 / 0	1 /				1 / 0				0 / 0	1 /		
ニザダイ科	擬鎖骨						0 / 0	/ 1			0 / 1		1 /			1 / 0		1 /		1 / 0	/ 2	1 /	
ニザダイ科	第1椎骨						0				0					0				0		1	
ニザダイ科	腹椎			2			2		1		1	1	2			3	2	1		3	4	8	1
ニザダイ科	尾椎						0			1	2	1	1			2	1	2		3	6	16	
ニザダイ科	楯鱗						0				0	1				1				0	1	1	
アイゴ属	前頭骨					/ 1	0 / 2				0 / 0		1 /	1 /		3 / 0		/ 1		0 / 1	2 / 2	4 / 3	
アイゴ属	主上顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0		1 /	
アイゴ属	前上顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0			1 /	2 / 0		2 / 3	
アイゴ属	歯骨					1 /	2 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0		3 /	/ 1
アイゴ属	前上顎骨／歯骨						0				0				1	2		1		1		1	
アイゴ属	角骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0		/ 1		0 / 1		3 / 1	
アイゴ属	方骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0		1 / 1	

第 95 表 （つづき）

種類	部位	残存位置	石積1-2層									石積1-3層									石積1-3貝層		
			試料992					試料934				試料991					試料1000				試料809	試料815	試料830
			9.5mm	4mm	2mm	1mm	合計	5mm	2.5mm	1mm	合計	9.5mm	4mm	2mm	1mm	合計	5mm	2.5mm	1mm	合計	5mm	2.5mm	1mm
アイゴ属	舌顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0			/ 1	0 / 2		/ 1	
アイゴ属	主鰓蓋骨						0 / 0		/ 1		0 / 1					0 / 0				0 / 0		1 / 1	
アイゴ属	擬鎖骨						0 / 0		1 /		1 / 0					0 / 0				0 / 0		/ 2	
アイゴ属	第1椎骨						0				0		1		1	3	1			1	1	4	2
アイゴ属	腹椎			2	1		4		4		4		9	12		33		8	4	16	9	44	1
アイゴ属	尾椎			2	1	2	8		6		6	1	11	13		38	2	12	3	20	14	66	8
コチ科	腹椎						0				0		3	1		5				0			
コチ科	尾椎						0	1			1		1			1				0			
モンガラカワハギ科	前上顎骨／歯骨						0				0					0				0		1	
モンガラカワハギ科	歯						0				0					0	〈1〉			〈1〉	〈1〉		
モンガラカワハギ科	角骨						0				0					0				0		1	
モンガラカワハギ科	方骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	/ 1		
モンガラカワハギ科	腹椎						0				0					0	2			2	1		
モンガラカワハギ科	尾椎						0				0					0				0	1		
モンガラカワハギ科	鱗						0				0		〈1〉			〈1〉		〈1〉	〈1〉	〈3〉	〈1〉	〈1〉	
真骨類未同定	主上顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0		/ 1		0 / 1		2 / 1	
真骨類未同定	前上顎骨						0 / 0			/ 1	0 / 2		/ 1			0 / 1				0 / 0		2 / 1	
真骨類未同定	歯骨						0 / 0				0 / 0		/ 1			0 / 1				0 / 0	2 / 3	1 / 1	
真骨類未同定	角骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0	1 /			1 / 0		1 / 1	
真骨類未同定	方骨						0 / 0		/ 1		0 / 1		1 /			1 / 0		1 /		1 / 0	1 /	/ 1	
真骨類未同定	第1椎骨						0		1	1	3				1	2		2		2		4	1
真骨類未同定	腹椎						0	2	2		4	1				1	2	4	1	8	7		
真骨類未同定	尾椎						0		2		2					0		3		3			
真骨類未同定	椎骨				2		4				0		10		3	16				0		24	2
真骨類保留	耳石						0				0		3	3		9		5	2	9	1	9	3
真骨類保留	主上顎骨						0 / 0	2 /			2 / 0					0 / 0				0 / 0	1 /		
真骨類保留	歯						0				0					0		〈1〉		〈1〉			
真骨類保留	前上顎骨／歯骨						0				0					0				0		1	
真骨類保留	角骨						0 / 0				0 / 0		/ 2			0 / 2		1 /		1 / 0	/ 2	2 / 1	
真骨類保留	方骨				1 /		2 / 0				0 / 0		/ 2			0 / 2				0 / 0		3 / 4	/ 1
真骨類保留	前鰓蓋骨						0 / 0				0 / 0	/ 1				0 / 1				0 / 0			
真骨類保留	主鰓蓋骨			1 /			1 / 0				0 / 0		/ 3			0 / 3		4	1	0 4 2	1 / 2	15	
真骨類保留	椎骨			10	7	3	30	4	6		10	2	68	45	7	174	13	45	12	82	68	278	36
真骨類保留	鱗								〈3〉		〈3〉		〈1〉			〈1〉				〈3〉		〈7〉	
真骨類同定不可	主上顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0	1 / 1	/ 1		1 / 2	1 / 1	1 /	
真骨類同定不可	前上顎骨／歯骨						0				0					0				0		1	
真骨類同定不可	角骨						0 / 0				0 / 0		1 /			1 / 0				0 / 0			
真骨類同定不可	方骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1 / 1	1 /	
真骨類同定不可	前鰓蓋骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0	2			2	1		
真骨類同定不可	主鰓蓋骨				/ 1		0 / 2				0 / 0				1	2 / 0	2			2	1		
真骨類同定不可	椎骨			3	2	1	9	5	5	3	16		11	12	7	49	9	11	13	46	23	88	4
真骨類同定不可	尾部棒状骨						0			1	2					0		2	3	8	5	20	4
カエル類	四肢骨						0				0					0				0			1
両生類／爬虫類	椎骨						0				0				2	4				0			
ヘビ類	椎骨					1	2		1		1					0	1	1		2		5	
ニワトリ？	烏口骨	胸骨端					0 / 0	1 /			1 / 0					0 / 0				0 / 0	1 /		
ニワトリ？	上腕骨	d					0 / 0				0 / 0					0 / 0	1			1			
ニワトリ？	大腿骨	p					0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1 /		
ニワトリ？	脛骨	p					0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1 /		
鳥類同定不可	椎骨						0				0					0				0	1		
鳥類同定不可	大基節骨						0				0		1			1				0			
鳥類同定不可	脛骨	dfr					0				0					0				0	1		

第 95 表 （つづき）

種類	部位	残存位置	石積1-2層									石積1-3層									石積1-3貝層		
			試料992					試料934				試料991					試料1000				試料809	試料815	試料830
			9.5mm	4mm	2mm	1mm	合計	5mm	2.5mm	1mm	合計	9.5mm	4mm	2mm	1mm	合計	5mm	2.5mm	1mm	合計	5mm	2.5mm	1mm
鳥類同定不可	指骨	d					0				0		1			1				0			
鳥類？同定不可	四肢骨	m					0				0		1			1		1		1	2		
トガリネズミ科	上顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0		1 /	
ネズミ亜科	上顎骨						0 / 0	1 /			1 / 0					0 / 0	/ 1			0 / 1			
ネズミ亜科	下顎骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0		/ 1		0 / 1	1 /		
ネズミ亜科	臼歯				1		2				0					0			1	2		3	2
ネズミ科	上顎切歯				/ 1		0 / 2				0 / 0					0 / 0		/ 1		0 / 1		1 /	
ネズミ科	下顎切歯						0 / 0				0 / 0					0 / 0			1 /	2 / 0		/ 1	/ 1
イノシシ/ブタ	前臼歯						0				0					0				0		1	
イノシシ/ブタ	肩甲骨	d					0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1 /		
イノシシ/ブタ	橈骨	m					0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1		
イノシシ/ブタ	尺骨	滑車切痕					0 / 0				0 / 0					0 / 0	/ 1			0 / 1			
イノシシ/ブタ	脛骨	(p)	1 /				1 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0			
イノシシ/ブタ	脛骨	(d-)					0 / 0				0 / 0					0 / 0	/ 1			0 / 1			
イノシシ/ブタ	距骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0	/ 1			0 / 1			
イノシシ/ブタ	踵骨		/ 1				0 / 1				0 / 0					0 / 0	/ 1			0 / 1			
イノシシ/ブタ	第2中足骨	p					0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1 /		
イノシシ/ブタ	第4中足骨	p	/ 1				0 / 1				0 / 0					0 / 0				0 / 0			
イノシシ/ブタ	第5中足骨	p					0 / 0				0 / 0					0 / 0	/ 2			0 / 2			
イノシシ/ブタ	手根/足根骨						0				0		1			1				0			
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	(d)					0				0					0	1			1			
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	(d-)					0				0					0				0	1		
イノシシ/ブタ	基節骨						0				0		1			1				0	1		
イノシシ/ブタ	中節骨						0				0		1			1				0	1		
イノシシ/ブタ	末節骨	w					0				0		1			1				0			
イノシシ/ブタ？	腓骨?	m					0	1			1					0				0			
ウシ／ウマ？		fr					0				0	<1>				<1>				0			
哺乳類(小)同定不可	軸椎						0				0					0	1			1		1	
哺乳類(小)同定不可	尾椎						0				0		1			1				0			
哺乳類(小)同定不可	椎骨						0				0			1		2	1	2		3	3	10	
哺乳類(小)同定不可	肩甲骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0		1	
哺乳類(小)同定不可	橈骨	p					0 / 0				0 / 0					0 / 0			1	2			
哺乳類(小)同定不可	尺骨	p			1		2		1		1					0				0		2	
哺乳類(小)同定不可	寛骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	/ 1	1	
哺乳類(小)同定不可	大腿骨	p					0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0	1 /	/ 1	
哺乳類(小)同定不可	大腿骨	(p-)-(d-)					0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0		1 /	
哺乳類(小)同定不可	大腿骨	(d)					0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0		1	
哺乳類(小)同定不可	距骨						0 / 0				0 / 0					0 / 0				0 / 0		1	
哺乳類(小)同定不可	中手/中足骨						0				0					0				0			1
哺乳類(小)同定不可	末節骨						0		1		1					0				0			
哺乳類(小)同定不可	肋骨	m					0				0		1			1		2		2			
哺乳類(中)同定不可	胸椎	棘突起					0				0	2				2				0			
哺乳類(中)同定不可	腰椎	fr					0				0					0				0	1		
哺乳類(中)同定不可	肋骨	p					0				0					0				0			
哺乳類(中)同定不可	肋骨	<p->					0				0					0	1			1	2		
哺乳類(中)同定不可	肋骨	m					0	1			1	4	1			5	5			5	5		
合計			11	62	25	11	145	76	61	12	161	80	395	149	37	847	193	216	59	527	673	1177	106

第 96 表　首里城跡銭蔵東地区における水洗選別試料検出骨の組成（NISP・MNI）

＊魚歯・鱗は一部の分類群を除きNISPに算入していない.
＊934・1000の1mmメッシュ試料は半量分析のため，5mm・2.5mmと合算する際には×2とした.
＊991・992の2mm・1mmメッシュ試料は半量分析のため，4mmと合算する際にはそれぞれ×2とした.
＊石積1-3貝の各メッシュのデータは合算不可のためNISP合計値およびMNIは示していない.

種類	NISP(同定資料数)																				MNI(最小個体数)			
	石積1-2層									石積1-3層									石積1-3貝層			石積1-2層		石積1-3層	
	992					934				991					1000				809	815	830	992	934	991	1000
	9.5mm	4mm	2mm	1mm	合計*	5mm	2.5mm	1mm	合計*	9.5mm	4mm	2mm	1mm	合計*	5mm	2.5mm	1mm	合計*	5mm	2.5mm	1mm				
メジロザメ科					0		1		1					0				0		4	1	0	1	0	0
ミズワニ科？					0				0					0				0		1		0	0	0	0
アオザメ属？					0				0					0				0	1			0	0	0	0
サメ類(ホシザメ型)					0				0		1			1	1			1				1	〈1〉	1	1
サメ類(メジロザメ型)		2			2		1		1		2			2		1		1	8	5	1				
トビエイ科					0				0					0				0	1	1		0	0	0	0
エイ目					0				0					0				0	1	10		0	0	0	0
板鰓類					0	1			1					0				0		2		0	〈1〉	0	0
ニシン科				1	2			3	6		1	9	9	37		5	7	19		7	16	1	1	4	2
カタクチイワシ科					0				0				1	2				0				0	0	1	0
ウナギ属					0				0					0				0		2		0	0	0	0
ウツボ科					0				0		1			1				0	1	1		0	0	1	0
アナゴ科					0				0					0	1			1		3		0	0	0	1
コイ科					0				0					0				0			1	0	0	0	0
エソ科					0				0					0				0		1		0	0	0	0
ダツ科	2	2			4		1		1		18	3		24	4	10		14	18	31		1	1	1	1
サヨリ科					0				0		2	1	1	6		1		1			2	0	0	1	1
サヨリ科？					0				0					0				0		4		0	0	0	0
トビウオ科					0				0		3	1		5		4		4	1	14		0	0	1	1
イットウダイ科					0				0		1			1	1			1	2	1		0	0	1	1
トウゴロウイワシ科？					0				0					0				0			2	0	0	0	0
ボラ科			1		2		4		4			3	1	8			1	2	5	13	6	1	1	2	1
カマス科		4	1		6	6	7		13		33	13		59	7	21	1	30	10	85		1	1	3	2
マハタ型		1			1	1			1	1	3			4	5	2		7	13	10		1	0	2	2
スジアラ型					0				0		1			1				0	1			0	0	1	0
ハタ科		3			3	1			1	6	6	1		14	7			7	14	12		〈1〉	1	〈3〉	〈2〉
ハタ科？					0				0	1				1				0				−	−	−	−
ハタ型	2	2			4	4			4	10	11	1		23	12	1		13	11	25	1	−	−	−	−
キス科					0				0					0		1		1		7		0	0	0	1
アジ科(小型種)		1			1				0		6	10		26	2	8	1	12	2	28	1	〈1〉	0	3	3
アジ科(大型種)					0				0		1			1				0	2	6	1	0	0	1	0
アジ科			2	1	6	2	3		5		19	1		21	1	13	1	16	2	79	3	2	1	〈2〉	〈2〉
シイラ属		1			1				0		1			1	3			3	7			1	0	1	1
ヒメジ科		1			1				0					0				0		4		1	0	0	0
メジナ科					0				0					0	3			3				0	0	0	1
イスズミ科					0				0			1	1	4				0	1			0	0	4	0
フエダイ科		1			1				0		6	2		10		1		1	3	5	1	1	0	4	1
コショウダイ類					0				0	1				1				0	2			0	0	1	0
コトヒキ属					0				0					0		3		3		2		0	0	0	1
イトヨリダイ科					0				0		1			1				0	1	5		0	0	1	0
クロダイ属		2	2		6	2	1		3	2	6	4		16	2	9	1	13	8	10		3	1	4	5
タイ科？					0				0					0		2	1	4	1			−	−	−	−
ヨコシマクロダイ					0				0		1			1				0	2			0	0	1	0
ノコギリダイ属					0				0					0	1			1		1		0	0	0	1
メイチダイ属メイチダイ型					0				0					0				0	1			0	0	0	0
アマミフエフキ型					0				0					0	1			1	3			0	0	0	1
ハマフエフキ型					0				0					0	3			3	2			0	0	0	2
フエフキダイ属		1			1	3			3	1	6			7	3			3	9	4		1	2	4	〈2〉
フエフキダイ科	2	1			3	1	1		2	5	13		1	20	14	1		15	26	11		〈1〉	〈1〉	〈3〉	〈2〉
タイ型		5			5	9			9	9	19	4		36	9	3	1	14	58	17		−	−	−	−
チョウチョウウオ科					0				0					0				0		1		0	0	0	0
スズメダイ科					0				0			1		2			1	2		3		0	0	2	1
シロクラベラ型					0				0	1				1				0	1			0	0	〈1〉	0
ベラ科A					0				0		1			1				0	2	3		0	0	〈1〉	0
ベラ科B					0				0					0				0	1			0	0	0	0
ベラ科		1			1	1		1	3	8	8	1		18	8	1		9	45	16	1	1	1	3	2
アオブダイ属		1			1	1			1	7	11			18	8			8	28	8		1	〈1〉	7	3
ブダイ科	2	8	1		12	18	4		22	13	64	3		83	38	13		51	179	62		〈1〉	2	〈5〉	〈3〉
サバ科(小型種)		4			4	7	5	1	14			1		2	1			1	2	3		1	1	1	1
ソウダガツオ属					0				0		1			1				0	1			0	0	1	0
タチウオ科					0				0		5			5				0	1	4		0	0	1	0
ニザダイ科		3			3	1	1	1	4	4	4	1		10	4	5		9	16	28	1	1	1	2	1
アイゴ属		4	2	4	16		12		12	1	22	26	2	79	3	23	9	44	28	142	12	2	1	3	2
コチ科					0	1			1		4	1		6				0				0	1	1	0
モンガラカワハギ科					0				0					0	2			2	3	2		0	0	0	1
真骨類未同定			2		4	2	6	2	12	1	13		4	22	3	11	1	16	13	39	3	−	−	−	−
真骨類保留		11	8	3	33	6	6		12	3	78	48	7	191	17	55	15	102	75	313	40	−	−	−	−
真骨類同定不可		3	3	1	11	5	5	4	18		12	12	8	52	11	14	16	57	34	111	8	−	−	−	−
カエル類					0				0					0				0			1	0	0	0	0
両生類／爬虫類					0				0				2	4				0				−	−	−	−
ヘビ類				1	2		1		1					0	1	1		2		5		1	1	0	1
ニワトリ？要確認					0	1			1					0	1			1	3			0	1	0	1
鳥類同定不可					0				0		3			3		1		1	4			−	−	−	−
トガリネズミ科					0				0					0				0		1		0	0	0	0
ネズミ科			2		4	1			1					0	1	2	2	7	1	5	3	2	1	0	2
イノシシ/ブタ	3				3	1			1		4			4	7			7	6	1		1	1	1	2
ウシ／ウマ？					0				0	+				+				0				−	−	−	−
哺乳類(小)同定不可			1		2		2		2		2	1		4	2	4	1	8	5	19	1	−	−	−	−
哺乳類(中)同定不可					0	1			1	6	1			7	6			6	8			−	−	−	−
合計	11	62	25	11	145	76	61	12	161	80	395	149	37	847	193	216	59	527	673	1177	106	25	21	65	47

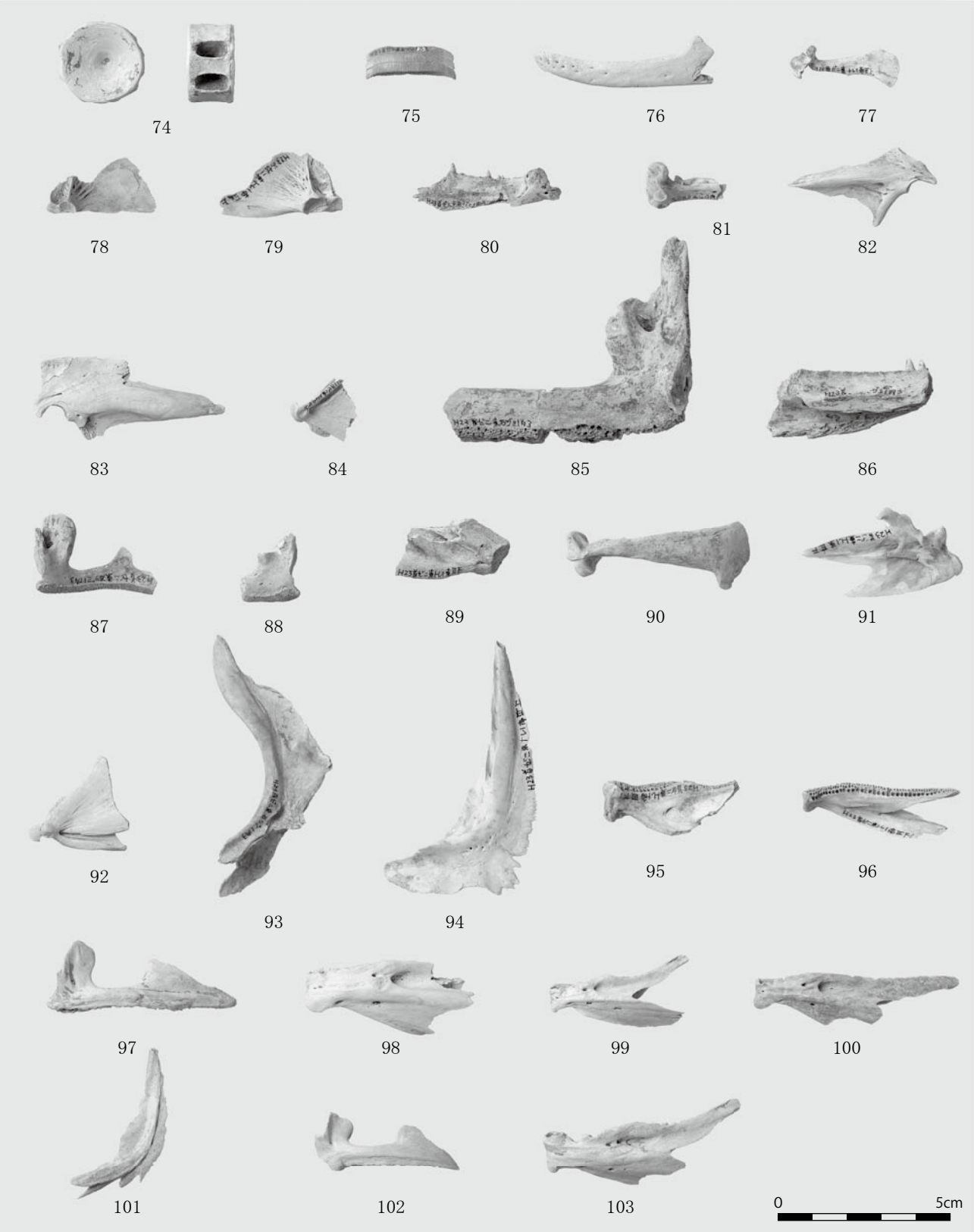


写真 27　脊椎動物遺体（１）

サメ類 メジロザメ型 74.椎骨　**トビエイ科** 75.歯　**ウツボ科** 76.左 歯骨　**イットウダイ科** 77.左 主上顎骨　**ボラ科** 78.右 主鰓蓋骨 **ボラ** 79.左 主鰓蓋骨　**カマス属** 80.左 歯骨　**アジ科大型種** 81.右 主上顎骨　82.右 角骨　83.左 角骨　84.左 方骨　**アジ科 カスミアジ型** 85.左 前上顎骨(極大)　**アジ科大型種 カスミアジ型** 86.左 歯骨　**アジ科大型種 イトヒキアジ型** 87.右 前上顎骨　**アジ科 イトヒキアジ型** 88.左 前上顎骨 89.左 歯骨　**ハタ科** 90.左 主上顎骨　91.右 角骨　92.右 方骨　93.右 擬鎖骨　**ハタ科A** 94.右 前鰓蓋骨 **ハタ科A バラハタ型** 95.右 歯骨　**ハタ科A マハタ型** 96.右 歯骨　**ハタ類A** 97.左 前上顎骨　98.左 歯骨　**ハタ類A バラハタ型** 99.左 歯骨 **ハタ類A マハタ型** 100.左 歯骨　**ハタ科B** 101.左 前鰓蓋骨　**ハタ類B** 102.左 前上顎骨　103.左 歯骨

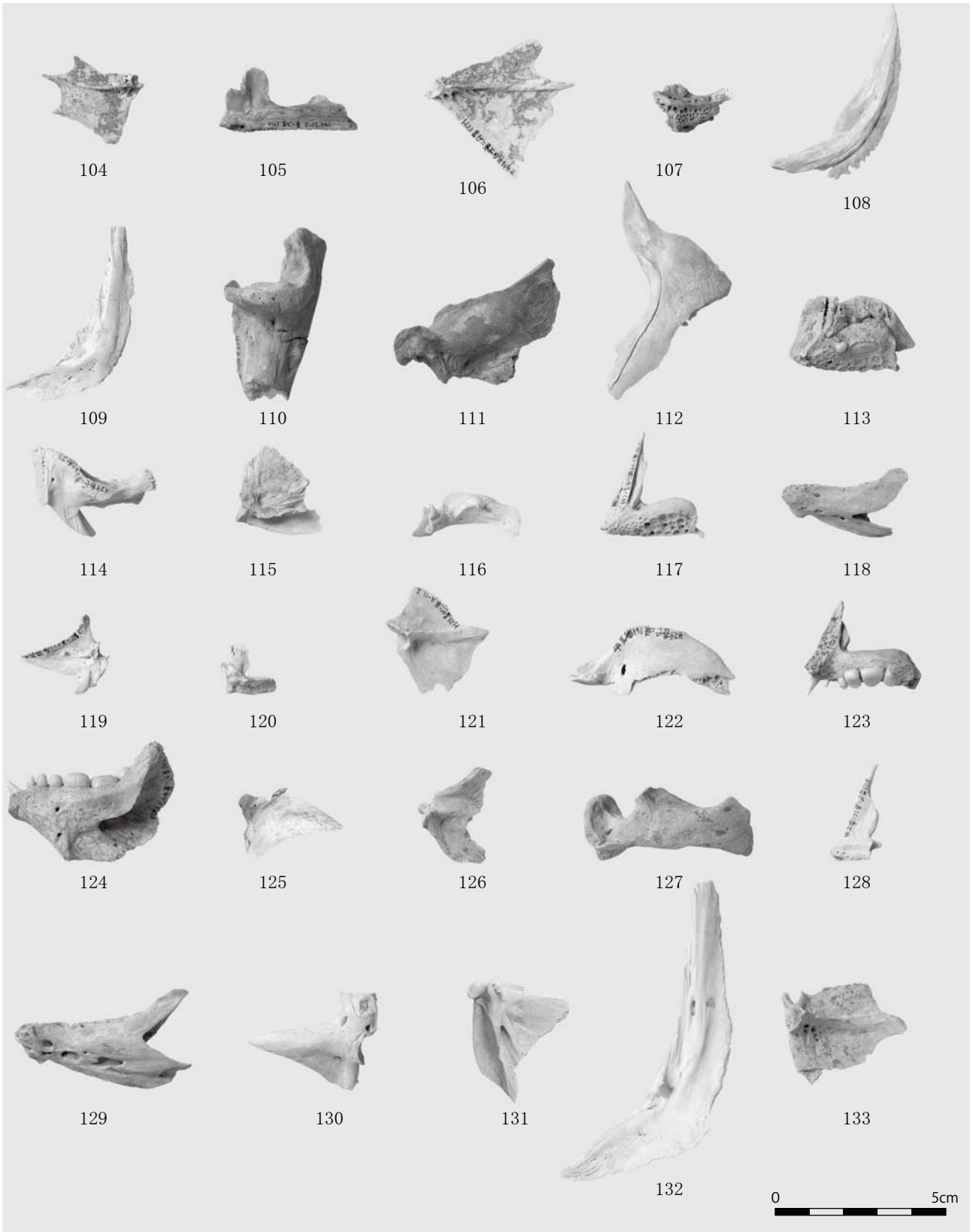


写真 28　脊椎動物遺体（２）

ハタ科 バラハタ型 104.左 主鰓蓋骨ヨコシマクロダイ　**ハタ科 マハタ型** 105.左 前上顎骨　106.右 主鰓蓋骨　**ハタ科 スジアラ型** 107.右 前上顎骨　**ハタ科 その他** 108.左 前鰓蓋骨　**ハタ科 型不明** 109.右 前鰓蓋骨　**ハタ科？** 110.左 主上顎骨（極大・カットマークあり）　111.左 方骨　112.左 擬鎖骨　**ヘダイ** 113.右 主上顎骨+前上顎骨114.右 歯骨　115.右 方骨　**クロダイ** 116.右 主上顎骨 117.右 前上顎骨　118.左 歯骨　119.右 角骨　120.右 方骨　121.右 主鰓蓋骨122.左 主上顎骨　123.右 前上顎骨　124.右 歯骨 125.左 角骨　126.左 方骨　**フエフキダイ科** 127.左 主上顎骨　128.左 前上顎骨 129.左 歯骨　130.右 角骨　131.右 方骨 132.右 前鰓蓋骨　133.右 主鰓蓋骨

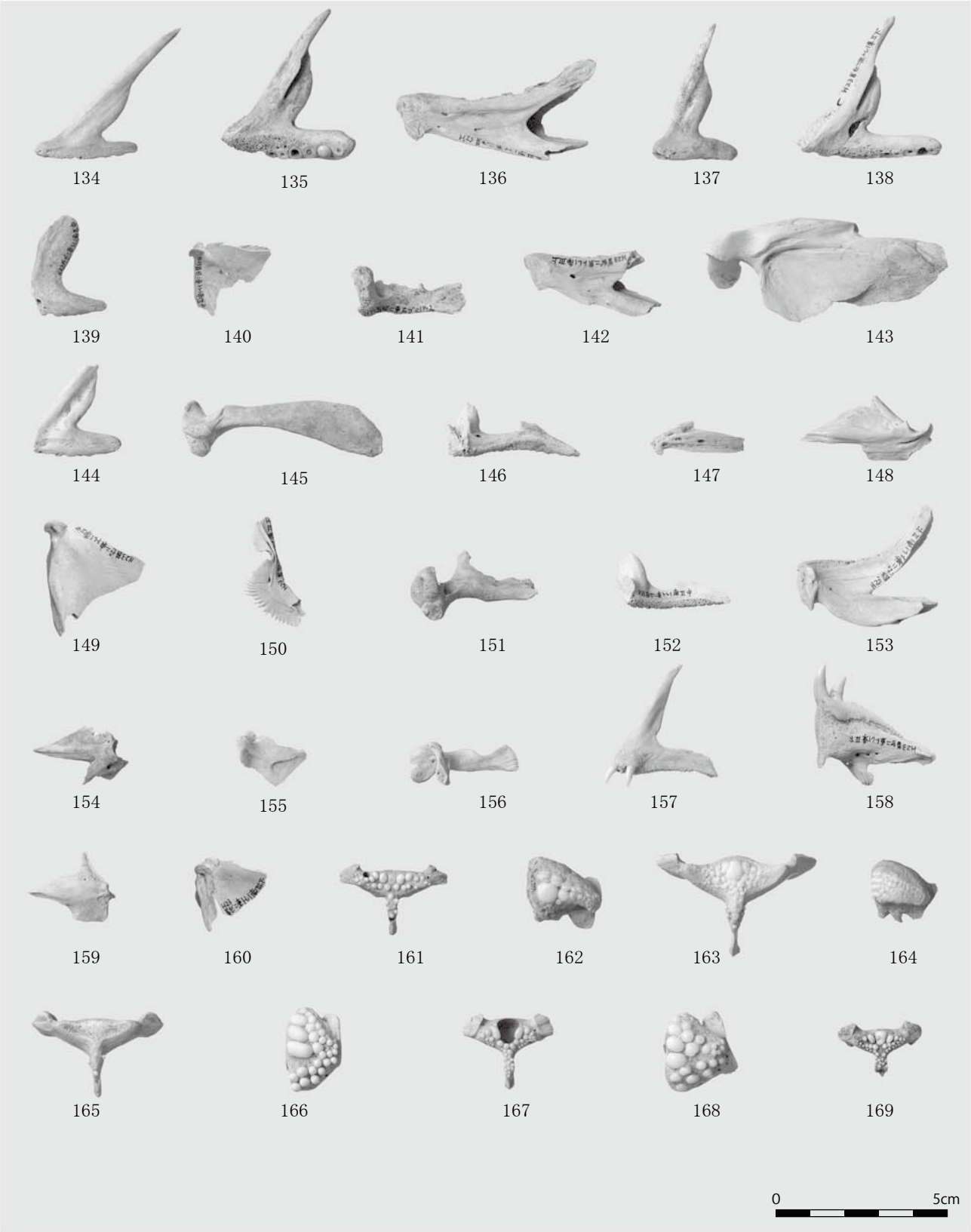


写真 29　脊椎動物遺体（３）

キツネフエフキ 134.左 前上顎骨　**ハマフエフキ型** 135.右 前上顎骨　136.右 歯骨　**フエフキダイ科 シロダイ型** 137.左 前上顎骨
アマミフエフキ型 138.右 前上顎骨　**メイチダイ属 メイチダイ型** 139.左 前上顎骨　**フエフキダイ科 メイチダイ属** 140.左 方骨
フエフキダイ科 メイチダイ属? 141.右 主上顎骨　142.右 歯骨　**フエフキダイ属** 143.左 口蓋　**フエフキダイ科 属不明** 144.左 前上顎骨
フエダイ科 145.左 主上顎骨　146.右 前上顎骨　147.左 歯骨　148.左 角骨　149.左 方骨　150.右 前鰓蓋骨　**コショウダイ類**
151.右 主上顎骨　152.右 前上顎骨　153.右 歯骨　154.左 角骨　155.左 方骨　**ベラ科** 156.右 主上顎骨　157.左 前上顎骨
158.右 歯骨　159.左 角骨　160.左 方骨　**ベラ科A** 161.下咽頭骨　**ベラ科B** 162.左 上咽頭骨　163.下咽頭骨　**シロクラベラ型**
164.左 上咽頭骨　165.下咽頭骨　**ベラ科 タキベラ型** 166.右 上咽頭骨　167.下咽頭骨　**ベラ科 その他** 168.右 上咽頭骨　169.下咽頭骨

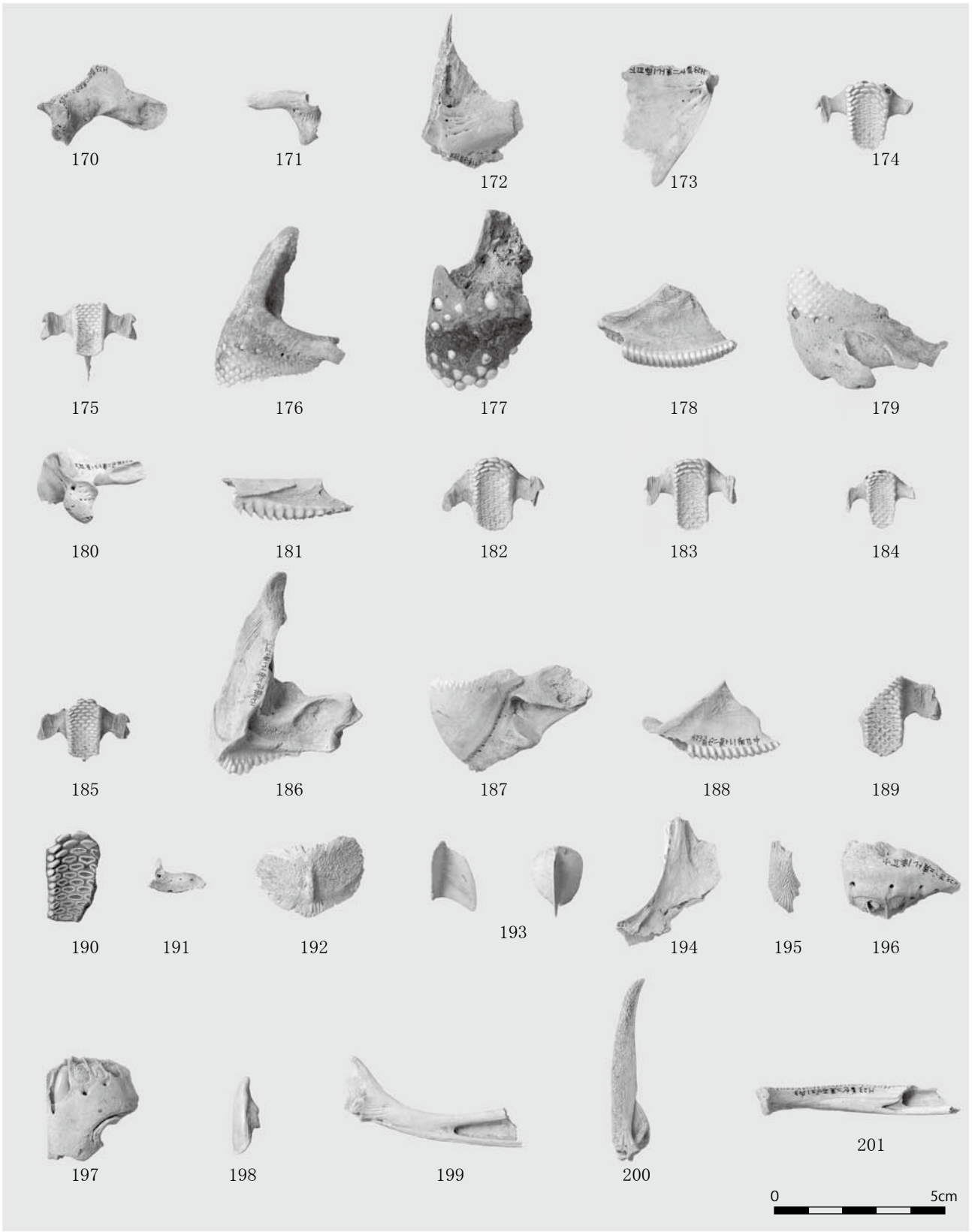


写真 30　脊椎動物遺体（４）

ブダイ科 170.右 主上顎骨　171.左 角骨　172.左 方骨　173.左 主鰓蓋骨　**アオブダイ属 ヒブダイ型** 174.下咽頭骨　**アオブダイ属 ナンヨウブダイ型** 175.下咽頭骨　**イロブダイ** 176.左 前上顎骨　177.左 前咽頭骨　178.右 上咽頭骨　179.左 歯骨　**ナガブダイ型** 180.右 主上顎骨　**アオブダイ属 ナガブダイ型** 181.左 上咽頭骨　182.下咽頭骨　**アオブダイ属 イチモンジブダイ型** 183.下咽頭骨　**アオブダイ属 タイプA** 184.下咽頭骨　**アオブダイ属 タイプB** 185.下咽頭骨　**アオブダイ属** 186.右 前上顎骨　187.左 歯骨　188.右 上咽頭骨　**アオブダイ属 タイプ不明** 189.下咽頭骨　ニザダイ科 190.右 前上顎骨　191～192.楯鱗　193.右 擬鎖骨　**アイゴ属** 194.右 前頭骨**モンガラカワハギ科** 195.左 前上顎骨　196.左 歯骨　197.歯　198.腰帯　199.背鰭棘　**コチ科** 200.右 歯骨　**アオブダイ属** 201.下咽頭骨

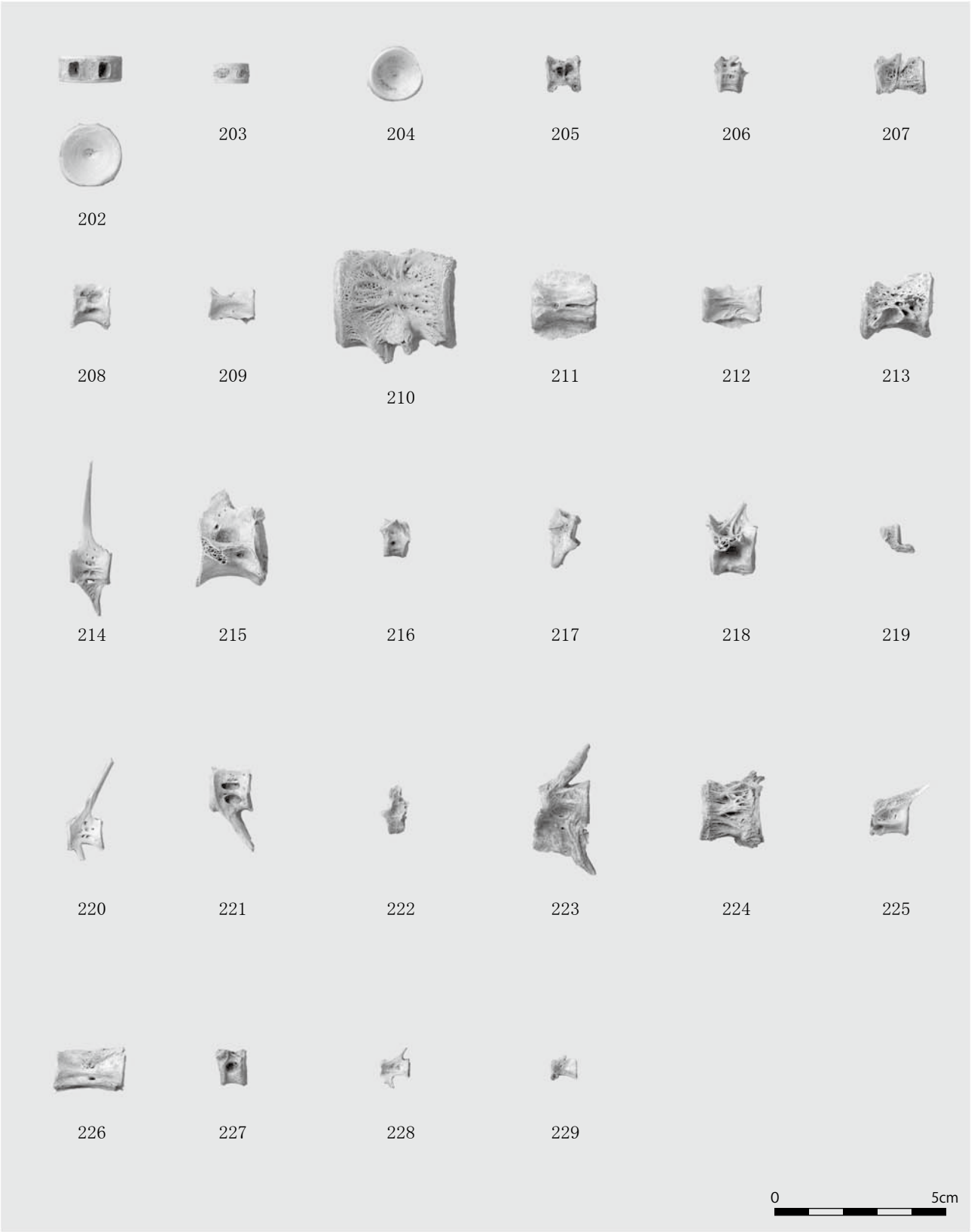


写真 31　脊椎動物遺体（５）

サメ類 ホシザメ型 202.椎骨　エイ 203.椎骨　**エイ・サメ類?** 204.椎骨?　**ウツボ** 205.椎骨　**ダツ科** 206.第1椎骨　**ボラ科** 207.腹椎　**カマス** 208.尾椎　**カツオorスマ** 209.腹椎　**マグロ** 210.腹椎　**マグロ・カツオ類** 211.尾椎(尾柄部)　**シイラ** 212.尾椎　**アジ科大型種** 213.腹椎　214.尾椎　**ブリ** 215.腹椎　**ハタ科** 216.第1椎骨　**フエフキダイ科** 217.第1椎骨　218.椎骨　**ベラ科** 219.第1椎骨　**ベラ科?** 220.尾椎　**ベラ科 シロクラベラ型** 221.尾椎　**モンガラカワハギ科** 222.第1椎骨　223.椎骨　**フグorハリセンボン** 224.椎骨　**コチ科** 225.腹椎　226.尾椎　**魚類(保留)** 227.第1椎骨　**魚類(未同定)** 228.腹椎　229.尾椎

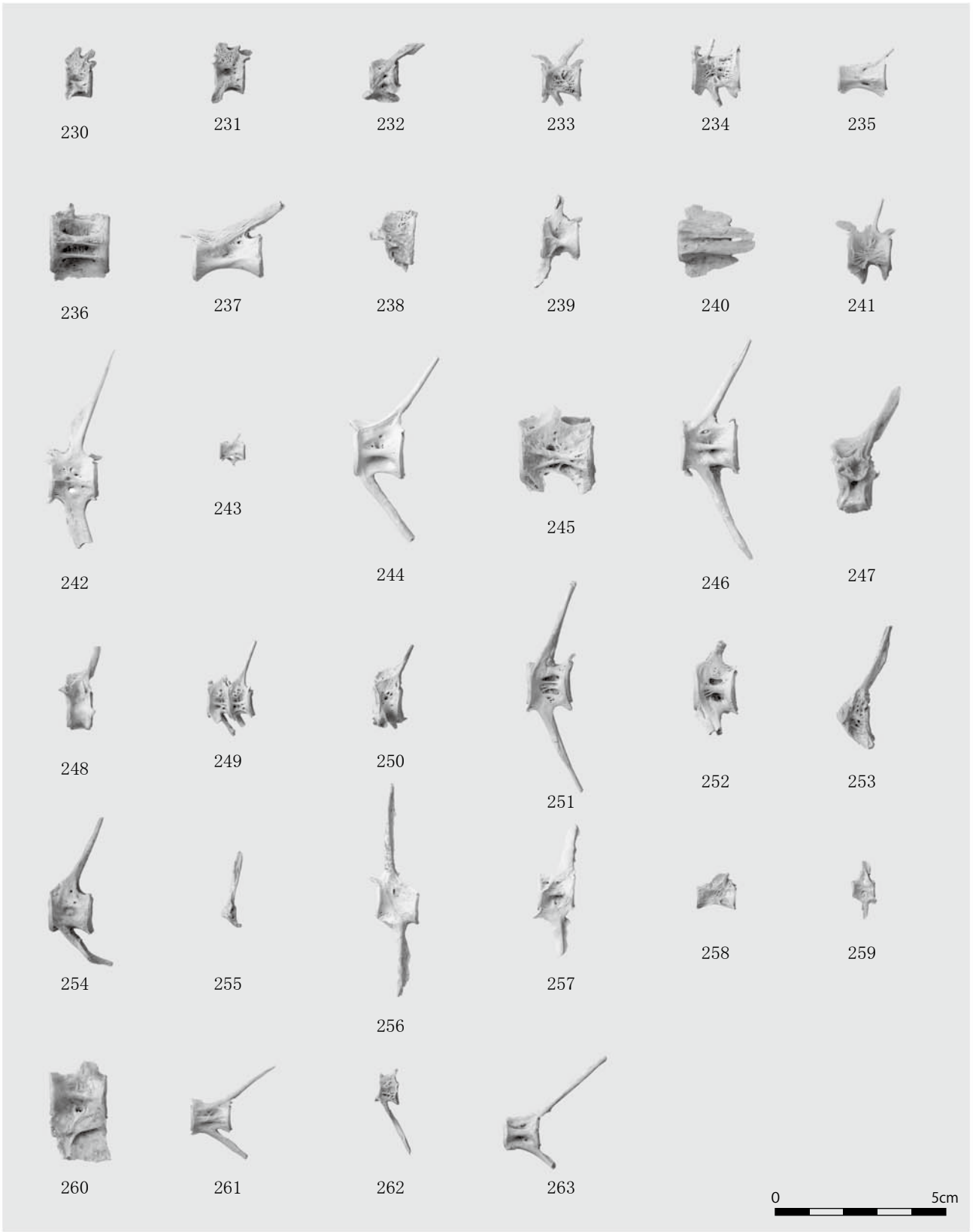


写真 32　脊椎動物遺体（６）

ダツ科 230. 椎骨　231. 腹椎　232. 尾椎　**ボラ科** 233. 椎骨　234. 尾椎　**カマス** 235. 椎骨　**カマスサワラ** 236. 尾椎　**カマス科** 237. 腹椎　マグロ 238. 椎骨　スマ 239. 尾椎　**カツオ・マグロ類 おそらくスマ** 240. 尾椎（尾柄部）　**シイラ** 241. 椎骨　**アジ科大型種** 242. 椎骨　**アジ類（メアジ近似）** 243. 尾椎　**アジ科大型種？** 244. 尾椎　**ハタ型** 245. 椎骨　**タイ型** 246. 椎骨　**フエフキダイ科** 247. 腹椎　**ヨコシマクロダイ** 248. 腹椎　**ベラ科** 249. 椎骨　250. 腹椎　**ベラ科 シロクラベラ型** 251. 椎骨　252. 腹椎　**ブダイ科** 253. 第 1 椎骨　254. 椎骨　**ニザダイ科** 255. 第 1 椎骨　256. 椎骨　**アイゴ** 257. 椎骨　258. 腹椎　259. 尾椎　**モンガラカワハギ科** 260. 尾椎　魚類（保留）261. 魚類（未同定）262. 椎骨　**魚類（同定不可）** 263. 椎骨

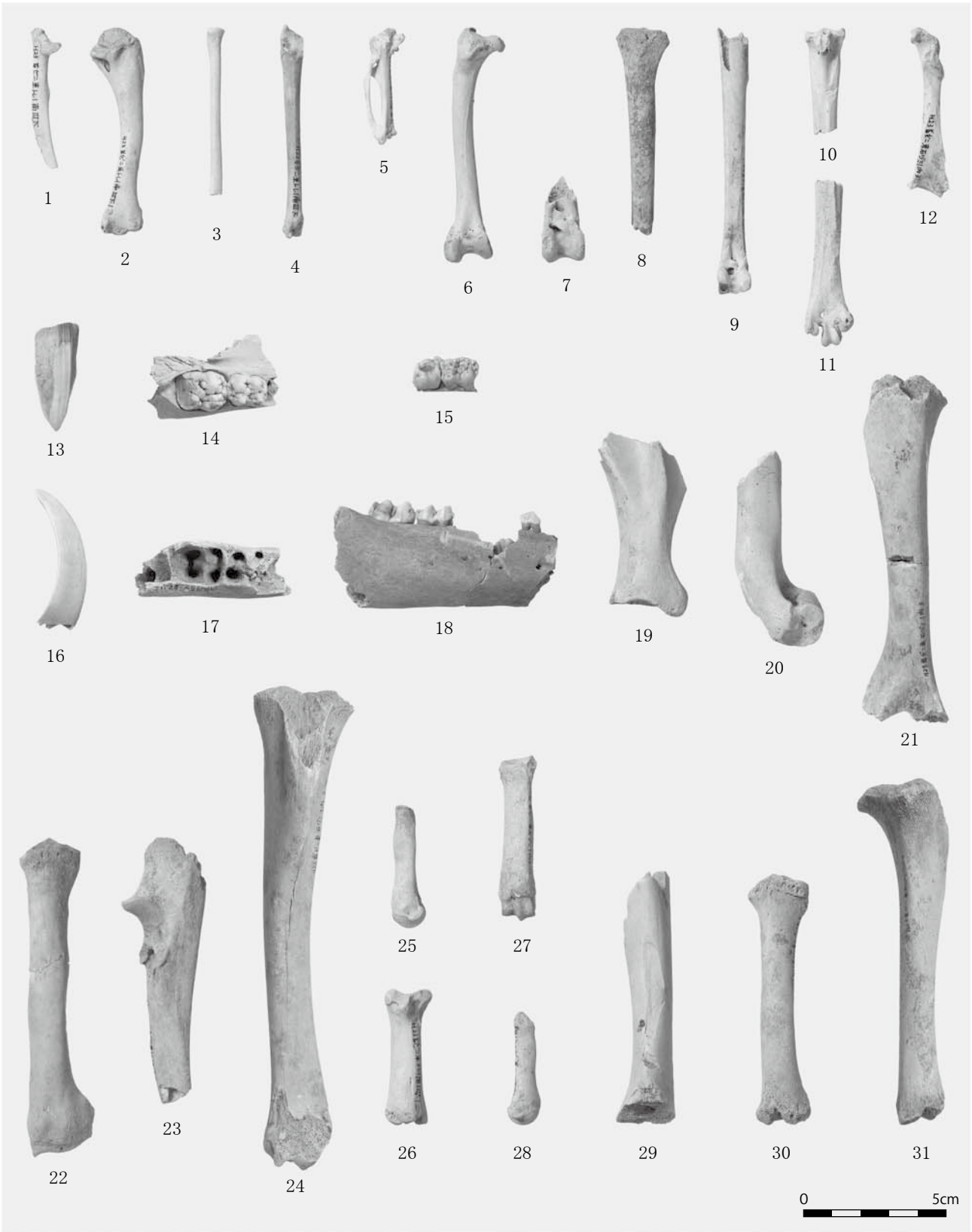


写真 33　脊椎動物遺体（７）

ニワトリ　1.左 肩甲骨　2.右 上腕骨(カットマークあり)　3.右 橈骨　4.左 尺骨　5.左 中手骨　6.左 大腿骨　7.左 脛骨(大型)
8.左 脛骨(若)　9.左 脛骨(d 切断?)　10～11.左 足根骨・中足骨　12.右 烏口骨　**イノシシ/ブタ**　13.右 上顎 c (オス)　14.左 上顎骨
15.右 上顎骨　16.左 下顎 c (オス)　17～18.右 下顎骨　19.右 肩甲骨　20.右 上腕骨(カットマークあり)　21.右 上腕骨　22.右 橈骨
23.左 尺骨(滑車切痕)　24.左 脛骨　25.右 第2中手骨　26.右 第3中手骨　27.右 第4中手骨　28.右 第5中手骨
29.左 脛骨(カットマークあり・スパイラルフラクチャー)　**ブタ**　30.左 橈骨(短縮ブタ?)　31.左 脛骨(短縮ブタ?)

写真 34　脊椎動物遺体（８）

イノシシ/ブタ　32.左 膝蓋骨　33.左 距骨　34.右 踵骨　35.右 第2中足骨　36.右 第3中足骨　37.右 第4中足骨　38.右 第5中足骨　39.基節骨　40.中節骨　41.末節骨　**ウシ**　42.右 橈骨　43.右 上顎M^1?　44.右 下顎M^1orM^2　45.左 尺骨(滑)　46.左 中手骨　47.基節骨　48.中節骨　**ウマ**　49.右 上腕骨　50.右 下顎骨(関節突起)　51.右 肩甲骨(カットマークあり)　52.右 上顎(臼歯) P^3～M^2のいずれか　53.右 手根骨　54.左 寛骨(臼)　55.右 膝蓋骨　56.左 距骨

写真 35　脊椎動物遺体（９）

ウマ　57.右 橈骨　58.右 中手骨　59.左 脛骨　60.右 中足骨　61.中節骨　**シカ**　62.左 肩甲骨(中型・カットマークあり)
63.左 中足骨(中型)　**ヤギ**　64.右 中手骨　65.右 大腿骨(スパイラルフラクチャー)　66.左 大腿骨　67.左 脛骨　**イヌ**　68.左 下顎C
69.右 大腿骨　**ネコ**　70.右 上腕骨　**カエル**　71.四肢骨（大型）　**ジュゴン**　72.肋骨　**ウミガメ**　73.指骨

第２節　首里城跡銭蔵東地区出土のヤコウガイ分析

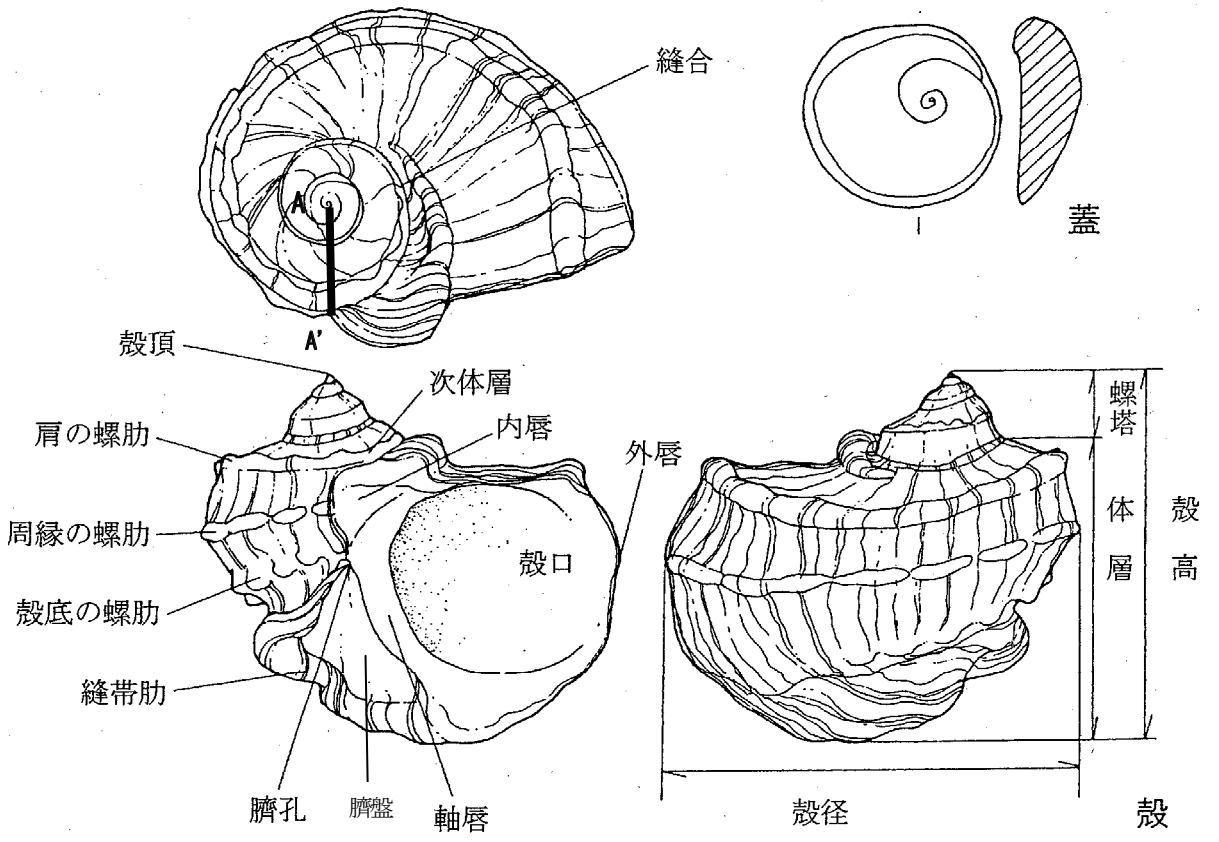
矢掛町教育委員会　西野　望

出土したヤコウガイについて、破片も含めたすべての殻と蓋を対象にそれぞれをわけて集計した結果が**第 98 表**である。今回の分析は、本遺跡出土のヤコウガイが螺鈿製作と関わっていたと仮定して検証するものである。

１．分析方法

（１）個体数について

貝殻については、臍孔をのこす数と殻頂部をのこす数をそれぞれ記録し、多い方の数を最小個体数とした。また蓋については、内側にみえる渦巻きの芯部を目安に、蓋の全体の形状を想定し、３分の２以上残すものを１個体として記録した（**第 82 図、第 99 表**）。



第 82 図　ヤコウガイ各部名称（藤江 2000 に加筆）

ヤコウガイ（原始腹足目リュウテン科）　　学名：*Lunatica marmorata* (Linne)

生息分布：主に奄美大島以南、インド太平洋各地

生息場所：サンゴ礁の 10～20 メートルの深い穴に生活する。

特徴：大型巻貝のひとつ。殻の径は成貝で 20ｃｍに達する。また、質は重厚だが、層状になっているため意外ともろい。

殻の内側は真珠層を持ち、そのため螺鈿など種種の美術品に利用される。夜行性。食用可能。殻と対で、石灰質の蓋を持つ。

（参考文献）白井祥平『原色沖縄海中動物生態図鑑』新星図書 1977 年。　吉良哲明『原色日本貝類図鑑』保育社 1985 年。

（２）殻の欠損状況における分類について

貝殻内部にある螺軸を基準とし、殻頂から臍孔、軸唇にいたる全部ないしはそれらの一部を残すものを殻として取り扱い、体層を第 83 図に示す３区分（殻口部、体層中央部、体層奥部）に分け、その欠損状況から、出土した殻を以下のように分類し集計した（第 97・98 表）。

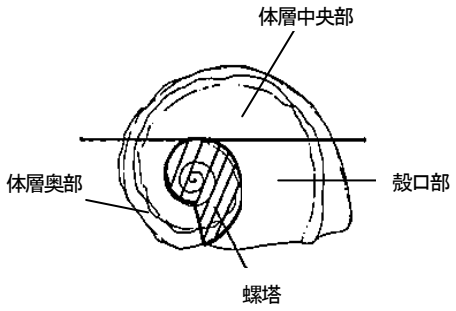
また、被熱の有無についても観察したが、今回出土したヤコウガイの貝殻、破片、蓋はいずれも被熱を受けていなかった。

（３）殻と蓋の大きさについて

遺跡から出土する殻は部分的に欠損しているものが多いため、最も残存率の高い、殻頂（殻頂を欠損するものについては螺軸の中心：A）と、殻口と次体層の接点（A′）との水平距離（図１　Ａ－Ａ′）を計測することで

第 97 表　ヤコウガイの欠損状況における分類

分　類
Ⅰ類：体層全体を残すもの（写真 36）
Ⅱ類：殻口から体層中央部まで欠損するもの
Ⅲ類：殻口から体層奥部まで欠損するもの
①螺塔を残すもの（写真 37）
②螺塔および軸唇、臍盤を残すもの（写真 38）
③軸唇、臍盤を残すもの（写真 39）
Ⅳ類：体層途中を欠損するもの



第 83 図　ヤコウガイ体層の欠損状況による区分

写真 36　Ⅰ類：体層全体を表すもの

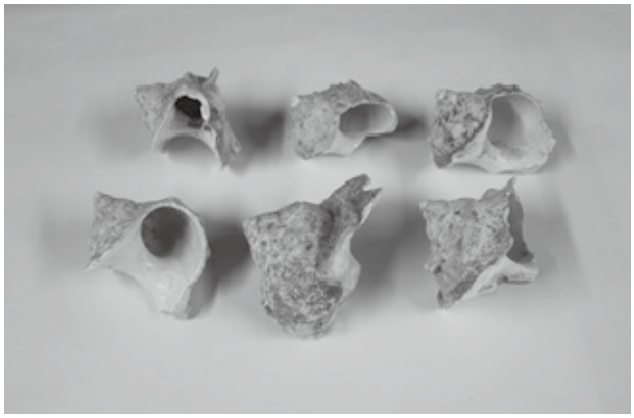


写真 37　Ⅲ－①類：体層を大きく欠損し、螺塔残すもの

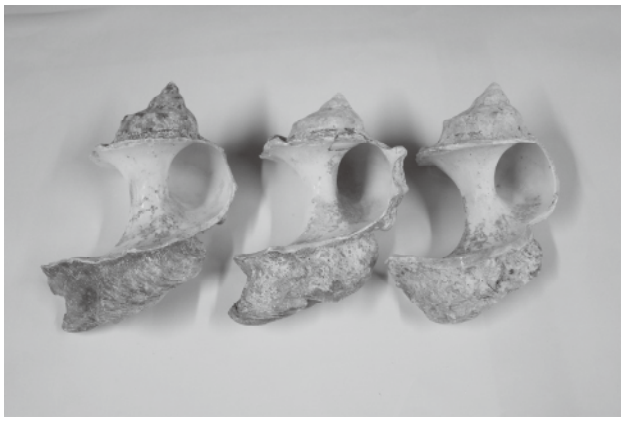


写真 38　Ⅲ－②類：体層を大きく欠損し、螺塔および軸唇、臍盤を残すもの

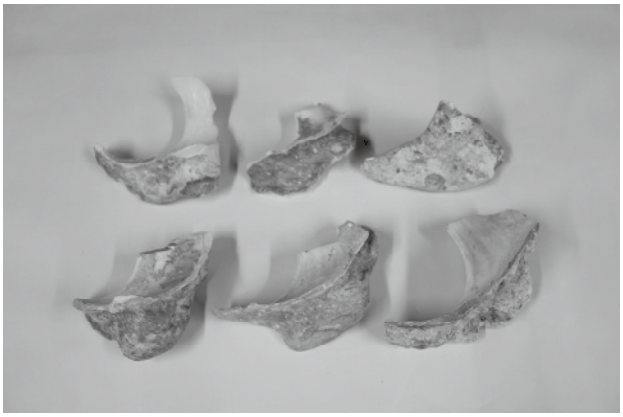


写真 39　Ⅲ－③類：体層を大きく欠損し、軸唇、臍盤を残すもの

第 98 表　ヤコウガイ集計表

分類	層序・グリッド等	Ⅰ層																Ⅰ′層		Ⅱ層			Ⅲ層												Ⅲ′層	Ⅳ層		不明	総計
		A・B-10	A・B-10～12	A・B-12・13	A-10・11	A-11	不明	B-11	A-12	B-10	B-11・12	B-15	C-11	C-15	Y・Z-12	Z-12	石積2・3	ｳﾗｺﾞﾒ	Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	石積1内		B-11 石積1内	B-11 石積1内			Ⅲ上	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2	A-12	Ⅳ	Ⅳ(16)	不明	
		Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ		Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	不明	不明	Ⅰ					1	2	2(ﾌﾛ5)	3	3貝	3(ﾌﾛ5)	3貝(ﾌﾛ5)					Ⅱ				
殻	Ⅰ（体層全体を残すもの）																													2	1				3
	Ⅱ（殻口から体層中央部まで欠損するもの）	1			1			1															2							4	2				11
	Ⅲ−①（殻口から体層奥部まで欠損し、螺塔を残すもの）		13	4	1	1	4	24	2		29		4	1	1	7	1		1	5	7	19	42		123	352		3	2	11	27	11	2		1		698
	Ⅲ−②（殻口から体層奥部まで欠損し、螺塔および軸唇・臍盤を残すもの）		2	1				8			3							1				4	5		20	73				1	3	1					122
	Ⅲ−③（殻口から体層奥部まで欠損し、軸唇・臍盤を残すもの）		5	7			5	51			3	4	10	1	2	7				2	5	7	35	4	83	433	13	5		4	3	1		1	1		692
	Ⅳ（体層途中を欠損するもの）																						1													1
	小計	1	20	12	2	1	9	84	2		35	4	14	2	3	14	1	1	1	7	12	30	85	4	226	858	13	8	2	16	39	16	2	1	2		1527
	破片（体層）		5	36			9	135	2	4	10	4	16	1	4	10	1	1		8	28	12	80	15	184	1796	93	957		35	15	3	3				3467
	製品（体層）							1													2				5					1	1						10
	合計	1	25	48	2	1	18	220	4	4	45	8	30	3	7	24	2	2	1	15	42	42	165	19	415	2654	106	965	2	52	55	19	5	1	2	0	5004
蓋	完形		18	5	2	3	4	25	9	1	10	2	60		1	3		1	1	21	32	12	38		36	27				37	4	2	18			42	414
	2／3以上残	1	6			2		4	4		5		3			1			1	4	21	3	4		7	6				8	3	3	1			6	93
	2／3未満残			3				5			1		4		1	2				3	7	4	5	8	4	7				6	4		4			2	70
	合計	1	24	8	2	5	4	34	13	1	16	2	67		2	6		1	2	28	60	19	47	8	47	40				51	11	5	23			50	577

第 99 表　ヤコウガイ個体数による集計表

	層序・グリッド等	Ⅰ層																Ⅰ′層		Ⅱ層			Ⅲ層												Ⅲ′層	Ⅳ層		不明	総計
		A・B-10	A・B-10～12	A・B-12・13	A-10・11	A-11	不明	B-11	A-12	B-10	B-11・12	B-15	C-11	C-15	Y・Z-12	Z-12	石積2・3	ｳﾗｺﾞﾒ	Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	石積1内		B-11 石積1内	B-11 石積1内			Ⅲ上	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2	A-12	Ⅳ	Ⅳ(16)	不明	
		Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ		Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	不明	不明	Ⅰ					1	2	2(ﾌﾛ5)	3	3貝	3(ﾌﾛ5)	3貝(ﾌﾛ5)					Ⅱ				
殻個体数	殻頂のみ		10	3	1		4	15	2		25		3	1	1	7	1		1	4	6	8	30		82	231		3	1	10	23	12	2		1		487
	殻頂＋臍孔	1	5	2	1	1		18			7		1					1		1	1	15	20		61	194			1	2	13	3					348
	臍孔のみ		2				1	7			3		3							2	3	2	11		19	89				1							143
蓋個体数	完形		18	5	2	3	4	25	9	1	10	2	60		1	3		1	1	21	32	12	38		36	27				37	4	2	18			42	414
	2／3以上残	1	6			2		4	4		5		3			1			1	4	21	3	4		7	6				8	3	3	1			6	93
	2／3未満			3				5			1		4		1	2				3	7	4	5	8	4	7				6	4		4			2	70

大きさの統計をとった。以下、この水平距離（A － A′）を「セ計測値」と呼ぶ(1)。

蓋については、最大径を計測した。また個体周縁に若干の欠損をもつが、本来の最大径を予測できるものについては予測値を記録した。

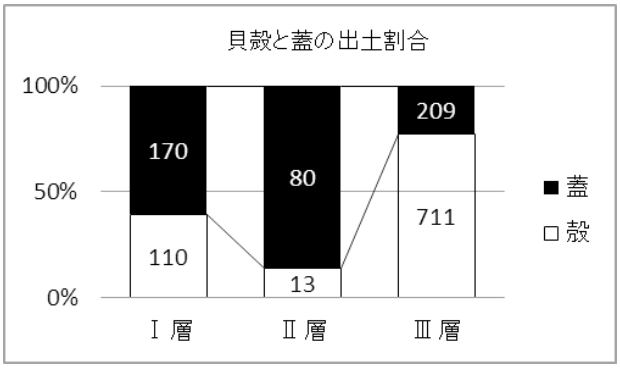
２．個体数について

第 98 表の集計をもとに、最小個体数について層位別にまとめなおしたものが**第 100 表**である。これをみると、今回の調査区全体において、ヤコウガイの出土状況は殻 835 点に対し、蓋は 507 点の出土で、その割合は６：４であった。ヤコウガイはいうまでもなく殻と蓋が 1 対でひとつの貝であり、遺跡全体としては殻の出土数が多いが概ね殻と蓋が一対で同時に持ち込まれていたと推測される。しかし、これを層位別に分析すると、Ⅲ層においては殻 711 点、蓋 209 点の出土で、石積 1 とそこに形成された貝だまりを中心に圧倒的に殻の出土数が多く、その割合は８：２であり、殻と蓋は別の場所で分けられ、殻だけが集められて利用され、廃棄した様子がみてとれる。

また、前述したように今回観察したヤコウガイの殻にも蓋にも被熱痕をもつものは 1 点もなかった。琉球列島の遺跡から出土するヤコウガイには遺跡によって数の多少はあるにせよ被熱痕をもつものが一定数含まれており、遺跡内でヤコウガイが食用として利用されていたと考えられるが、今回はそれがなかった。しかしながら、遺跡全体でみると殻に対して蓋の出土割合は 4 割であり、身がついた状態で殻と同時に持ち込まれた可能性も否定できない。本遺跡では身の利用についてはヤコウガイ殻自体の利用価値を考慮し、殻が破損したり、被熱痕によりもろくなることのないように、つぼ焼きなどの直接殻ごと調理する方法をとっていなかったのではないかと考えたい。

第 100 表　層位別ヤコウガイ最小個体数による集計表

層序等	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層				Ⅳ層	不明	総計
			B-11 石積 1 内		Ⅲ	小計			
			3	3 貝					
殻	110	13	143	428	140	711	1		835
蓋	170	80	43	33	133	209		48	507



３．殻の欠損状況について

今回の調査区で出土したヤコウガイの殻 1,527 点を体層の欠損状況に着目して分類し、層位別に集計したものが**第 101 表**である。これをみると、すべての層のⅠ類、Ⅱ類、Ⅳ類の出土数は合わせても、1,527 点中 15 点にすぎず、99％がⅢ類に分類される。Ⅲ類の殻は細分類した①～③のいずれも殻口から体層奥部まで大きく体層を割り取るものであり、これらは体層を割り取ったあとの残滓で、割り取られた体層は同じ利用目的で用いられていたのではないかと推測される。また、Ⅲ類のなかでもⅢ－①類は体層奥部まで大きく体層を欠損する螺塔部分で、Ⅲ－③類は体層奥部まで大きく体層を欠損する軸唇・臍盤である。出土数をみてみると、Ⅰ～Ⅳ層のいずれの層位でも両者の出土割合はほぼ 1 ： 1 で、体層を割り取る際に、一個体の殻を螺塔部分（Ⅲ－①類）と軸唇・臍盤（Ⅲ－③類）に分割する工程があったといえる。

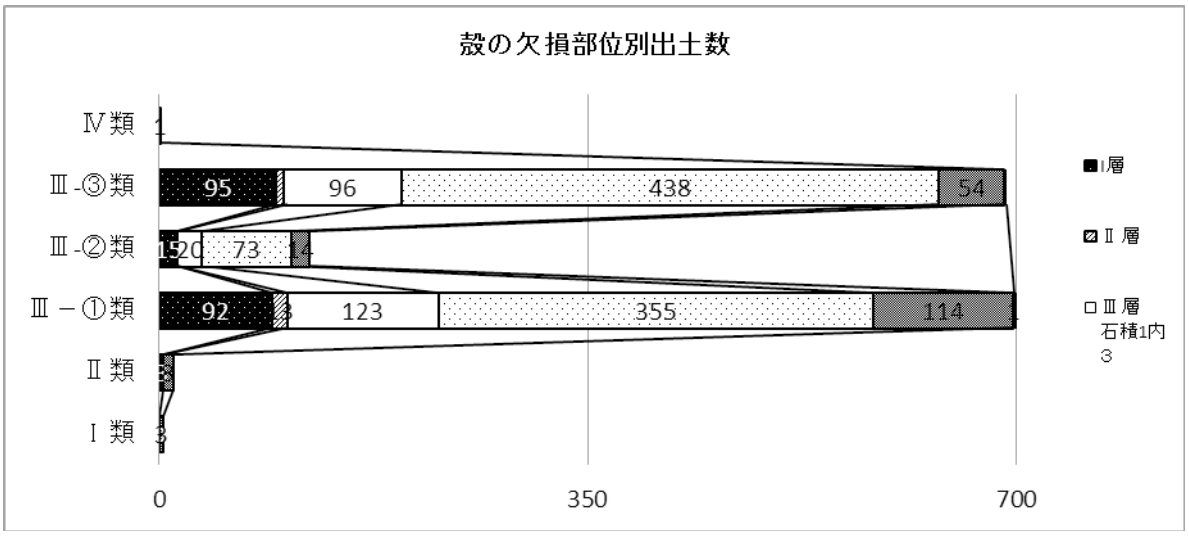
さて、Ⅲ―②類もⅢ－①類、Ⅲ－③類同様、体層を大きく割り取った後の残滓であるが、果たして同じ用途のためにこのような割り取りをしたのであろうか。Ⅲ － ②類は 1,527 点中 122 点で、全体の８％を占める。仮にⅢ－①類とⅢ－③類について 1 個体を分割したものと想定した場合もⅢ－②類の出土割合は 15％で、数は少

ないものの、ある一定の出土割合を示している。残滓としての殻だけを観察すると、体層を割り取ったあと、Ⅲ－②類の状態になったものを臍孔付近で、螺塔と軸唇・臍盤部分の２つに割ったようにみえるが、体層を割り取ることが目的ならば、残滓である殻をさらに２分割する必要はないと考えられる。しかも２分割している臍孔付近は、殻の中でも最も分厚く、堅固な部分であり、ここを割るには相当の強い打撃を加えなければならず、同じ工程のもと殻の割り取りを行うのであれば、不要な工程のように感じられる。また、本来はⅢ－②類のように体層を割り取ることが目的で、途中で破損などが原因でⅢ－①類・Ⅲ－③類の割り取り方法に変更したとなれば、Ⅲ－②類の出土割合が、Ⅲ－①類、Ⅲ－③類ともう少し近接したものとなるのではないかと思う。私は割り取りの工程において臍孔付近で、螺塔と軸唇・臍盤部分を２分割してから体層を割り取る、定型的な工程が存在したと考えたい。また、Ⅲ－②類についてはヤコウガイが出土する遺跡からは時期を問わず存在する割り取り方法であり（藤江 2000）、体層を割り取る工程について時期によって違いがあるのかについては今後の課題としたい。

さて、殻の中には殻口部分を中心に径が１～２㎝の孔を穿ったものがよく見受けられた（**写真 40**）。欠損部分の割れ口にあたることも多く、体層を割り取る際の楔のような意図で穿孔したものか、殻の運搬などの管理のために穿孔したもの[(2)]かの判断は、殻の各個体によって相違があると思われるが、私は本遺跡出土の殻に穿たれた孔の多くは、後者のためにあったのではないかと考えたい。

第 101 表　欠損状況による層位別ヤコウガイ集計表

層序等	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層			Ⅳ層	計
			B-11 石積１内		Ⅲ		
			3	3 貝			
Ⅰ（体層全体を残すもの）	0	0			3		3
Ⅱ（殻口から体層中央部まで欠損するもの）	3	0			8		11
Ⅲ－①（殻口から体層奥部まで欠損し、螺塔を残すもの）	92	13	123	355	114	1	698
Ⅲ-②（殻口から体層奥部まで欠損し、螺塔および軸唇・臍盤を残すもの）	15	0	20	73	14		122
Ⅲ-③（殻口から体層奥部まで欠損 し、軸唇・臍盤を残すもの）	95	7	96	438	54	2	692
Ⅳ（体層途中を欠損するもの）	0	0			1		1
計	205	20	239	866	194	3	1527



４．殻と蓋の大きさ別の出土状況について

（１）殻の大きさ別出土点数

出土した殻のうち、セ計測値により大きさを計測できたものは 626 点で、これをセ計測値の大きさ別に集計したものが**第 102 表**である。これを見ると、大きさのピークはセ計測値 41 ～ 45㎜で、前後の 36 ～ 40㎜、46 ～ 50㎜をあわせると、全体の８割がこの大きさに集約されており、本遺跡ではヤコウガイの捕獲について同じ大きさの殻を選択して持ち込んでいることがわかる。ちなみに、セ計測値は殻の大小を相対的に推定することはできるが、実際に殻径がどのくらいの殻であるかについては復元が難しい。そこで、参考までに本遺跡から出土したほぼ完形の殻で殻径がはっきり計測できる３点について、セ計測値との関係を示したものが**第 103 表**である。**第 102・103 表**を見比べると、本遺跡出土のヤコウガイは概ね殻径が 150 ～ 190㎜のものが全体の８割を占めると推測される。ヤコウガイは成貝になると殻径 20㎝になる大型の巻貝であることから本遺跡出土のヤコウガイの殻はヤコウガイとしては小型の幼貝のものではなく成貝に限りなく近いやや大型のものが多いといえる。また、残存している縫帯肋や螺肋の様

写真 40　殻口に穿孔したヤコウガイ

第 102 表　ヤコウガイ殻　セ計測値別出土数

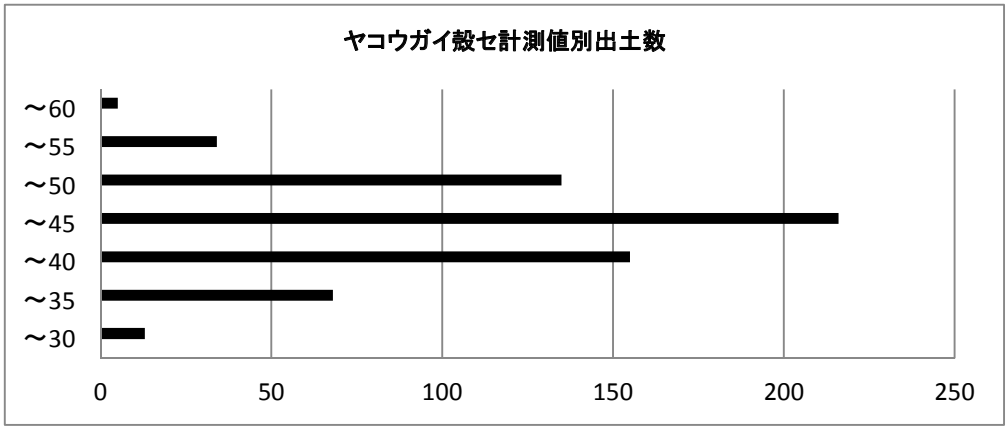
セ計測値（㎜）	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層				不明	計
			B-11 石積１内		Ⅲ	小計		
			3	3 貝				
～30	0	0	6	4	2	12	1	13
～35	4	1	17	29	16	62	1	68
～40	11	3	47	63	31	141	0	155
～45	23	4	30	113	46	189	0	216
～50	9	1	11	86	26	123	2	135
～55	3	0	5	19	7	31	0	34
～60	2	0	0	1	2	3	0	5
計	52	9	116	315	130	561	4	626

＊Ⅰ層にはⅠ'層から出土した2点（計測値 44 ㎜、47 ㎜）を含めて集計した。

第 103 表　首里城跡銭蔵東地区出土ヤコウガイ殻におけるセ計測値と殻径の関係

単位（㎜）

	セ計測値	殻径
1	41	155
2	42	162
3	47	184



子を観察しても、成貝のように発達したものが多かった。ここで正倉院における螺鈿材質調査報告（和田･赤松･奥谷 1996）によると、螺鈿の材質として「ヤコウガイの蓋或いは未成殻を原材としたと思われるものは皆無で、殻の厚い老成殻のみを用いている。」とある。つまり、本遺跡出土のヤコウガイは螺鈿素材として利用された可能性を大いに含んでいるといえる。

（２）蓋の大きさ別出土点数

蓋の大きさが計測できたものは 434 点で、５㎜毎に層位別に集計したものが**第 104 表**である。遺跡から出土する蓋と殻について同一個体である証明は全くできないので、数値的に明確な関係はいえないが、蓋の大きさ別の出土数をみると、全体としては最大径85㎜をピークに71㎜から85㎜に偏った出土状況を示している。さらに、層位別にみると、Ⅱ層、Ⅲ層のピークは 81 ～ 85㎜にあるのに対し、Ⅰ層のピークは 76 ～ 80㎜で、時代が新しくなるにつれ小型化していく傾向がみてとれる。ヤコウガイの乱獲によるものか今後、検証が必要である。

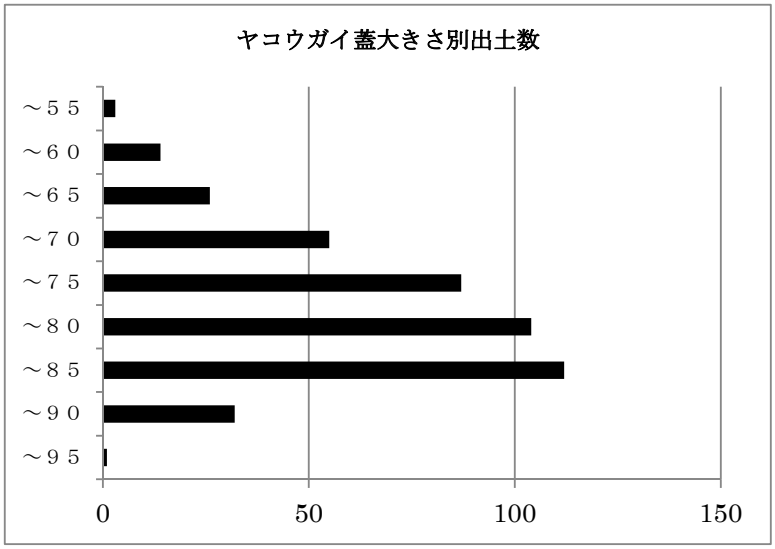
５．ヤコウガイ殻の破片について

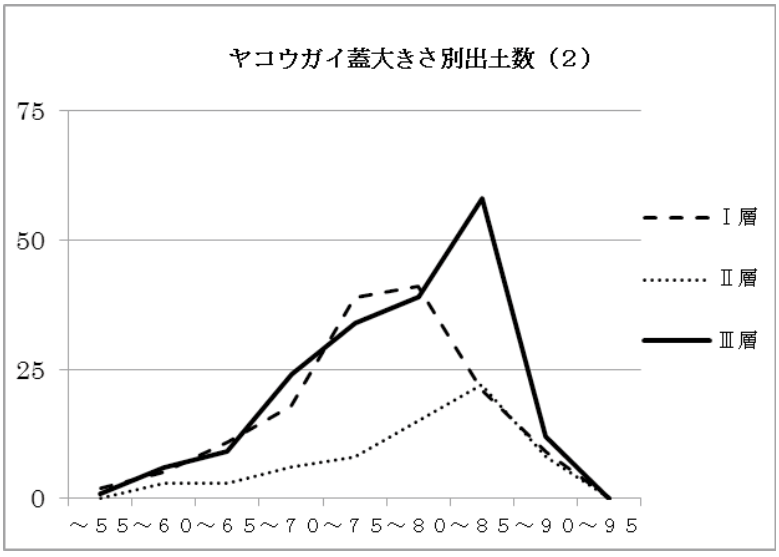
本遺跡からは多くのヤコウガイの殻の破片が出土している。とくに体層の破片について縦横のどちらかが 4㎝以上あるものについて計測を実施したところ、その総数は 1,570 点に上った。この中には、割れ口を研磨した

第 104 表　ヤコウガイ蓋大きさ別出土数

計測値（㎜）	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	不明	計
～55	2	0	1	0	3
～60	5	3	6	0	14
～65	11	3	9	3	26
～70	18	6	24	7	55
～75	39	8	34	6	87
～80	41	15	39	9	104
～85	21	22	58	11	112
～90	9	8	12	3	32
～95	0	0	0	1	1

＊Ⅰ層にはⅠ'層から出土した1点(計測値72．1㎜)を含めて集計した。





もの、穿孔の痕跡、螺肋を敲打により細かく打ち掻くものが含まれ、明らかにヤコウガイの殻を何らかの素材として利用していたと考えられる。また、Ⅰ層とⅢ層（石積１内貝だまり）から出土した体層の破片について大きさ分布をドットで表したのが第 105 表－グラフ１・２である。このグラフは、縦軸が螺肋に直行する辺、横軸が螺肋に平行する辺を示している。これをみると、Ⅰ層においてもⅢ層（石積１内貝だまり）においても、螺肋に直行する辺は殻本来の形状の影響もあると思われるが、20 ～ 60㎜に集中する傾向があり、横軸の螺肋に平行する辺の大きさは 40 ～ 80㎜に集中する傾向にある。さて、ここで時期はかなりさかのぼるが古代における螺鈿の研究によると螺鈿に用いられるヤコウガイはまず「方 5㎝程度の平板」（中里 1995・1996）に加工されるといわれており、今回の破片の大きさの傾向はこれに合致する。

６．（小結）首里城跡銭蔵東地区出土のヤコウガイ分析

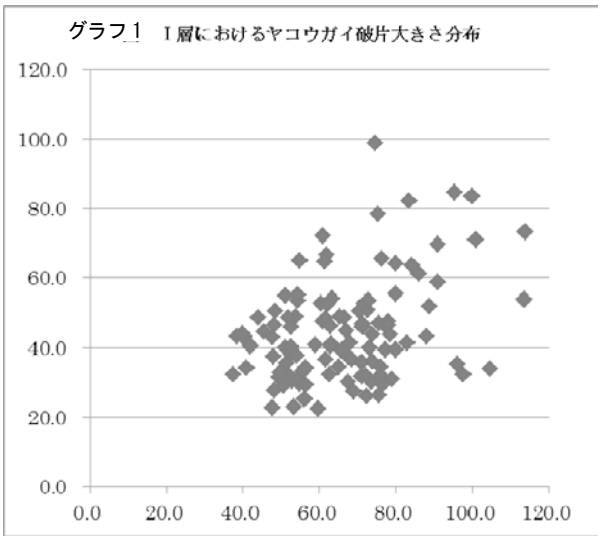
首里城跡銭蔵東地区出土のヤコウガイからは次のことがいえる。

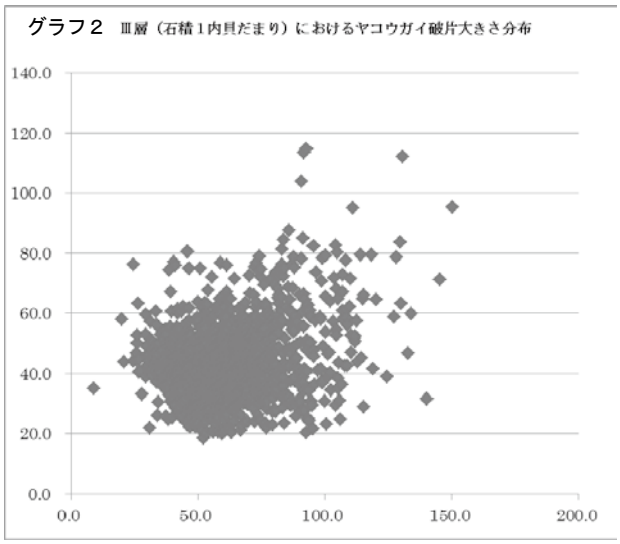
今回の調査区全体において、ヤコウガイの最小個体数の出土状況は殻 835 点に対し、蓋は 507 点の出土で、その割合は６：４で、概ね殻と蓋が一対で同時に持ち込まれていたと推測される。しかし、これを層位別に分析すると、Ⅲ層においては殻 711 点、蓋 209 点の出土で、石積１とそこに形成された貝だまりを中心に圧倒的に殻の出土数が多く、殻だけが集められて利用され、廃棄した様子がみてとれる。また、今回観察したヤコウガイの殻にも蓋にも被熱痕をもつものは１点もなかった。つまり、従来の琉球列島におけるヤコウガイ利用を考えると、食用以外に別の利用目的があった可能性が高い。

次に殻の大きさのピークはセ計測値 41 ～ 45㎜で、前後の 36 ～ 40㎜、46 ～ 50㎜をあわせると、全体の８割がこの大きさに集約されており、本遺跡ではヤコウガイの殻についてほぼ同じ大きさの殻を選択して持ち込んでいるといえる。また、本遺跡から出土した殻径がはっきり計測できる３点の殻について、セ計測値と比較検

第 105 表　ヤコウガイ殻破片集計表

	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層			不明	計
			石積1内	石積1内	Ⅲ		
			３	３貝			
破片数	115	21	143	1186	87	18	1570
うち割れ口研磨有	21	8	13	65	26	5	138
うち螺肋打掻有	22	4	32	223	25	1	307
うち穿孔有	13	1	18	140	9	2	183





討すると、本遺跡出土のヤコウガイは殻径が 150 ～ 190㎜のものが全体の 8 割近くを占めると想定でき、残された殻の破片からも縫帯肋や螺肋の発達したものが多かった。ヤコウガイは成貝になると殻径 20㎝以上になる大型の巻貝であることを考えると、本遺跡出土のヤコウガイの殻はヤコウガイとしては小型の幼貝ではなくやや大型のものが多いといえる。さらに、層位別にみると、Ⅱ層、Ⅲ層のピークは 81 ～ 85㎜にあるのに対し、Ⅰ層のピークは 76 ～ 80㎜で、時代が新しくなるにつれ小型化していく傾向がある。

次に殻の割り取りをみると、99％の殻が殻口から体層奥部まで大きく体層を割り取るものであり、なおかつ、割り取りの工程として一個体の殻を螺塔部分（Ⅲ－①類）と軸唇・臍盤（Ⅲ－③類）に分割する定型的な工程が存在したと考えられる。

また、割り取られた破片を観察すると螺肋に直行する辺は殻本来の形状の影響もあると思われるが、20 ～ 60㎜に集中する傾向があり、一方、横軸の螺肋に平行する辺の大きさは 40 ～ 80㎜に集中する傾向にある。螺鈿技法について先人の研究成果によると螺鈿に用いられるヤコウガイはまず「方 5㎝程度の平板」に加工される(3)といわれており、今回の破片の大きさの傾向と合致する。

以上のことから、本遺跡出土のヤコウガイは主に螺鈿素材として持ち込まれ、加工され廃棄された可能性が高い。

7．（考察）首里城跡におけるヤコウガイ利用について

今回の調査でヤコウガイ殻を食用以外の目的で首里城において利用した痕跡が明らかとなった。琉球螺鈿の製作については 15 ～ 16 世紀にさかのぼるとの研究もあるが、文献のうえでの理解であり、さらにどこで製作をしていたのかまでは不確かであった。また、琉球王府が螺鈿製作を組織的に実施するための貝摺奉行の成立は文献によると 17 世紀前半（1612 年頃）といわれており、今回の調査ではそれをさかのぼり 15 世紀後半から 16 世紀前半にはすでに首里城内でヤコウガイを加工していたことが分析により明らかとなった。

過去の調査において、すでに首里城におけるヤコウガイ利用の古くは 14 世紀にまでさかのぼり、交易品として、場内に搬入されていたことも推測されている。また、同じ首里城内で正殿跡からは、殻に対して蓋を多く出土するとの指摘もあり(4)、いったん殻ごと持ち込まれたものが、殻と身に分けられ、それぞれの用途に従い加工、あるいは保管の場所へ移されたと考えられている。1984 年に実施された歓会門・久慶門の遺構調査の際にもヤコウガイが多く出土しており、この銭蔵東地区近辺には、のちの貝摺奉行の前身ともいえるようなヤコウガイの加工のための施設があった可能性がある。殻の割り取りの状況からも殻の破片の採取方法が定まっており、組織的に殻の加工を盛んに実施していたといえる。今後は、螺鈿製作の視点から割り取りの技法や破片の加工方法などをさらに研究し、琉球王府の発展にヤコウガイが果たした役割を追及していきたい。

謝辞

本文を作成するにあたり以下の方々にご助言・ご協力をいただきました。深く感謝いたします。

盛本勲氏、木下尚子氏、瀬戸哲也氏、黒住耐二氏、樋泉岳二氏、津多恵氏、仲里由利氏、沖縄県立埋蔵文化財センターの皆様

註

（1）「セ計測値」とは遺跡から出土するヤコウガイの大きさを把握するために、最も残存率の高い殻頂（殻頂を欠損するものについては螺軸の中心：A）と、殻口と次体層の接点（A′）との水平距離を計測したもので、殻径・殻長の大きさは比例関係にあることを前提とする。

（2）久米島の例では、首里王府からの命に対応し、ヤコウガイの殻口部に孔をあけて、やまかずらで数珠つなぎにし、

岩にくくったといわれている。

（3）参考文献（8）

（4）参考文献（2）

参考・引用文献

（1）荒川浩和『螺鈿』同朋社 1985 年。

（2）上原　靜「首里城跡出土の貝殻」『考古学ジャーナル』NO311　ニュー・サイエンス社　1989 年。

（3）上原　靜「グスク時代遺跡出土の匙」『紀要』第 3 号　沖縄県教育委員会文化課　1986 年。

（4）木下尚子「ヤコウガイ交易の可能性―6～8 世紀の奄美大島 3 遺跡の分析―」『先史琉球の生業と交易 2―奄美・沖縄の発掘調査から―』2006 年。

（5）木下尚子「開元通宝と夜光貝―7～9 世紀の流・中交易試論―」『高宮廣衛先生古稀記念論集』琉球・東アジアの人と文化　上巻　2,000 年。

（6）吉良哲明『原色日本貝類図鑑』保育社　1985 年。

（7）金武正紀・島袋春美『御細工所跡』那覇市文化財調査報告書第 18 集　那覇市教育委員会　1991 年。

（8）白井祥平『原色沖縄海中動物生態図鑑』新星図書　1977 年。

（9）白井祥平『貝Ⅰ』『貝Ⅱ』ものと人間の文化史 83　法政大学出版会　1997 年。

（10）高梨　修「生きたまま蓄蔵されたヤコウガイ」『とぅんばらー通信』第 10 号　京都大学人文科学研究所横山研究室 1998 年。

（11）中里尋克「古代螺鈿の研究（上）」『國華』第 1199 号　1995 年。中里尋克「古代螺鈿の研究（下）」『國華』第 1203 号　1996 年。

（12）西野望「奄美諸島における 6 世紀から 8 世紀のヤコウガイ利用の実態―マツノト遺跡出土のヤコウガイ分析を中心に―」『先史琉球の生業と交易 2―奄美・沖縄の発掘調査から―』2006 年。

（13）藤江望「琉球列島におけるヤコウガイ利用の動向―紀元前 4000 年紀から紀元 800 年まで―」『南島考古』第 19 号　2000 年。

（14）和田浩爾・赤松蔚・奥谷喬司「正倉院宝物（螺鈿、貝殻）材質調査報告」『正倉院年報』第 18 号　1996 年。

（15）当真嗣一・上原　靜『首里城跡　歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査』沖縄県文化財調査報告書第 88 集　沖縄県教育委員会　1988 年。

第３節　首里城跡銭蔵東地区から得られた貝類遺体

千葉県立中央博物館　黒住 耐二

はじめに

首里城では、これまで多くの発掘が行われ、貝類遺体の分析も詳細に報告されてきた。その多くは城内の遺構面までの調査で後代に撹乱を受けたものも多かったが、河口干潟のアラスジケマンや内湾のカンギクが優占し、ヤコウガイも目立つことが報告されており（大城 , 1988；山本 , 2007；黒住 , 2010a 等）、他のグスクと類似することが指摘されてきた（黒住 , 2013）。

今回報告の銭蔵東地区は、首里城内の外郭に位置し、石積みの遺構や造成層が主な対象となり、撹乱は少なく、螺鈿加工残滓の貝類遺体が集中すると言う興味深いものであった。この地区の貝類遺体を検討する機会を与えて頂いたので、ここに報告したい。

１．貝類遺体の内容と処理方法

現場でピックアップ法によって得られた膨大な量の貝類遺体は、沖縄県立埋蔵文化財センターの方々によって一次の同定・カウントが行われ、黒住はほとんどの種の再同定を行った。各種の状態や出土部位別に集計され、このデータを元に解析を行った。また、主な遺構のⅢ層の石積み１内からは多くの土壌サンプルが採集されており、その処理方法は別に記述する。螺鈿に用いられたサラサバテイラに関しても観察を行った。

本地区の層序と年代は、本報告書第３章に詳細に記載されているが、簡単に採録しておきたい。

Ⅰ層：戦後、Ⅰ’層：18 世紀～戦前、Ⅱ層：17 世紀後半、Ⅲ層：15 世紀後半～ 16 世紀前半、Ⅲ’層：15 世紀後半、Ⅳ層：14 世紀後半～ 15 世紀である。

２．結果および考察

今回のピックアップ法（一部に殻内の微小種も含む）では、海産腹足類 23 科 65 種、海産二枚貝類 13 科 33 種、淡水産腹足類２科２種、陸産腹足類９科 12 種、その他５分類群が確認された（**第 106・111 ～ 113 表**）。これ以外にも、土壌サンプルから陸産種を中心に、上記に含まれていない微小種が 40 種程度抽出された。

（１）ピックアップ法による全体の組成

第 106・111 ～ 113 表に基づいて、出土数が 100 個体を越える層で２％以上を占める優占種の出土状況を**第 108 表**に示した。アラスジケマンがいずれの層でも極めて高い頻度で、特にⅢ’層では約半数を占めていた。それに、ヤコウガイが続き、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層で 20％以上となっていた。ヤコウガイと同様な出土パターンは、チョウセンサザエでも認められた。マガキガイ・ハマグリ類似種・サラサバテイラ・オキナワヤマタニシ等も多く、10％近い出土の認められた層もあった。なお、今回の最下部であるⅣ層の造成土からは貝類はほとんど確認されていない。殻が溶けたことも影響しているであろうが、廃棄自体が少なかったことと、造成には貝殻を用いていなかったことも考えられる。

第 106・111 ～ 113 表により食用貝類遺体（便宜的に中形以上の陸産貝類を含める）の生息場所類型組成を示したのが、**第 84 図**である。下部のⅢ’層では、河口干潟－マングローブ域（アラスジケマン等）のものが約 40％と多かったのが、Ⅲ層・Ⅱ層にかけて減少している。それに対応して、礁斜面（ヤコウガイ）が多くなり、イノー内と陸域のものも増加している。Ⅰ層では、およそⅢ層と同様なヤコウガイの多い組成となっている。

この変化の主要因は、第３章第４節９や本章第２節で述べられるように、Ⅲ層とⅡ層では「螺鈿細工に関連す

第 106 表　銭蔵東地区貝類遺体最小個体数

写真番号	種名	生息場所	Ⅰ層	Ⅰ´層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅲ´層	Ⅳ層	総計
	巻貝								
1	ヒザラガイの一種	Ⅰ-1-a	0	0	0	1	0	0	1
2	ツタノハ	Ⅰ-3-a	0	0	0	3	0	0	3
3	リュウキュウウノアシ	Ⅰ-1-a	1	0	1	2	0	0	4
4	クズヤガイ	Ⅰ-4-a	0	0	0	1	0	0	1
5	オキナワイシダタミ	Ⅱ-1-b	0	0	0	3	0	0	3
6	ニシキウズ	Ⅰ-2-a	2	0	0	5	0	0	7
7	ムラサキウズ	Ⅰ-3-a	1	0	0	2	0	0	3
8	ギンタカハマ	Ⅰ-4-a	2	0	1	8	0	0	11
9	サラサバテイラ	Ⅰ-4-a	57	2	3	293	2	0	357
10	ヤコウガイ	Ⅰ-4-a	110	2	13	717	2	2	846
11	ヤコウガイの蓋	Ⅰ-4-a	226	1	88	213	19	0	547
12	チョウセンサザエ	Ⅰ-3-a	84	4	25	415	2	0	530
13	チョウセンサザエの蓋	Ⅰ-3-a	26	0	30	159	0	0	215
14	コシダカサザエ	Ⅰ-2-a	1	0	0	1	0	0	2
15	カンギク	Ⅱ-1-b	18	0	6	136	1	0	161
16	カンギクの蓋	Ⅱ-1-b	22	0	2	35	2	0	61
17	イシダタミアマオブネ	Ⅰ-0-a	0	0	0	1	0	0	1
18	ヒメイシダタミアマオブネ	Ⅰ-0-a	1	0	0	1	0	0	2
19	マルアマオブネ	Ⅱ-1-b	2	0	0	3	0	0	5
20	アマオブネ	Ⅰ-1-b	1	0	0	0	0	0	1
21	ニシキアマオブネ	Ⅰ-1-c	1	0	1	0	0	0	2
22	カノコガイ	Ⅰ-3-a	1	0	0	0	0	0	1
23	オニノツノガイ	Ⅰ-2-c	19	0	1	3	0	1	24
24	コゲツノブエ	Ⅲ-1-c	0	0	0	1	0	0	1
25	カヤノミカニモリ	Ⅰ-1-b	3	0	0	8	3	0	14
26	イワカニモリ	Ⅰ-1-a	12	1	2	68	0	0	83
27	クワノミカニモリ	Ⅰ-1-a	6	0	0	75	0	0	81
28	リュウキュウウミニナ	Ⅱ-1-c	4	0	0	37	0	0	41
29	イボウミニナ	Ⅲ-1-c	0	0	0	0	1	0	1
30	フトヘナタリ	Ⅲ-0-d	0	0	0	7	0	0	7
31	ヘナタリ	Ⅲ-1-c	0	0	0	3	0	0	3
32	カワアイ	Ⅲ-1-c	1	0	1	4	0	0	6
33	ウスイロヘソカドガイ	Ⅴ-10	2	0	0	0	0	0	2
34	オハグロガイ	Ⅱ-2-c	2	0	0	0	0	0	2
35	ネジマガキ	Ⅰ-2-c	0	1	0	0	1	0	2
36	マガキガイ	Ⅰ-2-c	115	1	8	73	14	0	211
37	クモガイ	Ⅰ-2-c	1	0	0	0	0	0	1
38	アツキクスズメ	Ⅰ-3-a	1	0	0	74	0	0	75
39	カワチドリ	Ⅰ-3-a	0	0	0	2	0	0	2
40	ヘビカイ類	Ⅰ-2-a	0	0	0	4	0	0	4
41	ホソヤクシマダカラガイ	Ⅰ-2-a	0	0	0	0	0	0	0
42	マメシボリダカラ	Ⅱ-2-c	1	0	0	0	0	0	1
43	ハナビラダカラ	Ⅰ-1-a	4	0	7	11	0	0	22
44	キイロダカラ	Ⅰ-1-a	2	0	0	1	0	0	3
45	ハナマルユキ	Ⅰ-3-a	10	0	8	46	1	0	65
46	ヤナギシボリダカラ	Ⅰ-2-a	0	0	0	1	0	0	1
	不明		0	0	1	0	0	0	1
47	オキニシ	Ⅰ-3-a	1	0	0	1	0	0	2
48	ミツカドボラ	Ⅰ-2-a	1	0	0	0	0	0	1
49	シオボラ	Ⅰ-1-a	1	0	0	0	0	0	1
50	ホラガイ	Ⅰ-4-a	1	0	2	0	0	0	3
51	レイシダマシ	Ⅰ-1-a	0	0	0	1	0	0	1
52	ツノレイシ	Ⅰ-3-a	6	0	0	0	0	0	6
53	ツノテツレイシ	Ⅰ-3-a	1	0	0	0	0	0	1
54	シラクモガイ	Ⅰ-3-a	0	0	1	4	0	0	5
55	コイワニシ	Ⅱ-1-a	0	0	0	1	0	0	1
56	コオニコブシ	Ⅰ-2-a	5	0	0	3	3	0	11
57	フトコロガイ	Ⅱ-2-d	0	0	0	12	0	0	12
58	カニノテムシロ	Ⅲ-1-c	0	0	0	3	0	0	3
59	アワムシロ	Ⅰ-2-c	0	0	0	1	0	0	1
60	ノシガイ	Ⅰ-1-a	0	0	0	2	0	0	2
61	シマベッコウバイ	Ⅱ-1-c	0	0	0	12	0	0	12
62	イトマキボラ	Ⅰ-2-a	2	0	0	1	0	0	3
63	ナガイトマキボラ	Ⅰ-2-a	0	0	0	0	0	0	0
64	ツノマタモドキ	Ⅰ-3-a	1	0	1	1	0	0	3
65	アンボンクロザメ	Ⅰ-2-c	1	0	0	1	0	0	2

写真番号	種名	生息場所	Ⅰ層	Ⅰ´層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅲ´層	Ⅳ層	総計
66	マダライモ	Ⅰ-1-a	3	0	0	0	0	0	3
67	ヤセイモ	Ⅰ-2-a	2	1	0	1	0	0	4
68	イボシマイモ	Ⅰ-2-a	0	0	1	0	0	0	1
69	アジロイモ	Ⅱ-2-c	1	0	0	0	0	0	1
	不明		2	0	0	0	0	0	2
70	キタケノコガイ	Ⅰ-2-c	1	0	0	0	0	0	1
71	オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8	23	0	12	316	0	0	351
72	ツヤギセルガイ	Ⅴ-8	12	1	15	62	0	0	90
73	シュリマイマイ	Ⅴ-8	0	0	0	1	0	0	1
74	ウロコケマイマイ	Ⅴ-7	0	0	0	1	0	0	1
75	イトマンマイマイ	Ⅴ-9	1	0	0	3	2	0	6
76	パンダナマイマイ	Ⅴ-9	0	0	0	13	0	0	13
77	オキナワウスカワマイマイ	Ⅴ-9	0	0	1	14	0	0	15
78	アフリカマイマイ	Ⅴ-9	3	0	0	1	0	0	4
79	カシパン類（化石）	Ⅵ-12	0	0	0	1	0	0	1
80	オオオカチョウジガイ	Ⅴ-9	0	0	0	6	0	0	6
81	オカチョウジガイ？	Ⅴ-8	6	0	0	14	0	0	20
82	シリブトオカチョウジ	Ⅴ-8	0	0	0	1	0	0	1
83	カワニナ	Ⅳ-5・6	0	0	0	1	0	0	1
84	ヒラマキモドキ	Ⅳ-6	0	0	0	1	0	0	1
85	オキナワヤマタカマイマイ	Ⅴ-8	0	0	0	13	0	0	13
86	パイプウニ	Ⅰ-2-c	0	0	1	0	0	0	1
	不明		1	0	0	0	0	0	1
	巻貝合計		814	14	232	2909	53	3	4025
	二枚貝								
1	エガイ	Ⅰ-1-a	0	0	0	5	0		5
2	カリガネエガイ	Ⅱ-1-a	1	0	0	0	0		1
3	クロミノエガイ	Ⅱ-2-b	0	0	0	2	0		2
4	リュウキュウサルボオ	Ⅱ-2-c	1	0	0	0	1		2
5	ミドリアオリ	Ⅰ-1-a	1	0	0	9	0		10
6	キンチャクガイの一種（化石）	Ⅵ-12	0	0	1	1	0		2
7	メンガイ類	Ⅰ-2-a	1	0	1	1	0		3
8	イタボガキ科の一種		1	0	0	0	0		1
9	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	15	0	2	19	5		41
10	カゴガイ	Ⅱ-2-c	0	0	1	1	0		2
11	ケイトウガイ？	Ⅰ-2-a	0	0	0	0	0		0
12	シロザル	Ⅰ-4-a	1	0	0	0	0		1
13	キクザル科の一種	Ⅵ	1	0	0	0	0		1
14	リュウキュウザル	Ⅱ-2-c	0	0	0	3	0		3
15	カワラガイ	Ⅱ-2-c	1	0	1	6	0		8
16	マクラザル	Ⅵ	1	0	0	0	0		1
17	ヒレジャコ	Ⅰ-2-c	10	2	4	9	0		25
18	オオシラナミ	Ⅰ-1-c	4	0	0	2	0		6
	シャコガイ科不明		2	0	2	8	0		12
19	イソハマグリ	Ⅰ-1-c	2	0	1	1	1		5
20	ナミノコマスオ	Ⅰ-1-c	0	0	0	0	1		1
21	リュウキュウナミノコ	Ⅱ-1-c	0	0	0	1	0		1
22	サメザラ	Ⅰ-2-c	0	0	0	1	0		1
23	リュウキュウシラトリ	Ⅰ-2-a	0	0	0	1	0		1
24	シレナシジミ	Ⅲ-0-c	2	0	1	3	0		6
25	アラヌノメガイ	Ⅰ-2-a	2	0	0	2	0		4
26	ヌノメガイ	Ⅱ-2-c	13	0	0	1	5		19
27	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	160	2	39	867	53		1121
28	ホソスジイナミ	Ⅱ-1-c	3	0	2	9	0		14
29	ユウカゲハマグリ	Ⅱ-2-c	0	0	0	1	0		1
30	オイノガミ	Ⅰ-3-c	1	0	0	2	0		3
31	ヒメアサリ	Ⅱ-1-c	1	0	0	0	0		1
32	スダレハマグリ	Ⅱ-1-c	3	0	1	14	0		18
33	イオウハマグリ	Ⅱ-1-c	0	0	0	4	0		4
34	ダテオキシジミ	Ⅲ-1-c	10	0	0	5	0		15
35	トュドュマリハマグリ	Ⅱ-2-c	0	1	0	0	0		1
36	ハマグリ類似種	Ⅱ-2-c	45	1	13	99	2		160
37	タイワンシラオ	Ⅱ-2-c	0	0	0	1	0		1
38	ヒオウギ類（化石）	Ⅵ-12	0	0	0	1	0		1
	二枚貝合　計		282	6	69	1079	68		1504

る貝殻残滓の廃棄」が行われており、ヤコウガイが増加することである。Ⅰ層でのまたヤコウガイが多い組成は、撹乱層では大形種が目立つことに起因する可能性もあろう。ヤコウガイ等の螺鈿残滓を除くと、サンゴ礁域の岸側潮間帯とイノー内が、20%以下という在り方は、首里城のこれまでに筆者の確認させて頂いたもの（黒住, 2010a, 2013）と同様であった。ただ、地点ごとに組成に少し相違が認められており、今後地点の持つ意義と時期で、貝類遺体の組成を再検討することが必要と思われる。本地点では、内湾域の種として、カンギク・イワカニモリよりもハマグリ類似種やウラキツキガイが多かった点は注意されるべき点のようである。

（2）特異な出土様式－ヒレジャコとヤコウガイのフタ

本地点の発掘調査の折に、ヒレジャコとヤコウガイのフタが特異な出土様式を示していると考えられたので、ここに記しておきたい。

ヒレジャコ（**写真 41 左**）：今回の例では石垣の一部に大形個体の片殻が認められた。ただ現在でも八重山諸島で見られるような“石の一つ”としての利用方法ではなく、ごく少数が散在的に用いられていた。シャコガイ、特に大形シャコガイ（通常ヒレジャコ）は、沖縄において民俗事例（上江洲, 1973）や先史時代からの遺跡出土状況（三島, 1977）から、呪力を持つものとして取り扱われてきたことはよく知られている。

首里城などでも、いくつかの地点で大形のヒレジャコ片殻を石垣の“礎石”的なものとしての利用が見られ、筆者は大形のヒレジャコは、これまでの想定と同じく何らかの精神的な意図（呪力？）のもとに配置されたものだと考えたい。この利用意図が正しいとしても、木下（1992）が想定した各種の呪力の中で、どのように理解すべきか筆者にはわからなかった。

ヤコウガイのフタ（**写真 41 右**）：本地点ではヤコウガイのフタが造成層中に瓦片などと共に完形個体として時折認められ、他には海産貝類遺体はほとんど見られなかった。この観察から、フタは通常の食用遺体の廃棄とは異なり、瓦のような建物に関連した廃棄物として造成土中に入ったと考えられる。単純なことではあるが、貝類としては特異な利用法と言えよう。全くの想像でしかないが、「文鎮」のような使用だったのかもしれない。

第 107 表　貝類の生息場所類型

大区分	
Ⅰ	外洋－サンゴ礁域
Ⅱ	内湾－転石域
Ⅲ	河口干潟－マングローブ域
Ⅳ	淡水域
Ⅴ	陸域
Ⅵ	その他

底質等	
a	岩礁
b	転石
c	砂/泥
d	河川礫底
f	植物上

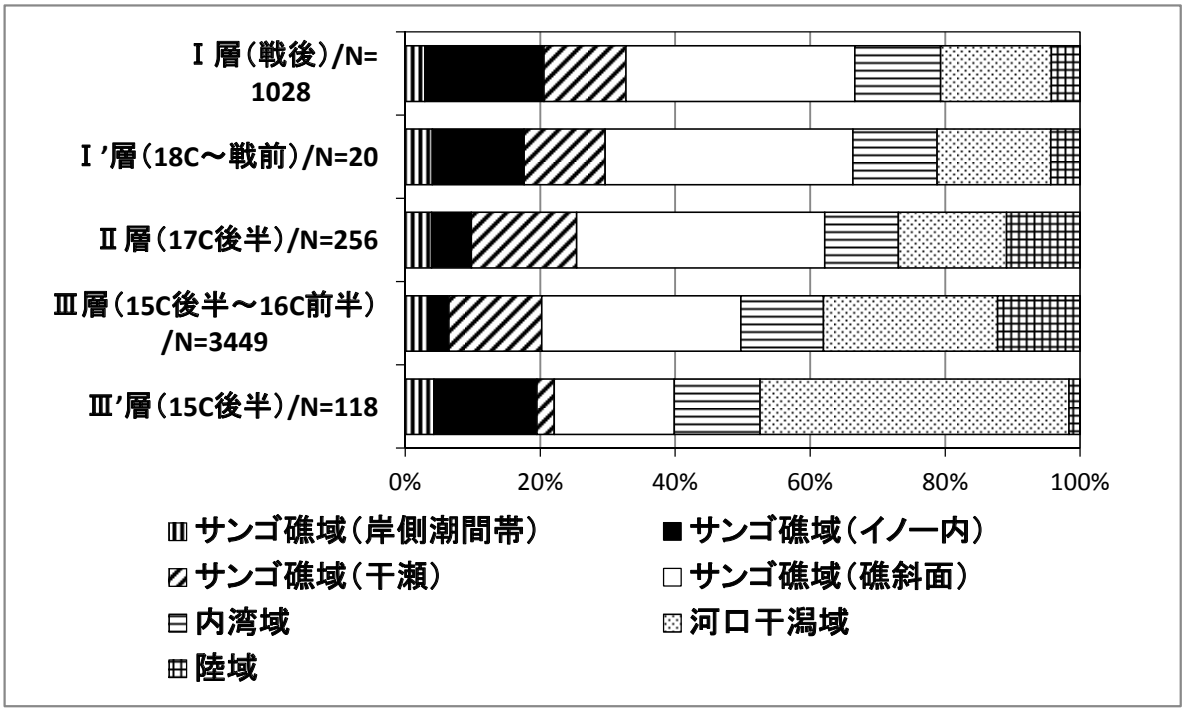
小区分			
0	潮間帯上部	5	止水
	Ⅰ－0　ノッチ	6	流水
	Ⅲ－0　マングローブ	7	林内
1	潮間帯中・下部	8	林内・林縁部
2	亜潮間帯上縁部	9	林縁部
	Ⅰ－2　イノー内	10	海浜部
3	干瀬	11	打ち上げ物
4	礁斜面	12	化石

第 108 表　銭蔵東地区出土貝類遺体の優占種の出土割合

	生息場所類型	Ⅰ層	Ⅰ´層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅲ´層	Ⅳ層
アラスジケマン	Ⅲ-1-c	15.6	10.0	15.2	25.1	44.9	0.0
ヤコウガイ	Ⅰ-4-a	31.0	15.0	34.4	20.8	16.1	66.7
チョウセンサザエ	Ⅰ-3-a	10.1	20.0	11.7	12.0	1.7	0.0
マガキガイ	Ⅰ-2-c	9.8	5.0	3.1	2.1	11.9	0.0
ハマグリ類似種	Ⅱ-2-c	4.4	5.0	5.1	2.9	1.7	0.0
サラサバテイラ	Ⅰ-4-a	5.3	10.0	1.2	8.5	1.7	0.0
オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8	2.1	0.0	4.7	9.2	0.0	0.0
ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	1.5	0.0	0.8	0.6	4.2	0.0
ヌノメガイ	Ⅱ-2-c	1.3	0.0	0.0	0.0	4.2	0.0
カンギク	Ⅱ-1-b	1.6	0.0	2.3	3.9	1.7	0.0
ツヤギセルガイ	Ⅴ-8	1.1	5.0	5.9	1.8	0.0	0.0
ヒレジャコ	Ⅰ-2-c	1.0	10.0	1.6	0.3	0.0	0.0
ハナマルユキ	Ⅰ-3-a	1.0	0.0	3.1	1.3	0.8	0.0
イワカニモリ	Ⅱ-1-a	1.2	5.0	0.8	2.0	0.0	0.0
ハナビラダカラ	Ⅰ-1-a	0.4	0.0	2.7	0.3	0.0	0.0
イソハマグリ	Ⅰ-1-c	0.2	0.0	0.4	0.0	0.8	0.0
ホソスジイナミ	Ⅱ-1-c	0.3	0.0	0.8	0.3	0.0	0.0
カヤノミカニモリ	Ⅰ-1-b	0.3	0.0	0.0	0.2	2.5	0.0
クワノミカニモリ	Ⅰ-1-a	0.6	0.0	0.0	2.2	0.0	0.0
コオニコブシ	Ⅰ-2-a	0.0	0.0	0.0	0.1	2.5	0.0
出土個体数合計		1028	20	256	3449	118	3

（３）土壌サンプル中の組成

今回、多くの土壌サンプルが採取・処理されていたが、時間の都合により、最も出土数の多かったⅢ層に属する石積み１内の３層と２層の少数のサンプルについて詳細に検討した。サンプルは未洗いの状態のものと、水洗・抽出の終了したものがあり、未処理のものは黒住（1997）と同じ手順で処理した。抽出されていたものは５mm メッシュのもののみを対象とした。その詳細は**第 109 表**に示したが、３層・２層とも未洗い分１サンプルと抽出分２サンプルである。



第 84 図　銭蔵東地区における食用貝類遺体の生息場所類型組成

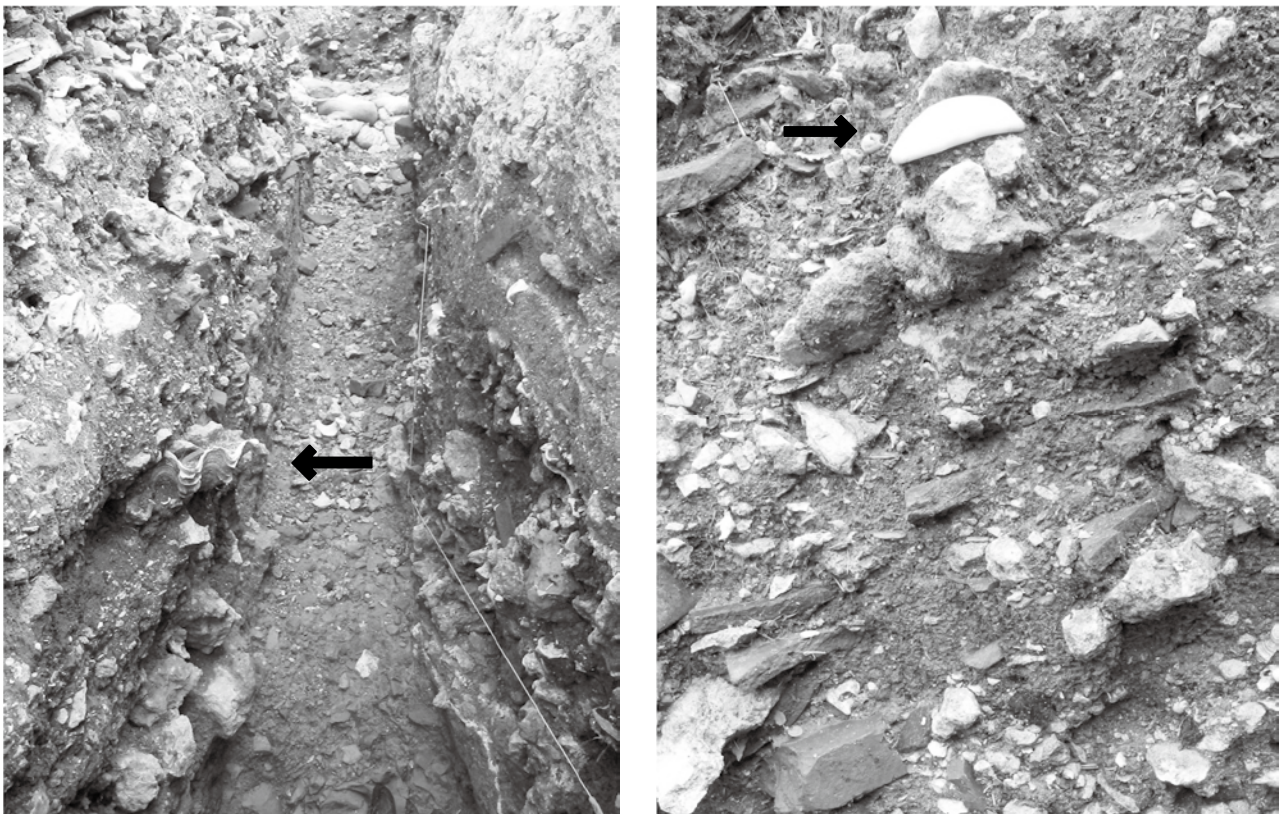


写真 41　ヒレジャコ（左）とヤコウガイのフタ（右）の出土状況

サンプルの処理上、微小貝を含むことになり、多種多様な貝類が抽出された。**第 109 表**では、これらを、ヤコウガイ等の螺鈿関連、食用のもの（内湾系＝内湾－転石域と河口干潟－マングローブ域をあわせたものと、サンゴ礁系に区分した）、淡水産、包含層形成時に砂利として持ち込まれたもの、首里城地域の石灰岩中の化石、現代の工事用の砂由来の混入、陸産貝類（開放地・林縁・林内）、その他に区分して示した。また、黒住処理分では、9.5mm メッシュ上の人工遺物や石灰岩等の組成も組み込んだ。

３層と２層では、ヤコウガイ等の螺鈿関連の貝類遺体（後述）の出土様式が異なっており、３層ではこれらが極めて多く、２層にはほとんど認められなかった。また、２層には石灰岩と瓦が多く、現代（復帰以降と想定される）の工事用砂の混入が見られた。つまり、この２つの層では、堆積状況が大きく異なり、また下部の３層には上部からの混入が少なかったこともわかる。

食用貝類遺体では、ピックアップ資料と同様にアラスジケマンが多く、カニモリ・ウミニナ類やマガキガイ・ニシキウズ等も目立ったが、全体としての量は多くなかった。

砂利由来としたものは、磨滅したものがほとんどで、海岸から貝殻の含まれた砂／砂利を運びこんで、敷いたものと思われる。この状況は、首里城の奉神門地区でも確認されている（黒住 , 2013）。また、サンゴ片はかなり少ないので（**第 109 表**）、敷かれたものは、それなりに小さな粒のものであったこともわかる。

（４）螺鈿に利用された貝類

第４章第４節９や本章第２節で詳細に分析されているように、本遺跡からは螺鈿に用いられたヤコウガイ等が多数出土している。また観察の結果、ヤコウガイ以外にも、サラサバテイラとチョウセンサザエも利用されていることがわかった。**第 106･111 ～ 113 表**に示したように、特にⅢ層･Ⅱ層はその残滓がかなり多くを占めている。しかし、サラサバテイラの出土数はⅡ層でかなり少なく、この種の利用頻度が変化していた可能性も考えられる。

土壌サンプル中の螺鈿利用３種については、およその大きさと研磨等の加工の有無（可能性のあるものは加工と判断した）も表示した（**第 109 表**）。ヤコウガイではかなり高い割合で加工（切取り等を含む）が存在し、サラサバテイラ・チョウセンサザエでも加工片が多く認められた。ヤコウガイとチョウセンサザエの加工等に関しては、本報告書中に詳細に検討されているので、ここでは筆者の観察したサラサバテイラに関して限られた結果ではあるが、示しておきたい。

本種が多く得られていた石積み１内３層の洗浄済み資料から、１箱を選び（**写真 42 Ａ**）、破片をタイプ分けし、そのサイズや加工状況等をチェックした（**第 110 表**）。資料は体層の欠落した殻頂部と体層部破片からなり、基本的に体層を外して利用していたことがわかる（**写真 42 Ｃ**：体層部が残存する殻頂部；下部の波打った形状は打割等の調整）。また、中には殻口部に人為的な穿孔のあるものも見られ（**写真 42 Ｂ**）、この孔は体層部片にも認められた（**第 110 表；写真 42 Ｅ**の◆）。この穿孔は体層を外す前に開けられたものと思われる。そして、体層を外すためだと考えている打点（クサビ用のものを当てたと想定：**写真 42 Ｅ**の●）も比較的多くの破片で観察できた。このようにして外された体層は、全ていくつかに分割され、小形にしてから次の加工が行われたようである。その側面には、割るための溝状の加工の認められるものも多かった。このように手順で、最終的に第４章第３節８に述べられているような小破片を研磨して、漆器にはめ込まれた訳である。

確認できた殻頂部 22 個体の残存殻径は、６cm が７個体、７cm が 11 個体、８cm が３個体、９cm が１個体と比較的大きく、**第 110 表**の残存長でも 12cm の個体があり、基本的には大形の成貝を利用していたこともわかる。また、体層を外した殻頂部が多く出土していることから、螺鈿に利用したのは体層部がほとんどだと考えられる。

今回、15 世紀後半～ 16 世紀前半に首里城内で螺鈿細工が行われていたことも明らかになったが、今回の発掘資料（**第 106･111 ～ 113 表**）では加工残滓が基本であり、これまでの首里城の発掘でも、「螺鈿用貝類の集積」のようなものは確認されていない。当然のことであるが、城外に食用後の貝殻をストックしていた場所が存在し

第 109 表　銭蔵東地区の土壌サンプルから得られた貝類遺体等の組成

			石積み1内3層						石積み1内2層					
サンプル番号等			#991/黒住処理/9300cc/10260g				#1000	#1001	#992/黒住処理/7200cc/9100g				#833	#934
メッシュサイズ(mm)等			9.5	4.0	2.0	LF	5.0	5.0	9.5	4.0	2.0	LF	5.0	5.0
体積			2700cc	830cc	480cc				2000cc	730cc	380cc			
重量			2620g	620g	344g				1970g	745g	383g			
貝類			1654g	56g					47g	*				
螺細関係	ヤコウガイ	＞8cm	1b,3f[3A]		*		6(2cl)f	1f[A],1cl[A],1u[A]						
		8-4cm	13f[12A/2H]		*		1f[A],1u	6f[5A/1H]						
		4cm＞	46f[21A/1H]	38f[4A]	*		15f[6A/1H]	7f[4A/1H]		1f[A]			2f[1A]	1f
	ヤコウガイ/フタ	＞4cm	3,1f[1A]		*		3f	1f						
		4cm＞	2f		*		5f	2f						
	サラサバテイラ	＞8cm	6w[4A/1H]		*		3w[2A]	3f[2A]						
		8-4cm	11f[3A]		*		1(cl/A)f	10f[4A/1H]						
		4cm＞	18f[7A]	11f	*		19(7A/1H]	1f	3f[1A]				1f	
	チョウセンサザエ	＞4cm	2b[1A],1u		*			3f[2A]					1u	
		4cm＞	8f[1A]	4f[1A]	*				1u					3f[1A]
	チョウセンサザエ/フタ		2	1f	*									
	真珠層発達破片			71f[27A]	*									
食用/内湾系	アラスジケマン		0/2(1j),2u,3f	1u/1u,7f	*		2,2ju/2m,10f	5(1j),2u/5,4u,11f	2,1u/3	1u/1u,5f			0/1,3f	1,1ju/1,3f
	ダテオキシジミ		0/1		*									
	カンギク		1		*		2	1,1b			1f		1f	1
	ウラキツキガイ				*			0/1,1f						
	カンギク/フタ			1	*			2		1	1		2	1
	イワ[ウミナ-]カニモリ		1	1	*			?1b		?1je				
	リュウキュウウミニナ			1e	*		1u	1						2e
	イトカケヘナタリ			1u	*									1b
	カワアイ				*					1d				
	ヘナタリ			1j,1bd?	*									
	ウミニナ類			1e,1ue?	*									
	シマベッコウバイ				*				1					
	ノコギリガキ				*			0/1j						
	カワラガイ				*			1f					1f	
	ハマグリ類				*			1u/0,2f					1f	1f
食用/サンゴ礁系	マガキガイ		1u		*			2,1uA?,1f	1uA?,1cle					
	ニシキウズ		6(1B)f		*									
	ミドリアオリ		0/1		*		1ju/0,1f			1f				
	シラナミ類				*		1f							
	ヒレジャコ				*				1f					
	ハナマルユキ				*		1f	2(1e)ol,1f	1f					
	ハナビラダカラ				*				1f	?3f			1A?	
	クワノミカニモリ				*		1a,1j							
	コオニコブシ		1		*			1						
	ヒザラガイ類			1iv	*								1iv	
	マダライモ				*								1bj	
	カリガネエガイ				*					0/1				
	リュウキュウザル			2f	*									
	イソハマグリ				*								1/0	1/0
	ツタノハ			1j	*									
	アツキクスズメ			1	*			1						
	シラヒゲウニ？			1f	*									
	海産貝類/同定不能		7f	52(1B,5e)	*		30(3B,1e)f			21(1B,1e)f			1f	4(1e)f
淡水	カワニナ			1b										
砂利由来	コシダカサザエ/フタ				4e					1e	3e			
	オオウラウズ									1ue				
	ハナカニモリ				1e									
	カワチドリ				2(1e)j						1je			
	ウネレイシダマシ									1fe				
	フトコロガイ			1						2be				
	タモトガイ			2(1e)u										
	ノシガイ									1fe				
	ヒトスジツノクダマキ										1ljbe			
	小形イモガイ												1je	
	不明巻貝							3fe					1ue	
	コシロガイ									1fe				
	クロミノエガイ									1fe				
	ベニエガイ										0/1je			
	ゼニイシ				1									
	オガサワラリソツボ類					1lje								
	チャツボ類？					1sje								
（化石）	キンチャクガイ類						1f							1f
	モグラノテ						0/1							
	腕足類							1v						
	化石二枚貝												1u	
（現在工事用砂）	フシカニモリ										1j,1f			
	ワシノハ類												0/1	
	オオハナエガイ									1/0				
	ハマチドリ											1mjcv		
	コマツヤマワスレ											1mjcv		
	コダキガイ										0/1			
開放地	オオオカチョウジ				7ab,2lj,27ljb,2u,2w	515					3ab,1lj	329		
	ソメワケダワラ					1a,3mj,2sj,2u						1mj,2(1c)sj,2u		
	ヒメコハクガイ類					1a,6lj,1mj,1sj						3lj,4(1c)mj,1sj		
	ハクサンベッコウ					1mjc,7(6c)sj						2ljc,4mjc,4sjc		
	ジョウモンヒメベッコウ					1mj								
	オキナワウスカワマイマイ			1ljb						1mjb,1u	1b			
	シモチキバサナギガイ					1sj						1a,1ab,1mj		
	アフリカマイマイ												1f	
	コハクガイ類？											5ljc,6mjc		
	ヒメベッコウ？											2ljc?		
	リュウキュウオカモノアラ											1sjc?		
林縁	オキナワヤマタニシ		2a,1lj,1ljb	1u,2f	1u	3sj	4a,1lj,1mj	1mj,1u	3a,1lj,1mj	2f	1w	5sj	1a,1ab,1lj,1mj,1u,6f	3a,1ab,1mj,2u,2f
	シリブトオカチョウジ？				2mj,5u	197						21		
	パンダナマイマイ			3mj,1f	?1f	2mj,12sj	1lj,4f			3f	1w	3mj	1mjb	
	トウガタホソマイマイ			5ab,1ljb		1mj,2sj,6u	1lj					2mj,481c)sj		
	ツヤギセル			2ab		10sj,1u	1w							
	ヒメベッコウ？					4a,5(2c)lj						3(1c)a,1lj		
	ホラアナゴマオカチグサ類					2lj						1ljc		
	ナハキビ					1a,1mj					1a	3ljc?,2(1c?)mj,5(1c)sj		
	ナガケシガイ											6a		
	シュリケマイマイ							1ljb,2u						
	シュリマイマイ									1f			1f	
林内	ウロコケマイマイ					1u								
その他	卵/陸産貝類					54						20		
	ウスイロオカチグサ					12a,1ab,1u						1lj		
	ヒラマキモドキ											2lj		
	貝形虫											3cv		
骨			117g			6f			17g(21f)					
陶磁器			6g(5f)						0					
荒焼等			24g(4f)						11g(2f)					
瓦			10g(3f)						171g(10f)					
焼け土			0						15g(3f)					
漆喰？			2g(4f)	16f					2g(2f)					
鉄			58g(12f)	2f					22g(3f)					
炭化材片			1g(3f)			615(>5mm)			0			59(>5mm)		
軽石			1g(2f)			6			0					
礫(非石灰岩)			76g(25f)						74g(9f)					
サンゴ片			6g(2f/1e)						1g(1f)					
磨滅枝サンゴ片			4g(2f)	1B?					12g(2f)					
石灰岩			657g(150f/1e)						1598g (240f/4B)					
根						57						88		

A:製品/加工, a:成貝, b:体層, c:色彩残り, cl:軸唇, cv:合弁, d:死殻, e:水磨, f:破片, H:人為穿孔, lj:大形幼貝, mj:中形幼貝, sj:小形幼貝, u:殻頂部, w:螺層
#991, 992の2mmメッシュは全体の1／2の値;　*:詳細未検討

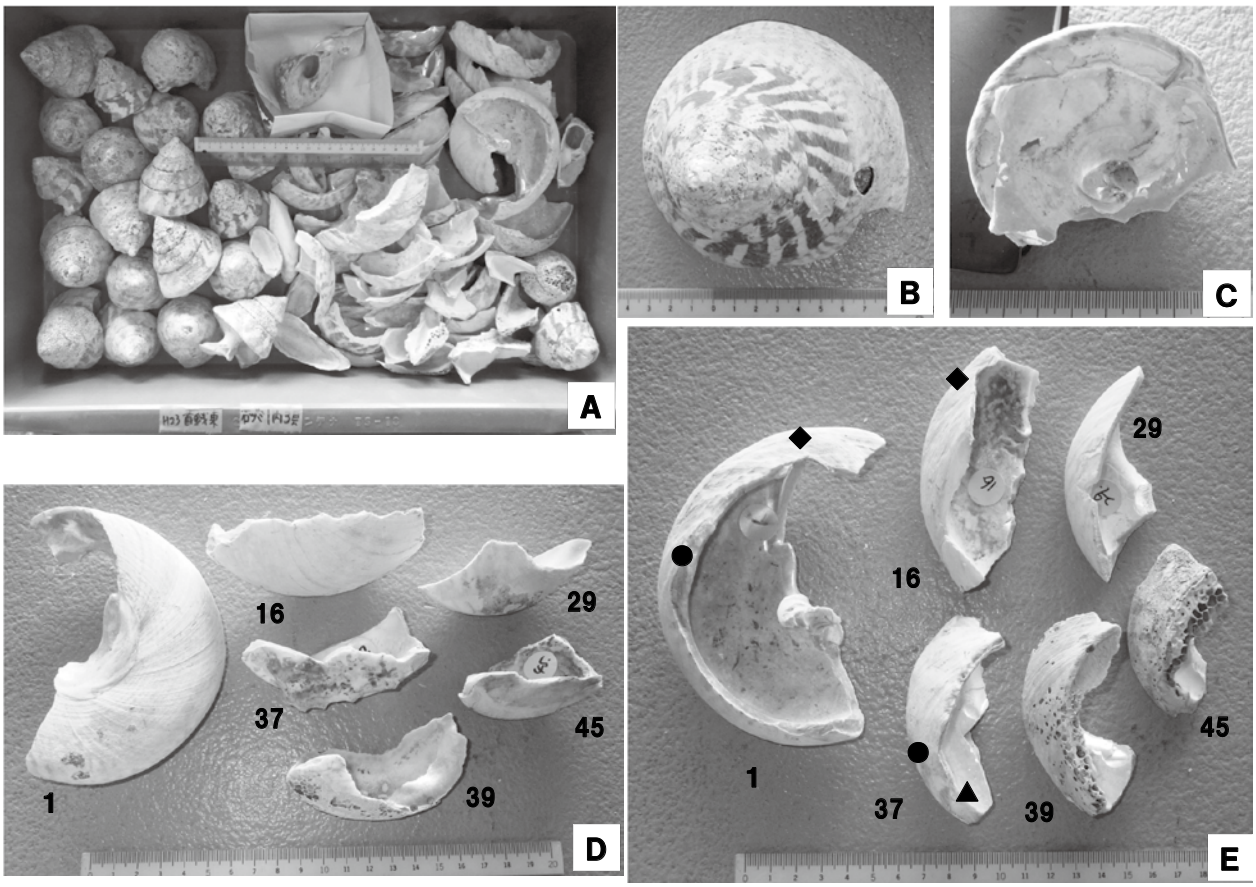


写真 42　螺鈿に利用されたサラサバテイラ　　数字は作業番号

ていたと考えられる。近接した御細工所跡（島袋，1991）でも、未加工貝類の集積は未確認のようである。食用後の貝殻を利用していたと推測され、どのようなシステムで、どこに集積場所があったのかも、今後注意され明らかになることを望みたい。

（５）陸産貝類

ピックアップ法では、陸産貝類はⅡ層とⅢ層で多くなっており（**第 106・111 ～ 113 表、第 84 図**）、特にオキナワヤマタニシが多く、ツヤギセルも目立っていた（**第 108 表**）。一部には、林内生息種のイトマンマイマイも下部の層で特徴的に出土している。土壌サンプルの処理方法によって、かなり多くの微小種を含む陸産貝類が抽出できた（**第 109 表**）。これまでと同様に、浮遊部分（**第 109 表**の LF）のサンプルを用いて、分析を行った。

その結果（**第 85 図**）、下部の石積１内３層ではオオオカチョウジが 60％を超え、シリブトオカチョウジ？も約 1/4 を占めていた。その他のものは僅かであった。前者は開放地生息種で、後者は林縁生息種である。そして上部の石積１内２層ではオオオカチョウジの割合がさらに増加し、80％を超えていた。シリブトオカチョウジ？はかなり減少していた。ただ、**第 109 表**のように、オカチョウジガイ類２種は個体数が多いために、出土部位の検討は同定標本数（NISP）となっているが、それ程大きな相違はないと考えられる。なお、１リットル当たりの抽出数は、２層で 56 個体、３層で 85 個体と比較的多いものであった。

このことから、２層の方がより開けていたことが想定される。ただ、２層でもトウガタホソマイマイ等の林縁生息種も確認されており、隣接した場所には木立のような林が存在していたことは確実であろう。御内原地区のシーリ遺構内の陸産貝類組成（黒住，2010b）とも大きく異なっており、林や地区ごとの植物管理状況に起因するものと考えられる。

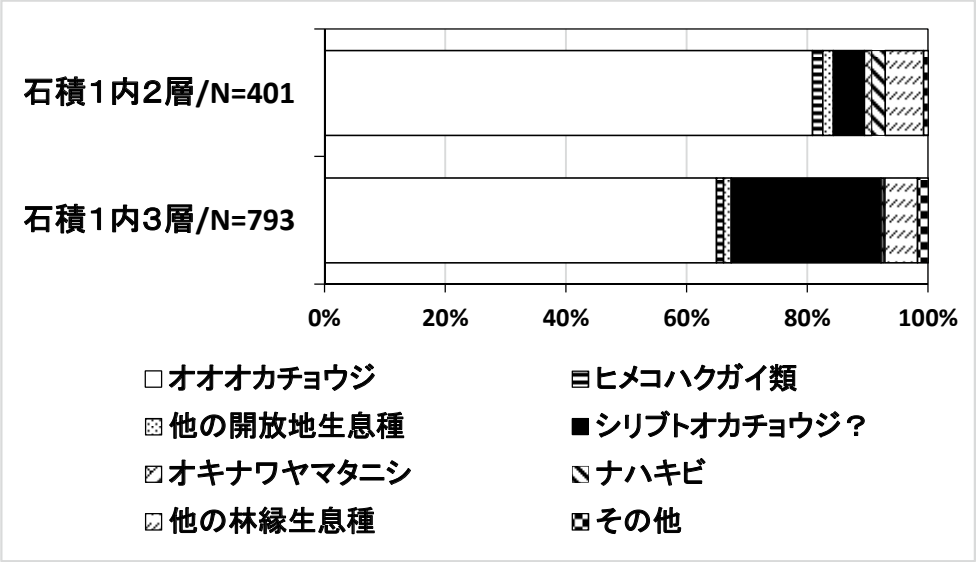
今回の得られた種の中には、国外等から人によって持ち込まれた移入種（＝外来種）が比較的多く含まれていた。優占種であるオオオカチョウジもそのひとつである。筆者はこれまで従来の見解を踏襲して、本種の移入時

第 110 表　銭蔵東地区石積み１内３層中のサラサバテイラ観察結果

	作業番号	分割	残存長（cm）	打点	孔	縫合部残存	側面の加工	縫合側打割調整	備考
				背面側					
type 1	1	有	12	2?	1		有?		
type 1	2	有	12	2	1		無?		
type 1	3	有	12		1	有			
type 1	4	有	12	2			有?		
type 1	10	有	11	1?	1		有?		
type 1	6	有	10				有?		
type 1	5	有	9		1?		有?		
type 1	7	有	9		1?		有		
type 1	8	有	9	1?			有?		
type 1	9	有	8	2?		有		有?	生貝と思われるが殻が多孔質で死殻かも
type 2	11	有	11	1?	1		有?		
type 2	12	有	11	1			有	有	
type 2	15	有	9	2			有		
type 2	13	有	8	1?			有	有	軸突出部を除く
type 2	14	有	8		1		有	有?	軸突出部を除く
type 3	18	有	10			有		有	
type 3	16	有	9		2?		有?	有	
type 3	17	有	9			有		有	
type 3	20	有	9		1		有?	有	
type 3	24	有	9			有		有?	
type 3	21	有	8			有		有	
type 3	22	有	8	2			有?	有?	
type 3	23	有	8					有?	
type 3	25	有	8			有	有?		
type 3	29	有	8						縫合側に研磨痕？
type 3	31	有	8	1?	1?		有?	有?	
type 3	27	有	7						縫合側に研磨痕？
type 3	28	有	7				有	有?	
type 3	26	有	6	1?		有			
type 3	30	有	5					有	小片で観察不可の部分ありか
type 4	32	有	8	2?				有	
type 3	19	有	8			有	有	有?	少し若い個体（斑紋明瞭）
type 4	33	有	7	1?	1?	有			
type 4	34	有	6		1(小)	有		有?	
type 4	35	有	5					有?	
type 4	36	有	5		1(小)?	有		有?	
type 5	41	有	9			有	有	有?	
type 5	42	有	9			有		有?	縫合側に研磨痕？
type 5	37	有	8	1		有	有		
type 5	43	有	8				有		縫合側に研磨痕？
type 5	38	有	7			有	有		
type 5	39	有	7			有			生貝だが殻は多孔質
type 5	40	有	7			有			縫合側に研磨痕？
type 5	45	有	7			有		有	縫合側に研磨痕確実
type 5	46	有	7			有		有	
type 5	48	有	7	1			有?	有	
type 5	44	有	6			有			生貝と思われるが殻は多孔質
type 5	47	有	6			有	有?	有	
type 5	49		5			有			縫合側に研磨痕？/小片で半分割の意図不明
type 5	50		5			有			外唇上部片，他のものの一部
type 5	51		3						体層・次体層片，他のものの一部
ギンタカハマ			7						体層がほぼ1層残存（このタイプの破片はサラサバテイラにはなし／食用か）

type 1：底面；ほぼ殻口部残存；軸唇の突出部あり　　?は確実性の落ちるもの
type 2：底面；ほぼ殻口部残存；軸唇の突出部なし
type 3：底面；殻口部なし；軸唇の突出部なし
type 4：底面？；殻口部なし；軸唇の突出部なし；亜生貝？（斑紋明瞭で少し若い個体と思われるもの）
type 5：次体層と体層を含む小片

第 85 図　銭蔵東地区の石積み 1 内から得られた陸産貝類遺体の種組成



期を戦前としていたが（黒住 , 2000）、今回極めて多くの色彩の残っていない個体が得られたことから琉球王国時代の 16 世紀頃には定着していた可能性が高い。同様に、近世期と考えていたソメワケダワラももう少しさかのぼる可能性も出てきた。ただ、この両種とも、地中に潜る性質が他のグループより強く、もしかすると、後代に繁殖していたものが落ち込んだ可能性も否定はできない。このような例には、戦中の移入種であるアフリカマイマイや戦後に定着したシモチキバサナギガイが得られている（第 109 表）。一方、中国南部からの持ち込まれたと考えているナハキビ（黒住 , 2015）も少数ながら確認できた。さらに、今後の検討が必要であるが、現在急激にヤマトで分布域を拡大させている国内移入種のウスイロオカチグサは色彩の残っていない成貝がかなり多く得られており、この時代に持ち込まれたのかもしれない。

謝辞：興味深い資料の検討の機会を与えて頂き、原稿のチェックまでして頂いた沖縄県埋蔵文化財センターの瀬戸哲也氏と、困難な分類・集計を行って頂いた同センターの方々にお礼申し上げたい。本報告の一部には科学研究費（15K02990/ 代表：樋泉岳二）を用いた。

引用文献

黒住耐二 . 1997. 1996 年の用見崎遺跡調査でコラムサンプルから得られた貝類遺存体 . 用見崎遺跡Ⅲ , 考古学研究室報告 , (32): 35-41. 熊本大学考古学研究室 .

黒住耐二 . 2000. 日本における貝類の保全生物学―貝塚の時代から将来へ―. 月刊海洋 , 号外 , (20): 42-56.

黒住耐二 . 2010a. 貝類遺体 . In 仲座久宜 (編), 首里城跡 , 御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）, 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 , (54): 440-451.

黒住耐二 . 2010b. 貝類遺体（シーリ遺構内）. In 仲座久宜 (編), 首里城跡 , 御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）, 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 , (54): 472-476.

黒住耐二 . 2013. 首里城淑順門西地区および奉神門地区の発掘調査で得られた貝類遺体 . In 瀬戸哲也 (編), 首里城跡 , 淑順門・奉神門埋甕地区発掘調査報告書 , 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 , (68): 186-200.

黒住耐二 . 2015. 陸産貝類 . In 沖縄県教育庁文化財課史料編集班 (編), 沖縄県史，各論編，第 1 巻，自然環境 , pp. 579-582. 沖縄県教育委員会 .

木下尚子 . 1992. 辟邪の貝―しゃこがい考―. 比較民俗学研究 , 6: 5-39.

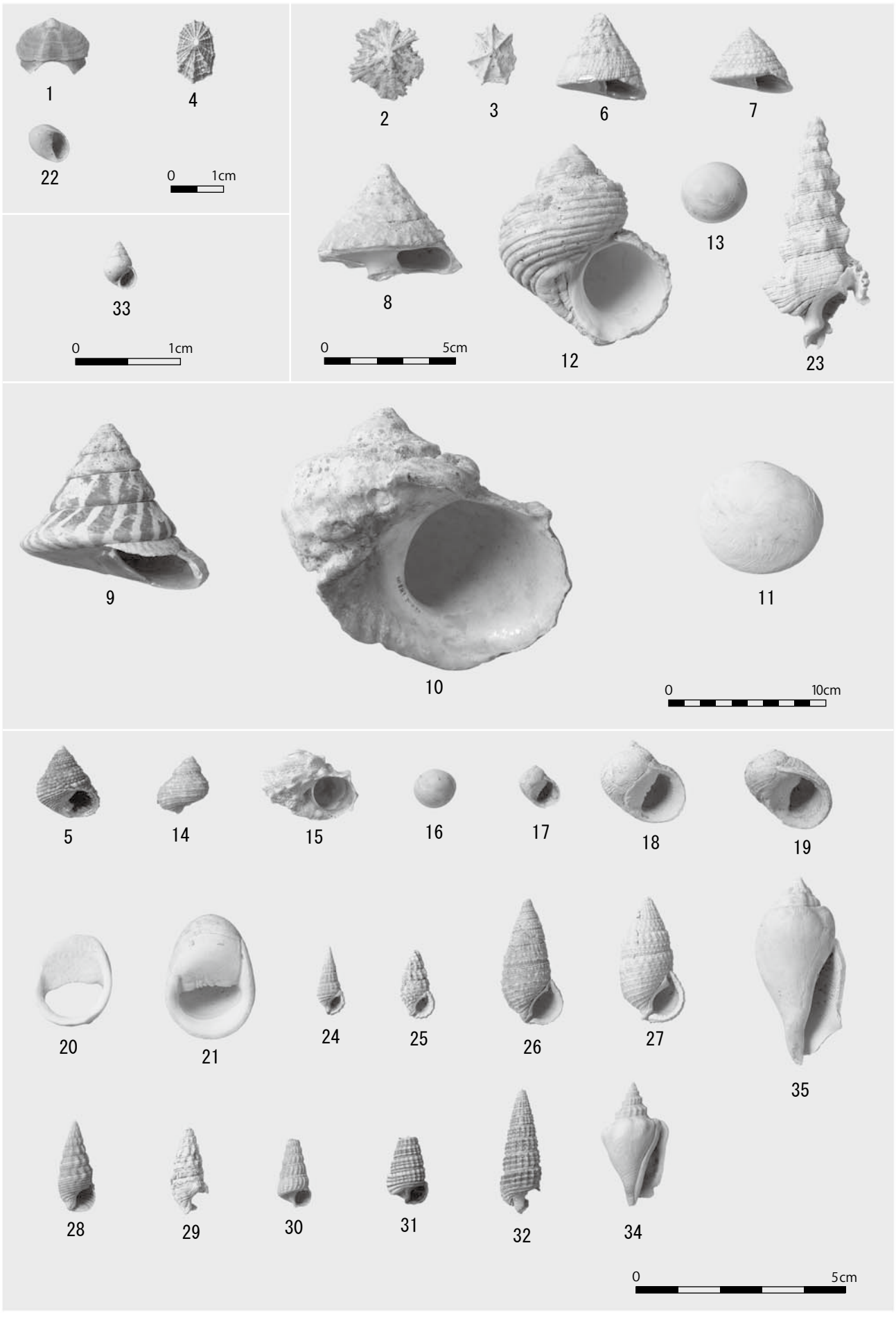
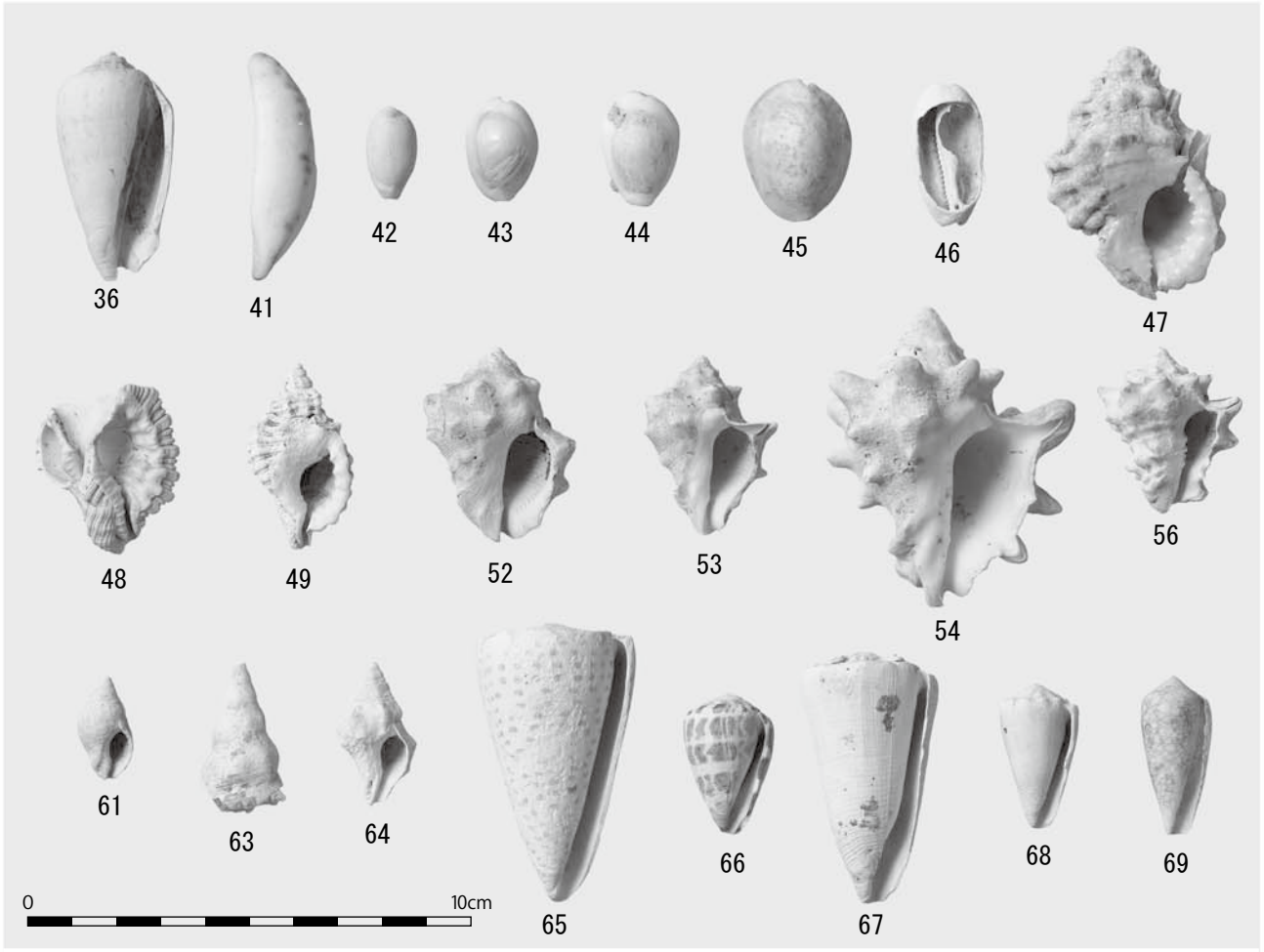
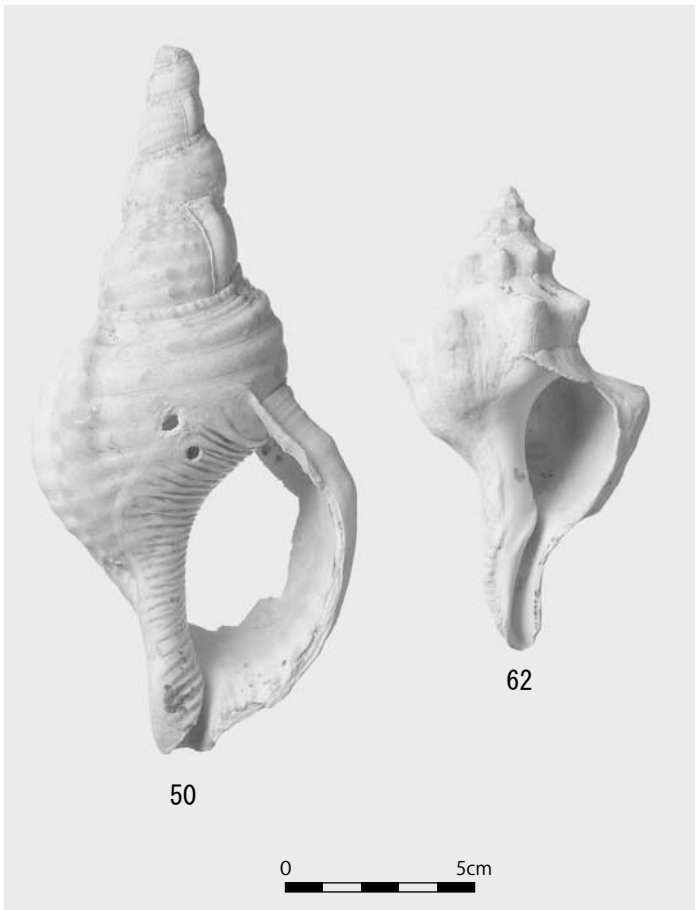


写真 43　貝類遺体　巻貝（１）





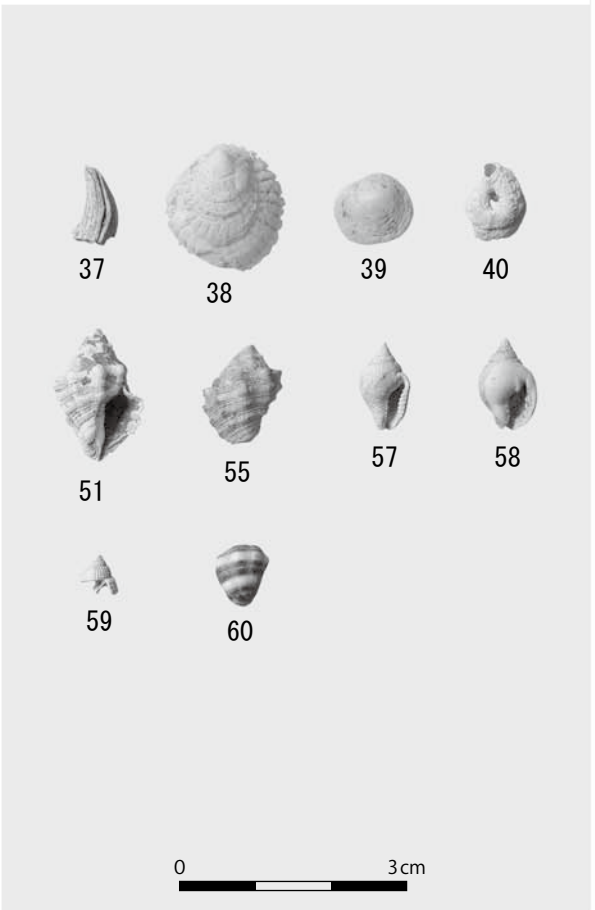


写真 44　貝類遺体　巻貝（２）

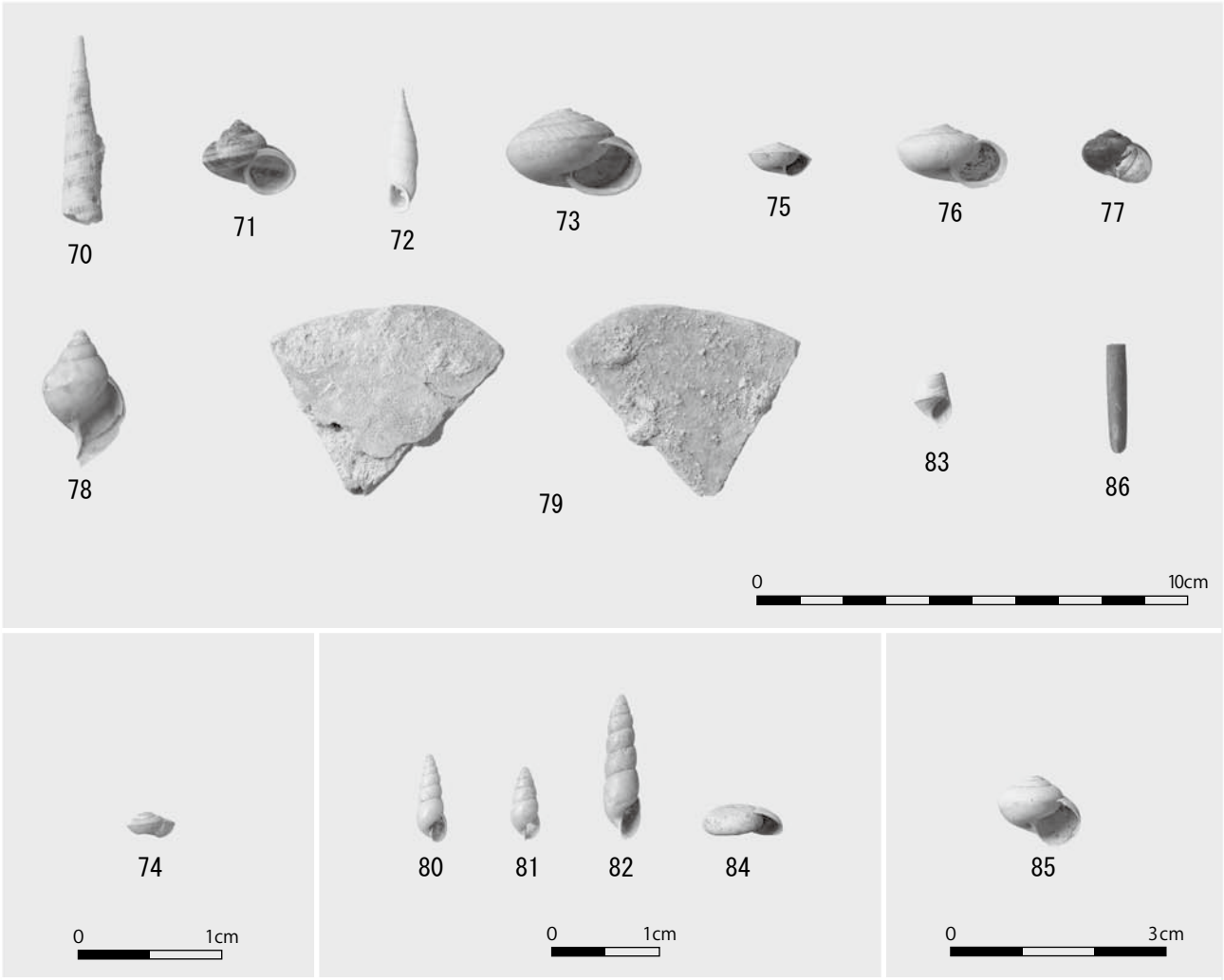


写真 45　貝類遺体　巻貝（３）

三島 格 . 1977. サンゴと貝―南島葬制覚書―. 南島考古 , (5): 1-4, 1 pls.

大城聖子 . 1988. 貝殻 . In 当真嗣一・上原 靜 (編), 首里城跡 , 歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査 , 沖縄県文化財調査報告書 , (88): 111,121-128.

島袋春美 . 1991. 貝類 . In 金武正紀・島袋春美 (編), 御細工所跡 , 那覇市文化財調査報告書 , (18): 123-126, pls. 59, 60.

上江洲 均 . 1973. 沖縄の民具 . 356 pp. 慶友社 , 東京 .

山本正昭 (編). 2007. 首里城跡 , 御内原西地区発掘調査報告書 , 沖縄県立埋蔵文化財発掘調査報告書 , (44): 1-212, 4 pls.

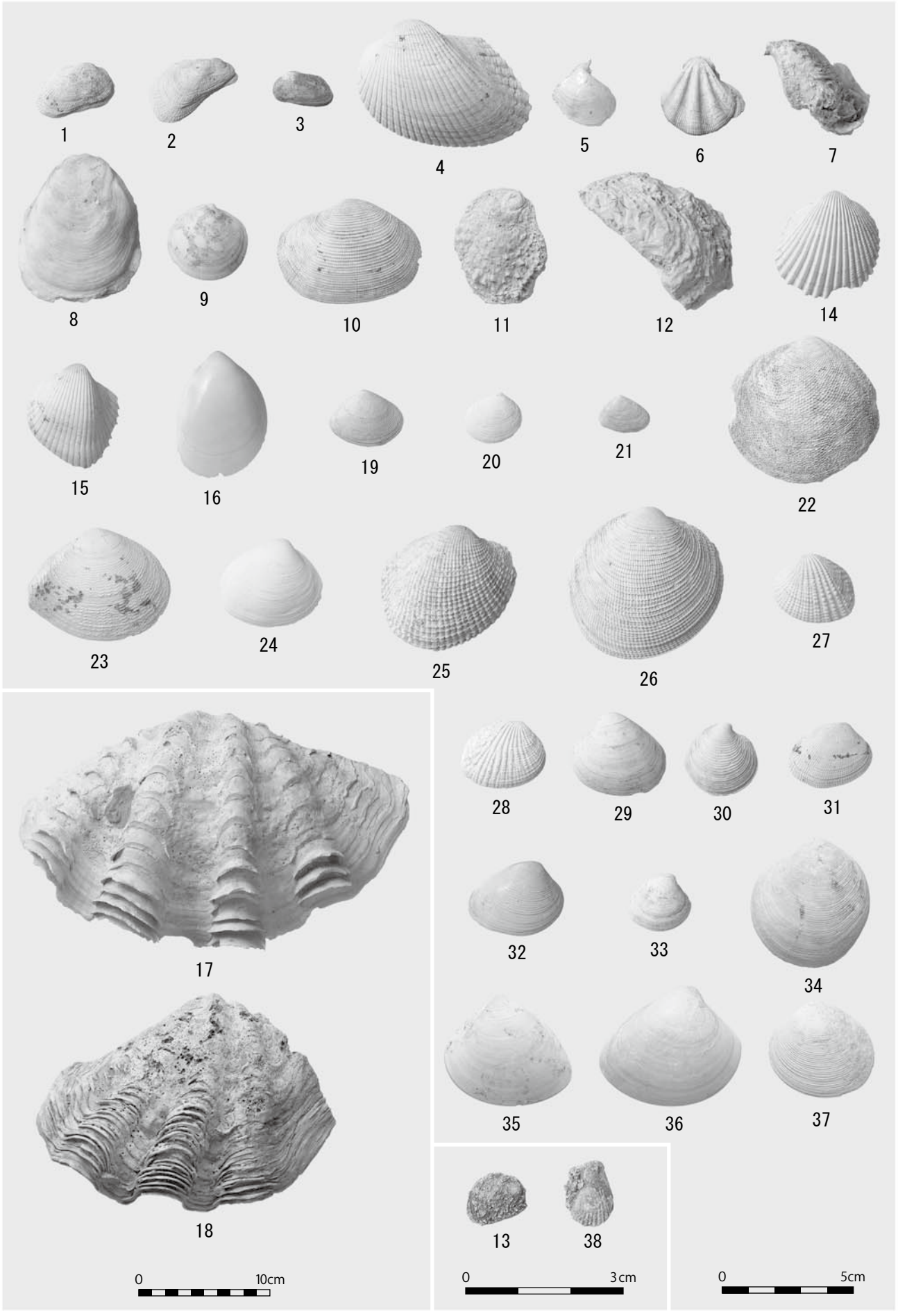


写真 46　貝類遺体　二枚貝

第111表　銭蔵東地区　巻貝類等の出土詳細（1）

層序				Ⅰ層																						Ⅰ´層					
グリッド・遺構・土層等				A-10	A-11	A-10・11	B-10	A・B-10	A・B-10～12	A・B-10・11	A・B-12・13	B・C-11・12	B-11	B-11・12	B-15	C-11	C-15	A-12	Y・Z-12	Y-11・12	Z-12	Ⅰ	Ⅰ層下部	不明	小計	石積1	石積2	石積2・3		石積3	小計
				Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	不明	不明	不明					ウラゴメ	ウラゴメ	Ⅰ	ウラゴメ	ウラゴメ	
写真	科名	種名	生息場所	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N
1	ヒザラガイ科	ヒザラガイの一種	Ⅰ-1-a																						0						0
2	ツタノハ科	ツタノハ	Ⅰ-3-a																						0						0
3	ユキノカサ科	リュウキュウウノアシ	Ⅰ-1-a							1 1a															1						0
4	スガシガイ科	*クズヤガイ	Ⅰ-4-a																						0						0
5	ニシキウズ科	オキナワイシダタミ	Ⅱ-1-b																						0						0
6	ニシキウズ科	ニシキウズ	Ⅰ-2-a																1 1f		1 1a				2						0
7	ニシキウズ科	ムラサキウズ	Ⅰ-3-a																1 1a						1						0
8	ニシキウズ科	ギンタカハマ	Ⅰ-4-a											1 1u,1f		1 1f									2						0
9	ニシキウズ科	サラサバテイラ	Ⅰ-4-a						6 6u,2f		1 3f		13 13u,37f	25 25u,2f		1 6f	1 2f	3 3u			6 6u			1 2f	57			2 2u			2
10	リュウテン科	ヤコウガイ	Ⅰ-4-a		1 1u,13f	2 2u	1 4f	1 1u	15 15u,10f		5 5u,43f		33 33u,187f	32 32u	1 8f	4 4u,26f	1 1u,2f	2 2u,2f	1 1u,6f		7 7u,17f			4 4u,14f	110			1 1u,1f	1 1u,1f		2
11	リュウテン科	ヤコウガイの蓋	Ⅰ-4-a	1 1a	5 2a,3u	1 1a	1 1u	1 1u	24 17a,7u,2f	1 1a	5 1a,4u,5f	2 1a,1u	34 19a,15u,6f	16 7a,9u	2 2u,2f	66 51a,15u,7f		14 8a,6u	2 1a,1u	1 1u	40 23a,17u,2f	1 1u	1 1a	8 3a,5u,3f	226		1 1a				1
12	リュウテン科	チョウセンサザエ	Ⅰ-3-a	2 2a	3 2a,1u		5 3a,2u,1f	3 2a,1u	7 3a,4u		1 1u,1f		28 2a,26u,20f		2 2u	4 1a,3u	1 1u	5 4a,1u	2 1a,1u,2f		15 6a,9u			6 2a,4u,2f	84			1 1u	2 2u	1 1a	4
13	リュウテン科	チョウセンサザエの蓋	Ⅰ-3-a				1 1a		2 2a		1 1a		9 9a	3 3a			1 1a	1 1a			5 5a		1 1a	2 2a	26						0
14	リュウテン科	コシダカサザエ	Ⅰ-2-a										1 1u												1						0
15	リュウテン科	カンギク	Ⅱ-1-b		1 1a		1 1a		1 1a	1 1a				2 2a				1 1u	1 1u		9 5a,4u,5f		1 1u		18						0
16	リュウテン科	カンギクの蓋	Ⅱ-1-b															3 3a			19 17a,2u				22						0
17	アマオブネ科	イシダタミアマオブネ	Ⅰ-0-a																						0						0
18	アマオブネ科	ヒメイシダタミアマオブネ	Ⅰ-0-a				1 1a																		1						0
19	アマオブネ科	マルアマオブネ	Ⅱ-1-b																		2 2a				2						0
20	アマオブネ科	アマオブネ	Ⅰ-1-b										1 1u												1						0
21	アマオブネ科	ニシキアマオブネ	Ⅰ-1-c				1 1a																		1						0
22	アマオブネ科	カノコガイ	Ⅰ-3-a	1 1a																					1						0
23	オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ-2-c										2 2u		1 1u			4 4u	3 3u		9 9u,3f				19						0
24	オニノツノガイ科	コゲツノブエ	Ⅲ-1-c																						0						0
25	オニノツノガイ科	カヤノミカニモリ	Ⅰ-1-b																2 2a		1 1a				3						0
26	オニノツノガイ科	イワカニモリ	Ⅰ-1-a					1 1u		1 1a			2 2u	1 1u					1 1u		6 1a,5u				12				1 1f		1
27	オニノツノガイ科	クワノミカニモリ	Ⅰ-1-a										3 1a,2u	1 1a					2 2u						6						0
28	ウミニナ科	リュウキュウウミニナ	Ⅱ-1-c				2 1a,1f														2 2u				4						0
29	ウミニナ科	イボウミニナ	Ⅲ-1-c																						0						0
30	フトヘナタリ科	フト(イトカケ)ヘナタリ	Ⅲ-0-d																						0						0
31	フトヘナタリ科	ヘナタリ	Ⅲ-1-c																						0						0
32	フトヘナタリ科	カワアイ	Ⅲ-1-c						1 1u																1						0
33	カワザンショウガイ科	*ウスイロヘソカドガイ	Ⅴ-10																		2 2a				2						0
34	スイショウガイ科	オハグロガイ	Ⅱ-2-c				2 2a																		2						0
35	スイショウガイ科	ネジマガキ	Ⅰ-2-c																						0	1 1u					1
36	スイショウガイ科	マガキガイ	Ⅰ-2-c			1 1f	1 1t			1 1a	1 1u		19 1a,18u	4 4u		6 6u		14 1a,13u	23 9a,14u,1f		44 7a,37u			1 1u	115				1 1t		1
37	スイショウガイ科	クモガイ	Ⅰ-2-c																		1 1f				1						0
38	スズメガイ科	*アツキクスズメ	Ⅰ-3-a																		1 1a				1						0
39	スズメガイ科	*カワチドリ	Ⅰ-3-a																						0						0
40	ムカデガイ科	*ヘビカイ類	Ⅰ-2-a																						0						0
41	タカラガイ科	ホソヤクシマダカラ	Ⅰ-2-a																						0						0
42	タカラガイ科	*マメシボリダカラ	Ⅱ-2-c						1 1a																1						0
43	タカラガイ科	ハナビラダカラ	Ⅰ-1-a		1 1a								1 1t		1 1a	1 1t									4						0
44	タカラガイ科	キイロダカラ	Ⅰ-1-a								2 1a,1u														2						0
45	タカラガイ科	ハナマルユキ	Ⅰ-3-a		1 1t				2 1a,1dL(t),1t		1 1t		3 3t			1 1u			1 1t					1 1t	10						0
46	タカラガイ科	ヤナギシボリダカラ	Ⅰ-2-a																						0						0
	タカラガイ科	不明																							0						0
47	オキニシ科	オキニシ	Ⅰ-3-a															1 1u							1						0
48	フジツガイ科	ミツカドボラ	Ⅰ-2-a																		1 1f				1						0
49	フジツガイ科	シオボラ	Ⅰ-1-a															1 1a							1						0
50	フジツガイ科	ホラガイ	Ⅰ-4-a										1 1u												1						0
51	アッキガイ科	レイシダマシ	Ⅰ-1-a																						0						0
52	アッキガイ科	ツノレイシ	Ⅰ-3-a															2 2a	1 1a		2 2a			1 1a	6						0
53	アッキガイ科	ツノテツレイシ	Ⅰ-3-a																1 1a						1						0
54	アッキガイ科	シラクモガイ	Ⅰ-3-a																						0						0
55	アッキガイ科	コイワニシ	Ⅱ-1-a																						0						0
56	オニコブシ科	コオニコブシ	Ⅰ-2-a															5 4a,1u							5						0
57	フトコロガイ科	*フトコロガイ	Ⅱ-2-d																						0						0
58	オリイレヨフバイ科	*カニノテムシロ	Ⅲ-1-c																						0						0
59	オリイレヨフバイ科	*アワムシロ	Ⅰ-2-c																						0						0
60	エゾバイ科	*ノシガイ	Ⅰ-1-a																						0						0
61	エゾバイ科	シマベッコウバイ	Ⅱ-1-c																						0						0
62	イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ-2-a		1 1a											1 1u									2						0
63	イトマキボラ科	ナガイトマキボラ	Ⅰ-2-a																						0						0
64	イトマキボラ科	ツノマタモドキ	Ⅰ-3-a															1 1f							1						0
65	イモガイ科	アンボンクロザメ	Ⅰ-2-c						1 1a																1						0
66	イモガイ科	マダライモ	Ⅰ-1-a		1 1a				1 1a												1 1a				3						0
67	イモガイ科	ヤセイモ	Ⅰ-2-a								1 1u										1 1a				2				1 1u		1
68	イモガイ科	イボシマイモ	Ⅰ-2-a																						0						0
69	イモガイ科	アジロイモ	Ⅱ-2-c																		1 1a				1						0
	イモガイ科	不明									1 1a					1 1u									2						0
70	タケノコガイ科	*キタケノコガイ	Ⅵ				1 1u																		1						0
71	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8			1 1a		1 1u	1 1a					3 1a,2u,1f				1 1u	1 1f		14 7a,7u,3f			1 1f	23						0
72	キセルガイ科	ツヤギセルガイ	Ⅴ-8		4 4a				1 1a									1 1f			1 1u			5 5a	12				1 1f		1
73	ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	Ⅴ-8																						0						0
74	オナジマイマイ科	*ウロコケマイマイ	Ⅴ-7																						0						0
75	オナジマイマイ科	イトマンマイマイ	Ⅴ-9										1 1u												1						0
76	オナジマイマイ科	パンダナマイマイ	Ⅴ-9																						0						0
77	オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ	Ⅴ-9																						0						0
78	アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ	Ⅴ-9						1 1a		1 1f		1 1f												3						0
79	カシパン科	カシパン類(化石)	Ⅵ-12																						0						0
80	オカクチキレガイ科	*オオオカチョウジガイ	Ⅴ-9																						0						0
81	オカクチキレガイ科	*オカチョウジガイ?	Ⅴ-8											6 6a											6						0
82	オカクチキレガイ科	*シリブトオカチョウジガイ?	Ⅴ-8																						0						0
83	カワニナ科	カワニナ	Ⅳ-5・6																						0						0
84	ヒラマキガイ科	*ヒラマキモドキ	Ⅳ-6																						0						0
85	ナンバンマイマイ科	オキナワヤマタカマイマイ	Ⅴ-8																						0						0
86	ナガウニ科	パイプウニ	Ⅰ-2-c																						0						0
	不明	不明														1 5f									1						0
合計				4	18	5	17	7	64	5	20	2	152	94	7	87	4	59	43	1	191	1	3	30	814	1	1	4	7	1	14

和名の前の＊は、非食用と考えられるもの　　Nは最少個体数、a：完形、u：殻頂、ｆ：破片、ｄＬ：背面のみ、ｔ：製品

第112表　銭蔵東地区　巻貝類等の出土詳細（２）

層序				Ⅱ層					Ⅲ層															Ⅲ´層			Ⅳ層	最少個体数合計（N）
グリッド・遺構・土層等				Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅱ	小計	B-11 石積1内										Ⅲ上	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2	小計	A-12	A-12	小計	Ⅳ	
									1	2	2(ﾌﾛ3)	2(ﾌﾛ5)	3	3(ﾌﾛ5)	3(ﾌﾛ3)	3貝	3貝(ﾌﾛ5)	3貝(ｳｷ)						Ⅱ層	Ⅲ			
写真	科名	種名	生息場所	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	
1	ヒザラガイ科	ヒザラガイの一種	Ⅰ-1-a					0									1 1v						1			0		1
2	ツタノハ科	ツタノハ	Ⅰ-3-a					0								1 1a	2 2a,2f						3			0		3
3	ユキノカサ科	リュウキュウウノアシ	Ⅰ-1-a			1 1a		1				1 1a					1 1a						2			0		4
4	スガシガイ科	*クズヤガイ	Ⅰ-4-a					0									1 1a						1			0		1
5	ニシキウズ科	オキナワイシダタミ	Ⅱ-1-b					0			1 1a		1 1a				1 1f						3			0		3
6	ニシキウズ科	ニシキウズ	Ⅰ-2-a					0			1 1f		1 1u	1 1f						1 1a		1 1a	5			0		7
7	ニシキウズ科	ムラサキウズ	Ⅰ-3-a					0					1 1a				1 2f						2			0		3
8	ニシキウズ科	ギンタカハマ	Ⅰ-4-a			1 1u		1		1 1f			2 2u			4 4a,2f	1 9f						8			0		11
9	ニシキウズ科	サラサバテイラ	Ⅰ-4-a		2 1a,1u	1 2f		3	19 19u,10f	38 38u,16f		2 2u,12f	91 91u,107f	3 3u,99f		122 122u,584f	5 1a,4u,438f		1 1u	4 4u,8f	3 3u,2f	5 2a,3u,2f	293	2 2u,3f		2		357
10	リュウテン科	ヤコウガイ	Ⅰ-4-a	1 1u	5 5u,10f	7 7u,35f		13	23 23u,19f	50 50u,115f		1 19f	148 143u,267f,5t	1 106f		425 425u,2229f	3 3u,962f		2 2u	13 12u,39f,1t	36 2a,34u,19f	15 1a,14u,4f	717	2 2u,3f		2	2 1u,2f	846
11	リュウテン科	ヤコウガイの蓋	Ⅰ-4-a		29 18a,11u,5f	57 18a,39u,13f	2 2u	88	22 11a,11u	47 33a,14u,2f			43 21a,22u,12f	2 2u,24f		41 26a,15u,29f	1 1u,33f		11 9a,2u,6f	33 17a,16u,5f	8 1a,7u,4f	5 5u	213	19 11a,8u,6f		19		547
12	リュウテン科	チョウセンサザエ	Ⅰ-3-a	2 2a	12 5a,7u,1f	11 1a,10u,9f		25	7 2a,5u	11 1a,10u,2f			73 9a,64u,21f	10 10u,55f		216 15a,201u,671f	70 70u,1024f		4 2a,2u	11 4a,7u,2f	6 3a,3u,1f	7 3a,4u	415	2 1a,1u		2		530
13	リュウテン科	チョウセンサザエの蓋	Ⅰ-3-a	1 1a	12 12a	15 15a	2 2a	30	4 4a	4 4a	1 1a		28 28a			57 57a	56 54a,2u,3f			7 7a		2 2a	159			0		215
14	リュウテン科	コシダカサザエ	Ⅰ-2-a					0									1 1u						1			0		2
15	リュウテン科	カンギク	Ⅱ-1-b		4 4a	2 2a		6				6 5a,1u,1f	70 56a,14u,1f	5 2a,3u,1f		2 2u,2f	47 37a,10u,4f			2 1a,1u		4 2a,2u	136	1 1a		1		161
16	リュウテン科	カンギクの蓋	Ⅱ-1-b			2 2a		2	3 3a			3 3a		2 2a		3 3a	24 24a,1f						35	2 2a		2		61
17	アマオブネ科	イシダタミアマオブネ	Ⅰ-0-a					0									1 1a						1			0		1
18	アマオブネ科	ヒメイシダタミアマオブネ	Ⅰ-0-a					0						1 1a									1			0		2
19	アマオブネ科	マルアマオブネ	Ⅱ-1-b					0					3 3a										3			0		5
20	アマオブネ科	アマオブネ	Ⅰ-1-b					0															0			0		1
21	アマオブネ科	ニシキアマオブネ	Ⅰ-1-c		1 1a			1															0			0		2
22	アマオブネ科	カノコガイ	Ⅰ-3-a					0															0			0		1
23	オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ-2-c			1 1u		1					1 1u	1 1f						1 2f			3			0	1 1u	24
24	オニノツノガイ科	コゲツノブエ	Ⅲ-1-c					0						1 1a									1			0		1
25	オニノツノガイ科	カヤノミカニモリ	Ⅰ-1-b					0					2 2a				6 4a,2u,1f						8	3 1a,2u		3		14
26	オニノツノガイ科	イワカニモリ	Ⅰ-1-a		1 1a	1 1a		2				4 1a,3u	33 7a,26u,17f	1 1u		6 3a,3u	20 5a,15u,4f		1 1a	1 1u	1 1u	1 1u	68			0		83
27	オニノツノガイ科	クワノミカニモリ	Ⅰ-1-a					0		1 1a	1 1u	9 9u	43 9a,34u,16f				15 9a,6u,1f		1 1f	1 1a		4 3a,1u	75			0		81
28	ウミニナ科	リュウキュウウミニナ	Ⅱ-1-c					0				3 3a,2f	6 3a,3u,2f			1 1a	27 17a,10u,2f						37			0		41
29	ウミニナ科	イボウミニナ	Ⅲ-1-c					0															0	1 1u		1		1
30	フトヘナタリ科	フト(ｲﾄｶｹ)ヘナタリ	Ⅲ-0-d					0			1 1u			2 2u			4 4u						7			0		7
31	フトヘナタリ科	ヘナタリ	Ⅲ-1-c					0					1 1f				1 1u			1 1f			3			0		3
32	フトヘナタリ科	カワアイ	Ⅲ-1-c		1 1f			1				1 3f			1 1u		2 1a,1u,1f						4			0		6
33	カワザンショウガイ科	*ウスイロヘソカドガイ	Ⅴ-10					0															0			0		2
34	スイショウガイ科	オハグロガイ	Ⅱ-2-c					0															0			0		2
35	スイショウガイ科	ネジマガキ	Ⅰ-2-c					0															0	1 1a		1		2
36	スイショウガイ科	マガキガイ	Ⅰ-2-c		3 1a,2u,1f	5 2a,3u,2f		8	3 2a,1u	3 2a,1u,1f			43 17a,24u,2t	2 1a,1u		4 1a,3u	3 2f,2t			5 1a,4u,1t	6 6u	4 3a,1t	73	12 1a,11u	2 2u	14		211
37	スイショウガイ科	クモガイ	Ⅰ-2-c					0															0			0		1
38	スズメガイ科	*アツキクスズメ	Ⅰ-3-a					0			2 2a		6 6a	1 1a		10 10a	55 52a,3u,1f						74			0		75
39	スズメガイ科	*カワチドリ	Ⅰ-3-a					0				1 1u					1 1a						2			0		2
40	ムカデガイ科	*ヘビカイ類	Ⅰ-2-a					0				1 1f					2 2u					1 1a	4			0		4
41	タカラガイ科	ホソヤクシマダカラ	Ⅰ-2-a					0															0			0		0
42	タカラガイ科	*マメシボリダカラ	Ⅱ-2-c					0															0			0		1
43	タカラガイ科	ハナビラダカラ	Ⅰ-1-a	1 1a	2 1a,1t	4 3a,4t		7				1 1dL(t)	3 1a,2dL(t),5t			1 1t	3 1dL(t),2t			2 1a,3t		1 3t	11			0		22
44	タカラガイ科	キイロダカラ	Ⅰ-1-a					0					1 1t										1			0		3
45	タカラガイ科	ハナマルユキ	Ⅰ-3-a		2 1dL(t),1t	6 2a,3dL(t),6t		8	1 1dL(t)	3 2dL(t),3t			18 1a,1f,17dL(t),5t	3 3dL(t),1t		2 1a,3t	10 10dL(t),1t			5 5dL(t),4t	2 1a,1t	2 1a,1f,1dL(t),1t	46	1 1t		1		65
46	タカラガイ科	ヤナギシボリダカラ	Ⅰ-2-a					0													1 1t		1			0		1
	タカラガイ科	不明				1 1dL(t)		1															0			0		1
47	オキニシ科	オキニシ	Ⅰ-3-a					0		1 1a													1			0		2
48	フジツガイ科	ミツカドボラ	Ⅰ-2-a					0															0			0		1
49	フジツガイ科	シオボラ	Ⅰ-1-a					0															0			0		1
50	フジツガイ科	ホラガイ	Ⅰ-4-a		1 1a	1 1f		2															0			0		3
51	アッキガイ科	レイシダマシ	Ⅰ-1-a					0					1 1a										1			0		1
52	アッキガイ科	ツノレイシ	Ⅰ-3-a					0															0			0		6
53	アッキガイ科	ツノテツレイシ	Ⅰ-3-a					0															0			0		1
54	アッキガイ科	シラクモガイ	Ⅰ-3-a			1 1f		1					2 1a,1u			1 1a,2f	1 3f						4			0		5
55	アッキガイ科	コイワニシ	Ⅱ-1-a					0			1 1u												1			0		1
56	オニコブシ科	コオニコブシ	Ⅰ-2-a					0				1 1f					1 1a			1 1f			3	3 3a		3		11
57	フトコロガイ科	*フトコロガイ	Ⅱ-2-d					0				2 1a,1u					10 10a,1f						12			0		12
58	オリイレヨフバイ科	*カニノテムシロ	Ⅲ-1-c					0					1 1a	1 1a			1 1a						3			0		3
59	オリイレヨフバイ科	*アワムシロ	Ⅰ-2-c					0									1 1u						1			0		1
60	エゾバイ科	*ノシガイ	Ⅰ-1-a					0							1 1a		1 1f						2			0		2
61	エゾバイ科	シマベッコウバイ	Ⅱ-1-c					0				1 1a	9 9a				1 1a,1f					1 1a	12			0		12
62	イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ-2-a					0														1 1a	1			0		3
63	イトマキボラ科	ナガイトマキボラ	Ⅰ-2-a					0															0			0		0
64	イトマキボラ科	ツノマタモドキ	Ⅰ-3-a			1 1a		1				1 1a											1			0		3
65	イモガイ科	アンボンクロザメ	Ⅰ-2-c					0		1 1f													1			0		2
66	イモガイ科	マダライモ	Ⅰ-1-a					0															0			0		3
67	イモガイ科	ヤセイモ	Ⅰ-2-a					0													1 1u		1			0		4
68	イモガイ科	イボシマイモ	Ⅰ-2-a			1 1a		1															0			0		1
69	イモガイ科	アジロイモ	Ⅱ-2-c					0															0			0		1
	イモガイ科	不明						0															0			0		2
70	タケノコガイ科	*キタケノコガイ	Ⅵ					0															0			0		1
71	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8		2 2a,3f	10 4a,6u,2f		12	8 7a,1u,1f	6 6a	7 1a,6u2f	20 13a,7u,7f	29 16a,13u,6f	25 13a,12u,2f	2 2u,4f	14 13a,6f	175 66a,109u,240f	9 9a		19 5a,14u,5f		2 1a,1u,1f	316			0		351
72	キセルガイ科	ツヤギセルガイ	Ⅴ-8		5 4a,1u	10 10a		15	1 1a	2 2a	1 1f	3 2a,2f	14 12a,2u,10f	1 1f		15 3a,1f	14 12a,2u,2f			1 2f	3 3a	7 7a	62			0		90
73	ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	Ⅴ-8					0					1 1a										1			0		1
74	オナジマイマイ科	*ウロコケマイマイ	Ⅴ-7					0		1 1a													1			0		1
75	オナジマイマイ科	イトマンマイマイ	Ⅴ-9					0										3 2a,1u					3	2 1a,2f		2		6
76	オナジマイマイ科	パンダナマイマイ	Ⅴ-9					0		1 1u				1 1a,1f			2 2a	9 9u					13			0		13
77	オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ	Ⅴ-9		1 1a			1								4 4a,1f	10 2a,8u						14			0		15
78	アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ	Ⅴ-9					0									1 1u						1			0		4
79	カシパン科	カシパン類（化石）	Ⅵ-12					0		1 1f													1			0		1
80	オカクチキレガイ科	*オオオカチョウジガイ	Ⅴ-9					0					6 6a										6			0		6
81	オカクチキレガイ科	*オカチョウジガイ？	Ⅴ-8					0	6 6a	4 4a			3 3a				1 1a						14			0		20
82	オカクチキレガイ科	*シリブトオカチョウジガイ？	Ⅴ-8					0									1 1u						1			0		1
83	カワニナ科	カワニナ	Ⅳ-5・6					0									1 1f						1			0		1
84	ヒラマキガイ科	*ヒラマキモドキ	Ⅳ-6					0									1 1a						1			0		1
85	ナンバンマイマイ科	オキナワヤマタカマイマイ	Ⅴ-8					0									13 10a,3u,1f						13			0		13
86	ナガウニ科	パイプウニ	Ⅰ-2-c		1 1f			1															0			0		1
	不明	不明						0															0			0		1
合計				5	84	139	4	232	97	175	16	61	684	64	4	929	600	21	20	108	67	63	2909	51	2	53	3	4025

和名の前の＊は、非食用と考えられるもの　　Nは最少個体数、a：完形、u：殻頂、f：破片、dL：背面のみ、t：製品

第 113 表　銭蔵東地区　二枚貝類等の出土詳細

層序				Ⅰ層																		Ⅰ´層				Ⅱ層				
グリッド・遺構・土層等				A-10	A-11	A-10・11	A・B-10	A・B-10～12	A・B-10・11	A・B-12・13	B-10	B-11	B-15	C-11	C-15	Z-12	Y・Z-12	A-12	Ⅰ層下部	不明	小計	石積2	石積2・3	石積3	小計	Ⅱ上	Ⅱ中	Ⅱ下	Ⅱ	小計
				Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	不明	不明	Ⅰ				ｳﾗｺﾞﾒ	ｳﾗｺﾞﾒ	ｳﾗｺﾞﾒ						
写真	科名	種名	生息場所	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N
1	フネガイ科	エガイ	Ⅰ-1-a																		0				0					0
2	フネガイ科	カリガネエガイ	Ⅱ-1-a													1 1a/1a					1				0					0
3	フネガイ科	クロミノエガイ	Ⅱ-2-b																		0				0					0
4	フネガイ科	リュウキュウサルボオ	Ⅱ-2-c													1 1t					1				0					0
5	ウグイスガイ科	ミドリアオリ	Ⅰ-1-a													1 0/1u					1				0					0
6	イタヤガイ科	キンチャクガイの一種（化石）	Ⅵ-12																		0				0			1 0/1a		1
7	ウミギク科	メンガイ類	Ⅰ-2-a				1 0/1u														1				0			1 1f		1
8	イタボガキ科	イタボガキ科の一種									1 1a/0										1				0					0
9	ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c					1 1a/1a					1 1u/0	3 1a,2u/0		3 1a,2u/3a	1 1a/0	5 3a/3a,2u		1 1a/0	15				0	1 0/1a	1 1u/0			2
10	カゴガイ科	カゴガイ	Ⅱ-2-c																		0				0		1 0/1a			1
11	キクザル科	ケイトウガイ？	Ⅰ-2-a																		0				0					0
12	キクザル科	シロザル	Ⅰ-4-a												1 1f						1				0					0
13	キクザル科	キクザル科の一種	Ⅵ													1 1a/0					1				0					0
14	ザルガイ科	リュウキュウザル	Ⅱ-2-c																		0				0					0
15	ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ-2-c							1 1u/0											1				0		1 1a/0			1
16	ザルガイ科	マクラザル	Ⅵ					1 0/1a													1				0					0
17	シャコガイ科	ヒレジャコ	Ⅰ-2-c			1 0/1a					3 3u/1u	1 0/1u,2f		1 1u/4f		1 0/1u		2 1a/1a,2f		1 0/1a	10		2 2u/0		2			3 1a,2u/4f	1 1u/0	4
18	シャコガイ科	オオシラナミ	Ⅰ-1-c									2 0/1a,2f	1 10f			1 0/1u					4				0					0
	シャコガイ科	シャコガイ科不明											1 4f							1 1f	2				0		1 1f	1 4f		2
19	チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c															2 2a/2a			2				0			1 0/1a,1f		1
20	チドリマスオ科	ナミノコマスオ	Ⅰ-1-c																		0				0					0
21	フジノハナガイ科	リュウキュウナミノコ	Ⅱ-1-c																		0				0					0
22	ニッコウガイ科	サメザラ	Ⅰ-2-c																		0				0					0
23	ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	Ⅰ-2-a																		0				0					0
24	シジミ科	シレナシジミ	Ⅲ-0-c									1 1f				1 0/1a					2				0		1 0/1a,1f			1
25	マルスダレガイ科	アラヌノメガイ	Ⅰ-2-a													2 1a,1u/1a,2f					2				0					0
26	マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ-2-c					1 0/1a						1 0/1a,1f		5 2a/4a,1u,1f		4 4a/4a	1 0/1a	1 1a/0	13				0					0
27	マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	1 1a/1a	5 5a/5a			8 5a/7a,1u	1 1a/1a	4 2a,2u/2u	5 5a/3a,1u	13 9a/12a,1u,1f	3 2a,1u/1a,1u,2f	8 3a,2u/5a,3u		61 51a,10u/49a,12u,29f	11 8a,3u/8a,1f	38 19a,4u/27a,11u,10f		2 2a/2a	160			2 2a/2a	2	4 2a/4a	8 8a/5a,1u	27 24a,3u/19a,1u,3f		39
28	マルスダレガイ科	ホソスジイナミ	Ⅱ-1-c														1 0/1u	2 1a,1u/1a			3				0		1 1a/0	1 1a/0		2
29	マルスダレガイ科	ユウカゲハマグリ	Ⅱ-2-c																		0				0					0
30	マルスダレガイ科	オイノカガミ	Ⅰ-3-c															1 0/1a			1				0					0
31	マルスダレガイ科	ヒメアサリ	Ⅱ-1-c														1 1a/1a				1				0					0
32	マルスダレガイ科	スダレハマグリ	Ⅱ-1-c													3 2a/3a					3				0		1 0/1a			1
33	マルスダレガイ科	イオウハマグリ	Ⅱ-1-c																		0				0					0
34	マルスダレガイ科	ダテオキシジミ	Ⅲ-1-c				1 0/1u	1 1/0				1 0/1a		1 0/1u		3 2a/3a		2 2a/0		1 1a/0	10				0					0
35	マルスダレガイ科	トュドュマリハマグリ	Ⅱ-2-c																		0	1 1a/0			1					0
36	マルスダレガイ科	ハマグリ類似種	Ⅱ-2-c				1 0/1u	2 2u/1u,7f	1 1/0	1 0/1u,1f		4 1a,3u/1u		3 0/1a,2u		24 13a,11u/14a,7u,6f	1 1u/1a	5 1u/4a,1u	1 1a/0	2 2a/1u,1f	45	1 1a/0			1	1 1u/0	7 5a,2u/1a	5 4a,1u/1a,1u		13
37	マルスダレガイ科	タイワンシラオ	Ⅱ-2-c																		0				0					0
38	イタヤガイ科	ヒオウギ類（化石）	Ⅵ-12																		0				0					0
合　計				1	5	1	3	14	2	6	9	22	6	17	1	108	15	61	2	9	282	2	2	2	6	6	22	40	1	69

Nは最少個体数、a：完形、u：殻頂、 f ：破片、 t ：製品

層序				Ⅲ層													Ⅲ´層	最少個体数合計（N）
グリッド・遺構・土層等				石積1内		B-11 石積1内		B-11 石積1内				Ⅲ上	Ⅲ下	Ⅲ下1	Ⅲ下2	小計	A-12	
				1	2	2（ﾌﾛ3）	2（ﾌﾛ5）	3	3（ﾌﾛ5）	3貝	3貝（ﾌﾛ5）						Ⅱ	
写真	科名	種名	生息場所	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	N	
1	フネガイ科	エガイ	Ⅰ-1-a		1 0/1a			2 0/2a			1 1f			1 0/1a		5		5
2	フネガイ科	カリガネエガイ	Ⅱ-1-a													0		1
3	フネガイ科	クロミノエガイ	Ⅱ-2-b				1 0/1a	1 1a/0								2		2
4	フネガイ科	リュウキュウサルボオ	Ⅱ-2-c													0	1 0/1a	2
5	ウグイスガイ科	ミドリアオリ	Ⅰ-1-a					3 0/2a,1u	1 1u/1a	1 1a/0	4 4u/1u,3f					9		10
6	イタヤガイ科	キンチャクガイの一種（化石）	Ⅵ-12				1 1a/0									1		2
7	ウミギク科	メンガイ類	Ⅰ-2-a							1 0/1u						1		3
8	イタボガキ科	イタボガキ科の一種														0		1
9	ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c		1 0/1u			15 9a,5u/11a,4u		1 0/1a	1 1a/0				1 1u/0	19	5 1a,3u/4a,1u,1f	41
10	カゴガイ科	カゴガイ	Ⅱ-2-c					1 1a/0								1		2
11	キクザル科	ケイトウガイ？	Ⅰ-2-a													0		0
12	キクザル科	シロザル	Ⅰ-4-a													0		1
13	キクザル科	キクザル科の一種	Ⅵ													0		1
14	ザルガイ科	リュウキュウザル	Ⅱ-2-c		1 0/1a			1 0/1a			1 1f					3		3
15	ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ-2-c					4 0/3a,1u			1 0/1a			1 0/1u		6		8
16	ザルガイ科	マクラザル	Ⅵ													0		1
17	シャコガイ科	ヒレジャコ	Ⅰ-2-c		2 1u/2a,2f			1 4f				2 2a/0	2 0/2u,1f	1 0/1u	1 0/1u	9		25
18	シャコガイ科	オオシラナミ	Ⅰ-1-c					1 1u/0							1 0/1a	2		6
	シャコガイ科	シャコガイ科不明						1 2f		1 2f			6 0/6u			8		12
19	チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c										1 1a/0			1	1 0/1a	5
20	チドリマスオ科	ナミノコマスオ	Ⅰ-1-c													0	1 1a/1a	1
21	フジノハナガイ科	リュウキュウナミノコ	Ⅱ-1-c					1 1a/0								1		1
22	ニッコウガイ科	サメザラ	Ⅰ-2-c					1 1a/0								1		1
23	ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	Ⅰ-2-a					1 1a/0								1		1
24	シジミ科	シレナシジミ	Ⅲ-0-c		1 1a/1a			1 1f					1 0/1u			3		6
25	マルスダレガイ科	アラヌノメガイ	Ⅰ-2-a		1 1a/0			1 0/1a								2		4
26	マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ-2-c					1 0/1a								1	5 2a,1u/4a,1u,2f	19
27	マルスダレガイ科	アラスジケマン	Ⅲ-1-c	9 6a,3u/8a,1f	18 17a,1u/12a,3f	1 0/1a	8 3a,5u/2a,3u,14f	620 557a,63u/513a,68u,24f	12 10a,2u/6a,1u,13f	19 13a,6u/16a,1f	83 40a,42u/45a,38u,118f	2 2a/1a	15 13a,2u/12a,3u,1f	4 3a/4a,6f	76 56a,8u/67a,9u,2f	867	53 29a,5u/47a,6u,8f	1121
28	マルスダレガイ科	ホソスジイナミ	Ⅱ-1-c					7 7a/6a			1 0/1a				1 0/1a	9		14
29	マルスダレガイ科	ユウカゲハマグリ	Ⅱ-2-c					1 1a/0								1		1
30	マルスダレガイ科	オイノカガミ	Ⅰ-3-c					2 2a/1a								2		3
31	マルスダレガイ科	ヒメアサリ	Ⅱ-1-c													0		1
32	マルスダレガイ科	スダレハマグリ	Ⅱ-1-c		1 1u/0			12 4a,1u/10a,2u							1 0/1a	14		18
33	マルスダレガイ科	イオウハマグリ	Ⅱ-1-c					3 2a/3a			1 0/1a					4		4
34	マルスダレガイ科	ダテオキシジミ	Ⅲ-1-c					1 1a/1u		1 1a/1a	1 1u/5f				2 2a/0	5		15
35	マルスダレガイ科	トュドュマリハマグリ	Ⅱ-2-c													0		1
36	マルスダレガイ科	ハマグリ類似種	Ⅱ-2-c	2 2a/2u	5 1a,1u/4a,1u		1 1u/1a,1f	65 36a,29u/34a,18u,14f	1 0/1a	3 1u/2a,1u,1f	11 4a,7u/3a,8u,16f		4 1a,3u/1a,3u	4 1a,1u/4a	3 1u/1a,2u	99	2 2a/1a,1u	160
37	マルスダレガイ科	タイワンシラオ	Ⅱ-2-c					1 1a/0								1		1
38	イタヤガイ科	ヒオウギ類（化石）	Ⅵ-12								1 2f					1		1
合　計				11	31	1	11	748	14	27	106	4	29	11	86	1079	68	1504

Nは最少個体数、a：完形、u：殻頂、 f ：破片、 t ：製品

第５章　総括

これまで、首里城跡銭蔵東地区の調査成果について、層序・遺構・遺物などを個別に説明してきたわけであるが、総括として時期ごとにその様相・特徴をまとめることとする。また、今回の調査では、16 世紀前半と考えられる層序でヤコウガイ等の含真珠層貝殻破片と仮称したものが多く出土しており、これは螺鈿製作時に生じた破片と考えており、重要な成果と考えられる。そこで、この資料について、第４章第２・３節における西野望、黒住耐二の成果も触れながら、漆芸家の方々のご意見や既往の螺鈿研究も参照し、首里城跡における螺鈿製作に関する若干の予察も行うこととしたい。

第１節　銭蔵東地区のまとめ

銭蔵東地区で検出された遺構は、遺物の年代観や古図等の資料を用いて、５つの画期に分けてその変遷が追える。ここでは、その画期ごとの遺構・遺物の様相を整理することで、今回の発掘調査で得られた銭蔵東地区のまとめとしたい。なお、遺物の年代観の詳細については、特に断らない限り第３章第４節を参照していただきたい。

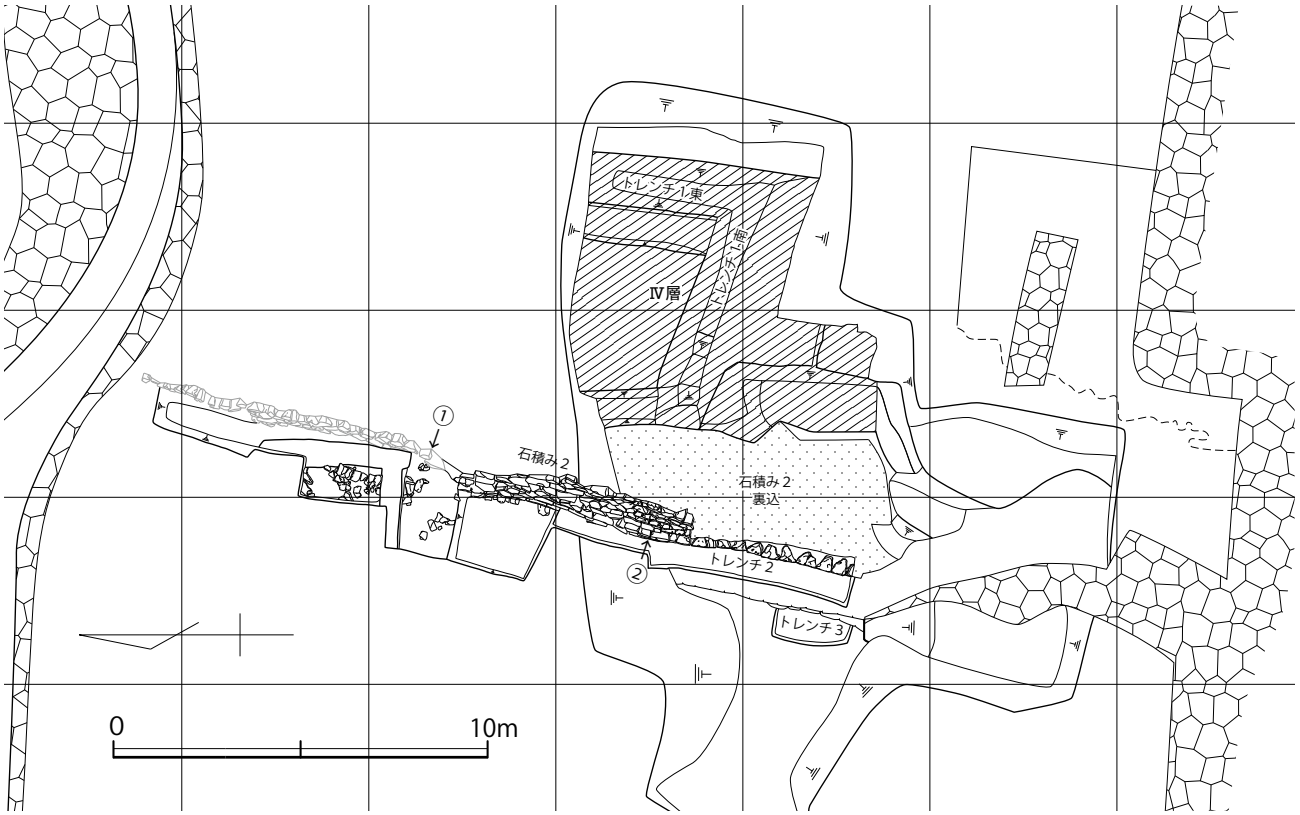
Ⅰ期　（15 世紀前半～ 15 世紀後半　Ⅳ層造成、石積み２の構築）（第 86 図）

Ⅰ期は、Ⅳ層による造成と石積み２の構築が相当する。ただ、青磁Ⅱ類、白磁Ⅴ－４・Ⅶ－ｂ類などの 13 世紀後半以前の遺物が見られるが、明確な層序・遺構では捉えられていない。明確な最も古い層序は、東側のトレンチ１南で確認できたクチャを母材とした造成土のⅣ層で、青磁Ⅳ・Ⅴ類の出土から上限は 14 世紀、下限は 15 世紀前半と考えられる。このⅣ層に石積２の裏込めが載っており（**第 16 図**）、この構築のための造成土であった可能性も考えられる。一方、石積２の根石の外側に堆積しているⅢ´層は、青磁Ⅴ類、青花明Ⅰ－１類が見られ、15 世紀中葉も含む 15 世紀後半の遺物が主体である。つまり、石積み２は 15 世紀後半には確実に存在していたと考えられる。そこで、Ⅳ層を石積２の造成土とすると、その堆積年代は下限の 15 世紀前半としておくのが妥当と考えた。

さて、石積み２は西面しており、その内側は裏込めとⅣ層で支えるという、首里城の内郭・外郭など沖縄のグスクに特徴的な両面積みの城壁とは異なった形態である。Ａ－ 12 からＺ－ 12 までの長さ約 12 ｍ分は根石が続いており、Ⅲ´層も堆積している。一方その北側約８ｍ分は根石が東へ約１ｍずれており、また根石も南側が整然な切石風であるのに対し、北側では不整形なものとなっている（**第 86 図内①**）。この部分については後述するが後代に増築もしくは改築した可能性を考えたい。ちなみに、石積２の高さは、下端がトレンチ２で 112.0 m、上端は最も高く捉えられるならばトレンチ１南の西端までは裏込めが続いているので 115.5 mであるので、現状では 3.5 mはあったものと思われる。ただ、トレンチ２付近では根石は２段はほぼ垂直に積まれるが、その上は約 30㎝東側にずれていることから後代に積み直した可能性がある（**第 86 図内②**）。

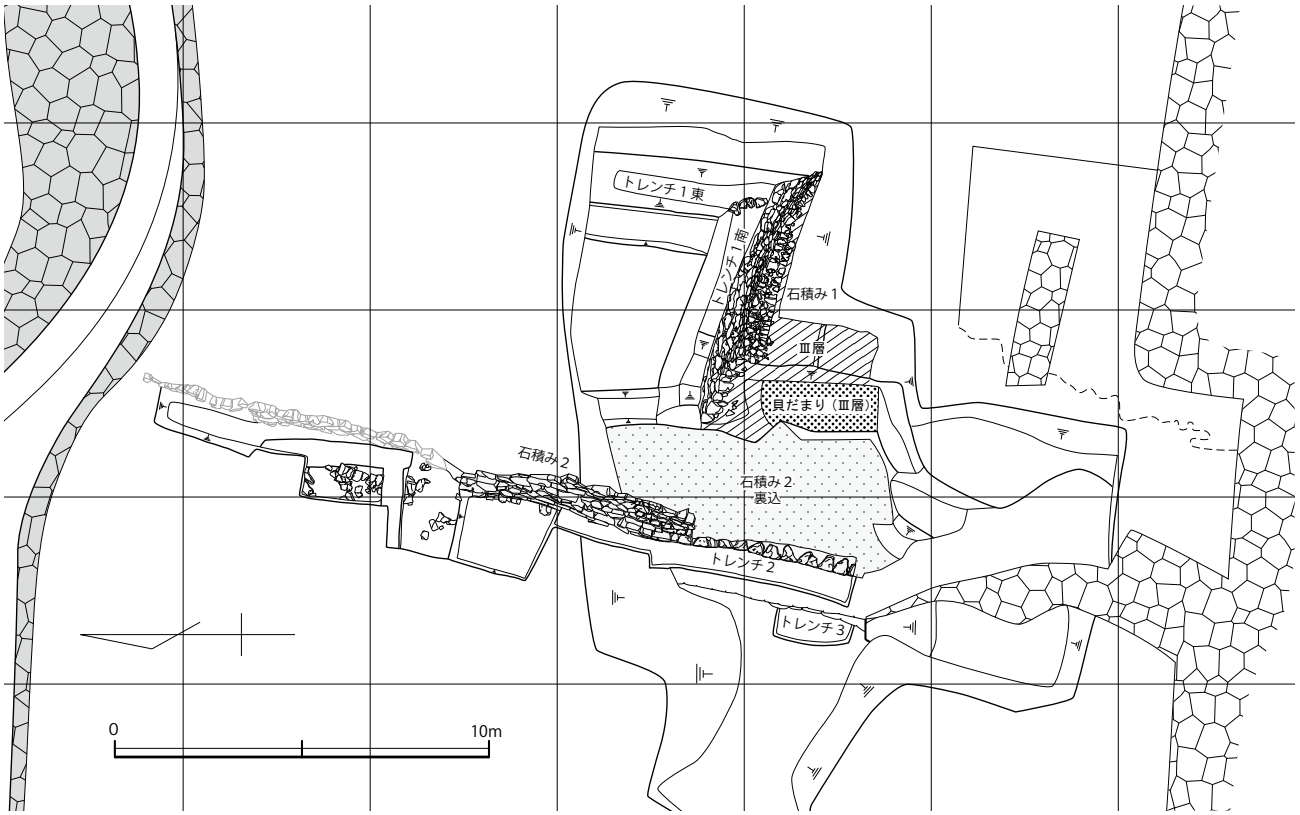
なお、根石より 20㎝より高い標高 112.5 m付近には、青花や褐釉などの大きい破片や、大形のヒレジャコなどがみられており、このレベルが一つの生活面だった可能性も考えられる。また、ヒレジャコについては、石面に置かれたようにも見え偶然入り込んだとは考えにくい。これについては、黒住が指摘する礎石としての利用や、何らかの精神的な意図を指摘している。

また、Ⅳ層ではほとんど出土しなかったが、Ⅲ´層で獣魚骨と貝類が若干出土している。魚骨が７割、貝類ではアラスジケマンガイが５割、マガキガイとヤコウガイが１割である。後述するⅢ層とは異なった傾向に思えるが、土壌水洗は行っていないことを考えると、明確な違いであるかは判別できない。



Ⅰ期（15 世紀前半～ 15 世紀後半）

第 86 図　銭蔵東地区の遺構変遷図（１）



Ⅱ期（16 世紀前半～ 17 世紀前半）

第 87 図　銭蔵東地区の遺構変遷図（２）

Ⅱ期（16 世紀前半～ 17 世紀前半　貝だまり・Ⅲ層の堆積と石積み１の構築）（第 87 図）

Ⅱ期は、貝だまりを含むⅢ層の堆積と、その後に石積１が構築されることが相当する。詳述すると、トレンチ１南側において、石積２の裏込め上面にはⅢ下層が堆積しており、これらの上に石積み１が構築されている。石積み１は高さ約２m、北面するもので、裏込めは上方に小礫を充填させるが全体としては内側に堆積する１～３層によって支えられる構造で、つまり規模は異なるが石積み２と同様の構造と考えられる（**第 12 図**）。この内の３層の下面にはヤコウガイ等含真珠層貝殻破片が多く集中する貝だまりが見られる。石積１の構築後には、この根石から２段ほどの高さでⅢ上層が北側へ下るように堆積している（**第 11 図**）。

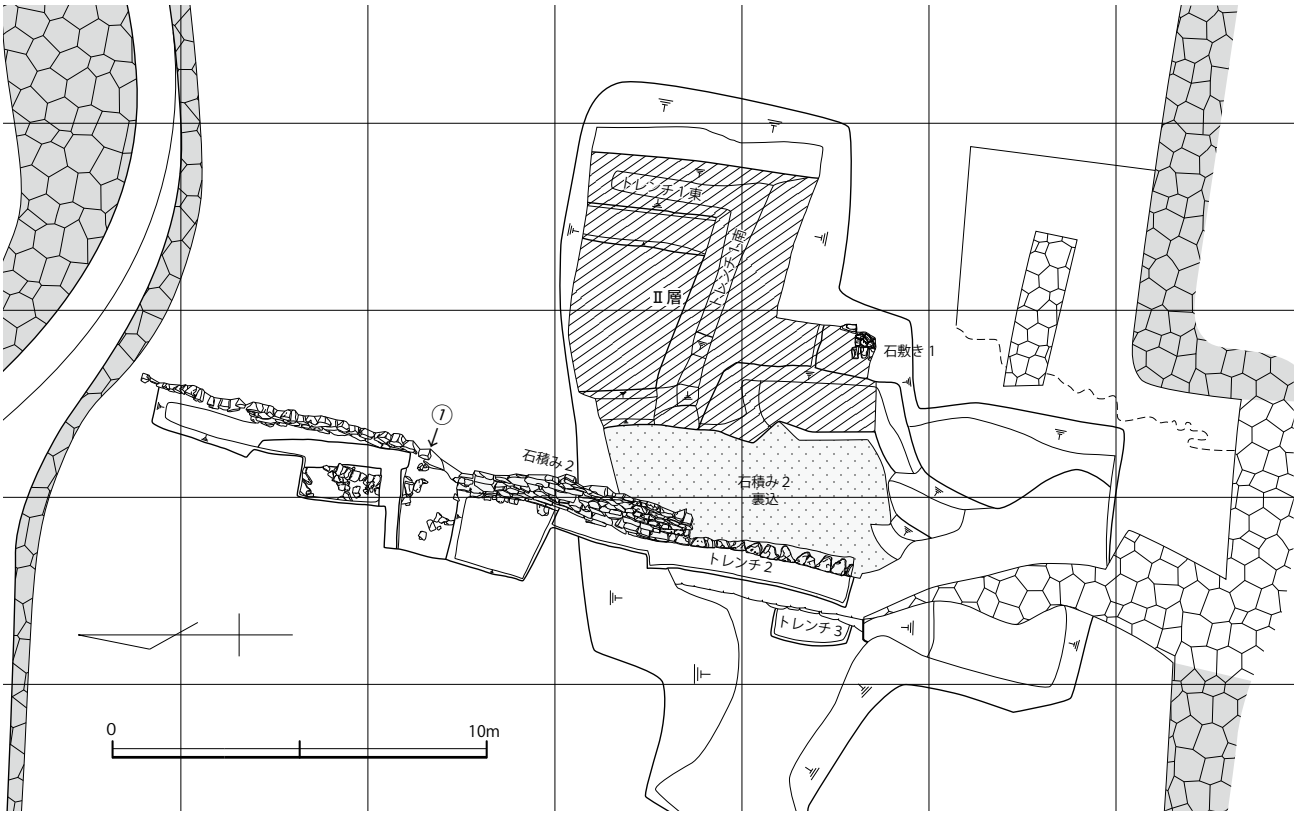
現場調査時においては、Ⅲ下層と貝だまりは石積み１構築以前の遺物包含層で、石積み１～３の構築に関わる造成土である石積み１内１～２層、構築後のⅢ上層では、時期的な違いが見られるものと考えた。しかし、陶磁器類の検討では、青磁Ⅴ類や明青花Ⅱ類がどの層にも出土しており、15 世紀中葉を含む後半から 16 世紀前半の時期幅があるとしか評価せざる得なかった。少なくとも、石積み１の構築は、16 世紀前半以降で後述するⅡ層の 17 世紀後半までの間とは考えられる。石積み１構築後すぐに埋めるという可能性もあるが、その前段階という意味を込めて 17 世紀前半までという見解を提示しておきたい。なお、Ⅲ下層や貝だまりは、上層より炭化物が含まれ土色もより黒色で顕著な差があると考えたが、大局的に見ると南側から北側へ下がっていく堆積状況であり、一連の造成土という見方もありうる。ただ、非常に多くの遺物が見られることは、石積み１内１～２層とは異なっているので、この段階で遺物の短期的で集中的な廃棄があったことは確かと言える。

また、石積み２との関係であるが、石積み１の西端が今回検出したた時点で終わりなのかが不明である。石積み２の裏込めが確認されている最高所の部分と、石積み１の根石のレベルが揃っているので、この両者が何らかの関わり合いがあった可能性もあるのではないかと思われる（**第 16 図**）。いずれにせよ、石積み１がそれより古く構築されたと考えられる石積み２の面石より西に延びていたことは考えにくい。

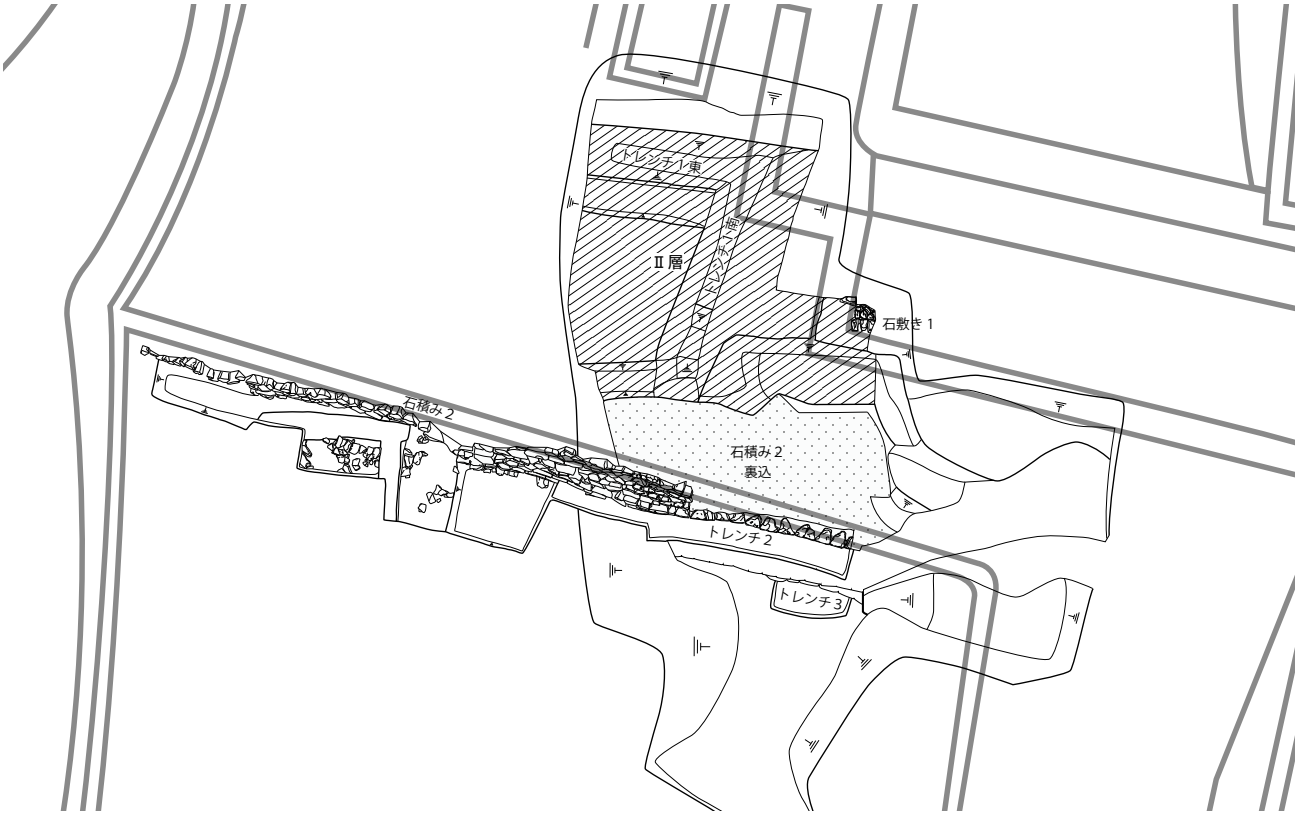
さて、貝だまりを含むⅢ層の遺物であるが、後述するが螺鈿製作に関連する含真珠層貝殻破片の他、漆膜、金属製品やるつぼ､未成骨製品が出土していることに注意したい。首里城跡ではこれまでも漆膜が出土しているが、小片であるので具体的に同様な製品であったかは不明である。しかし、螺鈿と共に出土してることから漆器等の破片、もしくはその製作に関連するものであったことも想定される。鍍金された金属製品の他に、溶着した銭貨や鉄滓、銅滓、そしてるつぼについては金滴が付着している。このような状況は、炉跡や鋳型が出土した西のアザナ出土地区や（上原 2009)、淑順門西地区出土の合金（沖埋文 2013 ａ）など、金を含めた多様多種の金属製品が城内で加工生産されていたことはより確実となった。また、骨製品の未成品もⅢ層からも一定量見られており、16 世紀ごろの首里城内には様々な工房があった可能性が指摘できる。

また、Ⅲ層では、獣魚骨が土壌水洗を行い５㎜フルイで採取されたものも含むピックアップ資料約 5,000 点と非常に多く出土しており、特に石積み１内３層とⅢ下層・貝だまりで多い。魚骨が９割で、獣骨ではイノシシ／ブタ、ニワトリの他ウシ・ウマが見られる。それと合わせて、貝類はヤコウガイ等含真珠層貝殻と、アラスジケマンがほぼ５割ずつで、他にはオキナワヤマタニシが１割近く見られる。つまり、螺鈿・金属の加工関連遺物以外にも､食糧残滓も多く廃棄されたということである。Ⅲ下層でヒトの歯が１点出土していることも興味深い。これは、17 ～ 25 歳程度とされる齲歯（虫歯）が見られるものである。このような歯も陶磁器類や貝殻・獣魚骨などと同様に廃棄されたのであろう。

さらに、Ⅲ層の出土遺物では、塼 431 点、明朝系瓦 510 点が出土しており、混入とは考えにくい。瓦当は、最古のタイプと考えられる軒丸瓦Ａ－１－Ⅰ類、軒平瓦ａ－１－Ⅰ類が出土している。これらと同様に湧田古窯で生産されたと考えられる植木鉢等の瓦質土器も、16 点と本地区で最も多く出土している。これらは 16 世紀後半以降の生産と考えられているが（上原 2011・2013)、今後詳細な検討を行うことにより、その出現年代を明確にしていくことが求められよう。



Ⅲ期（17 世紀後半～明治期）



Ⅲ期遺構と横内図の重ね図

（石積み２を横内図に描かれる外郭を区切る東西の石垣に重ね合わせた）

第 88 図　銭蔵東地区の遺構変遷図（３）

Ⅲ期（17 世紀後半～明治期　Ⅱ層造成と石敷き１の構築）　（第 88 図）

Ⅲ期は、Ⅱ層の造成と石敷き１の構築が相当する。トレンチ１東・南においてⅡ層が堆積しているが、これが石積み１全体を覆ってしまい、現地表とほとんど変わらないレベルまで造成される。このⅡ層は、大きく３つに分けられ、上層は比較的平坦だが、中下層は南から流れ込むような堆積となっている。また、後者はマージ起源と思われる褐色土と、そうではない黄褐色土が互層で見られる（**第 11 図**）。

このような状況から、長期間に堆積したものではなく、短期間で形成されたかなり大規模な造成土と考えている。その時期としては、遺物の主体は 15 世紀後半～ 16 世紀の陶磁器が多くみられるが、17 世紀後半の本土産陶磁器が一定量見られることから、この年代と考えている。ただ、明青花Ⅲ類や青磁Ⅶ類など 16 世紀後半と考えられる陶磁器も見られるので、造成に時間差があることも想定はされるが、現場では前述したように分層できても、標高が高い南側から流し込むように短期間で形成された印象を受けた。一方、獣魚骨や貝類も出土しており、造成土には食糧残滓も含まれており、これらはマージ起源ではないと思われる褐色～黄褐色土から集中して見られる。Ⅱ層全体が短期間の造成土と考えると、食糧残滓等は城内の別場所にあったものが最終的にこちらに集められたという見方もできる。御内原北地区では、これら食糧残滓や糞石等が廃棄された土坑（方言で「シーリ」）も確認されているので、一つの見解として提示しておきたい（沖埋文 2010）。

石敷き１はⅡ層を掘り込む形で造られており、その上面には 18 世紀～戦前ごろとするⅠ´層が堆積する。明治期以前とされる横内図と重ねあわせると、右掖門から北に延びる通路もしくは石垣のコーナー部分にあたる可能性もある（**第 88 図下**）。しかし、他にこの図と合致するような遺構はないので、一つの可能性としておきたい。ただ、Ⅰ´層に覆われている事から、石敷き１は明治期まであった可能性は妥当と思われる。

石積み２については、先述したようにＺ－ 12 付近の根石の位置や積み方が異なっており、当初からここまで延びていたことについては留保していた（**第 88 図内①**）。ただ、横内図の東西方向の城壁には、前述した石敷き１と共に合致している。つまり、石敷き１が当該期と考えるならば、今回確認した石積み２の北側もこの時期には構築されていたのであろう。しかし、横内図では、この石垣が南側でさらに西へ屈曲しているが、この範囲に当たるＢ・Ｃ－ 14・15 ではクチャ層まで撹乱されており、明確にはできなかった。

なお、出土遺物ではⅠ層からであるが、本地区のすぐ東側の銭蔵地区で多く確認されているスナイドル銃の薬莢が出土している。銭蔵の建物が炊事場や浴場とされたということも合わせ、熊本鎮台分遣隊によってこの一帯は訓練等にも使われていた可能性が考えられる（沖埋文 2015）。

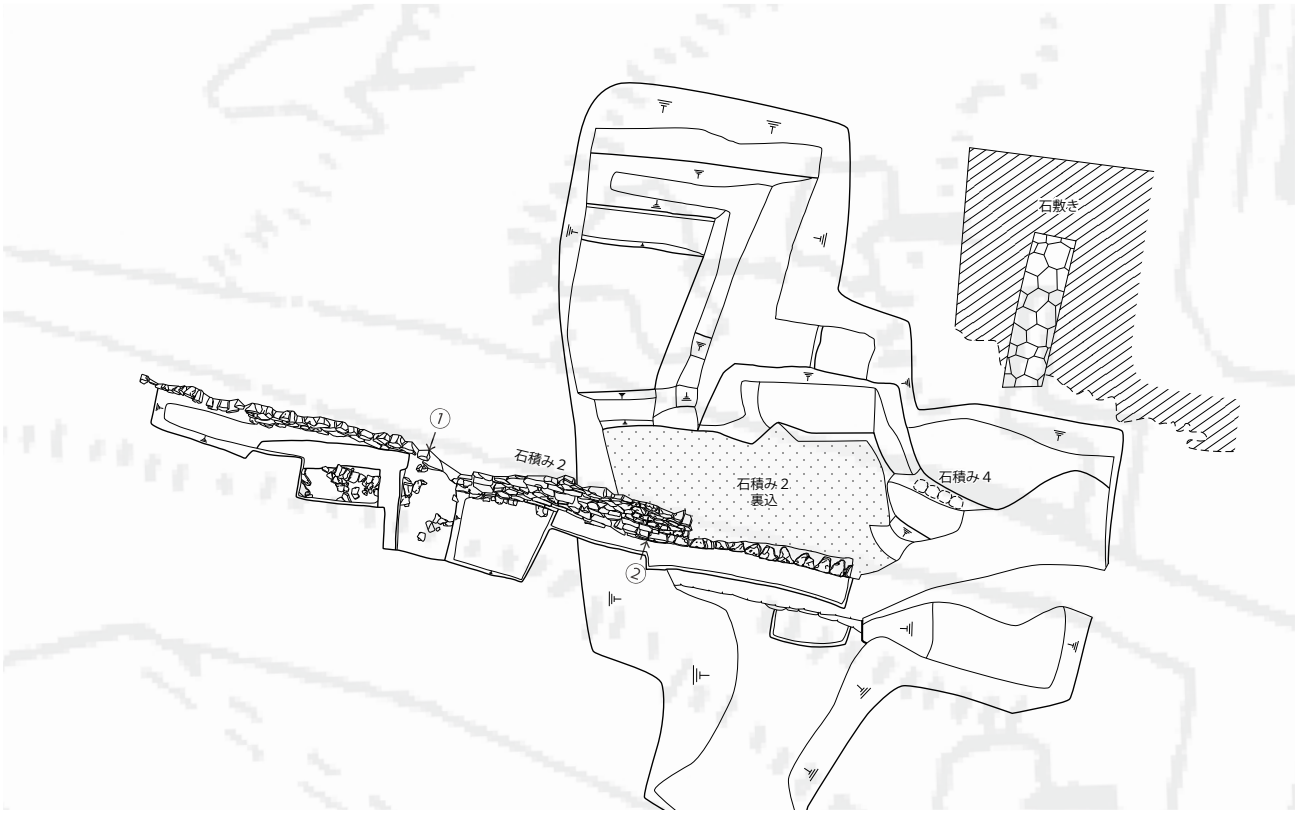
Ⅳ期（大正期～昭和初期、石積み４の構築か？）（第 89 図）

Ⅳ期は、石積み４がⅠ´層掘削時に確認されているので、この時期に相当する可能性もある。しかし、第３章第３節で記したように、記録前に崩落してしまったこともあり、正確な状況は分からない。昭和初期の阪谷図で想定される時期で、石積み２については、検出された部分は阪谷図でも合致しているので、この時期にあったものの可能性が高い。ただ、阪谷図ではこの石積２に当たる東西の城壁が、内郭から外郭まで取りついているのだが、今回の調査では既に復元された石垣があり、明確にはできなかった。また、石積み２のずれ（**第 89 図①・②**）から、改修の可能性を述べてきたが、後述するようにそれが本期にあった可能性もある。

西面する南北方向の石積み４であるが、石積み２と並行しているので、東西方向の城壁の上方であったことも考えられる。ただ、先述のように明確には分からない。なお、調査区外であるが、右掖門地区において確認された南北方向の両面積みの石積みとその周囲の石敷きも阪谷図と合致している。

Ⅴ期（戦後、石積み３の構築）（第 90 図）

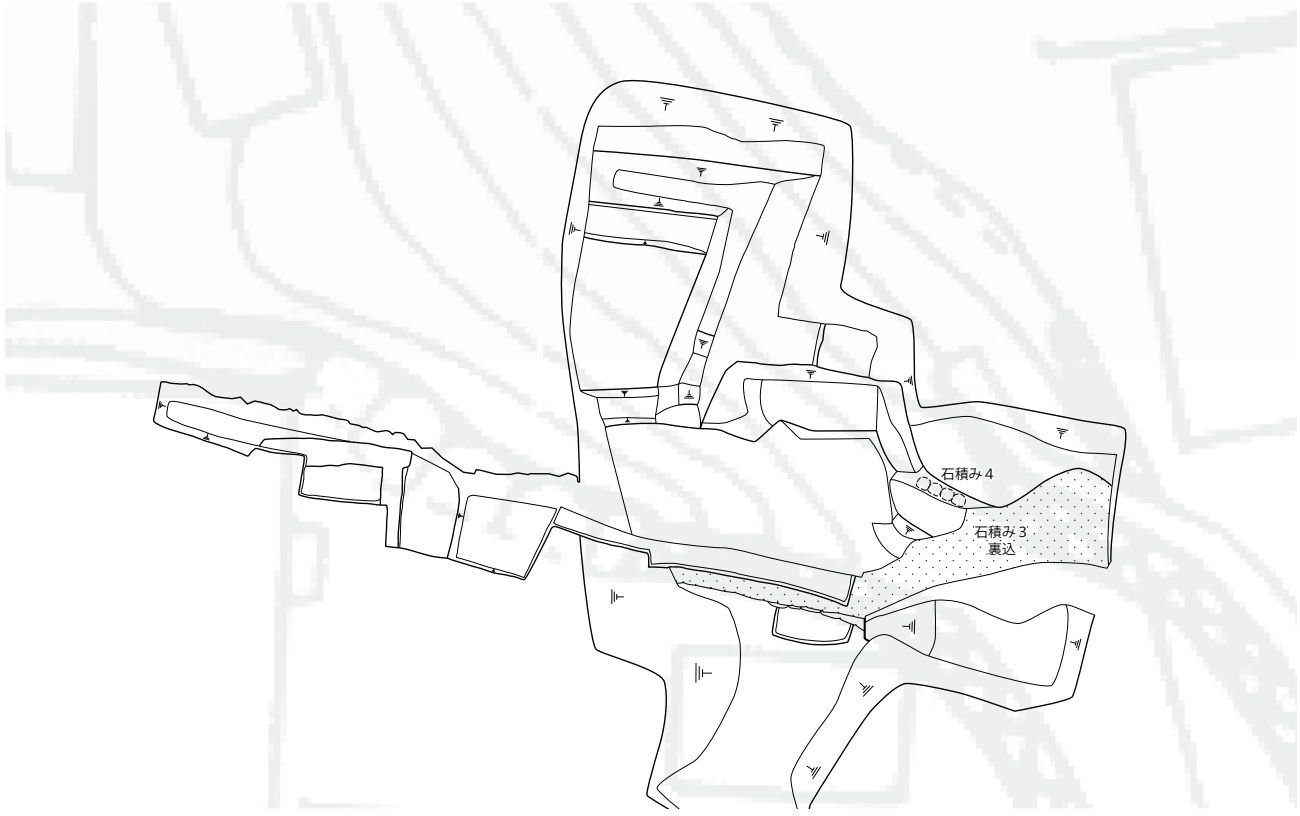
Ⅴ期は、石積み３の構築が相当する。調査前にあった石積み３（**写真 18 －１**）は、トレンチ２により石積み２の前面に小礫を充填した裏込めを設け、その１ｍ西にほぼ同じ方向で造られていたことが分かった。また、石積み３の前面に掘ったトレンチ３により公園整備時の造成土で覆われていることと、クチャ層の直上に造られて



Ⅳ期（大正期から昭和初期）

（Ⅳ期遺構と阪谷図を重ね合わせた。現存する右掖門北の石垣を基準とした。）

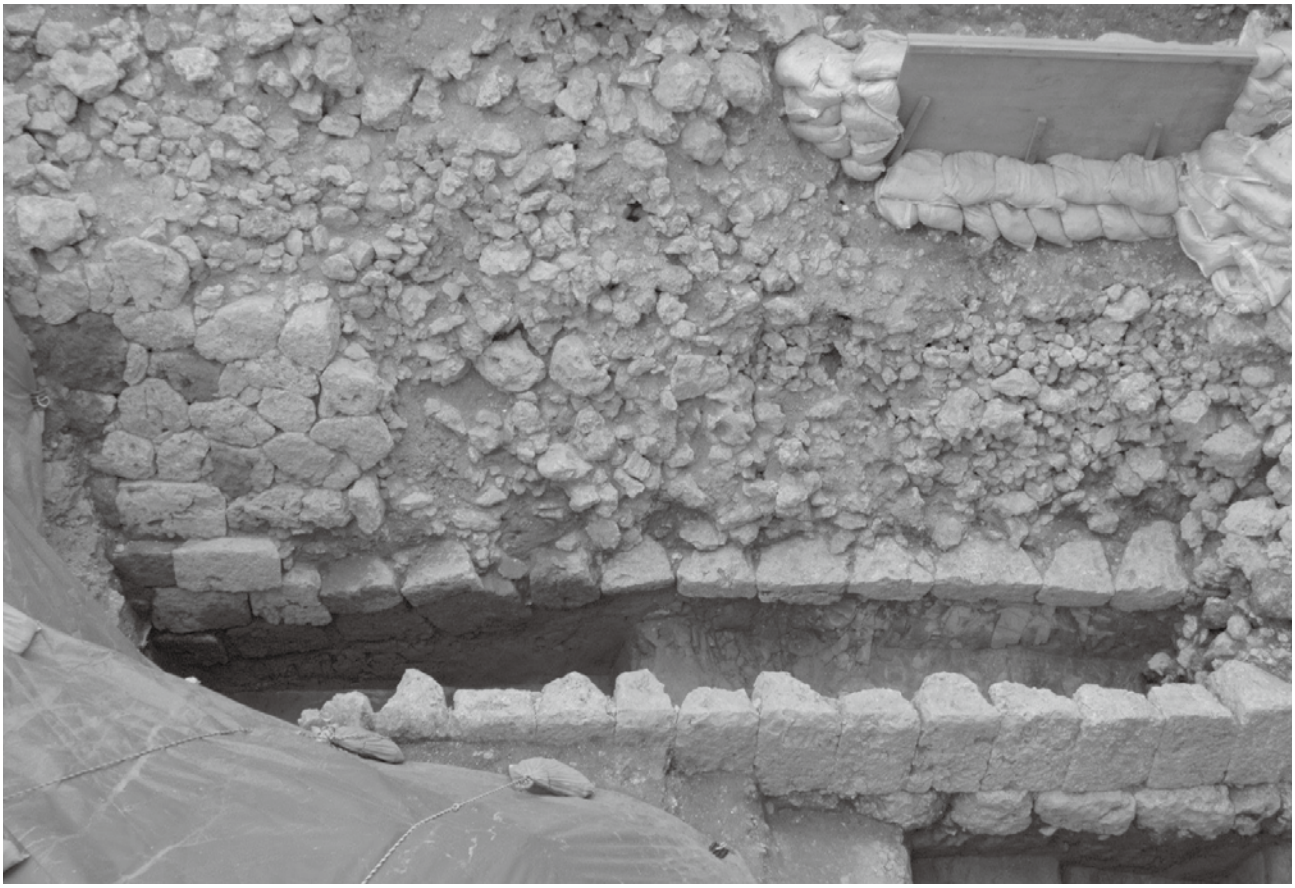
第 89 図　銭蔵東地区の遺構変遷図（４）



Ⅴ期（戦後）

（Ⅴ期遺構と旧琉球大学校舎配置図を重ね合わせた。石積み３を琉球大学時の石垣の北端と合わせた。）

第 90 図　銭蔵東地区の遺構変遷図（５）



１．石積み２（左側の根石が下方にゆがんでいる）

２．神谷厚昭氏の現地指導

３．トレンチ３の断層

４．石積み２の断層

写真 47　銭蔵東地区で見られたクチャ層の断層

いた。琉球大学校舎配置図で表現されている石垣の位置とも大きな矛盾はない。なお、先述した石積４はⅣ期の可能性としたが、琉球大学時の東側にある石垣との可能性もあるかもしれない。

石積み２のゆがみ及びクチャ層の断層

これまで石積み２については改築の可能性を指摘しているが、Ｚ－ 12 付近において石の並びが約１ｍ東側にずれることと、根石と上方が石の積み方が違っていることから想定している（**第 86・88・89 図内①**）。また、Ａ－ 12 付近では石積み２の根石が下方に落ち込むように歪んでおり（**第 86・89 図内②**）、その基盤のクチャ層に断層が２か所見られる（**写真 47**）。一方、前述した琉球大学時代である石積み３の前面に設定したトレンチ３では、その下方のクチャ層に同様の断層が見られるが、石積み３には歪みが落込みは見られない。これらの様相から、この断層は石積み２より新しく、石積み３、つまり戦後よりは古いものと考えた。沖縄の地質を専門とする神谷厚昭による現地指導を依頼した結果、この断層の原因は降雨・地震などが考えられるが、石積み２の歪みがこれらに由来するかまでは判断材料が少なく断定できないとのことであった。

参考までに首里城周辺の過去の地震に関する情報を以下に記しておく（琉球大学理学部中村衛研究室ＨＰ http://seis.sci.u-ryukyu.ac.jp）。

1665 年（寛文５） 3月　　地震甚だ大にして山岳尽く響く（球陽）。
1760 年（宝暦 10）5月 15 日　首里城周辺で倒壊（球陽）。
1768 年（明和５） 7月 22 日　王城、寺、王陵、極楽陵の石垣崩れる（球陽）。推定 7.5 ～ 8.0 マグニチュード？。
1882 年（明治 15）　　那覇・首里で石垣が崩れる。
1911 年（明治 44）6月 15 日　那覇で石垣崩壊 496 か所。死者１名。負傷者 11 名。全壊１。8.0 マグニチュード。
1926 年（昭和元） 6月 29 日　那覇で震度４、石垣崩壊多数。7.5 マグニチュード。

以上、今回の調査区においては、概ね 15 世紀から本格的な利用がなされ、後世の改修が考えられても戦前まで見られた石積み２がこの時期に構築されたこと、16 世紀代の螺鈿や金属・骨製品の加工に関連する遺物が多く廃棄されたことなどが特徴的な成果である。今回は、近接する銭蔵地区などの成果について十分盛り込むことはできなかった。今後、首里所跡のこれまでの膨大な調査成果を時期ごとに整理し、多様な分野の研究も参照することにより、さらに具体的な首里城の歴史を提示していきたい。

第２節 含真珠層貝殻破片から見た首里城跡における螺鈿製作の予察

今回の銭蔵東地区の調査において、15 世紀・中葉後半～ 16 世紀後半の時間幅がある石積み１内３層及びその最下部の貝だまりを中心に、ヤコウガイ・チョウセンサザエ・サラサバテイラ・ギンダカハマの真珠層を含む貝殻の破片が大量に出土した（**第 78 表**）。これらは合計 9,057 点であるが、完形が 88 点と１％にも満たない。そのため、当方らも螺鈿製作で不要になった貝殻を廃棄した場所であろうとは考えていたが、その具体的な様相を提示できる資料とまでは考えていなかった。以下、これらの検討経過や、その概要を整理し、現時点で首里城における螺鈿製作についてどのようなことが考えられるかを予察としてまとめるものとする。

１）含真珠層貝殻の指導・検討の経過

今回の調査では、貝だまりを含むⅢ層で大量の獣魚骨やヤコウガイを含む貝類が見られたので、現場で土壌を水洗しフルイにより小片も回収した。そして資料整理時に、獣魚骨は動物考古学を専門とする樋泉岳二と、貝類を専門とする黒住耐二に、主に食糧残滓としての検討を依頼することにした。それに付け加えて、ヤコウガイがほとんど破片となって出土していることから、螺鈿等の利用が想定されたので、南西諸島における弥生～平安並行時代のヤコウガイ貝殻の欠損状況よりその利用について研究を行っている西野（藤江）望にも調査指導を依頼することにした。

加工小片と定型的な破片の発見　ヤコウガイ等の通常サイズの破片については、ある程度想定していたように徹底的に利用されていることが両者によって追認していただいた。しかしながら、黒住に水洗で得られた微小貝類を見ていただいた際に、1㎝前後のヤコウガイ等と思われた微小片に注目され、これは自然で起こり得ないことを指摘された。当方らも、（770）などのように明らかにしずく形を呈したものは気づいていたが、黒住が指摘したのは（795）のような1㎝以下の微小片であった。これらの小片は、真珠層をもった破片が多かったので、取り上げや洗浄時に割れたものであろうと思い込み、最低個体数を把握するには微小であるので、作業の都合上からもこれ以上分類は必要ないと決めつけていたものであった。

だが、黒住の指摘を受けて、緊張感を持って改めて検討したところ、これらは厚さ1㎜前後で薄いとは言え自然に割れたとは言い難い強度があるものも多く、縁辺が研磨されたように見えた。その後、顕微鏡観察を行うと、縁辺に線条痕が確認された（**写真 26 － 4**）。そこで、これらの小片を徹底的に見直すことで、最終的に 5,272 点もの加工された小片を確認することが出来たのである（**第 79 表**）。ちなみに、黒住により最初に発見されたのは、ギンダカハマと推定された（795）である。

一方、西野の指導では、これまで分析された事例よりもヤコウガイの破片が徹底的で定型的な工程で利用され、また大半は成貝であることや、体層片の大きさにまとまりがあることなどを指摘いただいた。今回、黒住や西野の調査指導を受けなければ、含真珠層貝殻の評価はもっと表面的に留まったことに違いがない。

漆芸からの視点　黒住・西野の指導を受けた後、西野と同様に先駆的かつ広い視野でヤコウガイの考古学研究を行っている木下尚子にも指導していただく機会が得られた。その段階では、この加工小片もより抽出することができ、特に形態に注目し、円形や長方形に加工していることは気付いていた。しかし、これらには、その多くは真珠層がないものや（776 ～ 778）、不透明な稜柱層となっているものがあり（783 ～ 785）、真珠層以外の部分も加工されていることに気付かされた。そして、ヤコウガイだけでなくチョウセンサザエ、サラサバテイラ、ギンダカハマの３種についても、同様に加工されていることが認識できた。このような状況は、螺鈿が用いられた漆芸の視点からの検討も必要で、琉球漆器の歴史を考えるうえで非常に重要であることをご教示いただいた。

木下の指導を踏まえて、漆芸家としては前田考允・宮城清・土井奈々子ら、漆器の研究者としては宮里正子や當山綾乃らにも見ていただいた。その見解として、これらの小片は螺鈿製作時に生じたものであり、厚さからは３㎜前後のもので「厚貝」とされるもので、その加工は研磨による「摺貝」という技法が使われているということが共通見解であった。ただ、「薄貝」とされる1㎜以下の破片もあることから、部分的に「煮貝」という貝を長時間煮て、層状に剥離させていく方法も併用されたのではという意見もあった。宮里や當山の御厚意により浦添市美術館所蔵の宮城により製作された「煮貝」によるヤコウガイの破片を実見したが、透けるぐらいに薄くそれが非常に均一であるので、今回の資料ではここまでのものはないと感じられた。そして、真珠層が残っていない破片も、現在の製作者の立場からすると、様々に利用ができるという意見を戴き、例えば細長い破片は枝などの表現や区画線とするとのことであった。

今回の資料は、16 世紀には首里城内で螺鈿製作が行われたことになり、これまで 17 世紀初頭には『球陽』等の史料で確認されていた「貝摺奉行」に相当する部署が（外間 1983）、既に当該期には存在していたと考えられる重要なものであるという評価を受けることになった。

２）含真珠層貝殻破片の特徴

以上のように、様々な方々の指導を受けて、コウガイ等含真珠層貝殻破片が、首里城内で螺鈿製作が行われたこと示す資料であり、その製作工程の一端が窺えるものであることが認識できた。具体的な報告や加工痕に関する観察は第３章第４節９、ヤコウガイの破片から利用された貝殻のサイズや製作工程については西野による第４章第２節、出土貝類の全体的な傾向やサラサバテイラの加工状況については黒住による第４章第３節に、各々掲載している。それらを踏まえ、本資料について最も多いヤコウガイを中心にまとめたい。

含真珠層貝殻の貝種の割合　今回出土した貝種は先述してきたとおり、以下の４種になるわけであるが、**第 78・79 表**に基づき、貝殻と加工小片の数量をまとめておきたい。なお、加工小片の数量については、これら以外の微小貝も含んでいる未分類の貝小片が約 10kg見られる。今回抽出できた加工小片は約３kgなので、まだ増えるのは確実である（**第 80 表**）。

	ヤコウガイ	チョウセンサザエ	サラサバテイラ	ギンダカハマ	合　計
貝　殻　数　（比率）	5,004(55.2)	2,342(25.8)	1,689(18.6)	22(0.4)	9,057 点
加工小片数　（比率）	4,447(84.3)	655(12.4)	137(2.6)	3(0.7)	5,272 点
加工小片重量（比率）	2,878(96.0)	60(2.0)	58(1.9)	2(0.1)	2,998 ｇ

ヤコウガイ、チョウセンサザエ、サラサバテイラ、ギンダカハマの順番であることは、貝殻の数、加工小片の数・重量でも変わらない。ヤコウガイは、貝殻では過半数程度であるが、加工小片では８割以上となっているが、１個体の大きさが他よりも大きいからかもしれない。一方、サラサバテイラは貝殻に比べると、加工小片の割合が他よりも低い。螺鈿として利用されることが少なかったのか、もしくは逆に多く使われたため、ここには少ないと考えるべきなのか。今回出土したものが、使えないものであったのか、それとも使わなかっただけなのか。このように数字や割合の意味については、慎重に検討する必要があろう。

ヤコウガイの体層片が主に利用されたのか　ヤコウガイの貝殻（加工小片を除く）は、5,004 点を数え、その内完形は３点にしか過ぎず、貝だまりでは全く出土していない。そのうち、体層片が 3,467 点で最も多い（**第 98 表**）。西野によるとこの体層片は、長辺が 40 ～ 80㎜、短辺が 20 ～ 60㎜に集中する傾向があり、ヤコウガイはまず方５㎝程度の平板に加工されるという古代の螺鈿利用とほぼ合致するとしている（**第 105 表**）。そして、これらの破片には、表皮が残存するもの 2,632 点、真珠層が露出するもの 835 点となっている（**第 81 表**）。後者（820 ～ 825）を見ると、表皮がほとんどなくなっており、これらは意識的に剥されたものと考えられる。これらから考えると、まず体層片を割り取ってから、さらに表皮を剝ぎ取るという工程が考えられる。ちなみに、この４㎝以上の体層片には、真珠層のみの加工小片③類はなかった。ただ、真珠層だけでは非常に薄く脆くて層状に剥離する傾向があるので、調査・洗浄時だけでなく既に埋没過程で崩れてしまう可能性も考えられる。

この体層片から、螺鈿に使用する破片に加工していくことを思い描いてみる。加工小片は 1.5㎝以下のものが９割以上であるので、逆にこれより大きなものが利用されたとも想定される。つまり、大きく平坦な真珠層を持った破片が要求されるのではなかろうか。そこで、表皮もしくは稜柱層が残る加工小片を顕微鏡で観察すると、平面に線条痕が確認されるので、研磨して薄くしていったことが想定される（**写真 20・21**）。一方、真珠層のみの加工小片には平面に線条痕が見られないものもある（**写真 23**）。真珠層が層状に剥離している破片（778）もあることから、真珠層を露出するまでは研磨を行い、その後剥離させるという工程が考えられる（**写真 24**）。（773）は、縁辺部に穿孔した痕跡が明瞭に残っており、錐のような道具で円形のものを剝ぎ取ったもしくは、大形で平坦な破片をとるためのミシン目のように連続した孔を設けるような工程が想定される（**写真 26 －２・３**）。第３章第４節９でも触れたが、首里城と密接な関連が想定される那覇港に位置する那覇市渡地村跡でも、螺塔のみのや、真珠層が露出した破片が多く出土しており、同様の製作工程があったものと思われる（那覇市 2012）。

螺鈿として使われなかった破片　西野分類Ⅲ類となる体層がない破片は、1,512 点である（**第 98 表**）。Ⅲ類は、Ⅲ－①類（螺塔のみ）、Ⅲ－②類（体層だけがないもの）、Ⅲ－③類（軸唇・臍盤のみ）に分けられる。これらは非常に硬質な部分であり、真珠層を抽出することが困難であったため残されたものと思われる。ただ、体層を使うだけであれば、Ⅲ－②類の段階でも終わってもいいはずであるが、122 点と最も少ない。一方、Ⅲ－①類が 698 点、Ⅲ－③類が 692 点とほぼ同数であり、これらはⅢ－②類の軸部を横に折り取られたような印象を受ける。実際に接合したものはないが、西野が指摘するように螺塔部分とその下半を割りとる工程が想定される。

西野によると、多くのヤコウガイ貝匙が作られたと思われる弥生～平安並行期にはⅢ－②類は多くみられるが、

Ⅲ－①･③類はあまり見られないとのことである。ただ、首里城でも隣接する銭蔵地区では貝匙が出土しており、当然螺鈿以外の製品も想定されるべきであろう（沖埋文 2015）。

他３種の利用　ヤコウガイ以外の３種についても、加工小片や破片形態から螺鈿の利用が想定されたことが、今回の大きな成果の一つである。まず､チョウセンサザエであるが､加工小片を除く 2,342 点のうち､完形 77 点と、ヤコウガイよりほどではないが、通常よりも圧倒的に破片が多い（**第 82 表**）。チョウセンサザエは細かな筋状の羅肋が特徴であるため、表皮が残る加工小片については認識しやすい。真珠層のみが残る③類は他貝種よりも厚さが薄い印象があり（797）、螺肋を利用した長方形のもの（798・799）などが挙げられる。

サラサバテイラの貝殻は、加工小片を除く 1,689 点のうち、完形４点と非常に少ない（**第 78 表**）。殻頂片では体層の最下段を残っているものがなく、それを意識的に剥がし取られたものが多くみられた（826 ～ 828）。一方、体層は最下部のものが多いが、全体には残っていない（829 ～ 831）。この点については、黒住がクサビを用いて外したのではないかと考察している（**写真 42**）。加工小片では､三角形や台形状のものが見られた（800･801）。サラサバテイラの真珠層は赤みが強いのが特徴的であるが、全て抽出できたとまでは言い切れない。

ギンダカハマは、完形４点、破片 18 点と少なく、加工小片も先述のように、黒住によって抽出されたものを含む３点のみである。真珠層は他のものよりも白いのが特徴であるが、ヤコウガイとの区別は最も難しい。

３）まとめ

以上、貝だまりを中心に出土した含真珠層貝殻破片は、完形が少なく破片が大多数であることに加え、それが定型的であること、さらに１㎝前後の研磨等の加工痕がある加工小片の存在から、主に螺鈿製作に関連する残滓として評価したい。この貝だまりの年代は、陶磁器類からは 15 世紀後半～ 16 世紀前半の年代幅で考えられる。ただ、既往の研究では 16 世紀後半以降とされる明朝系瓦・塼も含むことからもう少し下る可能性もあるが、16 世紀代を中心とすることは確かであろう。それでは、この螺鈿がどのような製品に利用されたのであろうか。既往の研究を参考にして、首里城における螺鈿製作についての若干の予察を試みる。

琉球漆器を総括している徳川義宣によると、16 世紀ごろの螺鈿は主に朱漆で、厚貝が多いこと、貝による文様の輪郭に金箔を使用することなどがあげられる（徳川 1995）。今回の調査でも、赤漆（241 など）、鍍金された青銅製品が 21 点も出土している。なお、これら金工品は琉球独自の要素もあり、首里城で生産したとされている（久保 2010）。また、螺鈿の厚さの定義は様々あるが、具体的な事例を挙げている荒川浩和によると、厚貝は 1.5 ～ 3.0㎜、薄貝を 0.3 ～ 1.0㎜とする（荒川 1998）。今回の加工小片では、厚さでは薄貝に匹敵されるものも見られるがその大きさは 1cm 前後と非常に小片のため、多くは研磨で成形された厚貝と思われる。

また､「歴代宝案」をひも解くと、15 ～ 16 世紀に琉球国王・世子による明への進物として、螺鈿と付された品物を以下にピックアップした。この名称を見ると、主に刀や剣・槍の鞘等の飾りとして使用されていたことが想像される。以下は､「歴代法案」巻第１集より作成した（沖県教 1999）。

1470 年９月７日	世子尚円より明国へ	鍍金銅結束黒漆靶螺鈿鞘腰刀
1474 年９月３日	国王尚円より明国へ	鍍金銅結束黒漆沙魚皮靶螺鈿鞘腰刀
1476 年９月 15 日	国王尚円より明国へ	鍍金銅結束螺鈿鞘剣
1479 年９月 26 日	国王尚真より明国へ	鍍金銅結束線紮靶螺鈿鞘腰刀・鍍金銅結束螺鈿赤漆靶鞘鎗
1509 年 10 月９日	琉球国中山王が安南国へ	鍍金銅結束螺鈿靶黒漆鞘鎗

前述したように、今回出土した含真珠層貝殻は、ヤコウガイを中心としながらも、チョウセンサザエ、サラサバテイラ、ギンダカハマの４種で構成されている。これらは、完形が少なく定型的な破片となっており、さらに１cm 前後となった加工された小片が出土している。加工小片の多くは研磨が見られ、長方形やしずく形を呈していたり､徹底的に真珠層が取られ表皮のみになったものなどがある。これ自体が不要なものであったとしても、真珠層を剥ぎ取りそれを研磨して螺鈿にするという明確な目的をもって加工された残滓であったと考えられる。

今後、これらの貝殻破片を螺鈿として利用された具体的な製品について、多角的な研究が行われることが期待されよう。

また、今回の調査では、先述した赤漆膜や、赤色顔料が付着した青磁擂鉢（368）や、白磁Ｄ´群碗（256）などが出土しており、漆器の存在を示すもの、もしくはその生産に関連した可能性がある。また、金属製品の生産が想定される遺物も出ており、西のアザナ地区では 15 ～ 16 世紀とされる炉跡や大量の鋳型などが出土している（上原 2009）。その他にも、玉器の残滓や、骨製品についても未成品が出土している。今回の調査区を含めて、先述した西のアザナ地区は首里城の中でも外郭に位置する。つまり、16 世紀ごろの首里城では、その外郭において様々な器物の生産が行われていたことが想定される。外郭の拡張が、尚真王代（1477 ～ 1526 年）に主に行われたとされているが、想定されるこれらの工房のあり方と時期的に一致するものと思われる。

首里城跡の発掘調査は、1984（昭和 59）年に始まり、その調査報告書も 30 冊にも及んでおり、総合的な整理検討が必要な時期と思われる。これらの調査・研究が行われることで、首里城における空間の利用のあり方などの具体的な様相・歴史が明らかになり、首里城の史跡公園としての整備活用に大きく寄与できることが期待されよう。今回の報告書も首里城の調査研究、整備活用の参考とされたい。

参考・引用文献

新垣　力　2003「沖縄出土の清朝陶磁」『紀要沖縄埋文研究』第 1 号　沖縄県埋蔵文化財センター

2005「沖縄における 14 世紀～ 16 世紀の中国白磁の再整理」『紀要沖縄埋文研究』第 3 号　前同

2011「無釉陶器の成立と展開」『琉球陶器の成立と展開』沖縄県立博物館・美術館、那覇市立壺屋焼物博物館

荒川浩和　1998「正倉院の螺鈿－漆藝史上の意義－」『正倉院年報』第 20 号　宮内庁正倉院事務所

アラフ遺跡発掘調査団　2003『アラフ遺跡調査研究Ⅰ－沖縄県宮古島アラフ遺跡発掘調査報告－』

五十嵐俊雄　2006『考古資料の岩石学』パリノ・サーヴェイ

石井龍太　2006「琉球近世瓦の分類と編年～琉球近世瓦の研究その 3 ～」『南島考古』第 25 号　沖縄考古学会

2007「湧田古窯の再評価―湧田古窯跡の軒丸瓦－」『南島考古』第 26 号　前同

2008「湧田古窯の再評価―湧田古窯跡の軒平瓦－」『南島考古』第 27 号　前同

2009「湧田古窯の再評価―湧田古窯跡の瓦質土器製植木鉢－」『南島考古』第 28 号　前同

伊仙町教育委員会　2005『カムィヤキ古窯跡群Ⅳ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（12）

上原　静　2003「第 4 章　グスク時代」『沖縄県史　各論編 2　考古』沖縄県教育委員会

2008「沖縄諸島における琉球瓦の再編年」「沖縄国際大学総合学術研究紀要」第 11 巻第 2 号

2009「首里城西のアザナ跡鍛冶・鋳造工房」『紀要沖縄埋文研究』第 6 号　沖縄県立埋蔵文化財センター

2011「琉球の塼と煉瓦」『南島考古』第 30 号

2013『琉球古瓦の研究』榕樹書林

上原静・仲宗根求・小原裕也・伊波勝美・上門大悟　2011「喜名古窯跡（瓦編）」『読谷村歴史民俗資料館紀要』第 35 号

上原 静・宮城 綾乃 2007 「南島考古資料録（2）」『廣友会誌』第 3 号

沖縄県教育委員会　1988『首里城跡　歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査』沖縄県文化財調査報告書第 88 集

1995『首里城跡　南殿・北殿跡の遺構調査報告』前同　第 120 集

1998『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）』前同　第 132 集

1999『歴代宝案訳注本第 2 冊（巻第 1 集 23 ～ 43）』

2010『沖縄県史　各論編 3　古琉球』

沖縄県立埋蔵文化財センター　2001 a『天界寺跡（Ⅰ）－首里杜館地下駐車場入口親切工事に伴う緊急発掘調査－』沖縄

県立埋蔵文化財センター調査報告書第２集
2001 b『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』前同第３集
2002 a『天界寺跡（Ⅱ）－首里城公園管理新棟建設工事に伴う緊急発掘調査－』前同　第８集
2002 b『円覚寺跡－遺構確認調査報告書－』前同　第 10 集
2003 a『首里城跡－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書－』前同　第 14 集
2003 b『御茶屋御殿跡－遺構確認調査報告－』前同　第 17 集
2003 c『綾門大道跡－首里城守礼門周辺地区発掘調査報告書－』前同　第 13 集
2004『首里城跡－城郭南側下地区発掘調査報告書－』前同　第 19 集
2005 a『首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－』前同　第 29 集
2005 b『首里城跡－書院・鎖之間地区発掘調査報告書－』前同　第 28 集
2006『御茶屋御殿跡－平成 15・16・17 年度遺構確認調査報告書－』前同　第 33 集
2007 a『首里城跡－御内原西地区発掘調査報告書－』前同　第 44 集
2007 b『渡地村跡』前同　第 66 集
2008『真珠道跡－首里城跡真珠道地区発掘調査報告書（Ⅲ）－』前同　第 48 集
2009『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）－』前同　第 49 集
2010『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）－』前同　第 54 集
2011 a『沖縄いしの考古学』平成 23 年度沖縄県立埋蔵文化財センター企画展図録
2011 b『中城御殿跡　－県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書（２）－』前々同　告書第 58 集
2012『中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書（３）－』前同　第 63 集
2013 a『首里城跡－淑順門西地区・奉神門埋甕地区発掘調査報告書－』前同　第 68 集
2013 b『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（２）－』前同　第 69 集
2014 a『円覚寺跡（２）－右掖門地区・南側石牆地区の遺構確認調査報告書－』前同　第 70 集
2014 b『首里城跡－淑順門東地区発掘調査報告書―』前同　第 72 集
2015『首里城跡－銭蔵地区発掘調査報告書―』前同第 77 集
小野正敏　1982「15、16 世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会
加藤祐三　1985『奄美・沖縄　岩石・鉱物図鑑』新星出版
金山順雄　1999「グスク出土の小札について」『南島考古』第 18 号　沖縄考古学会
勝連町教育委員会編　1990『勝連城跡 - 北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査（１）』
亀井明徳ほか　2009『元代青花白瓷』亜州古陶瓷学会
九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会 10 周年記念』
岸本竹美　2011「沖縄県出土の玉類に関する考察」『沖縄のガラス・玉等製品関係資料調査報告書』沖縄県文化財報告書第 149 集　沖縄県教育委員会
木下尚子　2009「正倉院伝来の貝製品と貝殻－ヤコウガイを中心に－」『正倉院紀要』第 31 号　宮内庁正倉院事務所
久保智康　2010『琉球の金工』日本の美術第 533 号　至文堂
是光吉基　1993「国内出土のいわゆる「無文銭」について」『考古論集－潮見浩先生退官記念論文集－』
笹間良彦　1997『図録　日本の甲冑武具事典　新装版』柏書房
柴田圭子　2011「今帰仁城跡出土明代青化瓷の研究（１）」『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅴ』今帰仁村文化財調査報告書第 29 集
首里城研究グループ　1997『首里城入門　その建築と歴史』ひるぎ社
瀬戸哲也　2005「首里城跡木曳門地区出土の土師器と思われる土器皿」『紀要沖縄埋文研究』第３号　沖縄県立埋蔵文化財センター

2010「沖縄における 12 ～ 16 世紀の貿易陶磁－中国産陶磁を中心とした様相と組成－」『貿易陶磁研究』第 30 号　日本貿易陶磁研究会
2014「沖縄における 14 ～ 16 世紀の中国陶磁の様相」『琉球列島の貿易陶磁』日本貿易陶磁研究会
2015「14・15 世紀の沖縄出土の中国産青磁について」『貿易陶磁研究』第 35 号　日本貿易陶磁研究会
瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志　2007「沖縄における貿易陶磁研究－ 14 ～ 16 世紀を中心に－」『紀要沖縄埋文研究』5　沖縄県埋蔵文化財センター
太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－』
田中克子　2003「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その３）宋・元代白磁をめぐる問題」『博多研究会誌』第 11 号
陳　建中　1999『徳化民窯青花』文物出版社
当真嗣一・上原静　1987「首里城正殿跡の調査」『紀要』第４号　沖縄県教育庁文化課
徳川義宣　1995「琉球漆工藝史概論」『館蔵　琉球漆芸』浦添市美術館
永井久美男　1994『中世の出土銭』兵庫埋蔵銭調査会
今帰仁村教育委員会　1991『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第 14 集
那覇市教育委員会　1983『崇元寺跡－範囲確認発掘調査概報－』那覇市文化財調査報告書第９集
1995『牧志御願東方遺跡－モノレール関連街路事業（崇元寺姫百合線）に伴う緊急発掘調査報告－』前同　第 28 集
1997『敷名シーマ御嶽遺跡－真地配水池建設事業に伴う緊急発掘調査報告－』前同　第 34 集
1999 a『ハナグスク－波上宮御復興造営事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査－』前同　第 41 集
1999 b『天界寺跡－首里城線街路改良工事事業に伴う緊急発掘調査報告－』前同　第 42 集
2000『天界寺跡－首里城公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告－』前同　第 43 集
2001『敷名原遺跡－敷名上間線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告－』前同　第 49 集
2005『崎山御嶽遺跡－首里崎山公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』前同　第 67 集
2012『渡地村跡－臨港道路那覇１号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告－』前同　第 91 集
新島奈津子　2005「古琉球における那覇港湾機能－国の港としての那覇港－」『専修史学』第 39 号　専修大学
西野範子　2011「第２章　14 世紀から 17 世紀における九州出土ベトナム陶磁の分析～年代比定・分布及びその歴史的背景～」『周縁の文化交渉学シリーズ４　陶磁器流通と西海海域』関西大学文化交渉学教育研究拠点
西村昌也・西野範子　2005「ヴェトナム施釉陶器の技術・形態的視点からの分類と編年－ 10 世紀から 20 世紀の碗皿資料を中心に」『上智アジア学』第 23 号　上智大学アジア文化研究所
北京故宮博物院　2008『故宮収蔵　你應該知道的 200 件玉器』藝術家出版社
乗岡　実　2005「備前」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』
福建博物館　1997「漳州窯－福建漳州地区明清窯址発掘調査報告之一」福建人民社
外間正幸　1983「貝摺奉行」『沖縄大百科事典　上巻』沖縄タイムス社
宮城弘樹・具志堅亮　2007「中世並行期における南西諸島の在地土器の様相」『廣友会誌』第３号
宮里朝光　1983「銭蔵」『沖縄大百科事典　中巻』沖縄タイムス社
向井　亙　2003「タイ黒褐釉四耳壺の分類と年代」『貿易陶磁研究』第 23 号　日本貿易陶磁研究会
森　達也　2009「15 世紀後半～ 17 世紀の中国貿易陶瓷－沈船と窯址発見の新資料を中心に－」『関西近世考古学研究』17　関西近世考古学研究会
森　毅　1995「十六・十七世紀における陶磁器の様相とその流通－大坂の資料を中心に－」『ヒストリア』第 149 号
2005「中世後期輸入陶磁器の分類と変化」『中世窯業の諸様～生産技術の展開と編年～』資料集第３分冊
森田　勉　1982「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会
和田浩爾・赤松蔚・奥谷喬司　1996「正倉院宝物（螺鈿、貝殻）材質調査報告」『正倉院年報』第 18 号　宮内庁正倉院事務所

付章　首里城跡淑順門西地区より出土した植物遺体について：最終報告

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター　高宮 広土
株式会社文化財サービス　千田 寛之

遺跡調査の概要

a: 遺跡の所在　沖縄県那覇市首里当蔵町
b: 遺跡名称　首里城跡淑順門西地区
c: 調査機関　沖縄県立埋蔵文化財センター
d: 調査担当者　瀬戸哲也
e: 発掘調査期間　平成 22 年 9 月 1 日～平成 23 年 2 月 25 日
f: 文化　グスク文化
g: 遺跡の相対年代　13 世紀後半～ 15 世紀中葉
h: 遺跡の炭素十四年代　BP640 ± 20 ～ BP505 ± 20（較正年代 AD1289~AD1441）

1）バックグラウンド

高宮・千田 (2013) において同定不可能を含め計 39,561(粒／片)の炭化植物種子分析結果を報告した。しかし、残念なことにフローテーションサンプルに含まれていた植物遺体が多量であったため、同報告書において全ての分析結果を報告することができなかった。具体的には LF548 に関しては途中経過をもとに報告を行った。その報告を簡単にまとめると、前回同定された植物遺体ではアワが最も多く、続いてイネ、オオムギの順であり、これらで同定された炭化種子の約９割を占めていた。キビや籾などを含めると栽培植物の割合は約 98％であった。また、土壌サンプルは褐色粘質土（13th 後～ 14th 初、約 10ℓ）、暗褐色土下層（14th 後、約 50ℓ）、黒褐色土下層２（14th 末～ 15th 前､約 230ℓ）､黒褐色土下層（14th 末～ 15th 前､約 180ℓ）および黒褐色土上層（15th 中、約 720l）と推計されており、その推計をもとにすると植物遺体の分布密度はそれぞれ 1.6（粒／片）／ℓ、26（粒／片）／ℓ 、52（粒／片）／ℓ、92（粒／片）／ℓ、および 13.5（粒／片）／ℓ であった。14 世紀後半以降、多量の植物遺体（主に栽培植物）が検出されている。黒褐色土下層ではアワとイネの検出数が等しくなるが、他の層ではアワが多く出土していた。検出数からはアワが優勢のように見えるが、重量を計測したところイネが 17g に対してアワが 5.72g であり、おそらくイネが主に食されていたのであろうと推測した。以下 LF548 を含め、首里城淑順門西区より回収された植物遺体について報告する。

2）検出された炭化種子（第 114・115 表、写真 48・49）

イネ　*Oryza sativa* L.

イネ穎果（**写真 48 － 1**）が 2,618（粒)、その破片が 10,452（片）の合計 13,070（粒／片）が検出された。検出されたイネ穎果の総重量は 19.62g である。また、イネ穎果と思われるが保存状態が悪く断定できない種子 79（片）をイネ？とした。さらに籾片計 1,197（片）および小穂軸（**写真 48 － 2**）が計 241（片）確認された。

コムギ　*Triticom　aestivum* L.

コムギ穎果（**写真 48 － 3**）が完形 602（粒)、破片 211（片）の合計 813（粒／片）回収された。コムギ穎果の総重量は 3.5g である。また、コムギの穂軸（**写真 48 － 4**）279（片）も得られている。

※サイズの単位はすべてミリメートル

1 イネ
(4.6 × 2.9 × 1.7)

2 イネ小穂軸
(2.4 × 1.1)

3 コムギ
(3.4 × 2.4 × 2.2)

4 コムギ穂軸
(4.2 × 1.8)

5 オオムギ
(5.6 × 2.5 × 1.9)

6 アワ
(1.2 × 1.2 × 1)

7 キビ
(1.7 × 1.8 × 1.4)

8 マメ科
腹面　側面
(5 × 3 × 2.9)

9 マメ科
へそ部分
(2.4 × 1.2)

10 タデ科
正面　上面
(1.6 × 1.2 × 1.2)

11 オトギリソウ科
(1.4 × 0.6 × 0.5)

12 キク科
(2.2 × 1.1 × 1.2)

13 イネ科
(1.4 × 0.5 × 0.3)

14 カヤツリグサ科
タイプA
(2.2 × 1.5 × 0.8)

15 カヤツリグサ科
タイプB
(1.4 × 0.2 × 0.5)

写真 48　首里城跡淑順門西地区出土の植物遺体（１）

※サイズの単位はすべてミリメートル

写真 49　首里城跡淑順門西地区出土の植物遺体（２）

オオムギ　*Hordeum vulgare* L.

オオムギ穎果（**写真 48 －５**）が 294（粒）、その破片が 194（片）の合計 488（粒／片）が検出された。オオムギ穎果の総重量は 2.19g である。また、オオムギの穂軸が６片およびオオムギ穂軸と思われるものが１片回収されている。

ムギ類およびムギ類穂軸

保存状態が悪いためコムギあるいはオオムギに分類困難な炭化種子計 525（片）をムギ類とした。総重量は計 1.06g であった。また、ムギ類穂軸が計 88（片）検出されている。１片ムギ類穂軸と思われるものも回収された。

アワ　*Setaria italica* (L.)Beauv.

アワ穎果（**写真 48 －６**）が 43,630（粒）、その破片が 7,237（片）の合計 50,867（粒／片）出土した。ア

ワ穎果の総重量は 14.16g であった。前回「典型的」なアワの大きさを報告したが、後述するようにかなり小型のアワも含まれていた（**写真 49 － 23**）。また、アワ穎果と思われるが破損等により断定できなかった植物遺体をアワ？として計 167（片）を分類した。この他にアワの内外穎が計 972（片）出土している。

キビ　*Panicum miliaceum* L.

キビ穎果（**写真 48 － 7**）を計 27（粒／片）確認した。キビ穎果の総重量は 0.05g である。また、キビ穎果と思われるが保存状態が悪く断定できない種子 11（粒）をキビ？とし、をこのカテゴリーに含めた。

ミレット

アワやキビまたはその仲間だと思われるが、さらなる分類が不可能であった炭化種子計 65（粒／片）をミレットとした。また、特徴が乏しいためミレットに含めてよいのか判断できなかった種子をミレット？とし、計 11（片）を分類した。

マメ科　Fabaceae

マメ科（**写真 48 － 8**）の種子が 17（粒）とその破片が 32（片）の合計 49（粒／片）を確認した。回収されたマメ科種子は形態的特徴からおそらくダイズあるいはダイズ属だと思われるが、破損や変形をしているものが殆どのためダイズ・ダイズ属とはせずにマメ科とした。しかし、2（片）ダイズ属の臍部分（**写真４８－９**）が出土していることから、回収された炭化種子はダイズと考えてよいと思われる。なお、この他にマメ科の破片と思われるが激しく破損しているため断定できなかった計 11（片）をマメ科？とた。

堅果類？

堅果類の子葉と思われるが断定に至らなかった種子を堅果類？と分類し、計 4（片）をこのカテゴリーに含めた。また、堅果類の外皮と思われる計 9（片）を堅果皮？とた。

タデ科　Polygonaceae

タデ科痩果（**写真 48 － 10**）が計 5（粒）出土している。痩果の形状は断面が三角形状の広卵形を成している。

オトギリソウ科　Clusiaceae

オトギリソウ科（**写真 48 － 11**）の種子が計 4（粒）検出された。種子は線状楕円形を成しており、種皮には縦方向の明瞭な隆線が 3 ～ 4 本存在する。

キク科　Asteraceae

キク科（**写真 48 － 12**）の痩果が LF548 より 1（粒）出土した。痩果の形状は狭卵状鈍菱形を成している。片側は直線状だがもう一方はやや湾曲している。

イネ科　Poaceae

イネ科の穎果（**写真 48 － 13**）を計 11（粒）確認した。穎果の形状は線状楕円形で粒長の約３分の１を占める胚が存在する。

カヤツリグサ科　Cyperaceae

・タイプA（**写真 48 － 14**）：LF №535 より 1（粒）、LF №555 より 1（粒）、LF No.647 より 1（粒）の合計 3（粒）検出した。痩果は縦にやや細長い卵形を成しており、側面観は片側凸レンズ状である。痩果表面の中央部分がやや隆起している。

・タイプB（**写真 48 － 15**）：LF №535 より 3（粒）、LF 548 より 10（粒）、LF №555 より 1（粒）の合計 14（粒）出土した。痩果は広卵形を成しており側面観は片側凸レンズ状である。タイプ A に比べ全体的にやや丸みを帯びている。痩果表面の中央部分がやや隆起している。

不明種子

・不明種子 A（**写真 49 － 16**）：LF №179 より 1（粒）検出された。形状は広皮針形を成しており、表面には浅い波状隆線が確認できる。

・不明種子 B（**写真 49 － 17**）：LF №561 より 1（片）出土している。破片のため元の形状は不明であるが、おそらく円形状であったと推察される。種皮は浅く微細な凹点によって構成された編目模様で覆われている。

・不明種子 C（**写真 49 － 18**）：LF №646 より 1（粒）回収された。種子の形状は断面が三角形状の円形をしており、基部には胚らしきものが確認できる。

・不明種子 D（**写真 49 － 19**）：LF №647 より 1（片）確認した。種子が破片であることに加え、加熱による変形のため同定が困難であった。種皮表面には明瞭な凹点によって構成された編目模様が存在する。また、基部には円形の窪みが確認できる。

・不明種子 E（**写真 49 － 20**）：LF №654 より 1（粒）出土した。形状は線状楕円形を成している。内部は空洞になっており、中に粒長の半分以下のサイズの小さな種子らしきものが 1 個存在する。おそらく外側の部分は外皮のようなもので、内部に種子が存在しているのだろう。

・不明種子 F（**写真 49 － 21**）：LFNo.548 より 1（粒）回収されている。種子は広倒卵形、先端は短く尖る。側面は半横広卵形、背面は円みがあり、腹面は鈍稜。サイズは 1.8x1.2x0.9mm。

・不明種子 G（**写真 49 － 22**）LFNo.548 より 1（粒）回収されている。種子は円形。側面は線形。サイズは 1.6x1.4x0.5mm。

同定不可能

微細な破片や保存状態が極めて悪いなどの理由で同定不可能だった計 13,197（片）をこのカテゴリーに含めた。

３）まとめ

前回の報告において、LF548 はおそらく前回報告の倍以上の植物遺体が含まれていると予測したが、実際倍以上の植物遺体が検出された（高宮・千田 2013　第 86 表参照）。前回回収された植物遺体は 39,561（粒／片）

第 114 表　首里城跡淑順門西地区出土の植物遺体

LF No.	陶磁器の年代	層序	グリッド	イネ		イネ小穂軸	モミ	イネ？	コムギ		オオムギ		ムギ類	コムギ穂軸	オオムギ穂軸	オオムギ穂軸（？）	ムギ類穂軸	ムギ類穂軸（？）	アワ		アワ内外穎	アワ？	キビ	キビ？	ミレット	ミレット？	マメ科		マメ科？	堅果類？	堅果皮？	タデ科	オトギリソウ科	キク科	イネ科	カヤツリグサ科	不明種子	同定不可能	合　計
				粒	片	片	片	片	粒	片	粒	片	片	片	片	片	片		粒	片	片	片	粒/片	粒/片	粒/片	片	粒	片	片	片	粒	粒	粒	粒	粒	粒/片	片	粒/片
561	13th後	褐色粘質土	F-10		2						1								3																		1	9	16
小計(粒／片)					2						1								3																		1	9	16
推計土壌サンプル量(l)																																						10
分布密度(粒／片)／l																																						1.6
主要穀類の分布密度(粒／片)／l					0.2						0.1								0.3																				
539	14th	暗褐色土下層	F-11北側	20	43	12	550	2	6	3	1		5	1					260	89	119	4	1		1													180	1297
550	14th	黒褐色土下層2	F-10						1		1																												2
555	14th	黒褐色土下層2	F-10	174	307	7	240	15	48	19	65	48	55						948	188	187	23	4		17		3	3	2			1	1		1	2		1317	3675
646	14th	黒褐色土下層2	E-10	107	156	41	118	7	29	12	47	13	39	1			5		678	114	26	18	1		5		2	2	1						2		1	1938	3363
647	14th	黒褐色土下層2	E-10	172	244	3	33	12	68	32	60	31	41	5			3		1354	336	44	46	8		16		7	9	2			1		2	1	1	2234	4765
650	14th	黒褐色土下層2	E-10	12	1				4		3		4															2										26
654	14th	黒褐色土下層2	E-10	52	16			1	13		7	4	11														2	6		1						1	25	139
小計(粒／片)				1304		63	941	37	235		280		155	7			8		3967		376	91	14		39		36		5	1		1	2	1	3	5694	13267
推計土壌サンプル量(l)																																						230
分布密度(粒／片)／l																																						47.3
主要穀類の分布密度(粒／片)／l				5.67							1.22								17.25				0.06															
546	14末～15前	黒褐色土下層	F-11	4						1		1																	1								1	8
548	14末～15前	黒褐色土下層	F-11	1469	8485	130	76	17	311	82	68	64	293	238	6	1	66	1	37374	5835	390	18	6	10	2		1	4	3		7	3	2	1	5	10	2	4231	59211
630	14末～15前	黒褐色土下層	F-11北側	1																																		1
小計(粒／片)				9959		130	76	17	394		133		293	238	6	1	66	1	43209		390	18	6	10	2		5		3	1	7	3	2	1	5	10	2	4232	59220
推計土壌サンプル量(l)																																						180
分布密度(粒／片)／l																																						329
主要穀類の分布密度(粒／片)／l				55.33							0.74								240.05				0.03															
179	15th中	黒褐色土上層貝混	F-11南側	28	33			6	21	3	2	1	3						23	10		1		1			1	5	1	1						1	51	192
535	15th中	黒褐色土上層	F-11北側	578	1165	48	180	19	101	59	39	32	74	34			14		2990	665	206	57	7		24	11	1	1	1	1	2	1			1	4		3210	9525
563	15th中	上層貝混	F-11南側																									1									1	2
632	15th中	黒褐色土上層	F-11	1																																		1
小計(粒／片)				1805		48	180	25	184		74		77	34			14		3688		206	58	7	1	24	11	8		3	2	2	1			1	4	1	3262	9720
推計土壌サンプル量(l)																																						720
分布密度(粒／片)／l																																						13.5
主要穀類の分布密度(粒／片)／l				2.51					0.26		0.10								5.12				0.01															
合　計(粒／片)				13070		241	1197	79	813		488		525	279	6	1	88	1	50867		972	167	27	11	65	11	49		11	4	9	5	4	1	11	17	7	13197	82223

第 115 表　首里城跡淑順門西地区出土の穀類の重量

LF No.	陶磁器の年代	層序	グリッド	イネ		コムギ		オオムギ		ムギ類	アワ		キビ	合計
				粒(g)	片(g)	粒g)	片(g)	粒(g)	片(g)	片(g)	粒(g)	片(g)	粒/片	粒/片(g)
561	13th後	褐色粘質土	F-10		NIL			NIL			NIL			NIL
小計(g)				NIL				NIL			NIL			NIL
539	14th	暗褐色土下層	F-11北側	0.05	0.04	0.02	0.01	0.01		0.01	0.08	0.01	NIL	0.23
550	14th	黒褐色土下層2	F-10			0.01		0.01						0.02
555	14th	黒褐色土下層2	F-10	0.81	0.38	0.26	0.06	0.37	0.12	0.12	0.35	0.05	0.01	2.53
646	14th	黒褐色土下層2	E-10	0.56	0.21	0.14	0.04	0.25	0.03	0.09	0.27	0.03	NIL	1.62
647	14th	黒褐色土下層2	E-10	0.96	0.35	0.39	0.12	0.38	0.09	0.11	0.54	0.09	0.01	3.04
650	14th	黒褐色土下層2	E-10	0.09	NIL	0.02		0.03		0.02				0.16
654	14th	黒褐色土下層2	E-10	0.41	0.06	0.09		0.05	0.02	0.05				0.68
小計(g)				3.92		1.16		1.36		0.4	1.42		0.02	8.28
546	14末～15前	黒褐色土下層	F-11	0.02			NIL		NIL					0.02
548	14末～15前	黒褐色土下層	F-11	4.69	7.42	1.36	0.22	0.38	0.17	0.51	10.35	0.79	NIL	25.89
630	14末～15前	黒褐色土下層	F-11北側	NIL										0
小計(g)				12.13		1.58		0.55		0.51	11.14		NIL	25.91
179	15th中	黒褐色土上層貝混	F-11南側	0.14	0.08	0.12	0.01	0.01	NIL	0.01	0.01	0.01		0.39
535	15th中	黒褐色土上層	F-11北側	1.76	1.58	0.47	0.16	0.17	0.1	0.14	1.42	0.16	0.01	5.97
632	15th中	黒褐色土上層	F-11	0.01										0.01
小計(g)				3.57		0.76		0.28		0.15	1.6		0.01	6.37
総重量(g)				19.62		3.5		2.19		1.06	14.16		0.05	40.56

第 116 表　首里城跡淑順門西地区ＬＦＮｏ．548 より得られた植物遺体

LF No.	グリッド	イネ		イネ（小穂軸）	モミ	イネ？		コムギ		オオムギ		ムギ類	コムギ穂軸	オオムギ穂軸	ムギ類穂軸	ムギ類穂軸？	アワ		アワ内外穎	キビ	キビ？	ダイズ	マメ科	堅果皮？	タデ科	オトギリソウ科	イネ科	カヤツリグサ科	不明種子	同定不可能	合計
		粒	片	片	片	片		片		片		片	片	片	片	片	粒	片	片	粒	粒	片	片	片	粒	粒/片	粒	粒	粒	片	粒/片
548	F-11	144	3287	123	45		20	3	2	28	114	168	6	42	1		31530	4755	372	3	3	1	3		3	3	2	5	10	2	1987	42662
	合計(粒/片)	3431		123	45		23		30		114	168	6	42	1		36285		372	3	3	1	3		3	3	2	5	10	2	1687	42662
	重量(g)	0.3	2.1				0.1	0	0.01	0.07	0.2						7.92	0.52														11.13
	重量(g)計	2.36					0.09		0.08		0.2						8.44															11.13

であったのに対し、今回計 82,223（粒／片）が得られている。また、同報告では、黒褐色土下層以外の各層においてはアワがイネより多い傾向にあるが、黒褐色土下層では、アワ (6,924 粒／片) とイネ（6,528 粒／片）の出土数がほぼ同数であると記した。今回の分析結果､同層ではアワ 43,209（粒／片）に対しイネは 9,954（粒／片）であった。主な栽培植物は全体的にみてアワ（50,867 粒／片)、イネ（13,070 粒／片)、コムギ（813 粒／片）およびオオムギ（488 粒／片）の順であり、アワが最も多く検出されたことになる。また、前回の報告では、検出数からみるとアワが最も多かったが、出土した栽培植物の重量からは、アワが 5.72g に対してイネは 17g であり、おそらくイネの方がより重要な栽培植物であったであろうと推測した。LF548 より出土した主要栽培植物の重量はアワ（8.44g)、イネ（2.36g)、コムギ（0.09g）およびオオムギ（0.08g）であった（**第 116 表**)。**第 117 表**に主要穀類の総検出数および総重量を示す。また、**第 118 表**にはそれぞれの穀類の検出数および重量のパーセントである。総検出数では圧倒的にアワが多い。しかし、重量ではイネの４８％がトップで、アワの 35％がそれに次ぐ。以下の理由から、おそらくイネが主な炭水化物源であったのではないであろうか。

札幌大学古代食生分析室では、フローテーションより回収された浮遊物を 4mm, 2mm, 1mm, 0.79mm, 0.42mm の篩により篩い、各篩で得られた植物遺体を分析しているが、前回 LF584 にかんしては主に 1 mm 以上の篩で回収された植物遺体を分析･報告した。今回は 1mm 以下が対象となったが、そのため、イネの小穂軸、ムギ類穂軸あるいはアワの内外穎などが前回と比較して多く検出された。また､アワはその大きさが平均 1.2mm 前後なので、一般的に 0.79mm 以上で回収される傾向にあるが、今回は 0.42mm やそれ以下でも回収されている。小型のアワがかなり回収されたことにより、アワの検出数が増加したと思われる。小型のアワは顕微鏡でようやく確認できるので、おそらく食料とはなり得なかったのではないであろう。今回の分析結果から、首里城淑順門西地区においては、アワが食料としてある程度の重要性を担っていたと考えられるが、おそらくイネがより重要であったのではないであろうか。同様の傾向は今帰仁城跡主郭東側斜面（14 世紀後半～ 16 世紀）のデー

第 117 表　主要穀類の数量

	検出数	重量
イネ	13070	19.62
コムギ	813	3.50
オオムギ	488	2.19
ムギ類	525	1.06
アワ	50867	14.16
キビ	27	0.05
合計	65790	40.58

第 118 表　主要穀類の割合

	検出数（%）	重量（%）
イネ	19.87	48.35
コムギ	1.24	8.62
オオムギ	0.74	5.40
ムギ類	0.80	2.61
アワ	77.32	34.89
キビ	0.04	0.12
合計	100.00	100.00

タからも見て取れる（千田　2010）。今後は栽培植物の摂取傾向を明らかにするためにも、古人骨の炭素・窒素安定同位体分析を実施する必要があろう。

また、バックグラウンドにおいて前回の分布密度について紹介したが、今回の分析の結果、黒褐色土下層の分布密度は前回の約 92（粒／片）／ℓから 329（粒／片）／ℓと 3.5 倍程となった。黒褐色土下層で最も人為的な投棄が行われたのであろう。ちなみに、この層における植物遺体の分布密度は報告された中では鳳雛洞第 4 洞口遺跡（11 ～ 13 世紀）の分布密度（炉 1 層①：156.7 ＜粒／片＞／ℓ　高宮 2014）をはるかに凌ぐもので、琉球列島で最も分布密度の高いサンプルとなっている。首里城淑順門西地区において、大変興味深い結果が得られたが、グスク時代の農耕／植物食利用の研究に関しては諸についたばかりであり、これらの課題を理解するためにもさらなるフローテーションの実施が強く望まれる。

（第 116 表は LF548 出土の炭化植物遺体をまとめたものである）。

謝辞：前回未報告の分析結果を報告する機会を与えてくださった沖縄県立埋蔵文化財センターの瀬戸哲也氏に心より感謝申し上げます。なお、本研究の一部は文部科学省科研費（課題番号　21101225）の助成を受けて行なった。

参考文献

高宮広土　2014 「沖之永良部島鳳雛洞第 4 洞口遺跡出土の植物遺体」『沖永良部島鳳雛洞・大山水鏡洞の研究』新里貴之（編）pp.102-104. 鹿児島市：鹿児島大学

高宮広土・千田寛之　2013 「首里城跡淑順門西地区から出土した植物遺体について」『首里城跡—淑順門西地区・奉神門埋甕地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化センター（編 pp.236-243. 西原町：沖縄県埋蔵文化財センター

千田寛之　2010「今帰仁城跡主郭東側斜面出土の植物遺体」『今帰仁城跡周辺遺跡 IV—村内遺跡発掘調査報告—』沖縄県今帰仁村教育委員会（編）pp.31-38. 今帰仁村：沖縄県今帰仁村教育委員会

1．**首里城跡周辺空中写真**（国土地理院　2010 年撮影）

2．**首里城跡銭蔵東地区遠景**（東より）

図版１　首里城跡遠景

図版２　首里城跡銭蔵東地区平成 23 年度調査区全景（西より）

1．貝だまり出土サラサバテイラ（前左）・ヤコウガイ（中央）・チョウセンサザエ（前右）貝殻破片

2．Ⅲ下層出土ヤコウガイ完形（832）

図版３　含真珠層貝殻

１．貝だまり出土含真珠層貝殻加工小片

２．石積み１内３層・貝だまり出土陶磁器

図版４　石積み１内３層・貝だまり出土遺物

1．近景（東より）

2．近景（西より）

図版５　平成 23 年度調査区

１．石積み１近景（北より）

２．石積み１下部Ⅲ下層・Ⅳ層堆積状況（北より）

図版６　石積み１

1．石積み２近景（西より）

２．石積み２下部クチャ層堆積状況（西より）

図版７　石積み２

１．石積み２・３裏込め（北より）

２．石積み２検出状況（西より）

３．トレンチ２石積み２外側堆積状況（南より）

４．石積み２根石（西より）

５．石積み３根石（西より）

図版８　石積み２・３

図版９　トレンチ１東壁断面（西より）

１．Ⅱ上層炭化物集中状況

２．トレンチ１東Ⅱ中層炭化木出土状況

３．トレンチ１東Ⅱ下層動物遺体出土状況

４．トレンチ１南Ⅱ層下部漆出土状況

５．トレンチ１南Ⅱ下層堆積状況

６．トレンチ１南Ⅲ下層・Ⅳ層堆積状況

７．トレンチ１南Ⅳ層青磁（762）出土状況

図版 10　Ⅱ～Ⅳ層堆積状況

１．西より

２．貝だまり部分拡大（西より）

図版 11　石積み１内側堆積状況

図版 12　貝だまり（北より）

図版 13　石積み１内１～３層・貝だまり（１）（西より）

１．近景（西より）

２．貝だまり部分拡大（南より）

図版 14　石積み１内１～３層・貝だまり（２）

1．石積み１内３層上面検出状況（北より）

2．石積み１内３層上面検出状況（東より）

3．貝だまり上部検出状況（北より）

4．貝だまり銭貨出土状況（東より）

6．貝だまり下部Ⅲ下層堆積状況（東より）

5．貝だまり上部検出状況（東より）

7．貝だまり掘削後状況（北より）

図版 15　石積み１内１～３層・貝だまり（３）

１．石積み２（東より）

２．石積み２中央部（東より）

図版 16　平成 25 年度調査区（１）

１．近景（南より）

２．近景（北より）

３．石積み２外側堆積状況（北より）

４．Ⅲ´層中国産青花（754）出土状況（東より）

５．Ⅲ´層ヒレジャコ出土状況（北より）

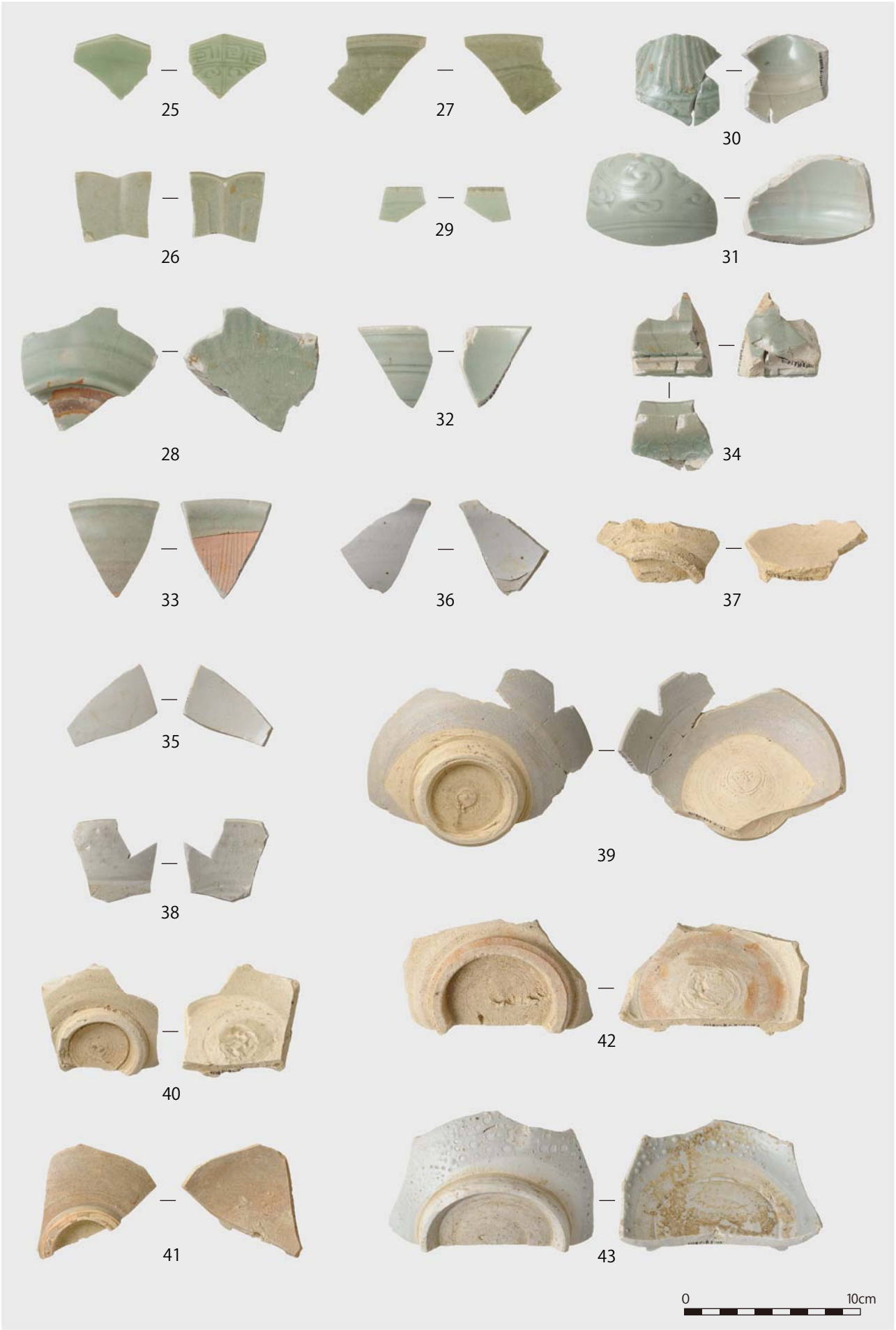
６．Ⅲ´層中国産褐釉出土状況（東より）

７．石積み２北側（東より）

８．石積み２北側（南より）

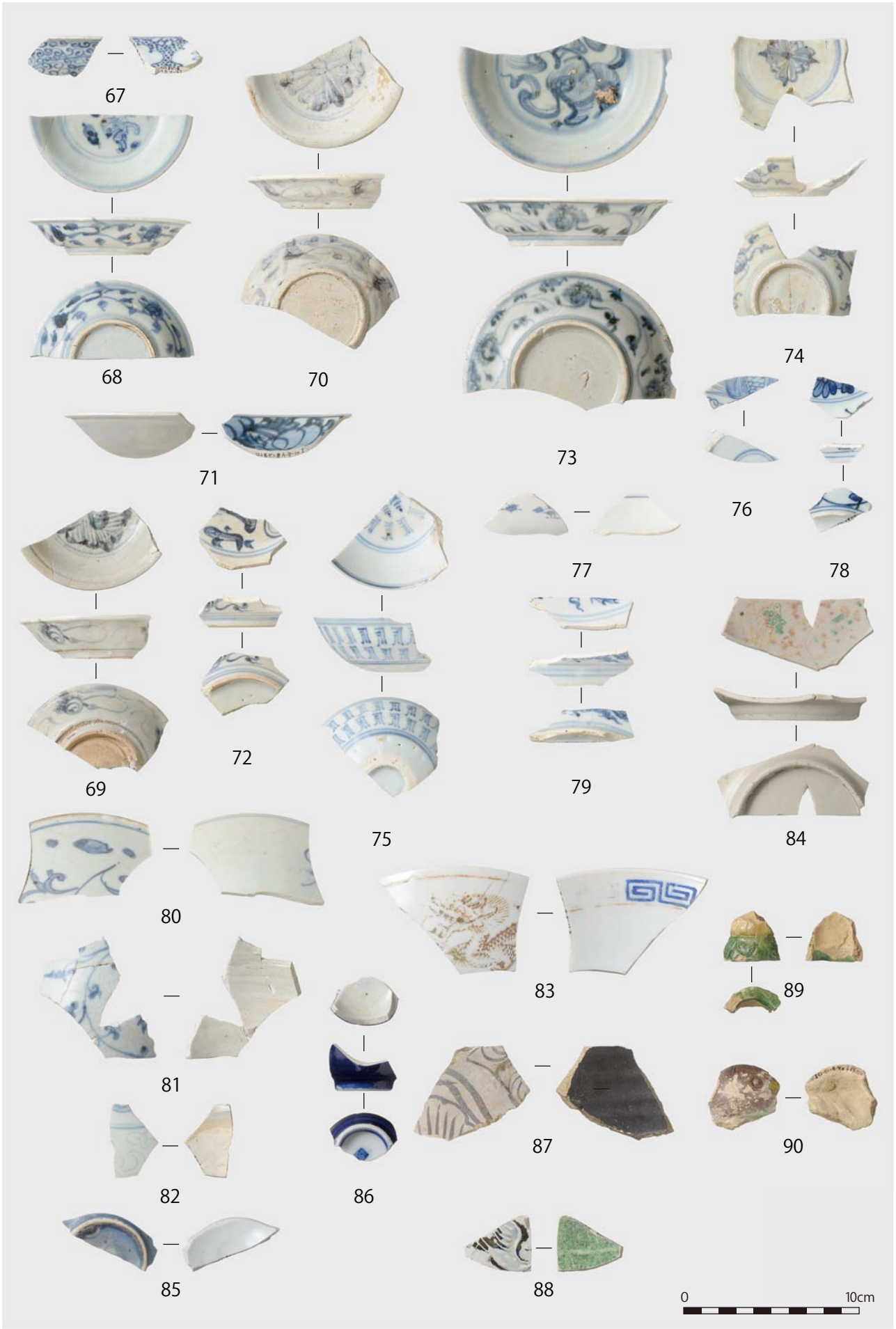
図版 17　平成 25 年度調査区（２）

図版 18　Ⅰ層出土遺物（１）



図版 19　Ⅰ層出土遺物（２）

図版 20　Ⅰ層出土遺物（３）



図版 21　Ⅰ層出土遺物（４）

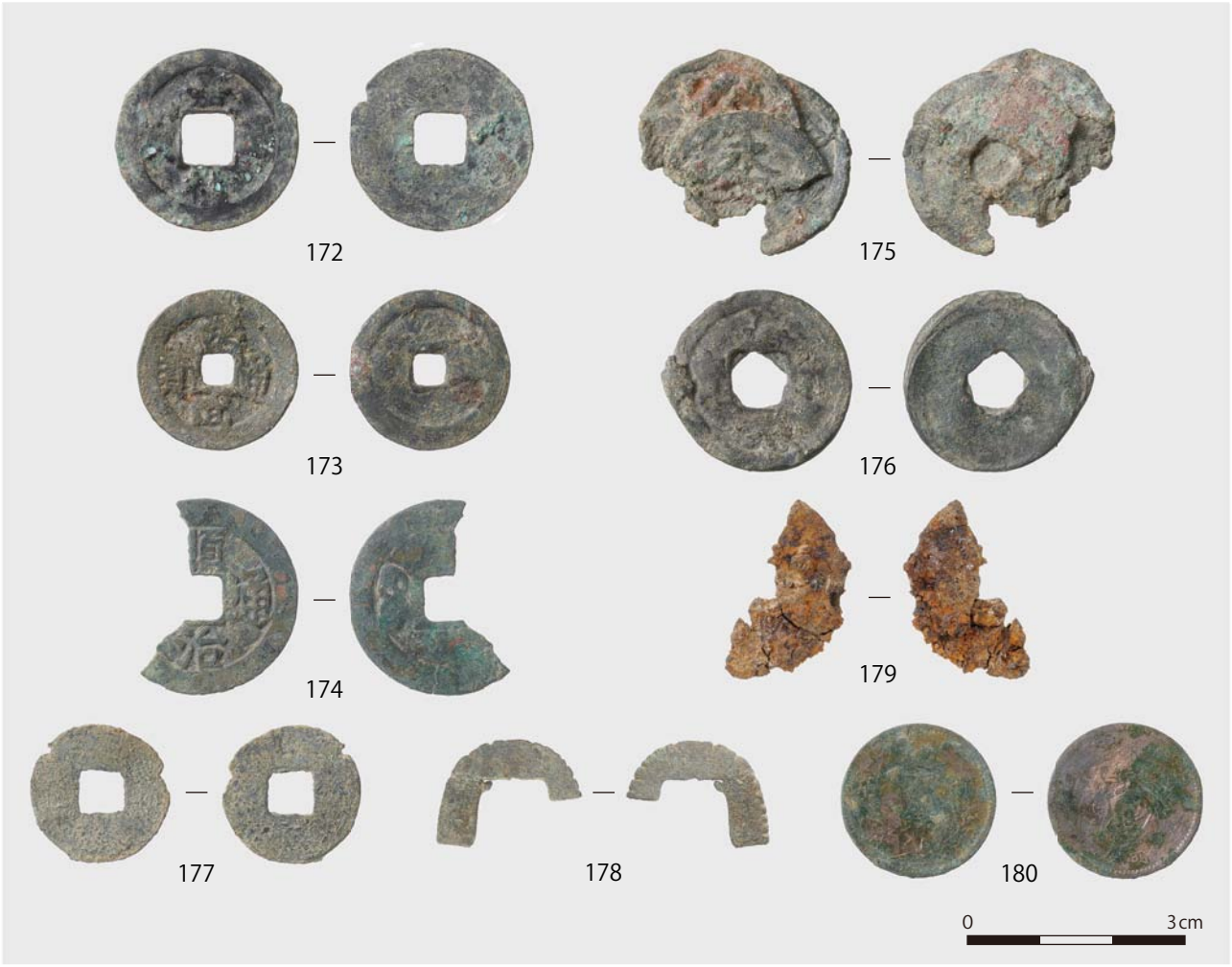
図版 22　Ⅰ層出土遺物（５）

図版 23　Ⅰ層出土遺物（６）

図版 24　Ⅰ層出土遺物（７）

図版 25　Ⅰ層出土遺物（８）

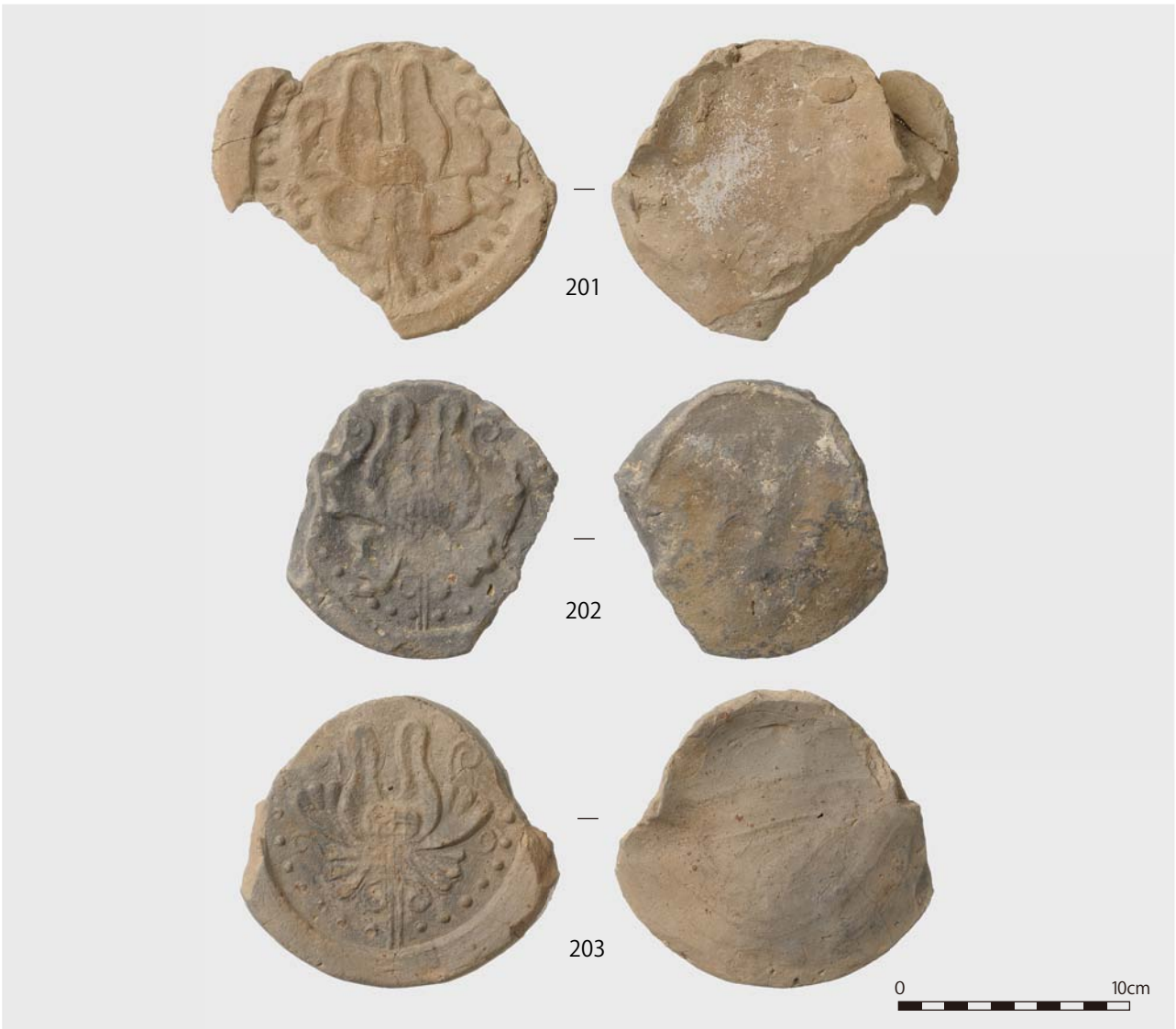
図版 26　Ⅰ層出土遺物（９）



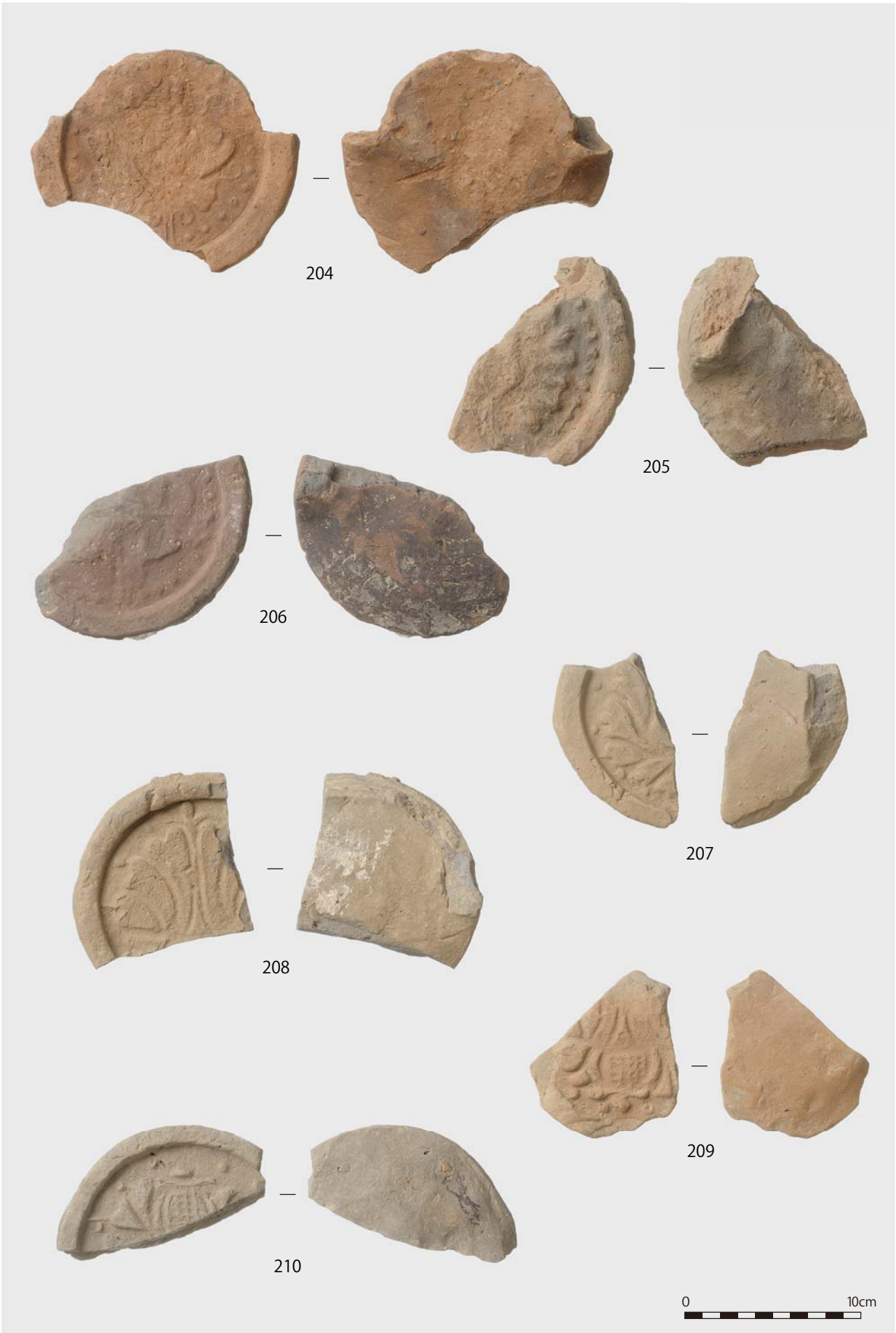
図版 27　I 層出土遺物（10）

図版 28　I 層出土遺物（11）

図版 29　I 層出土遺物（12）

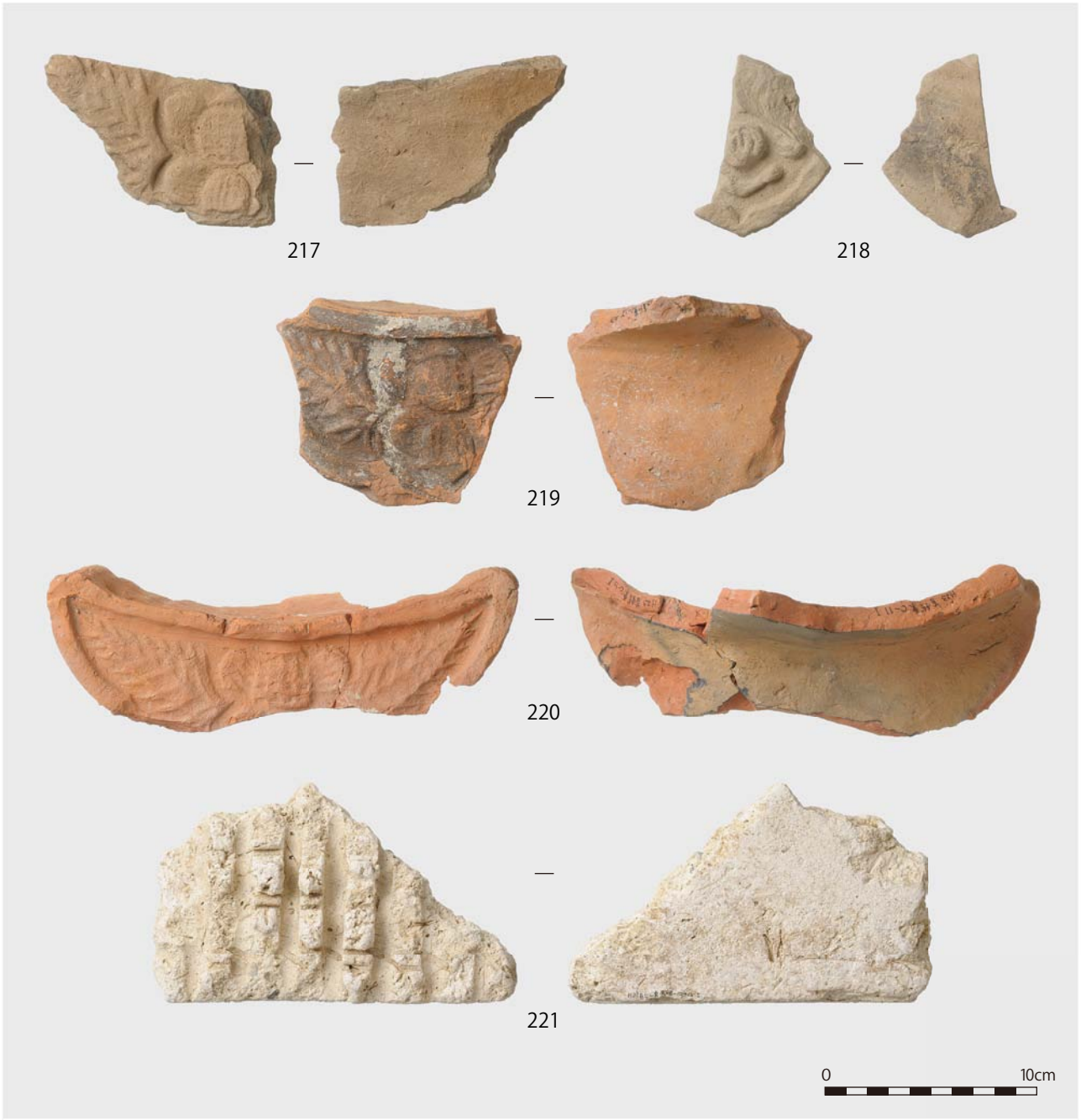


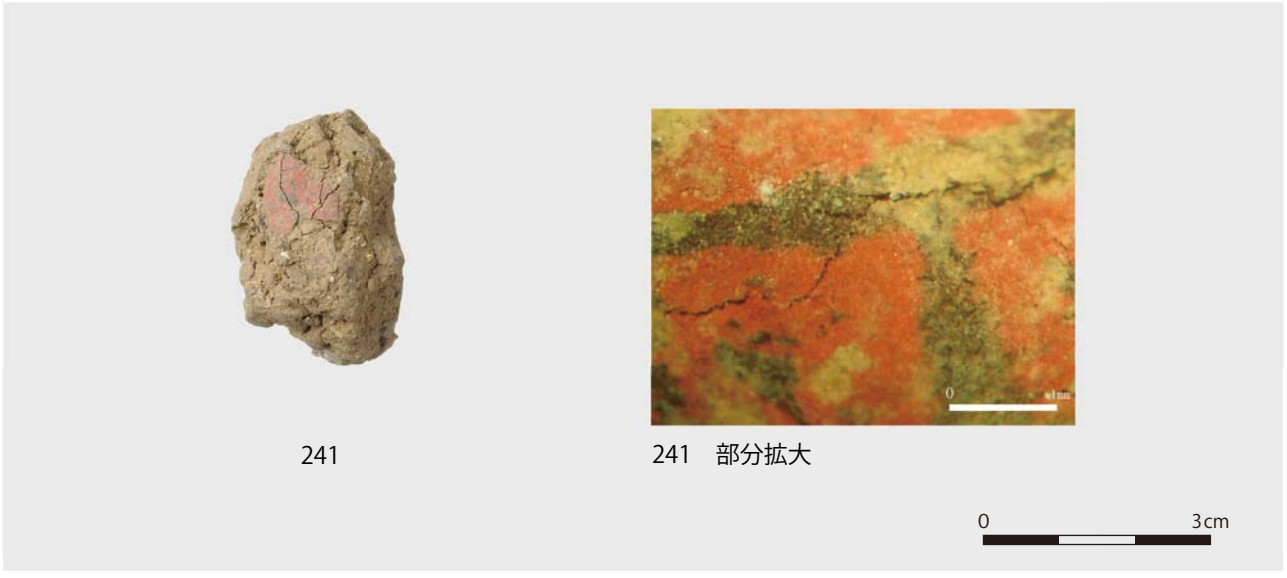
図版 30　I 層出土遺物（13）



図版 31　I 層出土遺物（14）

図版 32　I 層出土遺物（15）

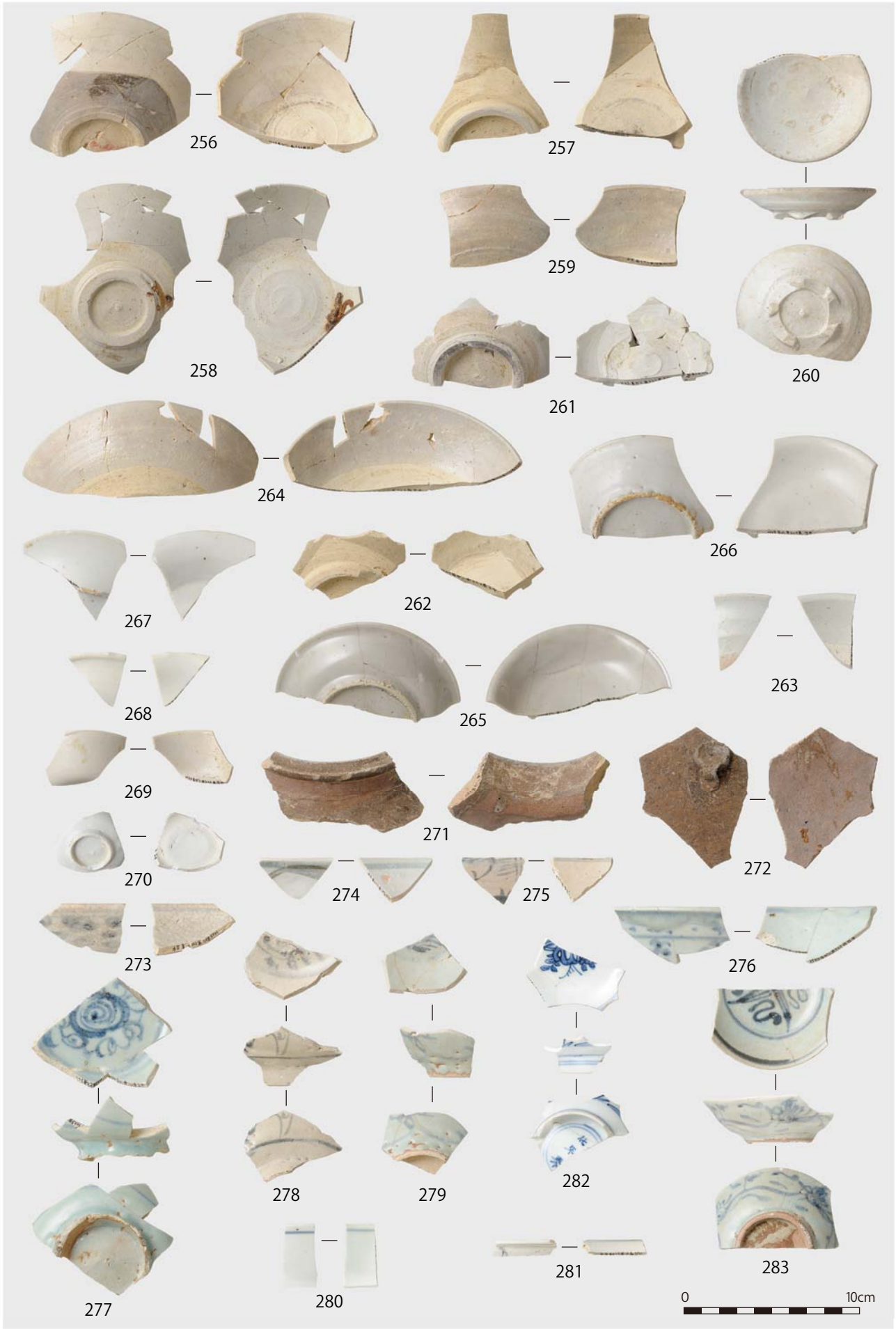




図版 33　Ⅰ層出土遺物（16）（241 はⅡ上層）

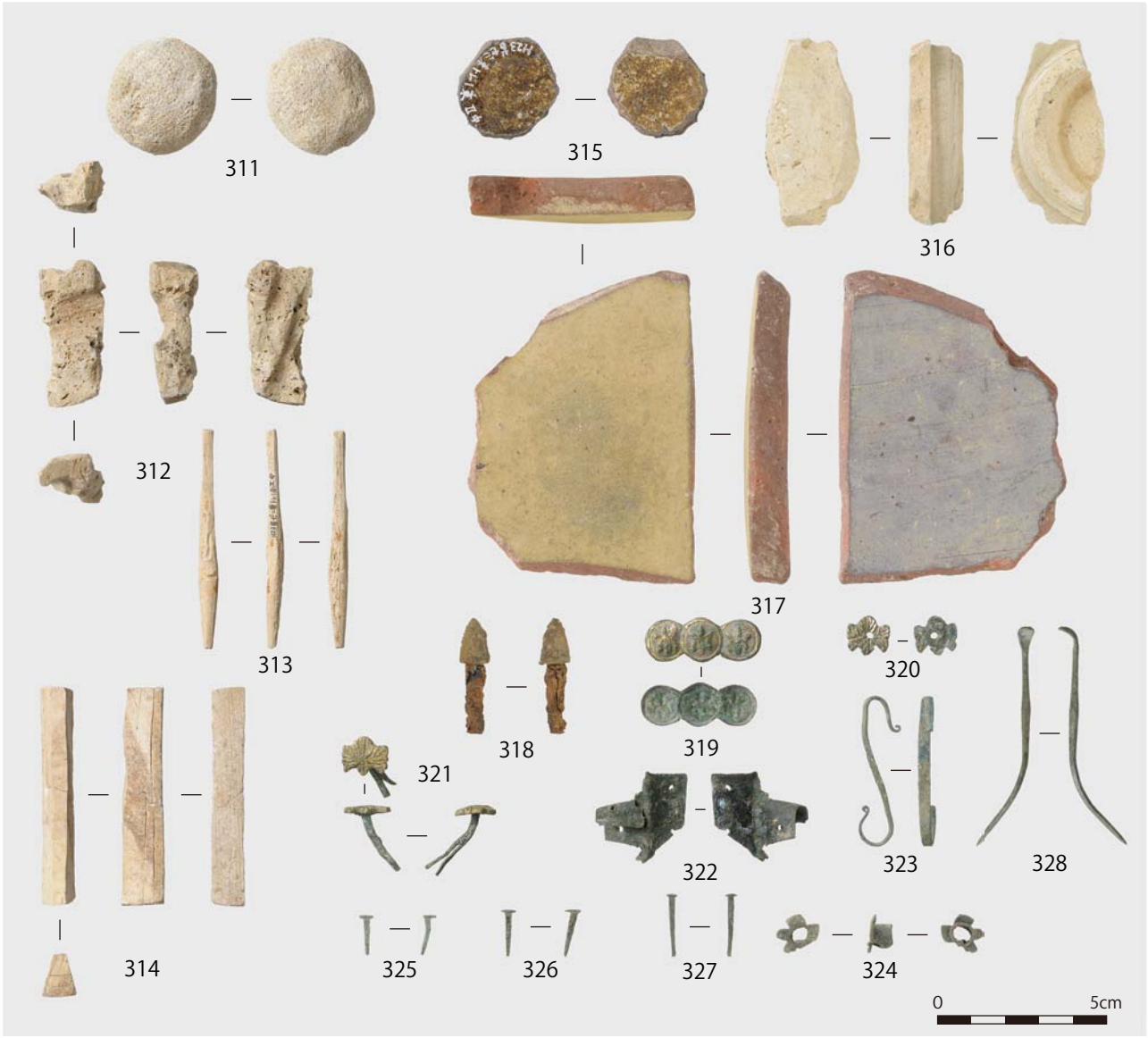
図版 34　Ⅰ´層・Ⅱ層出土遺物（1）　Ⅰ´層（222 ～ 230）・Ⅱ上層（231 ～ 240）

図版 35　Ⅱ層出土遺物（２）　Ⅱ中層（242 ～ 255）



図版 36　Ⅱ層出土遺物（３）　Ⅱ中層（256 ～ 283）

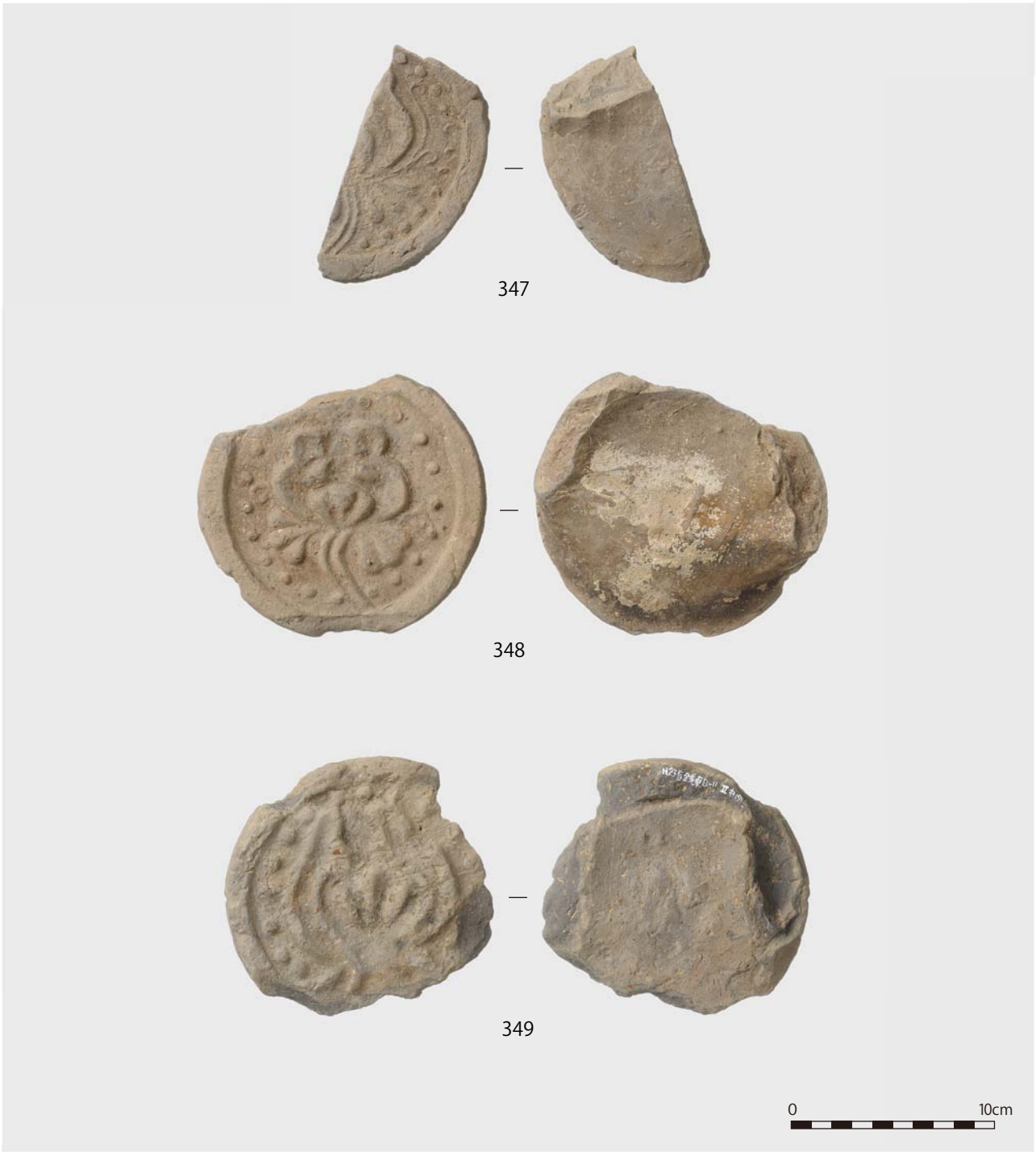
図版 37　Ⅱ層出土遺物（４）　Ⅱ中層（284 ～ 310）



図版 38　Ⅱ層出土遺物（５）　Ⅱ中層（311 ～ 335）

図版 39　Ⅱ層出土遺物（６）　Ⅱ中層（336 ～ 339）

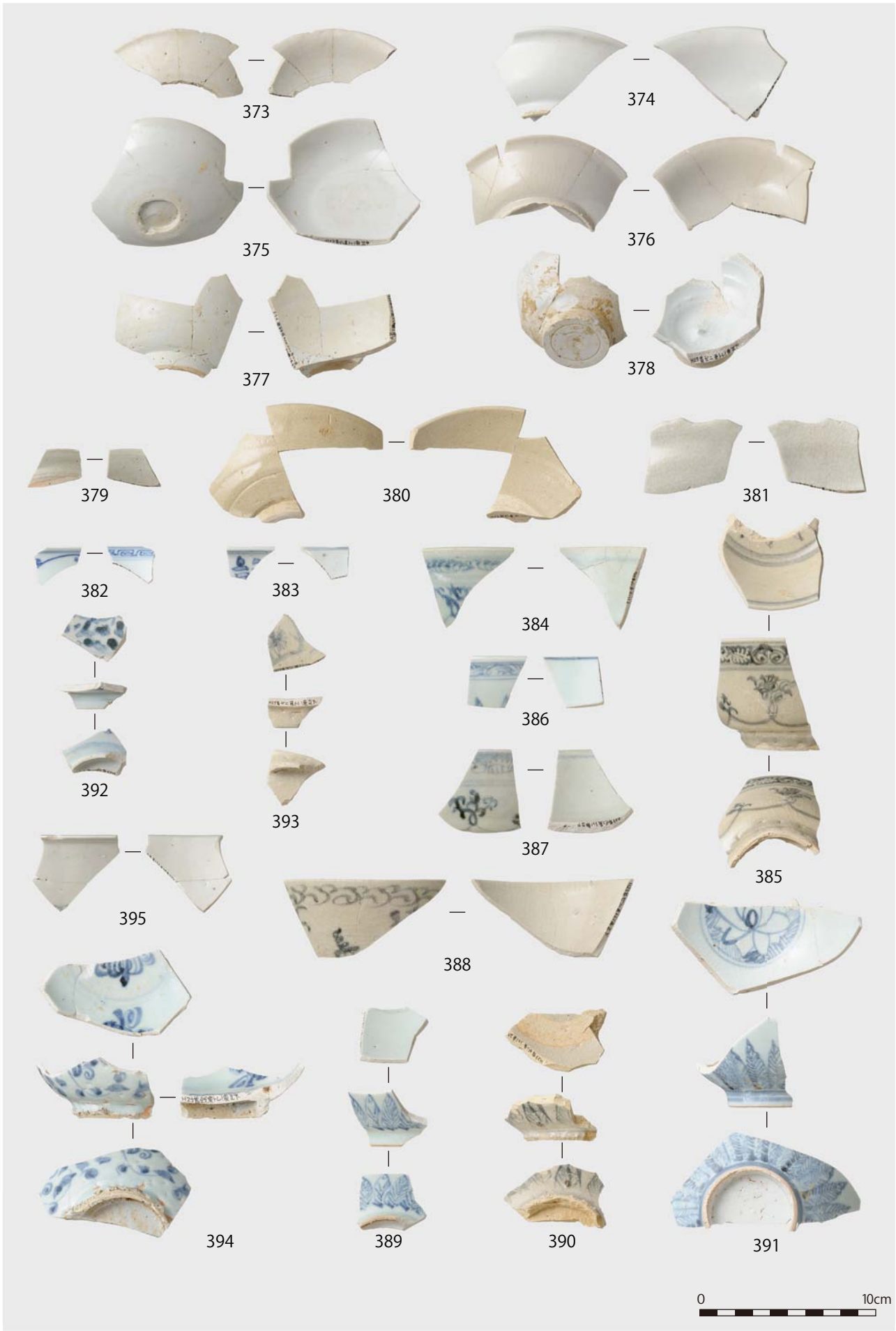
図版 40　Ⅱ層出土遺物（7）　Ⅱ中層（340 ～ 344）



図版 41　Ⅱ層出土遺物（８）　Ⅱ中層（345 ～ 349）

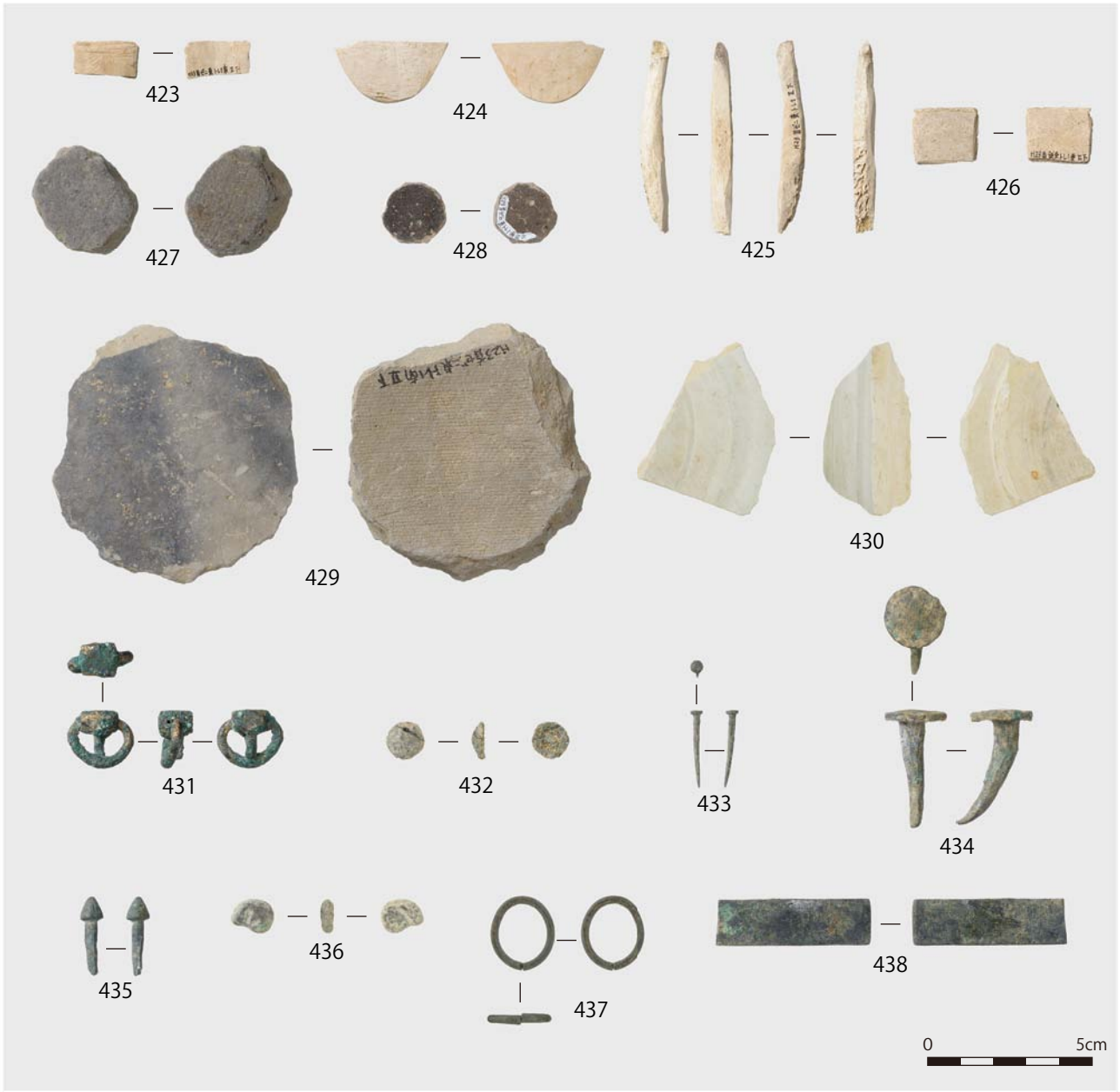
図版 42　Ⅱ層出土遺物（９）　Ⅱ中層（350 ～ 354）

図版 43　Ⅱ層出土遺物（10）　Ⅱ下層（355 ～ 372）



図版 44　Ⅱ層出土遺物（11）　Ⅱ中層（380・384）、Ⅱ下層（373 ～ 379・381 ～ 395）

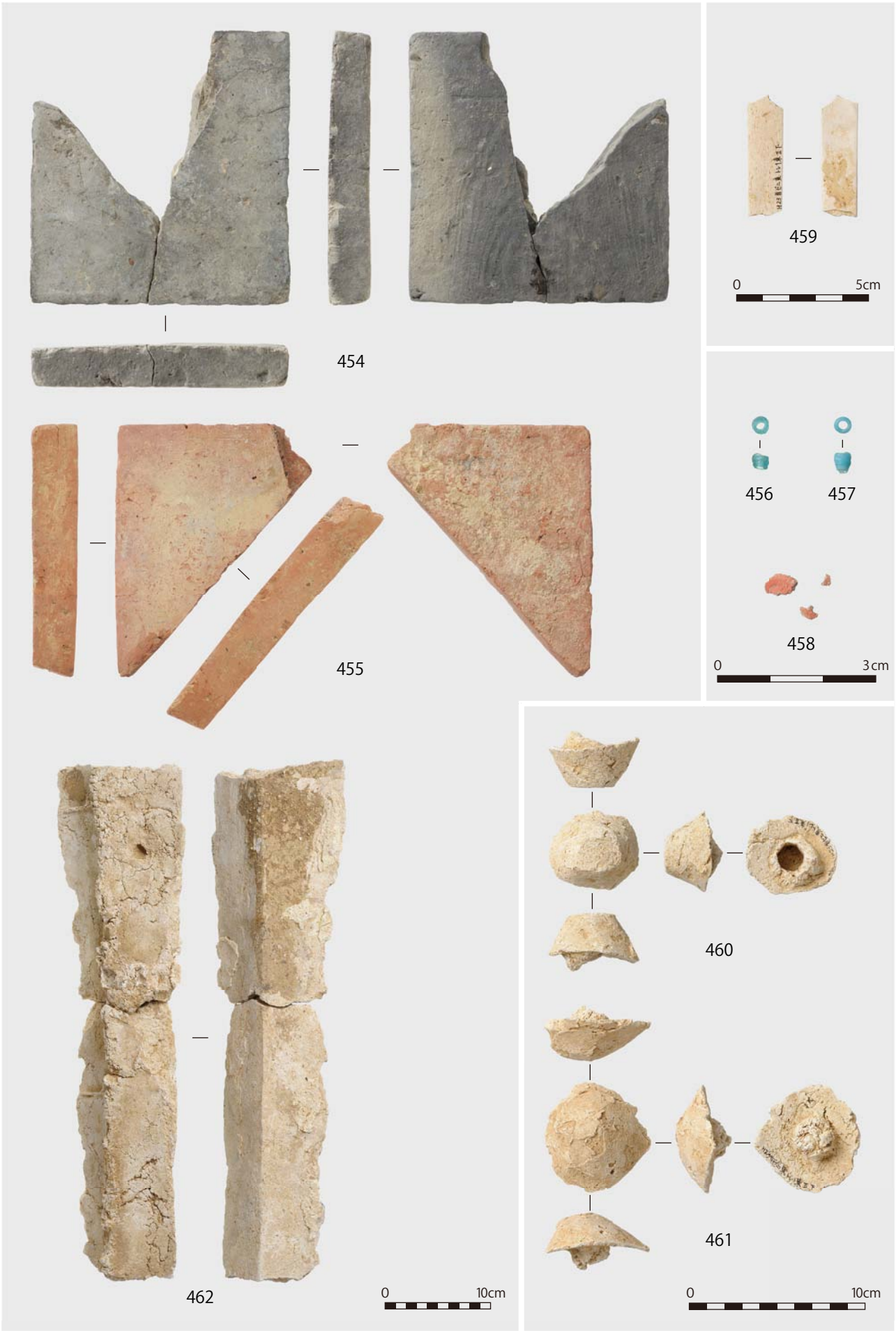
図版 45　Ⅱ層出土遺物（12）　Ⅱ下層（396 ～ 422）



図版 46　Ⅱ層出土遺物（13）　Ⅱ下層（423 ～ 444）

図版 47　Ⅱ層出土遺物（14）　Ⅱ下層（445 ～ 449）

図版 48　Ⅱ層出土遺物（15）　Ⅱ下層（450 ～ 453）

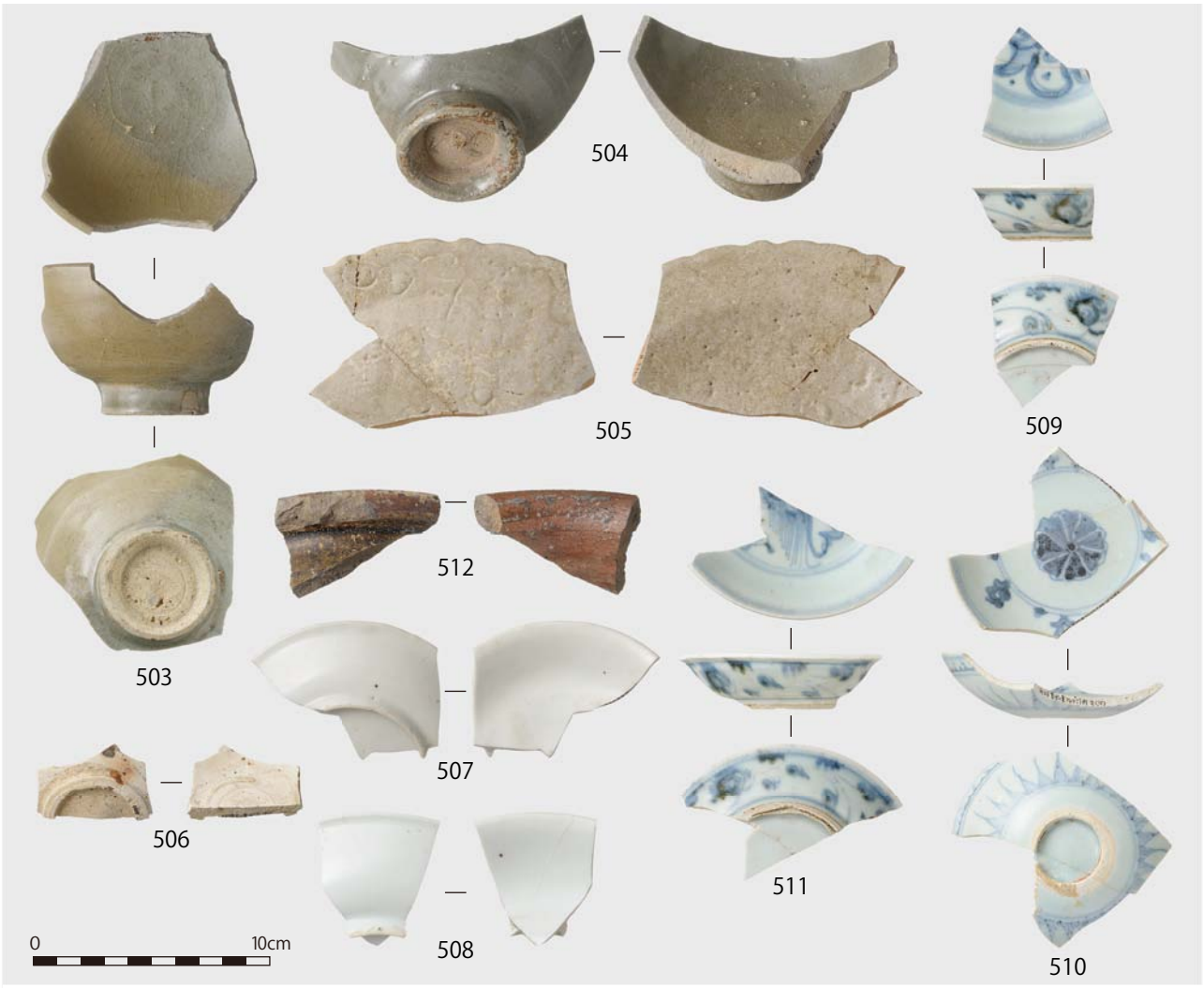


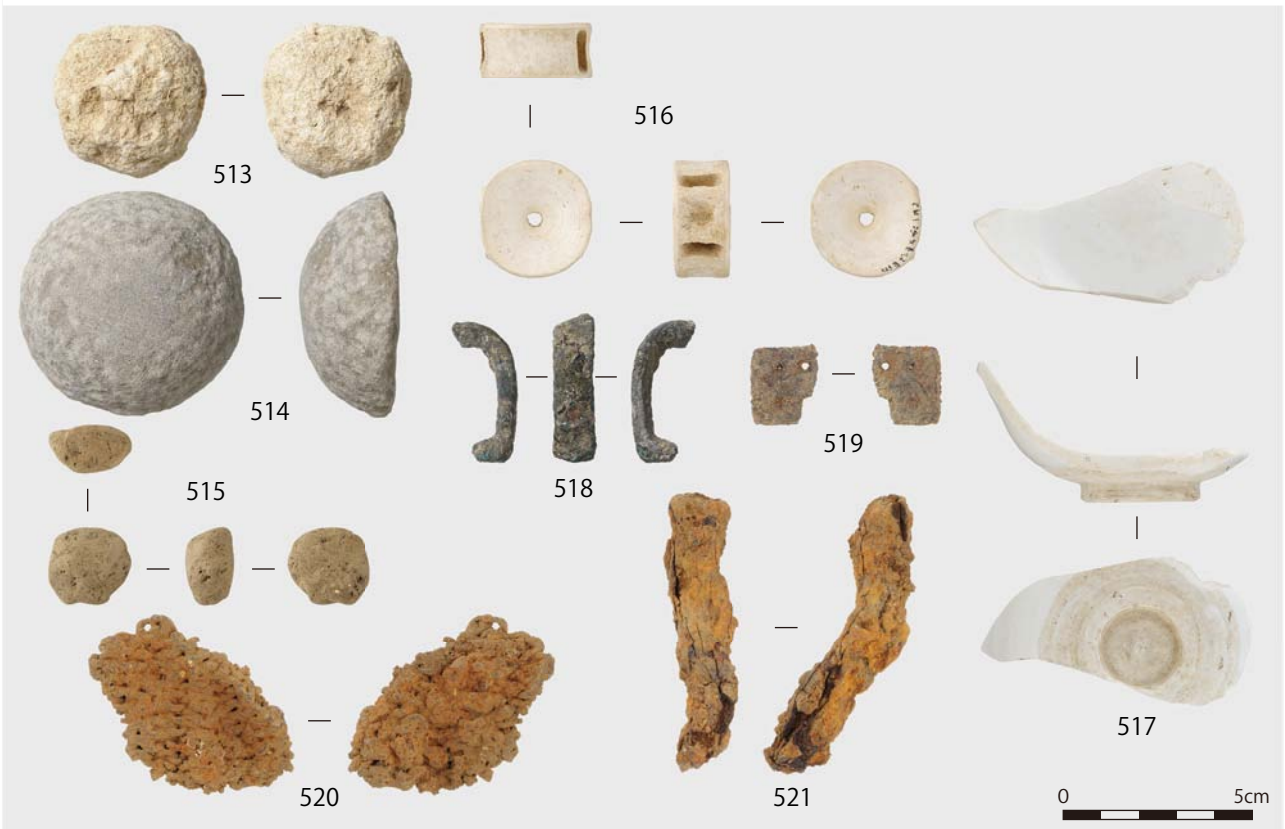
図版 49　Ⅱ層出土遺物（16）　Ⅱ下層（454 ～ 462）

図版 50　Ⅲ層出土遺物（１）　Ⅲ上層（463 ～ 487）

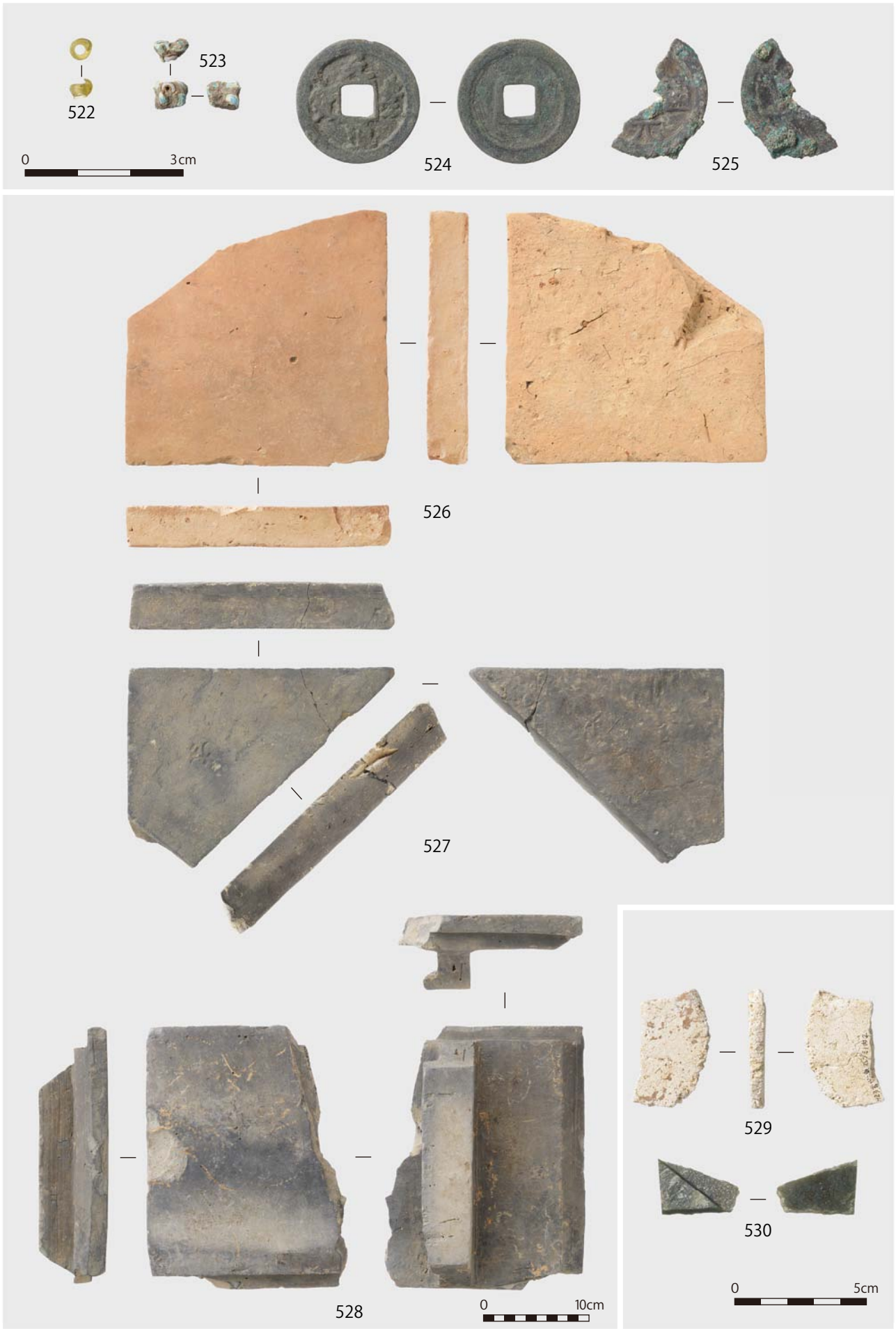
図版 51　Ⅲ層出土遺物（２）　Ⅲ上層（488 ～ 493・495）

図版 52　Ⅲ層出土遺物（３）　Ⅲ上層（494・496 ～ 500・502）、石積み１内３層（501）





図版 53　Ⅲ層出土遺物（４）　石積み１内１層（507・518）、石積み１内２層（503 ～ 506・508 ～ 517・519・520）、石積み１内３層（521）

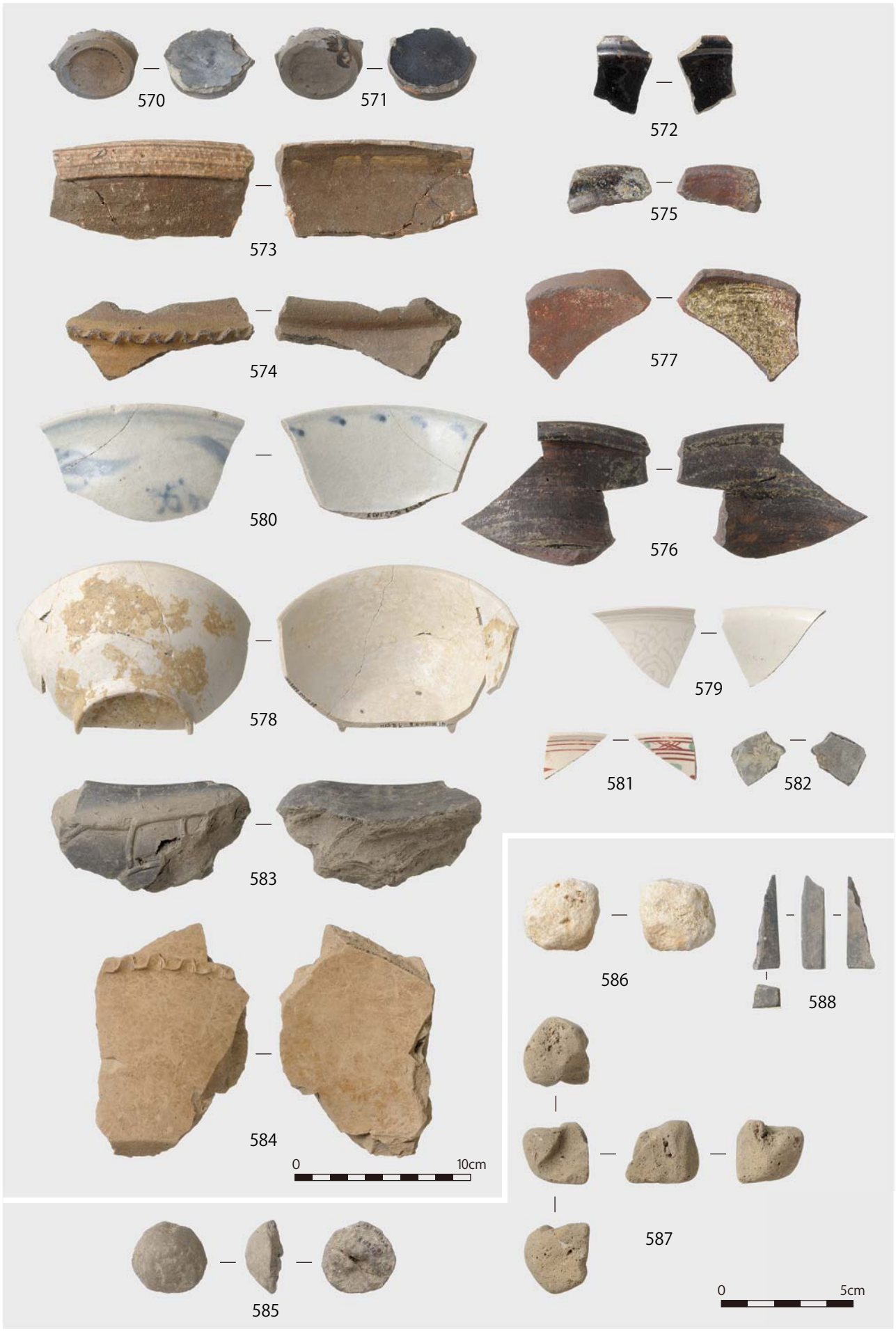


図版 54　Ⅲ層出土遺物（５）　石積み１内１・２層（522 ～ 530）

図版 55　Ⅲ層出土遺物（６）　石積み１内３層（531 ～ 545）

図版 56　Ⅲ層出土遺物（７）　石積み１内３層（546 ～ 558）

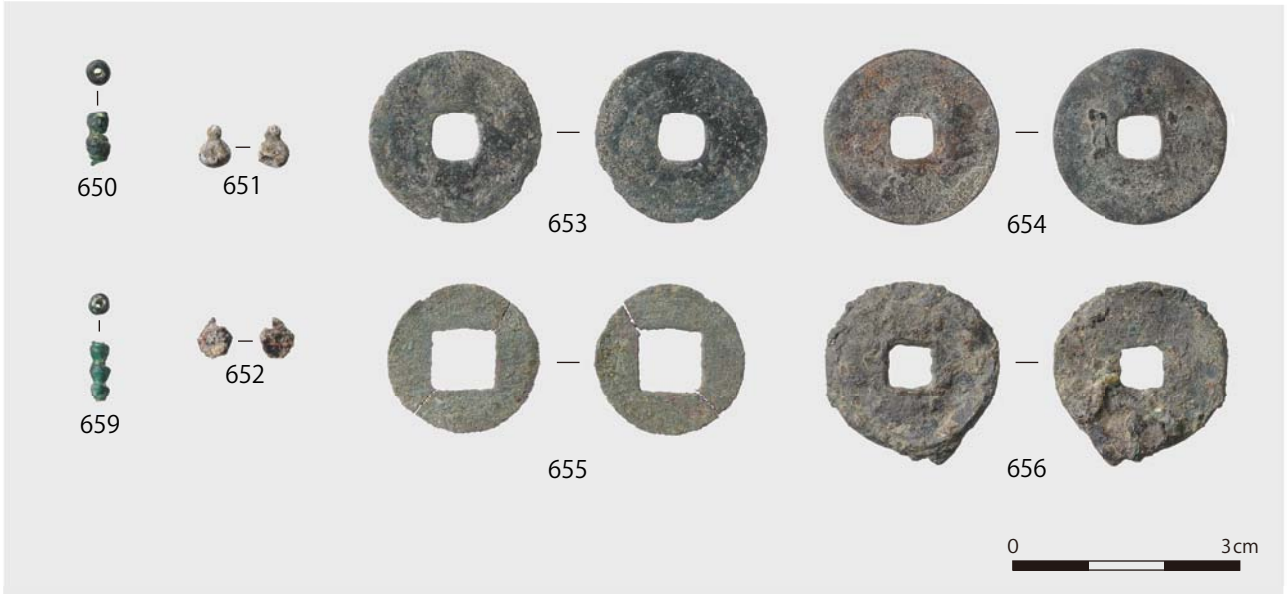
図版 57　Ⅲ層出土遺物（８）　石積み１内３層（559 ～ 569）



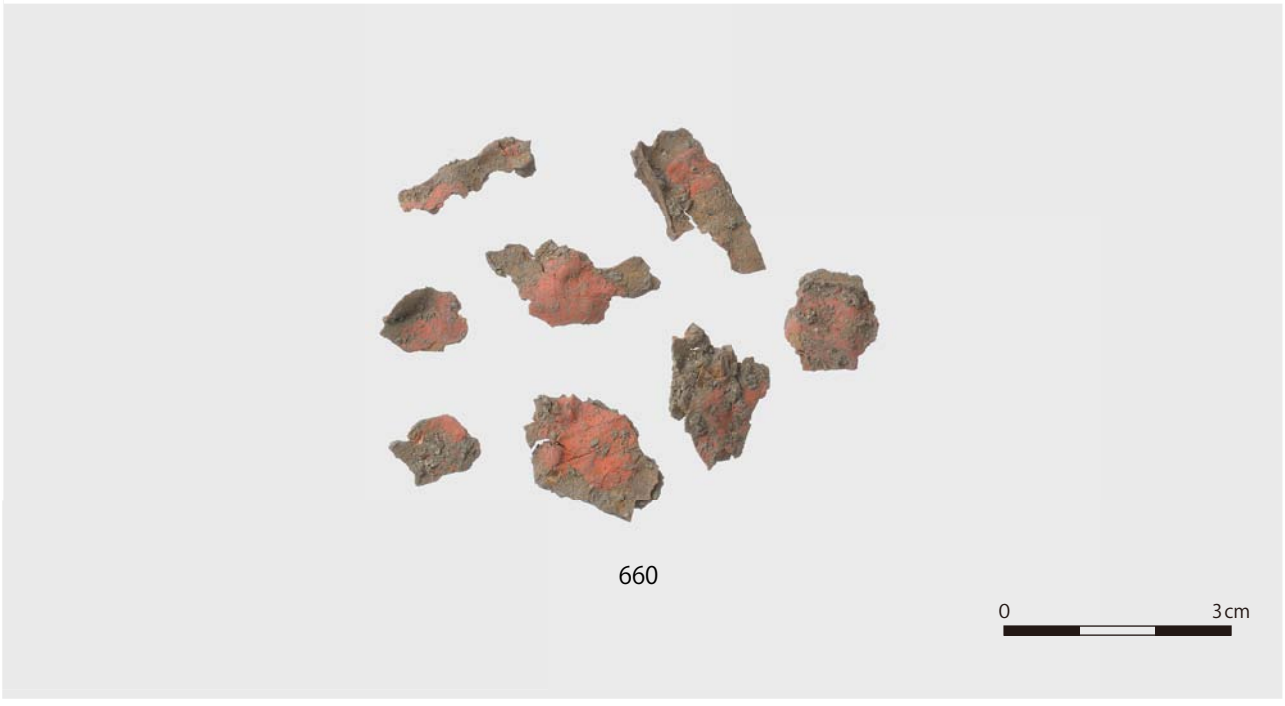
図版 58　Ⅲ層出土遺物（９）　石積み１内３層（570 ～ 588）

図版 59　Ⅲ層出土遺物（10）　石積み１内３層（589 ～ 611）

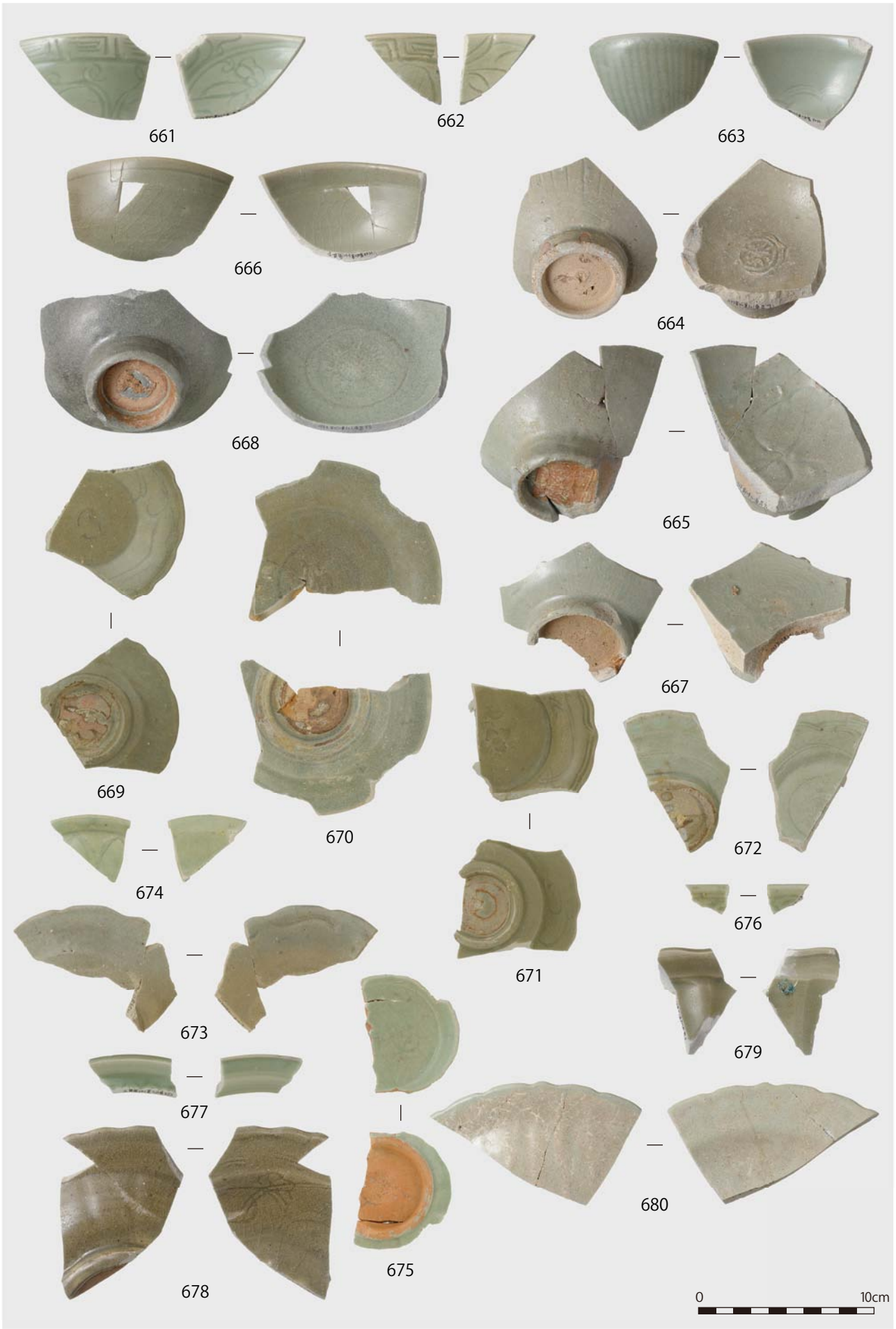
図版 60　Ⅲ層出土遺物（11）　石積み１内３層（612 ～ 623）



図版 61　Ⅲ層出土遺物（12）　石積み 1 内 3 層（624 ～ 637・639 ～ 656・659）、Ⅲ下層（638）



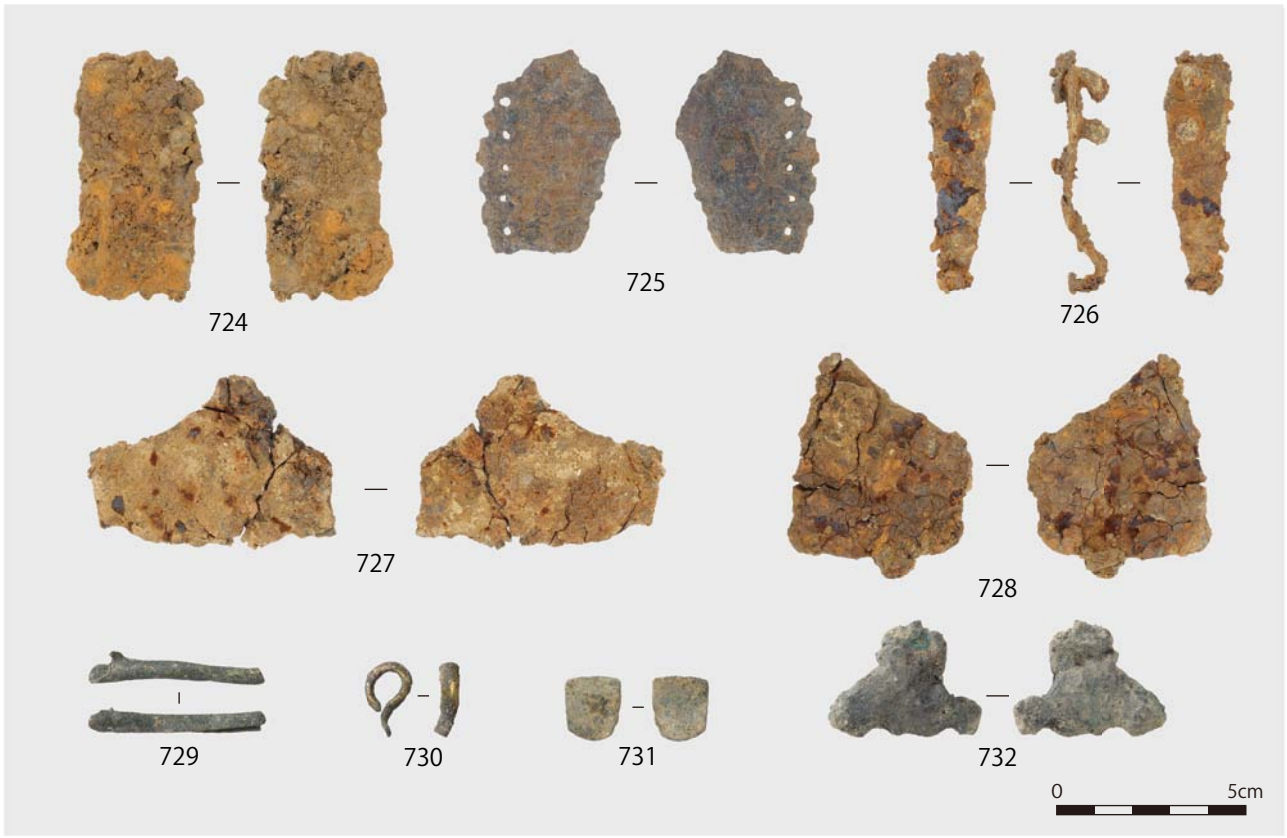
図版 62　Ⅲ層出土遺物（13）　石積み１内３層（658・660）、Ⅲ下層（657）



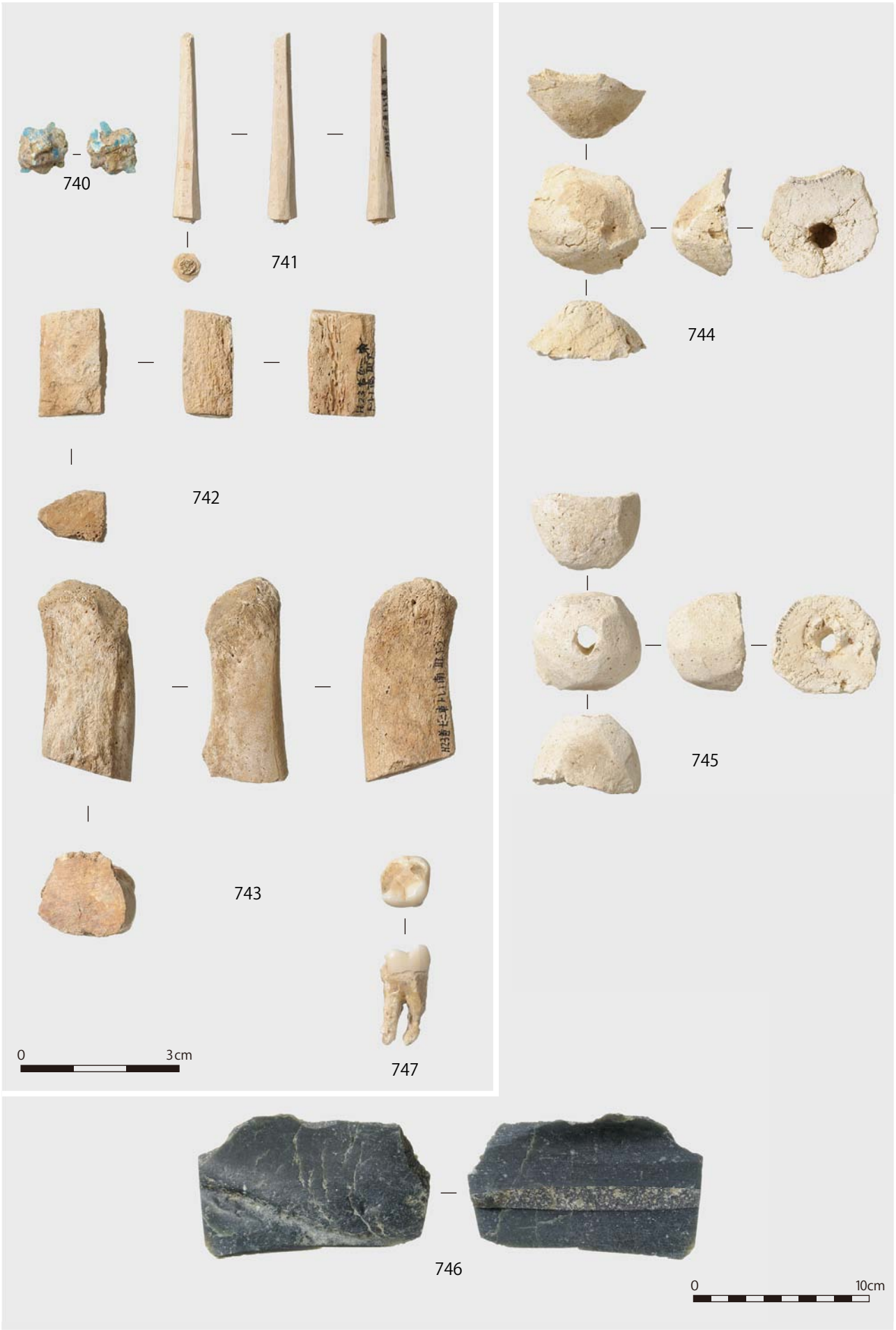
図版 63　Ⅲ層出土遺物（14）　Ⅲ下層（661 ～ 680）

図版 64　Ⅲ層出土遺物（15）　Ⅲ下層（681 ～ 700）

図版 65　Ⅲ層出土遺物（16）　Ⅲ下層（701 ～ 723）



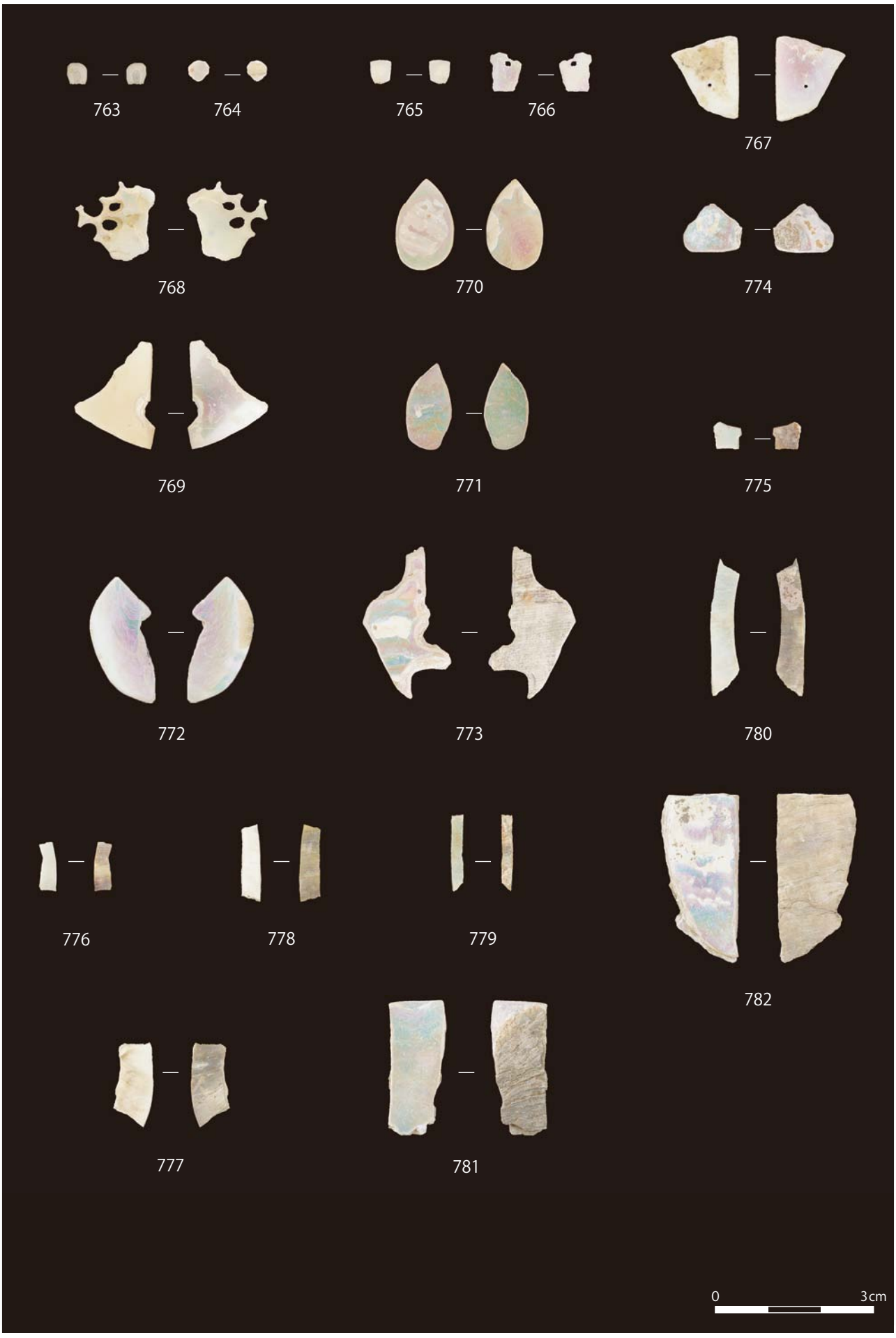
図版 66　Ⅲ層出土遺物（17）　Ⅲ下層（724 ～ 739）



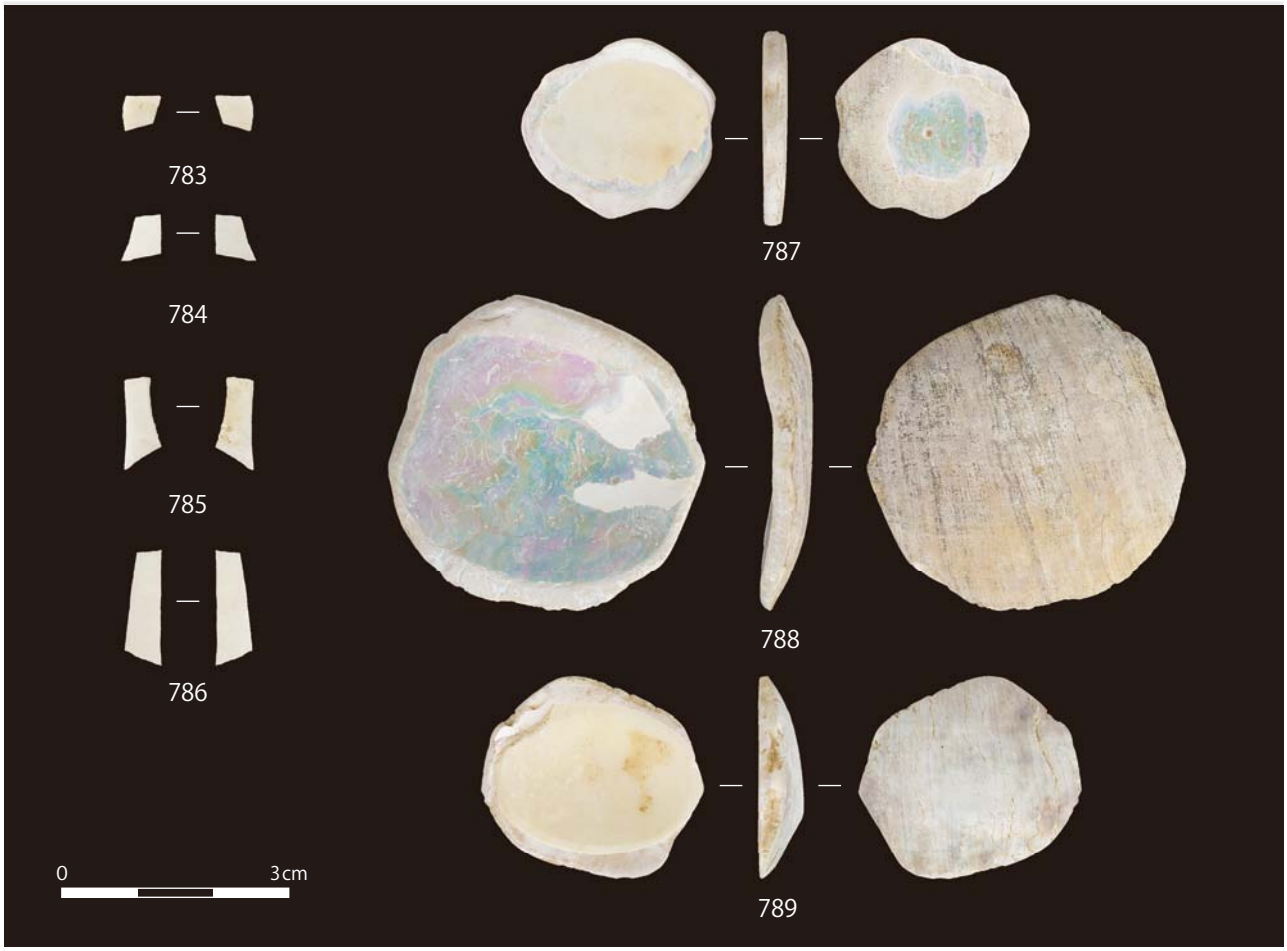
図版 67　Ⅲ層出土遺物（18）　Ⅲ下層（740 ～ 747）

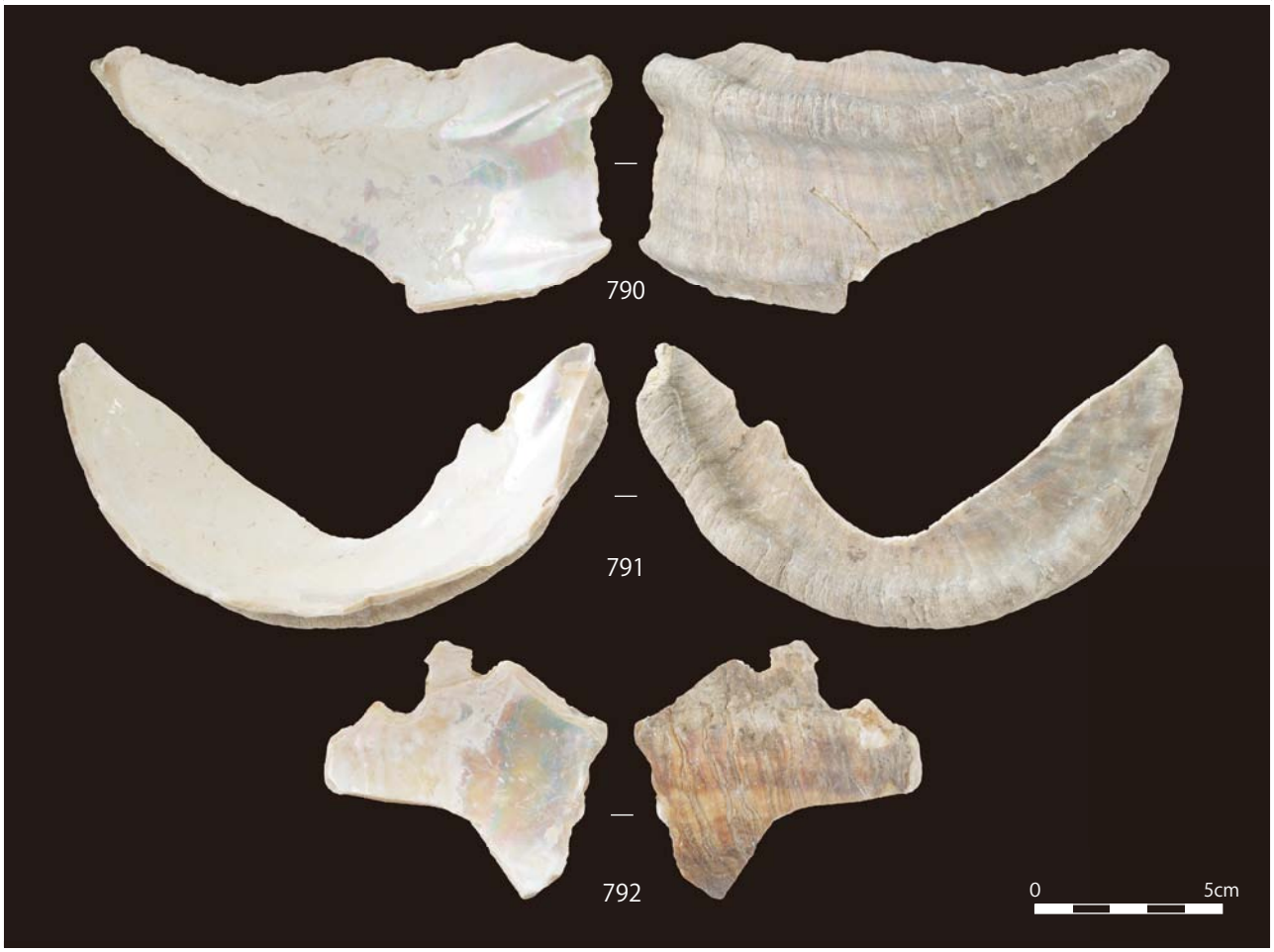
図版 68　Ⅲ層出土遺物（19）　Ⅲ´層（748～757）

図版 69　Ⅲ´層（2）・Ⅳ層出土遺物　Ⅲ´層（758～761）　Ⅳ層（762）

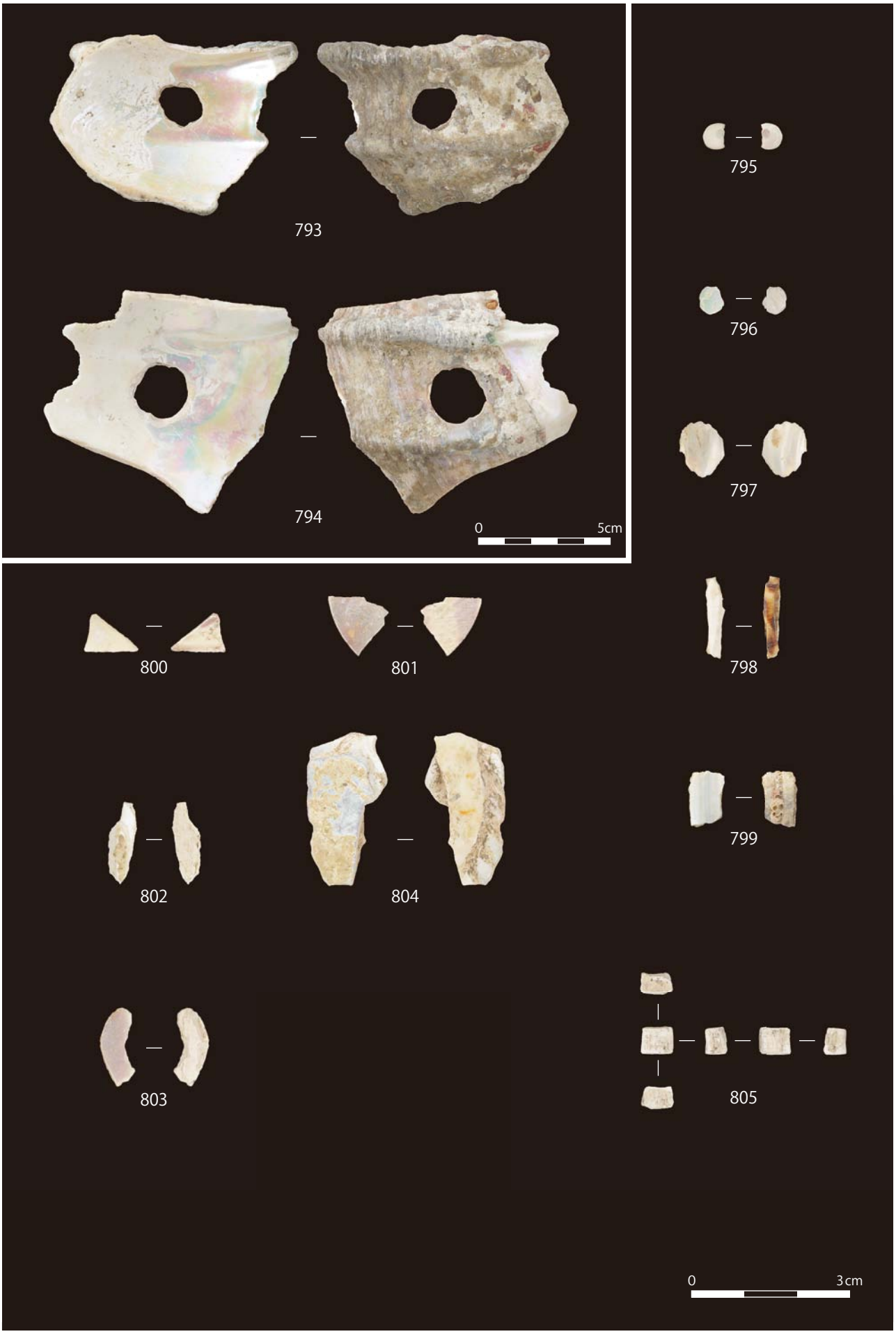


図版 70　含真珠層貝殻破片・貝製品（1）





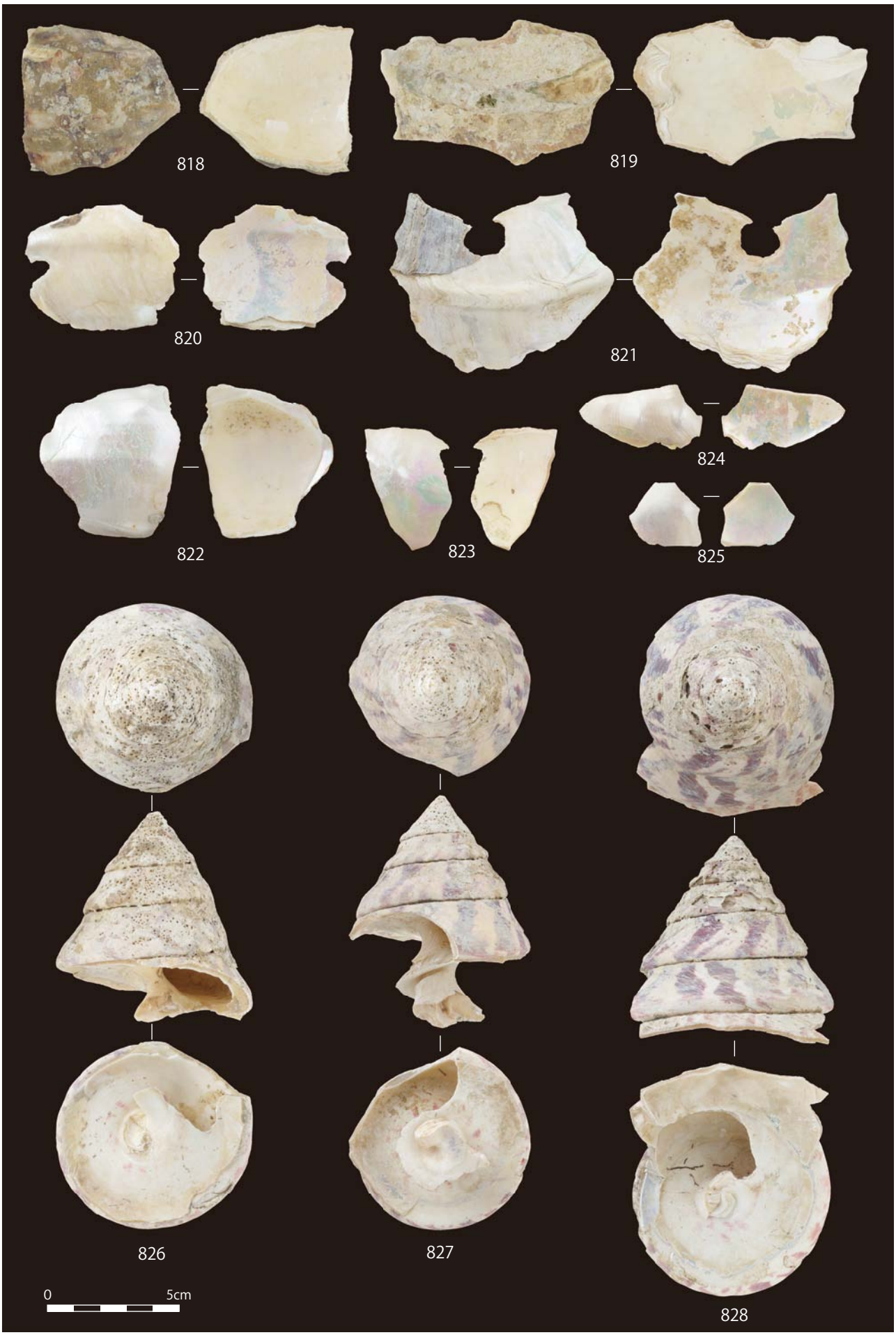
図版 71　含真珠層貝殻破片・貝製品（２）



図版 72　含真珠層貝殻破片・貝製品（３）

図版 73　含真珠層貝殻破片・貝製品（４）

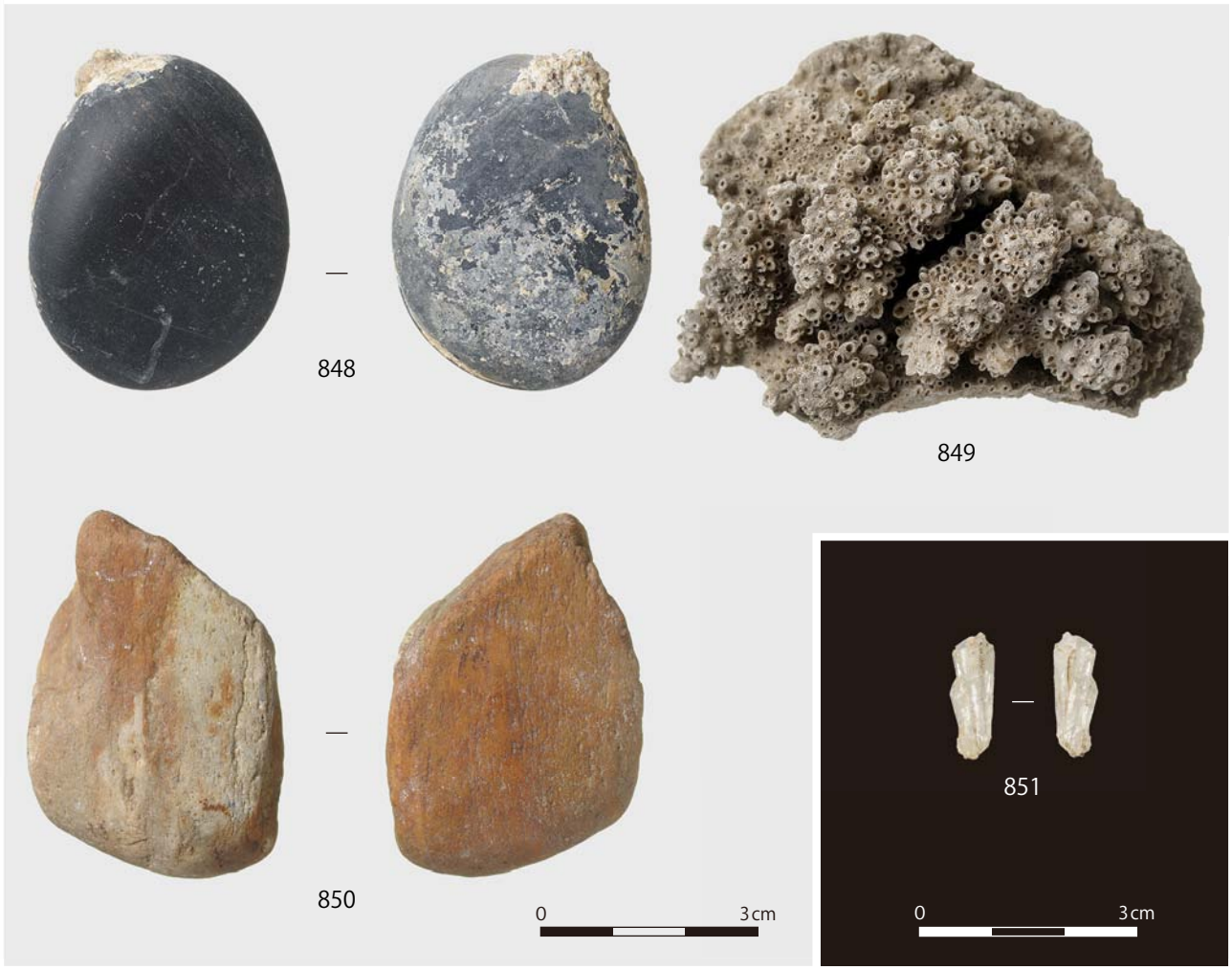
図版 74　含真珠層貝殻破片・貝製品（５）



図版 75　含真珠層貝殻破片・貝製品（６）

図版 76　含真珠層貝殻破片・貝製品（７）

図版 77　含真珠層貝殻破片・貝製品（８）



図版 78　石材・玉器

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しゅりじょうあと
書　　名	首里城跡
副 書 名	淑順門東地区発掘調査報告書
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第80集
編 著 者 名	瀬戸哲也・新垣力・大堀皓平・宮城淳一・大屋匡史
編 集 機 関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所 在 地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町上原193-7　TEL 098-835-8752　FAX 098-835-8754
発行年月日	2014年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号					
首里城跡 銭蔵東地区	沖縄県 那覇市 首里当蔵町 3丁目1番	47201		26° 13′ 2″	127° 43′ 11″	20110715 ～ 20120316 20131106 ～ 20131120	277 ㎡	国営沖縄記念公園（首里城地区）整備に伴う遺構確認調査

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
首里城跡 淑順門東地区	城跡	グスク時代～近代	石積み4、石敷き1、石列1、造成土、遺物包含層	中国産・ベトナム産・タイ産・韓半島産・本土産陶磁器、土器、沖縄産陶器、金属製品、鍛冶関連遺物、銭貨、骨製品、石製品、貝製品（ヤコウガイ等含真珠層貝殻加工小破片等）、円盤状製品、ガラス玉、瓦（明朝系・大和系・高麗系）、塼、漆喰、獣魚骨、貝殻	16世紀前半頃の遺物包含層より螺鈿残滓と思われる貝殻加工小破片が出土。

要　約

銭蔵東地区では、復元整備の対象となる古図に描かれた右掖門脇より外郭へ南北に延びる石垣などの遺構確認のための発掘調査を行った。その結果、対象した石垣（石積み2）の根石をほぼ確認し、遅くとも15世紀後半に造られ、部分的に改変された可能性は考えられるが、戦前まで存在していたことが分かった。この石垣は西面するものであるが、その内側には厚さ6mに及ぶ造成土もしくは遺物包含層が見られ、それは15～17世紀代に複数回に亘って形成されたものと思われる。これらの土層からは、陶磁器、瓦、塼、獣魚骨、貝殻などが多く出土している。

この造成土の一部に覆われた北面する東西方向の石積み1が確認され、16世紀前半～17世紀前半の間に構築されたと考えられる。この石積み1内側に堆積する15世紀後半～16世紀前半の土層からは、陶磁器や獣魚骨の他に、真珠層を包含したヤコウガイなどの貝殻が大量に集中する貝だまりが確認された。この貝殻はほぼ全て割り取られた破片となっており、1cm前後の大きさに加工されたと考えられる小破片も非常に多く見られた。様々な分野からの指導助言をもらうことにより、この貝殻片は螺鈿加工時の残滓ではないかと考えることができた。

以上から、今回の調査において、16世紀ごろには首里城内で螺鈿が製作されていたことが明らかになった。なお、既に西のアザナ地区などでも出土していた鍛冶関連遺物の他、漆、未成骨製品なども見られており、城内に様々な工房があった可能性も想定され、首里城の機能や空間利用を考えるうえで重要な成果である。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 80 集

首　里　城　跡

－銭蔵東区発掘調査報告書 －

発　行　日　平成 28(2016)年2月 29 日

発行・編集　沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL:098-835-8751・8752

印　　刷　株式会社 尚生堂

〒901-2114 沖縄県浦添市安波茶 1-6-3